

筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡
(第2・3・6次)

発掘調査報告

—四日市市小牧町—

2021（令和3）年3月

三重県埋蔵文化財センター



筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡遠景（南東上空から）

中日本高速道路㈱提供



第3次調査区全景（東上空から）



第2次調査区全景（南から）



3号墳・4号墳・10号墳（南東から）



5号墳・6号墳・7号墳（南から）



3号墳石室（南から）



10号墳石室（北東から）



2号墳側壁（西から）



5号墳側壁（西から）



3号墳墳丘土層（南から）



6号墳墳丘土層（南から）



第3次調査区建物群 (上空から)



SH2 (南から)



SH2 カマドと鍛冶炉1・2 (北から)



鍛冶炉1 縦断土層 (西から)



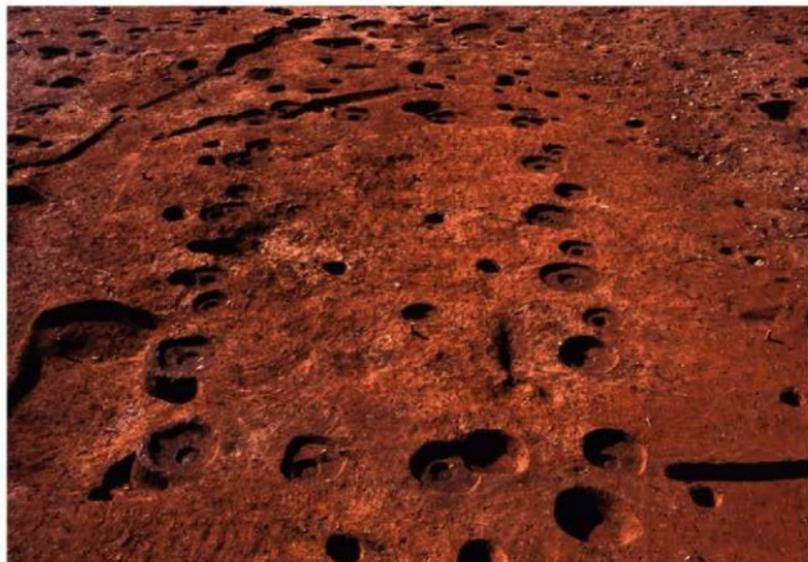
鍛冶炉2 検出状況 (西から)



鍛冶炉1 (南東から)



鍛冶炉2 断ち割り (東から)



S B169・170 (東から)



出土遺物



序

三重県埋蔵文化財センターは、平成20年度から新名神高速道路の建設工事に伴い、四日市JCT～亀山西JCT間の路線内に存在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。調査対象となった埋蔵文化財は22遺跡、約34万㎡に及びます。

当センターとしては、供用開始までのスケジュールに対応するため、担当職員を増員するとともに現地調査を最優先し、5万㎡を超える面積を調査した年もありました。

すべての現地調査が終了してから本格的に報告書作成に取り組みはじめ、ここに四日市市小牧町に所在する筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡の調査成果を、とりまとめることが出来ました。

筆ヶ崎古墳群では、以前から知られていた8基の古墳に加え、新たに2基を発見し、横穴式石室の内部からは、朝鮮半島との関わりを推測させる釵子（かんざし）が出土しました。数多くの建物が見つかった筆ヶ崎西遺跡では、2基の鍛冶炉をもつ竪穴建物の存在が特に注目されます。さらに、これまで蓄積されてきた地域の発掘調査成果を合わせ検討した結果、壬申の乱の頃を境にして、古墳群から集落へ転換したという興味深い事実が判ってまいりました。

現地調査から一貫してご理解とご協力をいただいた中日本高速道路株式会社、四日市市教育委員会など関係機関の方々、近隣にお住まいの方々に心からお礼を申し上げます。この調査成果が、広く活用され、地域の歴史を解明するための一助となれば幸いです。

令和3年3月

三重県埋蔵文化財センター
所長 上村安生

例 言

- 1 本書は、三重県四日市市小牧町に所在する筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書で報告する発掘調査は、近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～龜山西JCT）建設事業に伴う緊急発掘調査である。
- 3 発掘調査にかかる費用は、中日本高速道路株式会社が全額負担した。
- 4 調査は下記の体制で実施した。

・ 委託者	中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所
・ 受託者	三重県教育委員会
・ 調査主体	三重県教育委員会
・ 調査担当	三重県埋蔵文化財センター
- 5 現地における発掘調査の体制については、第1章第2節に記載している。それ以外の外部委託については、以下のとおりである。

鍛冶炉の剥ぎ取り：株式会社吉田生物研究所
金属製品の保存処理：株式会社吉田生物研究所
鍛冶関連遺物の分析調査：九州テクノロジーサーチ・TACセンター（第VI章）
須恵器内面付着物の赤外分光分析：株式会社バレオ・ラボ（第VI章）
遺物実測図トレース：株式会社島田組
- 6 発掘調査成果は、『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～龜山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ～Ⅳ』の3冊においてその概要を公表しているが、本書をもって正報告とする。
- 7 本書は、三重県埋蔵文化財センター職員の服部芳人・宮崎久美・水橋公恵が分担執筆し、水橋が編集した。写真撮影は、調査担当者および萩原義彦が行った。文責については、目次及び文末に記載した。
- 8 発掘調査及び報告書作成に際しては、下記の方・機関等に多大なるご協力・ご支援を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

津村善博、小牧町北自治会、四日市市教育委員会、鈴鹿市教育委員会、三重県立博物館
- 9 本報告にかかわる発掘調査の記録類並びに出土遺物等は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

凡 例

地図類

- ・ 本書では、国土地理院発行の1:25,000地形図「菰野」「桑名」「四日市西部」「四日市東部」、四日市市発行の1:2,500都市計画図、2011三重県共有デジタル地図（平成24年整理）などの地図類を用いている。なお、三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合管理者の承認を得て使用している（承認番号：令和2年4月1日付け三総合地第2号）。
- ・ 本書で示す方位は、すべて世界測地系第VI座標による座標北で示した。

遺構類

- ・ 本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄（編）『新版 標準土色帖』（1967年初版）日本色研事業株式会社に拠る。
- ・ 遺構番号は、調査年次・遺構の性格にかかわらず^a、通し番号で付与した。
- ・ 本書では、以下のように遺構の略記号を使用した。
SH：竪穴建物 SB：掘立柱建物 SA：塀・柵・柱列 SK：土坑 SD：溝
SF：焼土坑 SX：墓など SZ：性格不明遺構
- ・ 古墳の玄室・羨道規模の計測値は、壁体の内法である。羨道長には袖石も含む。
- ・ 古墳の石室における左右の表現は、奥壁から開口部を見た際のものである。
- ・ 遺構一覧表の建物方位は、北を基準とし、柱通りの良い側で測定した。

遺物類

- ・ 遺物番号は、調査年次・遺物の種別にかかわらず^a、通し番号で付与した。
- ・ 遺物実測図の縮尺は、実物の1/4を基本とし、それ以外のものについては、その都度明示した。
- ・ 実測図中の「→」は、ロクロケズリ調整時の砂粒の動きを示す。
- ・ 須恵器・土師器の器種名称は、基本的には奈良文化財研究所の仕様や産地での用例に従ったが、以下は本書独自の名称である。
杯蓋g：かえりのある杯蓋
杯蓋b：かえりのない杯蓋
無台杯：杯G身および杯A
- ・ 須恵器の産地比定は肉眼観察による。四日市市内の岡山6号窯や西ヶ谷1・2号窯の製品、及びその同系工人によると推測できる須恵器については、（北勢）在地窯系と呼称した。
- ・ 遺物観察表の口径・高台径は、口縁端部の頂点および高台接地点で計測した数値である。

写真図版

- ・ 遺物写真内の数字は、報告番号である。
- ・ 遺物の写真図版は、すべて縮尺不同である。

本文目次

I	前言	(服部)	1
1	調査に至る経緯		
2	調査の経過		
II	位置と環境	(宮崎)	5
1	地理的環境		
2	歴史的環境		
III	調査の方法と基本層序	(水橋)	8
1	調査の方法		
2	基本層序と遺構概観		
IV	筆ヶ崎古墳群	(水橋)	11
1	筆ヶ崎1号墳		14
2	筆ヶ崎2号墳		18
3	筆ヶ崎3号墳		25
4	筆ヶ崎4号墳		29
5	筆ヶ崎5号墳		35
6	筆ヶ崎6号墳		41
7	筆ヶ崎7号墳		48
8	筆ヶ崎8号墳		50
9	筆ヶ崎10号墳		50
V	筆ヶ崎西遺跡	(水橋)	67
1	竪穴建物		67
2	掘立柱建物・塀・柵		152
3	その他の遺構		188
4	遺構外出土遺物		199
VI	自然科学分析		245
1	分析の目的	(水橋)	245
2	分析		245
	須恵器内面付着物の赤外分光分析	鍛冶関連遺物の分析調査	
VII	筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡の変遷	(水橋)	295

挿 図 目 次

第1図 調査区位置図……………4	第36図 筆ヶ崎10号墳 墳丘実測図……………51
第2図 周辺の遺跡位置図……………7	第37図 筆ヶ崎10号墳 石室遺構図……………52
第3図 大地区と調査区……………8	第38図 筆ヶ崎10号墳 土層図……………53
第4図 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺構全体図……………9	第39図 筆ヶ崎1号墳・2号墳 石室使用石材…56
第5図 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 (第2・3・6次) 主要遺構平面略図…10	第40図 筆ヶ崎3号墳 石室使用石材……………57
第6図 筆ヶ崎古墳群調査前測量図1……………11	第41図 筆ヶ崎4号墳・5号墳 石室使用石材…58
第7図 筆ヶ崎古墳群調査前測量図2……………12	第42図 筆ヶ崎6号墳・10号墳 石室使用石材…59
第8図 筆ヶ崎古墳群 遺構全体図……………13	第43図 筆ヶ崎古墳群 出土遺物実測図1……………60
第9図 筆ヶ崎1号墳 墳丘実測図……………14	第44図 筆ヶ崎古墳群 出土遺物実測図2……………61
第10図 筆ヶ崎1号墳 土層図……………15	第45図 筆ヶ崎古墳群 出土遺物実測図3……………62
第11図 筆ヶ崎1号墳 石室遺構図……………16	第46図 筆ヶ崎古墳群 出土遺物実測図4……………63
第12図 筆ヶ崎1号墳 遺物出土状況図……………17	第47図 筆ヶ崎古墳群 出土遺物実測図5……………64
第13図 筆ヶ崎2号墳 墳丘実測図……………18	第48図 筆ヶ崎古墳群 出土遺物実測図6……………65
第14図 筆ヶ崎2号墳 土層図……………19	第49図 筆ヶ崎古墳群 出土遺物実測図7……………66
第15図 筆ヶ崎2号墳 石室遺構図……………21	第50図 SH2・10遺構図1……………68
第16図 筆ヶ崎2号墳 石室遺物出土状況図…22	第51図 SH2・10遺構図2……………69
第17図 筆ヶ崎2号墳 周溝遺物出土状況図…23	第52図 SH2遺構図……………70
第18図 筆ヶ崎3号墳 墳丘実測図……………25	第53図 SH10・SD4遺構図……………71
第19図 筆ヶ崎3号墳 石室実測図……………26	第54図 SH2・10詳細図……………72
第20図 筆ヶ崎3号墳 土層図……………27	第55図 SH2鍛冶炉1・2……………73
第21図 筆ヶ崎4号墳 墳丘実測図……………30	第56図 SH28遺構図……………74
第22図 筆ヶ崎4号墳 土層図……………31	第57図 SH32・34・SF45遺構図1……………76
第23図 筆ヶ崎4号墳 石室遺構図……………33	第58図 SH32・34・SF45遺構図2……………77
第24図 筆ヶ崎4号墳 遺物出土状況図……………34	第59図 SH35遺構図……………78
第25図 筆ヶ崎5号墳 墳丘実測図……………35	第60図 SH37・38・47・SK57遺構図……………79
第26図 筆ヶ崎5号墳 土層図……………37	第61図 SH37・47カマド詳細図……………80
第27図 筆ヶ崎5号墳 石室遺構図……………39	第62図 SH54遺構図……………81
第28図 筆ヶ崎5号墳 石室中位の石材・ 遺物出土状況図……………40	第63図 SH161遺構図……………82
第29図 筆ヶ崎6号墳 墳丘実測図……………41	第64図 SH62・66・SX67遺構図……………84
第30図 筆ヶ崎6号墳 土層図……………43	第65図 SH62カマド・SX67詳細図……………85
第31図 筆ヶ崎6号墳 石室遺構図……………45	第66図 SH66カマド詳細図……………86
第32図 筆ヶ崎6号墳 墳丘遺物出土状況図1…46	第67図 SH64遺構図……………87
第33図 筆ヶ崎6号墳 墳丘遺物出土状況図2…47	第68図 SH65・70遺構図……………88
第34図 筆ヶ崎7号墳 実測図……………48	第69図 SH71遺構図……………89
第35図 筆ヶ崎8号墳 実測図……………49	第70図 SH74遺構図……………90
	第71図 SH76・78遺構図……………91
	第72図 SH76カマド詳細図……………92
	第73図 SH78カマド詳細図……………93

第74図	S H80遺構図、ビット出土状況図	95	第115図	S H235遺構図 2	139
第75図	S H81遺構図	96	第116図	S H236遺構図	140
第76図	S H82遺構図	97	第117図	S H239・241遺構図	141
第77図	S H84遺構図	98	第118図	S H258遺構図	142
第78図	S H88遺構図	99	第119図	S H259遺構図	143
第79図	S H89・SK 7 遺構図	100	第120図	S H260遺構図	144
第80図	S H92遺構図	101	第121図	S H267遺構図	145
第81図	S H97遺構図	102	第122図	S H285遺構図	146
第82図	S H99遺構図	103	第123図	S H288遺構図	147
第83図	S H100遺構図	104	第124図	S H293・295遺構図	148
第84図	S H104・105・106・107遺構図	106	第125図	S H296遺構図	149
第85図	S H107遺構図	107	第126図	S H298遺構図	150
第86図	S H118遺構図	108	第127図	S H299・300遺構図	151
第87図	S H119・124遺構図	109	第128図	S B151・152遺構図	153
第88図	S H120遺構図	110	第129図	S B153遺構図	154
第89図	S H121遺構図	111	第130図	S B154遺構図	155
第90図	S H125～127遺構図	112	第131図	S B155遺構図	156
第91図	S H125カマド詳細図	113	第132図	S B156・157遺構図	157
第92図	S H131・134遺構図	115	第133図	S B158・159遺構図	159
第93図	S H131・134カマド詳細図 1	116	第134図	S B160遺構図	160
第94図	S H131・134カマド詳細図 2	117	第135図	S B161・162遺構図	161
第95図	S H131・134カマド詳細図 3	118	第136図	S B163遺構図	162
第96図	S H132遺構図	119	第137図	S B164・165遺構図	163
第97図	S H132カマド詳細図	120	第138図	S B166・168遺構図	164
第98図	S H201遺構図	121	第139図	S A167・S B183遺構図	165
第99図	S H204遺構図	122	第140図	S B169・170遺構図	167
第100図	S H204カマド詳細図	123	第141図	S B171遺構図	168
第101図	S H205遺構図	124	第142図	S B172・184遺構図	169
第102図	S H210遺構図	126	第143図	S B173遺構図	170
第103図	S H213・297遺構図	127	第144図	S A176・185遺構図	171
第104図	S H213遺構図	128	第145図	S B177・179遺構図	172
第105図	S H214遺構図	129	第146図	S B301・302遺構図	174
第106図	S H215遺構図 1	130	第147図	S B303・305遺構図	175
第107図	S H215遺構図 2	131	第148図	S B306・307遺構図	176
第108図	S H218・219遺構図 1	132	第149図	S B308・309遺構図	177
第109図	S H218・219遺構図 2	133	第150図	S B310・312遺構図	179
第110図	S H218・219遺構図 3	134	第151図	S B313・314遺構図	180
第111図	S H225遺構図 1	135	第152図	S B315・325遺構図	181
第112図	S H225遺構図 2	136	第153図	S B318遺構図	182
第113図	S H226・227遺構図	137	第154図	S B319・320遺構図	183
第114図	S H235遺構図 1	138	第155図	S B321・322遺構図	184

第156図	S B 323・S A 304遺構図	185	第173図	筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図10	211
第157図	S B 327・328遺構図	186	第174図	筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図11	212
第158図	S B 329・330遺構図	187	第175図	筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図12	213
第159図	S K 1・S K 3遺構図	189	第176図	筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図13	214
第160図	S K 5・S F 9・S K 22・S X 24・ S K 25・S K 26遺構図	191	第177図	筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図14	215
第161図	S X 36・S F 87・S K 123・ S K 209・S K 234遺構図	193	第178図	筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図15	216
第162図	S K 110・S K 111遺構図	195	第179図	筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図16	217
第163図	S X 130・S K 137・S D 233・ S D 238遺構図	198	第180図	筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図17	218
第164図	筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図 1	202	第181図	筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図18	219
第165図	筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図 2	203	第182図	鍛冶関連遺物出土分布	245
第166図	筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図 3	204	第183図	須恵器杯Hの法量変化	297
第167図	筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図 4	205	第184図	筆ヶ崎 1～4期の北勢在地窯系須恵器と 共伴の猿投窯系須恵器	299
第168図	筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図 5	206	第185図	筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡の変遷 1	302
第169図	筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図 6	207	第186図	筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡の変遷 2	303
第170図	筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図 7	208	第187図	筆ヶ崎 5期の遺物分布	304
第171図	筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図 8	209	第188図	筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡の 時期区分	305
第172図	筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図 9	210	第189図	筆ヶ崎時期区分の実年代観	305
			付図	筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺構全体図	

表 目 次

第1～7表	筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺構一覧表	220～226	第10～25表	筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺物観察表	229～244
第8・9表	筆ヶ崎西遺跡 掘立柱建物・榿等 柱穴一覧表	227・228			

写 真 図 版 一 覧

巻頭図版

図版 1	筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡遠景、第3次調査区全景
図版 2	第2次調査区全景、3号墳・4号墳・10号墳
図版 3	5号墳・6号墳・7号墳
図版 4	3号墳石室、10号墳石室
図版 5	2号墳側壁、5号墳側壁、3号墳墳丘土層、6号墳墳丘土層

図版 6	第3次調査区建物群、S H 2
図版 7	S H 2 カマドと鍛冶炉 1・2、鍛冶炉 1 縦断土層、鍛冶炉 2 検出状況、鍛冶炉 1、鍛冶炉 2 断ち割り
図版 8	S B 169・170、出土遺物 (5, 6, 87, 88, 103, 116, 117, 513)

写真図版 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡遺景

- 図版1 調査前風景、第2次調査区全景
 図版2 調査前全景、第3次調査区
 図版3 第6次調査区、第6次調査区、第6次調査区
 図版4 1号墳、1号墳石室
 図版5 1号墳石室横断土層、1号墳羨道縦断土層、1号墳石室右側壁、1号墳玄室土師器出土状況、1号墳石室右袖部、1号墳羨道縦断土層、1号墳北西側周溝内集石
 図版6 2号墳、2号墳石室
 図版7 2号墳羨道左側壁、2号墳玄室遺物出土状況
 図版8 2号墳石室右側壁、2号墳北側周溝遺物出土状況、2号墳石室横断土層、2号墳石室横断土層、2号墳北側周溝遺物出土状況、2号墳周溝土層
 図版9 3号墳、3号墳遺物出土状況
 図版10 3号墳奥壁付近遺物出土状況、3号墳遺物出土状況
 図版11 3号墳石室横断土層、3号墳石室縦断土層、3号墳石室横断土層、3号墳羨道、4号墳石室
 図版12 4号墳石室、4号墳玄門付近
 図版13 4号墳玄室遺物出土状況、4号墳耳環出土状況、4号墳石室横断土層、4号墳石室入口付近、4号墳周溝土層
 図版14 5号墳、5号墳石室
 図版15 5号墳崩落石、5号墳石室崩落石付近遺物出土状況、5号墳石室中央付近出土状況、5号墳奥壁付近、5号墳石室中央遺物出土状況
 図版16 5号墳石室横断土層、5号墳石室横断土層、5号墳石室縦断土層、5号墳周溝土層、6号墳
 図版17 6号墳石室、6号墳石室
 図版18 6号墳石室土層、6号墳石室縦断土層、6号墳石室内遺物出土状況、6号墳墳丘遺物出土状況、6号墳墳丘遺物出土状況
 図版19 6・7号墳間土層、8号墳、5・7号墳間土層、8号墳周溝土層、10号墳
 図版20 10号墳石室、10号墳石室横断土層、10号墳石室縦断土層、10号墳周溝土層、SK137と3号墳

- 図版21 SH2、SH10
 図版22 SH2土層、SH2土層、SH2カマド付近、SH2カマド、SH2鍛冶炉1・2、SH2鍛冶炉1、SH2鍛冶炉2
 図版23 SH28、SH35、SH71
 図版24 SH32・34、SH37
 図版25 SH47、SH54
 図版26 SH61、SH62・66、SX67
 図版27 SH64、SH65・70
 図版28 SH74、SH76・78
 図版29 SH76、SH80
 図版30 SH81、SH82
 図版31 SH84、SH88
 図版32 SH89、SH92
 図版33 SH97、SH100
 図版34 SH104～107、SH107
 図版35 SH119・124、SH120
 図版36 SH121、SH125～127
 図版37 SH131・134、SH132
 図版38 SH132、SH201
 図版39 SH204、SH210
 図版40 SH213・297、SH214
 図版41 SH215、SH218・219
 図版42 SH225、SK228・229、SH226・227
 図版43 SH235・239・241、SB309
 図版44 SH236、SH241
 図版45 SH258、SH259
 図版46 SH260、SH267
 図版47 SH285、SH288
 図版48 SH296、SH298
 図版49 SH299、SH300
 図版50 SH34カマド、SH34遺物出土状況、SH35内E-W12pit1遺物出土状況、SH61カマド、SH61カマド、SH66カマド、SH66内E-X16pit3遺物出土状況、SH76カマド
 図版51 SH78カマド、SH80内F-C22pit2遺物出土状況、SH81カマド、SH81カマド、SH82遺物出土状況、SH82内E-Y23pit2遺物出土状況、SH84カマド、SH88カマド
 図版52 SH100内F-L23pit5遺物出土状況、SH134カマド、SH134カマド、SH134カマド、SH

	131・134土層、SH134カマド・貯蔵穴、SH132カマド、SH132カマド	図版72	SX24、SX36、SK67、SX87、SK91遺物出土状況、SK110、SK111、SX130
図版53	SH204、SH210カマド、SH213カマド、SH214カマド、SH215カマド、SH215カマド、SH215遺物出土状況、SH219カマド	図版73	4, 8, 15, 33, 34, 36, 39, 44
図版54	SH219カマド、SH225カマド、SH235カマド、SH235カマド、SH285内C-V12pit3遺物出土状況、SH296カマド、SH298カマド、SH298貯蔵穴	図版74	52, 55, 64, 68, 69, 72, 76, 77, 127
図版55	S B151、S B153	図版75	78, 79, 81, 82, 83, 84, 85, 94
図版56	S B154・155、S B154	図版76	95, 96, 97, 99, 100, 106, 110, 111
図版57	S B155、S B156・157	図版77	113, 114, 115, 122, 123, 124, 130, 130
図版58	S B157、S B158	図版78	131, 131, 132, 132, 134, 135, 135漆(分析)、136
図版59	S B159、S B160	図版79	139, 140, 141, 153, 154, 158, 159, 163
図版60	S B161、S B162	図版80	165, 166, 169, 177, 178, 192, 193, 194, 197
図版61	S B163、S B164	図版81	209, 229, 244, 249, 251, 253, 254, 264, 768
図版62	S B165、S B166	図版82	267, 283, 293, 297, 298, 300, 300, 300
図版63	S B168、S B169・170	図版83	303, 305, 311, 314, 317, 320, 336, 338
図版64	S B171、S B172	図版84	349, 362, 371, 371, 384, 386, 389
図版65	S B173、S B301・302	図版85	390, 405, 407, 410, 412, 417, 434, 435, 436
図版66	S B303、S B305	図版86	424, 438, 445, 447, 458, 461, 462, 462, 468, 472
図版67	S B306、S B307	図版87	469, 469, 476, 477, 478, 494, 499, 501
図版68	S B309、S B310	図版88	503, 505, 509, 510, 515, 526, 528
図版69	S B312、S B313	図版89	530, 532, 536, 542, 543, 561, 562, 572
図版70	S B314、S B315	図版90	578, 587, 589, 590, 590, 591, 592, 637
図版71	S A304、S B151柱穴、S B173柱穴、E-V3pit1遺物出土状況、F-G15pit1遺物出土状況、C-Y23pit6遺物出土状況、D-G16pit2遺物出土状況	図版91	646, 666, 669, 683, 690, 700, 700, 702, 711
		図版92	722, 735, 746, 747, 748, 749, 755, 756, 759
		図版93	126, 331, 342, 366, 415, 419, 425, 444, 483, 570, 583, 651, 725, 726, 727, 760
		図版94	35, 149, 246, 275, 289, 290, 512, 730, 731, 769, 770, 771, 772, 773

I 前 言

1 調査に至る経緯

近畿自動車道名古屋神戸線（以下、新名神高速道路とする）は、名古屋市と神戸市を結ぶ、総延長約175kmの高規格幹線道路である。昭和40年に開通した名神高速道路は、自動車交通の増大により、慢性的な渋滞や混雑を生み、高速度・定時性が損なわれる状況が生じてきた。そこで、この課題の解消の対策として、代替路線の新名神高速道路の整備が進められることとなったのである。

三重県教育委員会と中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所は、平成21年（2009）年2月24日付けで、事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱い、及び発掘調査の方法についての協定書を取り交わし、四日市JCT～亀山西JCT間の発掘調査を実施してきた。

既に刊行している報告書¹⁾には、新名神高速道路事業の概要、及び発掘調査に至る経緯、保護措置などの詳細について記載しているため、参照された。

2 調査の経過

(1) 調査経過の概要

筆ヶ崎古墳群は、四日市市小牧町字筆ヶヶに所在する古墳群である。8基から構成される古墳群として知られていたが、新名神高速道路の新四日市JCT（工事中は、四日市北JCTと呼称）が当遺跡周辺に建設されることとなったため、まず初めに古墳の位置や状況などの現地確認を行った。その結果、新たに2基の古墳と思われる地形の隆起が確認され、計10基の古墳が存在する可能性が高いことが判明した。

また、当遺跡範囲のほぼ中央を縦断する形で道路が計画されたが、新四日市JCTから東海環状自動車道の東員ICへの進入路線範囲は国土交通省、東員ICから新四日市JCTへの進入路線範囲はネクソコ日本の管轄とされていた。

10基が想定された古墳の内、7号墳が国土交通省とネクソコ日本との2つの事業地の境界線上

に存在していた。そのため現地での発掘調査に関しては、調査年度を一致させる（平成24年度）調整を行い、それぞれの範囲内は別々に調査を実施した。

今回、平成22年度から平成25年度にかけて行われた発掘調査の年度ごとの概要を、以下に記述する。

平成22年度

年度当初の予定では、4月から翌年1月にかけて、調査前の地形測量を行い、その後の2～3月にかけて780㎡の一次調査を実施する計画であった。

しかし、5月20日のネクソコ中日本との各種調整の定例会で、用地買収や伐採などの進捗などにより、今年度の一次調査は実施を見送ることとなった。また、7月27日に行われた自然環境保全対策検討委員会の猛禽類分科会では、筆ヶ崎古墳群周辺に「希少野生動物植物」に指定されているオオタカの営巣が確認されたとの報告があった。その後、8月11日には、同様の会議で、オオタカの非繁殖期である8～12月にしか伐採作業などを行う事が出来ず、その後に発掘調査を実施する必要があることが提示された。さらに11月22日にも同様の会議が行われ、今年度はオオタカの営巣状況の観察や、路線外への営巣移設の実施などのため、伐採を行わず、翌年の平成23年8月～12月に伐採や一次調査を行うこととなった。

年度末になり、平成23年度は9～10月に一次調査を560㎡と、10月～12月に第2次調査を750㎡の調査計画がなされた。

なお、2月中旬に、次年度の第2次調査に備えて、調査対象範囲について平板による地形測量を実施した。

平成23年度

前述のように、筆ヶ崎古墳群の遺跡内に、国土交通省とネクソコ中日本との管轄範囲が存在していた。

発掘調査に関する事前の調整協議事項、具体的には、用地買収や伐採、調査に関わる進入路や排土置場・詰所などに関しては、国土交通省との調整も必

要であった。そのため、当該年度は、何度となく協議を重ねることとなった。しかも、当遺跡の周辺には、前述のようにオオタカの営巣が見られるだけでなく、当遺跡の西側に近接して競走馬のトレーニング場も存在しており、調査で生じる音や時間の制約も懸念された。

8月になり伐採作業も終了し、9月から翌年の平成24年1月にかけて、一次調査560㎡と、第2次調査750㎡の調査を実施した。一次調査では、10基の墳丘以外の範囲に幅2mの調査坑を8本設定して行った。その結果、いずれの調査坑からも遺構・遺物が確認されたため、ほぼ全面に渡り二次調査の対象となった。

また、第2次調査では、2基の古墳を調査するとともに、竪穴建物も確認した。その床面からは鍛冶炉を検出し、鉄製品を加工していることが判明するなど、貴重な調査成果が得られた。なお、普及啓発活動の一環として、第2次調査の現地説明会を12月3日(土)に行い、110名の参加があった。

年度末になり、次年度以降の調査について協議を行った。その結果、平成24年度は、二次調査が必要となった範囲の南側で、古墳を中心とする9,100㎡の調査を5月中旬頃に行い、平成25年度は、残りの北側の範囲で5,150㎡の調査計画がなされた。

平成24年度

年度が改まった4月、自然環境保全対策検討委員会の猛禽類分科会において、オオタカの営巣場所に変化が見られ、再び路線近くに舞戻ってきたとの報告を受けた。年度早々に発掘調査の計画準備を始めていたため、調査の方法についてネクスコ日本と協議を行い、機械類やベルトコンベアなど音を懸念して、人力掘削のみの調査を採用することが提案された。具体的な調査方法としては、営巣が確認されたオオタカは、8月頃には巣立っていく可能性が高いという事で、6～7月は古墳を中心に人力による調査を行った。その後、8月にはオオタカが巣立ち、古墳以外の範囲の調査も行うこととなった。

調査成果としては、7世紀の横穴式石室の円墳5基の他、飛鳥～奈良時代の竪穴建物・掘立柱建物を数多く確認することが出来た。特に、古墳からは、渡来人との関連が指摘されている青銅製の釵子が出土

するなど、貴重な成果が得られた。

なお、普及啓発活動の一環として、第3次調査の現地説明会を12月2日(土)に、東海環状自動車道の建設事業に伴う第4次調査と合同開催して、207名の参加があった。



年度末には、次年度の発掘調査計画の協議が持たれた結果、東海環状自動車道の発掘調査や近隣の競走馬のトレーニング場などとの調整を踏まえ、次年度の後半に発掘調査を行う計画がなされた。

平成25年度

年度が改まり、8月後半から発掘調査が実施され、翌年2月に現地での調査を終了した。

調査成果として、古墳の北側にも、飛鳥～奈良時代にかけての竪穴建物や掘立柱建物が、若干少なくなる傾向ではあるが、確認することが出来た。

なお、普及啓発活動の一環として、第6次調査の現地説明会を平成26年1月18日(土)に、東海環状自動車道の建設に伴う第7次調査と合同開催して、194名の参加があった。



(2) 現地調査の体制

各年度の担当・体制などは、次のとおりである。

平成23年度

・一次調査

担当：石井智大・中村法道 (調査研究Ⅱ課)

業者：株式会社イビソク (土工委託)

期間：平成23年9月20日～平成24年1月31日

面積：560㎡

・第2次調査

担当：石井智大・中村法道 (調査研究Ⅱ課)

業者：株式会社イビソク (土工委託)

期間：平成23年9月20日～平成24年1月24日

面積：750㎡

平成24年度

・第3次調査

担当：宮崎久美・水橋公恵・高松雅文

(調査研究3課)

業者：株式会社島田組 (調査補助委託)

期間：平成24年5月18日～平成25年2月28日

面積：9,100㎡

(参考)

第4次調査は、東海環状自動車道の建設事業に伴う調査として実施した。調査面積2,900㎡、調査期間は平成24年8月7日～平成25年2月15日である。

平成25年度

・第6次調査

担当：浅野隆司・高松雅文 (調査研究3課)

業者：株式会社イビソク (調査補助委託)

期間：平成25年8月21日～平成26年2月17日

面積：5,319㎡

(参考)

第5次調査と第7次調査は、東海環状自動車道の建設事業に伴う調査として実施した。第5次調査は、面積4,945㎡、期間平成25年5月10日～11月20日である。第7次調査は、面積4,100㎡、期間平成25年10月8日～平成26年3月18日である。

(3) 文化財保護法等にかかる諸通知

◎文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項(周知の埋蔵文化財における土木工事等の発掘に関する通知)

- 平成22年8月6日付け、中高名支四工第760号
(中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所長から三重県教育委員会教育長あて)

◎文化財保護法第99条第1項(発掘調査の着手報告)

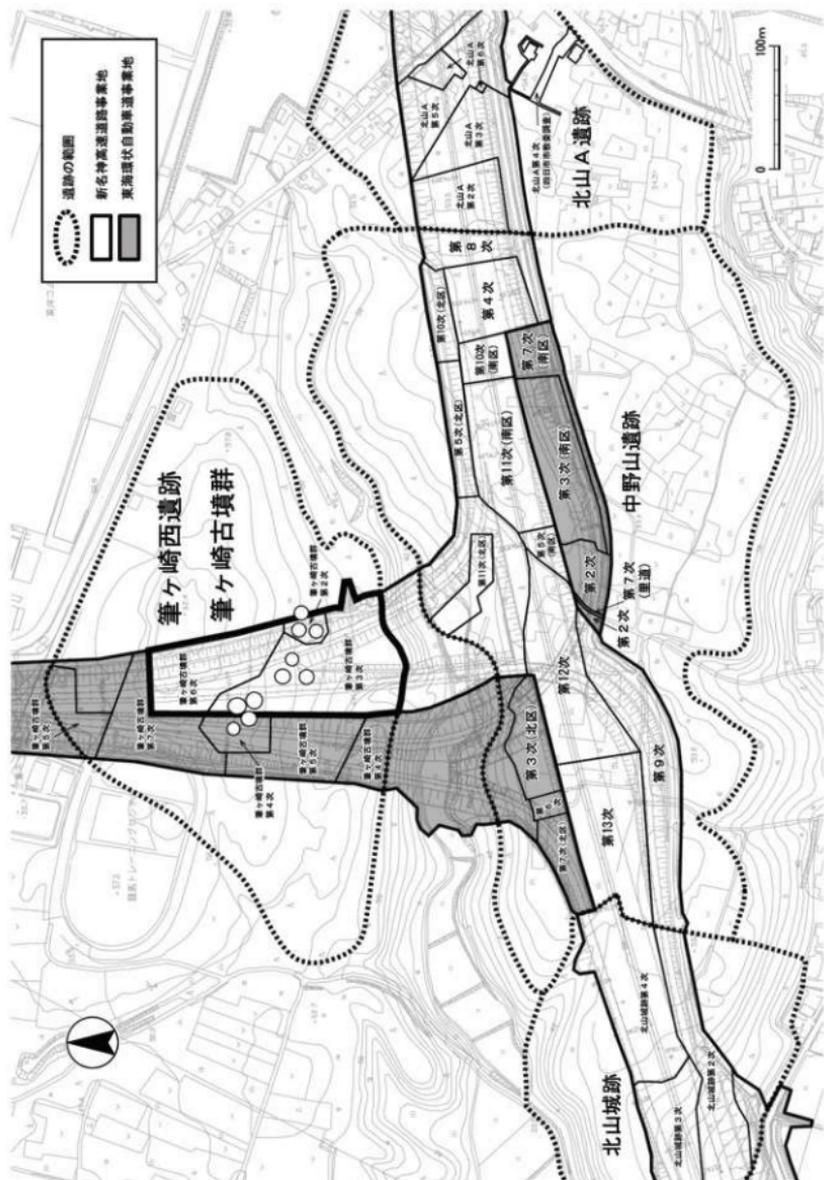
- 平成23年9月22日付け、教理第171号
(三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて) 【平成23年度・第2次】
- 平成24年5月30日付け、教理第61号
(三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて) 【平成24年度・第3次】
- 平成25年9月13日付け、教理第241号
(三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて) 【平成25年度・第6次】

◎文化財保護法第100条第2項(文化財の発見・認定通知)

- 平成24年2月3日付け、教委第12-4424号
(三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて) 【平成23年度・第2次】
- 平成25年2月25日付け、教委第12-4439号
(三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて) 【平成24年度・第3次】
- 平成26年2月27日付け、教委第12-4416号
(三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて) 【平成25年度・第6次】
(服部)

【註】

- 1) 三重県埋蔵文化財センター2011『伊坂宗跡・伊坂遺跡(第5次)発掘調査報告』



第1図 調査区位置図(1:4,000)

II 位置と環境

1 地理的環境

筆ヶ崎西遺跡(第2図1)は、三重県北勢地域の四日市市小牧町から員弁郡東員町長深にかけて広がり、筆ヶ崎古墳群は、その中央付近(四日市市側)に所在する。

北勢地域は、滋賀県境となる鈴鹿山脈、鈴鹿山麓に形成された洪積台地(段丘)、西から東に向かって流れる朝明川・員弁川・三滝川などによってつくられた沖積平野、山地と海岸の中間に分布する奄芸層群の丘陵で構成されている。

地形の特徴は、西側を南北に走る一志断層によってつくられた急峻な山地と、海岸線と平行して南北に走る桑名・四日市断層が奄芸層群上に堆積された洪積層の中段段丘面を切ることによってもたらされた段丘にある。

遺跡の属する旧朝明郡は、西を三重郡菟野町、北をいなべ市・桑名市・三重郡朝日町と川越町、東を伊勢湾に臨む。東西に長い当地域を朝明川が西から東に貫流し、その南岸中央部に垂坂丘陵が広がる。丘陵の西は保々の平地となり、東は伊勢平野の北部地域になる。

旧朝明郡域では、丘陵の先端や低平な更新世段丘面に遺跡が集中している。特に、朝日丘陵南、四日市市西大鐘町以西の段丘面、垂坂丘陵南東の三ヶ所に分布の核が認められる。一方、平野部は周知遺跡が希薄で、谷底平野が海岸平野と拓ける広永町から大矢知町などに数遺跡が知られているに過ぎない。

筆ヶ崎古墳群は、朝明川東部の左岸の段丘斜面上に位置しているが、この段丘には、多くの遺跡が集中しており、朝明川の氾濫を避けられる安定した土地を選んでしていると推測できるが、近現代までこのような集落の立地は大きく変わっていない。

2 歴史的環境

周辺の遺跡について、時代をおって展開をみていきたい。なお、既刊報告書¹⁾には更に詳しく記載されているので、そちらも参考にされたい。

(1) 旧石器・縄文時代

四日市市の旧石器時代～縄文時代の遺跡は、これまでの調査例では水沢町周辺に集中しており、当遺跡の周辺では野呂田遺跡(市場町)で旧石器らしい削器または剥片、西ヶ広遺跡(17)では縄文時代後期に属する土坑が発見されたのみであった。しかし近年の調査により、同じ朝明川の右岸の中野山遺跡(7)や、さらにその西に位置する小牧南遺跡(29)で、縄文時代早期から晩期にかけての遺構が多数発見され、当該地域が縄文時代から生活の場であったことを証拠づけることになった。

(2) 弥生時代

周辺の遺跡としては、朝日丘陵の南縁にある西ヶ広遺跡(17)がよく知られており、弥生時代後期の竪穴住居・掘立柱建物が確認され、弥生土器の壺・甕・甔・高杯、土玉やガラス玉が出土した。菟上遺跡(20)では、弥生時代中期の竪穴住居120棟や掘立柱建物33棟が確認され、大集落が存在したと想定されている。

垂坂丘陵の東側の丘陵地にある久留倍遺跡(39)、山奥遺跡(42)では、弥生時代後期と考えられる遺構・遺物が出土している。他に、銅鐸が出土した伊坂遺跡(19)がある。

(3) 古墳時代

四日市市の前期古墳として有名な志氏神社古墳は垂坂丘陵の南にある。古墳は前方後円墳で、車輪石、内行花文鏡、玉類が出土しており、4世紀前半の首長墓と考えられている。他に桑名市の高塚山古墳が挙げられる程度で、前期古墳は非常に少ない。

中期の古墳としては、全国的には認められる大形前方後円墳が確認されておらず、朝明川流域には方墳や円墳が特徴的に分布している。

最近新たに発見された西山古墳群(10)は55基以上の大古墳群で、円墳や木棺墓を含むが、方墳を主体とする。近くには、同じく方墳を主体とする広古墳群(14)があり、2基の円墳が確認されている浄ヶ坊古墳群(15)もある。

後期古墳は、朝明川を挟んだ両岸に数多く知られ

ているが、発掘調査されていないため詳細は不明なものが多い。調査された古墳としては、広永1号墳(24)があり、7世紀後半の須恵器とともに金銅装大刀が出土した。

県内では珍しい横穴墓も当地域の特色である。朝明川南岸の死人谷横穴墓群(43)では金銅製環頭大刀柄頭が、朝明川西岸の金塚横穴墓群(22)では人骨が、広永横穴墓群(24)では耳環が出土した横穴墓が複数確認されている。

(4) 古代

『日本書紀』に大海人皇子が壬申の乱に際して途太川にて天照大神を遥拝したあと朝明郡家に入ったという記述があるなど、当地域は、交通の要衝として栄え、文献にたびたび名が見られる。

律令制のもと、北勢地方には員弁・桑名・朝明・三重郡の4郡がおかれ、朝明川流域はほぼ朝明郡に属していた。『和名類聚抄』にある朝明郡の5郷のうち、大金郷内とみられる中野山遺跡(7)・北山C遺跡(10)や、隣接する東員町西山遺跡²⁾(9)では、輪羽口・鉄渾などの遺物が出土することから、この地域に製鉄を行う専門集団(鍛冶部)がいたと考えられてきた³⁾。

久留倍遺跡(39)は、規則的に配置された大型の掘立柱建物群や正倉が発見されたため、朝明郡衙に比定されている。その他、この時代の有力な遺跡としては、計画的に配置された掘立柱建物が多数確認された菟上遺跡(20)・西ヶ広遺跡(17)があげられる。

(5) 中世

律令国家の崩壊に伴い、朝明郡は伊勢神宮領とされ、官司や祭主が郡司・郷司などの豪族をもって支配にあたった。また『神風抄』によると、朝明郡には御園5・御厨26・納所2が所在したとされ、細宜たちが、神税や租税免除の特権を得ることによって、勢力を図っていた。

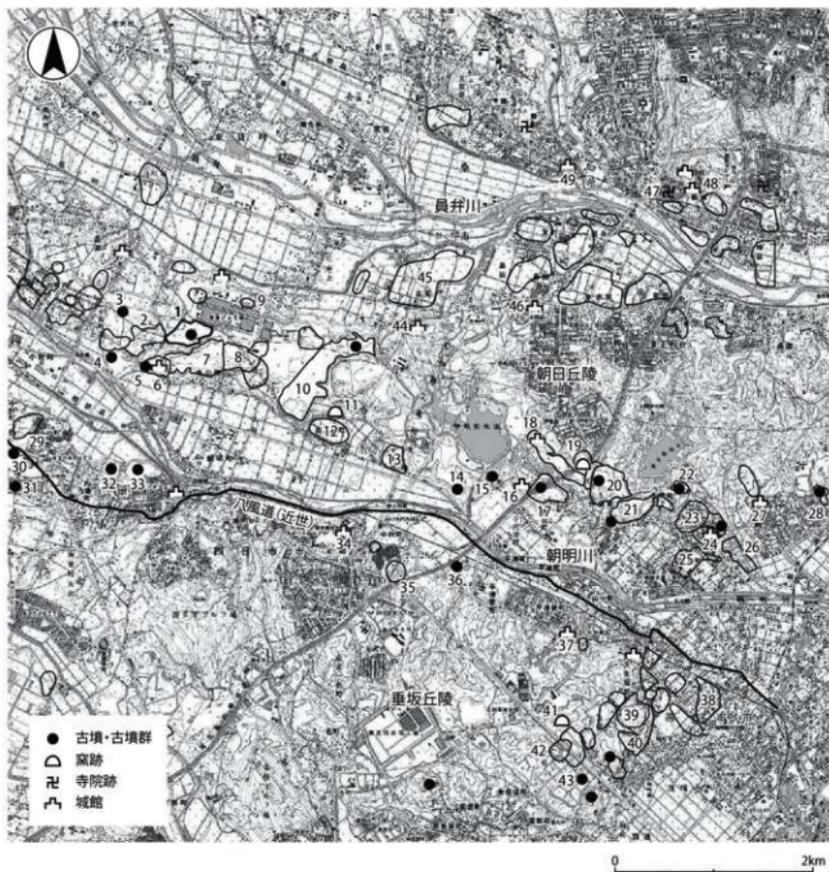
室町時代に入ると、朝明郡は伊勢守護の管轄になったが、実質的な支配は十ヶ所人数や北方一揆によって行われていた。この背景には、北勢地方の流通の中心であった桑名と近江八日市を結ぶ八風道が交通の要衝であったことがあげられる。(宮崎)

【註】

- 1) 三重県埋蔵文化財センター2019『筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡(第4・5・7次)発掘調査報告』
- 2) 東員町教育委員会1976『西山遺跡・新野遺跡発掘調査報告書』
- 3) 四日市市1993『四日市市史』第三巻史料編考古II

【主な参考文献】

- ・四日市市1988『四日市市史』第二巻史料編考古I
- ・四日市市1993『四日市市史』第16巻通史編古代・中世
- ・三重県2005・2008『三重県史』資料編考古1・2
- ・三重県埋蔵文化財センター2012～2016『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～亀山西JCT)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』II～VI



1. 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 2. 小牧北遺跡 3. 若宮古墳群 4. 門ノ上古墳群
 5. 居林遺跡 6. 北山城跡 7. 中野山遺跡 8. 北山A遺跡 9. 西山遺跡
 10. 北山C遺跡・西山古墳群 11. 北ノ山古竈 12. 西辻遺跡 13. 鎌撞遺跡 14. 広古墳群
 15. 浄ヶ坊古墳群 16. 西ノ広城跡 17. 西ヶ広遺跡・松山古墳 18. 伊坂城跡
 19. 伊坂遺跡・伊坂竈跡 20. 菟上遺跡 21. 山村遺跡 22. 金塚遺跡・金塚横穴墓群
 23. 城ノ谷遺跡 24. 広永1号墳・広永横穴墓群 25. 間ノ田遺跡 26. 辻子遺跡 27. 埋縄城跡
 28. 城ノ広古墳群 29. 小牧南遺跡 30. 高山古墳 31. 大沢古墳 32. 持光寺山古墳群
 33. 鶯谷古墳跡 34. 萱生城跡 35. 中村遺跡 36. 八幡古墳 37. 大矢知城跡 38. 下ノ宮遺跡
 39. 久留倍遺跡 40. 大矢知山畑遺跡 41. 鳩浦古竈 42. 山奥遺跡 43. 死人谷横穴墓群
 44. 志知城跡 45. 志知南浦遺跡 46. 島田城跡 47. 額田廃寺 48. 額田城跡 49. 星川城跡

第2図 周辺の遺跡位置図 (1:50,000) [国土地理院『莒野』『桑名』『四日市西部』『四日市東部』(1:25,000)に加筆作成]

III 調査の方法と基本層序

1 調査の方法

表土除去 古墳の範囲は人力、それ以外は重機で行った。

グリッド設定 (第3・4図) 当該事業だけでなく、同時期に調査することになった東海環状自動車道建設工事の対象範囲を合わせ、筆ヶ崎古墳群と筆ヶ崎西遺跡のグリッド設定を行った。

調査区全体を世界測地系の座標に沿った100 m四方の方眼(大地区)で区切り、その中を4 m四方の方眼(小地区)に細分した。大地区は、北から二列にA~H、小地区は南北方向に算用数字(1~25)、東西方向にローマ字(A~Y)を当て、その組み合わせにより、個別のグリッド名称(例:F-B11など)とした。

遺構検出 人力で遺構検出を行い、遺構の重複状況をグリッドごとのカード(遺構カード:縮尺1/40)に記録した。

遺構掘削 人力で遺構掘削を行い、遺物を取り上げた。必要に応じて、遺構断面の土層図、遺物出土状況図などを作成し、写真撮影を行った。

遺構番号の付与 溝や建物などの遺構には、種類を問わず通し番号を付与し、ピットについては小地区(グリッド)ごとに通し番号を付けた。

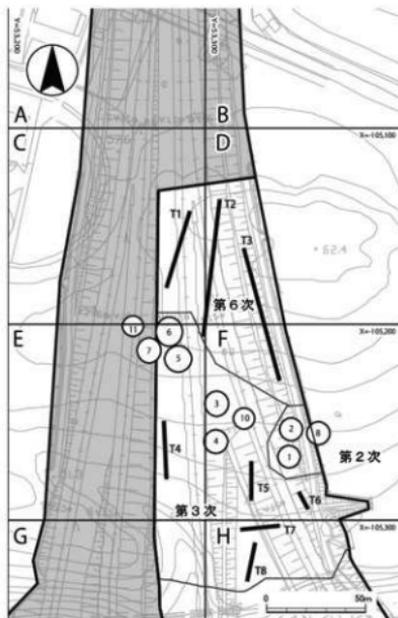
図面・写真 古墳群については、調査前測量を委託した。調査後は、第2次調査では手書き実測を行い、第3・6次調査では、空中写真測量を委託し、調査後の遺構平面図・等高線図等の作成、全体写真の撮影を行った。調査中の記録写真については、第2・3次調査では4×5 inch判・ブルーニー判・35mm判で、モノクロネガとカラーリバーサルのフィルムを使用し、第6次調査では一眼レフのデジタルカメラを使用した。

2 基本層序と遺構概観

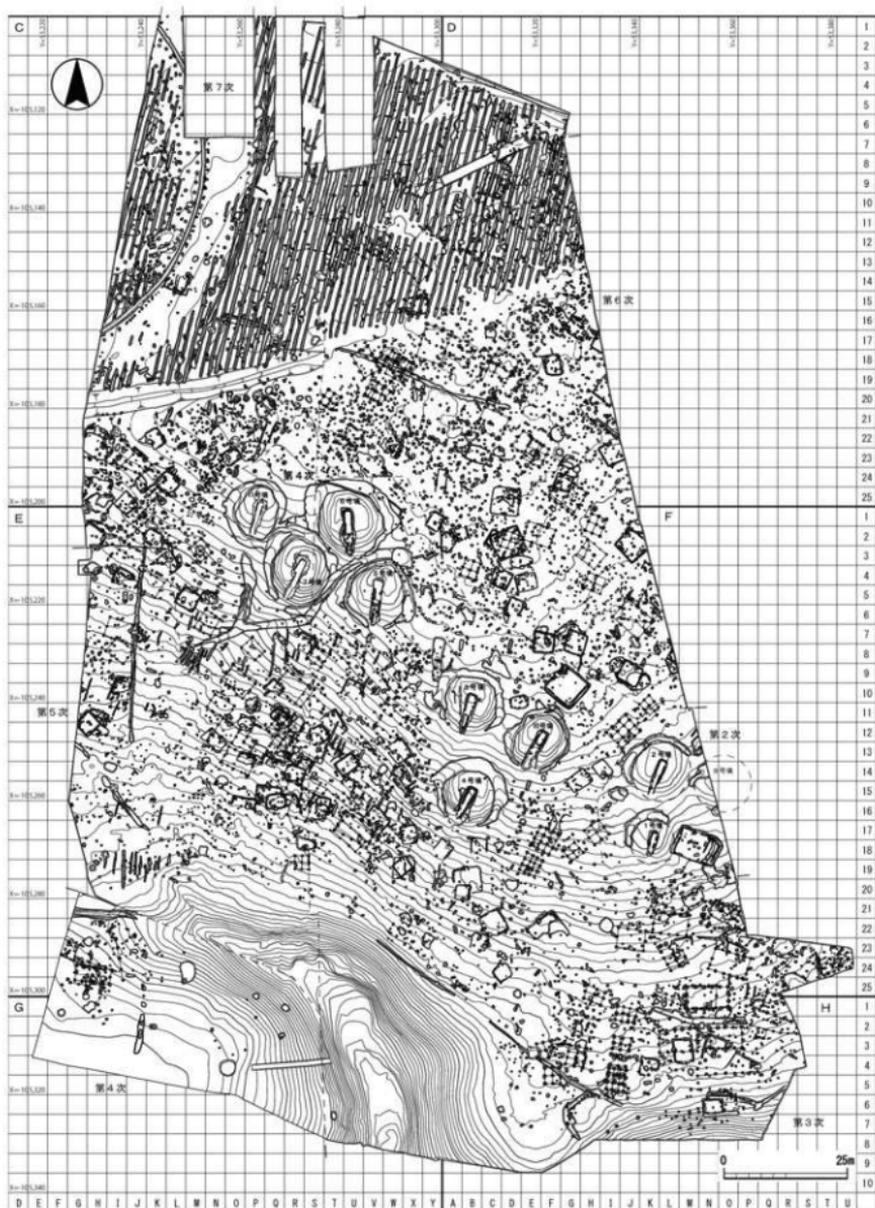
筆ヶ崎西遺跡は、丘陵平坦面から南方の谷への斜面にかけて広がり、その中の傾斜変換点付近に筆ヶ崎古墳群が立地する。

丘陵平坦面は削平を受け、斜面は土の流出が著しく、遺構の残存状態は悪い。基本層序は上から表土、褐色系粘質土、地山となる。地山は、大半は橙色系もしくは黄色の粘質土で、谷に近い場所は礫を多く含む。基本的に土が自然堆積するような地形ではないため、地山直上で行った遺構検出で、筆ヶ崎西遺跡のすべての遺構を確認した。

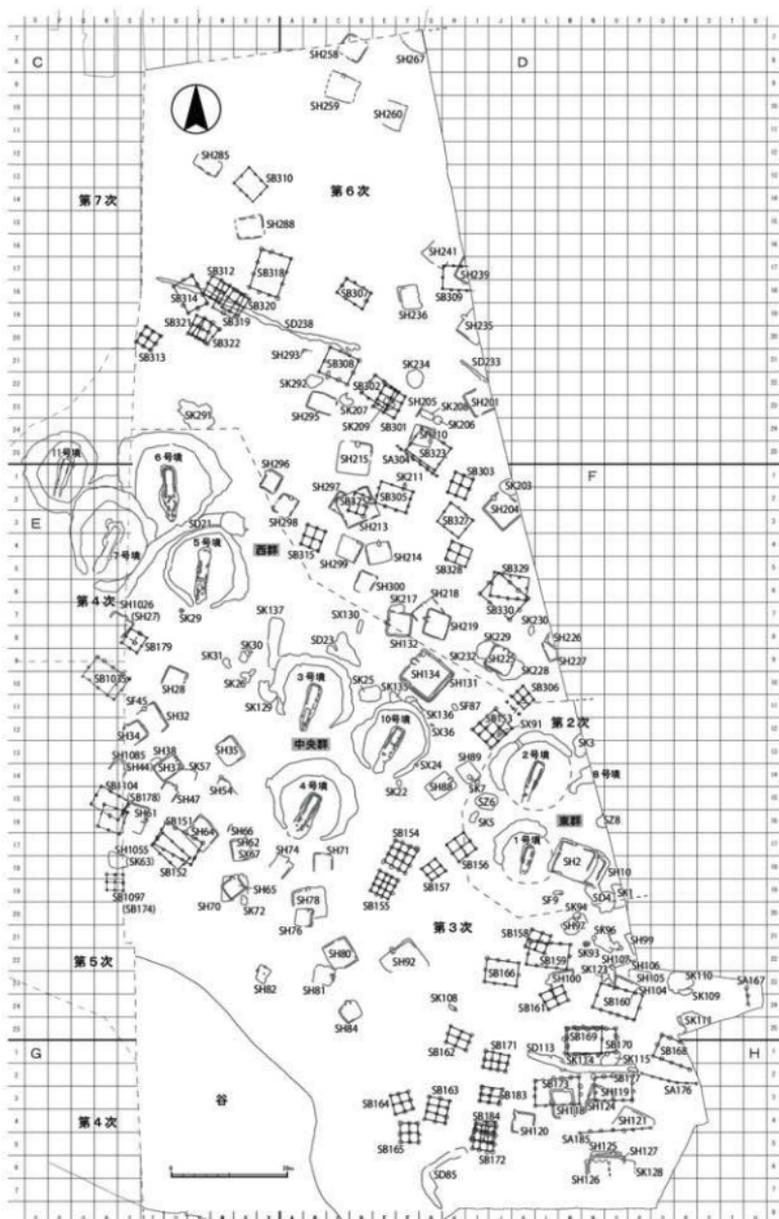
調査した遺構は、古墳9基(1~6・10号墳と7・8号墳の一部)、古代の堅穴建物76棟、掘立柱建物52棟、塀もしくは柵4列のほか、土坑・溝などである(第4・5図)。 (水橋)



第3図 大地区と調査区(1:2,500)



第4図 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺構全体図 (1:1,000)



第5図 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡（第2・3・6次）主要遺構平面略図（1：850）

IV 筆ヶ崎古墳群

調査に先立って、分布調査や地形測量（第6・7図）を行い、古墳群の現状を把握したところ、『四日市市史』に記載されている数や位置とは異なっていることが判明した。10基で構成される古墳群ではあるが、番号の整理過程で混乱が生じ、結果的に1～11号墳（9号墳は欠番）の番号が付与されている。詳細については、ほぼ同時期に実施した東海環状自動車道建設事業にともなう第4・5・7次調査の報告書を参照されたい¹⁾。

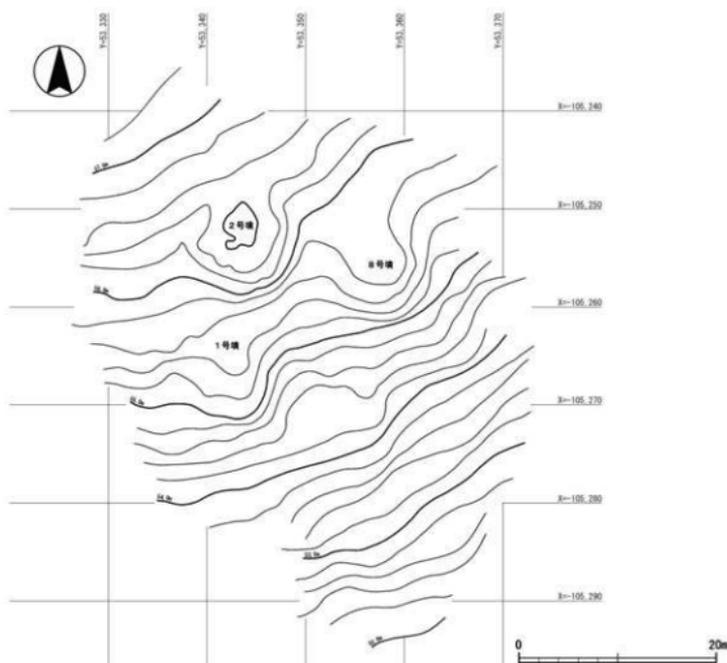
調査前には、最も高い7号墳で1.6m、低い8号墳や1・2号墳で0.7～0.8mほどの小山状の高まりがあり、墳丘として認識できた。ただ、『四日市市史』で横穴式石室墳と推定する理由として示されて

いた川原石の散在は認められなかった。

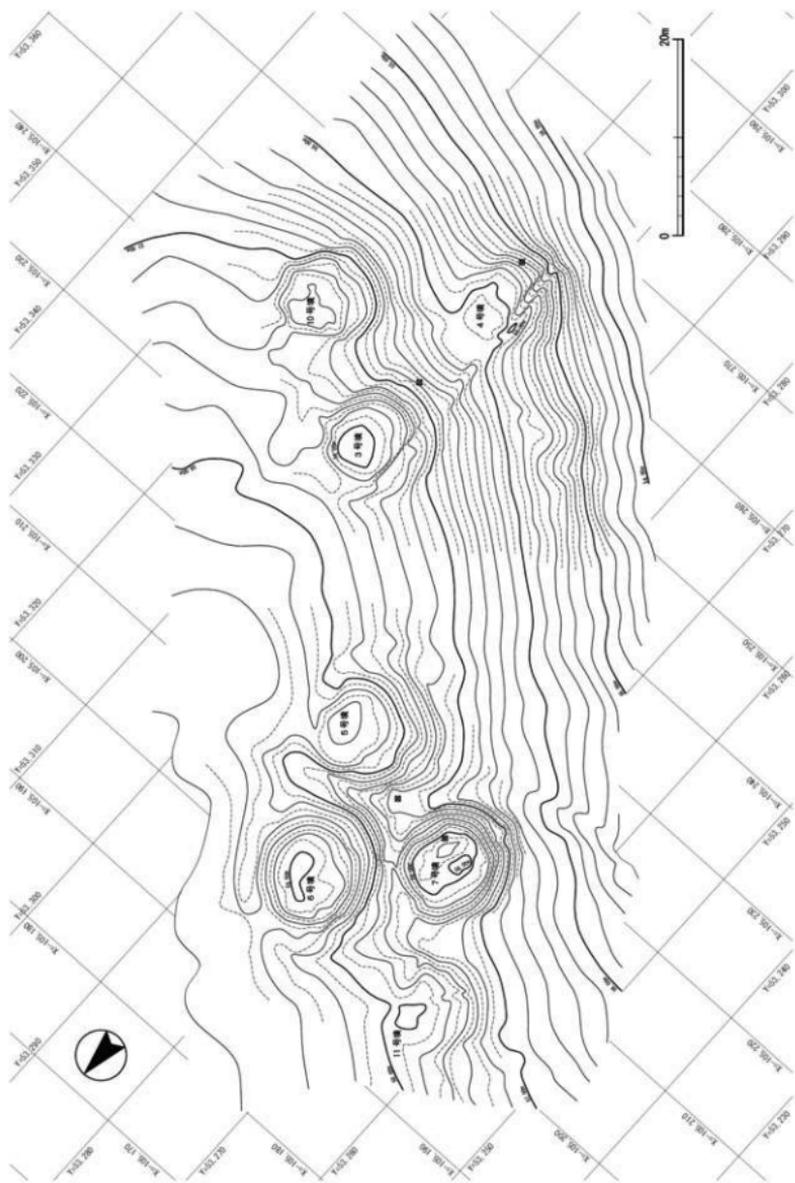
事業地内の1～8・10号墳を調査した。7号墳は第3次調査区の西端に、8号墳は第2次調査区東端にあり、墳丘の大半が調査区外に位置するため、墳裾から周溝の一部を調査したに過ぎない。なお、調査区西方に位置する7号墳の大部分および11号墳は、第4次調査区内に位置する。

筆ヶ崎古墳群の古墳10基は、その配置から大きく3群に分かれるため、5～7・11号墳を西群、3・4・10号墳を中央群、1・2・8号墳を東群として報告する。

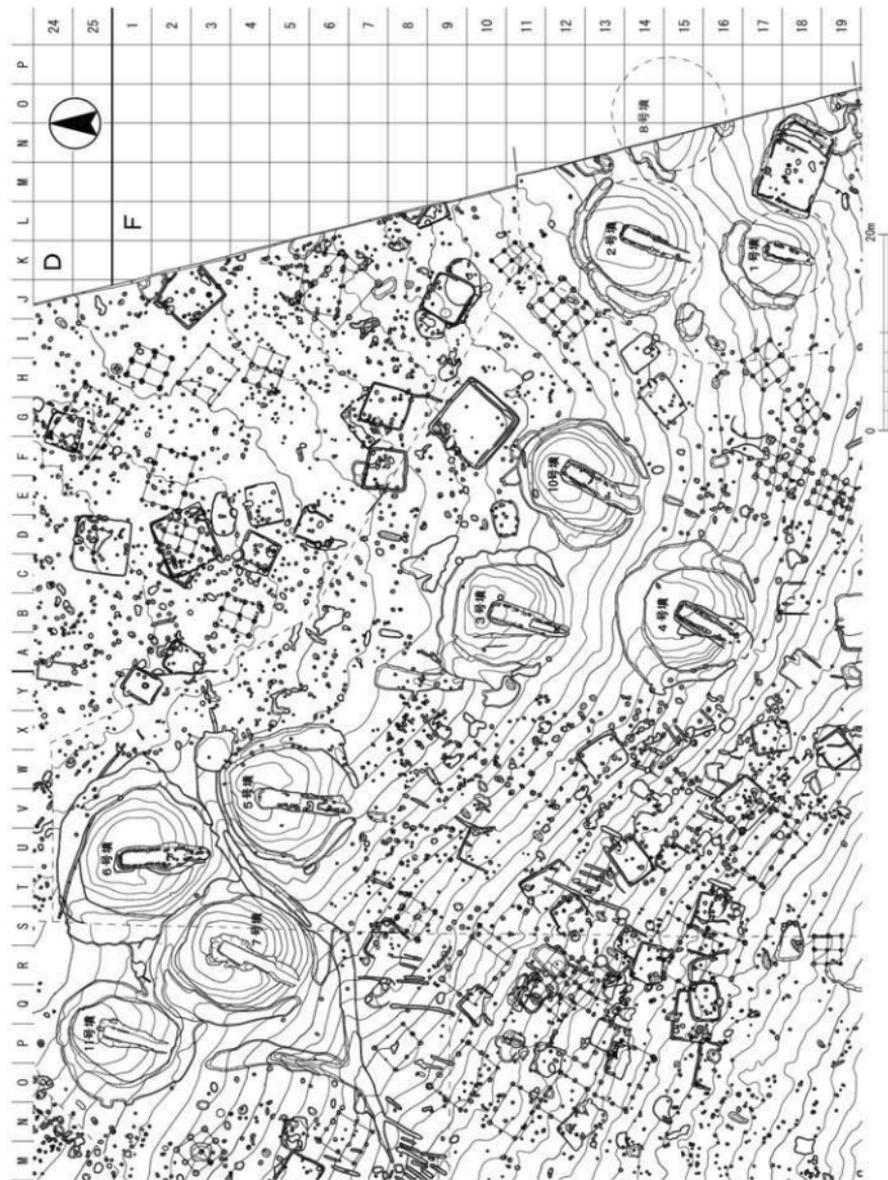
石室の石材²⁾については第39～42図、時期区分については第Ⅷ章を参照されたい。



第6図 筆ヶ崎古墳群調査前測量図1（1・2・8号墳、1：500）



第7図 筆ヶ崎古墳群調査前測量図2 (3~7・10・11号墳、1:500)



第8図 葦ヶ崎古墳群 遺構全体図 (1:500)

1 筆ヶ崎1号墳 (第9～12・43図)

東畔に位置し、南東向き斜面の最も下方に築造されている。調査前には、直径約11mの範囲が0.8mほど舌状に高くなっていた。封土は殆ど失われていたが、周溝や横穴式石室が検出され、耳環2点・須恵器・土師器が出土した。

(1) 遺構

周溝は浅く、斜面上方にあたる北西側で弧状に検出されたただだが、本来の平面形は、他の古墳と同じように石室開口部付近のみ途切れる円形とみられ、墳丘東端の推定位置にはSH2の南西隅が重複する。

周溝内には石室石材と思われる礫の集中する箇所(写真図版5右下)があることから、周溝が完全に埋没していない段階で石室が破壊され、周溝内に石室石材が投棄もしくは集積されたものと考えられる。

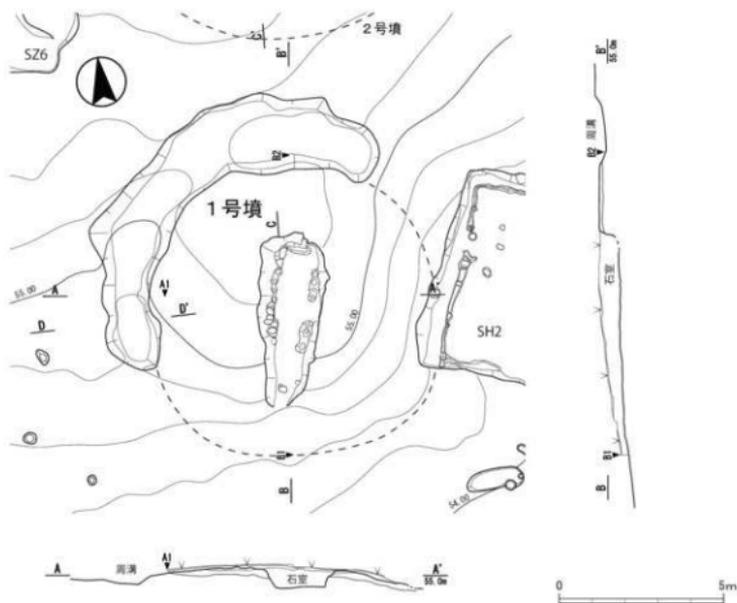
墳丘は、地山(第10図A1-A'・B1-B2:26・27層)・旧表土(24・25層)の上に部分的に盛土(22層)が残存していた。盗掘による破壊が著しいが、墓壇は、

旧表土上面から掘り込まれていることが確認でき、深さは約0.6mである。石室壁体の背後には裏込め土(20層)が充填されている。

石室は、ほぼ破壊し尽くされており、玄門付近から玄室にかけての右側壁のごく一部が残存していたに過ぎない。しかしながら、床面に残されていた石材の抜き取り痕とあわせて検討した結果、胴張りの疑似両袖式の横穴式石室であったと考えられる。

壁体には長径30cmほどの川原石が多く用いられている。立柱状ではないが、袖石として大型の石材を基底部に用い、その上に小型の石材を積んで玄門を形成している。

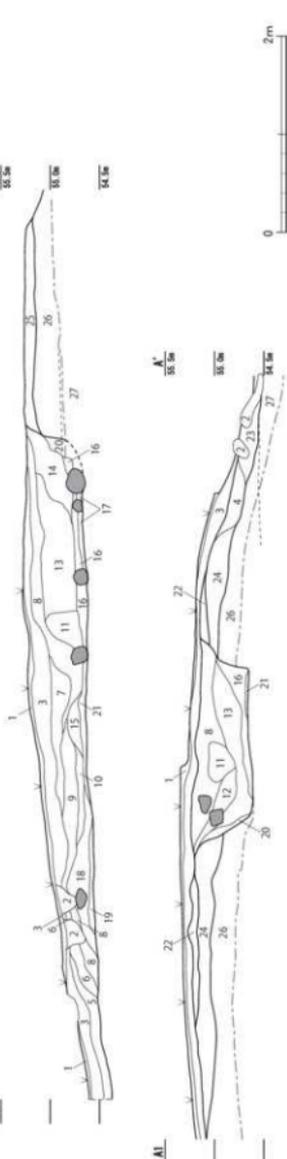
羨道は、残存する側壁の石積みや抜き取り痕からみて、玄門から0.8mほどで、それよりも外側は素掘りの墓道となる。墓道では、玄門から2.0mの位置で長径30cmほどの礫が検出され、周囲には閉塞土と思われる土層の堆積が確認できた。閉塞は主に土で行われ、その中にこうした礫が混じったものと思われる。



第9図 筆ヶ崎1号墳 墳丘実測図(1:150)

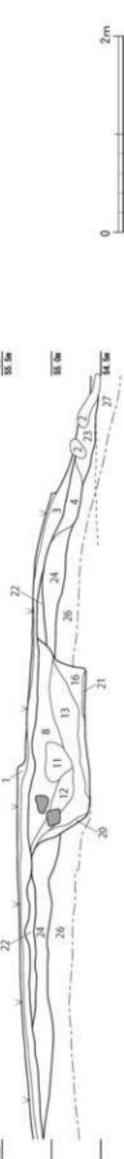
B1

B2



A1

A2



1: 表土 (腐植土)

- 2: 樹
3: 25YR5/4に似た褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
4: 25YR4/6 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
5: 25YR3/4 暗褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
6: 25YR3/4 暗褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
7: 25YR4/4 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
8: 25YR4/6 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 腐質1～2cmの層を少量含む 腐植出土
9: 25YR3/4 暗褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 腐質2～5cmの層を少量含む ややしまり強い
10: 25YR3/4 暗褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
11: 25YR4/4に似た暗褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) ボソボソでしまり強い、腐植出土 (根腐虫?)
12: 25YR4/3 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
13: 25YR4/4 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 腐質1～6cmの層を少量含む、ボソボソでしまり強い
14: 25YR4/6 暗褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 部分的に25YR4/6 褐色土シルト～中粒砂を含む 腐質2～4cmの層を少量含む
15: 25YR4/4 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
16: 25YR4/3 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 腐質1～6cmの層を少量含む
17: 25YR4/6 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 下部より土壌出土
18: 25YR4/4 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 腐植土?]
19: 25YR4/6 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) しまり強い、[腐植土もしくは粘質]
20: 25YR4/6 暗褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 腐質0.2～0.5cmの層を3%+腐質3cmの層を少量含む しまり強い [少量腐植土?]
21: 25YR4/6 暗褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) [粘土]
22: 25YR5/4に似た褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) [腐植土]
23: 25YR4/6 暗褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 腐植土?]
24: 25YR4/4 暗褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) [腐植土]
25: 25YR4/4 暗褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) [腐植土]
26: 25YR4/6 暗褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) [粘土]
27: 25YR4/6 暗褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 腐質3～15cmの層を5～40%ほど含む [粘土]

【北側】

1: 表土 (腐植土)

- 2: 25YR4/6 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) [腐土もしくは粘土]
3: 25YR4/6 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 腐質3～10cmの層を腐植土少し含む [腐植]
4: 25YR4/6 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 腐質は25YR4/8 暗褐色土シルト～中粒砂が30%ほど混ざる
5: 25YR4/6 暗褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) [腐土もしくは粘土]
6: 25YR4/4に似た暗褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 腐質5～7cmの層を40%含む [粘土 (腐土の腐植)?]
7: 25YR4/4に似た暗褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 腐質3cmの層を少量含む [粘土 (腐土の腐植)?]
8: 25YR4/6 暗褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 腐質4cmの層を少量含む [粘土 (腐土の腐植)?]

【西側】

- 1: 表土 (腐植土)
2: 25YR5/4に似た褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 腐質1cmの層を腐植土を含む
3: 25YR4/6 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 腐質4cmの層を腐植土を含む
4: 25YR4/4 暗褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 腐質1～3cmの層を腐植土を含む
5: 25YR3/4に似た暗褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 腐質3cmの層を腐植土を含む [腐植 (腐植土?)]
6: 25YR4/4に似た暗褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 腐質3～4cmの層を腐植土を含む [粘土?]
7: 25YR4/6 暗褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 腐質1～5cmの層を腐植土を含む [粘土?]
8: 25YR4/8 暗褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 腐質1～5cmの層を20%含む [粘土]

第10図 第ヶ崎1号墳 土層図 (1:50)

規模については、遺存状況が悪いため不明な点もあるが、直径（周溝芯々間を推定）10mほどの円墳で、玄室は長さ2.1m×最大幅は1.1mほど、羨道は長さ0.8m、墓道は長さ1.9mを確認した。

(2) 遺物

玄室からは、須恵器杯H蓋（1）・瓶類（2）、土師器甕（3・4）、金銅製耳環（5・6）、羨道からは、須恵器高杯（8）、土師器椀（7）が出土した。

土師器の小型甕（4）は、奥壁付近の床面直上で検出された。散乱していた石材の下で細片化していたが、ほぼ1個体として接合できた。

須恵器の無蓋高杯（8）は、墓道閉塞部の石室破壊時攪乱土と思われる層から出土しているため、元位置を保っているとは考えられないが、完形に近い。杯部の稜の退化具合や、短脚で透かしの無い特徴は猿投窯のH-16号窯出土品に類似する。

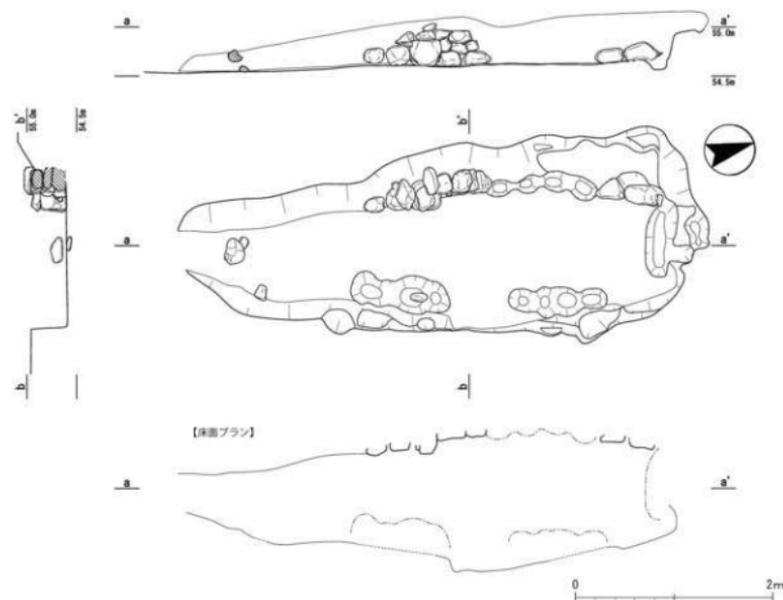
耳環2点（5・6）は、石室内の玄門付近で出土

した。いずれも床面からはかなり浮いており、盗掘坑の埋土に含まれていた。2点ともほぼ同じ大きさで、銅芯に金の薄板を貼って作られたものらしく、環端に薄板の折り返しと思われる痕跡が認められる。残存状態は非常に良い。

この他の石室・羨道出土土器は、細片化したものが多い。

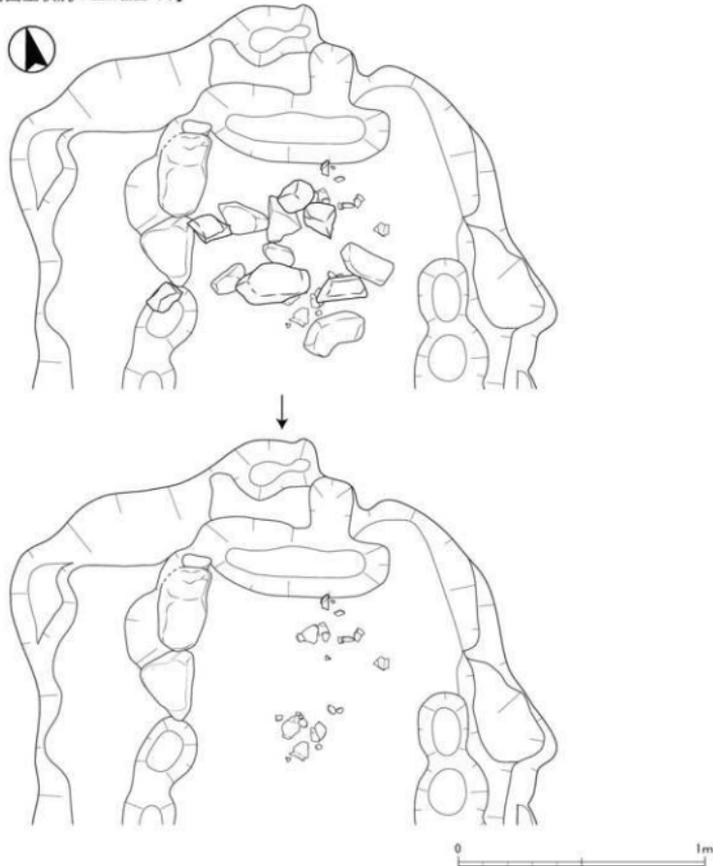
墳頂や周溝からは、須恵器杯類（9・10・14）・高杯（11・12）、土師器甕（13）が、包含層・表土からは、須恵器杯類（15～23）・高杯（24）・甕（25・26）、土師器高杯（27）・甕（28）が出土した。

須恵器杯類には、杯H蓋（15～17）・杯H身（19）・杯蓋g（18）・無台杯（21・22）・杯B（23）などがある。杯Hは、小型品が大半を占めるが、在地窯系の大型品（15・19）を少量含む。17は全体的に丸みを帯びた杯蓋で、形態や胎土の質感から湖西窯産と考えられる。

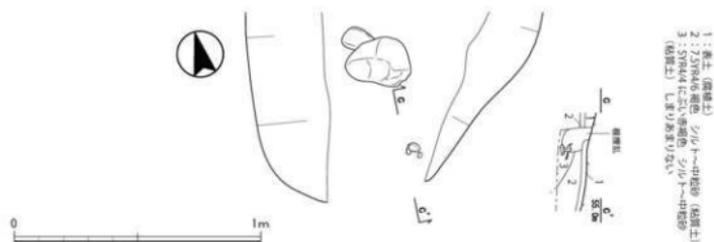


第11図 筆ヶ崎1号墳 石室遺構図（1：50）

【石室内遺物出土状況：土師器類 (4)】



【羨道部遺物出土状況：須恵器高杯 (8)】



- 1 : 黄土 (腐植土)
- 2 : 259846 層位 (砂質土)
- 3 : 259846 層位 (砂質土)
- 4 : 259846 層位 (砂質土)
- 5 : 259846 層位 (砂質土)
- 6 : 259846 層位 (砂質土)
- 7 : 259846 層位 (砂質土)
- 8 : 259846 層位 (砂質土)
- 9 : 259846 層位 (砂質土)
- 10 : 259846 層位 (砂質土)
- 11 : 259846 層位 (砂質土)
- 12 : 259846 層位 (砂質土)
- 13 : 259846 層位 (砂質土)
- 14 : 259846 層位 (砂質土)
- 15 : 259846 層位 (砂質土)
- 16 : 259846 層位 (砂質土)
- 17 : 259846 層位 (砂質土)
- 18 : 259846 層位 (砂質土)
- 19 : 259846 層位 (砂質土)
- 20 : 259846 層位 (砂質土)

第12図 筆ヶ崎1号墳 遺物出土状況図 (1:20)

(3) 小結

盗掘による攪乱がほぼ石室床面にまで及んでいるため、出土位置・層位から副葬品であることが確定できる遺物はない。また、表土や包含層からは時期幅のある遺物が出土しており、古墳の詳細な時期比定を行うことは難しい。しかし、盗掘者が持ち込むとは考え難い耳環2点(5・6)と、破壊された石室石材の下から細片化して出土した土師器小型甕(4)は、本来1号墳に伴うものである可能性が高い。また、多くが細片化している石室・羨道部出土土器も盗掘によって破壊された副葬品の残欠ではないかと思われる。墓道閉塞部の石室破壊時攪乱土と思われる土層から、ほぼ完形を保って出土した須恵器高杯(8)も、元位置を保っていたわけではないが、埋葬時期を検討する際の有力な推定材料ではないかと考えられ、筆ヶ崎3期への位置づけが可能である。

2 筆ヶ崎2号墳 (第13～17・43・44図)

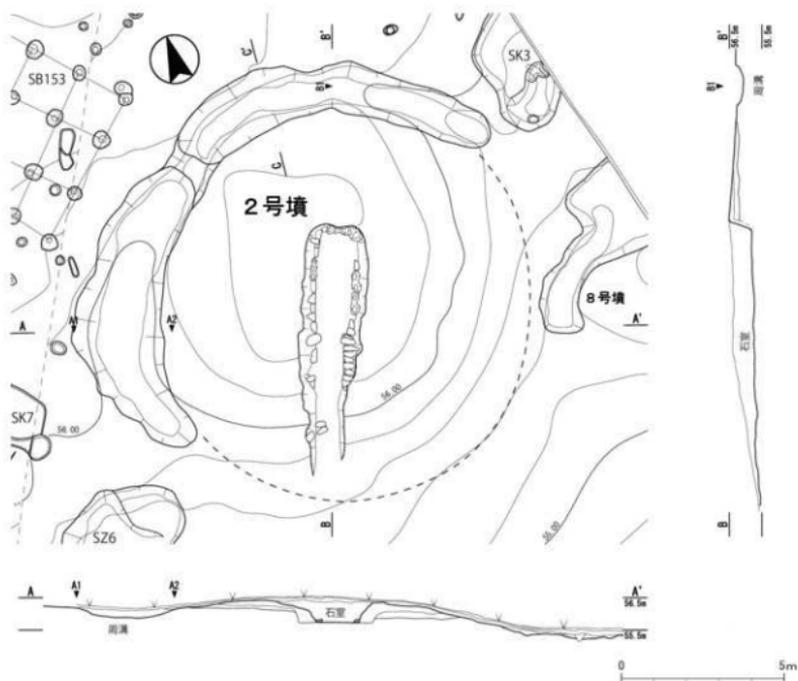
東群のなかでは、南東向き斜面の最も上方に築造されている。調査前には、直径約12m、高さ0.8mほどの小山状を呈していた。

調査により、横穴式石室・墳丘封土・周溝が検出され、須恵器・土師器・鉄製品が出土した。

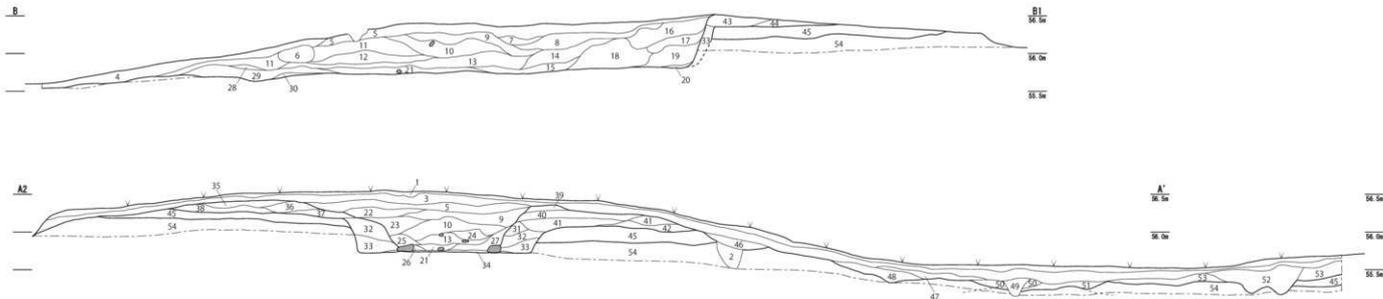
(1) 遺構

周溝は、斜面上方にあたる墳丘の北西側で半円弧状に検出されたが、本来の平面形は、他の古墳と同じように石室開口部のみ途切れる円形とみられる。周溝はかなり明瞭で、最も深いところで40cmほどである。

周溝埋土の中・上層からは、石室石材と思われる礫とともに、須恵器や土師器の破片が多数出土した(第17図)。周溝が完全に埋没していない段階で石室



第13図 筆ヶ崎2号墳 墳丘実測図 (1:150)

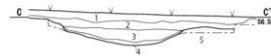


- 1 : 表土 (腐植土)
- 2 : 硬砂乱れ
- 3 : 7.5YR4/3 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
- 4 : 7.5YR4/4 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
- 5 : 5YR4/4 に近い赤褐色 シルト～細粒砂 (部分的に7.5YR4/6 褐色シルト～中粒砂を含む) (粘質土)
- 6 : 7.5YR4/6 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) しまり弱い [硬砂乱れ]
- 7 : 5YR4/8 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
- 8 : 7.5YR4/6 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 部分的に7.5YR4/4 褐色シルト～細粒砂を含む
- 9 : 7.5YR4/6 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
- 10 : 7.5YR4/4 赤褐色 シルト～中粒砂 と 5YR4/6 赤褐色シルト～中粒砂が層状に交互しあう (粘質土) 石灰石を少し含む 直厚 5 ～ 10 cm の礫を少量含む
- 11 : 5YR4/4 に近い赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
- 12 : 7.5YR4/6 赤褐色 シルト～中粒砂 と 7.5YR4/4 褐色シルト～中粒砂が交互しあう (粘質土) 石灰石を含む
- 13 : 7.5YR4/6 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 現状に 5YR4/6 赤褐色シルト～中粒砂を 20 ～ 30%含む
- 14 : 7.5YR4/6 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) ややシラックアツクでありしまり強い
- 15 : 5YR4/4 に近い赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 現状に 7.5YR3/3 暗褐色シルト～細粒砂を 20 ～ 30%含む。ややしまり強い
- 16 : 7.5YR4/6 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 石灰石を多量に含む。しまり強い
- 17 : 5YR4/4 に近い赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
- 18 : 5YR4/8 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 直厚 0.5 cm の 7.5YR3/4 暗褐色シルト～細粒砂ブロックを 3%ほど含む
- 19 : 5YR4/4 に近い赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 現状に 7.5YR3/4 暗褐色シルト～細粒砂を 1 ～ 3%ほど含む。ややしまり強い
- 20 : 5YR4/8 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 直厚 0.5 cm の 7.5YR3/4 暗褐色シルト～細粒砂ブロックを 1 ～ 3%含む
- 21 : 5YR4/8 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 直厚 0.5 cm の 7.5YR4/4 褐色シルト～細粒砂ブロックを 5%ほど含む
- 22 : 5YR4/4 に近い赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
- 23 : 5YR4/6 赤褐色 シルト～中粒砂 (やや粘質土) 直厚 0.5 ～ 1.5 cm の 10YR5/6 黄褐色シルト～細粒砂ブロックを 1 ～ 3%含む。しまり強い

- 24 : 7.5YR4/6 赤褐色 シルト～中粒砂 (やや粘質土) しまり強い
- 25 : 7.5YR4/6 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
- 26 : 5YR4/6 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 直厚 0.5 cm の 5YR4/4 に近い赤褐色シルト～中粒砂ブロックを 3%ほど含む
- 27 : 7.5YR4/6 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 直厚 1 cm の 7.5YR3/4 暗褐色シルト～細粒砂ブロックを少量含む
- [28 ～ 30 : 埋戻土]
- 28 : 5YR4/6 赤褐色 締結～中粒砂 (やや粘質土) しまり強い
- 29 : 7.5YR4/4 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 部分的に直厚 0.5 cm の 7.5YR3/4 暗褐色シルト～細粒砂ブロックを含む。しまり強い
- 30 : 7.5YR4/6 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 部分的に 7.5YR4/6 褐色シルト～中粒砂を量状に含む
- [31 ～ 33 : 石室 埋戻土]
- 31 : 5YR4/8 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 現状に 7.5YR4/6 褐色シルト～中粒砂を 30%ほど含む。しまり強い
- 32 : 5YR4/8 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 現状に 7.5YR4/6 褐色シルト～中粒砂を 10%ほど含む。しまり強い
- 33 : 5YR4/8 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 部分的に 7.5YR4/6 褐色シルト～中粒砂を含む
- 34 : 5YR4/6 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 直厚 1 ～ 2 cm の 7.5YR3/4 暗褐色シルト～細粒砂ブロックを 10 ～ 20%ほど含む。しまり強い [埋戻土 締結地土もしくは粘質土]
- [35 ～ 44 : 盛土]
- 35 : 5YR4/6 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 38 層と対応?
- 36 : 5YR5/8 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 直厚 0.5 ～ 1 cm の 7.5YR4/6 褐色シルト～中粒砂ブロックを 1 ～ 3%含む
- 37 : 5YR4/6 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 現状に 7.5YR4/4 褐色シルト～中粒砂を 20%ほど含む。41 層と対応?
- 38 : 5YR4/4 に近い赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 直厚 2 cm の 7.5YR3/4 暗褐色シルト～細粒砂ブロックを 10 ～ 20%含む
- 39 : 5YR4/6 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 現状に 7.5YR4/4 褐色シルト～中粒砂を 20%ほど含む。35 層と対応?
- 40 : 7.5YR3/4 暗褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 細かい現状に 5YR4/6 赤褐色シルト～中粒砂を 5%ほど含む

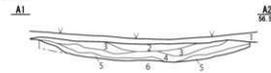
- 41 : 5YR4/8 赤褐色 シルト～中粒砂 と 7.5YR4/6 褐色シルト～中粒砂が 現状に 50%ずつ混じりあう (粘質土) 37 層と対応?
- 42 : 7.5YR4/6 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 直厚 1 cm の 7.5YR3/4 暗褐色シルト～中粒砂ブロックを 1%含む。直厚 0.5 cm の炭化物を少量含む
- 43 : 5YR4/8 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
- 44 : 5YR4/6 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 現状に 7.5YR4/6 褐色シルト～中粒砂を 10 ～ 20%含む
- 45 : 7.5YR3/4 暗褐色シルト～中粒砂 (粘質土) [旧表土]
- 46 : 7.5YR4/6 褐色シルト～中粒砂 (粘質土) 直厚 0.5 ～ 1 cm の 5YR4/4 に近い赤褐色シルト～中粒砂ブロックを 1%含む
- 47 : 5YR4/6 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 部分的に 7.5YR4/6 褐色シルト～中粒砂を量状に含む
- 48 : 7.5YR4/6 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 直厚 1 cm の礫を少量含む [埋戻土または締結土からの表土?]
- 49 : 5YR3/4 暗赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 現状に 5YR3/2 暗赤褐色シルト～中粒砂を 10%含む [埋戻土?]
- 50 : 5YR4/4 に近い赤褐色 シルト～細粒砂 (粘質土) 直厚 2 ～ 5 cm の礫を 40 ～ 50%含む [周溝?]
- 51 : 5YR3/6 暗赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 直厚 2 ～ 5 cm の礫を 40 ～ 50%含む [周溝?]
- 52 : 5YR3/4 暗赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 現状に 5YR3/2 暗赤褐色シルト～中粒砂を含む。直厚 1 ～ 3 cm の礫を少量含む [埋戻土?]
- 53 : 7.5YR4/4 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 直厚 1 cm の礫を少量含む [土]
- 54 : 地山

【北側】



- 1 : 表土 (腐植土)
- 2 : 7.5YR4/6 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
- 3 : 7.5YR4/4 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
- 4 : 5YR4/4 に近い赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
- 5 : 5YR4/6 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)

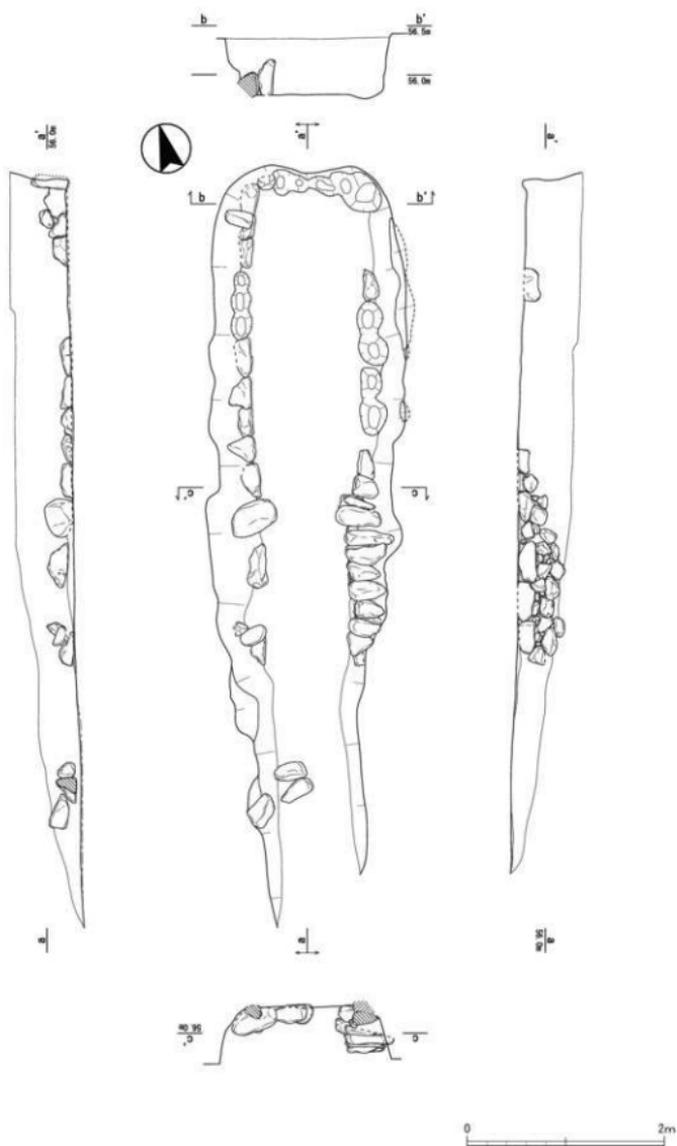
【西側】



- 1 : 表土 (腐植土)
- 2 : 7.5YR4/4 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) [周溝]
- 3 : 7.5YR4/6 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 直厚 5 cm の礫を僅かに含む [周溝]
- 4 : 5YR4/4 に近い赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 直厚 5 cm の礫を僅かに含む [周溝]
- 5 : 5YR4/6 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) [周溝]
- 6 : 5YR4/8 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) [地山]



第14図 筆ヶ崎2号堤 土原図 (1 : 50)

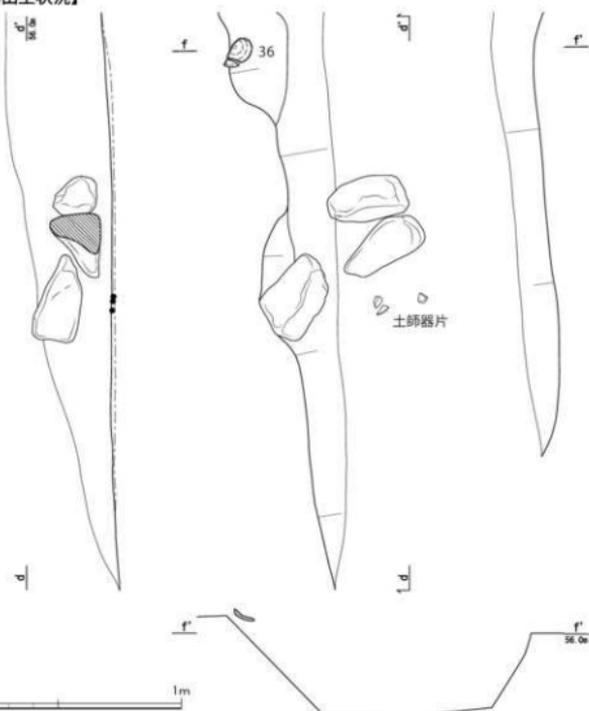


第15図 筆ヶ崎2号墳 石室遺構図 (1 : 50)

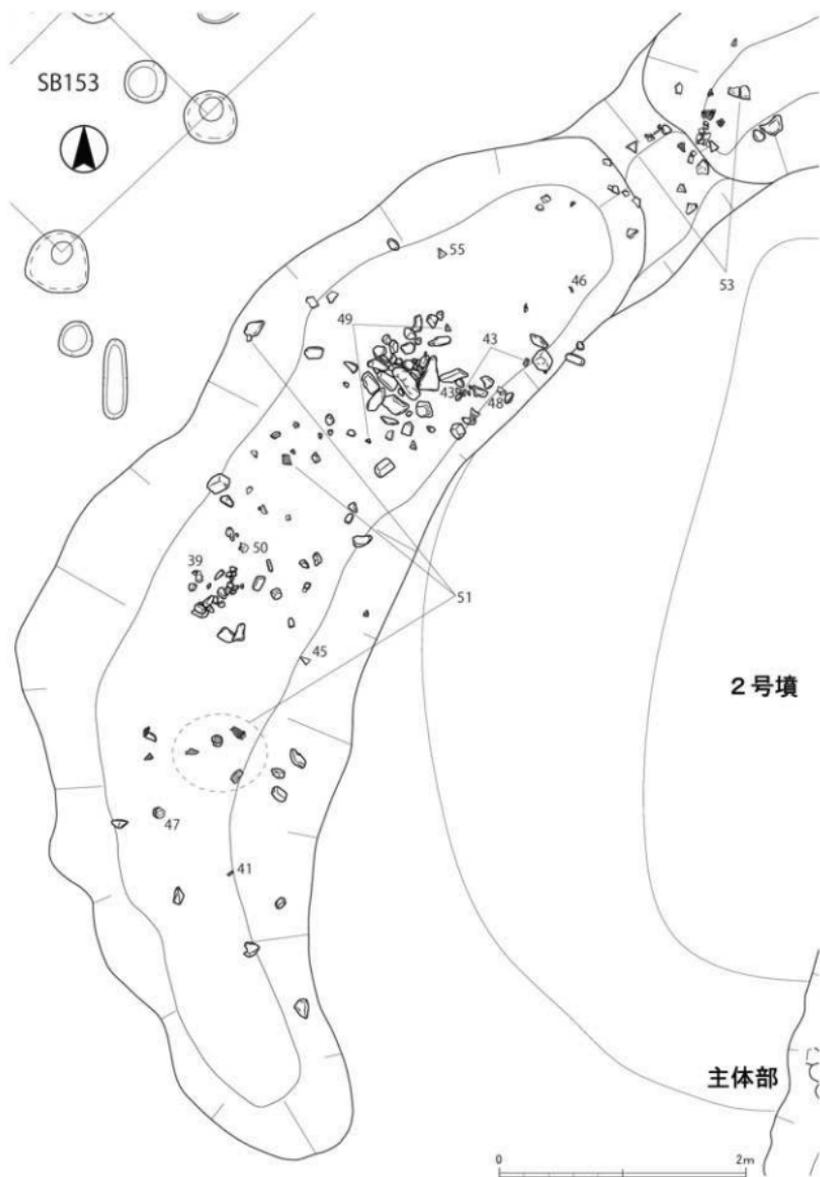
【石室内遺物出土状況】



【羨道部遺物出土状況】



第16図 筆ヶ崎2号墳 石室遺物出土状況図 (1:20)



第17図 筆ヶ崎2号墳 周溝遺物出土状況図 (1:40)

が破壊され、周溝内に石室石材や土器が投棄もしくは集積されたものと考えられ、遺物の多くは元々石室内にあった副葬品である可能性が高い。

墳丘は、地山(第14図B-B1・A2-A' : 54層)・旧表土(45層)の上に封土を盛っており、墓壇は旧表土上面から深さ0.5mほど掘り込まれている。墓壇の最下層から、締まりの良い薄い粘質土層(34層)が検出されており、整地土もしくは貼床的な性格のものではないかと考えられる。石室石材と墓壇の間には、裏込め土(31~33層)が充填されている。封土は、東側では墳丘外周に土手状に土を盛り上げ(41・42層)た後、内側に水平方向の土層を薄く版築風に積み上げている。墳丘中央付近で、封土は厚さ30cmほど残存していた。

石室は大きく破壊されていたが、羨道左側壁の下部は良好に遺存していた。部分的に残された基底石や床面の石材の抜き取り痕とあわせて検討した結果、銅張りの疑似両袖式の横穴式石室であったと考えられた。

壁体には、長径30~50cmほどの川原石の円礫が多く用いられている。最下段は玄室・羨道ともにやや大振りの石材を長軸が石室主軸と並行するように置き、その上には長細い形状の円礫を、長軸が石室主軸に直交するよう小口積みにしている。奥壁については最下段右隅の1石のみしか遺存していなかったが、細長い石材を縦長になるように置いており、側壁とは石材の積み方がやや異なっていた可能性がある。袖石には、大型の石材を基底部に用い、玄門としている。

羨道は、残存する石積みの側壁や抜き取り痕からみて、玄門から1.7mほどで、それよりも外側は素掘りの墓道となる。墓道では、玄門から2.7m付近で礫が検出され、周囲に閉塞土と思われる土層の堆積が確認できた(28~30層)。

規模については、遺存状況が悪いため不明な点もあるが、直径(周溝芯々間)13mほどの円墳で、玄室は長さ3.1m×最大幅は1.1mほど、羨道は長さ1.7m×幅0.8mである。

(2) 遺物

石室からは、須恵器杯類(29~32)・高杯(33)・長頸壺(34)・板状鉄製品(35)、羨道からは須恵器

杯H蓋(36)・フラスコ瓶(37)が出土した。

須恵器高杯(33)と長頸壺(34)は、玄室奥壁付近の床面より完形で出土した。倒立状態で出土した高杯は、脚部に二段二方向の透孔をもつ。口縁が端反る形状の杯部や脚部の特徴は、竊投室のH-15号窯出土品に類似する。横倒し状態で出土した長頸壺は、高台状の脚を持ち、脚には小さな方形の透孔が二方向にあいている。

板状鉄製品(35)は、玄室内の埋土中から出土した。副葬品の一部かもしれないが、製品を特定できなかったため不明である。

須恵器杯H蓋(36)は、残存率が良好(1/2)な在地窯系のもので、岡山6号窯出土品に類似する。

この他の石室・羨道出土土器には、細片化したものが多い。

墳丘や周溝からは、須恵器杯類(38~42・56~58)・高杯(43・44・60)・台付椀(45)・直口壺(46・47)・横瓶(48・49)・壺(50)・平瓶(51)・甕(52~55)などが出土した。須恵器の多くは竊投室系(38~40・44~47など)で、杯H(38・39)はH-16号窯出土品に似る。

包含層・表土からは、須恵器杯類(61)・高杯(62・63)・壺瓶類(64・65)が出土した。65の平瓶は、成形時に円盤閉塞した部分の破片で、内面に半乾燥時に穿孔した空気抜き穴が残る。おそらく周溝出土の51と同一個体であろう。

(3) 小結

竊掘による擾乱がほぼ石室床面にまで及んでいるため、出土位置・層位から副葬品であることが確定できる遺物はない。また、石室内外を問わず時期幅のある遺物が出土しており、古墳の詳細な時期比定を行うことは難しい。しかし、玄室奥壁付近の床面より完形で出土した須恵器高杯(33)と長頸壺(34)は、本来2号墳に伴うものである可能性が高く、埋葬時期を検討する際の有力な材料ではないかと考えられる。岡山6号窯出土品に似た杯H蓋(36)が、これらよりもやや古相を呈することも気になる点ではあるが、1点のみで詳細な出土状態も明らかでないため、ここでは33・34の存在を重視し、古墳への埋葬時期を概ね葦ヶ崎2期と推定しておく。

3 筆ヶ崎3号墳 (第18～20・44図)

中央群の南向き斜面の上方に位置し、南東方向の10号墳とは約2～3m、南方の4号墳とは約5m離れている。調査前には、直径約12～13m、高さ約1.2mの小山状を呈していた。

調査により、横穴式石室・墳丘盛土・周溝が検出され、須恵器・灰軸陶器・輪羽口などが出土した。

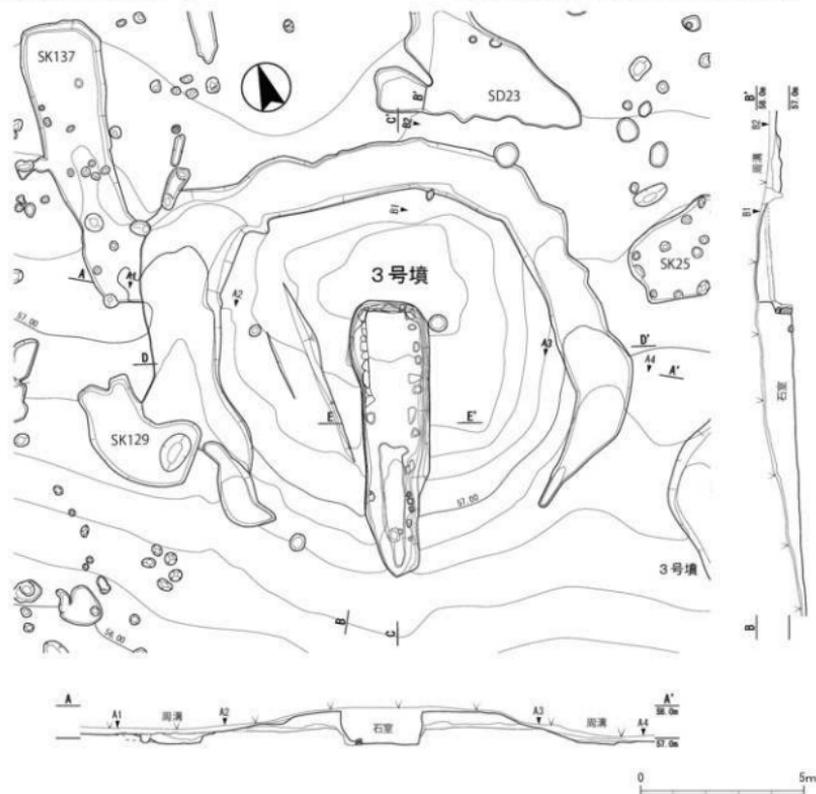
(1) 遺構

周溝は、若干直線的な部分はあるものの、墳丘を囲んで概ね円形に巡っており、石室開口部付近で途切れる。幅や深さは場所により異なるが、断面は、概ね幅広の逆台形を呈する。

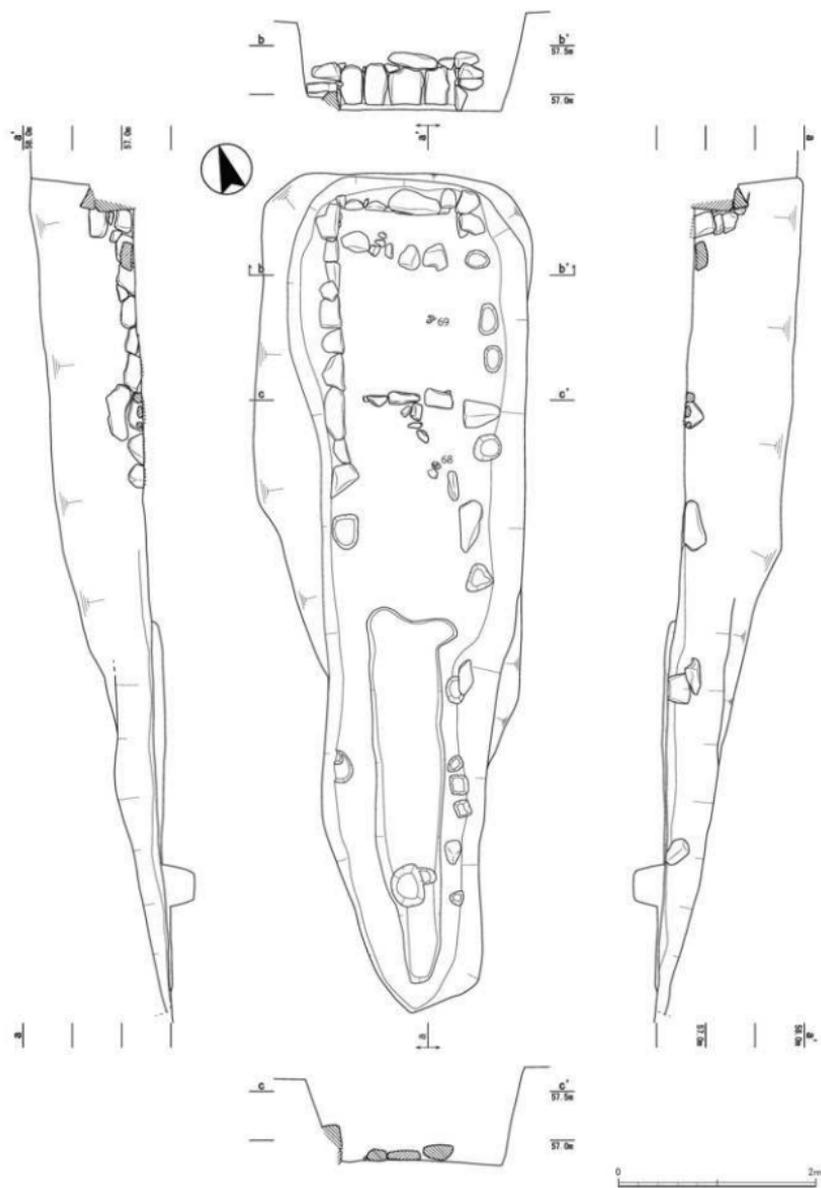
墳丘は、地山(59層)・旧表土(58層)の上に層状に封土を盛っており、墓壇は旧表土上面から掘り込まれている。石室石材と墓壇の間には、裏込め土(19・20・46～48層など)が充填されている。封土は、石室裏側へ擦り付けるように中央から順次外側へと盛り上げられている。盛土は最も厚いところで40cm残存していた。なお、8～13層は、盛土のような互層をなしているため、盗掘後に下へずり落ちた封土とも考えられる。

石室は、大きく破壊されているが、玄室奥壁から右側壁にかけて基底部付近が一部残存しており、横穴式石室と判る。

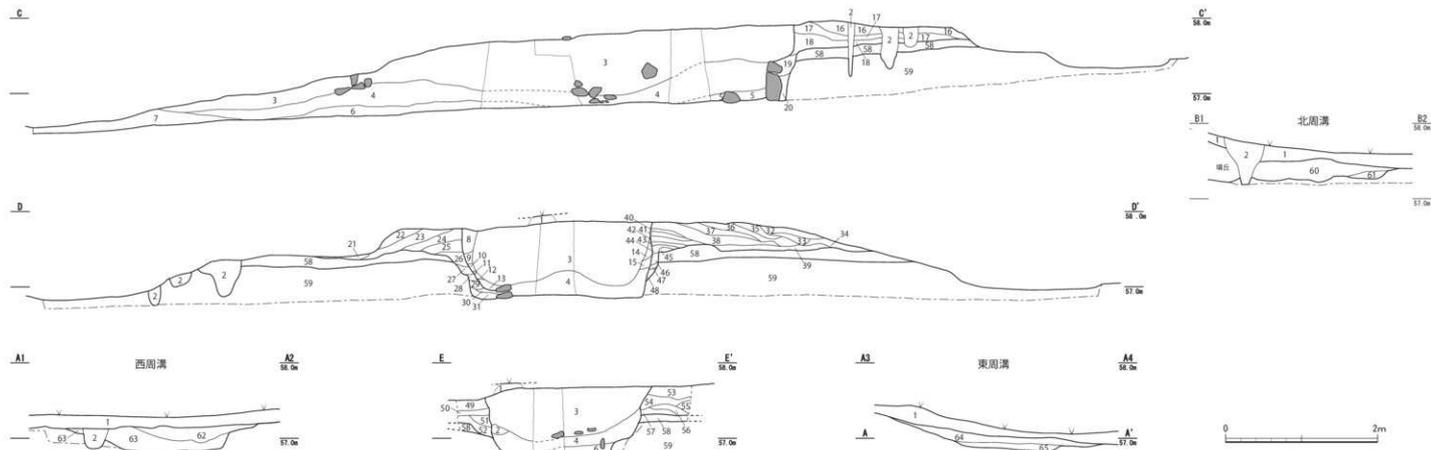
壁体には長径30～40cmほどの川原石を多く用いて



第18図 筆ヶ崎3号墳 墳丘実測図(1:150)



第19图 筆ヶ崎3号墳 石室実測图 (1:50)



- 1: 表土
2: 埋戻土
- 【3～15: 盗掘埋戻土】
3: 75YR4/6 褐色 細砂 (一部細砂) しまりなし 粘質なし
4: 75YR3/4 暗褐色 細砂～細砂砂 しまりなし 粘質中～多し
5: 75YR3/4 暗褐色 細砂 しまりなし 粘質あり
6: 75YR4/4 褐色 細砂～細砂砂 (一部細砂) しまりややあり 粘質あまりなし
7: 75YR4/6 明褐色 細砂～細砂砂 (一部細砂) しまりややあり 粘質あまりなし (古い盗掘時の埋戻土?)
8: 75YR6/6 明褐色 細砂 しまりややあり 粘質ややあり
9: 75YR4/4 褐色 細砂 しまりややあり 粘質ややあり
10: 75YR4/3 褐色 細砂 しまりややあり 粘質中～多し
11: 5YR3/6 暗褐色 (シルト～) 細砂 しまりややあり 粘質あまりなし
12: 75YR4/3 褐色 細砂 しまりややあり 粘質ややあり
13: 5YR3/6 暗褐色 (シルト～) 細砂 しまりややあり 粘質あまりなし
14: 75YR4/6 褐色 細砂 しまりなし 粘質なし
15: 75YR4/4 褐色 細砂 しまりなし 粘質なし
16～21: 22～57: 黄土、黒色粘土
- 16: 75YR3/4 暗褐色 細砂 しまりややあり (75YR4/6 褐色土 極細砂 (一部細砂) しまりややあり 長径2cm以下のブロックを5%含む)
17: 75YR3/4～4/3 暗褐色～褐色 シルト～極細砂 しまりややあり 粘質ややあり
- 18: 75YR3/6～4/6 暗赤褐色～褐色 極細砂 (一部シルト) しまりややあり 粘質あまりなし
19: 75YR3/4 暗褐色 細砂～細砂砂 しまりややあり (75YR4/6 褐色 極細～細砂 しまりややあり 長径1cm以下のブロックを5%含む)
20: 75YR3/4 暗褐色 極細砂 しまりややあり
21: 10YR4/6 褐色 細砂 しまりなし (埋戻土)
22: 75YR4/6 褐色 細砂～細砂砂 しまりややあり
23: 75YR4/6 褐色 細砂～細砂砂 しまりややあり (75YR3/4 暗褐色 極細～細砂 しまりややあり 長径2cm以下のブロックを7%含む)
24: 75YR4/6 褐色土 極細砂 (一部細砂) しまりややあり (75YR3/4 暗褐色 極細砂 しまりややあり 長径1cm以下のブロックを15%含む)
25: 75YR4/6 褐色 細砂～細砂砂 しまりややあり (75YR3/4 暗褐色 極細～細砂 しまりややあり 長径1cm以下のブロックを10%含む)
26: 75YR4/6 褐色 細砂 しまりややあり (75YR3/4 暗褐色 極細砂 しまりややあり 長径1cm以下のブロックを7%含む)
27: 75YR3/4 暗褐色 細砂～細砂砂 しまりややあり
28: 75YR4/6 褐色 細砂～細砂砂 しまりややあり
29: 75YR3/4 暗褐色 シルト～極細砂 しまりややあり (75YR4/6 褐色 極細砂 しまりややあり 長径1cm以下のブロックを10%含む)
30: 75YR4/6 褐色 細砂 しまりややあり
31: 75YR3/4 暗褐色 細砂 しまりややあり (75YR4/6 褐色 極細砂 しまりややあり 長径1cm以下のブロックを5%含む)
32: 75YR3/4 暗褐色 極細砂 (一部シルト) しまりややあり
- 33: 75YR3/4 暗褐色 細砂 しまりややあり (75YR4/6 褐色 極細砂 しまりややあり 長径3cm以下のブロックを5%含む)
34: 75YR4/6 褐色 細砂～細砂砂 しまりややあり (75YR3/4 暗褐色 極細～細砂 しまりややあり 長径3cm以下のブロックを10%含む)
35: 75YR4/6 褐色 細砂～細砂砂 しまりややあり
36: 75YR3/4 暗褐色 細砂 (一部細砂) しまりややあり
37: 75YR4/6 褐色 細砂 しまりややあり
38: 75YR3/4 暗褐色 細砂 (一部細砂) しまりややあり
39: 75YR4/6 褐色 細砂 しまりややあり
40: 75YR4/6 褐色 細砂～細砂砂 しまりややあり
41: 75YR4/6 褐色 細砂 しまりややあり (75YR3/4 暗褐色 極細砂 しまりややあり 長径3cm以下のブロックを5%含む)
42: 75YR4/6 褐色 細砂 しまりややあり
43: 75YR4/6 褐色 細砂 しまりややあり
44: 75YR4/6 褐色 細砂～細砂砂 しまりややあり (75YR3/4 暗褐色 極細～細砂 しまりややあり 長径2cm以下のブロックを7%含む)
45: 75YR3/4 暗褐色 細砂～細砂砂 しまりややあり
46: 75YR3/4 暗褐色 細砂～細砂砂 しまりややあり
47: 75YR4/6 褐色 細砂 しまりややあり
48: 75YR3/4 暗褐色 極細砂 (一部シルト) しまりややあり
49: 75YR4/3 褐色 細砂 しまりややあり 粘質ややあり
50: 5YR3/6 暗褐色 (シルト～) 細砂 しまりややあり 粘質あまりなし
51: 75YR4/3 褐色 細砂 しまりややあり 粘質ややあり
52: 5YR3/6 暗褐色 (シルト～) 細砂 しまりややあり 粘質あまりなし
- 53: 75YR4/3 褐色 細砂 しまりややあり 粘質ややあり
54: 5YR3/6 暗褐色 (シルト～) 細砂 しまりややあり 粘質あまりなし
55: 5YR3/6 暗褐色 (シルト～) 細砂 しまりややあり 粘質あまりなし
56: 75YR4/3 褐色 細砂 しまりややあり 粘質あまりなし
57: 75YR4/3 褐色 細砂 しまりややあり 粘質ややあり
58: 75YR3/2～3/4 暗～暗褐色 (シルト～) 細砂 しまりややあり 粘質ややあり (旧表土)
59: 5YR4/6～4/8 赤褐色土 (シルト～) 細砂 しまりあり 粘質あり (地山) [60～65: 周溝埋戻土]
60: 5YR4/6 赤褐色 シルト～細砂 しまりなし 粘質あり
61: 5YR3/6 暗褐色 細砂 (一部シルト) しまりなし 粘質ややあり
62: 75YR4/4 褐色 細砂 しまりなし 粘質なし
63: 75YR3/4 暗褐色 細砂 しまりなし 粘質なし
64: 75YR4/3 褐色 細砂～細砂砂 しまりなし 粘質なし
65: 75YR3/4 暗褐色 細砂 しまりなし 粘質ややあり

第20図 筆ヶ崎3号墳 土層図 (1:50)

いる。奥壁には大型の石を縦長方向に4列立て並べ、側壁にはやや小振りの石を基底石として横長方向に使用している。

玄室床面では、主軸と直行する方向の石列が1.2mほどの間隔で2列見つかり、南側の石列の西半を中心として南北2.8×0.6mの範囲で、黒っぽい土の分布が認められた。棺台と木棺痕跡と考えられる。

袖石などは全く残っていないが、玄室と羨道の境を考える上では、墓壇下端幅の変化が参考となる。羨道にも石材抜き取り痕とみられる小土坑はあるが、玄室のものよりも小型である。羨道・墓道の床面は中央が凸凹状に一段低くなっており、礫を抜いた痕跡と思われる（写真図版11右中央）。

規模については不明な点も多いが、直径（周溝芯々間）13mほどの円墳で、玄室は長さ4m程度、幅1.2m、石室奥壁から墓道端までは8.1mある。

（2）遺物

石室からは、須恵器杯H（66・67）・無蓋高杯（68・69）、灰釉陶器碗（70）が出土した。

無蓋高杯2点（68・69）は、玄室の床面直上で出土した。どちらもほぼ同じ大きさで、杯部と脚部に二重の沈線が施されている。68の脚部には二段三方透かしが貫通しているが、69には無い。いずれも猿投窯系で、H-15号窯出土品に類似する。

66は焼成不良であるが猿投窯系とみられる杯H蓋、67は在地窯系とみられる杯H身の小片である。

灰釉陶器の碗（70）は、内面に厚く自然釉が降りしているもので、厚い底部や高台の形状は、灰釉陶器の中でもやや古相を示す。

周溝からは須恵器杯蓋b（71）、包含層・表土からは須恵器無台杯（72）・碗？（73）・甕（74）・瓶類（75）、輪羽口（76）などが出土した。

底部に回転糸切り痕の認められる腰の丸い無台杯（72）は、猿投窯のNN 259号窯やK-11号窯などに類品があり、外面のクロコケズリの範囲が狭い杯蓋b（71）も近接した時期の特徴を示す。外面底部に回転糸切り痕を残す75は、全体形状は不明であるが、71・72とほぼ同時期の遺物とすれば、壺Gではないかと思われる。

（3）小結

盗掘による攪乱がほぼ石室床面の全面にまで及ん

でいるため、出土位置・層位から副葬品であることが確定できる遺物はない。また、表土や包含層からは時期幅のある遺物が出土しており、古墳の詳細な時期比定を行うことは難しい。

しかし、玄室の床面より完形に近い状態で出土した須恵器高杯2点（68・69）は、本来3号墳に伴うものである可能性が高く、これを重視するならば、埋葬時期は概ね筆ヶ崎2期ではないかと考えられる。

また、石室内の埋土から出土した灰釉陶器（70）は、包含層・表土から出土した須恵器（72・75）とともに筆ヶ崎5期への位置づけが可能で、この年代観は、盗掘の時期を示している可能性がある。

4 筆ヶ崎4号墳（第21～24・45図）

中央群の南向き斜面の下位に位置し、北東方向の10号墳とは約4m、北方の3号墳とは約5m離れている。調査前には、直径約12～13m、高さ約1.5mの小山状を呈していたが、中央よりもやや西側に溝状の凹みが認められた。

調査により、横穴式石室・墳丘盛土・周溝が検出され、耳環2点・須恵器・土師器が出土した。

（1）遺構

周溝は、墳丘を囲んで均整の取れた円形に巡っており、石室開口部付近で途切れる。斜面上方に当たる北半では幅2.8～3.0m、深さ30cm程あるが、南側では急激に細くなる。断面は概ね幅広の逆台形を呈している。

墳丘は、地山（71層）・田表土（70層）の上に層状に封土を盛っており、墓壇は田表土上面から掘り込まれている。石室石材と墓壇の間には、裏込め土（26～33・56～61層）が充填されている。封土は、石室裏側へ敷り付けるように中央部から順次外側へ盛り上げている。盛土は墓壇脇の最も厚いところで25cm残存していた。

石室は、大きく破壊されているが、玄室の南端付近の両側壁が部分的に残っていた。床面の石材抜き取り痕を合わせ検討し、横穴式石室と判断した。

壁体には長径30～40cmほどの川原石が多く用いられている。側壁基底部には長径40cmほどの石を壁面に沿って横長方向に配し、二段目以上は長辺30cmほどの横長の石を小口積みになっている。袖石としては、

高さ50cmもある縦長の立柱石を用いて玄門を形成している。

立柱石の外側に石材は残っていないが、床面で検出した小土坑を抜き取り痕とみれば、玄門から1.3mほどは側壁を石積みとした羨道が設けられていた可能性がある。

規模については、遺存状況が悪いため不明な点も多いが、直径(周溝芯々間)13mほどの円墳で、玄室は長さ5.2m×幅0.9~1.1mで、玄門側よりも奥壁側が幅広い。

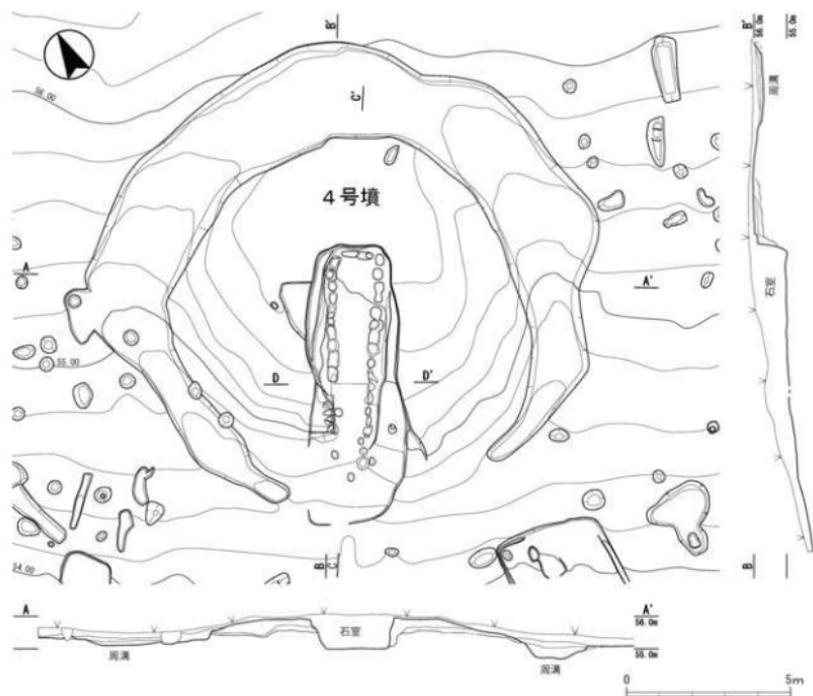
なお、立柱石脇の墓壇外の攪乱坑床面に被熱痕跡が認められ、羨道の右側壁に相当する位置からは、多くの石が乱れた状態で(写真図版13左下)、そこから碗型鍛冶滓(769:写真図版94)が出土した。羨道

付近の石は、閉塞石や石室石材に由来するものとも考えられるが、鍛冶などに関連して改変されて原位置を保っていないと判断した。

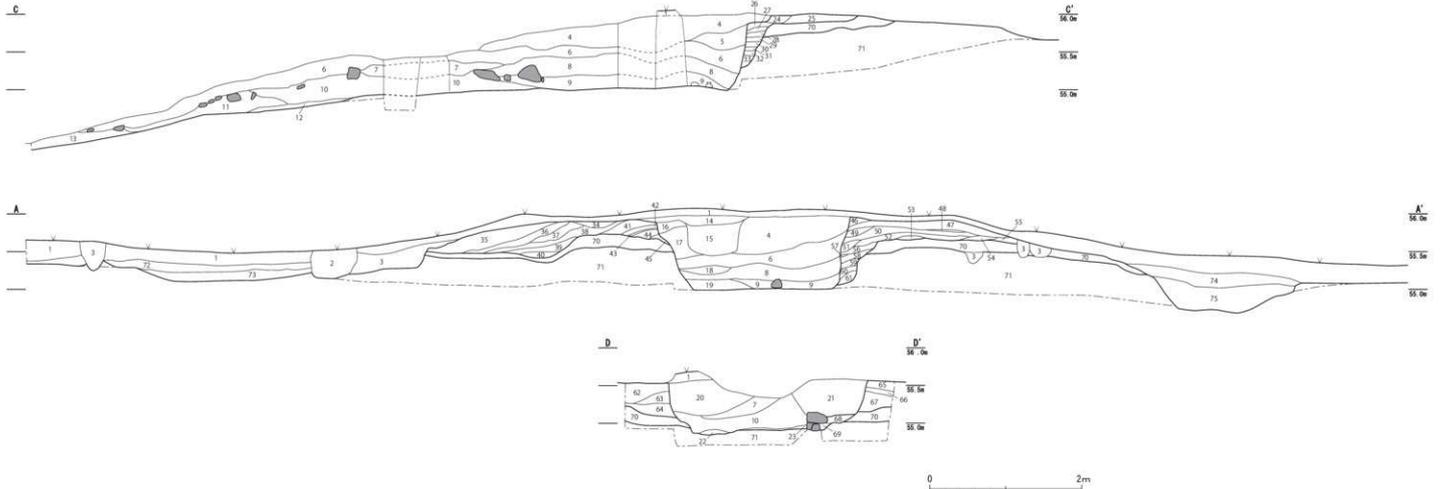
(2) 遺物

石室からは、須恵器杯H(77~82)・無蓋高杯(83)・甕(84)・平瓶(85)、土師器甕(86)、金銅製耳環(87・88)が出土した。

このうち須恵器杯H蓋(77・79)・無蓋高杯(83)・甕(84)・平瓶(85)は玄室奥壁付近、耳環(87)、須恵器杯H蓋(78)は玄室中央部の床面近くから出土した。盗掘坑が石室床面にまで達しているため、厳密に原位置とは断定できないが、いずれもほぼ完形品である。埋土から出土した他の須恵器(80~82)も残存状態は良好で、ほぼ同時期のものと考えられ



第21図 筆ヶ崎4号墳 墳丘実測図(1:150)



- 1 : 表土
- 2 : 埋
- 3 : 埋雑乱
- 4 : 7.5YR4/6 褐色 礫層-細粒砂 しまりなし 粘質なし
- 5 : 10YR3/3 暗褐色 細粒砂 しまりなし 粘質なし
- 6 : 7.5YR4/4 褐色 細粒砂 しまりなし 粘質なし
- 7 : 10YR4/3 に近い黄褐色 礫層砂 しまりなし 粘質なし
- 8 : 10YR4/4 褐色 礫層-細粒砂 しまりなし 粘質ややあり
- 9 : 7.5YR4/6 褐色 礫層-細粒砂 しまりなし 粘質ややあり
- 10 : 10YR3/4 暗褐色 細粒砂 (一部礫) しまりなし 粘質ややあり
- 11 : 7.5YR3/4 暗褐色 細粒砂 しまりややあり 粘質ややあり
- 12 : 7.5YR4/6 褐色 細粒砂 (一部礫層砂) しまりややあり 粘質なし
- 13 : 7.5YR5/6 明褐色 細粒砂 しまりあり 粘質なし
- 14 : 10YR5/4 に近い黄褐色 細粒砂 しまりなし 粘質なし
- 15 : 10YR4/3 に近い黄褐色 細粒砂 しまりなし 粘質なし
- 16 : 10YR4/6 褐色 細粒砂 しまりなし 粘質なし
- 17 : 10YR5/6 黄褐色 細粒砂 しまりなし 粘質ややあり
- 18 : 10YR5/6 黄褐色 細粒砂 しまりなし 粘質ややあり
- 19 : 7.5YR4/6 褐色 細粒砂 しまりなし 粘質ややあり
- 20 : 10YR4/6 褐色 細粒砂 しまりなし 粘質なし
- 21 : 7.5YR4/4 褐色 細粒砂 しまりなし 粘質なし
- 22 : 7.5YR4/6 褐色 細粒砂 しまりなし 粘質あり
- 23 : 7.5YR5/6 明褐色 細粒砂 しまりなし 粘質ややあり

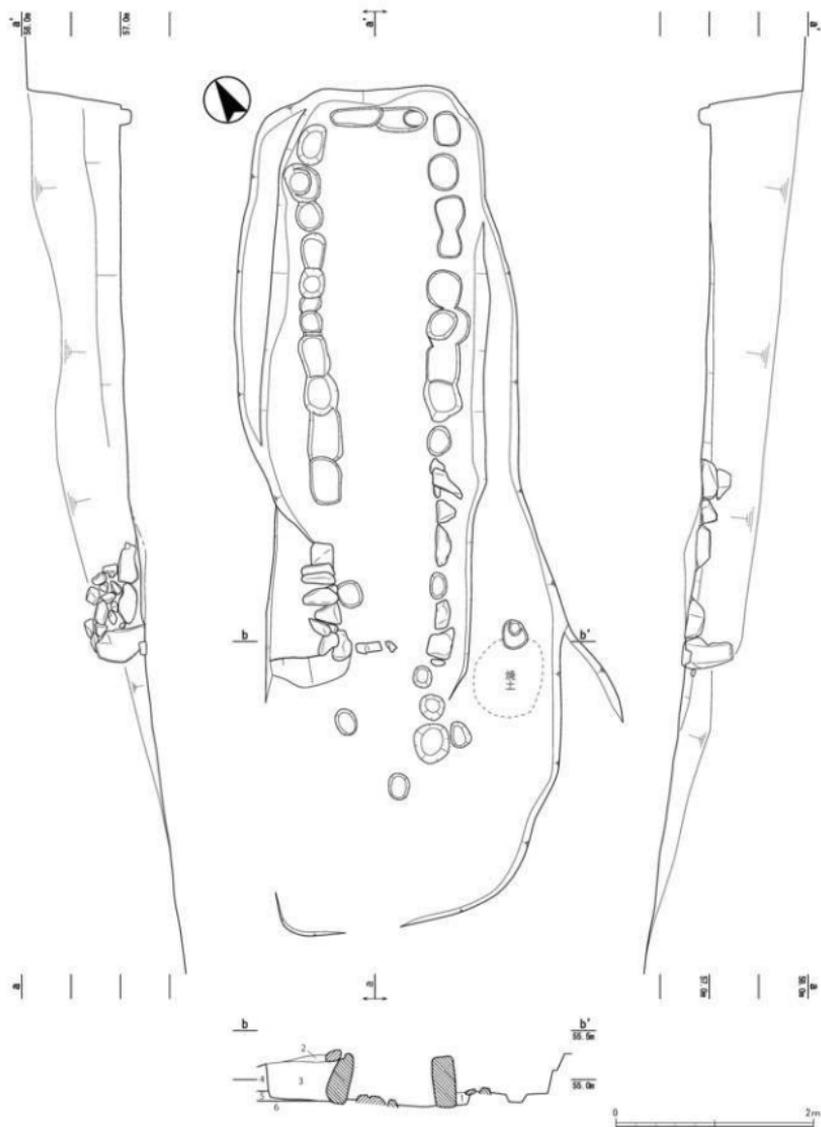
【24～69：盛土・塚込跡土】

- 24 : 7.5YR3/4 暗褐色 礫層-細粒砂 しまりややあり
- 25 : 7.5YR4/4 褐色 細粒砂 しまりややあり
- 26 : 7.5YR4/6 褐色 細粒砂 しまりややあり
- 27 : 7.5YR3/4 暗褐色 細粒砂 しまりややあり
- 28 : 7.5YR4/6 褐色 細粒砂 しまりややあり
- 29 : 7.5YR3/4 暗褐色 細粒砂 しまりややあり
- 30 : 7.5YR4/6 褐色 細粒砂 しまりややあり
- 31 : 7.5YR4/4 褐色 礫層-細粒砂 しまりややあり
- 32 : 7.5YR4/4 褐色 細粒砂 しまりややあり
- 33 : 7.5YR3/4 暗褐色 細粒砂 しまりややあり
- 34 : 10YR4/3 に近い黄褐色 細粒砂 しまりなし [現代埋乱]
- 35 : 7.5YR4/6 褐色 細粒砂 しまりややあり
- 36 : 7.5YR4/4 褐色 細粒砂 しまりややあり
- 37 : 7.5YR4/6 褐色 細粒砂 しまりややあり
- 38 : 7.5YR4/4 褐色 細粒砂 しまりややあり
- 39 : 5YR4/6 赤褐色 シルト-礫層砂 しまりややあり
- 40 : 5YR4/4 に近い赤褐色 シルト-礫層砂 しまりややあり
- 41 : 7.5YR4/6 褐色 細粒砂 しまりややあり
- 42 : 7.5YR4/4 褐色 細粒砂 しまりあり 粘質ややあり
- 43 : 10YR4/6 褐色 細粒砂 しまりややあり 粘質ややあり
- 44 : 7.5YR3/4 暗褐色 細粒砂 しまりややあり 粘質ややあり
- 45 : 7.5YR4/4 褐色 細粒砂 しまりあり 粘質ややあり

- 46 : 10YR4/5 褐色 細粒砂 しまりややあり 粘質ややあり
- 47 : 7.5YR3/4 暗褐色 細粒砂 しまりややあり 粘質ややあり
- 48 : 7.5YR4/6 褐色 細粒砂 しまりややあり
- 49 : 7.5YR3/4 暗褐色 細粒砂 しまりあり 粘質ややあり
- 50 : 7.5YR3/4 暗褐色 細粒砂 しまりややあり 粘質ややあり
- 51 : 10YR4/6 褐色 細粒砂 しまりややあり 粘質ややあり
- 52 : 7.5YR4/4 褐色 細粒砂 しまりあり 粘質ややあり
- 53 : 7.5YR3/4 暗褐色 細粒砂 しまりややあり (田表土の土質に近い)
- 54 : 7.5YR4/4 褐色 礫層-細粒砂 しまりややあり
- 55 : 7.5YR4/6 褐色 礫層-細粒砂 しまりややあり
- 56 : 7.5YR3/4 暗褐色 細粒砂 (一部細粒砂) しまりややあり
- 57 : 7.5YR4/6 褐色 細粒砂 しまりややあり
- 58 : 10YR3/4 暗褐色 細粒砂 しまりややあり 粘質ややあり
- 59 : 7.5YR3/4 暗褐色 細粒砂 しまりややあり 粘質ややあり
- 60 : 10YR4/6 褐色 細粒砂 しまりややあり 粘質ややあり
- 61 : 7.5YR3/4 暗褐色 細粒砂 しまりややあり 粘質ややあり
- 62 : 7.5YR5/6 明褐色 細粒砂 しまりなし 粘質ややあり
- 63 : 7.5YR5/6 明褐色 細粒砂 しまりなし 粘質ややあり
- 64 : 7.5YR4/6 褐色 礫層-細粒砂 しまりややあり (上面に薄く 7.5YR3/4 暗褐色砂あり)
- 65 : 7.5YR4/6 褐色 礫層 (一部礫) しまりややあり
- 66 : 7.5YR5/6 明褐色 細粒砂 しまりなし 粘質ややあり
- 67 : 7.5YR4/6 褐色土 礫層-細粒砂 しまりややあり

- 68 : 7.5YR4/6 褐色 細粒砂 しまりややあり
 - 69 : 7.5YR4/6 褐色 細粒砂 しまりややあり
 - 70 : 7.5YR2/2 黄褐色 シルト-礫層砂 しまりややあり 粘質あり [田表土]
 - 71 : 5YR4/6 ~ 7.5YR5/6 赤褐-明褐色 シルト-礫層砂 しまりあり 粘質あり [地土]
 - 72 : 10YR4/6 褐色 礫層-細粒砂 しまりなし 粘質なし
- 【73～75：周溝埋土】
- 73 : 7.5YR5/6 明褐色 細粒砂 しまりなし 粘質ややあり (厚さ 10cm以下の礫層 5%含む)
 - 74 : 7.5YR3/4 暗褐色 細粒砂 (一部シルト) しまりなし 粘質ややあり
 - 75 : 7.5YR5/6 明褐色 礫層-細粒砂 (一部シルト) (厚さ 10cm以下の礫層 10%含む)

第22図 筆ヶ崎4号墳 土層図 (1 : 50)



- | | |
|---------------------------------|---|
| 1 : 7.SYR4/6 褐色土 極細 しまりややあり | 4 : 7.SYR3/4 暗褐色土 極細粒砂 しまりややあり |
| 2 : 7.SYR4/4 褐色土 極細～細粒砂 しまりややあり | 5 : 7.SYR3/2 黄褐色土 シルト～極細 しまりややあり 粘質あり 【旧表土】 |
| 3 : 7.SYR3/4 暗褐色土 極細粒砂 しまりややあり | 6 : 5YR4/5 赤褐色土 シルト～極細 しまりあり 【地山】 |

第23図 筆ヶ崎4号墳 石室遺構図 (1 : 50)

る。

須恵器杯H蓋は、77・78が猿投窯系、79・80が在地窯系で、稜やロクロケズリ調整の有無など、形態や調整の違いはあるが、口径はほぼ等しい。杯身81・82は猿投窯系であるが、82に比べ81は口径がやや小さく、口縁部の立ち上がりが内傾している点に若干新しい要素を見て取ることもできる。猿投窯系須恵器は1-101号窯、在地窯系須恵器は西ヶ谷2号窯出土品に類似する。

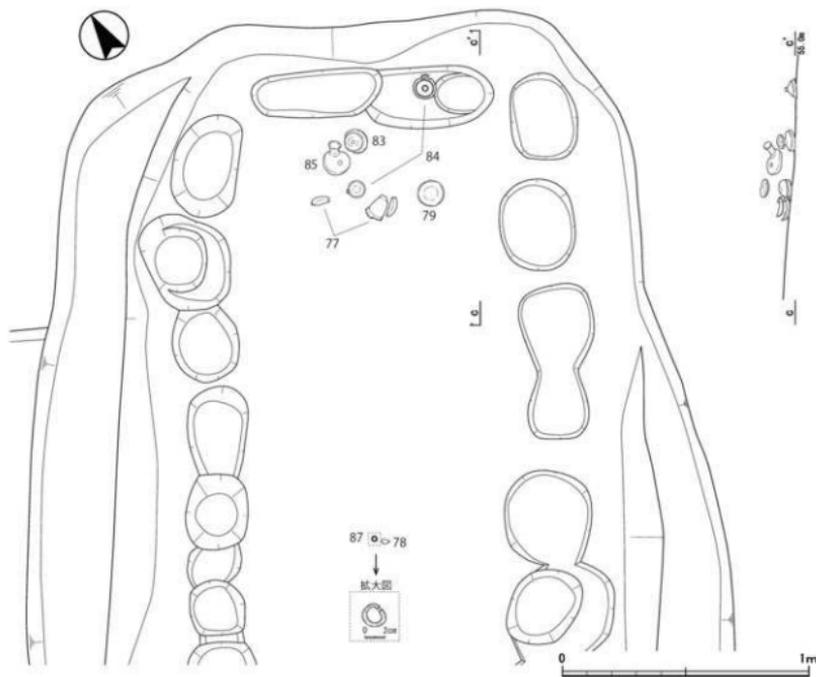
85は湖西窯産とみられる平瓶で、体部上半にはカキ目が施され、その中央には浮文1個が貼り付けられている。

耳環は、87が幅2.4cmであるのに対し、88は幅1.9cmと著しく小型で、断面の太さも異なるため、一対とはならない。

周溝からは須恵器無台杯(89)、包含層からは須恵器杯蓋b(90)などが出土した。

(3) 小結

竈掘による擾乱がほぼ石室床面の全面に及んでいるため、出土位置・層位から副葬品であることが確定できる遺物はない。しかし、竈掘者が持ち込むとは考え難い耳環(87)や、そのすぐ脇の玄室床面近くから出土した須恵器杯蓋(78)、玄室奥壁付近の床面近くからまとまって出土した須恵器の完形品5点(77・79・83~85)は本来4号墳に伴うものである可能性が高い。また、埋土からの出土ではあるが、残存状態が良く、床面直上出土の杯H蓋(77・78)と対になりそうな須恵器杯H身(81・82)についても、埋葬時期を検討する際の有力な材料と考えることができる。在地窯系須恵器では筆ヶ崎3期と4期の中



第24図 筆ヶ崎4号墳 遺物出土状況図(1:20)

間的様相を示すが、量の多い猿投室系杯Hを重視し、ここは3期に位置づけておく。

5 筆ヶ崎5号墳 (第25・28・45・46図)

西群の南西向き斜面の中位東側に位置し、北西方向の6号墳とは1.5m、南西方向の7号墳とは約3m離れている。調査前には、直径約14m、高さ約1.2mの小山状を呈していた。

調査により、横穴式石室・墳丘封土・周溝が検出され、耳環1点・須恵器・土師器が出土した。

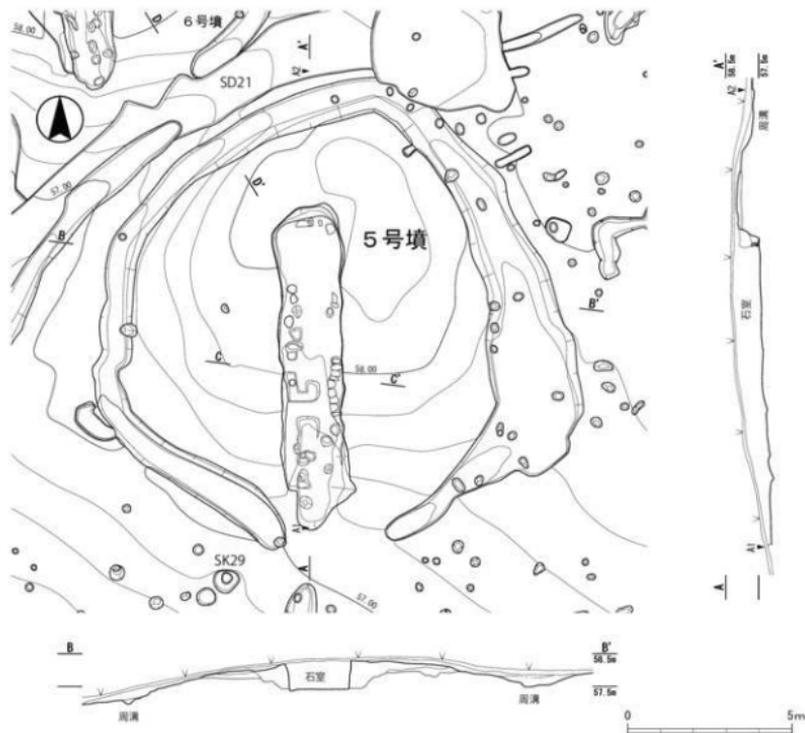
(1) 遺構

周溝は、北側東寄りにやや外側へ突出気味の部分もあるが、墳丘を囲んで概ね円形に巡っており、石室開口部付近で途切れる。幅1.0～1.5m程度で、南

東部のみ幅2.7mにまで広がる。断面は、西側でV字形を呈する以外は、幅広の逆台形である。深さは概ね10cmであるが、東側は部分的に深い。

墳丘は、地山(70層)・旧表土(69層)の上に層状に封土を盛っており、墓壇は旧表土上面から掘り込まれている。石室石材と墓壇の間には、裏込め土(26・27・32～39・47～52層など)が充填されている。封土は、石室裏側へ擦り付けるように中央から盛り上げられており、墳丘中央付近で厚さ30cmほど残存していた。

石室は、大きく破壊されているが、玄室の奥壁や側壁のごく一部と、玄門付近の左側壁が残存しており、横穴式石室と判る。石室の平面形については、判然としないが、石室石材の抜き取り痕とみられる小



第25図 筆ヶ崎5号墳 墳丘実測図 (1:150)

土坑の配列や墓壇の形状などをあわせて検討すると、右片袖式ではなかったかと考えられた。

壁体には長径30～40cmほどの川原石が多く用いられている。奥壁と側壁の基底部には長径40cmほどの横長の石の長辺を壁面とし、二段目以上は長辺30cmほどの横長の石の小口を壁面とする。玄門には、高さ40cmの石材が立柱状に据えられていた。

羨道は、玄門から1.1mまでは側壁が残るが、それよりも外側の床面にある小土坑が抜き取り痕であるか否かは、判然としなない。

石室内の埋土は、ほぼ全て盗掘後に堆積したもので、A1-A2縦断面の土層図作成時には、最下層(9層)を除いてほぼ単一の土層(7層)の堆積と捉えていたが、B-B'横断面の土層観察を通して、東西で異なることが判明した。石室内に落ち込んでいた多数の石材に阻まれ、土層観察を十分に行えなかったため、縦断面図と横断面図に若干の不整合が生じ、土層の対応関係には一部推測(13層=17層、14層=18層)を含むが、埋土の堆積過程は概ね次のように復元できる。

まず、石室内に土砂の堆積が殆どない状態で、奥壁と左(東)側壁の一部を除き大半の石材が基底部まで抜き取られた(一次盗掘)後、一旦埋没したが(13～18・20～22層)、概ね石室の主軸に沿う形で東半部に攪乱坑が掘りこまれ(二次盗掘)、境内には改めて12・19層が堆積した。一次盗掘後の堆積土は16層がやや黒ずんでいるものの、基本的には人為的な埋め立てを思わせる地山質の粘質土であり、埋め立ては一次盗掘による石材の抜き取り直後に行われている可能性が高い。

石室内からは、原位置を保っていない状態の石材が大量に出土したが、一次盗掘時に取り残したとみられる床面近くの石材が小振りであるのに対して、石室床面から30cmほど遊離した状態で出土した石材には比較的大型のものが目立つ。後者のうち、右側壁の奥壁寄りの一群は一次盗掘後、二次盗掘前の堆積土からの出土であることが確実視され、左側壁沿いから石材の出土がほとんどないのは、二次盗掘によって持ち去られたためと考えられる。これに対して、玄門側の左側壁脇から出土した一群については、同様の取り残しとの解釈が可能である一方、出土位置・

状態から、残存していた左側壁の上部が二次盗掘坑の底に倒れ込んだものとも考えられ、奥壁寄りの一群とは埋没時期や性格を異にしている可能性がある。残念ながら、土層断面の観察からは、いずれの解釈が妥当であるのか判断は困難であった。

規模については不明な点も多いが、直径(周溝芯々間)約13mの円墳で、玄室は長さ4.8m×幅1.0mほど、羨道は長さ1.1mもしくはそれ以上、墓壇の長さは9.9mである。

(2) 遺物

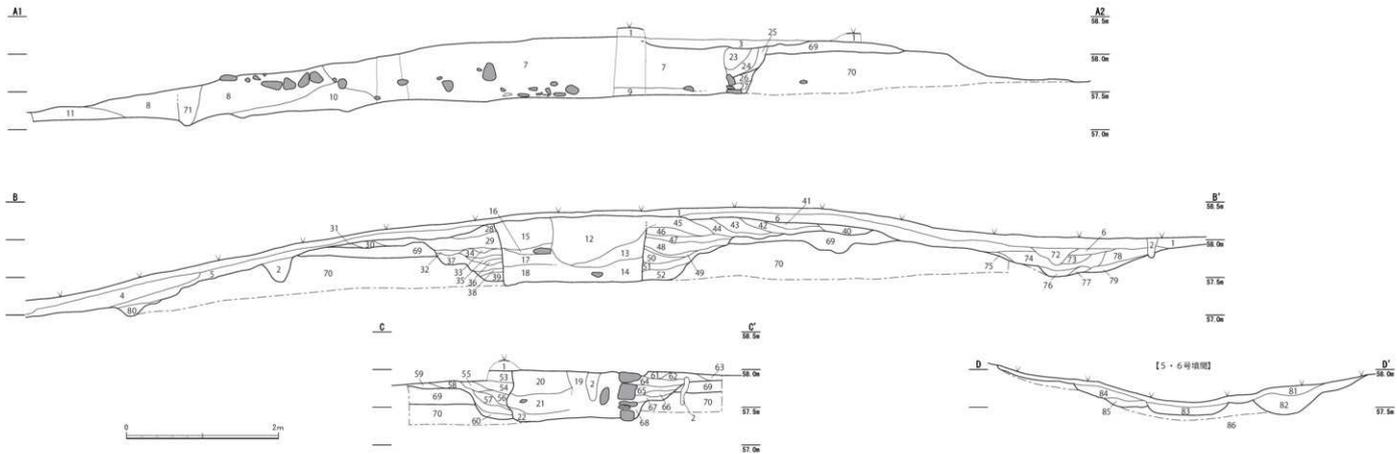
石室からは、須恵器の杯H(91-94)・台付椀(95)・杯蓋b(96)・高杯(97)・壺瓶類(98)・甕(99)・土師器鉢(100)・甕(101)・把手(102)、金銅製耳環(103)が出土した。

須恵器杯H蓋(92)・杯H身(93・94)・高杯(97)、耳環(103)は床面直上で出土した。このうち、玄室中央付近には耳環と須恵器杯H(92・93)が集中していた。耳環は、銅芯に金の薄板を貼ったものであろうが、腐食が進み、残存状態は悪い。須恵器杯H(92・93)は、猿投窯系の焼成不良品で、破面が劣化して接合できない破片が多いが、ほぼ一個体分出土している。須恵器杯H身(94)は右側壁付近から天地逆転した状態で出土した完形品である。奥壁付近で出土した高杯(97)は脚部のみ完形で、二段二方透かしが貫通している。床面直上出土の須恵器はいずれも猿投窯系で、H-15号窯出土品に類似する。

須恵器杯蓋b(96)と土師器鉢(100)は、倒壊したともみられる側壁石材の直下から出土した。96は、やや焼成不良の完形品で、鈕は扁平な擬宝珠状、外面ヘラケズリ調整の範囲は広い。猿投窯I-17号窯や尾北窯S-112号窯出土品に類似する。100は土師器の平底の鉢で、口縁部が僅かに外反し、器壁は厚い。

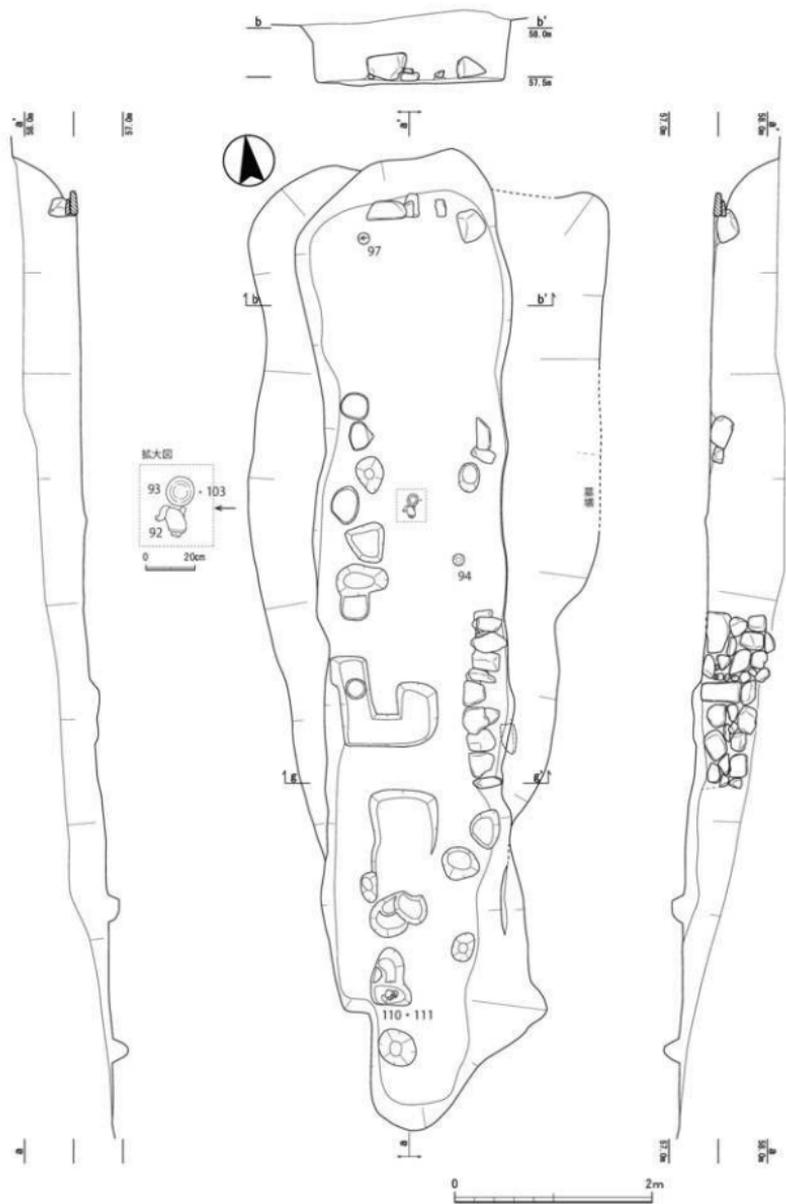
石室開口部近くにある小土坑からは、須恵器高杯(111)・台付椀(110)が出土した。111は、杯部に退化した二重沈線、脚部に二段二方透かしが施されているが、上段は貫通しておらず、下段も透かしの端がバリ状に残る。I-101号窯出土品に類似する。

周溝からは須恵器杯H身(104・105)・甕(106)、土師器甕(107～109)、表土からは須恵器無台杯(112)・杯B(113)などが出土した。このうち、104

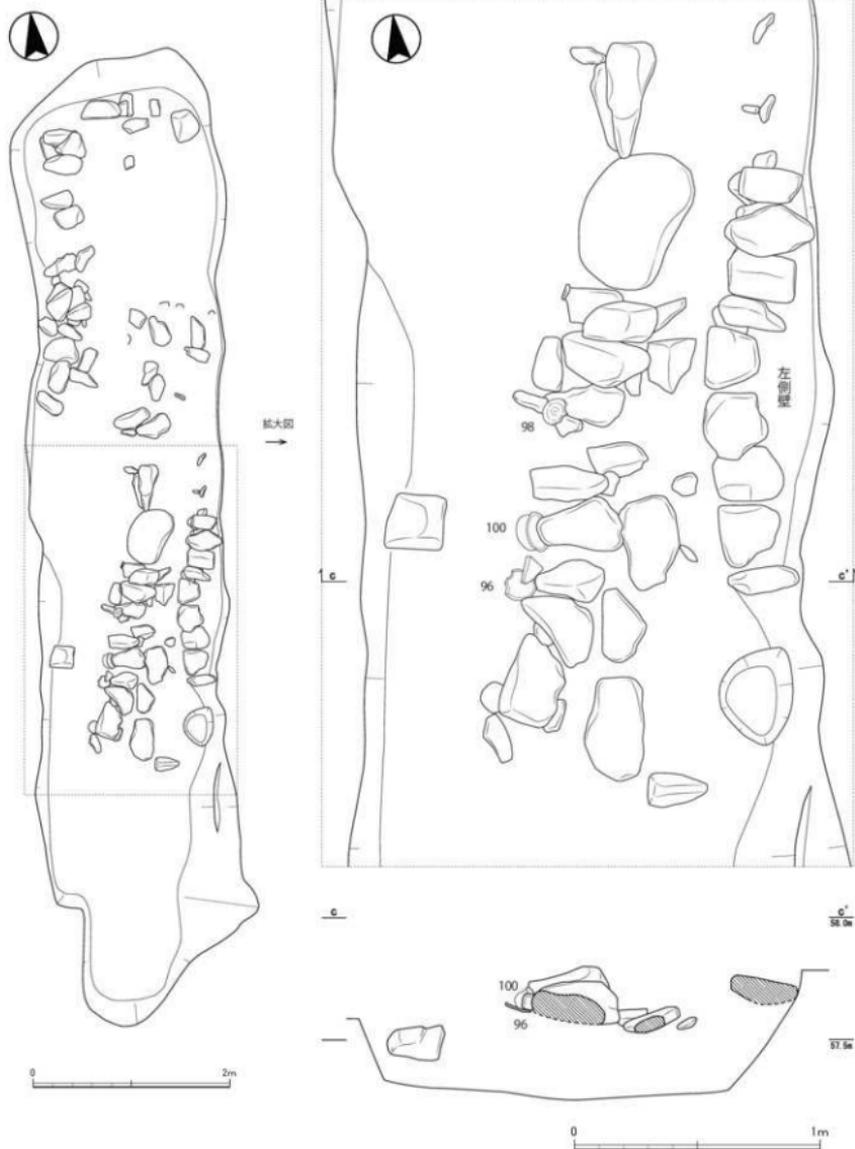


- 1 : 表土
 2 : 埋戻土
 3 : 75YR4/6 褐色粘質土
 4 : 75YR4/4 褐色粘質土
 5 : 75YR4/4 褐色土 [流出土]
 6 : 75YR4/4 褐色土 [流出土]
 7 ~ 25 : 遊積礫石と石置埋土
 7 : 75YR4/6 褐色粘質土
 8 : 75YR4/4 褐色粘質土 (9層より深い)
 9 : 75YR4/4 褐色粘質土
 10 : 75YR4/4 褐色粘質土 (8層より深く、7層より深い)
 11 : 75YR4/4 褐色粘質土 (9層より深い)
 12 : 75YR4/6 褐色粘質土
 13 : 75YR4/4 褐色粘質土
 14 : 75YR4/6 褐色粘質土
 15 : 75YR4/6 褐色粘質土 (12層に似る)
 16 : 75YR3/4 暗褐色粘質土
 17 : 75YR4/6 褐色粘質土 (18層より毛氈にやや明るい)
 18 : 75YR4/6 褐色粘質土
 19 : 75YR4/6 褐色粘質土
 20 : 75YR4/6 褐色粘質土
 21 : 75YR4/4 褐色粘質土 (21層より深い)
 22 : 75YR4/4 褐色粘質土
 23 : 75YR4/4 褐色粘質土 (23・25層よりやや明るい)
 24 : 75YR4/4 褐色粘質土
 25 : 75YR4/4 褐色粘質土
 26 ~ 68 : 表土・裏土
 26 : 75YR4/6 褐色シルト～粘細砂 しまりやあり
 27 : 75YR5/6 暗褐色 粘細砂 しまりやあり
 28 : 75YR4/6 褐色 粘細～粘細砂 しまりやあり
 29 : 75YR4/6 褐色 粘細～粘細砂 しまりやあり (75YR3/4 暗褐色 粘細砂 しまりやあり 長径 2cm以下のブロックを5%含む)
 30 : 75YR3/4 暗褐色 粘細～粘細砂 しまりやあり
 31 : 75YR4/6 褐色 粘細砂 (一部シルト) しまりやあり
 32 : 75YR4/6 褐色 シルト～粘細砂 しまりやあり
 33 : 75YR3/4 暗褐色 粘細～粘細砂 しまりやあり
 34 : 75YR4/6 褐色 シルト～粘細砂 しまりやあり
 35 : 75YR4/4 褐色 シルト～粘細砂 しまりやあり (75YR4/6 褐色 シルト～粘細砂 しまりやあり 長径 2cm以下のブロックを10%含む)
 36 : 75YR4/6 褐色 粘細砂 しまりやあり
 37 : 75YR3/4 暗褐色 粘細砂 しまりやあり (75YR4/6 褐色 粘細砂 しまりやあり 長径 2cm以下のブロックを10%含む)
 38 : 75YR4/6 褐色 粘細砂 しまりやあり
 39 : 75YR3/4 暗褐色 シルト～粘細砂 しまりやあり (75YR4/6 褐色 シルト～粘細砂 しまりやあり 長径 2cm以下のブロックを15%含む)
 40 : 75YR4/6 褐色 粘細～粘細砂 しまりやあり (75YR3/4 暗褐色土 粘細～粘細砂 しまりやあり 長径 2cm以下のブロックを10%含む)
 41 : 75YR4/6 褐色 粘細砂 しまりやあり
 42 : 75YR4/4 褐色 粘細～粘細砂 しまりやあり (75YR4/6 褐色 粘細～粘細砂 しまりやあり 長径 5cm以下のブロックを15%含む)
 43 : 75YR4/4 褐色 粘細砂 しまりやあり (75YR3/4 暗褐色 粘細砂 しまりやあり 長径 5cm以下のブロックを15%含む)
 44 : 75YR4/6 褐色 粘細砂 しまりやあり (75YR3/4 暗褐色 粘細砂 しまりやあり 長径 2cm以下のブロックを10%含む)
 45 : 75YR4/6 褐色 粘細～粘細砂 しまりやあり
 46 : 75YR4/6 褐色 粘細砂 (一部シルト) しまりやあり
 47 : 75YR3/4 暗褐色 粘細砂 しまりやあり
 48 : 75YR4/6 褐色 粘細砂 (一部シルト) しまりやあり
 49 : 75YR4/6 褐色 粘細砂 しまりやあり (75YR3/4 暗褐色 粘細砂 しまりやあり 長径 3cm以下のブロックを5%含む)
 50 : 75YR4/6 褐色 粘細～粘細砂 しまりやあり
 51 : 75YR4/4 褐色 粘細砂 しまりやあり (75YR4/6 褐色 粘細砂 しまりやあり 長径 3cm以下のブロックを15%含む)
 52 : 75YR3/4 暗褐色 粘細砂 (一部シルト) しまりやあり (75YR4/6 褐色 粘細砂 (一部シルト) しまりやあり 長径 3cm以下のブロックを10%含む)
 53 : 75YR3/4 暗褐色 粘細砂 (一部シルト) しまりやあり
 54 : 75YR4/4 暗褐色 粘細砂 しまりやあり (75YR4/6 褐色 粘細砂 しまりやあり 長径 2cm以下のブロックを15%含む)
 55 : 75YR4/6 褐色 粘細砂 しまりやあり
 56 : 75YR4/6 褐色 粘細砂 (一部シルト) しまりやあり (75YR3/4 暗褐色 粘細砂 (一部シルト) しまりやあり 長径 3cm以下のブロックを10%含む)
 57 : 75YR3/4 暗褐色 粘細砂 (一部シルト) しまりやあり
 58 : 75YR4/6 褐色 シルト～粘細砂 しまりやあり
 59 : 75YR4/6 褐色 粘細砂 しまりやあり (75YR3/4 暗褐色 粘細砂 しまりやあり 長径 3cm以下のブロックを15%含む)
 60 : 75YR4/6 褐色 粘細砂 しまりやあり (75YR3/3 暗褐色 粘細砂 しまりやあり 厚さ 2cmのラミネ状で層の下部に15%含む)
 61 : 75YR4/6 褐色 粘細砂 (一部シルト) しまりやあり (75YR3/4 暗褐色 粘細砂 (一部シルト) しまりやあり 厚さ 2cmのラミネ状で層の下部に15%含む)
 62 : 75YR3/4 暗褐色 シルト～粘細砂 しまりやあり (75YR4/6 褐色 粘細砂 しまりやあり 長径 1cm以下のブロックを20%含む)
 63 : 75YR4/6 褐色 粘細砂 しまりやあり
 64 : 75YR4/6 褐色 シルト～粘細砂 しまりやあり (75YR3/4 暗褐色 シルト～粘細砂 しまりやあり 長径 2cm以下のブロックを15%含む)
 65 : 75YR3/4 暗褐色 粘細砂 しまりやあり (75YR4/6 褐色 粘細砂 しまりやあり 長径 2cm以下のブロックを15%含む)
 66 : 75YR4/6 褐色 粘細砂 しまりやあり
 67 : 75YR3/4 暗褐色 シルト～粘細砂 しまりやあり (75YR4/6 褐色 シルト～粘細砂 しまりやあり 長径 2cm以下のブロックを10%含む)
 68 : 75YR4/4 褐色 シルト～粘細砂 しまりやあり
 69 : 75YR3/2 黄褐色 シルト～粘細砂 しまりやあり 粘質土 [田舎土]
 70 : 75YR4/6 褐色 シルト～粘細砂 しまりやあり 粘質土 [田舎土]
 71 : 75YR3/4 暗褐色粘質土 [ピット]
 72 : 75YR4/4 褐色粘質土 しまりやあり
 73 ~ 80 : 表層埋土
 73 : 75YR4/4 褐色粘質土 黒色粒を多く含む
 74 : 75YR4/4 褐色粘質土 黒色粒を73層より多く含む
 75 : 75YR4/6 褐色粘質土
 76 : 75YR4/4 褐色粘質土
 77 : 75YR4/4 褐色粘質土
 78 : 75YR4/4 褐色粘質土 74層より毛氈
 79 : 75YR4/6 褐色粘質土 [粘土層化土]
 80 : 75YR4/4 褐色粘質土
 81 : 5号埋戻土
 82 : 75YR4/6 褐色粘質土 粘性弱い [5号埋戻土]
 83 : 75YR4/6 褐色粘質土 (82層よりやや深い) 白色細粒を多く含む 埋戻土に直径 5cm以下の塊を多く含む [5021]
 84 : 75YR5/6 明褐色粘質土 [6号埋戻土]
 85 : 75YR4/6 褐色粘質土 (84層より深い) 粘性弱め [6号埋戻土]
 86 : 5YR4/8 赤褐色粘質土 [粘土]

第26図 筆ヶ崎5号墳 土層図 (1 : 50)



第27図 筆ヶ崎5号墳 石室遺構図 (1 : 50)



第28図 筆ヶ崎5号墳 石室中位の石材・遺物出土状況図 (1 : 20, 1 : 50)

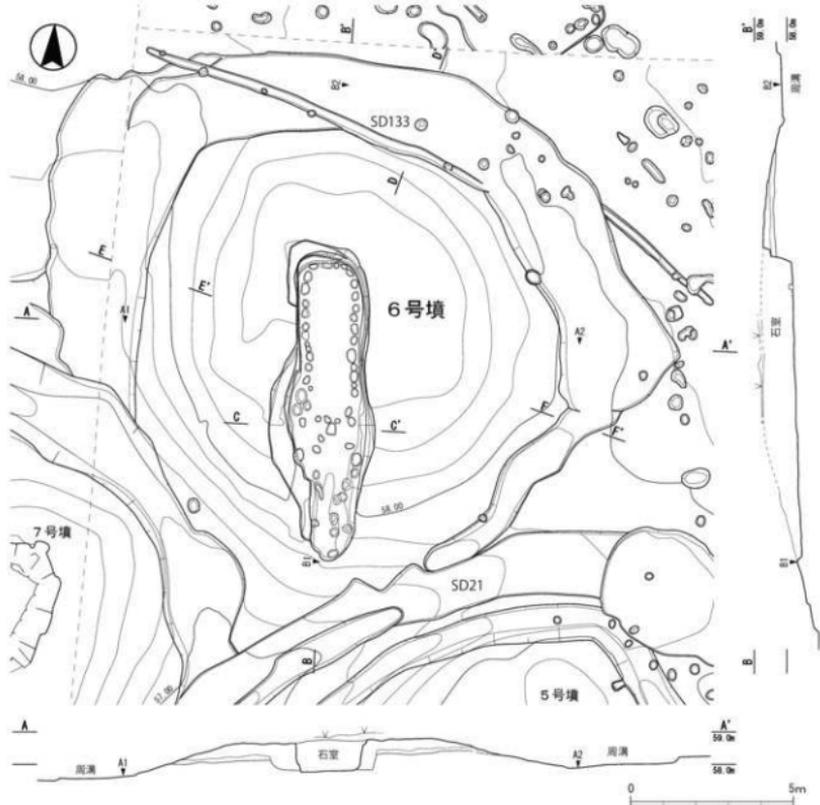
は猿投窯系、105は湖西窯産である。106は内面に当具痕跡がなく、外面には平行叩きと黄土塗布が認められる猿投窯系の甕である。108は、長胴甕の口縁部で、受口状を呈する。器壁は厚く、胎土は精良である。113は、高台の貼り付け位置が中央に寄っている杯Bで、形態的には猿投窯系の須恵器であるが、胎土は異質である。

(3) 小結

盗掘による攪乱がほぼ石室床面にまで及んでいるため、出土位置・層位から副葬品であることが確定できる遺物はない。また、石室内外を問わず時期幅のある遺物が出土しており、古墳の詳細な時期比定

を行うことは難しい。しかし、盗掘者が持ち込むとは考え難い耳環1点や、そのすぐ脇の床面近くから出土した須恵器杯H(92・93)、左側壁付近の床面近くで出土した完形の須恵器杯H身(94)、脚のみであるが奥壁付近の床面近くで正位置で出土した高杯(97)は、本来5号墳に伴うものである可能性が高く、筆ヶ崎2期への位置づけが可能である。

また、倒壊した側壁とみられる石列のすぐ下から出土した須恵器杯H蓋(96)は、床面近くからの出土品よりも明らかに新しく、筆ヶ崎4期への位置づけが可能で、この年代観は盗掘の時期を示しているのではないかと考えられる。



第29図 筆ヶ崎6号墳 墳丘実測図 (1:150)

6 筆ヶ崎6号墳 (第29～33・46・47図)

西群の南西向き斜面の上位中央に位置し、南西方向の7号墳とは周溝が重なり、南東方向の5号墳とは約1.5m離れている。調査前には、長径15m×短径13m、高さ約1.4mの小山状を呈していた。

調査により、横穴式石室・墳丘盛土・周溝が検出され、耳環1点・釵子・須恵器・土師器・砥石が出土した。

(1) 遺構

周溝は、若干直線的な部分はあるものの、墳丘を囲んで概ね円形に巡っており、石室開口部付近で途切れる。幅は2.3m程度で、部分的に広がる。断面は、南東側の細くなった部分でV字形を呈する以外は、幅広の逆台形である。深さは概ね20cmであるが、東側では深くなる。

墳丘は、地山(81層)・旧表土(77層)の上に層状に封土を盛っており、墓壇は旧表土上面から掘り込まれている。石室石材と墓壇の間には、裏込め土(50～54・71～74層)が充填されている。封土は、石室裏側へ擦り付けるように中央部から盛り上げられており、墳丘中央付近で厚さ約30cm、状態の良い場所では40cmほど残存していた。

石室は、ほぼ破壊し尽くされており、右側壁基底部の一石のみ残存していたに過ぎない。しかしながら、床面に残されていた石材の抜き取り痕とあわせて検討した結果、右片袖式の横穴式石室ではなかったかと考えられた。玄室・羨道・墓道の境は不明瞭であるが、東西方向に抜き取り痕が並ぶ位置(奥壁から4.5m付近)に玄門があったのではないかと推定できる。

羨道・墓道の床面西寄りからは、羨道・墓道に沿って排水溝とみられる幅20～30cm、深さ5～10cmほどの浅い溝が検出された。

玄室内埋土は、横断面で見ると、ほぼすべて盗掘後に堆積したものである。

規模については不明な点も多いが、直径(周溝芯々間)約15mの円墳で、墓壇は、長さ9.5m、幅は概ね3.25mで、他の古墳よりも幅広い。玄室は、抜き取り痕内側で長さ4.5m、最大幅1.3mである。

(2) 遺物

盗掘坑を含め石室からは、須恵器杯H身(114)・平瓶(115)、金銅製耳環(116)・釵子(117)、砥石(126)が出土した。

青銅製釵子(117)は玄室床面近くで出土した。板状の破片と2本の棒に破損していたが、本来は二本足のU字形を呈するものである。

耳環1点(116)は、石室内の玄門付近で出土した。床面からは若干浮いており、盗掘後の埋土に含まれていた。

須恵器杯身(114)は墓壇よりも外側の盗掘坑埋土から出土した。在地窯系の完形品である。

須恵器平瓶(115)は、羨道の床面から15～20cm上で出土した。体部に把手がつく大型品で、口縁部下の鋭い尖帯は、猿投窯のH-44号窯出土品に類似する。

砥石(126)は石室開口部付近にある性格不明の小土坑から、土師器片とともに出土した。

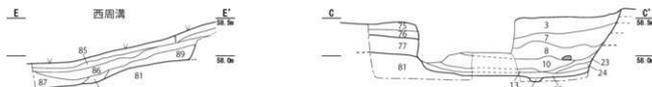
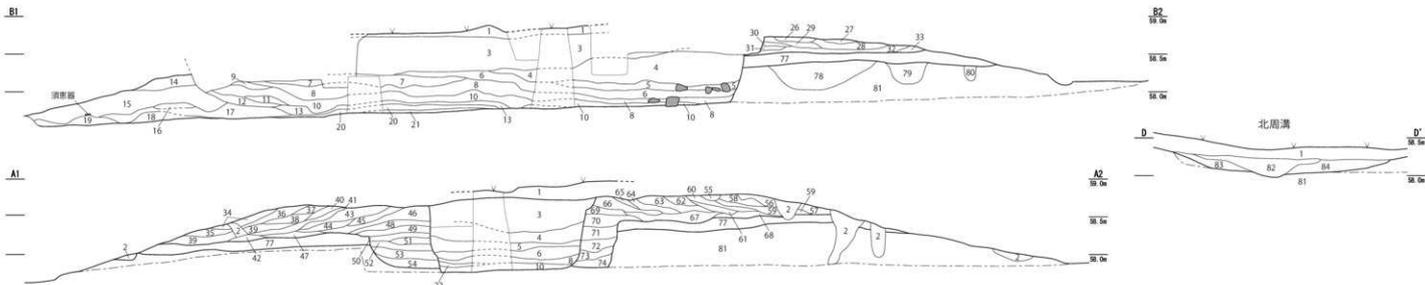
墳丘上には遺物が集中する箇所がいくつか認められた。北東部では須恵器の甕や壺・瓶類が多く、大型の甕が目立つ。西部では須恵器の横瓶が出土した。127は残存状態が悪いので、横断面のみを図化した。在地窯系の横瓶である。128・129はどちらも猿投窯系で、長頸瓶とみられるが別個体である。130～132は猿投窯系の大型甕。130は、頸部に櫛描列点文と二重沈線が二段に配され、口縁部直下に段が設けられるなど、古相を示す。131は頸部に装飾は施されておらず、口縁部の縁帯も単純な形状を示す。

周溝からは須恵器杯H身(118)・無台杯(119・120)・杯B(121～123)・長頸壺(124)・甕(125)など、包含層や表土からは、須恵器無台杯(134)・杯B(135・136)・短頸壺(137・138)・長頸瓶(139)・甕(140)などが出土した。杯類には猿投窯系の製品が目立つが、134は湖西窯産の可能性もある。

なお、墳丘南東部のE-V3pit1は、周溝が埋まった後に掘削された小土坑で、古墳よりも新しい。口頸部を欠いた台付(長頸)壺(702)が天地を逆転させた状態で出土しており、人為的な埋納行為と考えられる。

(3) 小結

盗掘による擾乱がほぼ石室床面全面に及んでいる



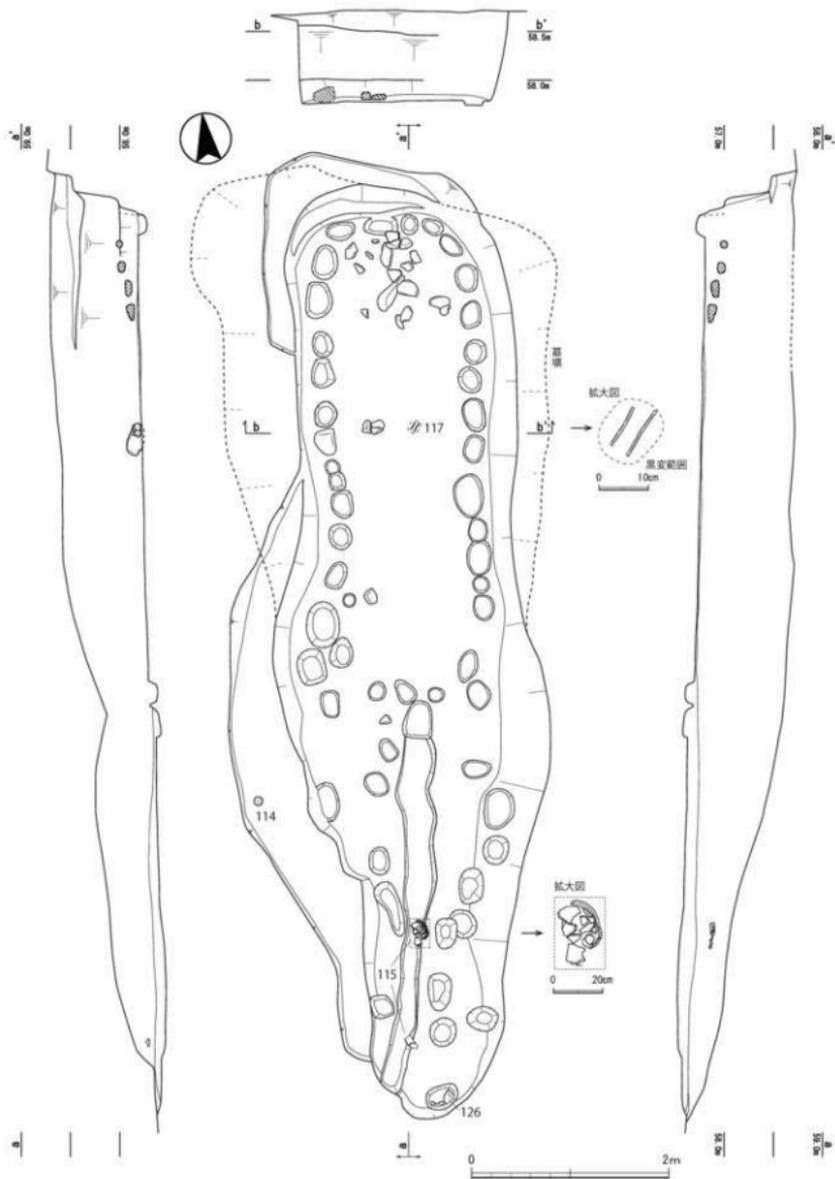
- 1 : 流土
 2 : 砂埋
 【3～25 : 調査区1・石室跡】
 3 : 75YR46褐色 礫砂 しまりなし 粘質なし
 4 : 10YR46褐色 礫砂 しまりなし 粘質なし
 5 : 75YR46褐色 礫砂 しまりやあり 粘質やあり (SYR58明色赤色シルト～礫砂 長径2cm以下のブロックを5%含む)
 6 : 75YR46褐色 礫砂 (一部礫) しまりなし 粘質なし
 7 : 75YR44褐色 礫砂 (一部礫) しまりなし 粘質なし
 8 : 10YR44褐色 礫砂 (一部礫) しまりなし 粘質なし
 9 : 75YR46褐色 礫～礫砂 長径1cm以下のブロックを70%、75YR34褐色 礫～礫砂 長径1cm以下のブロックを30%含む しまりやあり 粘質やあり
 10 : 10YR46褐色 礫～礫砂 しまりやあり 粘質やあり
 11 : 75YR44褐色 礫～礫砂 しまりやあり 粘質やあり
 12 : 75YR46褐色 礫～礫砂 しまりやあり 粘質あまりなし
 13 : 10YR44褐色 礫～礫砂 しまりなし 粘質なし
 14 : 75YR46褐色 礫～礫砂を60%、75YR34褐色 礫～礫砂を40%含む 粘質なし
 15 : 5YR43褐色 礫砂 しまりやあり 粘質やあり
 16 : 75YR34褐色 礫～礫砂 しまりやあり 粘質やあり
 17 : 75YR34褐色 礫砂 (一部礫) しまりやあり 粘質やあり
 18 : 75YR34褐色 礫～礫砂 しまりやあり 粘質やあり
 19 : 75YR46褐色 礫～礫砂 しまりやあり 粘質やあり
 20 : 75YR34褐色 礫～礫砂 しまりなし 粘質なし
 21 : 75YR46褐色 礫～礫砂 (一部シルト) しまりやあり 粘質やあり
 長径1cm以下のブロックを5%含む
 【26～76 : 遺土・礎石跡】
 26 : 75YR46褐色 礫砂 しまりやあり (75YR34褐色土 礫砂 しまりやあり 長径1cm以下のブロックを10%含む)
 27 : 75YR46褐色 礫砂 しまりやあり

- 28 : 75YR34褐色 シルト～礫砂 しまりやあり (75YR46褐色 礫砂 しまりやあり 長径1cm以下のブロックを10%含む)
 29 : 75YR34褐色 礫砂 しまりやあり
 30 : 75YR46褐色 礫砂 しまりやあり (75YR34褐色 礫砂 しまりやあり 長径1cm以下のブロックを10%含む)
 31 : 75YR34褐色 礫砂 しまりやあり (75YR46褐色 礫砂 しまりやあり 長径1cm以下のブロックを10%含む)
 32 : 75YR46褐色 礫砂 (一部シルト) しまりやあり (75YR34褐色 シルト～礫砂 長径2cm以下のブロックを15%含む)
 33 : 75YR44褐色 シルト～礫 しまりやあり (75YR34褐色 シルト～礫砂 しまりやあり 長径1cm以下のブロックを10%含む)
 34 : 75YR44褐色 礫～礫砂 しまりやあり
 35 : 75YR44褐色 礫～礫砂 しまりやあり (75YR34褐色 礫～礫砂 しまりやあり 長径3cm以下のブロックを15%含む)
 36 : 75YR46褐色 シルト～礫砂 しまりやあり
 37 : 75YR46褐色 シルト～礫砂 しまりやあり (75YR34褐色 シルト～礫砂 しまりやあり 長径1cm以下のブロックを15%含む)
 38 : 75YR34褐色 礫砂 (一部シルト) しまりやあり
 39 : 75YR46褐色 礫～礫砂 (一部シルト) しまりやあり
 40 : 75YR46褐色 礫～礫砂 しまりやあり 長径4cm以下のブロックを15%含む
 41 : 75YR46褐色 礫～礫砂 しまりやあり (75YR34褐色 礫～礫砂 しまりやあり 長径1cm以下のブロックを10%含む)
 42 : 75YR34褐色 礫～礫砂 しまりやあり (75YR46褐色 礫～礫砂 しまりやあり 長径2cm以下のブロックを5%含む)
 43 : 75YR34褐色 シルト～礫砂 (一部シルト) しまりやあり 粘質やあり
 44 : 75YR46褐色 礫～礫砂 しまりやあり 粘質やあり
 45 : 75YR34褐色 礫～礫砂 しまりやあり (75YR46褐色 礫～礫砂 しまりやあり 長径2cm以下のブロックを10%含む)
 46 : 75YR44褐色 礫砂 しまりやあり (75YR46褐色 礫～礫砂 しまりやあり 長径3cm以下のブロックを10%含む)
 47 : 75YR44褐色 シルト～礫砂 しまりやあり (75YR34褐色 シルト～礫砂 しまりやあり 長径4cm以下のブロックを15%含む)

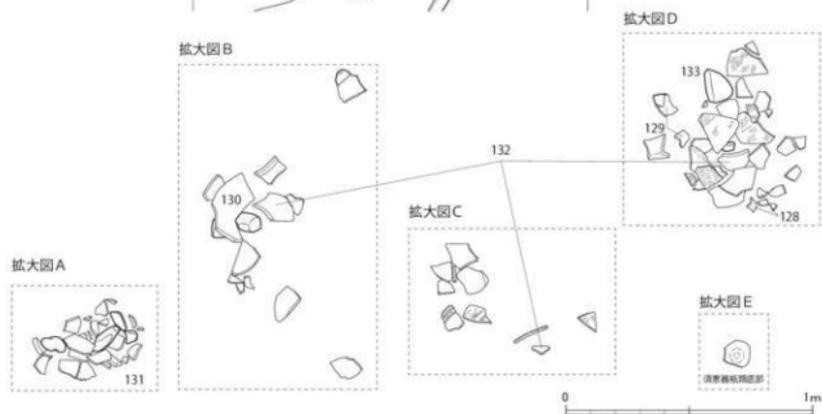
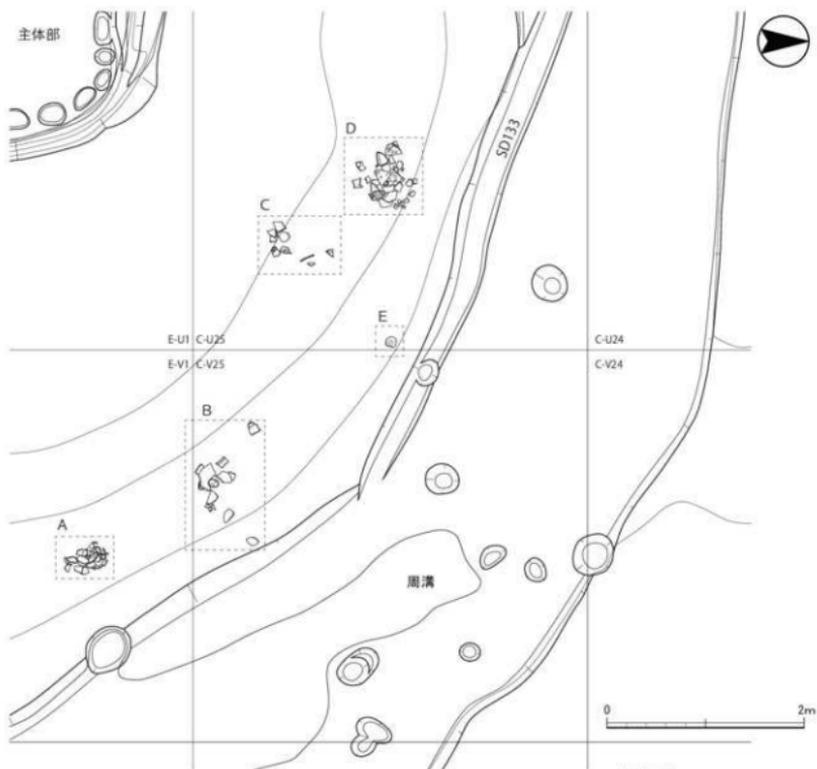
- 47 : 75YR46褐色 シルト～礫砂 しまりやあり (75YR34褐色 シルト～礫砂 しまりやあり 長径1cm以下のブロックを10%含む)
 48 : 75YR46褐色 礫砂 (一部シルト) しまりやあり (75YR34褐色 礫砂 (一部シルト) しまりやあり 長径2cm以下のブロックを10%含む)
 49 : 75YR46褐色 礫砂 しまりやあり (75YR34褐色 礫砂 しまりやあり 層の上面に厚さ2～3cmで15%含む)
 50 : 75YR46褐色 シルト～礫砂 しまりやあり (75YR34褐色 シルト～礫砂 しまりやあり 層の上面に厚さ2～3cmで15%含む)
 51 : 75YR46褐色 礫砂 しまりやあり (75YR34褐色 礫砂 しまりやあり 長径1cm以下のブロックを15%含む)
 52 : 75YR44褐色 礫～礫砂 しまりやあり (75YR34褐色 礫砂 しまりやあり 長径1cm以下のブロックを15%含む)
 53 : 75YR46褐色 シルト～礫砂 しまりやあり (75YR34褐色 シルト～礫砂 しまりやあり 長径3cm以下のブロックを5%含む)
 54 : 75YR46褐色 シルト～礫砂 しまりやあり
 55 : 75YR34褐色 礫砂 しまりやあり
 56 : 75YR46褐色 礫～礫砂 しまりやあり (75YR34褐色 礫砂 しまりやあり 長径2cm以下のブロックを15%含む)
 57 : 75YR34褐色 礫砂 (一部シルト) しまりやあり
 58 : 75YR46褐色 礫～礫砂 しまりやあり 長径2cm以下のブロックを10%含む
 59 : 75YR46褐色 礫～礫砂 しまりやあり (75YR34褐色 礫～礫砂 しまりやあり 長径1cm以下のブロックを10%含む)
 60 : 75YR44褐色 シルト～礫砂 しまりやあり (75YR46褐色 シルト～礫砂 しまりやあり 長径5cm以下のブロックを25%含む)
 61 : 75YR34褐色 礫～礫砂 しまりやあり
 62 : 75YR34褐色 シルト～礫砂 しまりやあり (75YR46褐色 礫砂 しまりやあり 長径1cm以下のブロックを10%含む)
 63 : 75YR44褐色 礫～礫砂 しまりやあり (75YR46褐色 礫～礫砂 しまりやあり 長径2cm以下のブロックを15%含む)
 64 : 75YR34褐色 礫砂 しまりやあり (75YR46褐色 礫砂 しまりやあり 長径2cm以下のブロックを10%含む)
 65 : 75YR34褐色 礫～礫砂 しまりやあり
 66 : 75YR44褐色 礫～礫砂 しまりやあり

- 67 : 75YR34褐色 シルト～礫砂 しまりやあり
 68 : 75YR46褐色 礫砂 (一部シルト) しまりやあり
 69 : 75YR34褐色 礫砂 (一部シルト) しまりやあり
 70 : 75YR46褐色 礫砂 (一部シルト) しまりやあり (75YR34褐色 礫砂 (一部シルト) しまりやあり 長径1cm以下のブロックを15%含む)
 71 : 75YR46褐色 礫砂 しまりやあり (75YR34褐色土 礫砂 しまりやあり 長径1cm以下のブロックを10%含む)
 72 : 75YR44褐色 シルト～礫砂 しまりやあり (75YR34褐色 シルト～礫砂 しまりやあり 長径2cm以下のブロックを10%含む)
 73 : 75YR46褐色 シルト～礫砂 しまりやあり (75YR34褐色 シルト～礫砂 しまりやあり 長径1cm以下のブロックを5%含む)
 74 : 75YR46褐色 シルト～礫砂 しまりやあり
 75 : 75YR46褐色 礫砂 しまりやあり (75YR34褐色 礫砂 しまりやあり 長径1cm以下のブロックを10%含む)
 76 : 75YR46 礫砂 (一部シルト) しまりやあり (75YR34褐色 礫砂 (一部シルト) 長径1cm以下のブロックを15%含む)
 77 : 75YR32～31 黄褐色 シルト～礫砂 しまりやあり 粘質あり
 【調査区2】
 78 : 75YR46褐色 礫砂 (一部シルト) しまりやあり
 79 : 75YR43褐色 礫砂 しまりやあり
 80 : 75YR44褐色 礫～礫砂 しまりやあり
 81 : 75YR46褐色 礫～礫砂 (一部シルト) しまりやあり
 82 : 75YR46褐色 礫～礫砂 (一部シルト) しまりやあり
 83 : 75YR44褐色粘質土 (82層より明るい)
 84 : 75YR46褐色粘質土 (中や浅く しまりやあり) (粘土層)
 85 : 75YR56明褐色粘質土 (黄土)
 86 : 75YR56明褐色粘質土 (黄土)
 87 : 75YR46褐色粘質土 (88層より深い)
 88 : 75YR46褐色粘質土
 89 : 75YR46褐色粘質土 (黄土)
 90 : 75YR56明褐色粘質土

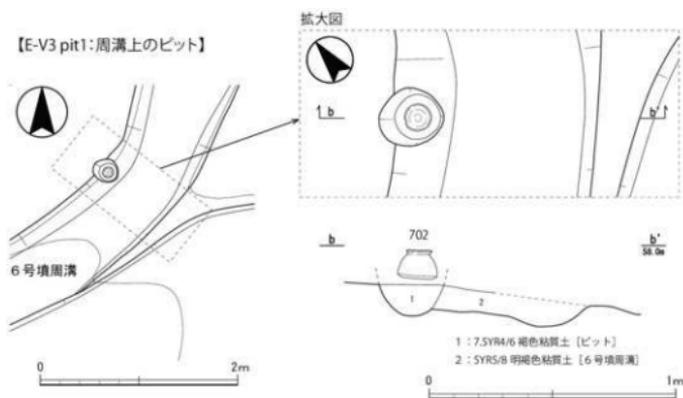
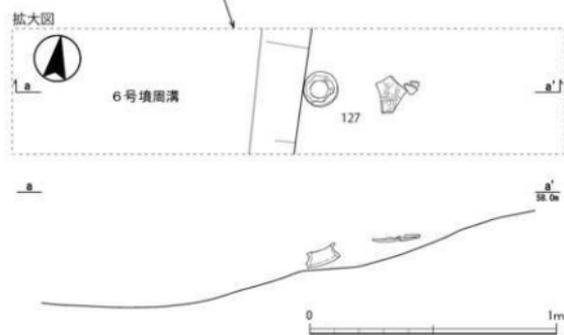
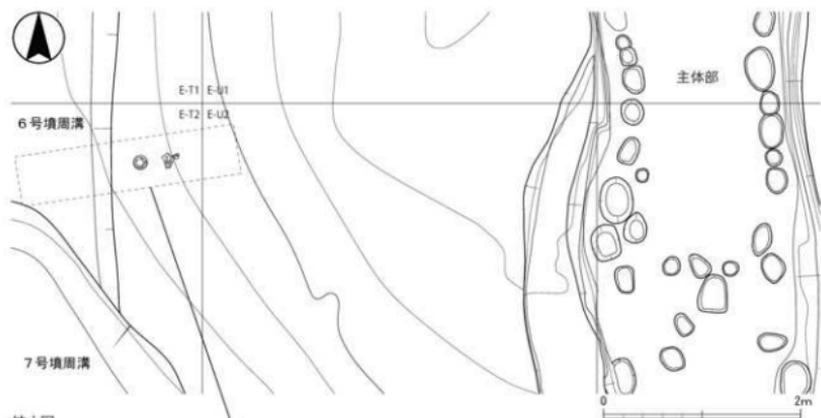
第30図 葦ヶ崎6号墳 土層図 (1 : 50)



第31図 筆ヶ崎6号墳 石室遺構図 (1:50)



第32図 筆ヶ崎6号墳 墳丘遺物出土状況図1 (1:50, 1:20)



第33図 筆ヶ崎6号墳 墳丘遺物出土状況図2 (1 : 50, 1 : 20)

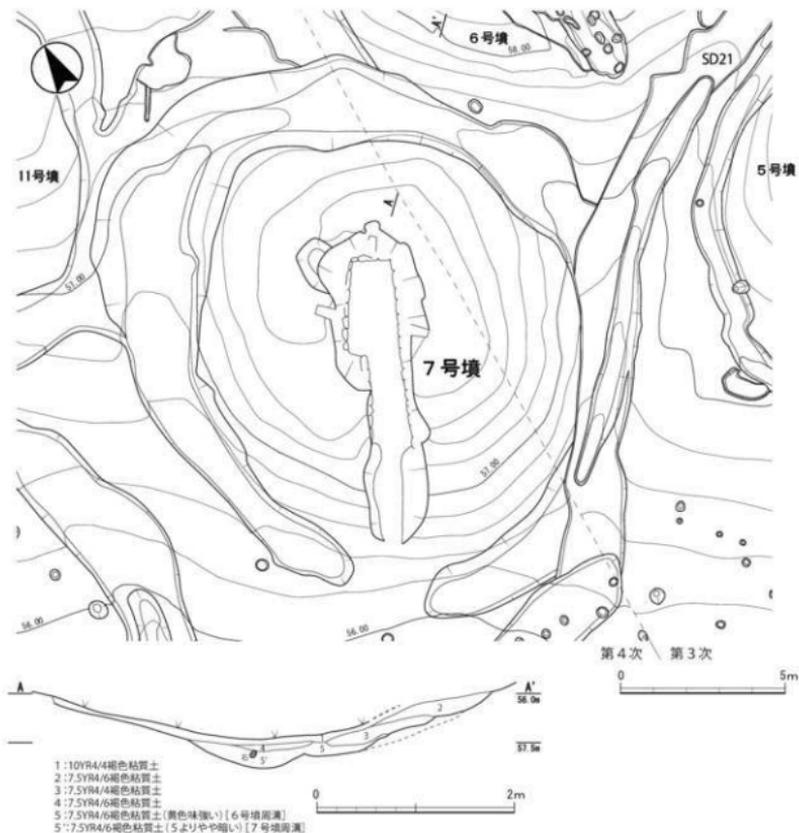
ため、出土位置・層位から副葬品であることが確定できる遺物はない。また、表土や包含層からは時期幅のある遺物が出土しており、古墳の詳細な時期比定は難しい。しかし、盗掘者が持ち込むとは考え難い耳環(116)や釵子(117)は、本来6号墳に伴う副葬品である可能性が高い。また、完形品ではないものの、残存状態が良好な須恵器平瓶(115)と、墳丘出土の甕のうち130は、筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡全出土品のなかで、最も古く位置づけられる遺物の一つである。周囲には同時期の遺物が散乱しているような状況は認められず、古い遺構からの混入

品とは考え難い。原位置を保っていたわけではないが、埋葬時期を検討する際の有力な材料と考えることができ、筆ヶ崎1期への位置づけが可能である。

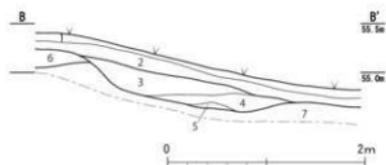
7 筆ヶ崎7号墳 (第34・47図)

西群の南西向き斜面の下位中央に位置する。北東方向の6号墳とは同溝が重なり、南東方向の5号墳とは約3m離れている。調査前には、直径約13m、高さ約1.6mの小山状を呈していた。

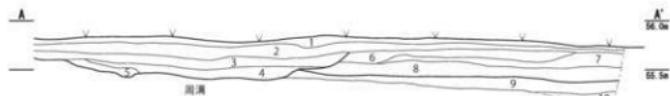
主体部は事業地外に位置しており、調査区内では墳丘東裾部と同溝の一部を検出したに過ぎない。埋



第34図 筆ヶ崎7号墳 実測図 (墳丘1:150、土層1:50)

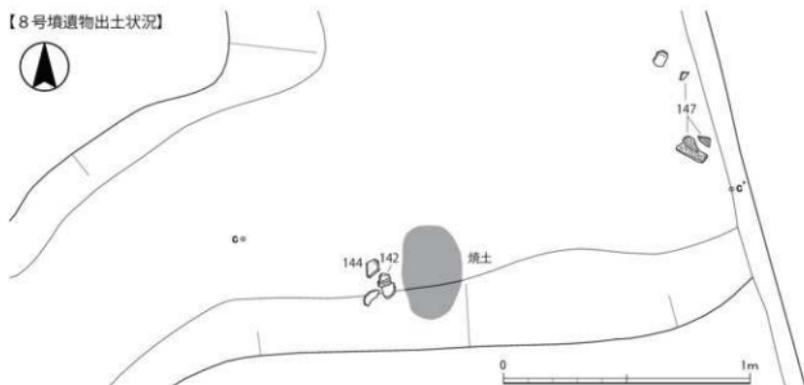


- 1: 表土 (腐植土)
 2: 7.SYRA/6褐色 シルト～中粒砂(やや粘質土)
 【3～5: S Z B】
 3: 7.SYRA/4褐色 シルト～中粒砂(粘質土) 直径1～2cmの礫を1～3%含む
 4: 5YRA/6赤褐色 シルト～粗粒砂(粘質土) 焼土を層状に部分的に含む
 (直径1～1.5cmの7.SYR3/4暗褐色 シルト～中粒砂ブロックを少量含む)
 5: 7.SYRA/4褐色 シルト～中粒砂(粘質土) 直径0.5cmの焼土塊を少量含む
 (直径1cmの7.SYR3/4暗褐色 シルト～中粒砂ブロックを3～5%含む)
 6: 7.SYRA/6褐色 シルト～中粒砂(粘質土)
 (7.SYRA/4褐色 シルト～中粒砂を混状10%含む)
 【8号墳盛土もしくは旧表土?】
 7: 5YRA/8赤褐色 シルト～極粗粒砂 直径1.5～1.5cmの礫を30～50%含む
 【地山】



- 1: 表土 (腐植土)
 2: 7.SYRS/4ICふい褐色 シルト～中粒砂(粘質土)
 3: 5YRA/3ICふい赤褐色 シルト～中粒砂(粘質土) 直径1～3cmの礫を少量含む
 4: 5YRA/4ICふい赤褐色 シルト～極粗粒砂(粘質土) 直径1～5cmの礫を10%～20%含む
 5: 5YRA/6赤褐色 シルト～中粒砂(粘質土) 直径1～3cmの礫を少量含む
 6: 7.SYRA/3褐色 シルト～中粒砂(粘質土)【盛土】
 7: 7.SYRA/4褐色 シルト～中粒砂(粘質土)【盛土】
 8: 7.SYRA/6褐色 シルト～中粒砂(粘質土) 直径1～5cmの礫を少量含む 【旧表土】
 9: 5YRA/4ICふい赤褐色 シルト～中粒砂(粘質土) 直径1～3cmの礫を少量含む 【地山】
 10: 5YRA/8赤褐色 シルト～中粒砂(粘質土) 直径1～2cmの礫を少量含む 【地山】

【8号墳遺物出土状況】



第35図 筆ヶ崎8号墳 実測図 (墳丘1:150、土層1:50、遺物出土状況1:20)

葬施設を含む7号墳の主要部分の調査については、既刊の報告書を参照されたい。

(1) 遺構

周溝は、墳丘を囲んで円形に巡り、石室開口部付近のみ途切れる。北東部は6号墳の周溝と重複し、南東部はSD21により破壊されている。6号墳と7号墳の周溝が重複する箇所、土層を詳細に観察したが、新旧関係は判らなかつた。

(2) 遺物

周溝から須恵器無台杯・高杯・甕などが出土した。141は猿投窯系須恵器の無蓋高杯で、脚部に透かしは無い。1-17号室と同時期の操業と目されるS-78号窯出土品に類似する。

(3) 小結

第4次調査では、7号墳の石室奥壁付近から、副葬品とみられる完形の須恵器台付長頸壺・高杯・甕・提瓶が出土している。このうち、無蓋高杯(7号墳出土遺物実測図2)は猿投窯系で、脚部の透かしの上段が切れ目状になっている特徴は、1-101号窯出土品に似る。この高杯の存在から7号墳の時期は筆ヶ崎3期と考えられ、周溝出土の高杯(141)が示す年代(筆ヶ崎4期)よりも遡る。

8 筆ヶ崎8号墳 (第35・47・48図)

東群の南東向き斜面の中位東側に位置する。調査前には、直径約12m、高さ約0.7mの舌状の高まりが認められた。

主体部は事業地外に位置しており、調査区内では墳丘西裾部と周溝の一部を検出したにとどまる。須恵器・土師器・鉄製品が出土した。埋葬施設の構造は不明である。

(1) 遺構

周溝は、墳丘の西側から北側部分とみられるが、検出部の東半の幅が不自然に広く、周溝底部付近に焼土の広がりも認められるため、後世に改変を受けている可能性もある。

なお、南側で検出されたSZ8は、調査前測量図から想定される墳据位置に合致しており、8号墳の周溝のように見えるが、埋土から新しい(筆ヶ崎4期)遺物が出土しているため、別遺構とみなした。

墳丘は、地山・旧表土の上に封土を盛っている。封

土は高さ30cmほど残存していた。

(2) 遺物

周溝底からやや浮いた状態で、須恵器高杯(142)・杯類(143・144)、土師器甕(145~147)が出土した。須恵器無蓋高杯(142)は、生焼けであるため、やや信頼度は下がるが、明瞭な線を有し、口縁部内面が段を有する点は猿投窯系須恵器の特徴を示す。類品はH-15号窯やI-101号窯から出土している。147は土師器甕の口縁部片で、頭部の締まりが緩い大型品である。

墳丘・包含層・表土からは須恵器杯類(150・151)・高杯(152)、土師器甕(148)、鉄製品(149)が出土した。このうち、猿投窯系須恵器の杯H蓋(150)は、著しく小型化が進んだもので、1-17号窯出土品に類似する。

(3) 小結

主体部の調査を行っておらず、出土状況から確実に古墳に伴うと判断できる遺物はない。

出土した遺物は、時期的なまとまりに欠けているが、最も古相を示す須恵器高杯(142)の存在を積極的に評価するならば、筆ヶ崎2期もしくは3期と考えることができる。

9 筆ヶ崎10号墳 (第36~38・48・49図)

中央群の南向き斜面の中位に位置し、北西方向の3号墳とは約2~3m、南西方向の4号墳とは約4m離れている。調査前には、直径約11~12m、高さ約1.0mの小山状を呈していた。

調査により、横穴式石室・墳丘盛土・周溝が検出され、須恵器・土師器などが出土した。

(1) 遺構

周溝は、墳丘を囲んで、石室主軸方向に長い楕円形に巡っており、石室開口部付近で途切れる。幅は0.7~1.2m、深さは20cm程で、断面は概ねU字形を呈するが、西側では2.4mまで広がり、断面は幅広い逆台形となる。

墳丘は、地山(64層)・旧表土(63層)の上に層状に封土を盛っており、墓壇は旧表土上面から掘り込まれている。石室石材と墓壇の間には、裏込め土(34~37・52~56層など)が充填されている。封土は、石室裏側へ擦り付けるように中央部から順次外側へ

盛り上げられており、墳丘中央付近で厚さ30cmほどが残存していた。

石室は、大きく破壊されているが、玄室の右側壁の基底石1石と左側壁の玄門側の隅に2石残存していた。床面の石材抜き取り痕や、羽子板状の墓壇の形状から、横穴式石室と判る。

石材は長径30~40cmほどの川原石である。基底石は右側壁に長径30cm、左側壁には長径35cmほどの横長の石を配して長辺を壁面とし、南東隅の二段目は長辺40cmほどの横長の石を主軸方向に直交して配し、小口を壁面とする。

玄室奥側には、床面直上の締まりの良い整地土(厚さ約10cm)の上に直径約15cmの礎が大量に敷かれていた。調査中に一部誤って取り外してしまったが、その範囲は、2.2×0.8mの長方形である。抜き取り痕の直近にはないため棺台風に見えるが、1石残って

いた側壁には接しているの、本来は床面全面に敷かれていた礎床で、盗掘時に失われた可能性がある。

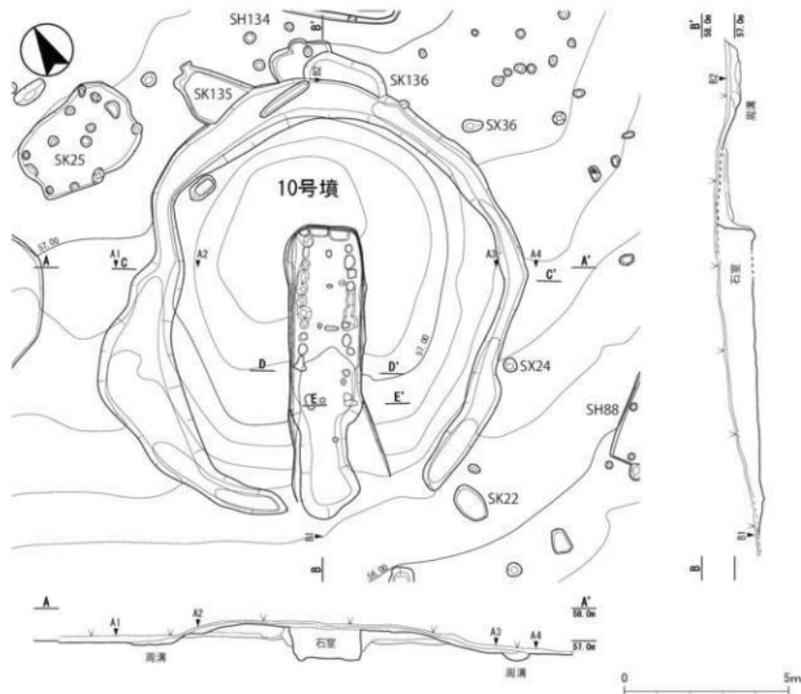
墓壇南側の幅が狭い部分は、抜き取り痕が検出されなかったので、素掘りの墓道となっていたようである。

規模については不明な点も多いが、長径(周溝芯々間)12.5m×短径11mほどの楕円形を呈する円墳で、玄室は幅1.1~1.2mである。側壁は奥壁から5.1mの位置まで確認できたが、玄室と羨道の境は不明瞭である。

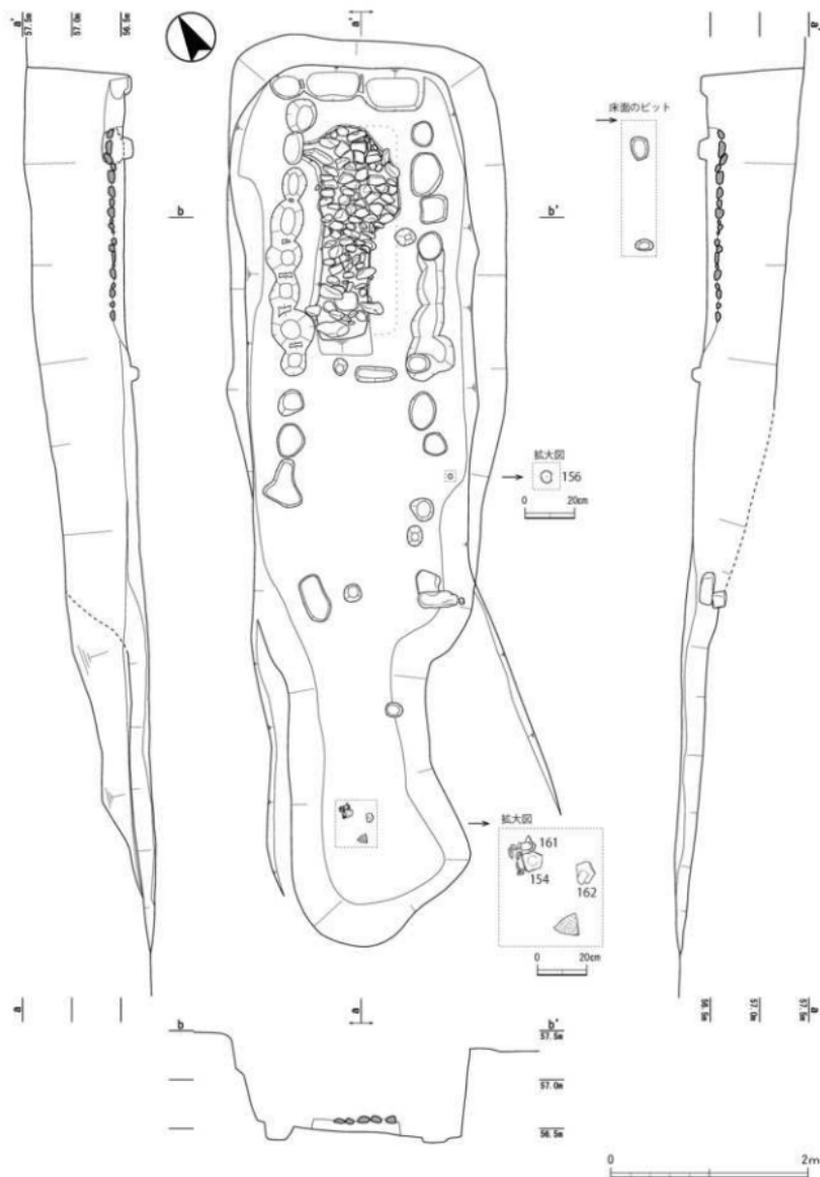
(2) 遺物

羨道を含め石室内から、須恵器杯類(153・154・156)・壺瓶類(155・157・158)、土師器椀(159)・甗(160)・把手(161・162)が出土した。

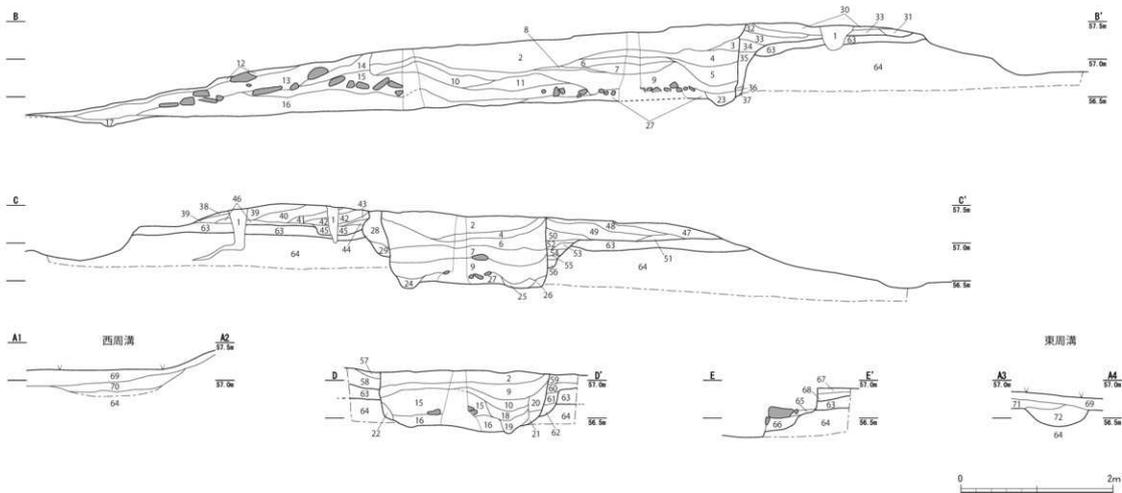
須恵器杯H身(154)は、土師器の把手(161・162)とともに墓壇入口付近の床面直上から出土した。口



第36図 筆ヶ崎10号墳 墳丘実測図(1:150)



第37図 筆ヶ崎10号墳 石室遺構図 (1 : 50)



1: 埋葬基

【3~27: 遺構区、石室埋土】

- 2: 7.5YR4/4 褐色粘質土
- 3: 7.5YR3/4 暗褐色粘質土
- 4: 7.5YR4/4 褐色粘質土
- 5: 7.5YR3/4 暗褐色粘質土 (3層より深い、炭粒少量含む)
- 6: 7.5YR4/4 褐色粘質土
- 7: 7.5YR3/4 暗褐色粘質土
- 8: 7.5YR3/4 暗褐色粘質土
- 9: 7.5YR4/4 褐色粘質土
- 10: 7.5YR4/4 褐色粘質土
- 11: 7.5YR3/4 暗褐色粘質土
- 12: 7.5YR4/4 褐色粘質土
- 13: 7.5YR3/4 暗褐色粘質土 (直徑5cm以下の礫を含む)
- 14: 7.5YR3/4 暗褐色粘質土 (直徑4cm以下の礫を多く含む)
- 15: 7.5YR4/4 褐色粘質土 (11層より深い)
- 16: 7.5YR3/4 暗褐色粘質土 (15層より深い)
- 17: 7.5YR4/6 褐色粘質土
- 18: 7.5YR3/4 暗褐色粘質土 (しまりややなし)
- 19: 7.5YR3/4 暗褐色粘質土 (しまりややなし)
- 20: 7.5YR4/4 褐色粘質土 (裏込め土?)
- 21: 7.5YR4/4 褐色粘質土 (20層より赤味帯びる [裏込め土?])
- 22: 7.5YR4/4 褐色粘質土
- 23: 7.5YR4/4 褐色粘質土 (しまりややなし)
- 24: 7.5YR4/4 褐色粘質土 (しまりなし)
- 25: 7.5YR4/4 褐色粘質土 (しまりなし)
- 26: 7.5YR4/4 褐色粘質土 (しまりなし)

27: 7.5YR4/4 褐色粘質土 (しまりあり)

- 28: 7.5YR4/6 褐色 極細砂 (しまりなし [EIV: 晩期の遺構埋土])
- 29: 7.5YR5/6 暗褐色 極細砂 (しまりなし [EIV: 晩期の遺構埋土])
- 【30~62・65~68: 盛土・裏込め土】
- 30: 7.5YR4/4 褐色 極細砂 (しまりややあり)
- 31: 7.5YR4/4 褐色 シルト~極細砂 (しまりややあり)
- 32: 7.5YR3/4 暗褐色 極細砂 (しまりややあり)
- 33: 7.5YR4/6 褐色 シルト~極細砂 (しまりややあり)
- 34: 7.5YR4/6 褐色 極細~細砂 (しまりややあり)
- 35: 7.5YR4/6 褐色 極細砂 (しまりあり)
- 36: 7.5YR4/4 褐色 シルト~極細砂 (しまりややあり)
- 37: 7.5YR3/4 暗褐色 極細砂 (しまりややあり)
- 38: 7.5YR3/4 暗褐色 極細~細砂 (しまりややあり)
- 39: 7.5YR4/6 褐色 極細砂 (しまりややあり (7.5YR3/4 暗褐色 極細砂 (しまりややあり 長径5cm以下のブロックを15%含む))
- 40: 7.5YR4/4 褐色 シルト~極細砂 (しまりややあり)
- 41: 7.5YR4/6 褐色 極細砂 (一部) (しまりややあり)
- 42: 7.5YR3/4 暗褐色 極細砂 (しまりややあり 粘質ややあり)
- 43: 7.5YR4/6 褐色 極細砂 (しまりややあり)
- 44: 7.5YR3/4 暗褐色 極細砂 (一部シルト) (しまりややあり)
- 45: 7.5YR4/6 褐色 極細砂 (一部) (しまりややあり [盛土土?])
- 46: 7.5YR4/4 褐色 極細砂 (一部シルト) (しまりややあり (7.5YR4/6 褐色 極細砂 (しまりややあり 長径5cm以下のブロックを10%含む) [盛土土?])
- 47: 7.5YR4/6 褐色 シルト~極細砂 (しまりややあり)
- 48: 7.5YR3/4 暗褐色 シルト~極細砂 (しまりややあり)
- 49: 7.5YR4/6 褐色 シルト~極細砂 (しまりややあり (7.5YR3/4 暗褐色 シルト~極細砂 (しまりややあり 長径3cm以下のブロックを15%含む))

50: 7.5YR4/4 褐色 極細砂 (しまりややあり)

- 51: 7.5YR3/4 暗褐色 極細砂 (しまりややあり (7.5YR4/6 褐色 極細砂 (しまりややあり 長径3cm以下のブロックを10%含む))
- 52: 7.5YR4/4 褐色 シルト~極細砂 (しまりややあり)
- 53: 7.5YR4/6 褐色 極細砂 (しまりややあり)
- 54: 7.5YR3/4 暗褐色 極細砂 (しまりややあり)
- 55: 7.5YR4/6 褐色 極細~細砂 (しまりややあり)
- 56: 7.5YR4/4 褐色 極細~細砂 (しまりややあり)
- 57: 7.5YR4/6 褐色 極細~細砂 (しまりややあり (58層よりわずかに黒く粘着が強い))
- 58: 7.5YR4/6 褐色 シルト~極細砂 (しまりややあり)
- 59: 7.5YR4/6 褐色 極細砂 (しまりややあり)
- 60: 7.5YR4/4 褐色 シルト~極細砂 (しまりややあり)
- 61: 7.5YR4/6 褐色 極細砂 (一部) (しまりややあり)
- 62: 7.5YR4/4 褐色 シルト~極細砂 (しまりややあり)
- 63: 7.5YR3/2 黒褐色 シルト~極細砂 (しまりややあり 粘性あり [旧表土])
- 64: 5YR4/6~5R8 赤~明赤褐色 シルト~極細砂 (しまりあり [地山])
- 65: 7.5YR4/6 褐色 極細~細砂 (しまりややあり [2段目の石に対応する裏込め])
- 66: 7.5YR3/4 暗褐色 極細~細砂 (しまりややあり (黄や灰の石に対応する裏込め))
- 67: 7.5YR4/4 褐色 極細~細砂 (しまりややあり)
- 68: 7.5YR4/4 褐色 シルト~極細砂 (しまりややあり)

【東西溝埋土】

- 69: 7.5YR3/4 暗褐色粘質土 [表土]
- 70: 7.5YR4/6 褐色粘質土
- 71: 7.5YR5/6 明褐色粘質土 [表土]
- 72: 7.5YR4/6 褐色粘質土

第38図 葦ヶ崎10号墳 土層図 (1:50)

縁部の立ち上がりが矮小化している割に径は大きく、H-15号窯とI-101号窯出土品の中間的様相を示す。159は表面が赤色を呈する土師器碗である。

周溝からは、須恵器杯蓋g(166)・高杯(167)・横瓶(163・165)・甕(164)、土師器甕(168)などが出土した。須恵器高杯(167)は杯部と脚端部の破片しか無いため、脚の形状や長さは不明。横瓶(163・165)と甕(164)は猿投窯系である。

包含層・表土からは、須恵器高杯(169)・鉢(170)・甕(171・172)のほか、無軸陶器(173)が出土した。170は外面に二条一対の沈線が上下2箇所に施された筒状の容器で、類例を見かけないが一応鉢とした。173は瀬戸窯もしくは美濃窯産と考えられるの小型品で、底部外面は丁寧なヘラケズリで整えられている。古瀬戸の入れ子皿のような器種かとみられる。

(3) 小結

盗掘による擾乱がほぼ石室床面(礎床)にまで及んでいるため、出土位置・層位から副葬品であることが確定できる遺物はない。また、表土や包含層からは時期幅のある遺物が出土しており、古墳の詳細な時期比定を行うことは難しい。しかし、墓道床面から出土した須恵器杯身(154)は、石室破壊時の擾乱土と考えられる最下層からの出土で、完形に近い状態に接合・復元できた。10号墳出土品の中では、古く位置づけられることから、埋葬時期を検討する際の有力な材料ではないかと考えられるので、古墳の築造時期を筆ヶ崎2期もしくは3期(2期と3期の境頃)と推定しておく。(水橋)

【註】

- 1) 三重県埋蔵文化財センター2019『筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡(第4・5・7次)発掘調査報告』
- 2) 石室の石材については、三重県立博物館の津村善博氏の鑑定により、主体は砂岩で、花崗岩・湖東流紋岩・チャート・ホルンフェルス・スカルン等も含まれることが判明した。石材の形状や大きさから、員弁川を中心とした近隣の河川で獲得していたと考えられるとご教示を得た。

【類品出土窯】

H-15号窯：尾野善裕1997『尾張・西三河(窯跡)猿投・尾北・その他』『古代の土器5-1 7世紀の土器(近畿東部・東海編)』古代の土器研究会

H-16号窯：尾野善裕1997『尾張・西三河(窯跡)猿投・尾北・その他』『古代の土器5-1 7世紀の土器(近畿東部・東海編)』古代の土器研究会

H-44号窯：名古屋市教育委員会1979『光真寺古窯跡発掘調査報告書』(名古屋文化財調査報告VI)

I-17号窯：愛知県教育委員会1980『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告(1)』

I-101号窯：尾野善裕1997『尾張・西三河(窯跡)猿投・尾北・その他』『古代の土器5-1 7世紀の土器(近畿東部・東海編)』古代の土器研究会

K-11号窯：三好町教育委員会1992『黒鉄11号窯発掘調査報告書』(三好町立歴史民俗資料館文化財報告No.5)

NN259号窯：名古屋市教育委員会1989『NN-259号窯跡発掘調査報告書』

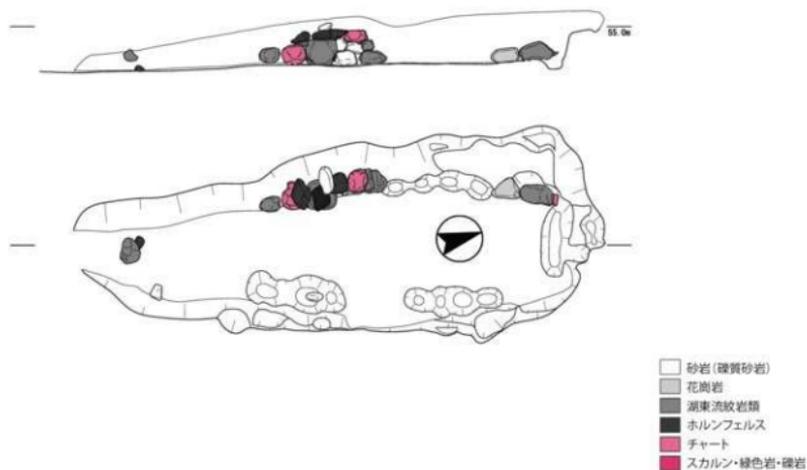
S-78号窯：愛知県建設部・小牧市教育委員会1979『桃花台ニュータウン遺跡調査報告II』

S-112号窯：小牧市教育委員会1994『愛知県小牧市大字野口地内 篠岡112号窯発掘調査報告書』

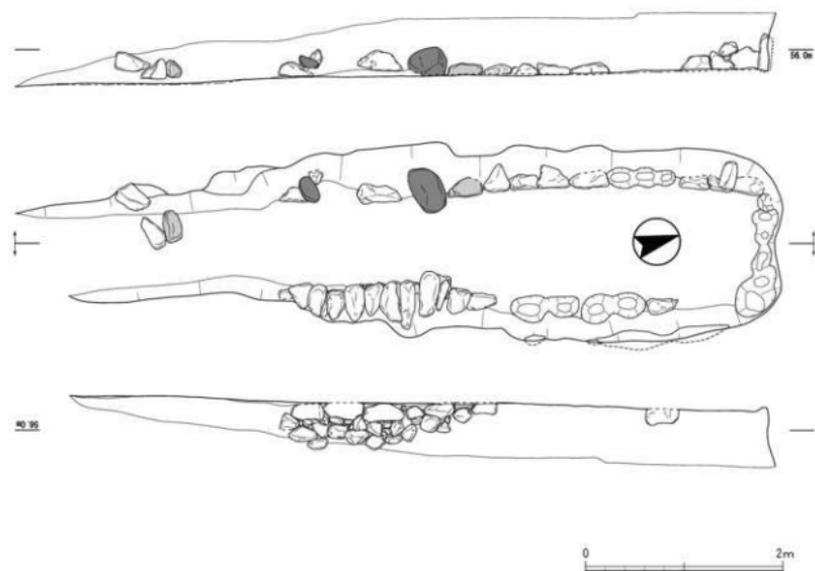
岡山6号窯：四日市市教育委員会1971『岡山古窯址群発掘調査報告』(四日市市埋蔵文化財調査報告5)

西ヶ谷2号窯：四日市市遺跡調査会1992『西ヶ谷古窯跡群』(四日市市遺跡調査会文化財調査報告VII)

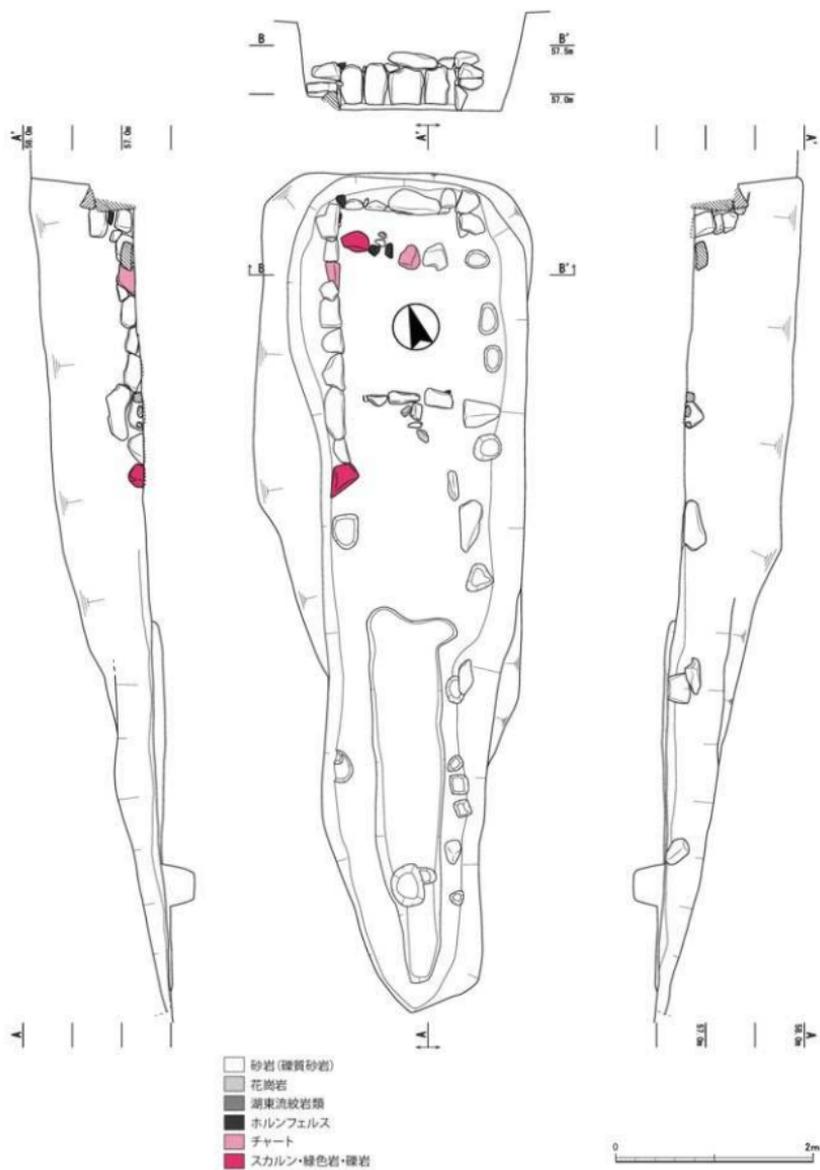
【1号墳】



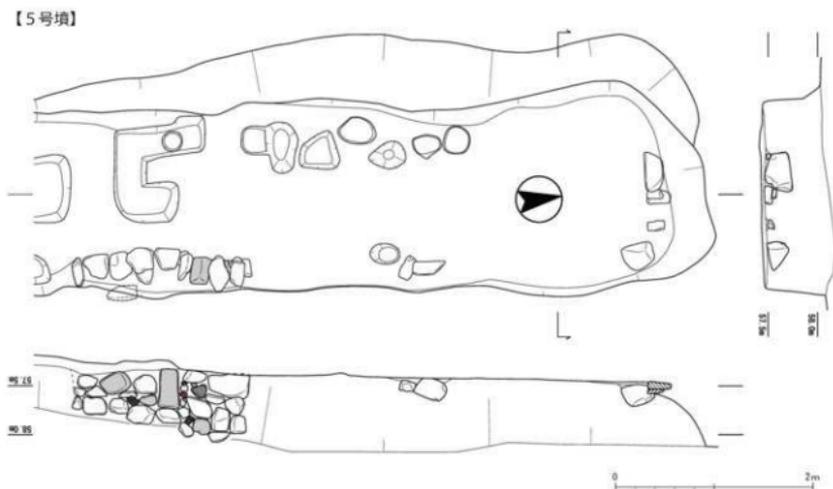
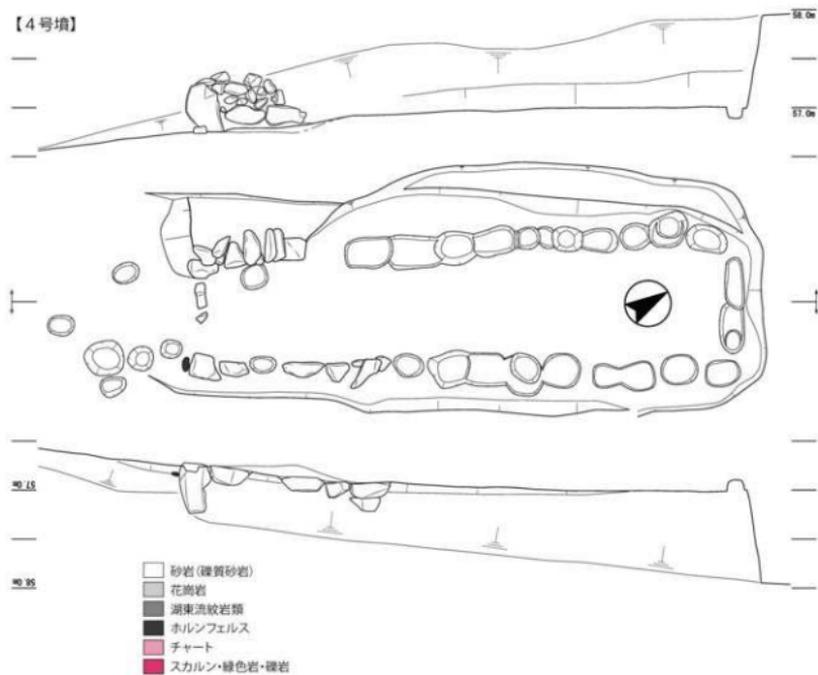
【2号墳】



第39図 筆ヶ崎1号墳・2号墳 石室使用石材 (1:50)

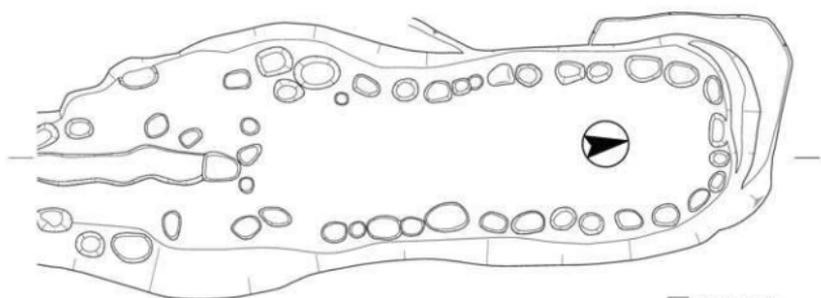
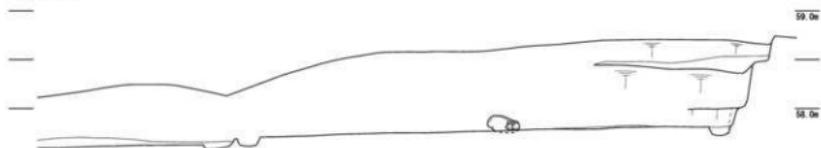


第40図 筆ヶ崎3号墳 石室使用石材 (1 : 50)



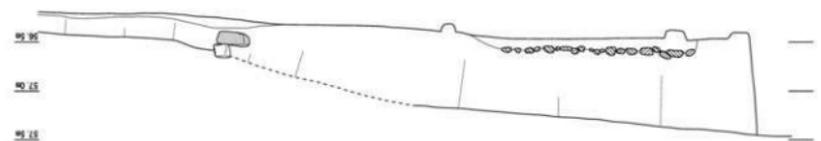
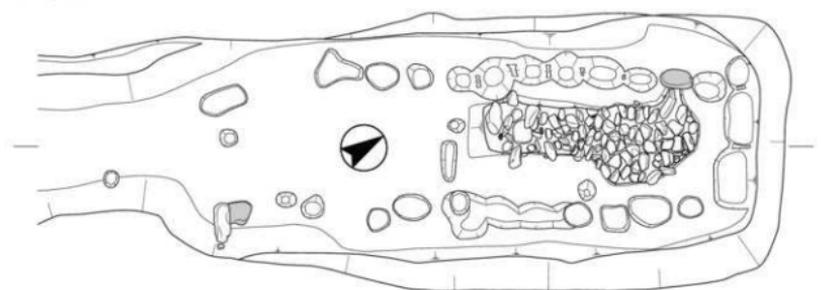
第41図 筆ヶ崎4号墳・5号墳 石室使用石材 (1:50)

【6号墳】



- 砂岩 (礫質砂岩)
- 花崗岩
- 湖東流紋岩類
- ホルンフェルス
- チャート
- スカルン・緑色岩・礫岩

【10号墳】

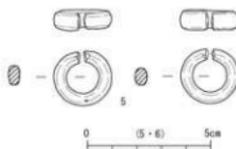


0 2m

第42図 筆ヶ崎6号墳・10号墳 石室使用石材 (1:50)

1号墳 (1~28)

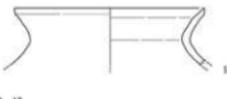
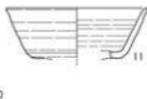
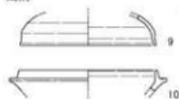
石室



甕道・墓道



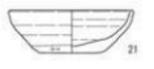
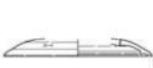
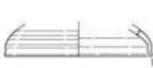
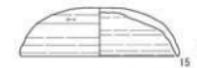
周溝



埴師



包含層・表土

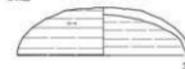


2号墳 (29~65)

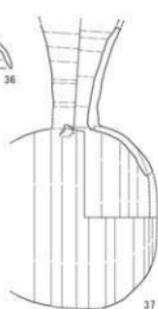
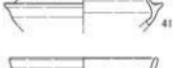
石室



甕道



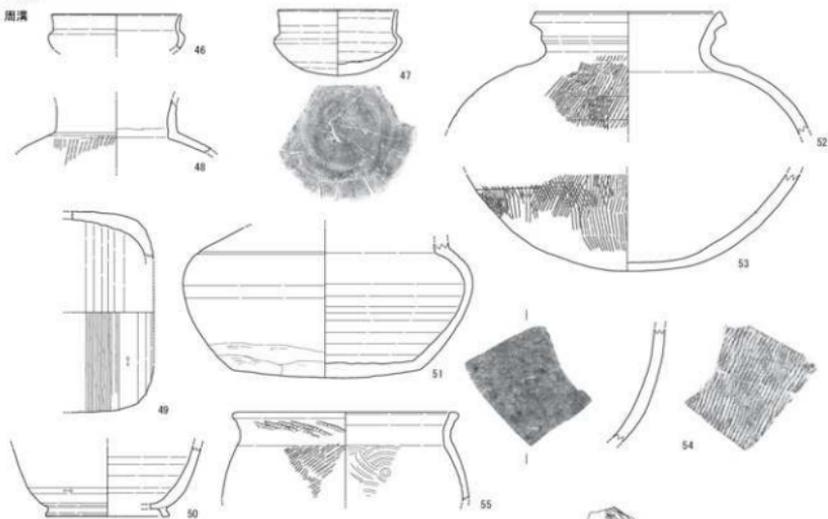
周溝



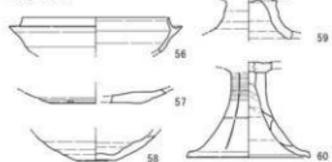
第43図 筆ヶ崎古墳群 出土遺物実測図1 (1:4、1:2)

2号墳

周溝



墳頂・墳丘



包含物・表土



3号墳 (66~76)

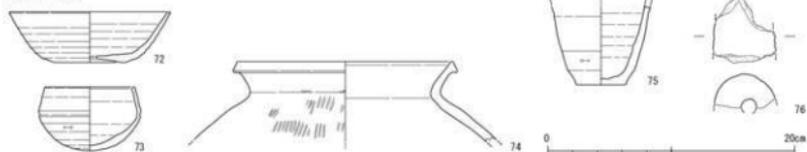
石室



周溝



包含物・表土

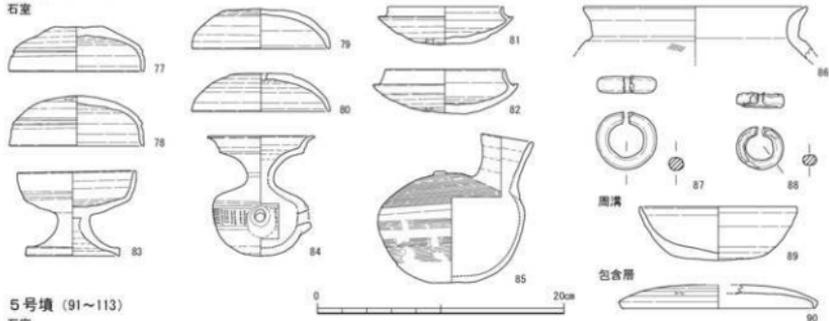


0 20cm

第44図 筆ヶ崎古墳群 出土遺物実測図2 (1:4)

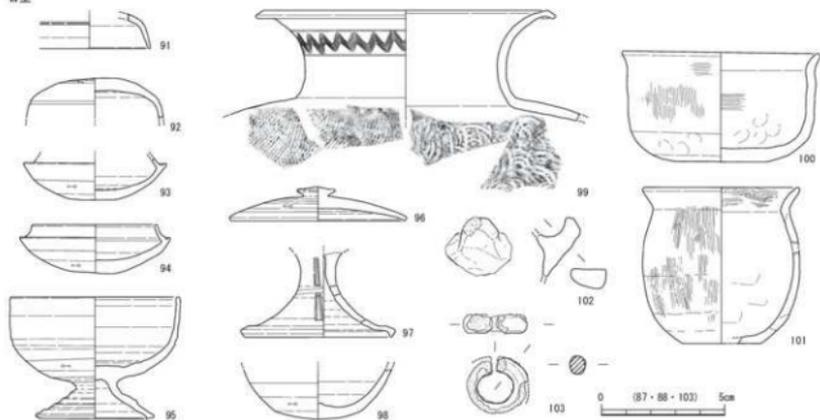
4号墳 (77~90)

石室

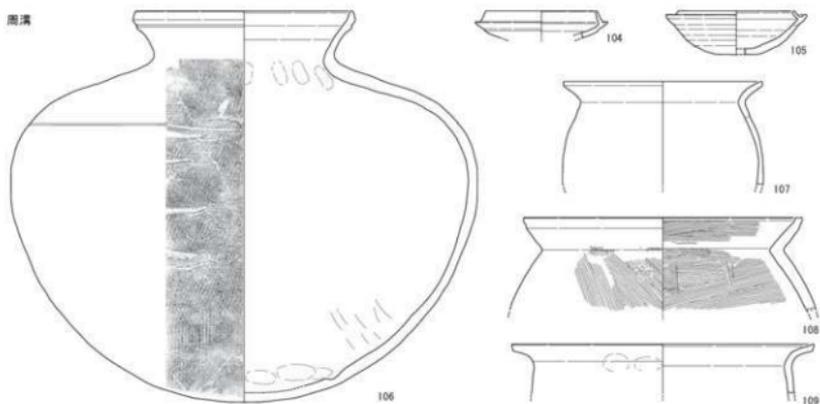


5号墳 (91~113)

石室

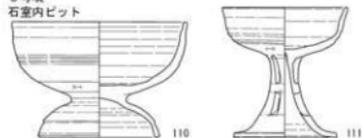


周溝

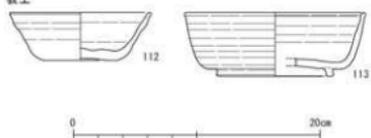


第45図 筆ヶ崎古墳群 出土遺物実測図3 (1:4、1:2)

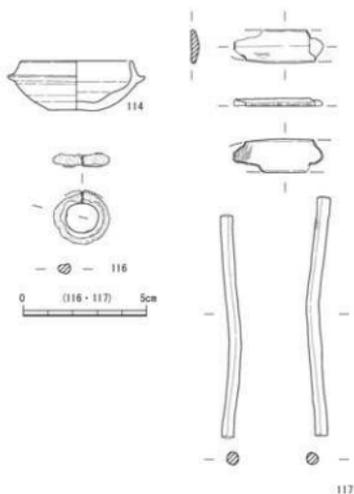
5号墳
石室内ビット



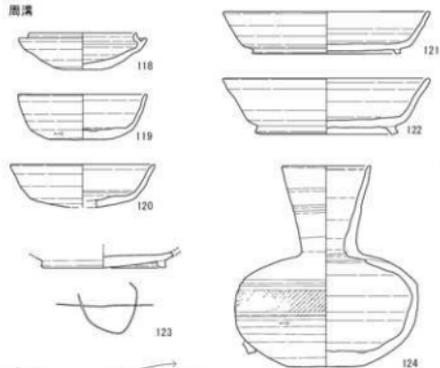
教士



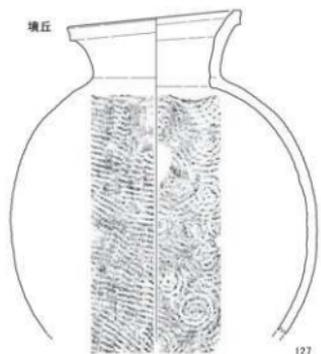
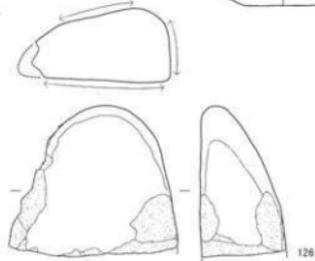
6号墳 (114~140)
石室



周溝

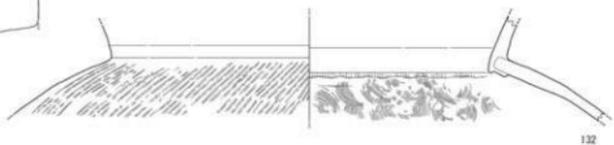
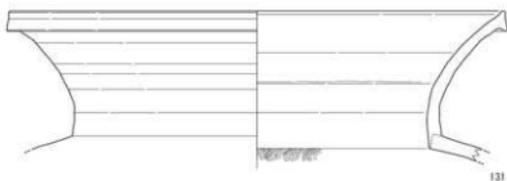
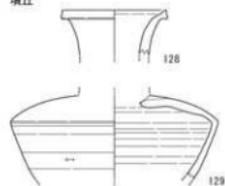


ビット

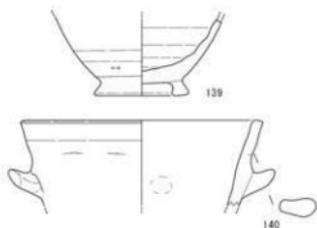
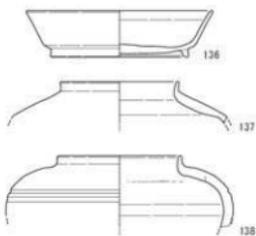
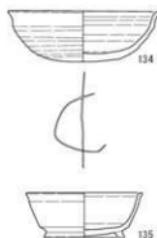


第46図 筆ヶ崎古墳群 出土遺物実測図4 (1:4、1:2)

6号墳
墳丘



包舎帯・表土



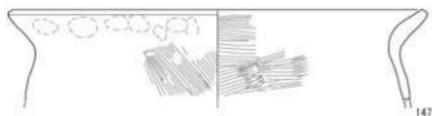
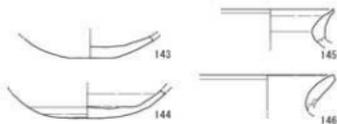
7号墳 (141)

周溝



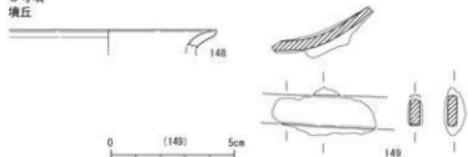
8号墳 (142~152)

周溝

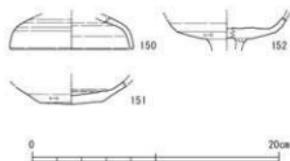


第47図 筆ヶ崎古墳群 出土遺物実測図5 (1:4)

8号墳
墳丘

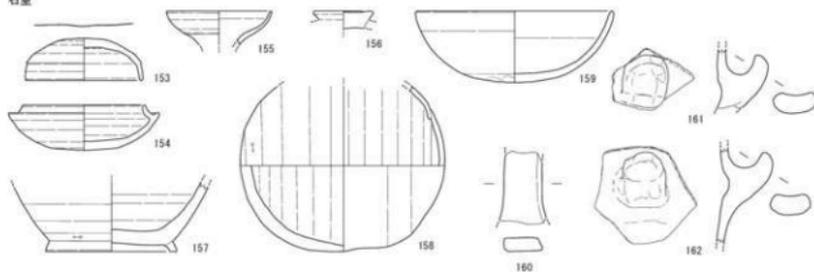


包舎層・表土

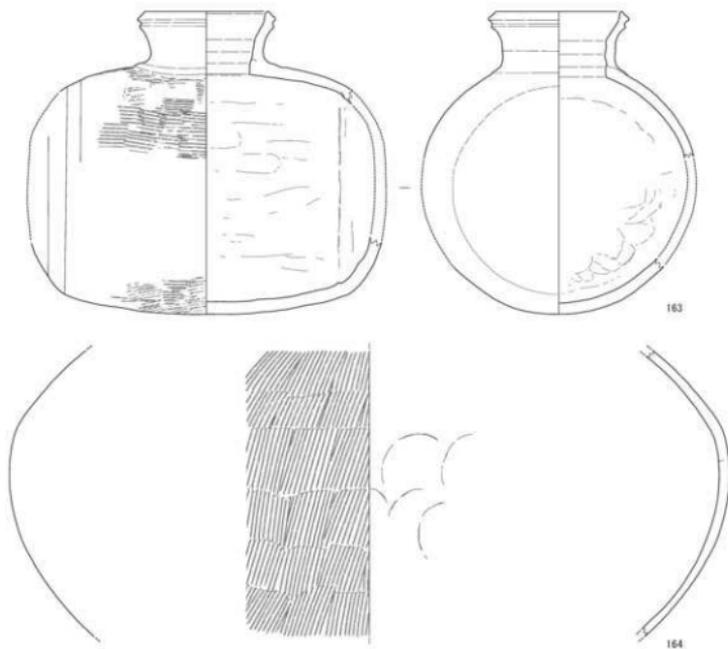


10号墳 (153~173)

石室

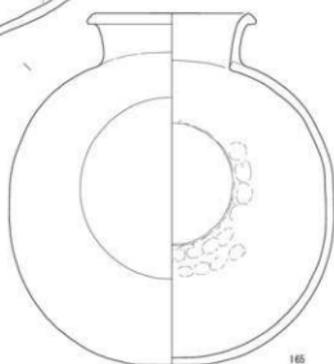
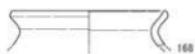
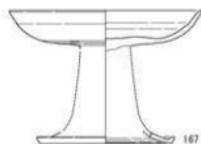
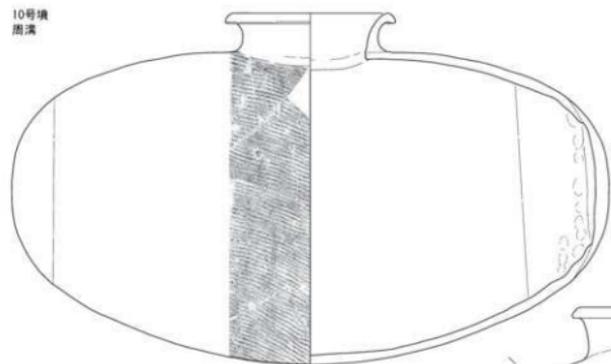


周溝

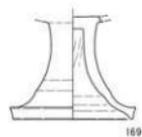


第48図 筆ヶ崎古墳群 出土遺物実測図6 (1:4、1:2)

10号墳
周溝



包含帯・表土



第49図 筆ヶ崎古墳群 出土遺物実測図7。(1:4)

V 筆ヶ崎西遺跡

確認した遺構は、竪穴建物76棟¹⁾、掘立柱建物52棟²⁾、塙もしくは櫓4列のほか、土坑・溝・墓などである。出土した遺物は、主として飛鳥・奈良時代の土師器・須恵器で、ほかに製塩土器・土鍾・鉄製品などがある。各遺構・遺物の詳細については、遺構一覧表(第1～9表)・遺物観察表(第10～25表)を合わせて参照されたい。各遺構の時期については、遺構一覧表および第七章に示した。

1 竪穴建物

SH2(第50～52・54・55・164図) 大型の竪穴建物で、掘形の平面形は長辺7.2m×短辺6.0mの長方形を呈すが、壁周溝の位置からみて、内部の空間は5.2m四方のほぼ正方形であったと考えられる。緩やかな斜面の山側を深く掘り込んで造られており、深い部分では0.7mほどもある。建物に伴うことが確実視できる柱穴は認められなかったが、床面から鍛冶炉を2基検出した。工房的な施設とみられる。

SH2は、先行して存在したほぼ同じ規模の竪穴建物SH10を人為的に埋めた後に、その上からやや西へ位置をずらして掘り込んで建てられている。床面はSH10よりも20～25cmほど高く、SH10と平面的に重複している部分では、床面に粗い砂質土を5cmほど貼って固めていた。鍛冶工房として防湿を意識していた可能性がある。

床面の四周から、深さ8cmほどの壁周溝を検出した。東西の壁周溝は、掘形の壁から若干離れた位置にあり、壁際には礫を多く含む土が堆積していた。壁周溝に板状のものを立て、掘形と壁の間に混雑土が詰められていたとも考えられる。やはり防湿を意識していた可能性がある。

北辺中央の壁際には、焼土塊や炭化物の集中が認められ、須恵器無台杯2点(187・188)に加えて、土師器甕(205)の破片がまとめて出土していることから、甕が据えられていたと考えられる(第54図)。

鍛冶炉は2基とも同じ形態である。炉床には粘土を貼っていると思われ、長径40～50cm、短径25～30cm、深さ10cmほどの範囲が楕円形に窪んでいる。炉

の内面は黒色を呈し、非常に固く焼け締まっているが、片口状にやや突出した北端は、焼け方が弱く、この部分に羽口が設置されていたと推測される。西側の鍛冶炉1では、内部に椀形鍛冶滓(208)が残されていた。東側の鍛冶炉2の埋土からも小型の鉄滓が出土した。

また、2基の鍛冶炉の間からは、直径45cm、深さ15cmほどの小型の土坑が検出され、埋土上層には炭化物を多く含んでいた。埋土を篩にかけてところ、微細な鉄滓や鍛冶剥片(771)が多量に検出され、中には粒状滓(770)も含まれていたことから、この小土坑も鍛冶の作業に関わる施設であったと考えられる。鍛冶炉1の西側からは、長径10～25cmほどの礫が集積的に出土したが、これらについても鍛冶との関連が想定でき、鍛冶炉の形態を考え併せるならば、SH2では小型の鉄製品を製作するような鍛錬鍛冶が行われていた可能性が高い³⁾。鉄滓などの分析については第六章を参照されたい(分析No.1～14)。

建物埋土からは、須恵器杯H蓋(174・175)・杯H身(181・182)・杯蓋(176～180)・無台杯(183～188)・杯B(189～196)・プラスチック瓶(197)、土師器杯皿類(198～201)・甕(202～205)など多量の土器と小型の鉄滓が出土した。また、床面付近の埋土については、篩にかけて上で磁石を用いて精査したが、5mmを越えるような大きさの鉄片はほとんど検出されなかった。

須恵器の杯H蓋・杯H身は小型化が著しく、杯蓋には杯蓋g(179)と杯蓋b(180)が共存する。床面直上出土の無台杯2点(187・188)は、ほぼ同形同大で、底部はヘラ切り無調整である。胎土や焼成具合が若干異なるが、ともに在地窯系の製品とみられる。192は底部が高台下端面よりも下側へ張り出すいわゆる「突出底」の杯Bで、195・196は高台を欠くが杯Bと推定した。197は高台を有するプラスチック瓶である。

須恵器は、在地窯系と猿投窯系の製品が大半を占めており、ほぼ半々の割合で混在しているようにみえる。猿投窯系のものでして確実視できるのは、

175・177・180～182・197で、178・186・189・192・193・195・196もその可能性が高い。これらのうち、小型化した杯HはI-17号窯、「突出底」の杯BはN N 288号窯、高台付のフラスコ瓶はC-2号窯やS-112号窯から類品が出土している。その他の須恵器は、基本的に在地窯系と目されるが、小型化した杯H蓋(174)は胎土の質感や形状からみて湖西産であろう。

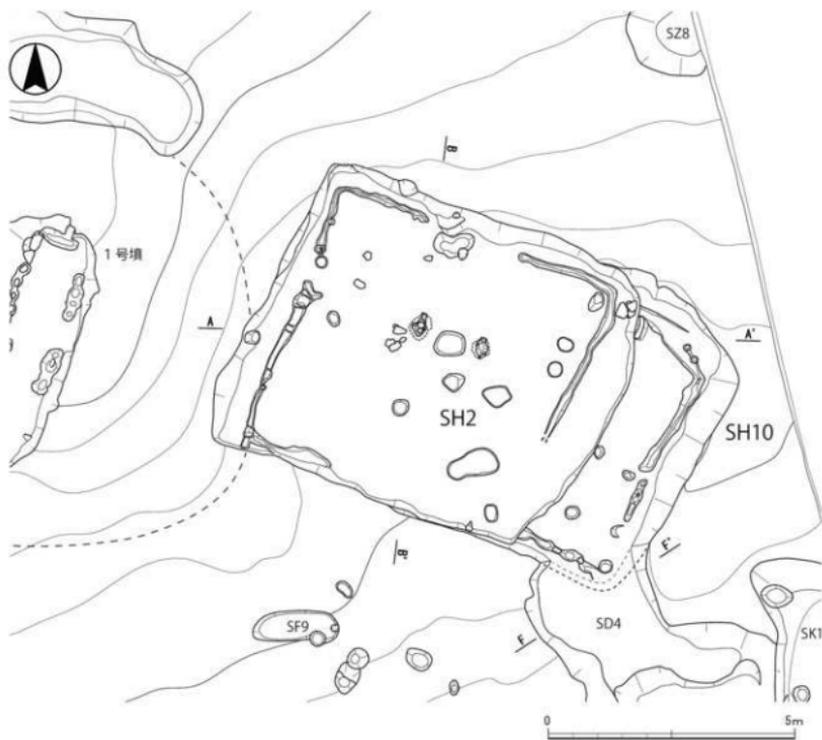
土師器の杯皿類はいずれも小片で、全体の形状がわかるものはない。198は外面のみ黒色を呈する。土師器甕は、内外面の調整が風化して観察できないも

のも多いが、西壁周溝脇の床面直上から出土した甕(202)の刷毛目は非常に細かい。

SH10 (第50・51・53・54・165図) SH2よりも古い堅穴建物。平面的には2/3程度重複するが、床面はSH2よりも低いため、完存していた。

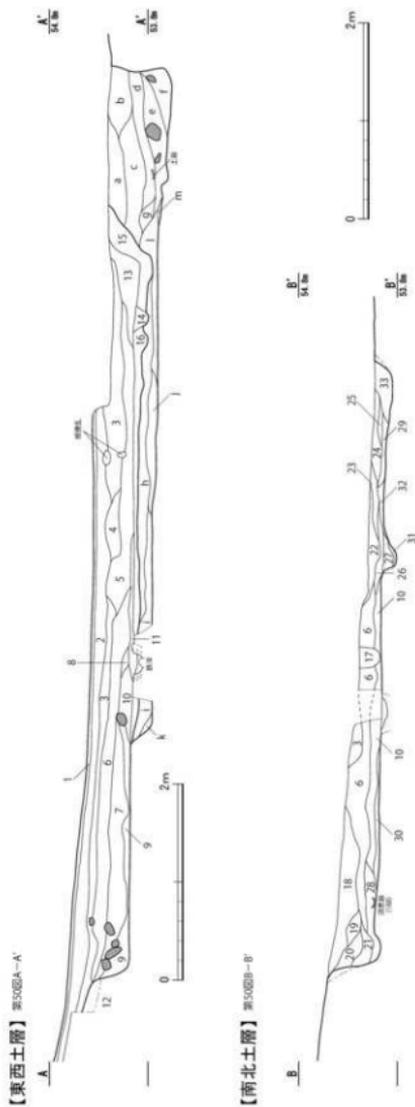
当初はSD4と一連の遺構と認識しており、埋土掘削中に別遺構と判明してからは重複状況を精査したが、新旧関係を解明することはできなかった。

平面形は長辺7.0m×短辺6.1mの長方形を呈している。規模はSH2とほぼ同じで、建物に伴うことが確実視される柱穴が認められないことも共通す



第50図 SH2・10遺構図1 (1:100)

第51図 SH2・10遺構図2 (1:50)



【東西土層】第50節A-A'

【南北土層】第50節B-B'

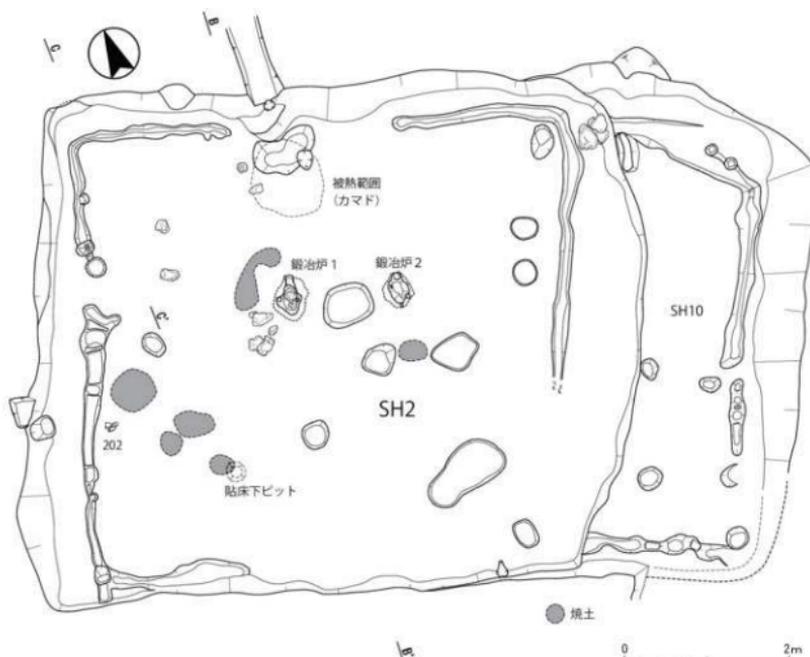
- 1: 黄土 (原状土)
 - 2: 2.5YR5/4に乏しい赤褐色 シルト～細粒砂 (粘質土) 1～5cmの厚さ20～30%含む
 - 3: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 3～5cmの厚さ少量含む
 - 4: 2.5YR4/4赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 2～3cmの厚さ少量含む
 - 5: 2.5YR3/4黄褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 2～4cmの厚さ少量含む
 - 6: 2.5YR4/4赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 2～4cmの厚さ少量含む
 - 7: 2.5YR4/4赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 2～4cmの厚さ少量含む
 - 8: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 2～4cmの厚さ少量含む
 - 9: 2.5YR3/4黄褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 2～4cmの厚さ少量含む
 - 10: 2.5YR3/4黄褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 2～4cmの厚さ少量含む
 - 11: 2.5YR3/4黄褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 2～4cmの厚さ少量含む
 - 12: 2.5YR3/4黄褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 2～4cmの厚さ少量含む
 - 13: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 2～4cmの厚さ少量含む
 - 14: 2.5YR4/4赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 2～4cmの厚さ少量含む
 - 15: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 2～4cmの厚さ少量含む
 - 16: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 2～4cmの厚さ少量含む
 - 17: 2.5YR3/4黄褐色 細粒砂～細粒砂 0.2～0.5cmの厚さ20%、1～2cmの厚さ少量含む
 - 18: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 1～2cmの厚さ少量含む
 - 19: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 1～2cmの厚さ少量含む
 - 20: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 1～2cmの厚さ少量含む
 - 21: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 1～2cmの厚さ少量含む
 - 22: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 1～2cmの厚さ少量含む
 - 23: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 6～7cmの厚さ50%以上含む
 - 24: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 1cmの厚さ少量含む
 - 25: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 1cmの厚さ少量含む
 - 26: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 1cmの厚さ少量含む
 - 27: 2.5YR4/4黄褐色 シルト～細粒砂 (粘質土) 1～2cmの厚さ少量含む
 - 28: 2.5YR3/4黄褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 1～4cmの厚さ少量含む
 - 29: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 3～7cmの厚さ少量含む
 - 30: 5YR4/4に乏しい赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 粘土層状に少量含む
 - 31: 2.5YR3/4黄褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 1cmの厚さ少量含む
 - 32: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 1cmの厚さ少量含む
 - 33: 2.5YR3/4黄褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 1cmの厚さ少量含む
- <#-m>=SH10埋土層>
- a: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 2～5cmの厚さ3～5%含む
 - b: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～細粒砂 (中砂質土) 0.5cmの厚さ粘土層を少量含む
 - c: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～細粒砂 (粘質土) 0.5cmの厚さ粘土層を少量含む
 - d: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～細粒砂 (中砂質土) 土層含む
 - e: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～細粒砂 (粘質土) 2～4cmの厚さ3～7%含む
 - f: 2.5YR4/4赤褐色 シルト～細粒砂 (粘質土) 1cmの厚さ粘土層を少量含む
 - g: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 0.5cmの厚さ粘土層を少量含む
 - h: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 5YR4/6赤褐色 シルト～細粒砂プロック (1cm)を1～2%含む
 - i: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～細粒砂 (粘質土) 5YR4/6赤褐色 シルト～細粒砂プロック (1cm)を1～2%含む
 - j: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～細粒砂 (粘質土) 0.5cmの厚さ粘土層を少量含む
 - k: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～細粒砂 (粘質土) 0.5cmの厚さ粘土層を少量含む
 - l: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 2.5YR3/4黄褐色シルト～細粒砂を厚さ約に20%ほど含む
 - m: 2.5YR4/6赤褐色 シルト～細粒砂 (粘質土) しまり強い

るが、内部に鍛冶炉は設けられていなかった。床面の四周から、深さ7cmほどの壁周溝を検出した。

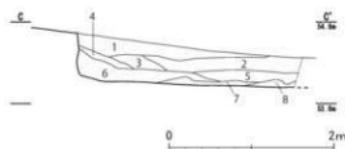
北東隅部付近で竈を検出した。基底部分幅0.7m×奥行0.8m、高さは12cmほどが残存していた。構築土は褐色系の粘質土で、床に赤変した被熱硬化面、焚口の前面に炭化物や焼土塊の広がりを確認した。なお、竈構築土除去後、小土坑を検出したが性格は不明である。竈付近からは土師器製の破片がまとめて出土している。

遺物については、当初SH4出土として取り上げたもののうち、出土位置からみてSH10に伴う可能性が高いもの(216・218・222・225・232～235・245)を抽出してみたところ、SH10のもののみならずも不自然なところはないと考えられたため、ここではSH10出土として取り上げたものと一括して取り扱うこととした。

出土遺物には、須恵器杯蓋(209～216)・杯H身(217～219)・無台杯(220～225)・杯B(226～232)・

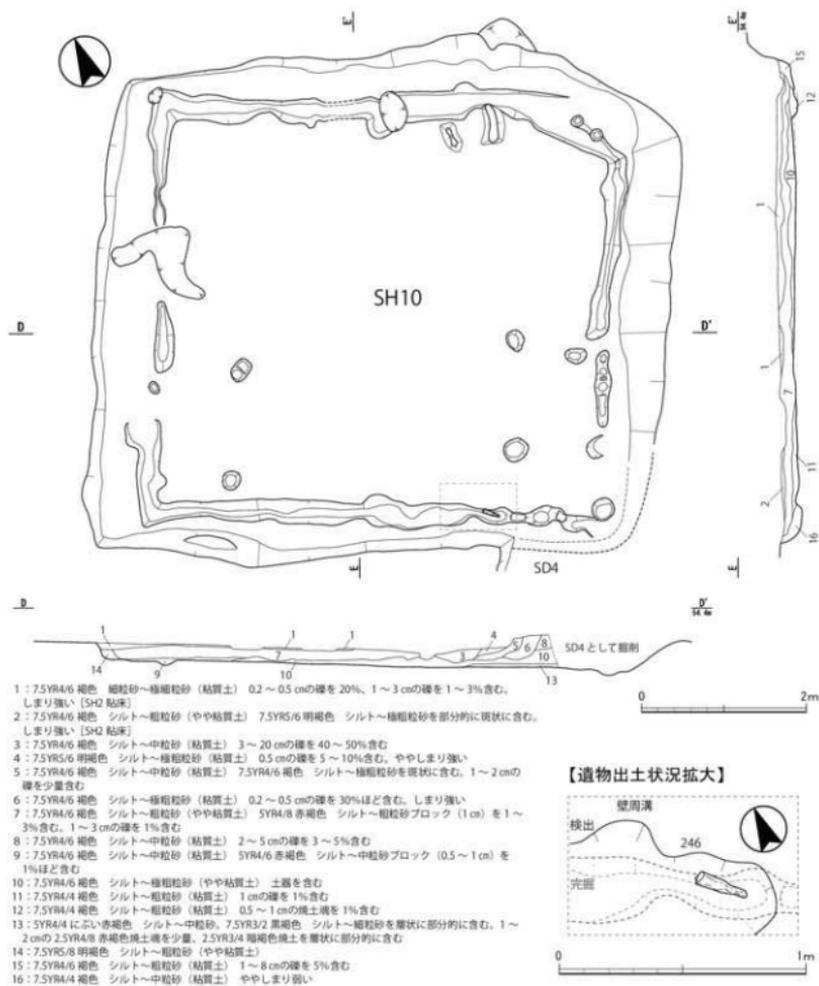


【北西部土層】



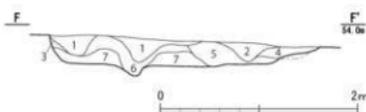
- 1 : 7.SYR4/3 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 1～4cmの礫少量含む。炭化物と焼土を極少量含む。
- 2 : 7.SYR4/4 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 1～3cmの礫少量含む。炭化物を極少量含む。
- 3 : 7.SYR4/6 褐色 シルト～粗粒砂 (粘質土) 1～4cmの礫少量含む。炭化物を極少量含む。
- 4 : 7.SYR4/4 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 1～2cmの礫少量含む。炭化物と焼土を少量含む。
- 5 : 7.SYR4/6 褐色 シルト～極粗粒砂 (粘質土) 1～3cm礫少量含む。炭化物を基質に少量含む。焼土を少量含む。
- 6 : 7.SYR3/3 暗褐色 シルト～極粗粒砂 (粘質土) 1～3cm礫少量含む。炭化物と焼土を基質に10%ほど含む。
- 7 : 7.SYR3/4 暗褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 炭化物と焼土を極少量含む。
- 8 : 7.SYR3/3 暗褐色 シルト～中粒砂粘質土 粘質強い。炭化物と焼土を少量含む。

第52図 SH2遺構図(1:60)



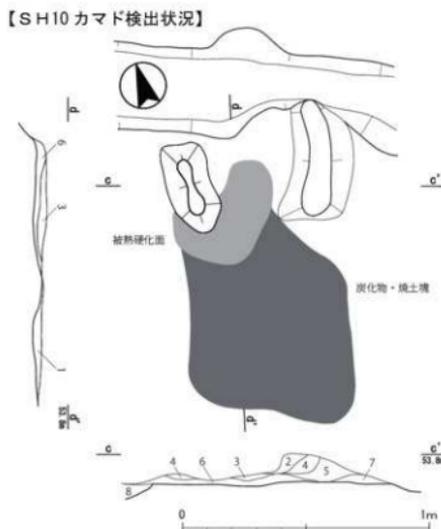
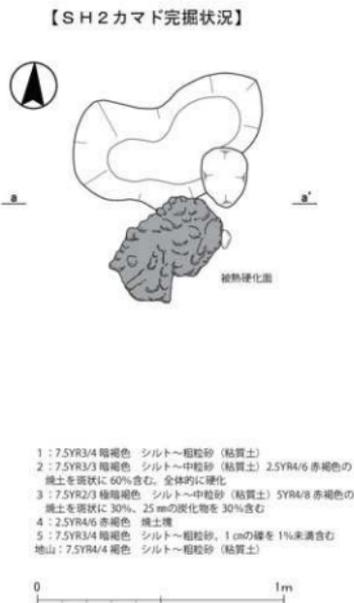
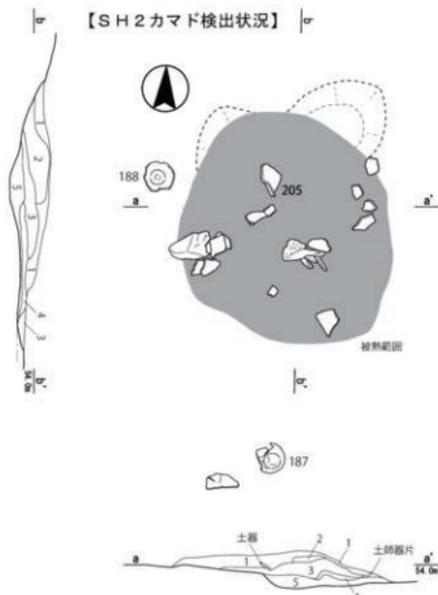
- 1 : 7.5YR4/6 褐色 細粒砂～極細粒砂 (粘質土) 0.2～0.5 cmの礫を20%、1～3 cmの礫を1～3%含む。しまり強い [SH2 粘床]
- 2 : 7.5YR4/6 褐色 シルト～粗粒砂 (やや粘質土) 7.5YR5/6 明褐色 シルト～極細粒砂を部分的に斑状に含む。しまり強い [SH2 粘床]
- 3 : 7.5YR4/6 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 3～20 cmの礫を40～50%含む
- 4 : 7.5YR5/6 明褐色 シルト～極細粒砂 (粘質土) 0.5 cmの礫を5～10%含む。ややしまり強い
- 5 : 7.5YR4/6 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 7.5YR4/6 褐色 シルト～極細粒砂を斑状に含む。1～2 cmの礫を少量含む
- 6 : 7.5YR4/6 褐色 シルト～極細粒砂 (粘質土) 0.2～0.5 cmの礫を30%ほど含む。しまり強い
- 7 : 7.5YR4/6 褐色 シルト～粗粒砂 (やや粘質土) 5YR4/8 赤褐色 シルト～粗粒砂ブロック (1 cm) を1～3%含む。1～3 cmの礫を1%含む
- 8 : 7.5YR4/6 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 2～5 cmの礫を3～5%含む
- 9 : 7.5YR4/6 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 5YR4/6 赤褐色 シルト～中粒砂ブロック (0.5～1 cm) を1%ほど含む
- 10 : 7.5YR4/6 褐色 シルト～極細粒砂 (やや粘質土) 土器を含む
- 11 : 7.5YR4/4 褐色 シルト～粗粒砂 (粘質土) 1 cmの礫を1%含む
- 12 : 7.5YR4/4 褐色 シルト～粗粒砂 (粘質土) 0.5～1 cmの塊土塊を1%含む
- 13 : 5YR4/4 に近い赤褐色 シルト～中粒砂。7.5YR3/2 黒褐色 シルト～細粒砂を層状に部分的に含む。1～2 cmの2.5YR4/8 赤褐色塊土塊を少量。2.5YR3/4 暗褐色塊土を層状に部分的に含む
- 14 : 7.5YR5/8 明褐色 シルト～粗粒砂 (やや粘質土)
- 15 : 7.5YR4/6 褐色 シルト～粗粒砂 (粘質土) 1～8 cmの礫を5%含む
- 16 : 7.5YR4/4 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) ややしり強い

【SD4】 第50面 F-F'



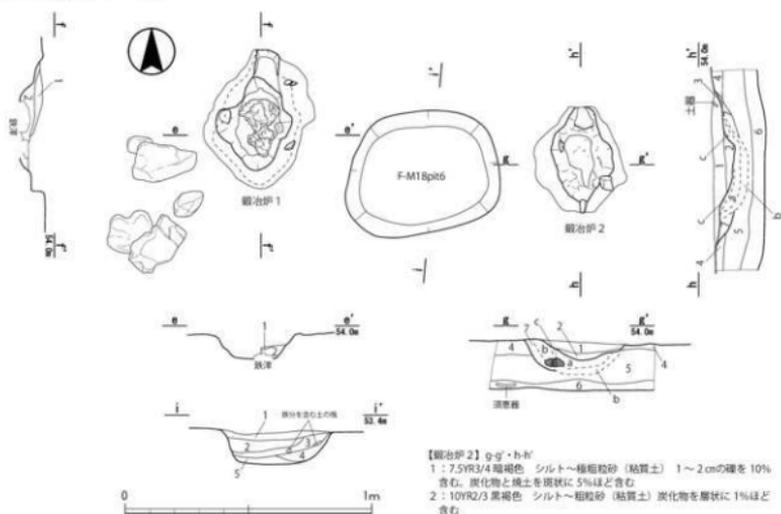
- 1 : 7.5YR4/6 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 10～15 cmの礫を少量含む
- 2 : 7.5YR4/6 褐色 シルト～極細粒砂 (やや粘質土) 2～5 cmの礫を1～3%含む
- 3 : 7.5YR4/4 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 0.5 cmの礫を1～3%含む
- 4 : 7.5YR4/4 褐色 シルト～中粒砂に7.5YR3/4 暗褐色 シルト～極細粒砂ブロック (1 cm) を30%ほど含む (粘質土)
- 5 : 5YR4/6 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 3～5 cmの礫を20～30%含む
- 6 : 7.5YR4/4 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 3～5 cmの礫を20～30%含む
- 7 : 7.5YR4/6 褐色 シルト～極細粒砂 (やや粘質土) 1～2 cmの礫を3%含む
- 地山 : 5YR4/6 赤褐色 シルト～極細粒砂 (粘質土) 1～10 cmの礫を20～40%含む

第53図 SH10・SD4遺構図 (1 : 60)、遺物出土状況1 : 20、SD4土層図1 : 60)



第54図 SH2・10詳細図 (1:20)

【SH2鍛冶炉1・2】



【鍛冶炉1】e-e'・f-f'

- 1: 7.5YR3/4 暗褐色 シルト～粗粒砂（粘質土）焼土を1%未満含む
 2: 10YR2/3 黒褐色 シルト～粗粒砂（粘質土）7.5YR2/2 黒褐色を珪状に20%～30%含む

【F-M18pit6】f-f'

- 1: 7.5YR4/4 褐色 シルト～極粗粒砂（粘質土）2mmの炭化物と1～2mmの焼土粒を珪状に1%含む
 2: 7.5YR3/3 暗褐色 シルト～極粗粒砂（粘質土）2mmの炭化物を珪状に2%、1mmの焼土粒を珪状に1%含む。鉄滓を含む
 3: 7.5YR3/2 黒褐色 シルト～極粗粒砂（粘質土）0.2～1cmの炭化物と1mmの焼土粒を珪状に3～5%含む【炭化物層】
 4: 7.5YR4/6 褐色 シルト～極粗粒砂（粘質土）
 5: 7.5YR4/4 褐色 シルト～中粒砂（粘質土）1cmの礫と0.5cmの炭化物を少量含む

【鍛冶炉2】g-g'・h-h'

- 1: 7.5YR3/4 暗褐色 シルト～極粗粒砂（粘質土）1～2cmの礫を10%含む。炭化物と焼土を珪状に5%ほど含む
 2: 10YR2/3 黒褐色 シルト～粗粒砂（粘質土）炭化物を珪状に1%ほど含む
 3: 7.5YR4/6 褐色 シルト～粗粒砂（粘質土）1cmの礫を少量、2mmの炭化物を少量含む
 4: 7.5YR5/6 明褐色 シルト～極粗粒砂（やや砂質土）7.5YR4/6 褐色 シルト～中粒砂を珪状に1～3%含む。2～5mmの礫を7～10%含む
 =SH10 土層図1層【SH2粘土】
 5: 7.5YR4/6 褐色 シルト～粗粒砂（やや粘質土）1cmの5YR4/8 赤褐色 シルト～粗粒砂ブロックを1～3%、1～3cmの礫を1%含む
 =SH10 土層図7層
 6: 7.5YR4/4 褐色 シルト～中粒砂（粘質土）0.5cmの炭化物と1cmの礫を少量含む=SH10 土層図10層
 7: 7.5YR4/6 褐色 シルト～中粒砂、2mmの極粗粒砂～細礫をごく少量含む【顔形埋土?】

【被熱層】

- a: N2/黒色 1mmの粗粒砂を10%、1～2cmの礫を少量含む【黒色硬化層】
 b: 2.5YR3/6 暗赤褐色【赤色被熱層】
 c: 10YR6/8 明黄褐色～10YR5/2 灰黄褐色【灰黄色硬化層】

【鍛冶炉1・2被熱状況】



第55図 SH2鍛冶炉1・2（1:20、被熱状況1:10）

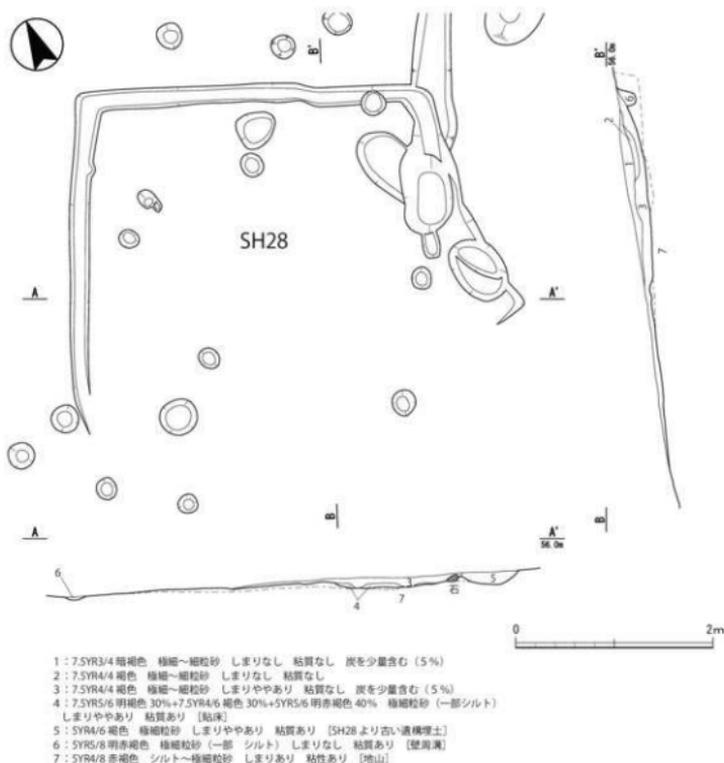
盤? (233)・高杯 (234・235)・長頸壺 (236)・壺 (237・238)、土師器杯 (239・240)・甕 (241~243)・鍋もしくは甌 (244)、製塩土器 (245) などのほか、径3cmほどの鍛冶滓 (分析№15) や、南側の壁周溝上面から出土した長さ23cmほどの型とみられる鉄製品 (246) があるが、土器は小破片が多く、完形品はない。

杯H (217~219) は小型化したものばかりである。杯蓋には杯蓋g (209・210) と杯蓋b (212~216) が共存し、222は底部を欠くが口径と体部の形状から無台杯と推定した。丸底の壺238の底部外面には、不

定方向のヘラケズリ調整痕が残る。

須恵器は、猿投窯系よりも在地窯系の製品が多いようにみえ、湖西窯の製品らしきものを少量含む。猿投窯系須恵器として確定視できるのは、216・217・230~232で、209・220・223・226もその可能性が高い。湖西窯産の須恵器としては、219・225を挙げることができるが、225の産地同定にはやや不安が残る。その他の図示した須恵器は、基本的に在地窯系と考えられるが、228・233は胎土・質感にやや違和感がある。

土師器の杯A (239) の内面には放射状二段暗文が



第56図 SH28遺構図 (1:50)

施されており、宮都の暗文土師器に似る。これに対して、240は異質である。甕(241~243)は、器表面の風化が著しく、器面調整の痕跡を観察できない。244は鍋もしくは甕の把手。245は志摩式製塩土器の小片。

SH28(第56・166図) 5号墳の南(E-U9)の緩斜面で検出した、一辺(北東辺)3.7mの方形を呈する竅穴建物。谷側が流出しているため、直交方向の建物幅は不明だが、北西辺で北隅から3.5mまで壁周溝を確認した。検出面からの深さは20cmで、壁周溝の深さは10cmほどである。

建物に伴うことが確実に視される柱穴や竈は確認されなかったが、部分的に貼床とみられる硬化面を検出した。

埋土から、土師器手付鍋(247)・甕、須恵器杯、椀型鍛冶滓(分析№16)などが出土した。247の把手は、端部を欠いてはいるが、扁平な平面三角形を呈する形状のものであろう。

SH32(第57・58・166図) E-T11で検出した、一辺(北東辺)5.1mの方形を呈する竅穴建物。谷側が流出しているため、直交方向の建物幅は不明だが、北西辺を北隅から3.8mまで確認した。検出面からの深さは10cmで、壁周溝の深さは7cmほどである。

建物に伴うことが確実に視される柱穴や竈は確認されなかったが、西壁付近で焼土坑SF45を検出し、その北側に焼土の広がりを確認した。検出時にはSH32より新しい別遺構としてとらえていたが、竈の残欠の可能性もある。

埋土から、土師器甕(248)や須恵器杯・甕などが出土した。248は小型の甕で、外面の刷毛目は非常に細かい。

SH34(第57・58・166図) E-S12で検出した、一辺(北東辺)3.5mの方形を呈する竅穴建物。谷側が流出しているため、直交方向の建物幅は不明だが、北西辺・南東辺の壁周溝を北東辺の交点からそれぞれ3.25mまで確認した。検出面からの深さは25cmで、壁周溝の深さは6cmほどである。

建物内部に小土坑を多数確認したが、建物に伴う柱穴かどうかは確定できなかった。

竈は西壁で確認した。基底部で幅1.0m×奥行0.6m、高さは8cmほどが残存していた。構築土は褐色

系の粘質土で、床に赤変した被熱硬化面を確認した。なお、竈構築土を取り除くと壁周溝が検出された。

遺物の出土量は比較的多く、須恵器の高杯(250)が竈東袖外側の周溝溝、無台杯(249)が周溝内と底面直上から半分に割れた状態で出土しているが、いずれも生焼けで、残存状態は非常に悪い。また、竈の焚口付近から土師器長胴甕(251)、竈の東袖から別個体の土師器甕が出土した。251の外面に施された刷毛目は比較的細かい。そのほか、埋土から須恵器杯Bの小片も出土した。

SH35(第59・166図) E-W13付近で検出した、長辺4.5m×短辺4.0mの略方形を呈する竅穴建物。検出面からの深さは30cmで、壁周溝の深さは8cmほどである。

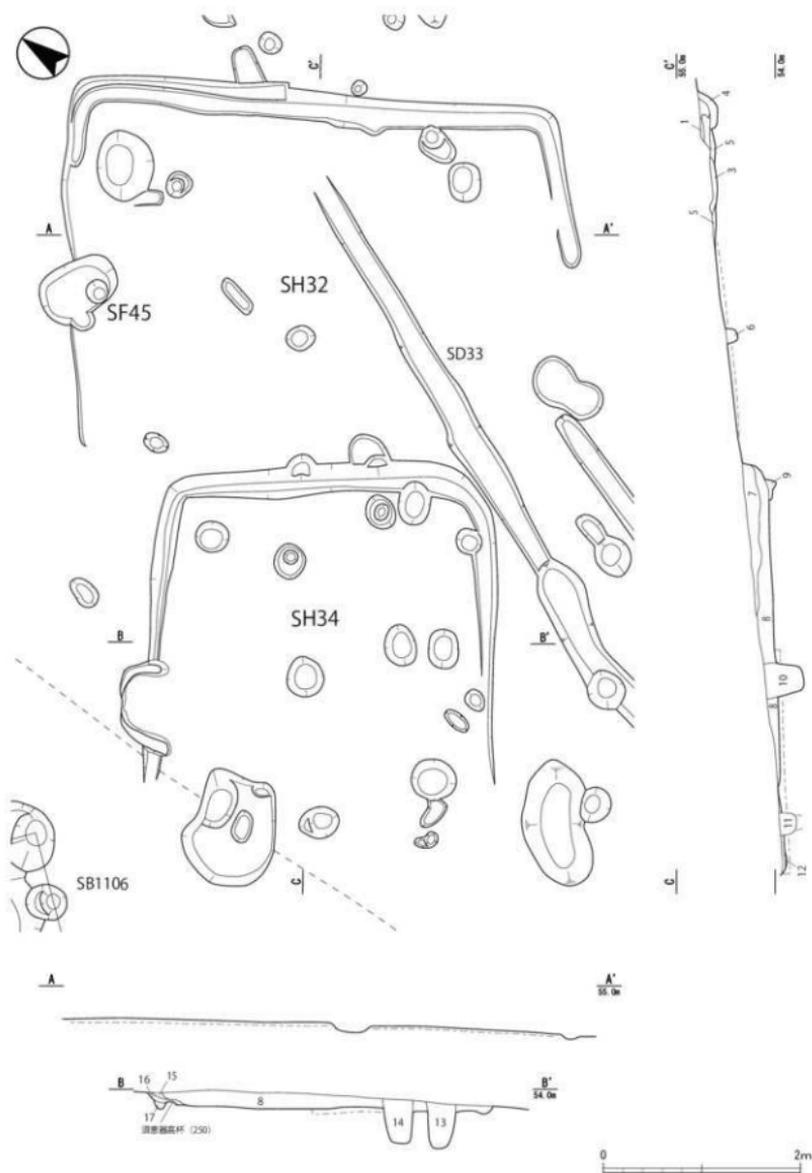
北西壁中央と北東壁中央南寄りの床面直上で焼土と炭の広がりを確認した。北西壁側の焼土は竈の残欠と推定したが、北壁側の焼土は他の竈よりも固く焼結していた。このため、鍛冶炉の可能性も想定し調査したが、鍛冶炉と断定する根拠は見いだせなかった。

建物内部に小土坑を複数確認したが、建物に伴う柱穴かどうかは確定はできなかった。北隅で検出した貯蔵穴の可能性のあるE-W12pit1からは、土師器甕片(257)と共に、ほぼ完形に復元できる須恵器杯H蓋2点(253・254)が、どちらも2つに割れた状態で出土した。そのほか、埋土から土師器の長胴甕・小型甕(256)、須恵器杯H蓋(252)・無台杯(255)・甕などが出土した。

須恵器杯H蓋(252~254)は3点とも狼狽窯系で、無台杯(255)は在地窯系とみられる。杯H蓋のうち254は特に小さいが、252・253も小型で肩部の稜は沈線化しており、H-16号窯と1-17号窯出土品の中間的様相を示す。土師器長胴甕である257の外面に施された刷毛目は、非常に細かい。

SH37(第60・61・166図) E-U14付近で検出した、長辺4.5m×短辺3.3mの長方形を呈する竅穴建物。検出面からの深さは23cmで、壁周溝の深さは5cmほどである。建物内部に小土坑を多数確認したが、建物に伴う柱穴かどうかは確定できない。

北壁で竈を確認した。基底部で幅1.0m×奥行0.7m、高さは8cmほどが残存していた。構築土は褐色



第57圖 SH32・34・SF45遺構圖1 (1:50)

【SH32・SH34】第57窟

- 1: 7.5YR 5/8 暗褐色 極細粒砂 しまりなし 粘質なし
- 2: 7.5YR 4/4 褐色 極細粒砂 しまりなし 粘質なし
- 3: 7.5YR 4/3 褐色 極細～細粒砂 しまりなし 粘質なし [SO33 (攪乱層)]
- 4: 7.5YR 4/6 褐色 シルト～極細粒砂 しまりなし 粘質あり [壁周溝]
- 5: 7.5YR 4/6 褐色 シルト しまりややあり 粘質あり
- 6: 10YR 3/4 暗褐色 シルト～極細粒砂 しまりなし 粘質あり
- 7: 7.5YR 3/3 暗褐色 細粒砂 しまりなし 粘質なし
- 8: 7.5YR 4/6 褐色 細粒砂 しまりややあり 粘質なし
- 9: 7.5YR 3/4 暗褐色 極細粒砂 (一部細粒砂) しまりややあり 粘質なし [壁周溝]
- 10: 7.5YR 4/4 褐色 極細粒砂 しまりなし 粘質なし
- 11: 7.5YR 4/3 褐色 極細粒砂 しまりなし 粘質ややあり
- 12: 7.5YR 4/6 褐色 極細粒砂 しまりややあり 粘質ややあり
- 13: 7.5YR 4/4 褐色 細粒砂 しまりなし 粘質なし
- 14: 7.5YR 4/4 褐色 細粒砂 しまりなし 粘質なし
- 15: 7.5YR 4/4 褐色 極細粒砂 しまりなし 粘質ややあり 長径1cm以下の炭を2%含む
- 16: 7.5YR 4/6 褐色 シルト～極細粒砂 しまりなし 粘質ややあり 溝底藪草秆 (250) 出土
- 17: 7.5YR 4/6 褐色 極細粒砂 しまりややあり 粘質ややあり [壁周溝]

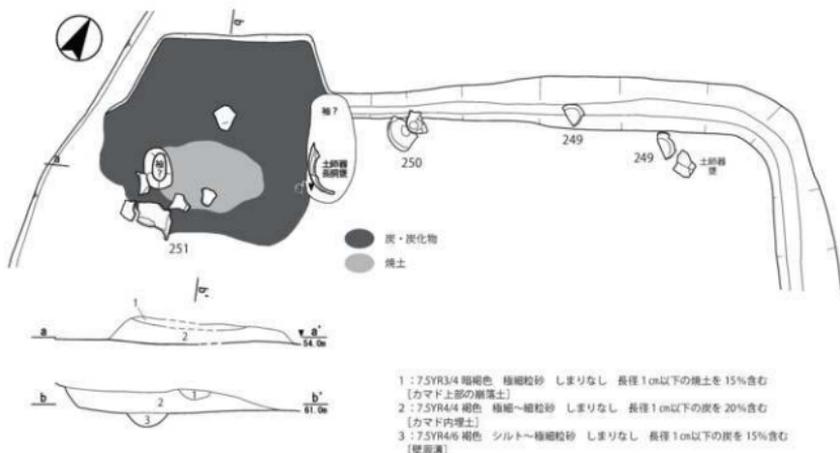
【SF45】



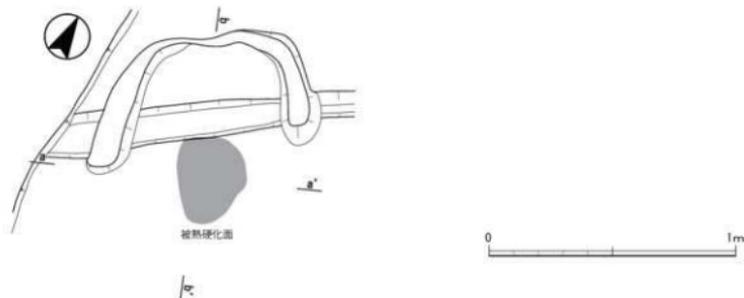
- 1: 7.5YR4/4 褐色粘質土 炭・焼土を含む
- 2: 焼土塊
- 3: 7.5YR4/4 褐色粘質土 7.5YR2/1 黒色粘質土粒と焼土を含む



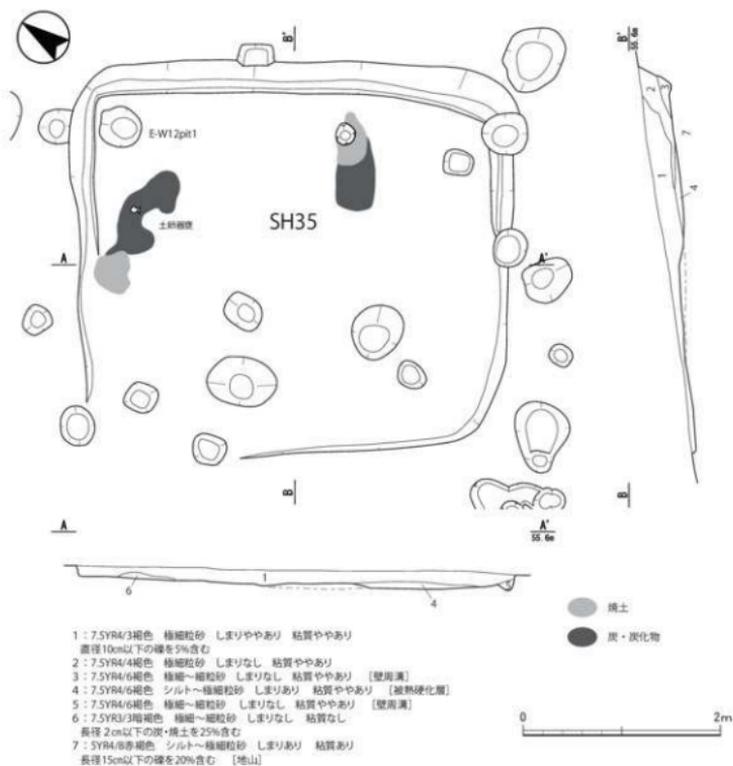
【SH34 カマド検出・遺物出土状況図】



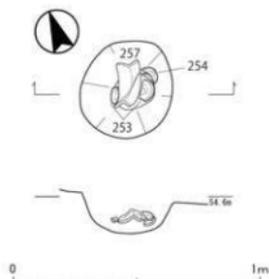
【SH34 カマド完掘状況】



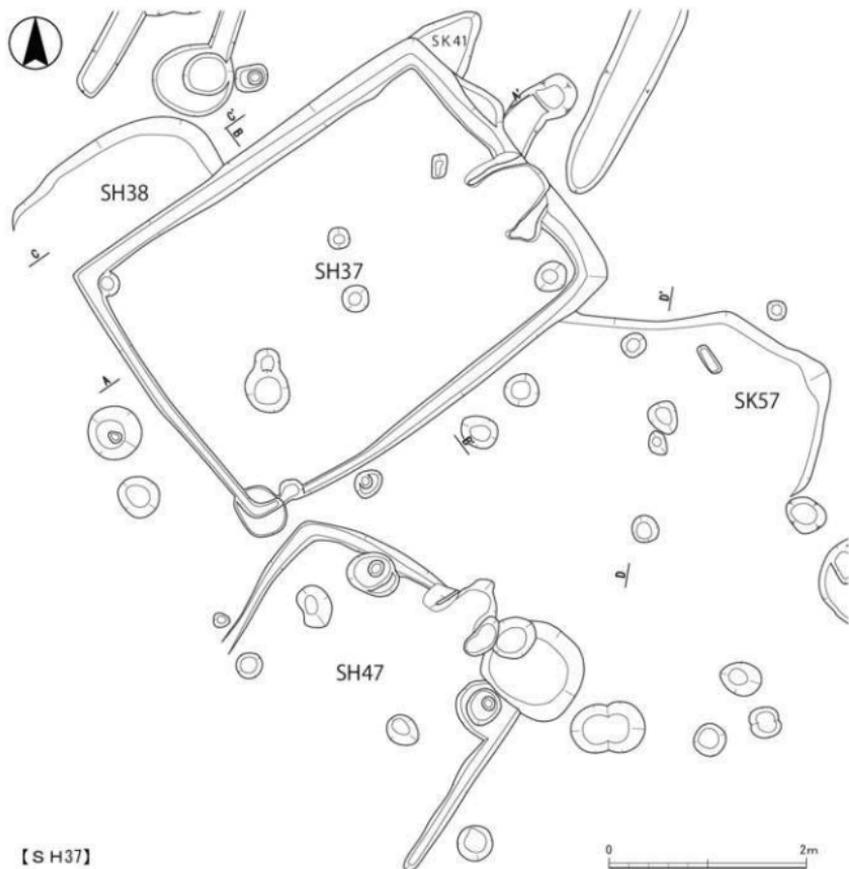
第58図 SH32・34・SF45遺構図2 (1:20)



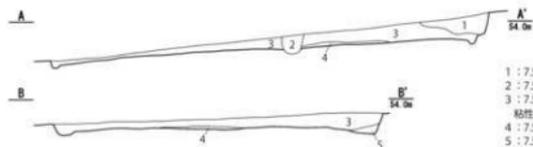
【E-W12 pit1】



第59図 SH35遺構図 (1 : 50、ピット 1 : 20)



【SH37】



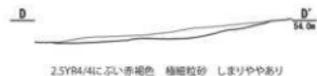
- 1 : 7.SYR4/6褐色土 しまり層 [樹埋風]
- 2 : 7.SYR5/6明褐色粘質土 黒色粒含む
- 3 : 7.SYR3/6明褐色粘質土 直径5mm以下の炭・焼土粒含む
粘性ややあり
- 4 : 7.SYR4/6褐色粘質土 粘性ややあり
- 5 : 7.SYR4/6褐色粘質土 粘性並

【SH38】



7.SYR4/6褐色粘質土 粘性並

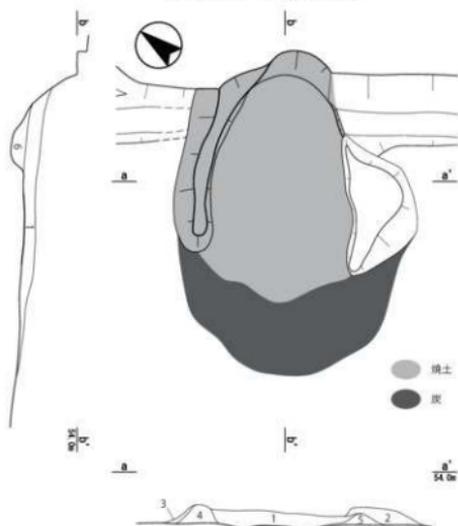
【SK57】



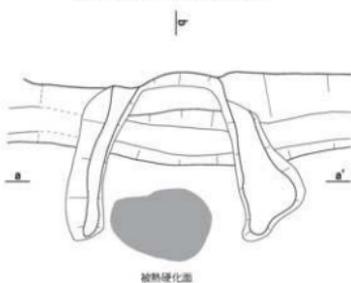
2.SYR4/4C.灰い赤褐色 極細粒砂 しまりややあり

第60図 SH37・38・47・SK57遺構図 (1:50)

【SH37 カマド検出状況】

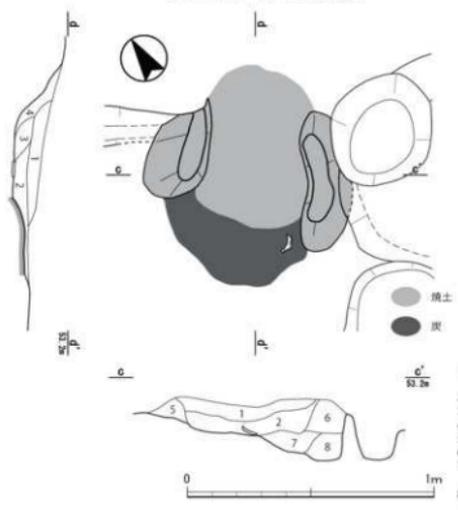


【SH37 カマド発掘状況】

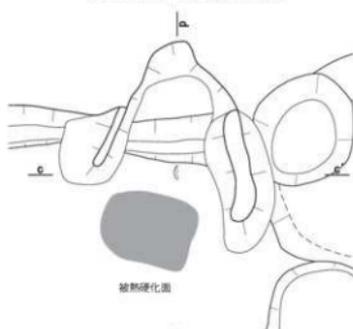


- 1 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細～細粒砂 しまりなし 長径 1cm以下の炭を 25%含む
 2 : 7.5YR4/6 褐色 細粒砂 しまりなし 長径 1cm以下の炭・焼土を 5%含む
 3 : 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 しまりなし 長径 1cm以下の炭を 5%含む
 4 : 7.5YR4/6 褐色 極細～細粒砂 しまりややあり [地部]
 5 : 7.5YR5/6 明褐色 極細～細粒砂 しまりややあり [地部]
 6 : 7.5YR5/6 明褐色 極細粒砂 しまりなし [壁面満]

【SH47 カマド検出状況】



【SH47 カマド発掘状況】



- 1 : 5YR4/4 に近い赤褐色 極細粒砂 しまりなし 長径 1cm以下の焼土を 30%含む [カマド上部の崩落土]
 2 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまりなし 長径 1cm以下の炭を 25%含む
 3 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまりなし 長径 1cm以下の炭を 5%含む
 4 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりややあり [地部]
 5 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりややあり 長径 1cm以下の炭を 5%含む
 6 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりややあり [地部]
 7 : 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 しまりややあり 長径 1cm以下の炭を 5%と 焼土を 25%含む [カマド下の層]
 8 : 7.5YR4/3 褐色 極細粒砂 しまりややあり 長径 1cm以下の炭を 5%含む [カマド下]

第61図 SH37・47カマド詳細図 (1 : 20)

系の粘質土で、床に赤変した被熱硬化面を確認した。なお、竈構築土を取り除くと壁周溝が検出された。

竈周辺から土師器甕(258・259)が出土したが、どちらも器壁の状態は悪い。そのほか、埋土から須恵器杯Hが出土したが、細片である。

SH38 (第60図) E-T13付近で検出した竪穴建物で、検出面からの深さは13cmである。谷側が流出していることに加え、東側をSH37により大きく破壊されているため、北隅周辺を検出したにとどまり、竈・壁周溝とも認められなかった。しかし、検出した北隅の平面形が丸みを帯びながらもほぼ直角を呈し、床面が水平であることや北壁の立ち上がり具合から、竪穴建物と判断した。

埋土から、土師器や須恵器の破片が出土した。

SH47 (第60・61図) E-U14付近で検出した、一边(北東辺)3.0mの方形を呈する竪穴建物。谷側が流出しているため、直交方向の建物幅は不明だが、南東辺で東隅から2.8mまで壁周溝を確認した。検出面からの深さは10cmで、壁周溝の深さは4cmほどである。建物内部に小土坑を多数検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

竈は北東壁東寄りで確認した。基底部で幅0.9m×奥行0.9m、高さは16cmほどが残存していた。構築土は褐色系の粘質土で、床に赤変した被熱硬化面

を確認した。竈構築土を除くと壁周溝が検出された。

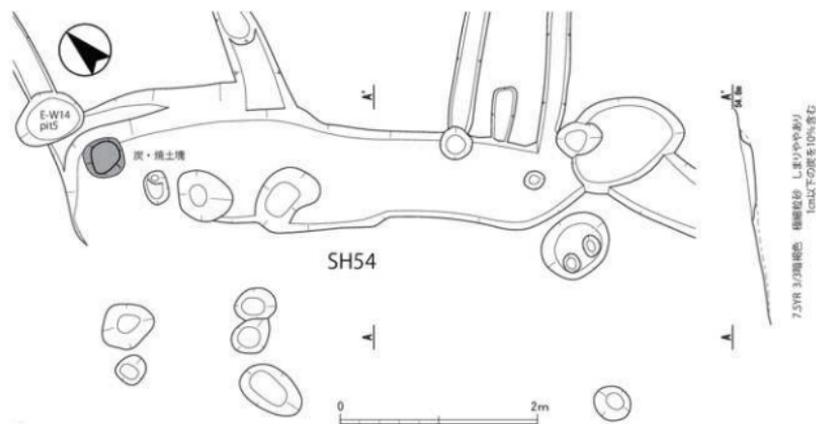
埋土から、細片化した土師器長胴甕や小型化した須恵器杯Hが少量出土した。

SH54 (第62・166図) E-W4付近で検出した、一边(北東辺)5.2mの竪穴建物。谷側が流出しているため、直交方向の建物幅は不明だが、北西壁を北隅から1.4mまで確認した。検出面からの深さは38cmで、明確な壁周溝は認められない。建物内部に当たる位置から小土坑を多数検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。明確な袖は検出されなかったものの、建物の北西隅に竈の残欠とみられる炭・焼土塊の集中が認められた。なお、遺構検出時には重複する別遺構として認識していたSK53は、埋土上層と判断した。

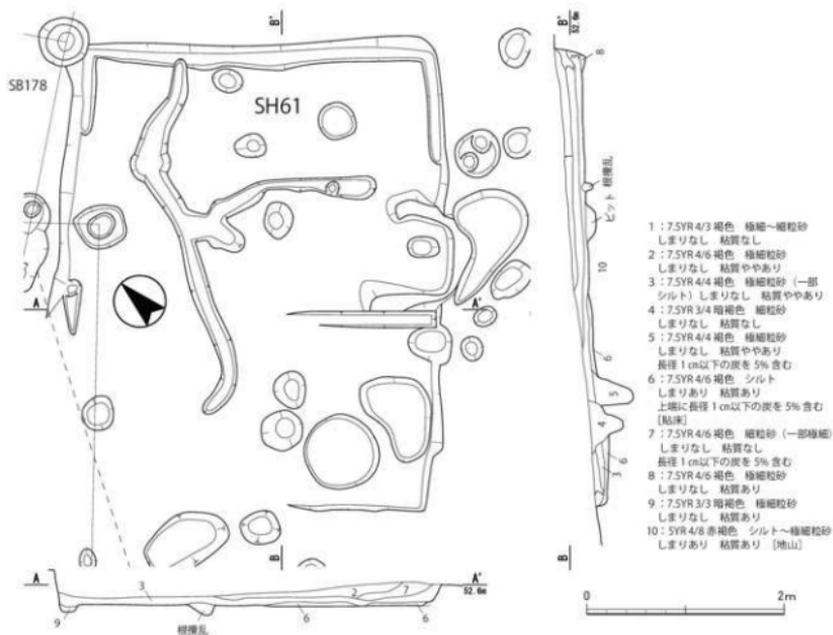
埋土から、土師器甕(265)や須恵器杯H蓋(263)・長頸壺(264)・甕(266)、椀型銀治滓(分析№18)などが出土し、一部の土器はSH65出土品と接合できた。

263は在地窯系の杯H蓋で、残存状態が悪く復元した口径の数値の信頼度は低い、非常に小型である。264は在地窯系の長頸壺で、頭部中央に楕圓刺突文が斜めに施されている。266は猿投窯系の甕で、頭部には二重沈線の上下に楕圓刺突文が施されている。

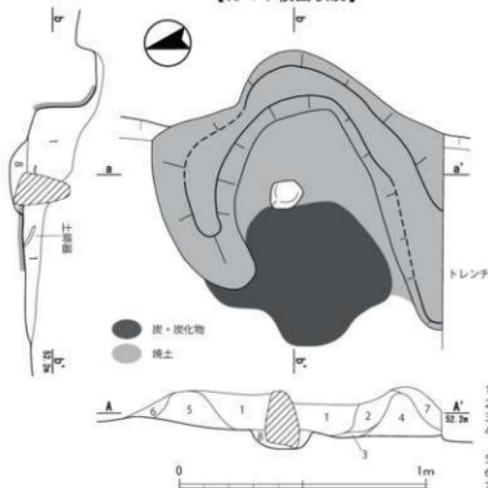
SH61 (第63・166図) E-S16付近で検出した、



第62図 SH54遺構図(1:50)



【カマド検出状況】



【カマド完掘状況】



第 63 図 SH61 遺構図 (1 : 50、カマド 1 : 20)

4.8 m × 3.8 mの長方形を呈する竈穴建物。検出面からの深さは25 cmである。壁周溝は北壁側でのみ確認され、深さは8 cmほどである。建物内部に小土坑を多数検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

東南壁で竈を確認した。基底部で幅1.2 m × 奥行1.2 m、高さは17 cmほどが残存していた。構築土は褐色系の粘質土で、床と奥壁に赤変した被熱硬化面を確認した。

埋土から、土師器甕(261・262)・杯・皿(260)、須恵器無台杯、粘土塊などが出土し、土器の一部はS K 73出土品と接合できた。260の内面には、刷毛目が認められる。

SH 62 (第64・65・167図) E-X 17付近で検出した、長辺3.9 m × 短辺3.3 mの長方形を呈する竈穴建物。検出面からの深さは22 cmである。壁周溝は北壁・西壁および南東隅で確認でき、深さは6 cmほどである。建物内部に小土坑を多数検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

竈は東壁南寄り確認した。基底部で幅0.8 m × 奥行1.0 m、高さは8 cmほどが残存していた。構築土は褐色系粘質土で、焚口付近に炭化物が広く認められ、床と袖の一部に赤変した被熱硬化面を確認した。

竈の南側で検出したS X 67と平面的重複関係にあり、S H 62の方が古い。

埋土から、土師器甕(270～272)・鍋(273・274)、須恵器杯H蓋(267)・杯蓋g(268)・壺(269)、棒状鉄製品(275)などが出土し、土器の一部はS H 70出土品と接合できた。そのほかに、円化していないが、輪の羽口とみられる小片と椀型鍛冶滓(分析№20)などがある。

267は猿投窯系の杯H蓋で、完形に近い。小型化が進み、沈線化した肩部の稜は不明瞭で、H-16号窯とI-17号窯出土品の中間的様相を示す。268は猿投窯系らしく、269は在地窯系。273・274は小破片のため全体の形状がわからないが、僅かに残った体部の形状から鍋と推定した。

SH 64 (第67図) E-V 16付近で検出した、長辺4.8 m × 短辺4.6 mの略方形を呈する竈穴建物。検出面からの深さは15 cmである。壁周溝は北半での

み確認でき、深さは8 cmほどである。建物内部に小土坑を多数検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

竈は北西壁で確認した。壁際は擾乱により破壊されており、袖部の構築土(第67図1・2層)より下層の土(3層)の解釈が難しい。地山風化土の可能性もあるが、下層構築土と仮定するならば、基底部で幅0.6 m × 奥行0.6 m、高さ10 cmほどが残存していた。構築土は褐色系の粘質土で、検出時には竈全体を覆うように焼土が認められた。

埋土から、土師器甕、須恵器の甕・壺・杯H・高杯などが出土しているものの、小片ばかりである。

SH 65 (第68・167図) E-X 19付近で検出した、長辺3.35 m × 短辺3.1 mの略方形を呈する竈穴建物。検出面からの深さは27 cmである。竈脇の建物北隅以外には深さ5 cmほどの壁周溝が巡る。建物内部に小土坑を検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

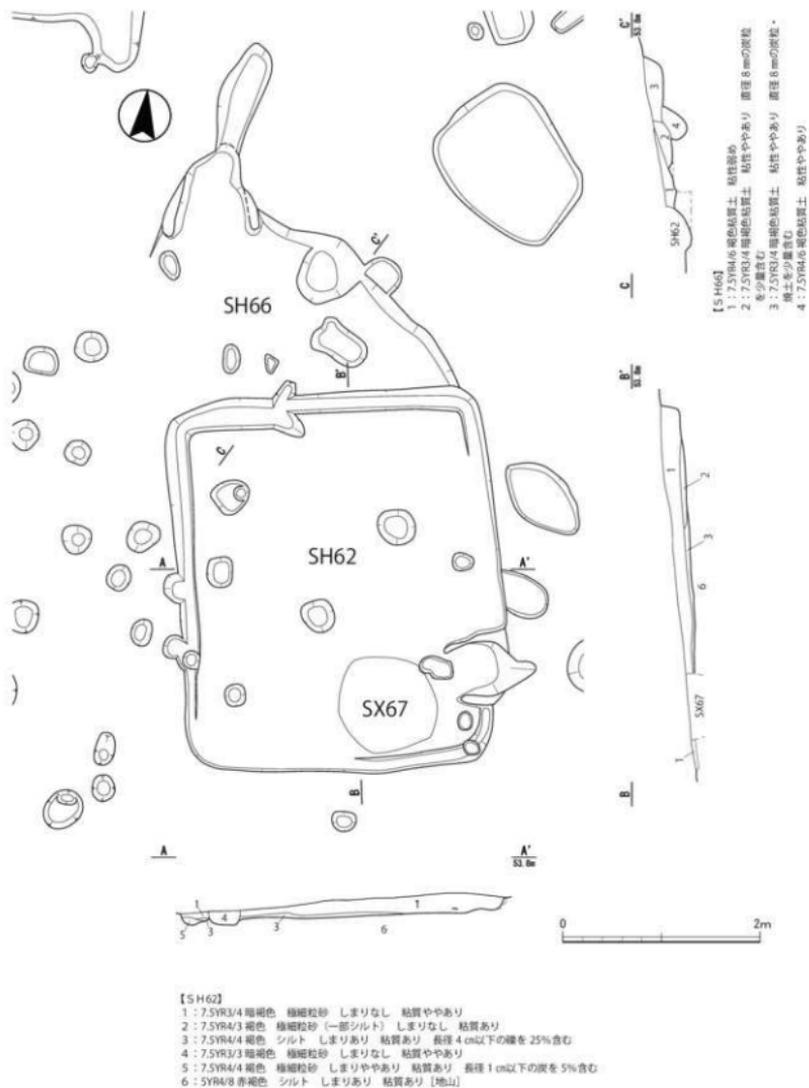
竈は北西壁の北寄り確認した。基底部で幅0.8 m × 奥行1.1 m、高さは20 cmほどが残存していた。構築土は明褐色の粘質土で、床と袖内側に焼土や赤変した被熱硬化面を確認できた。

S H 70とは平面的重複関係にあり、S H 70よりも新しい。

埋土から、土師器甕(277・278)・鍋もしくは甌(279)、須恵器杯B(276)・甕などが出土し、須恵器甕は斜面上方に位置するS H 54の出土品(266)と接合できた。276は猿投窯系で、高台は内端接地する。279は把手のみの出土であるが鍋もしくは甌と推定した。

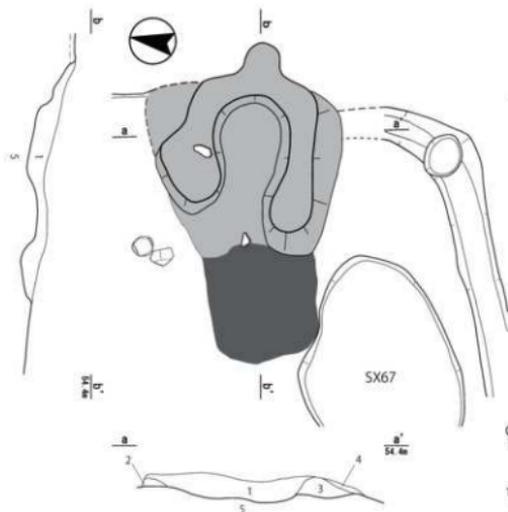
SH 66 (第64・66・167図) E-X 17付近で検出した竈穴建物。谷側の流出が著しいことに加え、南東側をS H 62によって壊されているため全体の規模は不明だが、竈の位置する北隅を起点として、北東壁を3.4 m、北西壁を1.0 mまで検出した。壁周溝は認められず、建物内部に小土坑を複数検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

建物北隅で土師器長脚甕(283)の上半部が据えられた竈を確認した。基底部で幅1.0 m × 奥行1.0 mが残存していた。構築土は褐色系の粘質土である。焚口付近に焼土・炭化物の分布が広く認められ、床には

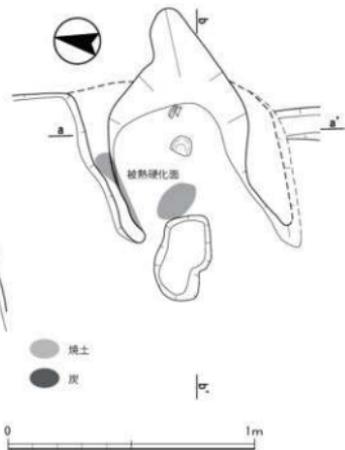


第64図 SH62・66・SX67遺構図 (1:50)

【SH62 カマド検出状況】

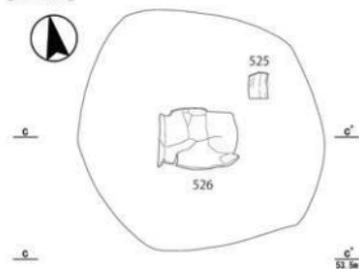


【SH62 カマド完掘状況】



- 1: 7.5YR3/4 暗褐色 極細～細粒砂 しまりなし
長径1cm以下の炭・焼土を20%含む
- 2: 7.5YR4/6 褐色 極細～細粒砂 しまりややあり [地部]
- 3: 7.5YR4/6 褐色 極細～細粒砂 しまりややあり [地部]
- 4: 7.5YR5/4 に近い褐色 極細粒砂 しまりなし
- 5: 5YR5.6 明赤褐色 シルト～極細粒砂 しまりあり [地山]

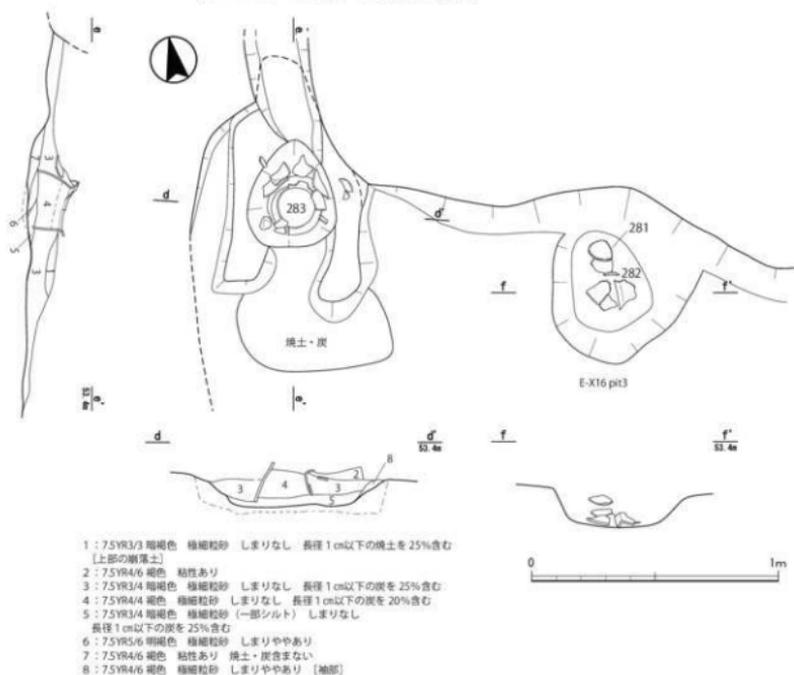
【SX67】



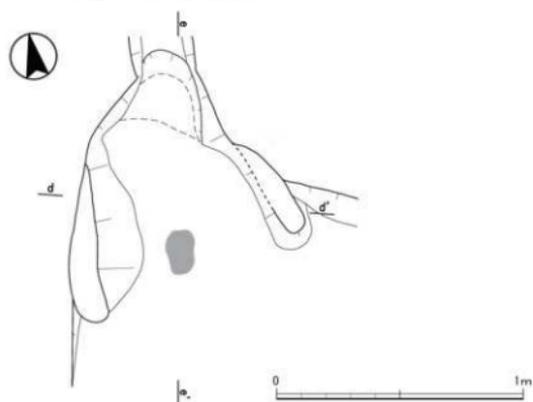
- 1: 7.5YR4/4 褐色 極細～細粒砂 しまりややあり 粘質あまりなし
- 2: 7.5YR4/3 褐色 極細～細粒砂 しまりややあり 粘質あまりなし [粘床?]
- 3: 7.5YR3/3 暗褐色 シルト しまりあり 粘質あり 長径1cm以下の炭を30%+
長径4cm以下の煤を10%含む [粘床?]
- 4: 5YR4/8 赤褐色 シルト～極細粒砂 しまりあり 粘質あり [地山]

第65図 SH62カマド・SX67詳細図 (1:20)

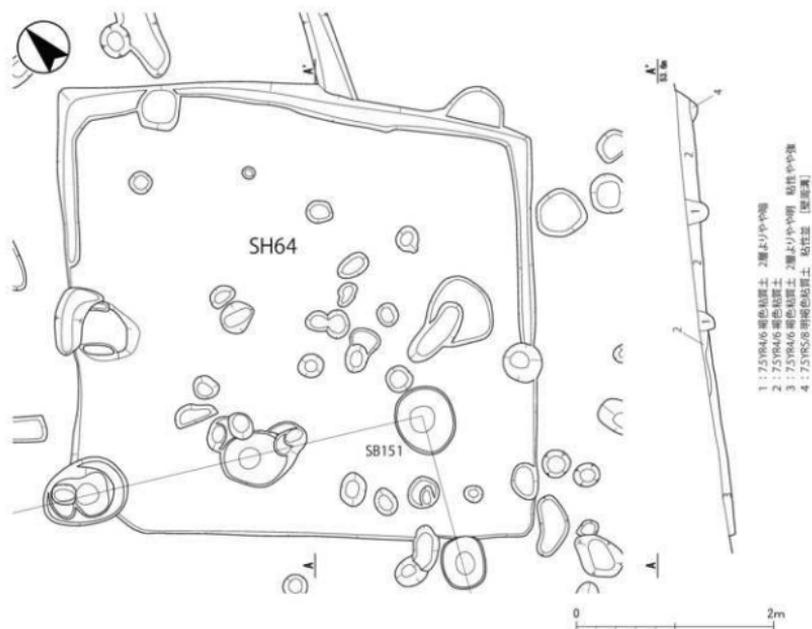
【SH66 カマド検出・遺物出土状況】



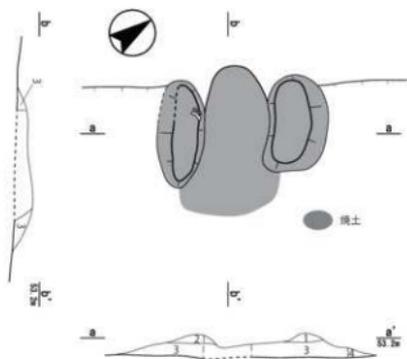
【SH66 カマド完掘状況】



第66図 SH66カマド詳細図 (1 : 20)

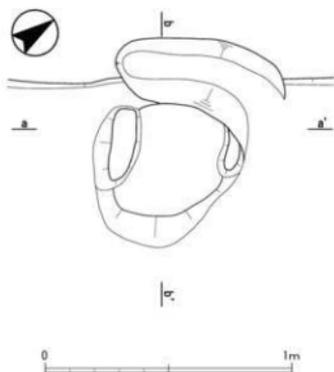


【カマド検出状況】

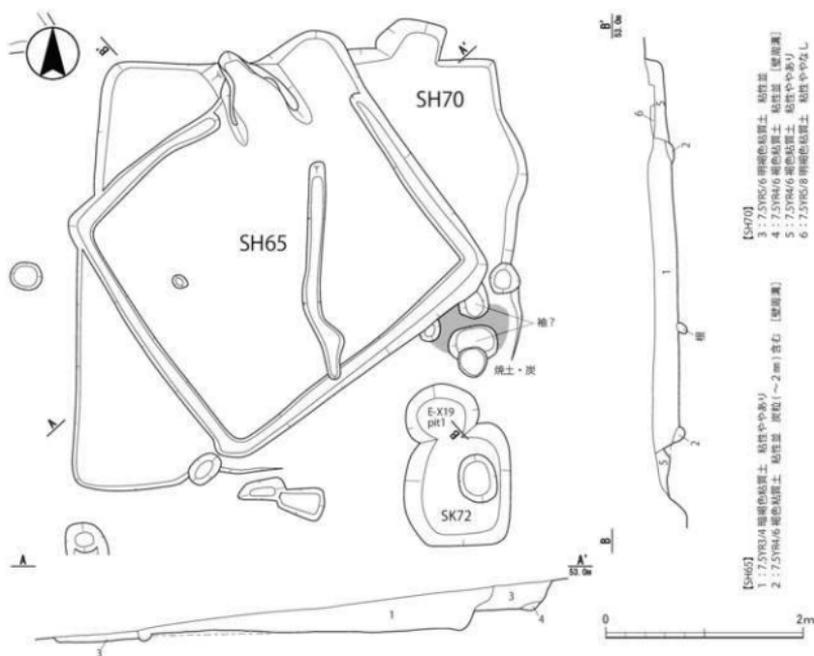


- 1 : 75YR4/6 褐色 極細～細粒砂 しまりあり [地肌]
 2 : 75YR4/6 褐色 極細～細粒砂 しまりややあり [袖部]
 3 : 5YR4/8 赤褐色 極細～細粒砂 しまりややあり
 [カマド下設置土?]
 4 : SH64 埋土

【カマド完掘状況】

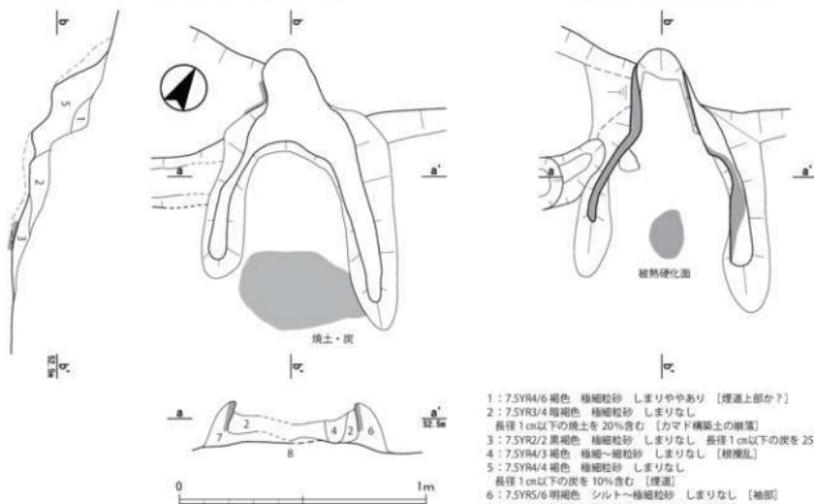


第67図 SH64遺構図 (1 : 50、カマド1 : 20)



【SH65 カマド検出状況】

【SH65 カマド完掘状況】



第68図 SH65・70遺構図 (1:50、カマド1:20)

- 1 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりややあり【埋土上部か?】
 2 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまりなし
 長径1cm以下の焼土を20%含む【カマド構築土の崩壊】
 3 : 7.5YR2/2 黒褐色 極細粒砂 しまりなし 長径1cm以下の灰を25%含む
 4 : 7.5YR4/3 褐色 極細～細粒砂 しまりなし【積層状】
 5 : 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 しまりなし
 長径1cm以下の灰を10%含む【埋土】
 6 : 7.5YR5/6 明褐色 シルト～極細粒砂 しまりなし【地脚】
 7 : 7.5YR5/6 明褐色 極細粒砂 しまりなし【地脚】
 8 : 5YR5/6 明赤褐色 シルト～極細粒砂 しまりあり【地山】

赤変した被熱硬化面が確認できた。

竈の東側の小土坑E-X16pit3からは土師器甕(282)、須恵器杯H蓋(280)・杯H身(281)が出土した。貯蔵穴とみられる。このほか、埋土から土師器甕(284)が出土した。須恵器杯H(280・281)はともに猿投窯系で、口縁部内側の段は認められないが、蓋の肩部の稜や身の蓋受け下の段は比較的明瞭である。このような杯HはH-15号窯出土品に類品がある。

SH70 (第68図) E-X19付近で検出した竈穴建物。南東隅は流失しているが、一边4.4mの正方形を呈する。検出面からの深さは25cmである。重複関係からSH65・SK72よりも古いことが判明している。壁周溝は認められず、建物に伴う柱が確実視できる柱穴は検出されていない。

東壁の南寄りで竈の残欠とみられる焼土の広がりや袖部の構築材らしき土2箇所を確認した。

埋土から、土師器甕・杯、須恵器甕・無台杯が出土し、一部はSH62出土品と接合できた。

SH71 (第69・167図) F-B18付近で検出した、一边(北辺)3.3mの方形を呈する竈穴建物。谷側が流出しているため、南北方向の建物幅は不明だが、西壁で北西隅から3.2mまで壁周溝を確認した。検出面からの深さは17cmで、壁周溝の深さは5cmほどである。竈は認められず、建物内部に小土坑を複数検

出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

埋土から、在地窯系須恵器の高杯小片(285)が1点出土した。杯部と脚部の接合部である。

SH74 (第70・167図) E-Y18付近で検出した、一边(北東辺)3.2mの方形を呈する竈穴建物。谷側が流出しているため、直交方向の建物幅は不明だが、南東壁で東隅から3.1mまで壁周溝を確認した。壁周溝は北西壁でも部分的に認められた。検出面からの深さは23cmで、壁周溝の深さは3cmほどである。柱穴と目されるような小土坑は、建物内部で全く検出されなかった。

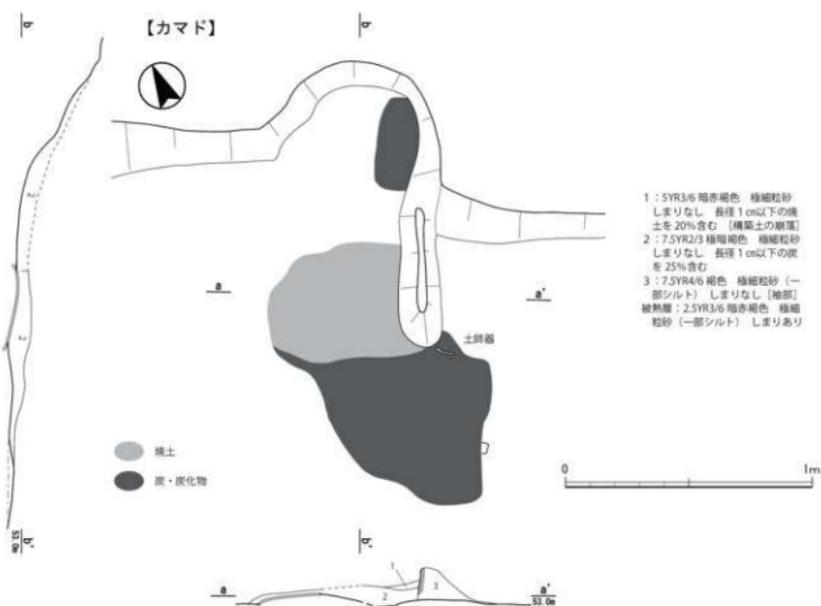
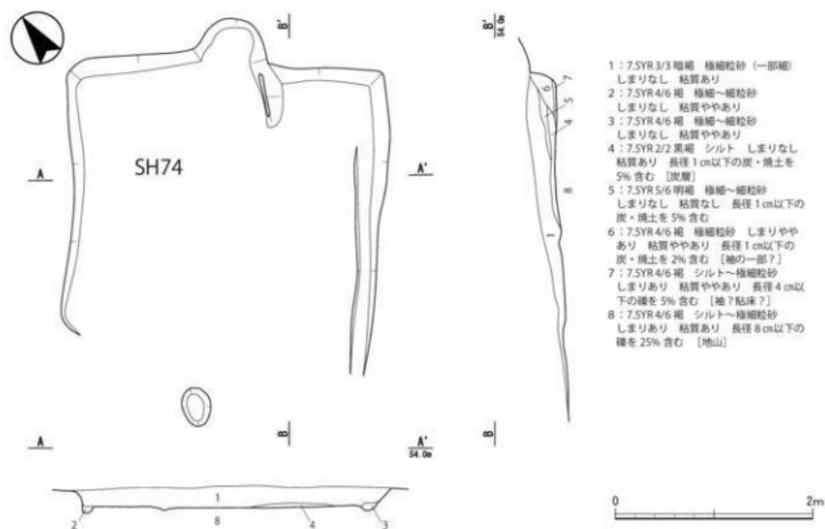
竈は北東壁中央で確認した。片袖のみ高さ14cmほどが残存していた。構築土は褐色の粘質土で、焚口全面と煙道部に、炭化物の広がりが認められ、竈の床と袖内面は被熱硬化していた。

竈から土師器甕(288)、埋土から土師器甕、須恵器無台杯(286)・高杯(287)、不明鉄製品(289)などが出土し、286はSH76出土品と接合できた。287の高杯脚部は、やや瓦質の焼成。棒状の不明鉄製品である289は、両端を欠いている。

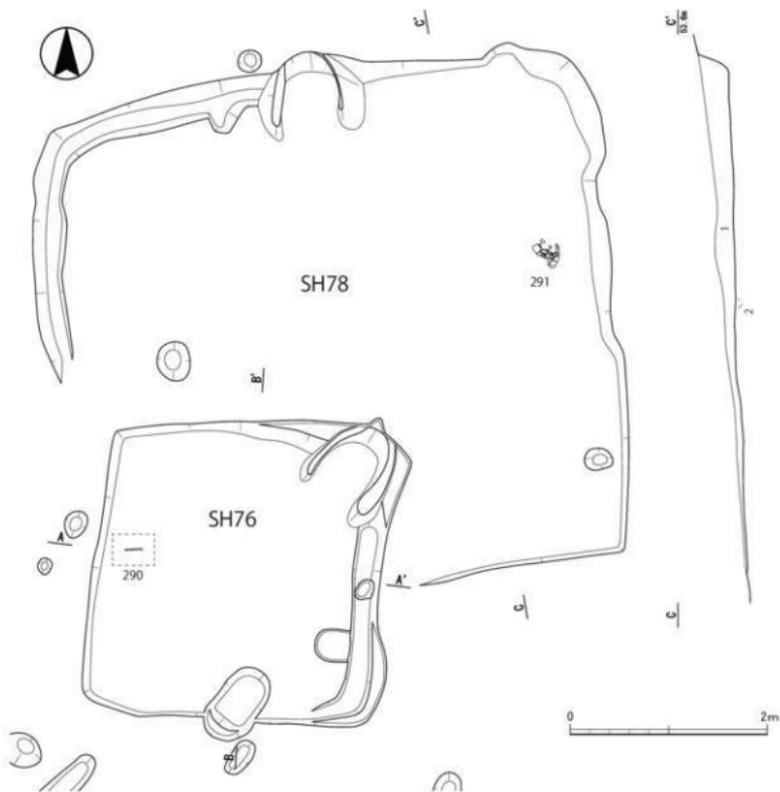
SH76 (第71・72・167図) F-A20付近で検出した、長辺3.1m×短辺2.9mの方形を呈する竈穴建物。検出面からの深さは25cmである。東壁で深さ3cmほどの壁周溝を確認した。柱穴と目されるような小土坑は、建物内部で全く検出されなかった。



第69図 SH71遺構図(1:50)

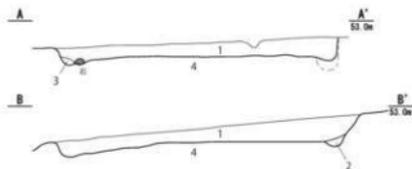


第70図 SH74遺構図 (1 : 50、カマド1 : 20)

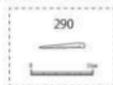


- 1 : 7.5YR3/4暗褐色 粘粒砂 しまりややあり 粘質ややあり
 2 : 7.5YR5/6暗褐色 シルト～極細粒砂 しまりあり 粘質あり 表層8cm以下の礫を20%含む [岡山]

0 2m



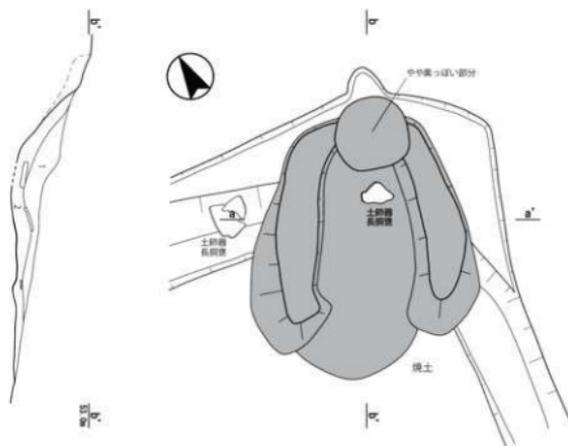
【鉄鍍出土状況拡大】



- 1 : 7.5YR3/4暗褐色 粘粒砂 しまりややあり 粘質なし
 2 : 7.5YR4/4褐色 極細粒砂 しまりややあり 粘質ややあり
 3 : 7.5YR4/4褐色 極細粒砂(一部シルト) しまりややあり 粘質あり
 4 : 7.5YR5/6暗褐色 シルト～極細粒砂 しまりあり 粘質あり
 表層8cm以下の礫を20%含む

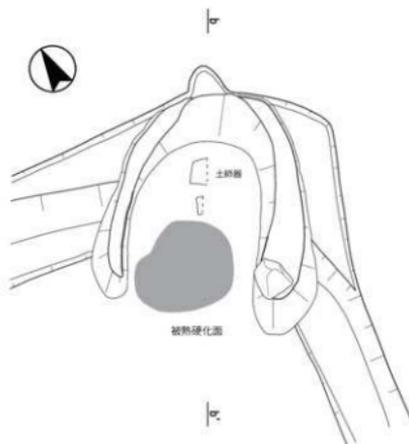
第71図 SH76・78遺構図 (1:50)

【SH76 カマド検出状況】



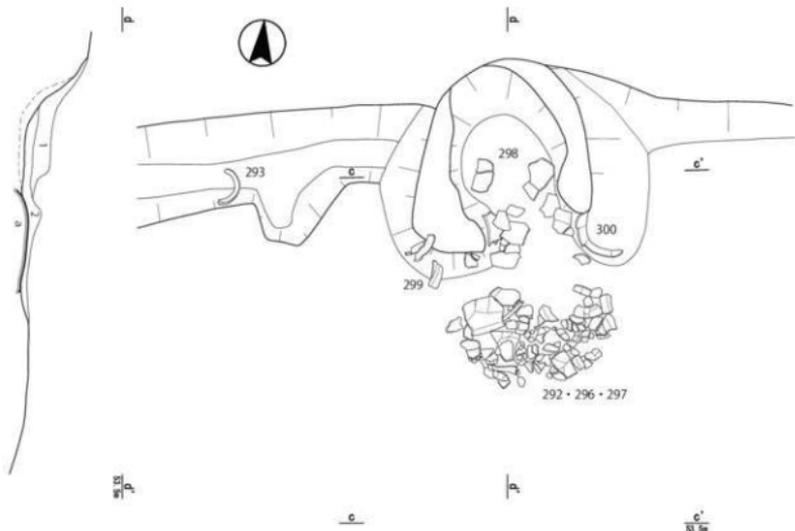
- 1 : 7.5YR/4 褐色土 シルト～極細粒砂
長径 1cm以下の焼土を 30%含む しまりなし
[焼土の剥落]
- 2 : 7.5YR/4 暗褐色土 シルト 長径 1cm以下の
灰を 20%含む しまりなし
- 3 : 7.5YR/6 褐色土 極細粒砂～細粒砂
しまりややあり [底部]
- 4 : 7.5YR/6 褐色土 極細粒砂～細
しまりややあり [底部]
- 5 : 7.5YR/4 褐色土 細粒砂 しまりなし
[SH76]

【SH76 カマド完掘状況】



第72図 SH76カマド詳細図 (1 : 20)

【SH78 カマド検出状況】



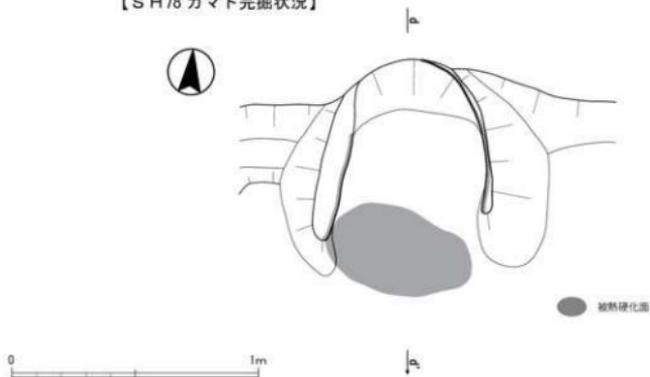
- 1 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細～細粒砂 しまりなし 長径1cm以下の
 焼土を15% 灰を10%含む【焼土の崩落】
 2 : 7.5YR3/3 暗褐色 極細～細粒砂 しまりなし 長径1cm以下の
 灰を25%含む
 3 : 7.5YR4/6 褐色 シルト～極細粒砂 しまりややあり【袖部】
 4 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりなし【袖部】

< 被熱面色调 >

- a : 5YR4/8 赤褐色
 b : 5YR4/8 赤褐色
 c : 5YR3/6 暗赤褐色



【SH78 カマド完掘状況】



第73図 SH78カマド詳細図 (1 : 20)

北壁の東隅で甕を確認した。基底部で幅0.9m×奥行1.0m、高さは22cmほどが残存していた。構築土は褐色の粘質土で、甕の床と袖内側に被熱硬化面を確認し、甕内と甕脇の周溝内から土師器長胴甕が出土した。

平面的な重複関係にあるSH78よりも新しい。

埋土から、土師器長胴甕、須恵器杯蓋g・瓶類などの小片が少量と、検出面直下で鉄鍍1点(290)が出土し、一部の土器はSH74出土品と接合できた。**SH78**(第71・73・167・168図) F-B19付近で検出した、長辺5.8m×短辺5.2mの方形を呈する竪穴建物。検出面からの深さは28cmである。北西隅付近で深さ9cmほどの壁周溝を確認した。建物内部に小土坑を2基検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

検出時には東半をSH78、西半をSH79として、2棟の建物の重複を想定していたが、土層断面の観察及び完掘状況から1棟と判断し、SH79は欠番とした。平面的な重複関係にあるSH76よりも古い。

北壁の中央で甕を確認した。基底部で幅1.1m×奥行0.9m、高さは22cmほどが残存していた。構築土は褐色の粘質土で、甕の床と袖内側に被熱硬化面を確認し、甕周辺から土師器甕(292)と、タタキ成形で土師質焼成の甕(296~300)が多く出土した(第73図出土状況)。

そのほか、埋土から土師器甕(293)・皿(291)・鍋もしくは甌(294)、土師質焼成のタタキ成形甕(295)、須恵器の小片などが少量出土した。土師器大皿(291)の内面には刷毛目が認められる。甕(293)の口縁部は内側がやや窪み、受口状を呈する。内外面ともにヨコナデ調整で、刷毛目はない。295~300は、内面に当具痕が認められる土師質焼成の甕で、いわゆる磚式系土器に類するものである。外面には、平行叩き(296・298・299)、擬格子叩きにカキメ(300)、刷毛目(297)が認められる。

SH80(第74・168図) F-C22付近で検出した、長辺5.0m×短辺4.7mの長方形を呈する竪穴建物。検出面からの深さは27cmである。西壁を除く三面で深さ5cmほどの壁周溝を確認した。甕は認められず、建物内部に小土坑数基を検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

南壁際の床面で、半分に割れた須恵器杯B(303)が入った小土坑F-C22pit2を検出した。南壁の丁度中央に位置しており、この竪穴建物に関連するものと推測されるが、性格は不明である。

埋土から、土師器片と須恵器の杯蓋b(301・302)・杯・フラスコ瓶・壺・甕などが出土した。図示した301~303はいずれも猿投窯系の須恵器であるが、胎土や色調が猿投窯の製品と若干異質である。特に橙褐色を呈する色調の302・303は、猿投窯系の工人によって生産が行われたとみられる岡山1・2号窯の製品に胎土が酷似している。

SH81(第75・168図) F-B23付近で検出した、長辺3.5m×短辺3.3mの不整形を呈する竪穴建物。検出面からの深さは23cmである。壁周溝は認められず、建物内部に小土坑数基を検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

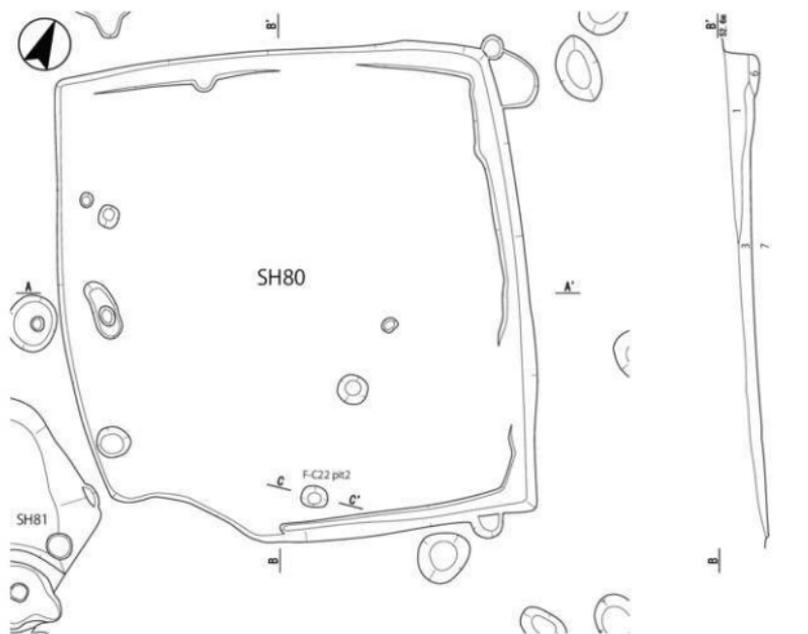
東壁中央で甕を確認した。基底部で幅1.1m×奥行1.0m、高さは15cmほどが残存していた。構築土は(明)褐色の粘質土で、被熱による硬化は明確ではない。甕の中央には、地山を掘り込んで支柱石が据えられていた。

甕内から土師器甕や須恵器壺、甕の脇から土師器甕(307)が出土した。このほか、埋土から土師器甕・杯G(308)、須恵器杯B・盤B(305)・杯蓋b(304)・高杯・横瓶(306)・甕、鉄製品(309)などが出土した。304~306は猿投窯系の製品ではあるが、橙褐色の色調を呈する305は岡山窯産の可能性が高い。306は猿投窯系の横瓶である。309は鉄鍍の先端部分の可能性がある。

SH82(第76・168図) E-Y22・23で検出した、長辺2.7m×短辺2.1mの不整形を呈する竪穴建物。検出面からの深さは13cmである。建物内部に小土坑数基を検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

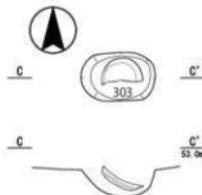
南隅で焼土の広がりを確認した。土師器甕の破片なども散乱していたため、甕の残欠とも考えられるが、袖部の構築材などは認められなかった。

建物床面で、ほぼ完形の須恵器無台杯(311)が入った小土坑E-Y23pit2を検出した。建物のほぼ中央に位置しており、杯が意図的埋納を思わせる状態で出土したことから、竪穴建物に関連するものと推測

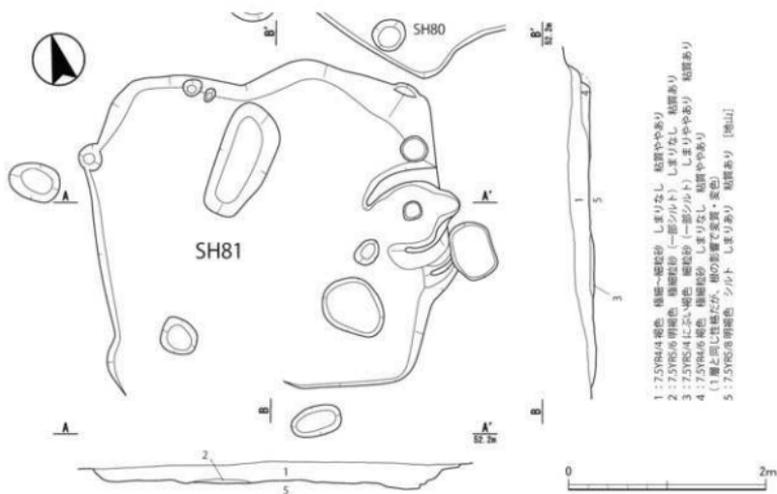


- 1 : 7SYR3/4暗褐色 極細～細粒砂 しまりなし 粘質ややあり
 2 : 7SYR5/6明褐色 極細粒砂 しまりあり 粘質ややあり
 3 : 7SYR4/6褐色 極細粒砂 しまりややあり 粘質あり
 4 : 7SYR5/9明褐色 シルト～極細粒砂 しまりややあり 粘質あり [壁面裏]
 5 : 7SYR4/6褐色 シルト～極細粒砂 しまりややあり 粘質あり [壁面裏]
 6 : 7SYR4/6褐色 シルト～極細粒砂 しまりややあり 粘質あり [壁面裏]
 7 : 5YR4/6赤褐色 シルト～極細粒砂 しまりあり 粘質あり [地盤]

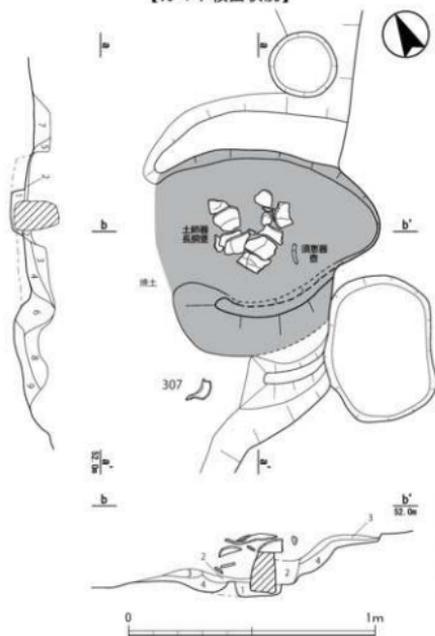
[F-C22 pit2]



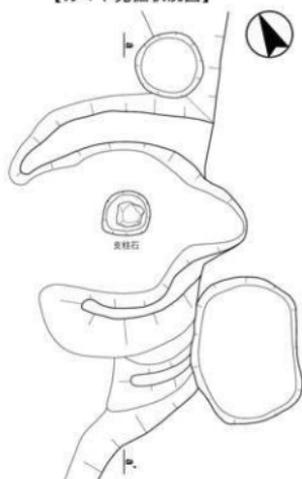
第74図 SH80遺構図、ピット出土状況図 (1 : 50、ピット1 : 20)



【カマド検出状況】



【カマド完掘状況図】



第75図 SH81遺構図 (1:50、カマド1:20)

されるが、性格は不明である。このほか、焼土付近や埋土から土師器甕(316)・杯(310)・皿(315)、須恵器無台杯(312)・盤B(313・314)などが出土した。311~314は岡山窯産と目され、311の底部には全面にロクロケズリ調整が施されるが、312の底部には中央に回転系切り底が残る。土師器皿315は非常に厚手のつくりで、外面には丁寧なヘラ磨きが施されている。

SH84 (第77・168図) F-D24付近で検出した、長辺3.5m×短辺3.2mの長方形を呈する竪穴建物。検出面からの深さは25cmである。南西部で深さ9cmほどの壁周溝を確認した。南西壁際で小土坑2基を検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。北西壁で竈を確認した。基底面で幅0.95m×奥行0.6mほどが残存していた。構築土は明褐色粘質土で、床や袖部に明瞭な被熱硬化面は確認できなかった。

竈周辺から土師器長胴甕(318・319)、建物床面から須恵器杯H身(317)が出土したほか、埋土から土師器有孔円盤(320)が出土した。317は、非常に小型化が進んだ鎗投窯系杯H身で、I-17号窯出土品に類品がある。320は土師器長胴甕の胴部を打ち欠き、先行を施した加工品である。

SH88 (第78図) F-H14付近で検出した、長

辺4.5m×短辺3.3mの長方形を呈する竪穴建物。検出面からの深さは34cmである。壁周溝は認められず、建物内部に小土坑を多数検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

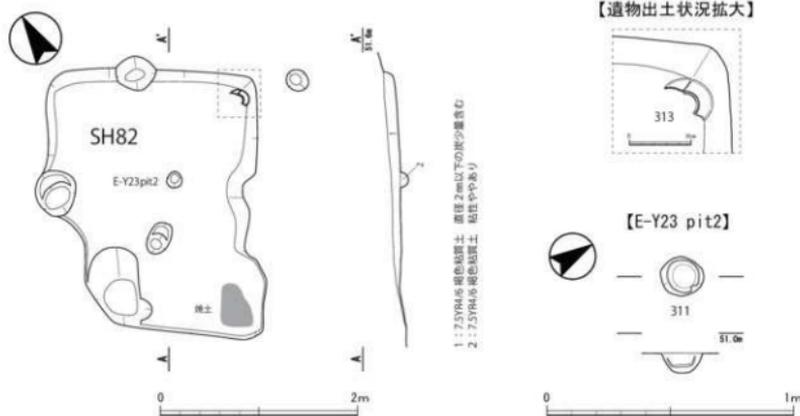
北東壁中央で竈を確認した。基底面で幅0.9m×奥行0.9m、高さは20cmほどが残存していた。構築土は褐色の粘質土で、床と袖の内側と竈底部に被熱硬化面を確認できた。

竈から土師器長胴甕の破片が出土した。

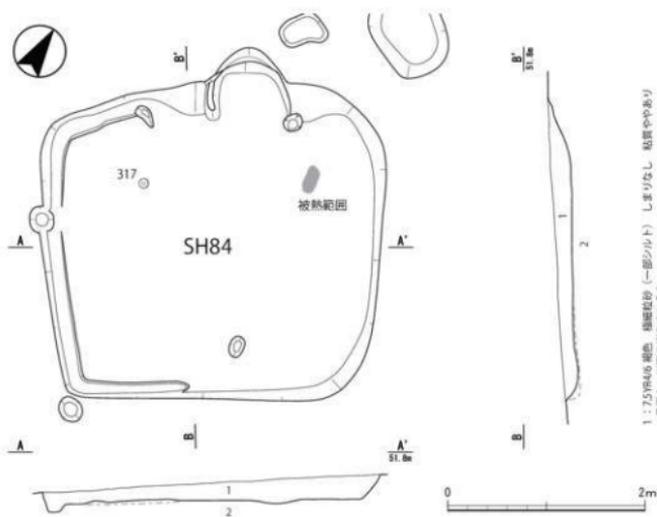
SH89 (第79・168図) F-H14付近で検出した、概ね3.6m×2.9mの不整形を呈する竪穴建物。検出面からの深さは13cmである。壁周溝は認められず、建物内部に小土坑数基を検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

南東壁中央付近で焼土と炭の広がりを確認した。第2次調査区で検出した、埋土に焼土を含む土坑SK7は、SH89の一部とも考えられるが、建物の外に位置しているため、別遺構と判断した。第2次調査区の壁際で検出した、SK7よりも新しい遺構(第79図8・9層)は、SH89の一部とみるには平面形態が不自然であるため、別遺構と考えておくが、仮に同一遺構とするならば、SK7→SH89の新旧関係となる。

建物内部で認められた焼土・炭は竈に由来する可



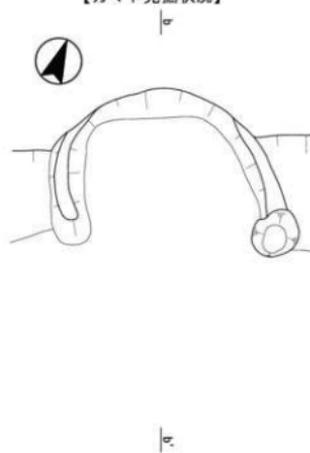
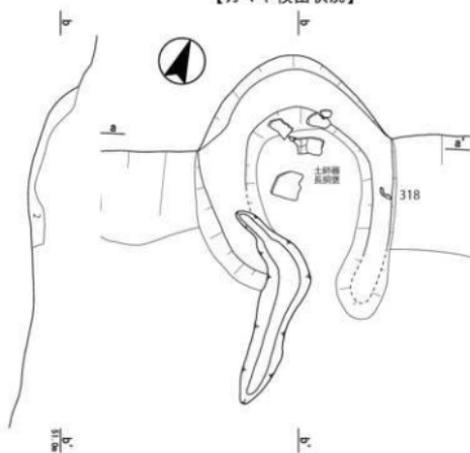
第76図 SH82遺構図(1:50、遺物出土状況図1:20)



1 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし、結實ややあり
 厚土 (0.5m以下) の灰を 2% 含む
 2 : 7.5YR5/6 明褐色 シルト しまりあり 結實あり

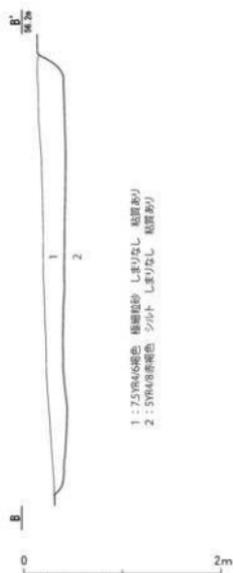
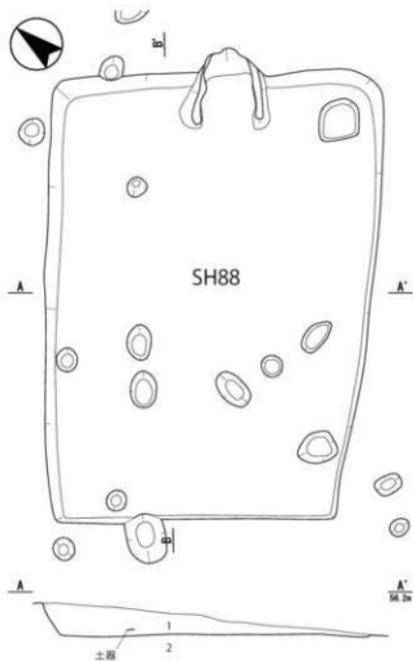
【カマド検出状況】

【カマド完掘状況】



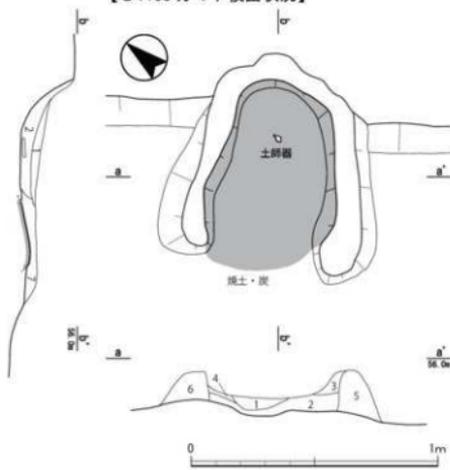
1 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細~細粒砂 しまりなし 長径 1cm以下の機土を 10%含む (構築土の崩落)
 2 : 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 しまりなし 長径 1cm以下の灰を 25%含む
 3 : 7.5YR5/6 明褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりややあり
 【袖部 or カマド内の粘土土?】
 4 : 7.5YR5/6 明褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりややあり
 【袖部 or カマド内の粘土土?】

第77図 SH84遺構図 (1 : 50、カマド1 : 20)



1 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりなし 結露あり
 2 : 5YR4/6 赤褐色 シルト しまりなし 結露あり

【SH88 カマド検出状況】



【SH88 カマド完掘状況】



- 1 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまりなし 長径 1 cm以下の焼土・灰を 25%含む【焼土の崩壊 + カマド内埋土】
 2 : 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂 しまりなし 長径 1 cm以下の灰を 30%含む
 3 : 5YR4/6 赤褐色 極細粒砂 しまりなし 長径 1 cm以下の焼土を 5%含む【袖部剛着土】
 4 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりなし 長径 1 cm以下の焼土を 5%含む
 5 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりややあり【袖部】
 6 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりややあり【袖部】
 7 : 7.5YR4/4 褐色 細粒砂 しまりなし 長径 1 cm以下の灰を 30%含む

第78図 SH88遺構図 (1 : 50、カマド1 : 20)

能性はあるが、袖部の構築土や被熱硬化面などを認識することはできなかった。

埋土から土師器や須恵器杯Hの小片、焼土内から杯部が碗形を呈する土師器高杯(321)が出土した。
SH 92 (第80・169図) F-E 21付近で検出した、一边(北西辺)6.6mの方形を呈する堅穴建物。谷側が流出していることに加え、東側を大きく攪乱されているため、直交方向の建物幅は不明だが、北東壁を北隅から2.7mまで確認した。検出面からの深さは17cmである。北隅で壁周溝を二重に確認した。深さは外側の溝が5cm、内側の溝が6cmである。建物内部に小土坑敷基を検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

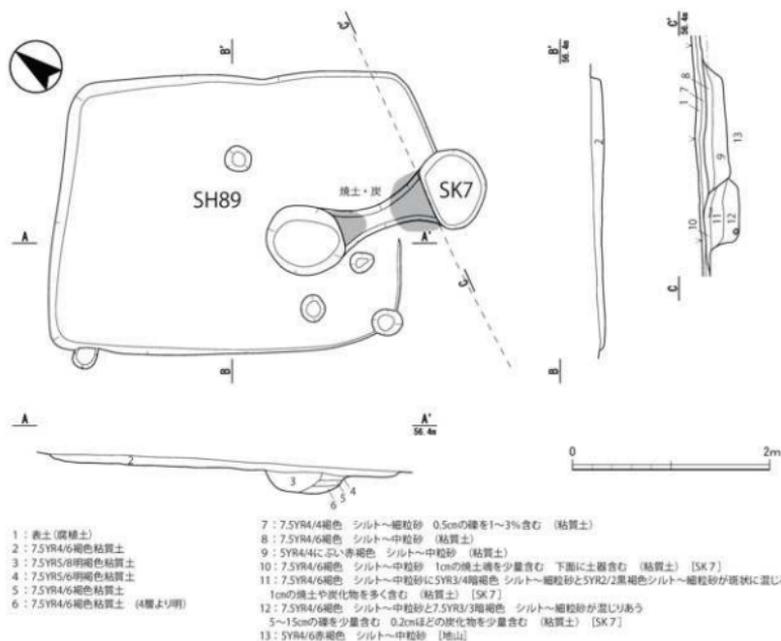
北西壁で竈を確認したが、残存状態は非常に悪い。幅1.1m×奥行1.3mの範囲に崩れたとみられる竈構築土の堆積が認められ、焚口側に焼土、煙道側に炭化物が集中していた。

竈周辺から地窯系の須恵器壺(322)や土師器小型甕?(323)が出土したほか、埋土から土師器や須恵器の甕が多く出土した。

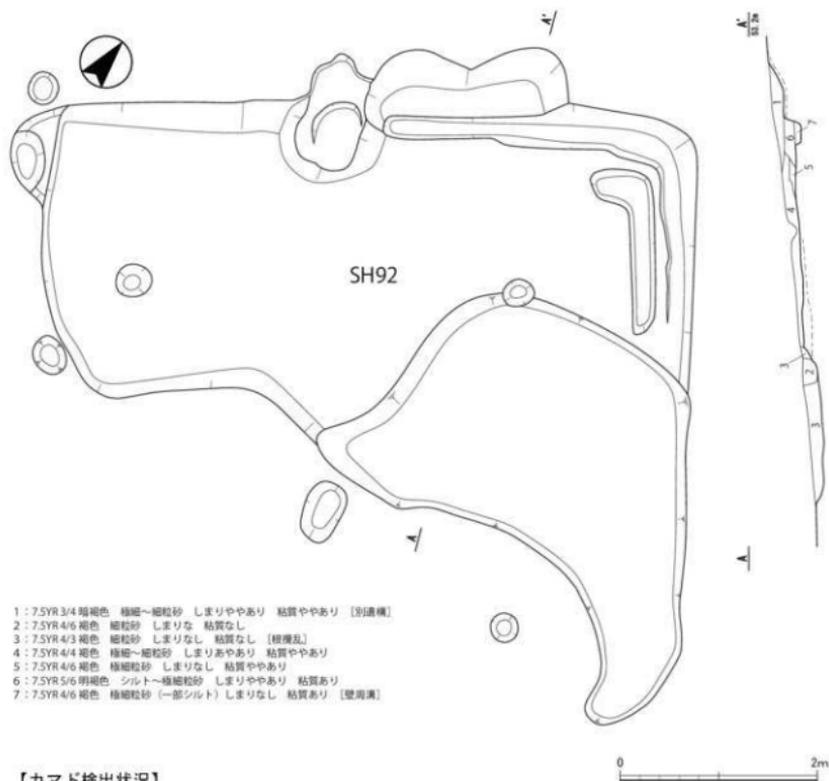
SH 97 (第81・169図) F-M20・21で検出した、一边(北西辺)4.4mの方形を呈する堅穴建物。谷側が流出しているため、直交方向の建物幅は不明だが、北東壁と南西壁をそれぞれ約1.8mまで確認した。検出面からの深さは13cmである。壁周溝は認められず、建物内部に小土坑敷基を検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

北西壁東寄りて焼土・炭化物の広がりを確認した。床面が被熱硬化しているため竈と考えられているが、残存状態は悪い。

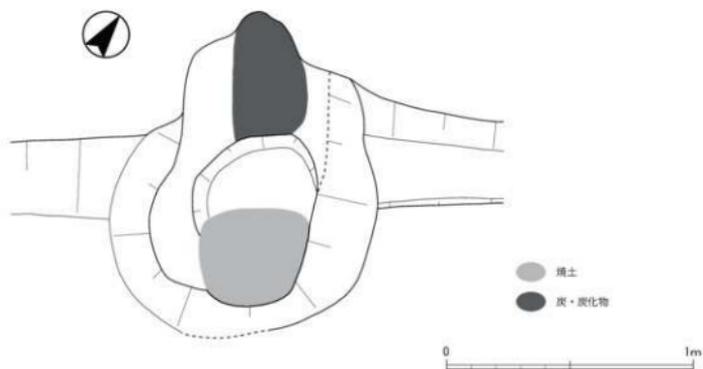
平面的な重複関係にあるSK 94よりも新しい。埋土から、須恵器杯H身(324)・高杯(325・326)、土師器片などが出土した。図示した須恵器(324～326)は3点とも在地窯系で、325・326は同一個体の



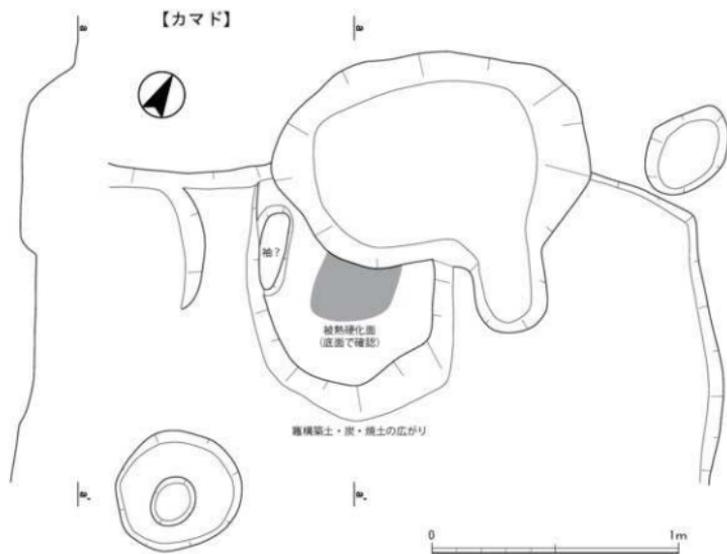
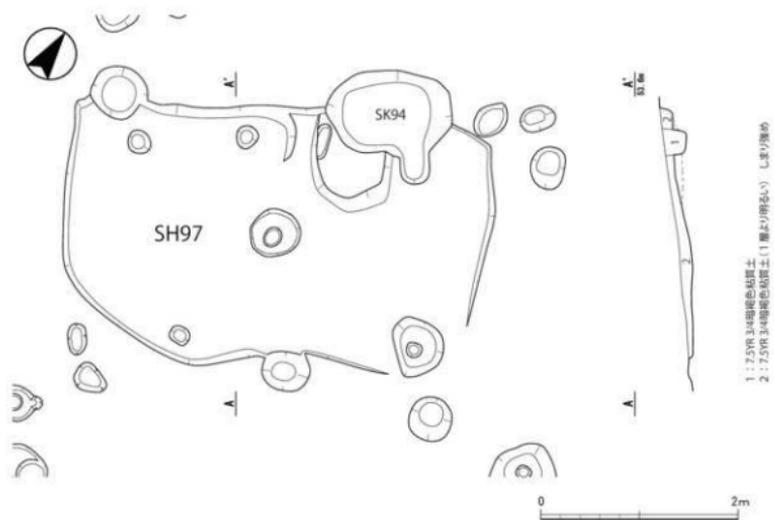
第79図 SH 89・SK 7遺構図 (1:50)



【カマド検出状況】



第80図 SH92遺構図(1:50、カマド1:20)



第81図 SH97遺構図 (1 : 50、カマド1 : 20)

可能性がある。

SH 99 (第82図) 調査区際の方-P 21付近で西端部のみを検出した竪穴建物で、西隅から南西壁を4.2 m、北西壁を1.0 mまで確認した。検出面からの深さは20 cmで、調査区の東壁土層断面から、壁周溝は深さ18 cmとわかる。竈は認められず、建物内部に小土坑1基を検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

埋土から土師器甕と須恵器甕の小片が出土した。

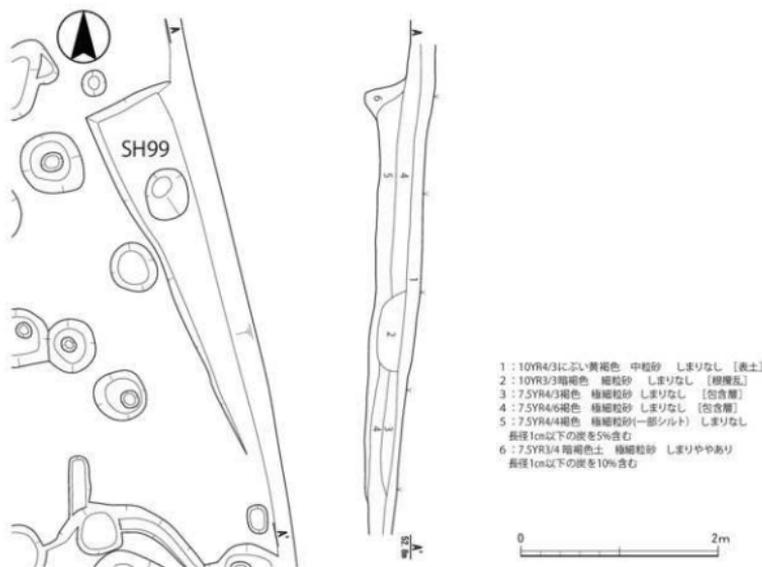
SH 100 (第83・169図) F-L・M 23で検出した、一辺(北辺)4.3 mの不整形を呈する竪穴建物。谷側が流出しているため、南北方向の建物幅は不明だが、西壁で壁周溝を北西隅から3.6 mまで確認した。検出面からの深さは約18 cmである。西・北・東壁で深さ6 cmほどの壁周溝を確認したが、北西隅は明確に途切れる。建物内部に小土坑を多数検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

西壁の北寄りで竈を確認した。幅0.8 m×奥行1.0 mの範囲に焼土や炭化物の広がりを見出し、床で被

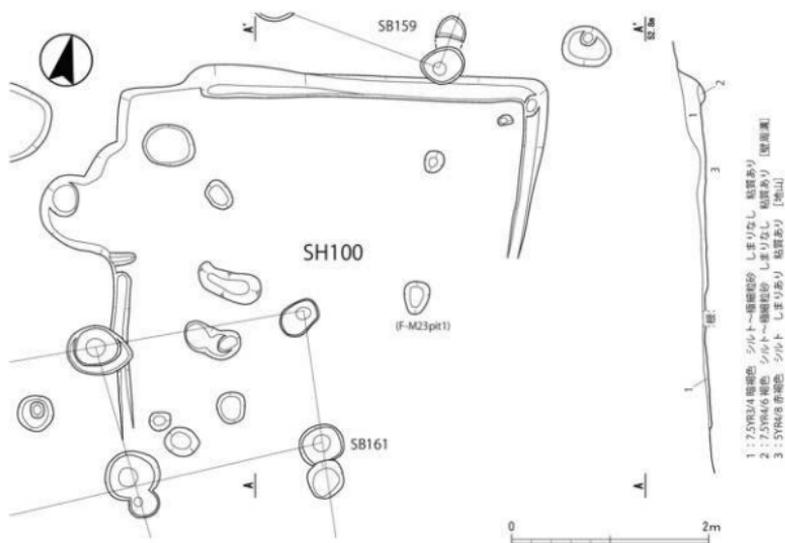
熱硬化面を確認した。明褐色の粘質土で構築された袖部が、高さは8 cmほど残存していた。

竈の脇で、須恵器杯H蓋(327)と砥石(330)が入った小土坑F-L23pit5を検出した。貯蔵穴とみられる。そのほか、埋土から土師器甕、須恵器無台杯(329)・杯蓋(328)・甕などが出土した。327は猿投窯系で、非常に小型化が進んでいるが、肩部の沈線は明瞭で、H-16号窯とI-17号窯出土品の中間的様相を示す。328も猿投窯系とみられ、小破片であるため復元口径の信頼度は低いが、口縁端部が残っており杯蓋とわかる。329は生焼けの杯で、産地を特定しにくい。在地窯系かと思われる。330は砂岩製の砥石である。

SH 104 (第84図) F-O 23付近で検出した、一辺(北東辺)3.8 mの不整形を呈する竪穴建物。谷側が流出しているため、直交方向の建物幅は不明だが、南東壁を東隅から3.2 mまで確認した。検出面からの深さは9 cmである。三辺で深さ4 cmほどの壁周溝を確認したが、西壁の壁周溝は北東壁に対し不

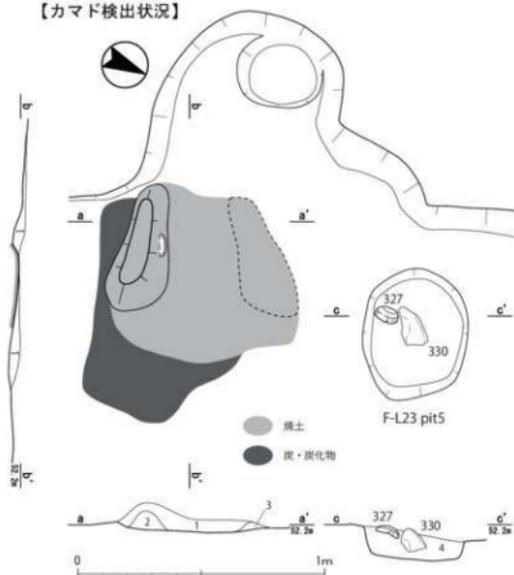


第82図 SH 99遺構図(1:50)



1 : 7.5YR3/4 暗褐色 シルト～極細粒砂 しまりなし 粘質あり
 2 : 7.5YR4/6 暗褐色 シルト～極細粒砂 しまりなし 粘質あり
 3 : 5YR4/8 赤褐色 シルト しまりあり 粘質あり [地山]

【カマド検出状況】



【カマド完掘状況】



1 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまりなし
 2 : 7.5YR5/6 暗褐色 極細～細粒砂 しまりなし [地部]
 3 : 7.5YR5/6 暗褐色 極細粒砂 しまりなし [地部]
 4 : 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 しまりなし

第83図 SH100遺構図 (1 : 50、カマド1 : 20)

自然に歪んでいるため、建物とは別の遺構かもしれない。竈は認められず、建物内部に小土坑数基を検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

平面的な重複関係にあるSH106・107よりも新しいことは確認できたが、埋土が明確な切りあい関係にないSH105・SB160との新旧関係は不明である。

埋土から、土師器長胴甕や須恵器高杯・甕の破片などが少量出土した。

SH105 (第84・169図) F-P23で検出した、一辺(北辺)3.8mの方形を呈する竪穴建物。谷側が流出しているため、南北方向の建物幅は不明だが、東辺は竈の南端までで1.7mある。検出面からの深さは9cmである。壁周溝は認められず、建物内部に小土坑数基を検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

東壁に竈の残欠と推定される被熱硬化面を確認したが、残存状況は悪い。

埋土から、土師器甕や須恵器杯H身・甕の破片、製塩土器(331)などが少量出土した。331は、知多式製塩土器の針状化した脚部である。

SH106 (第84・169図) F-O22付近で検出した、一辺(北西辺)4.1mの不整形を呈する竪穴建物。谷側が流出しているため、直交方向の建物幅は不明だが、北隅から1.8m南までは埋土の広がりを確認した。検出面からの深さは25cmである。西壁の一部で僅かに窪む壁周らしき溝を確認したが、北西壁に対し不自然に歪んでいるため、建物とは別の遺構かもしれない。竈は認められず、建物内部に小土坑数基を検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

平面的な重複関係にあるSH107よりも新しく、SH104・105よりも古い。

埋土から、土師器甕(334)・杯(333)、須恵器杯H身(332)・杯蓋加工品(336)、製塩土器(335)などが出土した。332は猿投窯系で、口縁部の立ち上がりは矮小化してきているが、受け部下の段は認められ、I-101号窯出土品に類似品がある。336は焼成不良の杯蓋の破片の破面を磨き、穿孔を施した加工品である。333は二次被熱した土師器で、杯と考えたが小型甕の底部かもしれない。334は土師器甕の口縁部で、内外面に刷毛目が認められる。335は知多式製

塩土器の脚部である。

SH107 (第84・85・169図) F-O22付近で検出した、一辺(北西辺)4.7mの方形を呈する竪穴建物。谷側が流出していることに加え、東部をSH106、南部をSH104に破壊されているため、直交方向の建物幅は不明だが、南西壁を2.9mまで確認した。検出面からの深さは21cmである。北隅で僅かに窪む壁周溝を確認した。建物内部に小土坑数基を検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

平面的な重複関係にあるSH104・105・106、SK123、SD103の中で最も古い。

北西壁西寄りで竈を確認した。基底部で幅0.9m×奥行0.8mほどが残存していた。構築土は褐色系の粘質土で、竈の床に被熱硬化面を確認した。

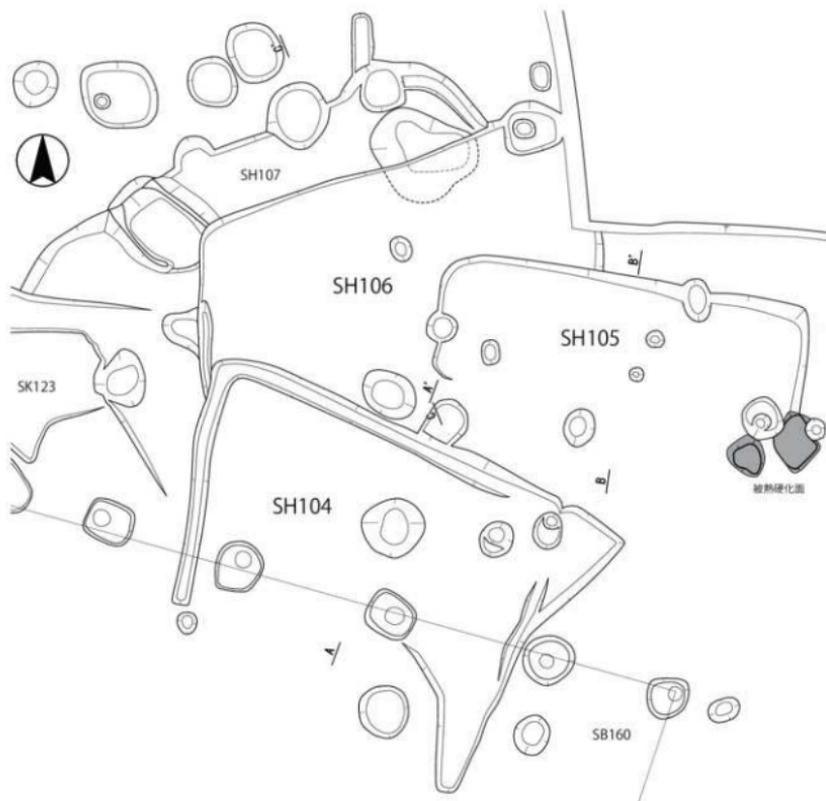
北隅付近の床面で検出した、貯蔵穴とみられる小土坑F-022pit9から、土師器の高杯(338)・小型甕(339)、須恵器杯H身(337)が出土したほか、埋土から土師器長胴甕(340・341)、製塩土器(342)、鍛冶滓(分析№21)が出土した。337は在地窯系で、口縁部の立ち上がりが矮小化し、口径も縮小している。338は風化しているため、器表面の調整は不明だが、粗雑な作りの土師器高杯である。339の内外面には、細かい刷毛目が施されている。342は知多式製塩土器の脚部である。

SH118 (第86・169図) H-M3付近で検出した、長辺5.1m×短辺4.0mの長方形を呈する竪穴建物。検出面からの深さは21cmである。南壁の一部を除き深さ13cmほどの壁周溝を確認した。建物内部に小土坑数基を検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

平面的な重複関係にあるSB173よりも古い。

西壁中央で竈を確認した。SB173の柱穴などに大きく破壊されているが、東西1.1m×南北1.2mの範囲に焼土や炭の広がりが認められ、焚口とみられる床面では被熱硬化面が確認された。

竈や埋土から、土師器甕(345・346)・鍋もしくは甌(347)、須恵器杯蓋(343・344)などが出土した。343は口縁部を欠くがおそらく杯蓋gで、344は杯蓋bだが、いずれも在地窯系であろう。345・346は土師器の長胴甕で、345は内外面に刷毛目が認められる。347は把手部分のみの出土だが、鍋もしくは甌であ



【SH104】



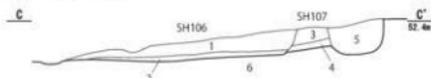
- 1 : 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 しまりややあり 粘質あり 炭を5%含む
[雑土?]
- 2 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまりややあり 粘質ややあり
- 3 : 7.5YR4/6 褐色 シルト～極細粒砂 しまりなし 粘質あり
- 4 : 5YR4/8 赤褐色 シルト しまりややあり 粘質あり [地山]

【SH105】



- 1 : 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂 しまりなし 粘質ややあり
- 2 : 5YR4/8 赤褐色 シルト しまりあり 粘質あり [地山]

【SH106・107】

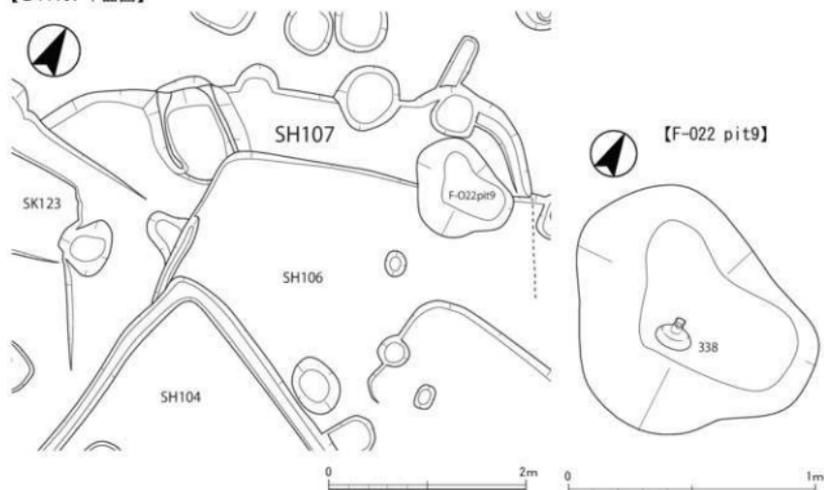


- 1 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂(一部細粒砂) しまりなし 粘質ややあり
- 2 : 7.5YR5/3 暗褐色 シルト しまりなし 粘質あり
- 3 : 7.5YR4/3 褐色 シルト～極細粒砂 しまりなし 粘質あり
- 4 : 7.5YR4/4 褐色 シルト～極細粒砂 しまりなし 粘質あり
- 5 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりなし 粘質ややあり
- 6 : 5YR5/8 明赤褐色 シルト しまりあり 粘質あり

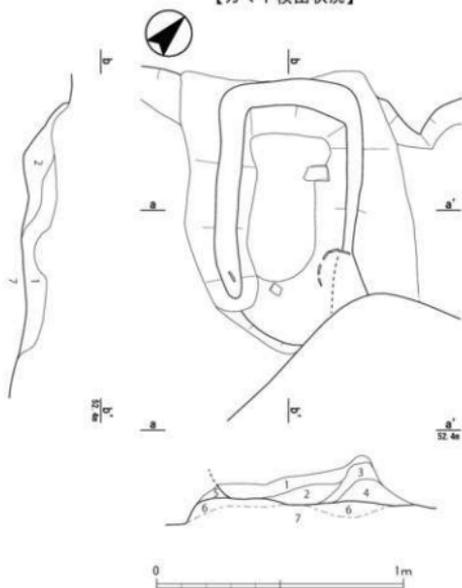


第84図 SH104・105・106・107遺構図(1:50)

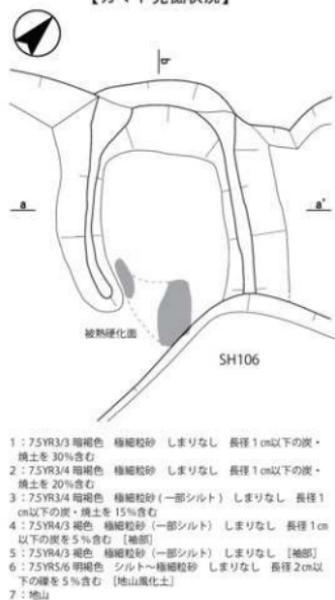
【SH107 平面図】



【カマド検出状況】

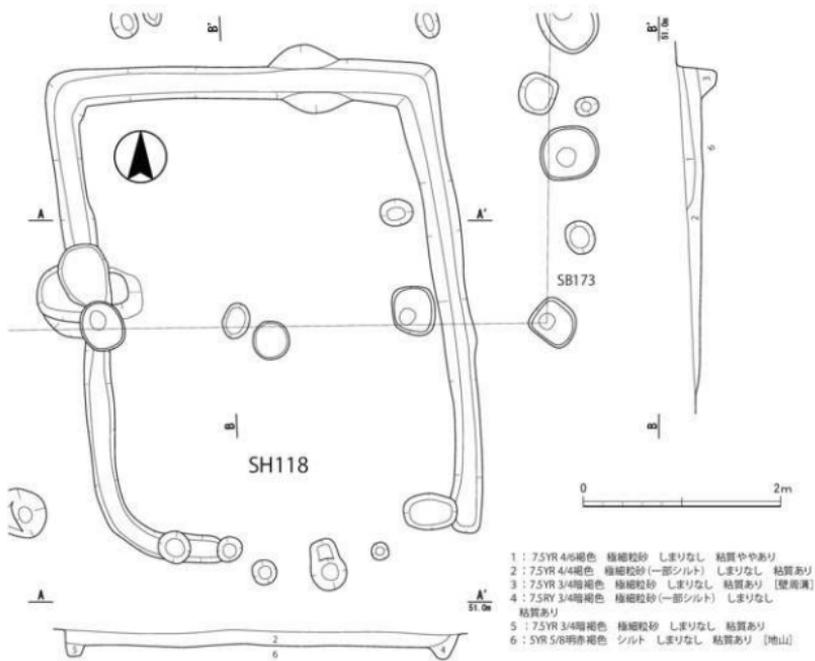


【カマド完掘状況】

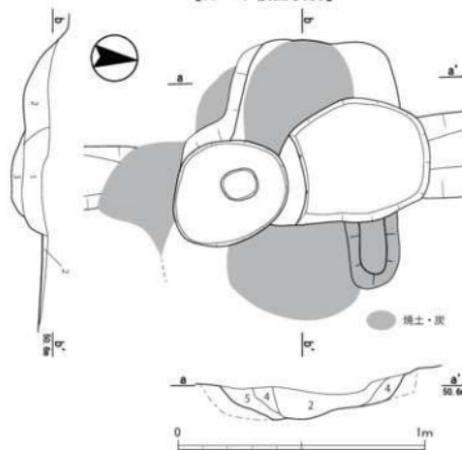


- 1 : 75YR3/3 暗褐色 極細粒砂 しまりなし 長径 1cm以下の炭・焼土を 30%含む
- 2 : 75YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまりなし 長径 1cm以下の炭・焼土を 20%含む
- 3 : 75YR3/4 暗褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし 長径 1cm以下の炭・焼土を 15%含む
- 4 : 75YR4/3 褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし 長径 1cm以下の炭を 5%含む [地部]
- 5 : 75YR4/3 褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし [地部]
- 6 : 75YR5/6 明褐色 シルト～極細粒砂 しまりなし 長径 2cm以下の炭を 5%含む [地山風化土]
- 7 : 地山

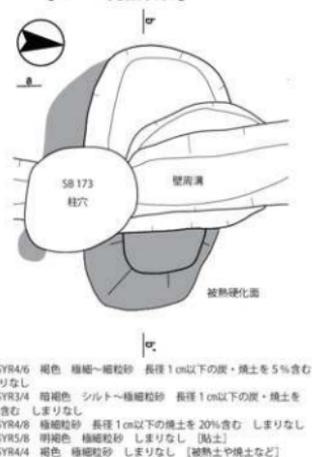
第85図 SH107遺構図 (1 : 50、カマド1 : 20)



【カマド検出状況】



【カマド完掘状況】



第86図 SH118遺構図 (1:50、カマド1:20)

ろうと推定した。

SH119 (第87・169図) H-N3付近で検出した、一边(北辺)4.3mの方形を呈する竪穴建物。谷側が流出しているため、南北方向の建物幅は不明だが、西壁を南へ3.0mまで確認した。検出面からの深さは12cmである。流出を免れた北半部では深さ6cmほど壁周溝を確認した。建物内部に小土坑1基を検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

平面的に重複するSB177よりも古いが、SH124との新旧関係は不明である。

西壁で竈とみられる焼土・炭化物の広がり焼土塊を検出したが、残存状態は悪く、袖の構築土は確認できなかった。

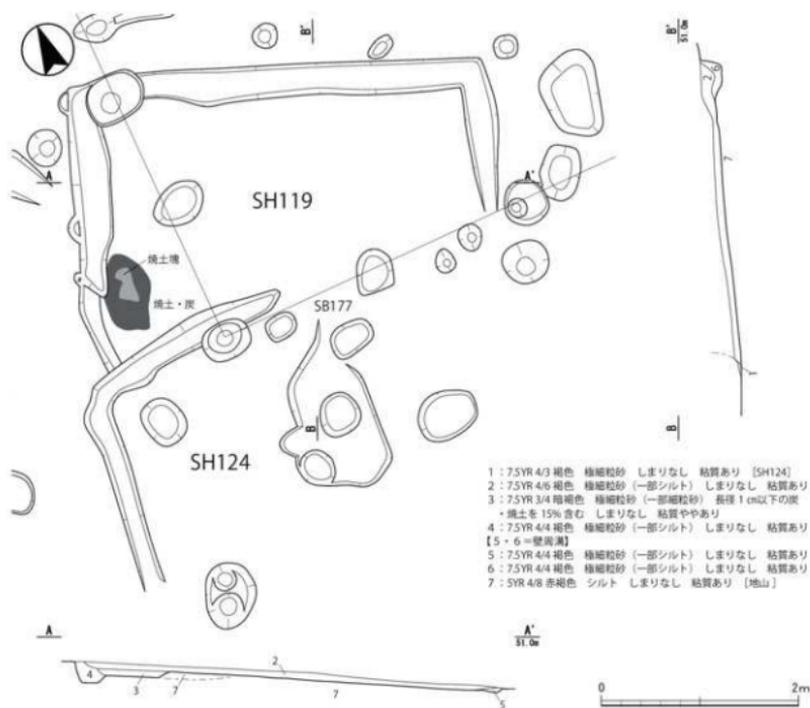
埋土から、土師器の甕・杯(349)、須恵器の杯

(348)・高杯・甕などが出土した。在地窯系須恵器の348は、底部を欠いているが、口径からみて杯Bであろう。

SH120 (第88・169図) H-N4で検出した、3.8m×3.7mの方形を呈する竪穴建物。検出面からの深さは10cmである。壁周溝は、流失した南東隅を除きほぼ全周し、深さ7cmほどである。建物内部に小土坑数基を検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

北西隅で竈を確認した。基底部で幅1.0m×奥行1.2mほど、高さは10cmほど残存していた。竈の床と袖の内側は被熱痕跡が認められた。

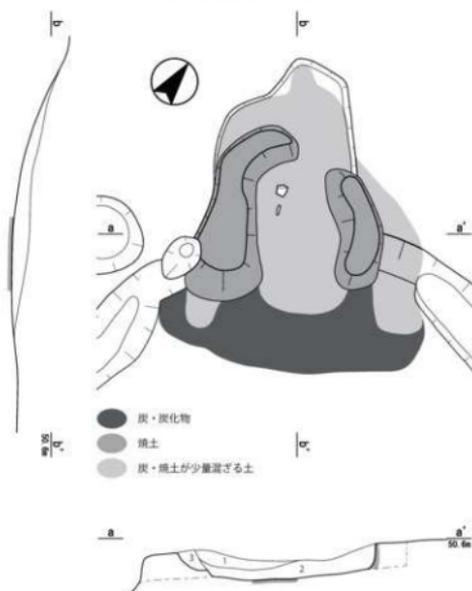
埋土から、土師器甕(352・353)、須恵器の甕・杯Bなどが出土した。土師器甕353には、外面に比較



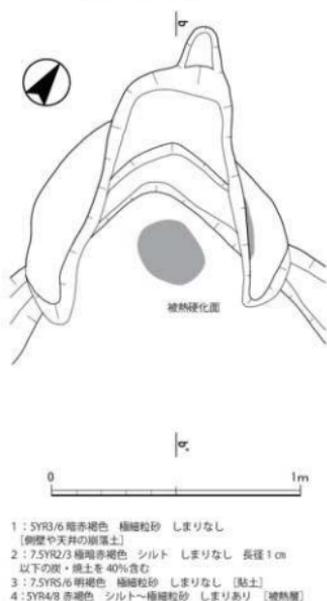
第87図 SH119・124遺構図(1:50)



【カマド検出状況】



【カマド完掘状況】



第88図 SH120遺構図 (1 : 50、カマド1 : 20)

的細かい刷毛目が施されている。

SH 121 (第89・169図) H-P 4 周辺で検出した、一辺(北西辺) 6.0 m の方形を呈する竪穴建物。谷側が流出しているため、直交方向の建物幅は不明だが、北西壁を 3.8 m まで確認した。検出面からの深さは 21 cm である。北東壁の一部で深さ 3 cm ほどの壁周溝を確認した。建物内部に小土坑を多数検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

北西壁から 40 cm ほど離れた位置で竈の残欠と推定される焼土の広がりを確認した。

SA 185 の複数の柱穴と重複するが、竪穴建物の埋土が非常に浅いこともあり、新旧関係は明確でない。

埋土から、土師器甕 (351)、須恵器蓋 (350)・杯 (無台杯もしくは杯 B)・高杯・甕などが出土した。

350 は鈕を欠くが、接合部径が非常に小さく、天井部は高く盛り上がる。かえりの形状も、通常の杯蓋 g とは異なるため、壺や椀の蓋と考えられる。351 は破片が小さいため、口径の復元はできないが、土師器長胴甕と思われる。

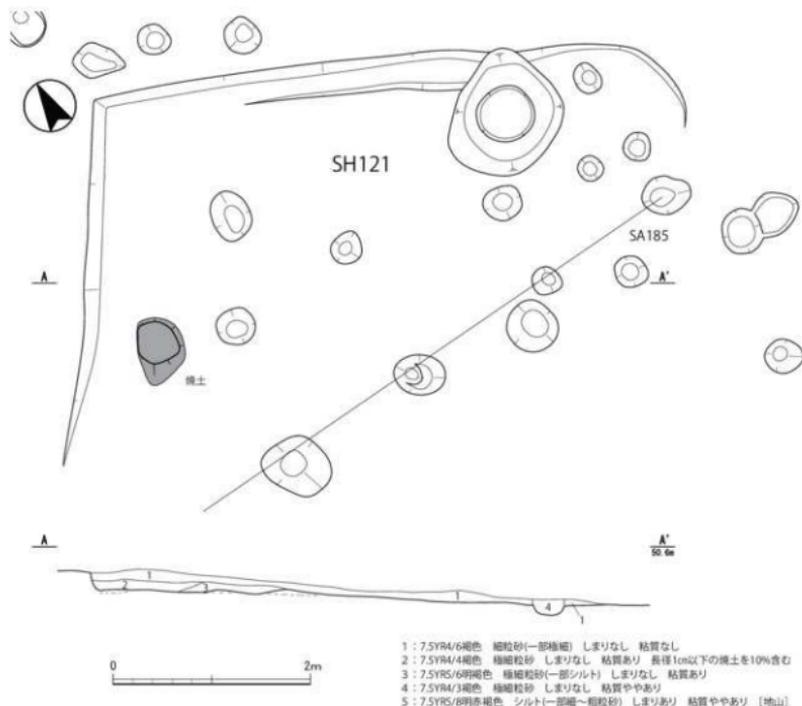
SH 124 (第87図) H-N 3 付近で検出した竪穴建物。北西隅から北辺 2.2 m、西辺 2.2 m 分の壁周溝のみ確認した。壁周溝の深さは 7 cm である。

平面的に重複する SH 124 との新旧関係は不明である。

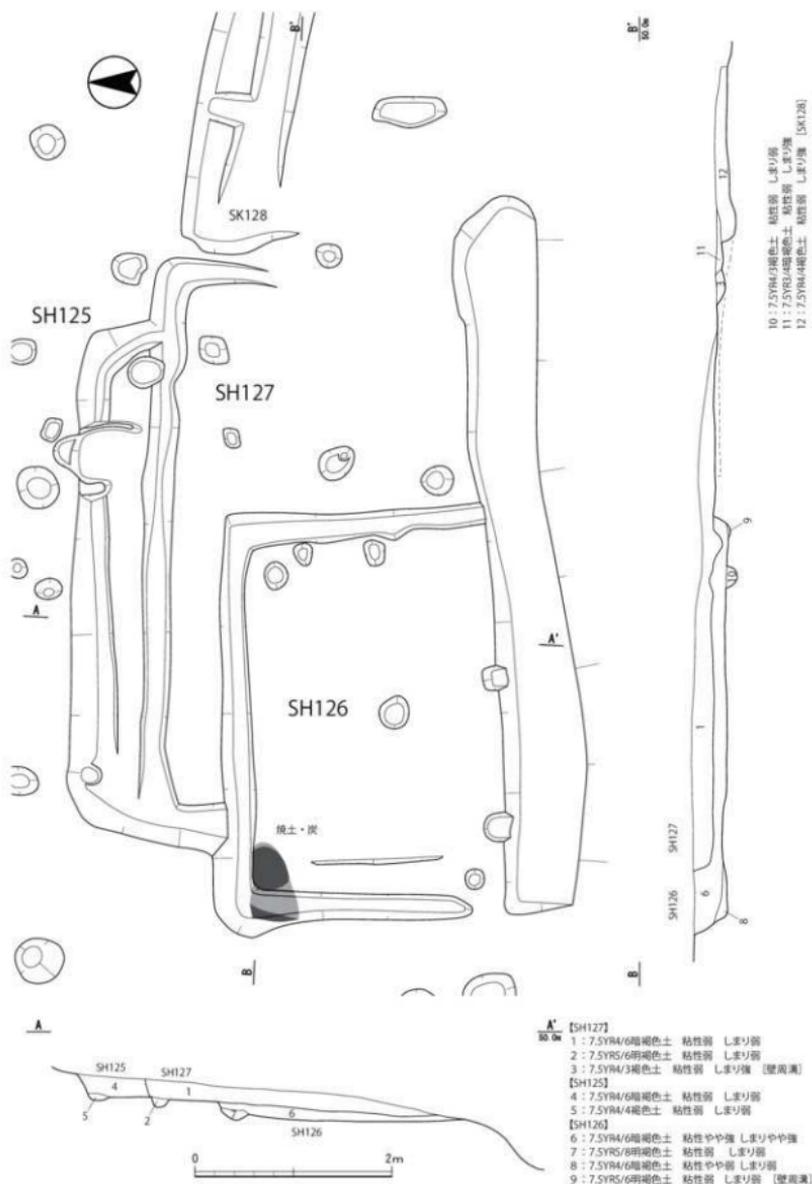
埋土から、土師器甕の破片が 4 点出土した。

SH 125・126・127 (第90・91・170図) H-N 5 ~ O 6 付近で検出した重複する 3 棟の竪穴建物。SH 126 が最も古く、SH 127 が最も新しい。

当初、SH 125 と SH 127 の新旧関係を誤認してお



第89図 SH 121 遺構図 (1: 50)



第90図 SH125~127遺構図 (1:50)

り、その際取り上げた遺物については、SH125・127として取り扱ったが、大半はSH127に属するものと思われる。3棟から出土した遺物には、土師器の杯・皿・甕、須恵器の蓋・杯・盤、製塩土器などがある。

SH125 大部分がSH127により壊されているが、北壁の周溝と竈を確認した。東西幅は5.2mで、南北幅は0.7m以上の方形を呈し、検出面からの深さは20cmで、壁周溝の深さは5cmである。

竈は北壁の東寄りにある。基底部で幅0.8m×奥行0.9m、高さ11cmほどが残存していた。焚口付近に焼土や炭が広がっており、床は被熱して硬化していた。建物内部に当たる位置から小土坑数基を検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

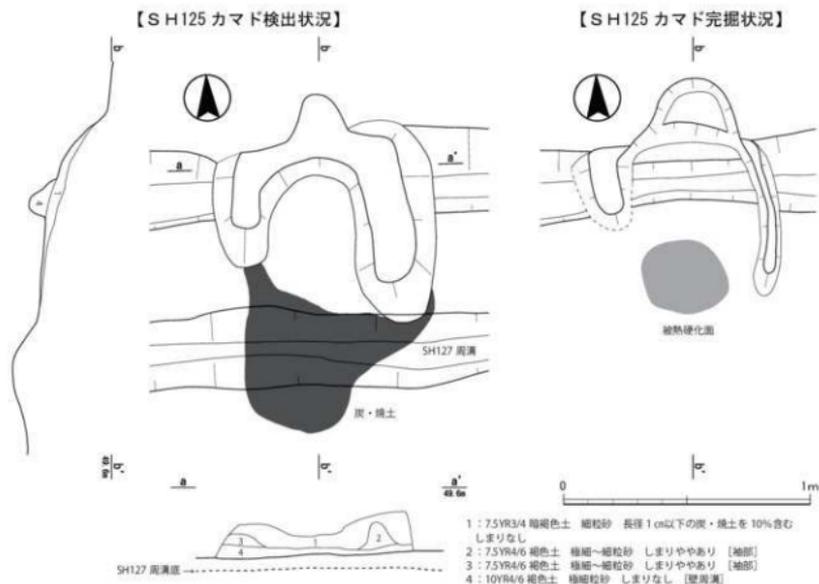
SH126 南半が流出しており、北半のみを検出した。東西幅は4.3mで、南北幅は2.8m以上の方形を呈し、検出面からの深さは30cmで、周溝の深さは5cmである。残存する三辺に壁周溝が巡っている。北西隅の壁周溝上で竈の残欠とみられる焼土・炭の広が

りを確認した。建物内部に当たる位置から小土坑数基を検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

SH127 SH126と同様に南半は流出しており、北半のみ遺存していた。東西幅は6.0mで、南北幅は2.9m以上の方角を呈する。検出面からの深さは20cmで、壁周溝の深さは10cmである。北半部の三辺で壁周溝を確認した。建物内部に当たる位置から小土坑数基を検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

SH125・126・127出土遺物 3棟の建物から出土した遺物としては、土師器の杯(360・361)・皿(363)・甕(362・368)、須恵器の杯蓋(354~356・364)・無台杯(359)・杯B(357・365・367・369)・盤B(358)、製塩土器などがある。364~366はSH125、367・368はSH126、369はSH127の遺物であるが、354~363はSH125もしくはSH127の遺物である。

須恵器は猿投窯系が多く、354・357・364・367・369の形状および鈕接合部や高台貼付位置などの特



第91図 SH125カマド詳細図(1:20)

徹は、I-101号窯やN288号窯出土品と共通する。359は杯としたが、非常に浅い小型で、あまり例を見ない。土師器は、有台杯の365は比較的残りが良いが、その他は小破片で風化も進んでいる。366は知多式製塩土師器の脚部である。

SH131・134 (第92～95・170・171図) F-G 10付近で検出した重複する2棟の竈穴建物。SH134は、先行するSH131の北西壁と北東壁の位置を殆ど変えずに、規模をやや縮小して建て替えられている。

SH131 一辺7.0mの方形を呈し、深さは5cmである。SH134と重複しない南の二辺に深さ8cmほどの壁周溝が残り、北隅部もSH134の底面で僅かに検出した。北西壁の中央やや南寄りで竈の残欠と目される炭や焼土の広がりを見た。煙道らしき建物外側への張り出しと支柱石据付掘形とみられる小土坑を検出したが、竈の構築材は遺存していなかった。

壁周溝から土師器甕片・須恵器杯(370)、貯蔵穴とみられる小土坑から小型壺(371)が出土したが、埋土からの出土遺物は僅かである。370は杯としたが、台付碗の可能性があり、在地窯系と目される。371は、猿投窯系の小型壺で、底部に「×」のヘラ記号がある。

SH134 長辺6.6m×短辺6.5mの方形を呈し、深さは20cmである。深さ20cmほどの壁周溝は、竈の袖の下がやや不明瞭であるが、ほぼ全周する。北西壁の中央やや北寄りに竈が設けられており、竈の内部には新田2枚の被熱硬化面が確認された。

当初の竈の床である地山の被熱面は、第95図10層の土で覆われ、その上に新しい竈の裾部が構築されている。新しい竈は、基底部で幅1.2m×奥行1.4mあり、袖部は高さ9cmほどが残存していた。竈検出時には、焚口付近だけでなく、裾部の外側や建物北隅付近まで焼土や炭の広がりが認められた。また、竈周辺からは土師器甕・鍋などが多く出土した。

支柱穴が想定される位置では、東隅以外の3箇所ですぐれ状の小土坑が検出された。SH131・134のどちらの支柱穴であっても違和感はないが、柱穴に重複は認められない。SH131の柱をそのまま使用したか、同じ場所で建て替えたかは確定できなかった。

埋土から、土師器の甕(386～390)・鍋(391)・碗(385)、須恵器の蓋H蓋(380・381)・杯H身(382)・台付碗(384)・小型壺(383)などが出土した。須恵器は猿投窯系が多く、図示した中では380は湖西産の可能性のあるだけで、他は全て猿投窯系である。381は肩部の稜が不明瞭化して沈線状の窪みになっており、I-101号窯やH-16号窯出土品の特徴と合致する。382は口縁部を欠くため断定できないが、底部の形状や受け部径は、381よりやや古いH-15号窯出土品と共通する特徴を示す。

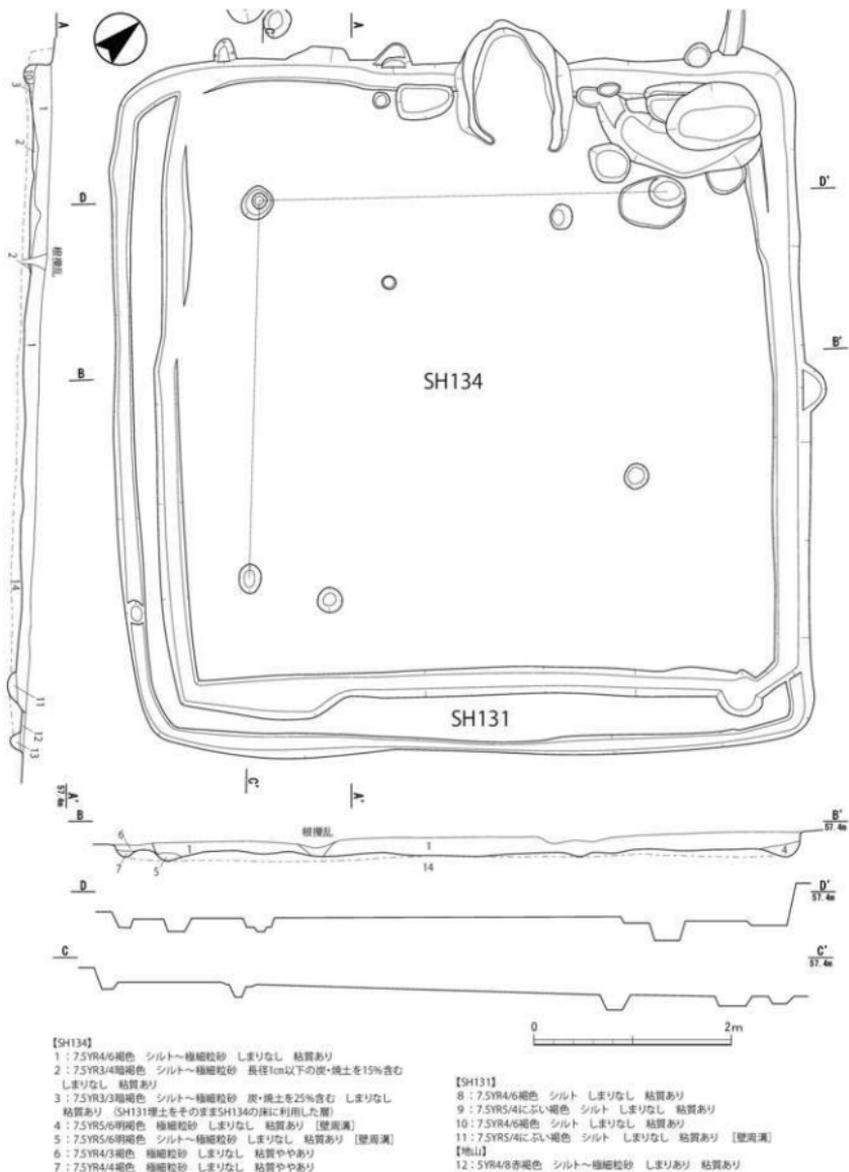
385は土師器碗で、赤褐色を呈する。386・387は小型甕で、386は頸部のしまりや口縁部の反りが弱い。387は内面と外面上半に比べ、外面下半の刷毛目が非常に細かい。389・390は完形近くに復元できた長胴甕で、口縁部は単純な「く」の字状を呈する。388も長胴甕と思われるが、口縁形状は異なる。391は口径が大きい鍋で、把手は先端を欠くが、扁平な平面三角形を呈するものと思われる。

SH132 (第96・97・170図) 第3・6次調査区域にあたるF-E・F8で検出した、長辺4.4m×短辺4.3mの方形を呈する竈穴建物。検出面からの深さは22cmである。深さ5～20cmほどの壁周溝は、西壁の中央北寄りの一部を除きほぼ全周する。建物内部から小土坑を複数検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

西壁中央で竈を確認したが、ちょうど調査区の境にあたる南側の袖部は、良好な状態で検出できなかった。袖部の手前から煙道までは奥行1.0mほどあり、袖部の構築土は高さ19cmが残存していた。竈の床と袖内面の壁は被熱硬化していた。

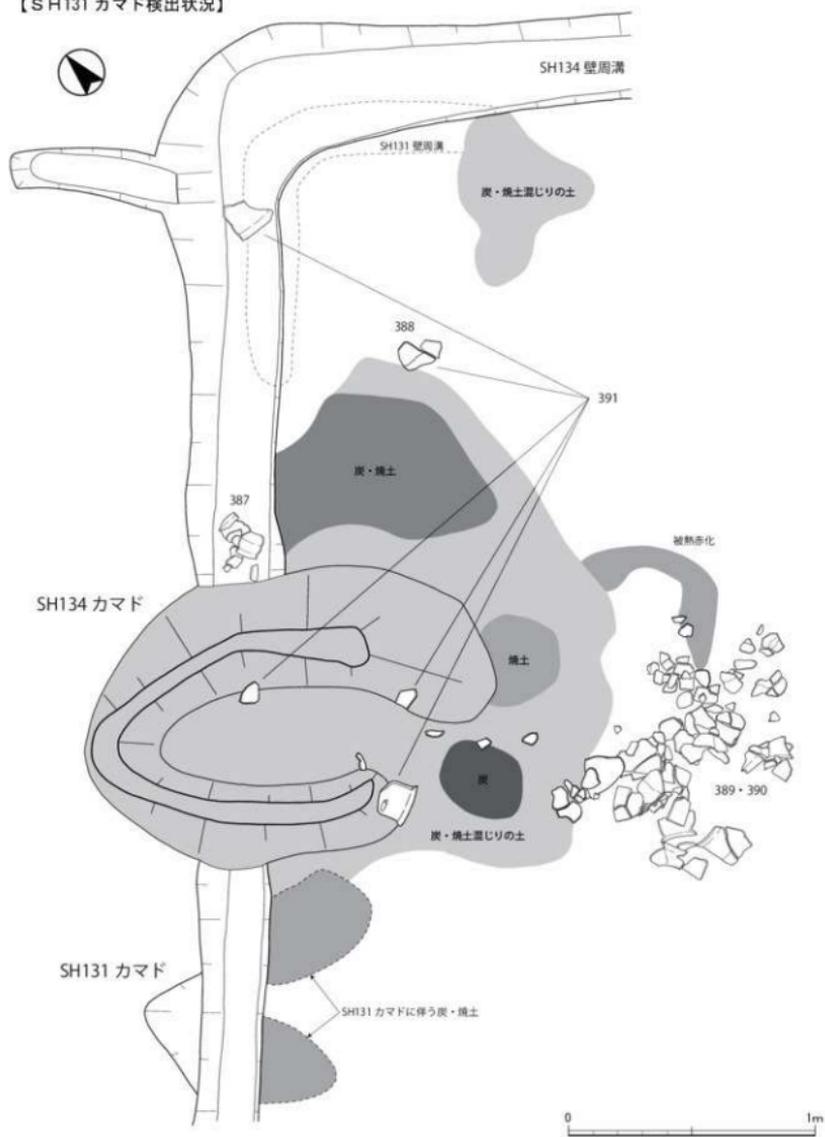
竈の焚口付近から土師器長胴甕(378)の破片が多く出土したほか、埋土から土師器甕(379)、須恵器の杯蓋(372)・杯(373・374)・壺(375・377)・甕(376)などが出土したが、図化できたものも含めて小片が多い。372は在地窯系の杯蓋g。376は猿投窯系で、373～375もその可能性が高い。374の頸部にはヘラ描き斜線文が施されており、器表面はやや風化している。378・379も風化しており、器表面の調整は不明である。

SH201 (第98・171図) D-I 23で検出した、一辺(西辺)4.5mの方形を呈する竈穴建物。建物埋土

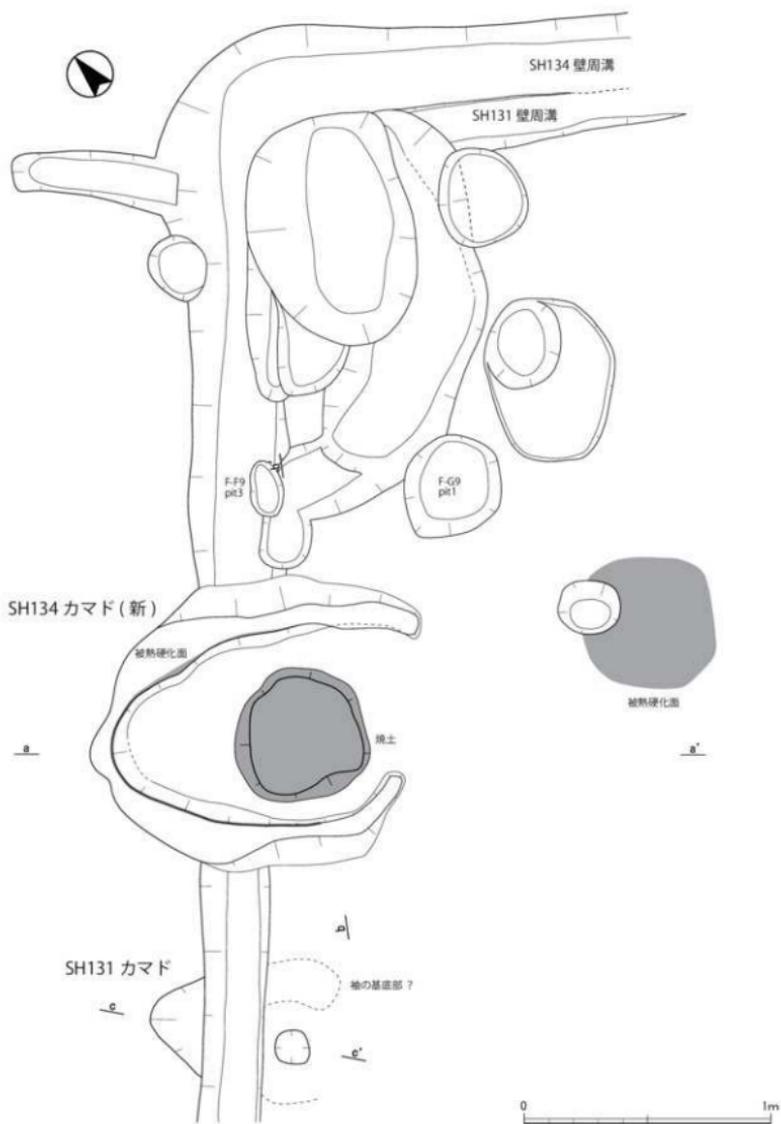


第92図 SH131・134遺構図 (1 : 50)

【SH131 カマド検出状況】

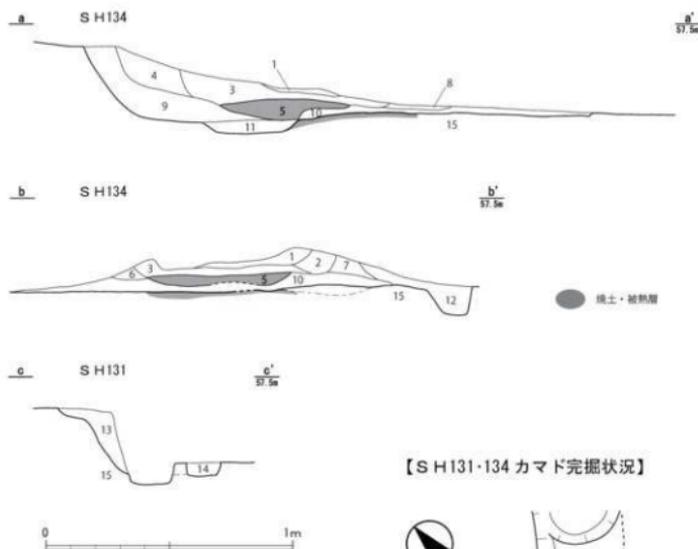


第93図 SH131・134カマド詳細図1 (1:20)

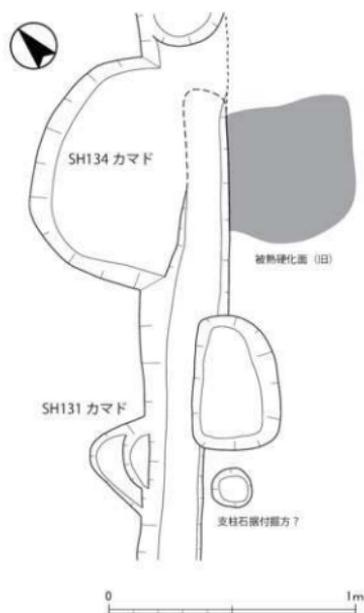


第94図 SH131・134カマド詳細図2 (1:20)

【SH131・134 カマド土層】位置は第94図



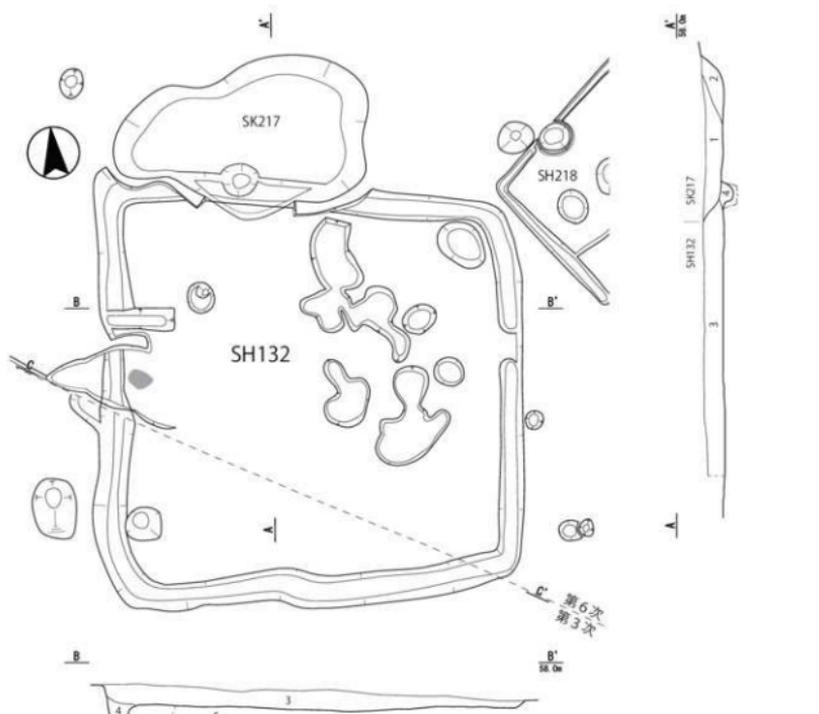
【SH131・134 カマド完掘状況】



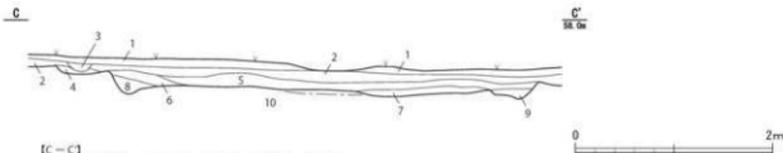
【SH134】

- 1 : 7.5YR4/4 褐色 極細～細粒砂 しまりなし
長径 1cm以下の炭を 25%含む [構築土の積層]
 - 2 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細～細粒砂 しまりなし
長径 1cm以下の炭を 5%含む
 - 3 : 7.5YR4/3 褐色 極細～細粒砂 しまりなし
長径 1cm以下の炭を 30%含む [炭層]
 - 4 : 7.5YR4/6 褐色 極細～細粒砂 しまりなし
長径 1cm以下の炭・焼土を 5%含む
 - 5 : 2.5YR4/8 赤褐色 極細粒砂 しまりあり
上面は強い被熱により 7.5YR5/8 明褐色に変色 [新カマドの焼土面]
 - 6 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまりややあり
長径 1cm以下の炭を 5%含む [捨部]
 - 7 : 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 しまりややあり
長径 1cm以下の炭を 5%含む [地間]
 - 8 : 7.5YR4/3 褐色 極細～細粒砂 しまりなし
長径 1cm以下の炭を 5%含む [新カマドの焚口付近埋土]
 - 9 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりややあり
長径 1cm以下の炭を 5%含む [旧カマドの焚口付近埋土]
 - 10 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりややあり
長径 1cm以下の炭を 20%含む [旧カマドを整理した層]
 - 11 : 7.5YR4/6 褐色 極細～細粒砂 しまりなし
長径 1cm以下の炭を 5%含む
一部被熱により 5YR4/6 赤褐色に変色 [壁周溝]
 - 12 : 10YR3/4 暗褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし
長径 1cm以下の炭を 10%含む
- 【SH131】
- 13 : 7.5YR4/6 褐色 極細～細粒砂 しまりなし
長径 1cm以下の炭を 20%含む
 - 14 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまりややあり
長径 1cm以下の焼土を 15%含む [支柱石据付箇所?]
- 【地山】
- 15 : 5YR4/6 赤褐色 シルト～極細粒砂 しまりあり
SH134 旧カマドにともなう被熱層は 5YR3/6 暗赤褐色に変色

第95図 SH131・134カマド詳細図3 (1:20)



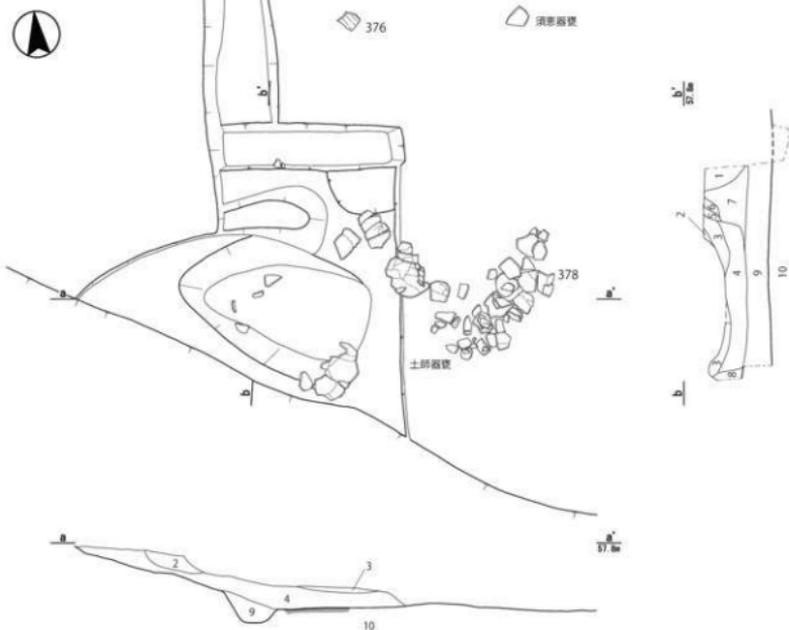
- 【A-A', B-B'】
- 1: 10YR3/3 暗褐色 極細粒砂 (一部粗) しまりあり 根による影響大 [SK217]
 - 2: 10YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまりややあり [SK217]
 - 3: 7.5YR4/6 暗褐色 極細-粗粒砂 しまりややあり
 - 4: 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまりなし [壁内溝]
 - 5: 5YR4/8 赤褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりあり [地山]



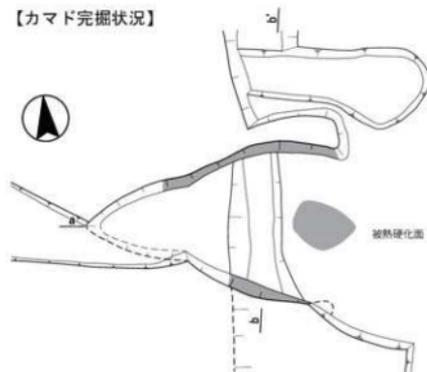
- 【C-C】
- 1: 10YR3/2 黒褐色 中粒砂 しまりなし 粘質なし [表土]
 - 2: 10YR3/4 暗赤褐色 極細粒砂 しまりなし 粘質ややあり [包含層]
 - 3: 10YR3/1 黒褐色 極細砂 しまりなし 粘質なし [根擾土]
 - 4: 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 1cm以下の機土・灰を20%含む しまりなし 粘質あり [カマド?]
 - 5: 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまりなし 粘質あり
 - 6: 5YR2/4 緑暗赤褐色 極細粒砂 2cm以下の機土・灰を50%含む しまりなし 粘質あり
 - 7: 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂 しまりなし 粘質あり
 - 8: 5YR4/4 に近い赤褐色 極細粒砂 しまりなし 粘質あり [壁内溝]
 - 9: 5YR4/4 に近い赤褐色 極細粒砂 しまりなし 粘質あり [壁内溝]
 - 10: 5YR4/8 赤褐色 シルト 長径10cm以下のレキを5%含む しまりあり 粘質あり [地山]

第96図 SH132遺構図 (1:50)

【カマド検出状況】

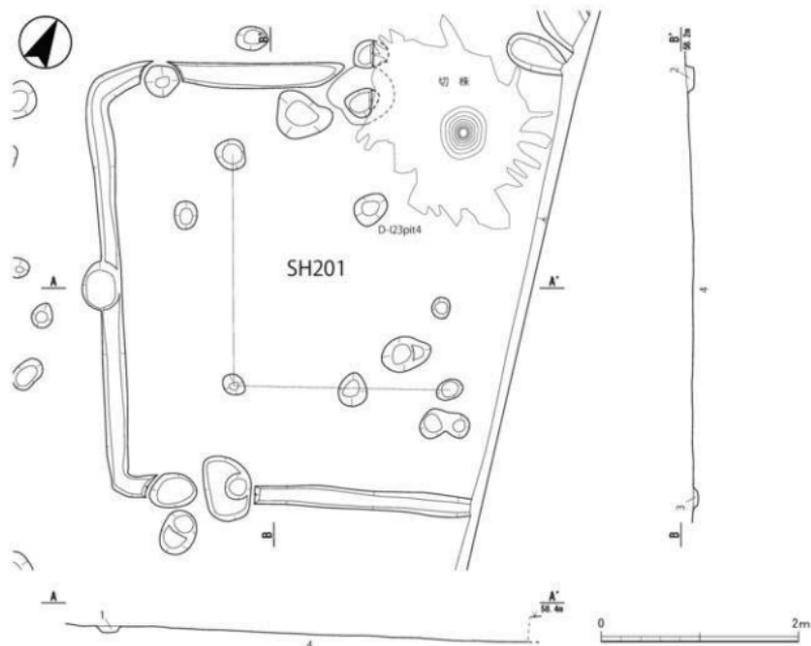


【カマド掘削状況】



- 1: 7.5YR4/6 褐色 シルト～極細粒砂 しまりややあり
- 2: 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 (一部細) しまりややあり 長径1cm以下の炭を5%含む
- 3: 5YR5/8 暗赤褐色 シルト～極細粒砂 しまりややあり 長径1cm以下の焼土を10%含む [天井の崩落土]
- 4: 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまりなし 長径1cm以下の炭を15%含む
- 5: 5YR3/6 暗赤褐色 極細～細粒砂 しまりあり [地の被熱部分]
- 6: 5YR2/3 極細～細粒砂 しまりややあり [地部] 被熱の影響で7層が変質・変色したものの可能性あり
- 7: 7.5YR4/6 褐色 (一部7.5YR3/4) 極細～細粒砂 [地部]
- 8: 5YR3/6 暗赤褐色 極細～細粒砂 しまりあり [地の被熱部分]
- 9: 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりなし [壁周溝]
- 10: 5YR4/8 赤褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりあり [地山] 焚口の被熱部分は5YR3/6暗赤褐色に変色

第97図 SH132カマド詳細図 (1:20)



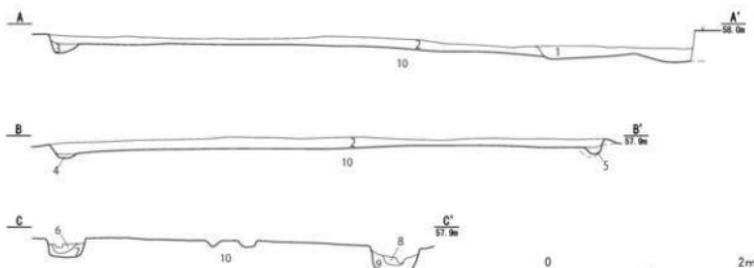
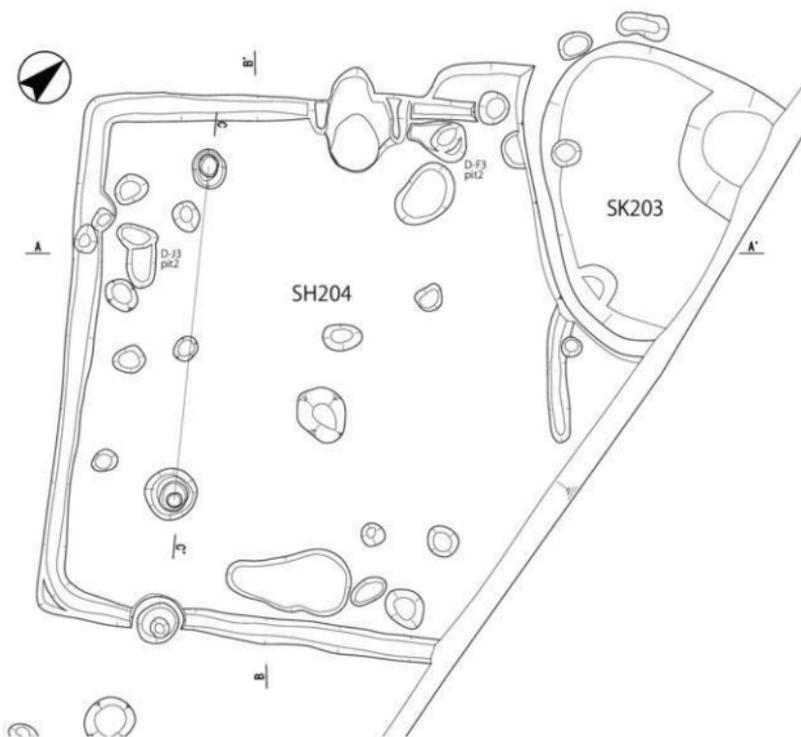
- 1 : 7.5YR4/6褐色 極細～細粒砂 しまりあり [壁周溝]
 2 : 7.5YR4/4褐色 極細粒砂 しまりややあり [壁周溝]
 3 : 7.5YR4/6褐色 極細粒砂 しまりややあり [壁周溝]
 4 : 5YR4/8赤褐色 極細粒砂 しまりあり [地山]

【カマド】



- 1 : 7.5YR3/4暗褐色 極細粒砂 しまりなし
 長径1cm以下の炭を15%含む
 2 : 7.5YR4/4褐色 極細粒砂 (一部シルト)
 しまりややあり
 [筒状瓦、もとは支柱石設置ビットか]
 3 : 7.5YR4/4褐色 極細粒砂 しまりなし [カマド推出]
 4 : 5YR4/8赤褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりあり
 [地山] 被熱部分は5YR3/6暗赤褐色に変色

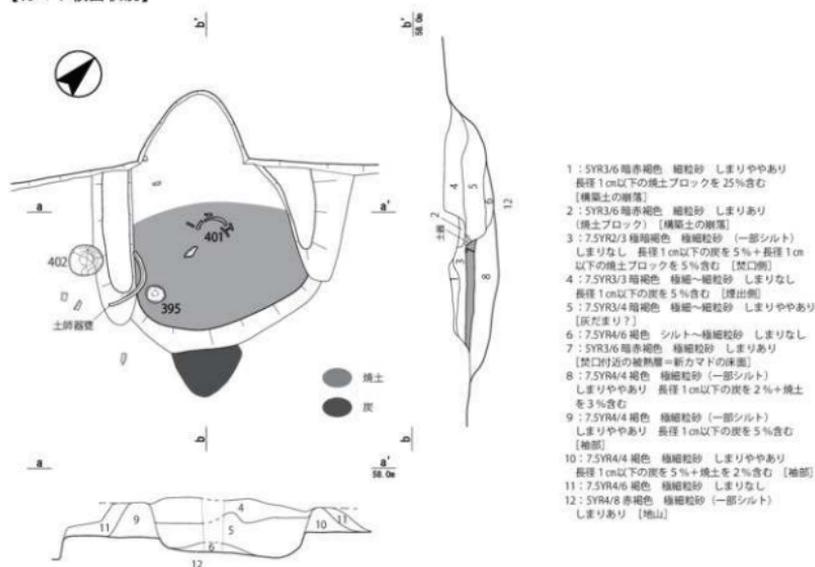
第98図 SH201遺構図 (1 : 50、カマド1 : 20)



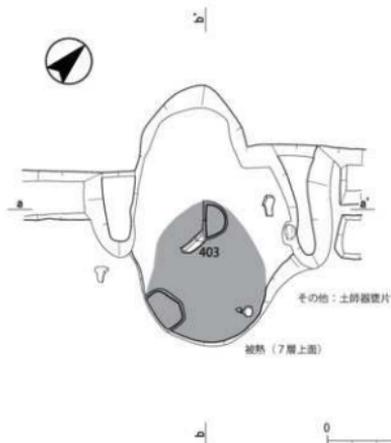
- | | |
|--|--|
| 1 : 10YR 3/4暗褐色 極細～細粒砂 しまりややあり [SK203] | 6 : 7.5YR/4 褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし [柱礎乱?] |
| 2 : 7.5YR 4/6褐色 極細～細粒砂 しまりややあり | 7 : 7.5YR/6 褐色 極細粒砂 しまりややあり |
| 3 : 7.5YR 3/4暗褐色 極細粒砂 しまりなし [壁周溝] | 8 : 7.5YR/4 褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし [柱礎乱?] |
| 4 : 7.5YR 3/4暗褐色 極細～細粒砂 しまりややあり [壁周溝] | 9 : 7.5YR/6 褐色 極細粒砂 しまりややあり |
| 5 : 7.5YR 3/4暗褐色 極細粒砂 しまりなし [壁周溝] | 10 : 5YR/6 赤褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりあり [地山] |

第99図 SH204遺構図 (1 : 50)

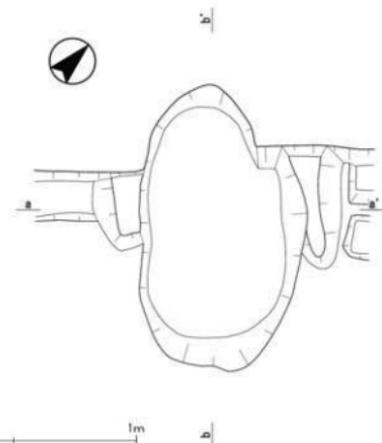
【カマド検出状況】



【被熱層の状況】



【カマド完掘状況】



第 100 図 SH204カマド詳細図 (1:20)

をほぼ完全に削平されている上に、立根による攪乱も受けており、残存状態は不良だが、壁周溝と竈、支柱穴3基を確認した。壁周溝の深さは7cmである。

竈は北壁にあり、被熱硬化面と、煙道や支柱石据付掘形が確認された。

竈から土師器長胴甕(392)、床面で検出した貯蔵穴とみられる小土坑D-123pit4から須恵器平皿(393)などが出土した。393は在地窯系で、接合できないが非図化遺物の中に同一個体とみられる肩部の破片がある。

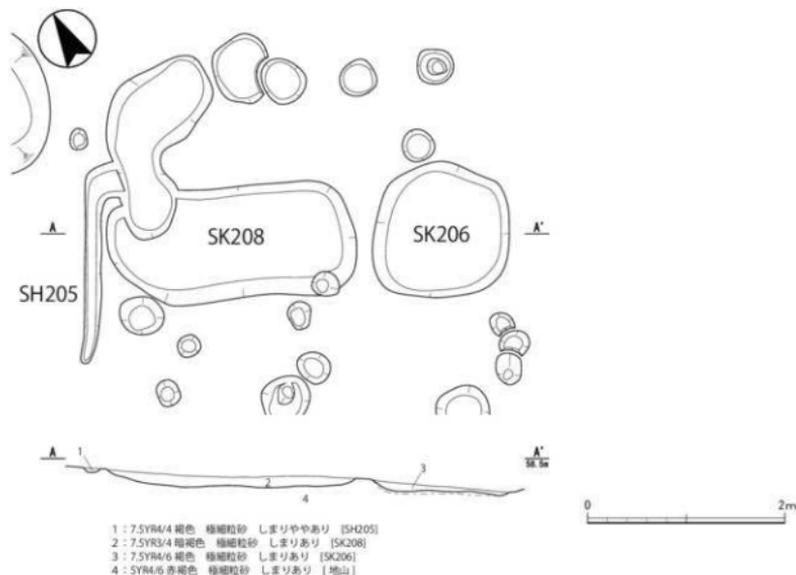
SH204 (第99・100・171図) F-J3付近で検出した、長辺5.7m×短辺5.1mの方形を呈する竈穴建物。検出面からの深さは12cmである。深さ6cmほどの壁周溝はほぼ全周する。支柱穴2基と、その可能性のある小土坑を1基確認した。

北西壁中央付近で竈を確認した。基底部で幅1.0m×奥行1.05m、袖部は高さ14cmほどが残存していた。竈の床や焚口付近には焼土や炭の広がりが見られた。竈の埋土中位には被熱した土の層(第100

図7層)が認められ、完掘時には地山に被熱痕跡は見いだせなかった。調査時の所見によると、竈は造り替えが行われ、7層は新しい竈の床面で、12層は古い竈の床を掘り下げた層と解釈されている。

竈前面や内部からは土師器甕(401・403)や須恵器杯(395)が出土した。南西側袖部の脇からは土師器小型甕の下半部(402)が出土したが、その周りの土は固く焼け締まっていた。このほか、埋土から土師器甕(399・400)・甎(404)、須恵器杯H身(394)・高杯(396)・フラスコ瓶(397・398)類などが出土した。394は狼投窯系で、口縁部の立ち上がりは矮小化し、径も小型化しているが、底部にはロクロケズリが施されている。396は在地窯系の小型高杯で、器壁も薄い。397は狼投窯系の瓶類の口縁部で、フラスコ瓶と思われる。398もフラスコ瓶の口縁部と考えられるが、湖西産とみられ、一宮峠第2地点1号窯出土品に類似する。

土師器甕には小型甕(401・402)と長胴甕(399・400・403)があり、長胴甕の口縁部形状は3点とも



第101図 SH205遺構図(1:50)

異なる。404は甔の底部片で、おそらく半月状の穴が2個あけられたものであろう。

SH205 (第101図) D-G23で検出した竪穴建物で、北隅部の壁周溝とみられる平面L字形の溝のみ確認した。すぐ東側で検出した土坑SK206・208も、建物と関連しそうな位置にはあるが、底面の高さが周溝よりも深いため、別遺構として解釈した。

壁周溝の深さは4cmで、北隅から北西辺2.0m、北東辺0.4m分検出した。竈は認められず、建物内部に小土坑を多数検出したが、この建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

埋土から、土師器甕の小破片が2点出土した。

SH210 (第102・171図) D-G24付近で検出した、一辺3.5mの略正方形を呈する竪穴建物。検出面からの深さは8cmである。壁周溝は深さ3cmほどで、北辺から東辺の北半および西隅部で確認したが、竈付近にはない。調査時には北壁に沿って並ぶ柱穴を主柱穴と推測して土層断面を記録したが、掘立柱建物SB323との関係は矛盾する。

東壁のやや南寄りて竈を確認した。基底部で幅0.8m×奥行0.6m、袖部は高さ4cmほどが残存していた。竈の床には被熱硬化面が認められた。

埋土から、土師器甕・杯、須恵器杯(無台杯もしくは杯B)などの破片(405)が出土した。405は把手で、残存している体部内面にクロロ目が認められないことから、手づくね円盤で天井部を閉塞して、風船挽きで成形された平瓶である可能性が高い。

SH213 (第103・104・171図) F-D2付近で検出した、長辺6.15m×短辺5.6mの長方形を呈する竪穴建物。検出面からの深さは14cmである。壁周溝と主柱穴4基を確認した。壁周溝の深さは5cmほどである。

平面的に重複するSH297よりも新しく、SB305・SB325よりも古い。

東壁中央で竈を確認した。基底部で幅0.9m×奥行1.3mほど、袖は高さ6cmが残存していた。構築土は褐色の粘質土で、焚口付近の床に被熱硬化面が確認された。

竈からは土師器長胴甕(411)、須恵器杯H蓋(406)・杯H身(407・409)などが、主柱穴からは土師器の鍋もしくは甔の把手(413)や須恵器杯H身(408)、

埋土からは土師器の鍋もしくは甔の把手(412)や須恵器蓋(410)などが出土した。406・407は狼投窯系で、胎土・色調・焼成具合が酷似している。口縁端部内面に段が認められ、杯蓋肩部の稜や杯身の蓋受け部下の段も比較的明瞭な特徴は、H-44号窯出土品に似る。409も狼投窯系の小破片で、焼成不良のため表面は風化しているが、口縁端部内面には段が認められる。408は在地窯系で、口縁部は矮小化しているが、径は大きい。410も在地窯系で、天井部にカキ目と櫛描刺突文が施されている。おそらく高杯の蓋であろう。

SH214 (第105・171図) F-D4付近で検出した、長辺4.25m×短辺3.6mの長方形を呈する竪穴建物。検出面からの深さは10cmである。深さ7cmほどの壁周溝を東壁の一部と西壁で確認した。竈は認められず、建物内部に小土坑を多数検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

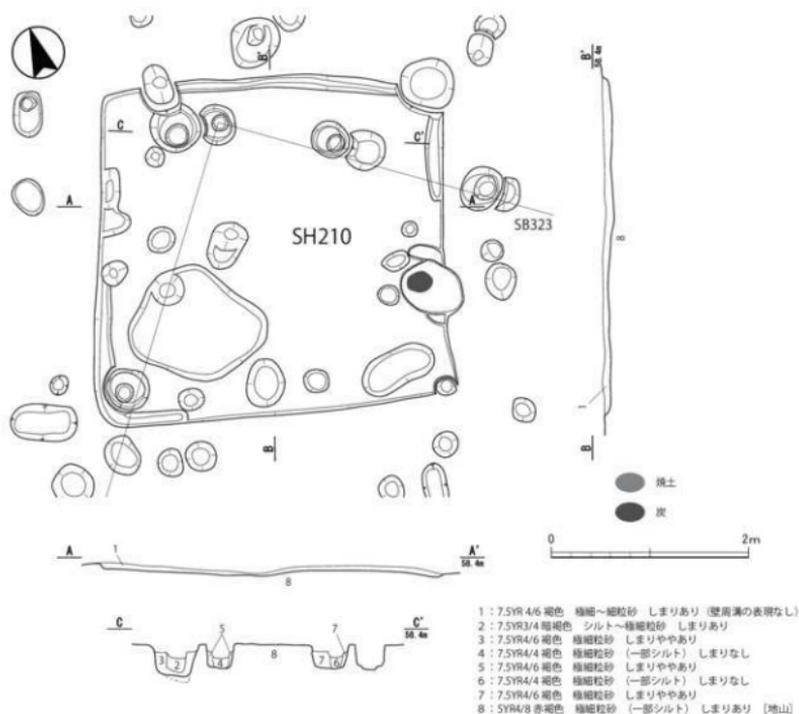
北壁中央付近で竈を確認した。新しい小土坑に西側の袖を壊されているが、基底部で幅0.7m×奥行1.05m、袖部は高さ4cmほどが残存しており、床には被熱硬化面が認められた。

焚口付近から土師器の小型甕(414)が出土したほか、埋土から土師器甕や須恵器杯H蓋、チャート製の剥片石器(415)などが出土し、土器の一部はSH219出土品と接合した(421)。

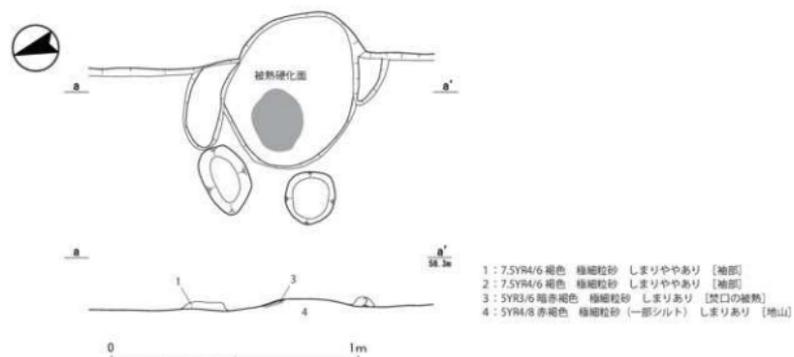
SH215 (第106・107・171図) D-D25付近で検出した、長辺5.7m×短辺5.6mの方形を呈する竪穴建物。検出面からの深さは12cmである。深さ3cmほどの壁周溝を北東隅付近で確認した。建物内部に小土坑を多数検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

北壁中央付近で竈を確認した。基底部で幅1.0m、奥行1.0m、袖部は高さ8cmほどが残存していた。竈の床に被熱硬化面が認められた。

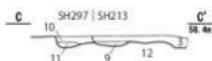
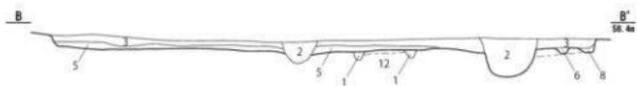
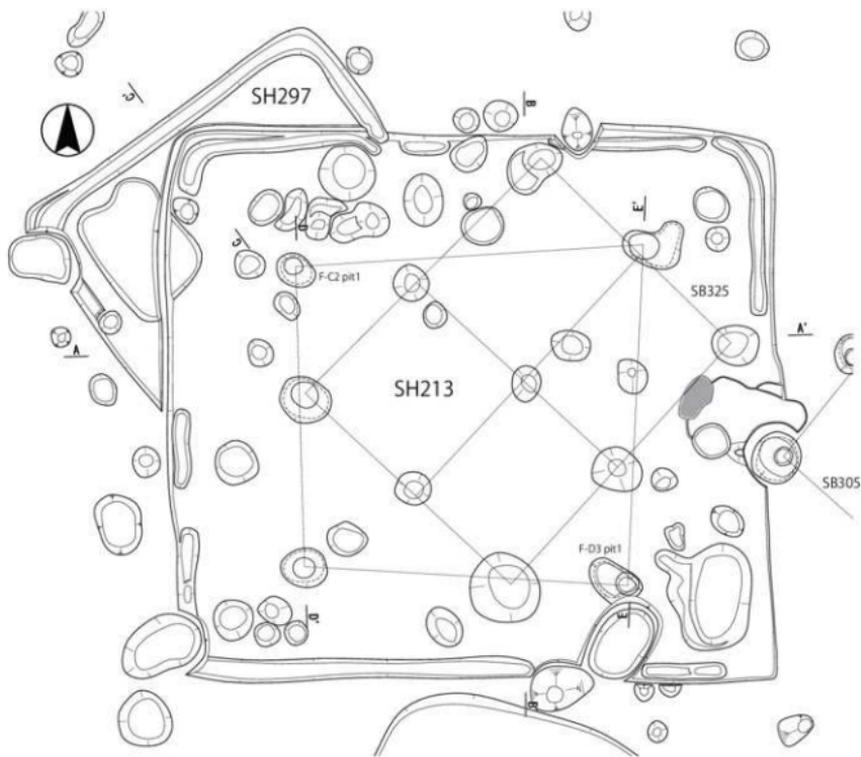
竈から須恵器蓋(416)や土師器甕の破片、竈西側の建物床面から土師器甕(417・418)が数個体出土したが、残存状態が悪いため図化できたものは少ない。そのほか、埋土から土師器甕、須恵器甕・杯が少量出土した。416は狼投窯系で、平坦な上面にはクロケズリが施されており、壺形の蓋とみられる。小型甕の417・418には、417の内面にヨコハケ、418の



【カマド】



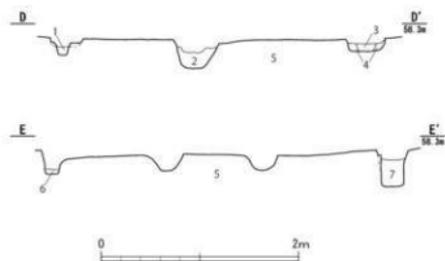
第102図 SH210遺構図 (1 : 50、カマド 1 : 20)



- 1 : 根・根腐乱
- 2 : SB325 柱穴
- 3 : 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 しまりややあり [SH213]
- 4 : 7.5YR4/6 褐色 シルト～極細粒砂 しまりなし [SH213]
- 5 : 7.5YR4/6 褐色 極細～細粒砂 しまりなし [SH213]
- 6 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂(一部シルト) しまりややあり
- 7 : 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂(一部シルト) しまりなし [壁周溝]
- 8 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂(一部シルト) しまりややあり [壁周溝]
- 9 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりややあり [壁周溝]
- 10 : 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂 しまりあり [SH297]
- 11 : 7.5YR4/8 褐色 極細粒砂 しまりややあり [壁周溝]
- 12 : 5YR4/8 赤褐色 極細粒砂(一部シルト) しまりあり [地山]

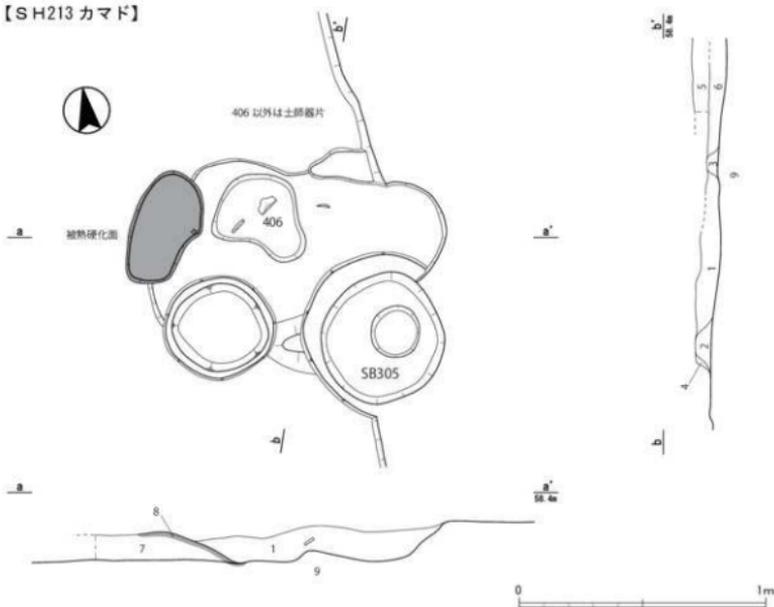
第103図 SH213・297遺構図 (1:50)

【SH213 主柱穴】



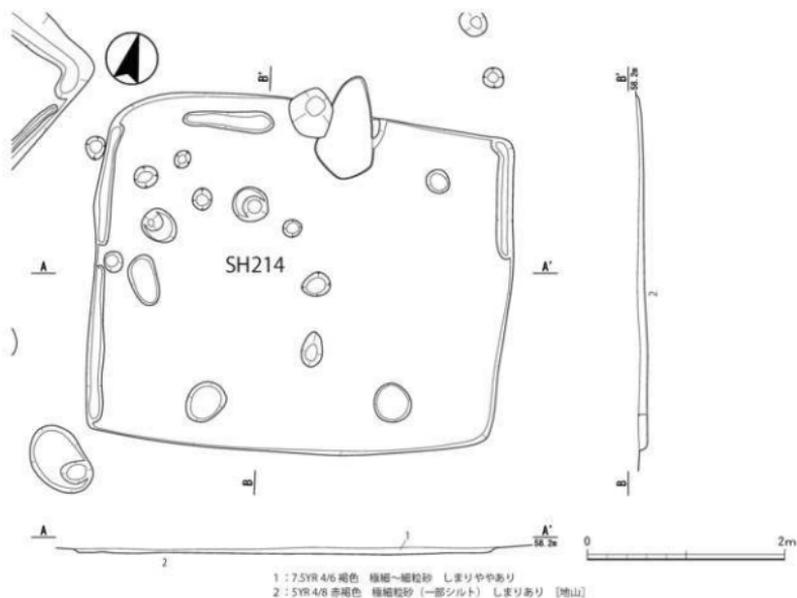
- | | | | |
|------------------|--------------|---------|-------------|
| 1 : 7.5YR4/3 褐色 | 極細粒砂 | しまりなし | 【樹皮土 or 柱痕】 |
| 2 : 7.5YR4/3 褐色 | 極細粒砂 | しまりなし | 【樹皮土】 |
| 3 : 7.5YR3/4 暗褐色 | 極細粒砂 | しまりなし | |
| 4 : 7.5YR4/6 褐色 | 極細粒砂 | しまりややあり | |
| 5 : 5YR4/8 赤褐色 | 極細粒砂 (一部シルト) | しまりあり | |
| 6 : 7.5YR4/6 褐色 | 極細粒砂 | しまりなし | 【柱痕ではない】 |
| 7 : 7.5YR4/3 褐色 | 極細粒砂 | しまりややあり | |

【SH213 カマド】

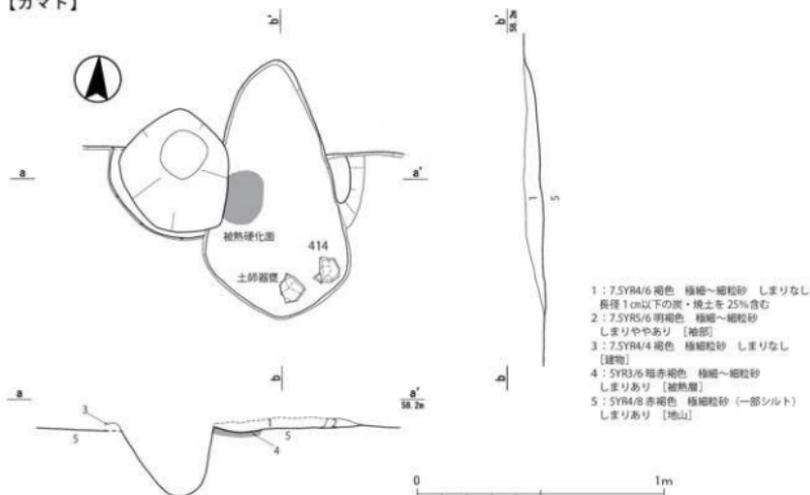


- | | | | |
|-----------------|--------------|---------|----------------------|
| 1 : 5YR3/4 暗赤褐色 | 極細砂 (一部極細) | しまりなし | 表層 1cm以下の灰・焼土を 15%含む |
| 2 : 7.5YR4/4 褐色 | 極細粒砂 | しまりややあり | 【地部】 |
| 3 : 7.5YR4/6 褐色 | 極細粒砂 | しまりややあり | 【地部】 |
| 4 : 7.5YR4/3 褐色 | 極細粒砂 | しまりややあり | |
| 5 : 7.5YR4/4 褐色 | 極細粒砂 | しまりややあり | |
| 6 : 7.5YR4/6 褐色 | 極細～細粒砂 | しまりなし | |
| 7 : 7.5YR4/6 褐色 | 極細粒砂 (一部シルト) | しまりややあり | |
| 8 : 5YR4/8 赤褐色 | 極細～細粒砂 | しまりあり | 【融熱層】 |
| 9 : 5YR4/6 赤褐色 | 極細粒砂 (一部シルト) | しまりあり | 【地山】 |

第 104 図 SH213 遺構図 (1 : 50、カマド 1 : 20)



【カマド】



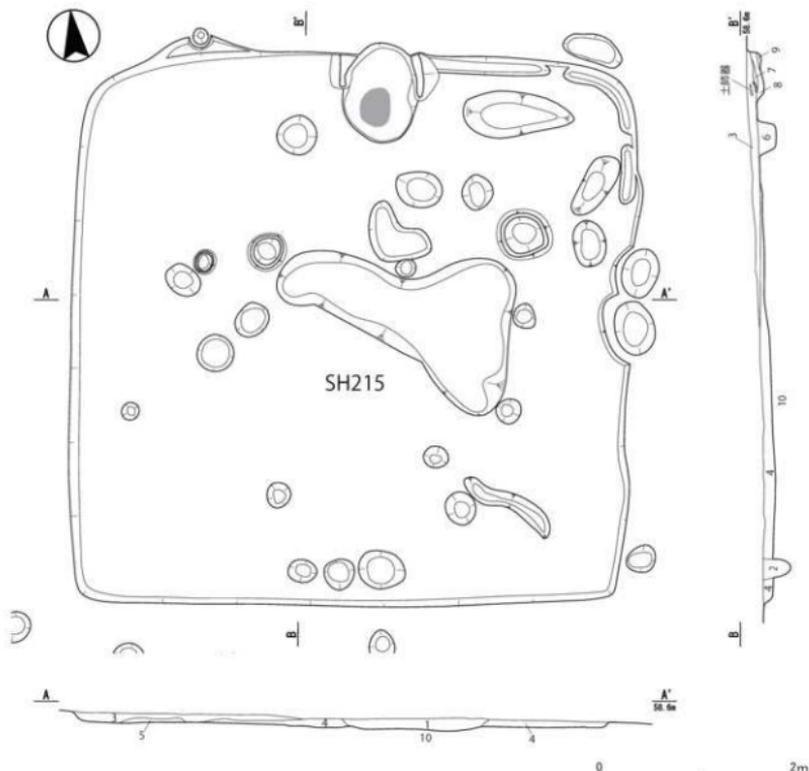
第105図 SH214遺構図 (1 : 50、カマド1 : 20)

外面に平行叩きの痕跡が認められる。

SH218 (第108・109・171図) F-G7付近で検出した、一辺(北西辺)4.7mの方形を呈する竪穴建物。南東側をSH219によって破壊されているため、直交方向の幅は不明だが、北東辺で北隅から3.7mまで壁周溝を確認した。検出面からの深さは7cmである。壁周溝は竪から北隅にかけてを除き、三辺に

認められた。壁周溝の深さは2cmほどである。建物に伴うのではないと思われる柱穴は複数あるものの、確定できない。平面的に重複するSH219よりも古い。

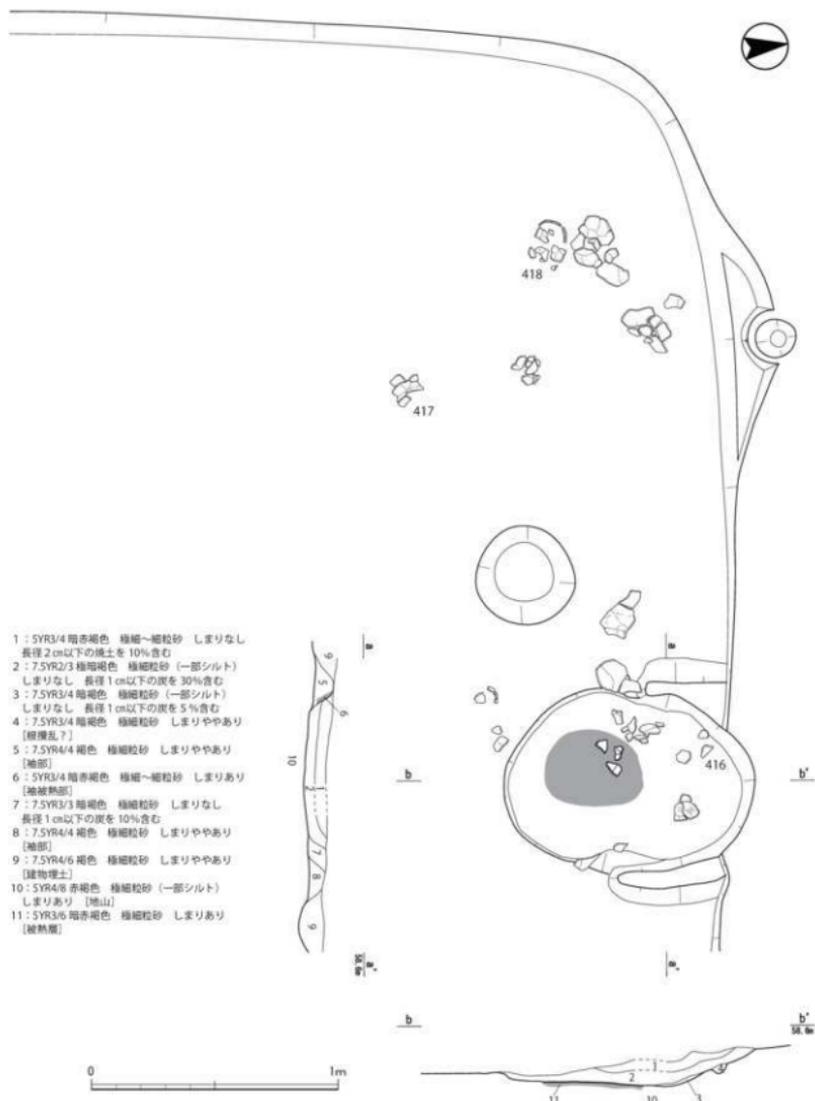
北西壁の中央やや北寄りで竈を確認した。南側の袖部が高さ5cmほど残っており、焚口付近に被熱硬化面が認められた。



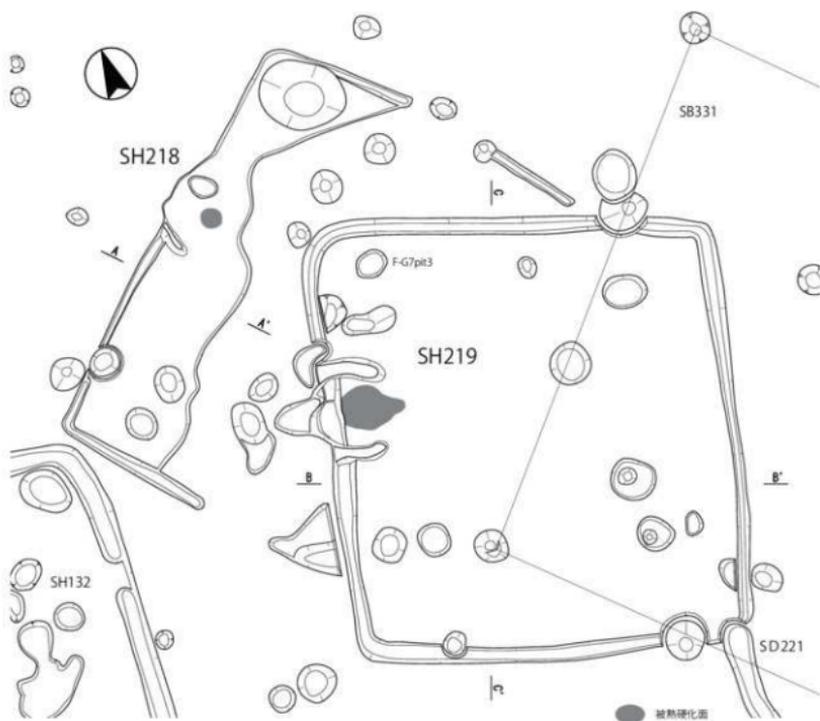
- 1: 10YR4/4 褐色 極細粒砂 しまりややあり [樹皮乱]
- 2: 10YR4/6 褐色 シルト しまりややあり [樹皮乱]
- 3: 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 しまりなし
- 4: 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりややあり
- 5: 7.5YR4/6 褐色 シルト〜極細粒砂 しまりあり [地山類似土]
- 6: 7.5YR4/2 褐色 極細粒砂 しまりややあり 長径1cm以下の灰・地土をそれぞれ2%含む
- 7: 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂 (一部細) しまりなし 長径1cm以下の灰を30%含む [炭層]
- 8: 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 しまりなし 長径1cm以下の灰を5%含む
- 9: 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりややあり
- 10: 5YR4/8 赤褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりあり [地山]

第106図 SH215遺構図1 (1:50)

【カマド付近】



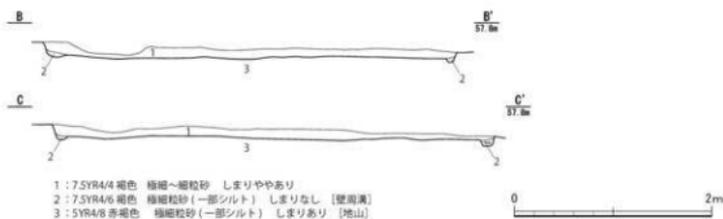
第107図 SH215遺構図2 (1 : 20)



【SH218】



【SH219】



第108図 SH218・219遺構図1 (1 : 50)

埋土から、土師器甕や須恵器杯の破片が少量と尖頭器 (419) が 1 点出土した。サヌカイト製の尖頭器である。

SH 219 (第 108・110・172 図) F-G 7 付近で検出した、長辺 4.6 m × 短辺 4.2 m の長方形を呈する竪穴建物。検出面からの深さは 10 cm である。深さ 4 cm ほどの壁周溝は全周し、竈の下でも確認された。主柱穴が想定される位置から小土坑が 3 基確認されたが、いずれも非常に浅く、柱穴と断定できない。

西壁の中央北寄りで竈を確認した。基底部で幅 1.05 m、奥行 1.1 m、袖部は高さ 12 cm ほどが残存し、両袖部の間の床に被熱硬化面を認めた。

竈の中から禁口にかけて、土師器甕 (422) などの破片が多く散乱した状態で出土した。そのほか、埋土から土師器甕 (423)・鍋もしくは甌 (424)、須恵器杯 H 身 (420)・無台杯 (421)・甕、砥石 (425) などが出土し、土器の一部は SH 214 出土品と接合できた。420 は在地窯系で、口縁が矮小化している。421 も在地窯系とみられるが、器壁は薄く胎土は精良である。424 は体部の形状から鍋の把手と推定した。425 の砥石は砂岩製である

SH 225 (第 111・112・172 図) F-J 9 付近で検

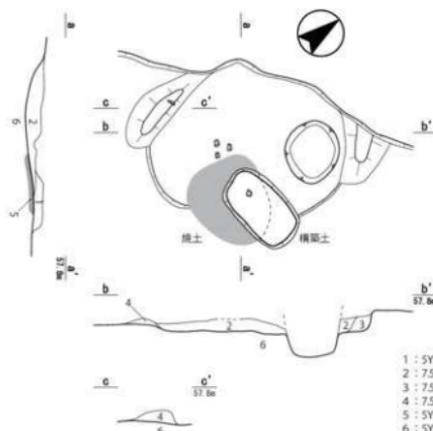
出した、4.5 m × 4.35 m の方形を呈する竪穴建物。検出面からの深さは 30 cm である。壁周溝は竈付近と南隅を除く四辺で確認した。深さは 7 cm ほどである。主柱穴が想定される位置から 1 基だけ柱穴上の小土坑を検出した。

平面的に重複する SK 228 よりも新しく、SK 229 よりも古い。

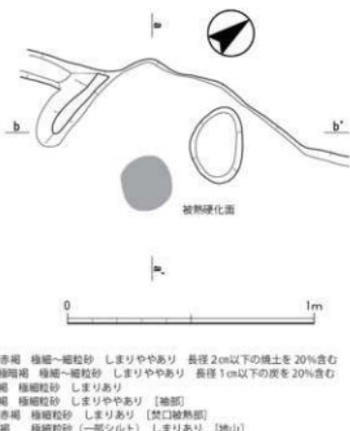
北東壁中央で竈を確認した。基底部で幅 1.4 m × 奥行 0.8 m ほど、袖は高さ 17 cm 残存していた。竈の構築土は褐色の粘質土で、焚口で被熱硬化面が確認できた。

竈や埋土から土師器甕や須恵器が出土した。他の竪穴建物よりも須恵器の種類が豊富で、杯 H 蓋 (426・427)・杯 H 身 (428)・杯蓋 (429)・高杯・横瓶・壺 (430・431)・甕、丸瓦 (432) などがある。426 は狼投窯系で、肩部の稜は比較的明瞭だが位置は低く、小型化している。427・428 は在地窯系で、427 の口縁は矮小化している。429 は狼投窯系で、内側に僅かなかえりを有する杯蓋 g である。430 は在地窯系の壺口縁部で、431 は狼投窯系の長頸瓶のミニチュア品。432 は丸瓦の小片で、内面に布目痕がある。そのほかに、図化していないが、須恵器杯蓋 b の小片があ

【SH 218 カマド検出状況】



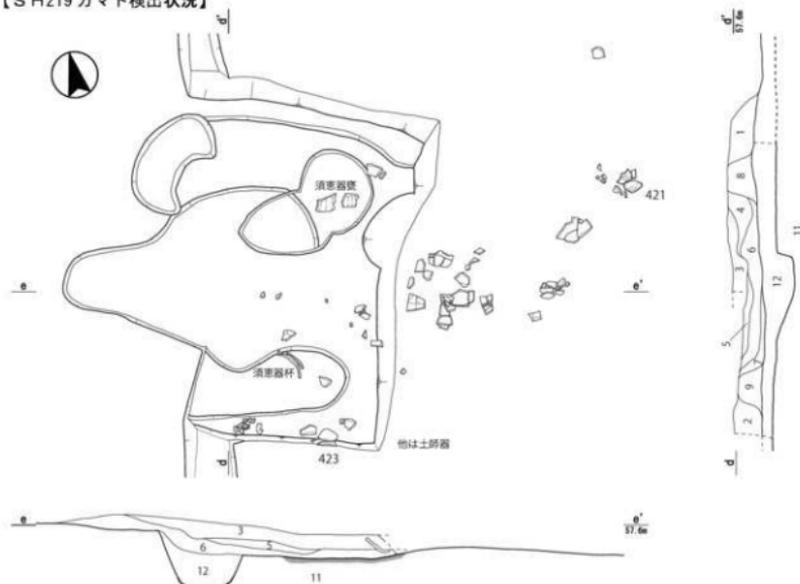
【SH 218 カマド完掘状況】



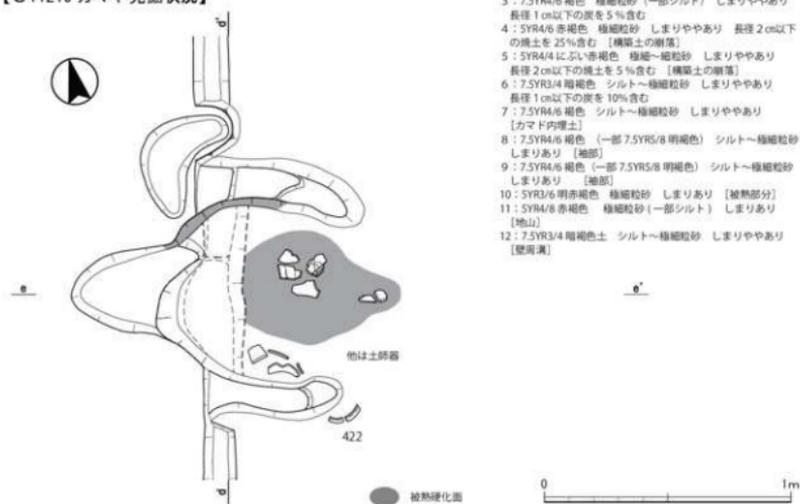
- 1 : 5YR3/6 暗赤褐 極細～細粒砂 しまりややあり 長径 2cm 以下の焼土を 20% 含む
- 2 : 7.5YR2/3 極暗褐 極細～細粒砂 しまりややあり 長径 1cm 以下の炭を 20% 含む
- 3 : 7.5YR4/6 暗 極細粒砂 しまりあり
- 4 : 7.5YR4/4 暗 極細粒砂 しまりややあり 【地部】
- 5 : 5YR3/6 暗赤褐 極細粒砂 しまりあり 【焚口被熱部】
- 6 : 5YR4/8 赤褐 極細粒砂 (一部シルト) しまりあり 【地山】

第 109 図 SH 218・219 遺構図 2 (1 : 20)

【SH219 カマド検出状況】

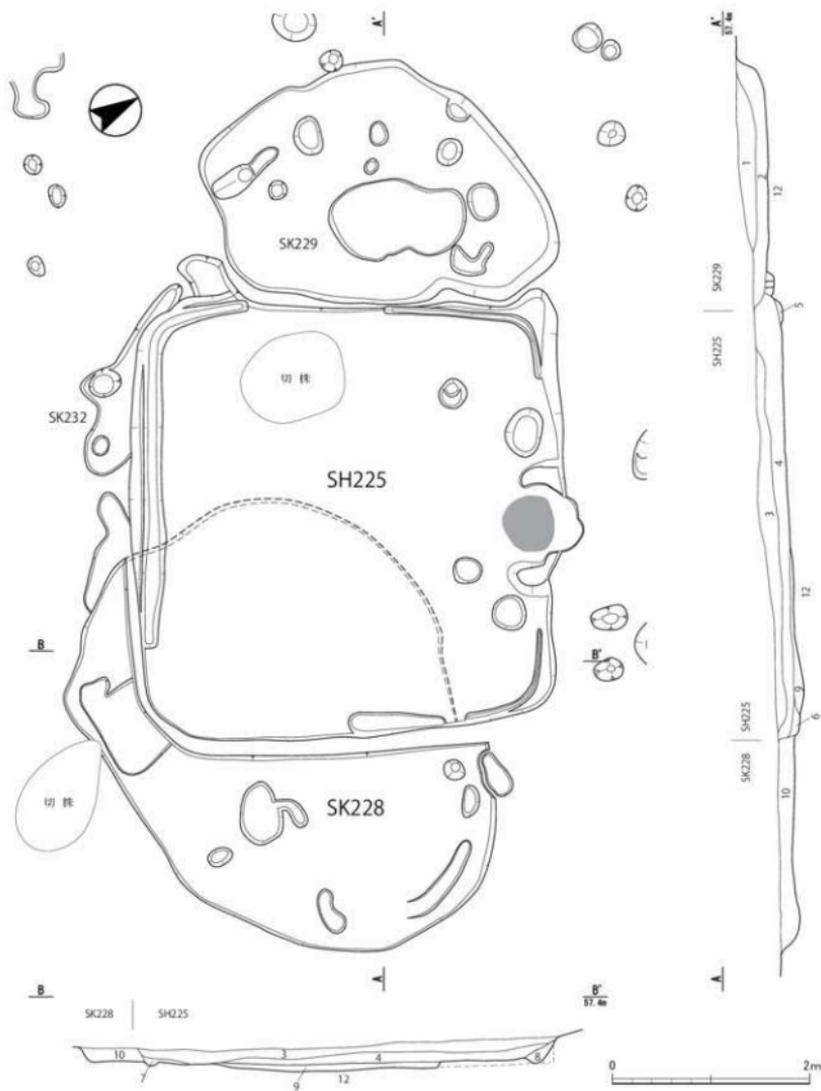


【SH219 カマド完掘状況】



- 1: 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりややあり
- 2: 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりややあり
- 3: 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりややあり
長径 1cm以下の灰を5%含む
- 4: 5YR4/6 赤褐色 極細粒砂 しまりややあり 長径 2cm以下の
焼土を 25%含む 【構築土の崩落】
- 5: 5YR4/4 にぶい赤褐色 極細～細粒砂 しまりややあり
長径 2cm以下の焼土を 5%含む 【構築土の崩落】
- 6: 7.5YR3/4 暗褐色 シルト～極細粒砂 しまりややあり
長径 1cm以下の灰を 10%含む
- 7: 7.5YR4/6 褐色 シルト～極細粒砂 しまりややあり
【カマド内埋土】
- 8: 7.5YR4/6 褐色 (一部 7.5YR5/8 明褐色) シルト～極細粒砂
しまりあり 【地部】
- 9: 7.5YR4/6 褐色 (一部 7.5YR5/8 明褐色) シルト～極細粒砂
しまりあり 【地部】
- 10: 5YR3/6 明赤褐色 極細粒砂 しまりあり 【被熱部分】
- 11: 5YR4/8 赤褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりあり
【地山】
- 12: 7.5YR3/4 暗褐色 シルト～極細粒砂 しまりややあり
【埋溝溝】

第110図 SH218・219遺構図3 (1:20)



- 1 : 10YR4/6 褐色 極細～細粒砂 しまりあり 樹による変色 [SK229]
 2 : 10YR4/4 褐色 極細粒砂(一部シルト) しまりややあり [SK229]
 3 : 7.5YR4/3 褐色 極細粒砂 しまりあり [SH225] (樹により変色)
 4 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂(一部シルト) しまりややあり
 5 : 7.5YR4/4 褐色 シルト～極細粒砂 しまりややあり [SH225 壁周溝]
 6 : 7.5YR4/4 褐色 シルト～極細粒砂 しまりややあり [SH225 壁周溝]

- 7 : 7.5YR4/4 褐色 シルト～極細粒砂 しまりややあり [SH225 壁周溝]
 8 : 7.5YR4/4 褐色 シルト～極細粒砂 しまりややあり [SH225 壁周溝]
 9 : 7.5YR3/4 暗褐色 シルト～極細粒砂 しまりややあり [SK228]
 10 : 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂 しまりあり [SK228]
 11 : 7.5YR4/3 褐色 極細粒砂 しまりなし [樹埋込]
 12 : 5YR4/6 赤褐色 極細粒砂(一部シルト) しまりあり [地山]

第111図 SH225遺構図1 (1:50)

る。

SH 226 (第113・172図) F-L 8で西隅のみを検出した堅穴建物。調査区内では北西壁を2.2m、南西壁を2.4mまで確認したが、調査区外へと続く。検出面からの深さは21cmである。壁周溝は、他の堅穴建物よりも幅が広く25cmほどで、深さは11cmほどである。

北西壁で竈を確認した。南西側を新しい小土坑により壊されており、東側は調査区外に位置しているため、袖部は確認できていない。僅かに窪んだ煙道部の一部が被熱していた。

平面的に重複するSH 227よりも新しい。

埋土や竈内から土師器甕や須恵器甕の破片が少量

出土したほか、建物との関係は明確ではないが、西隅の小土坑F-L8pit5から砂岩製の砥石(433)が出土した。

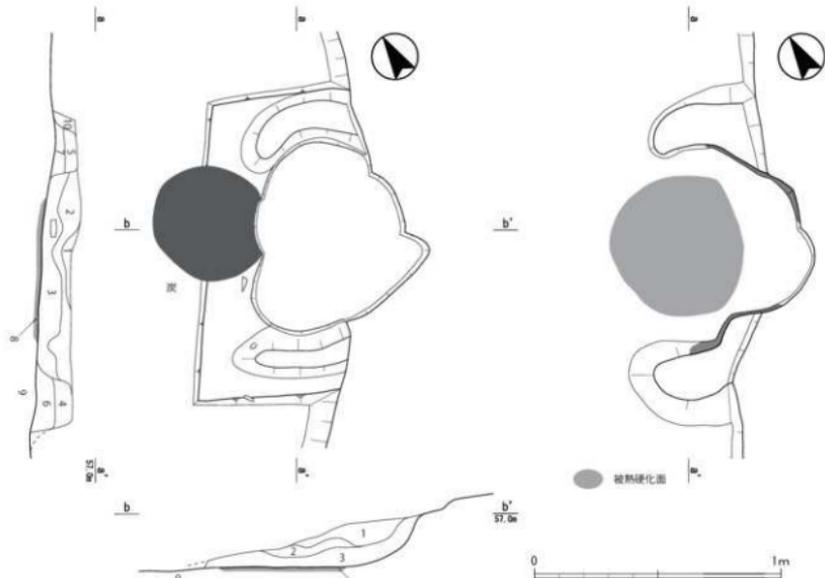
SH 227 (第113図) F-L 9で西半部のみを検出した、一边(西辺)3.6mの方形を呈する堅穴建物。調査区内では南辺を1.7mまで確認したが、調査区外へと続く。検出面からの深さは10cmである。西辺と南辺で深さ4cmほどの壁周溝を確認した。竈は認められず、建物内部に小土坑敷基を検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

平面的に重複するSH 226よりも古い。

埋土から、土師器甕や須恵器甕・杯の小破片が少量出土した。

【SH225 カマド検出状況】

【SH225 カマド完掘状況】



- 1: 7.5YR3/4 暗褐色 極細～細粒砂 しまりややあり
- 2: 5YR3/6 暗赤褐色 極細～細粒砂 しまりややあり 長径3cm以下の焼土を25%+長径1cm以下の炭を5%含む【横溝土の崩壊】
- 3: 2.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂(一部シルト) しまりなし 長径1cm以下の炭を15%含む
- 4: 7.5YR4/6 暗褐色 極細～細粒砂 長径1cm以下の炭・焼土を2%含む しまりややあり【袖部】
- 5: 7.5YR4/6 暗褐色 極細～細粒砂 長径1cm以下の炭・焼土を2%含む しまりややあり【袖部】
- 6: 7.5YR4/6 暗褐色 極細粒砂 しまりあり【袖部】
- 7: 7.5YR4/6 暗褐色 極細粒砂 しまりあり【袖部】
- 8: 5YR3/6 暗赤褐色 極細粒砂 しまり非常にあり【被熱層】
- 9: 5YR4/8 赤褐色 極細粒砂(一部シルト) しまりあり【地山】
- 10: 7.5YR4/4 暗褐色 極細粒砂 しまりややあり【建物埋土】

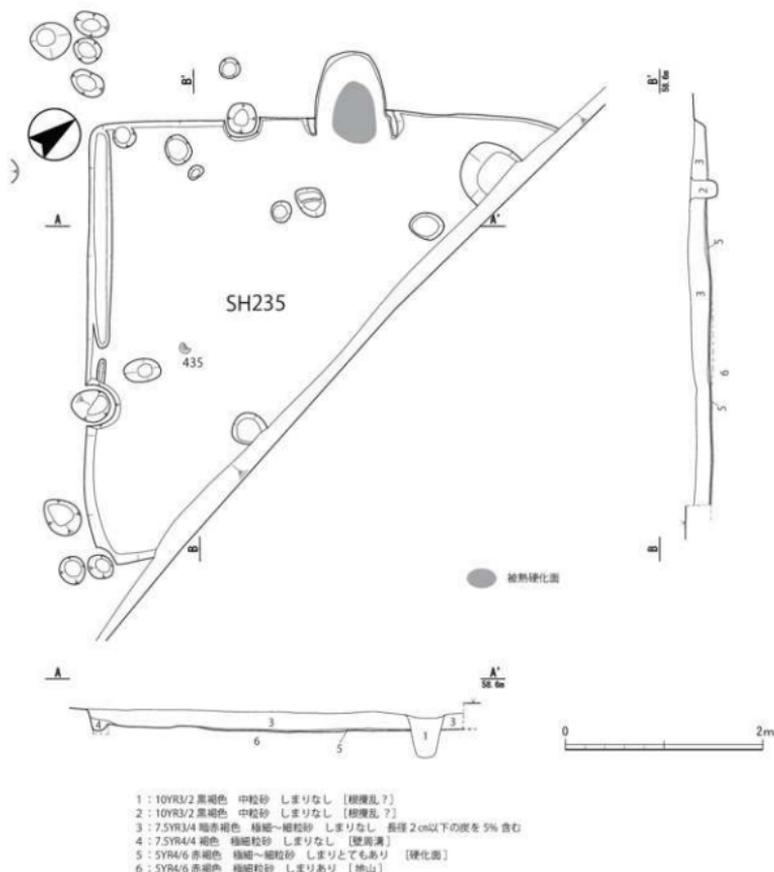
第112図 SH 225遺構図2 (1:20)

SH235 (第114・115・172図) D-1 20付近で西半部のみを検出した、一辺(南西辺)4.5mの方形を呈する堅穴建物。調査区内では北西辺を4.8mまで確認したが、調査区外へと続く。検出面からの深さは22cmである。南西辺の北半で深さ9cmほどの壁周溝を確認した。建物に伴うことが確實視される柱穴は確認できなかったが、建物床面の中央で貼床とみられる厚さ2cmほどの硬化面を検出した(第114図5層)。

竈は北西壁中央付近で確認した。基底部で幅1.0m×奥行1.05m、高さ9cmほどが残存していた。

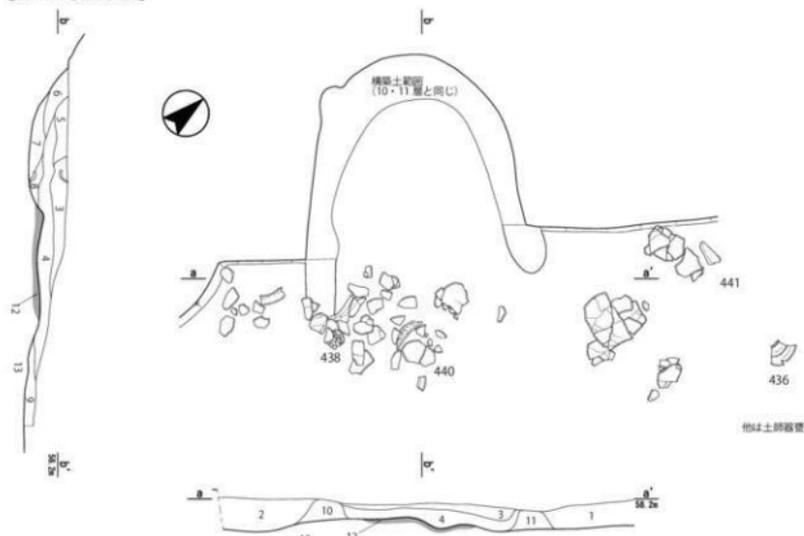
焚口付近の床に被熱硬化面が認められた。

竈の焚口付近から土師器甕(438・440・441)や須恵器高杯(436)が出土した。そのほか、埋土から土師器甕(437・439)や須恵器杯H蓋(434)・杯H身(435)などが出土した。図化できた須恵器(434~436)はすべて在地窯系で、436は脚部下半に透かし穴が2方向にあげられており、おそらく2段になる



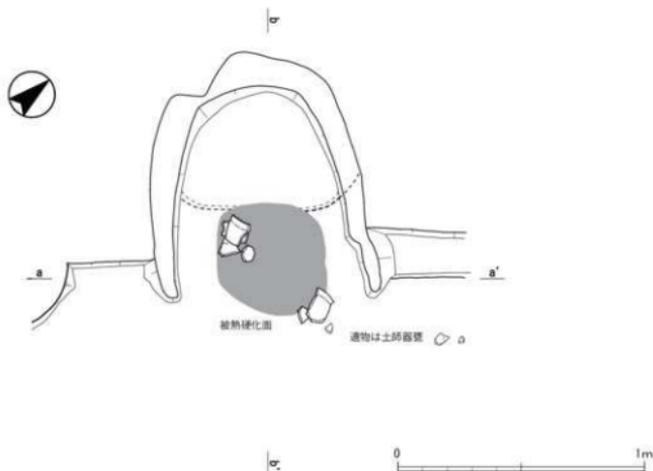
第114図 SH235遺構図1 (1:50)

【カマド検出状況】

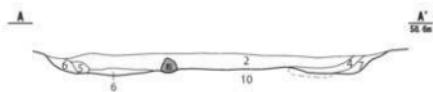
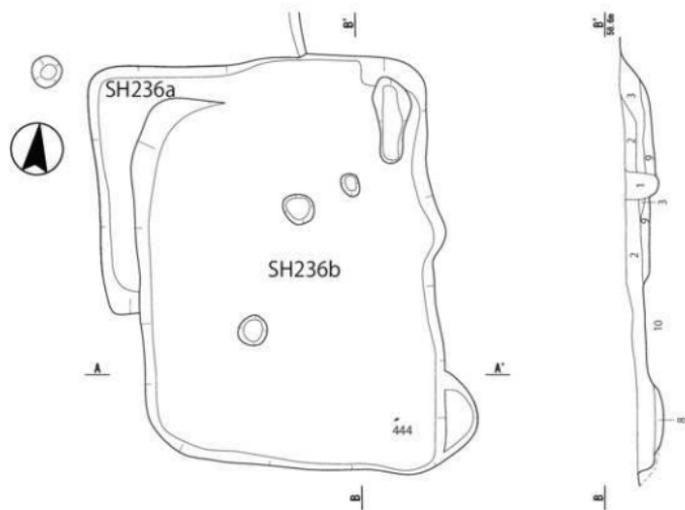


- | | |
|---|--|
| <p>1 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりなし 長径 1cm以下の炭を 10%含む
 2 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりなし 長径 1cm以下の炭を 8%含む
 3 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまりなし 長径 1cm以下の焼土を 3%含む
 【焼土の解落 ?】
 4 : 7.5YR2/2 黒褐色 極細～細粒砂 しまりなし 長径 1cm以下の炭を 20%含む 【炭層】
 5 : 5YR2/4 極暗赤褐色 極細～細粒砂 しまりなし 長径 1cm以下の焼土を 20%含む
 6 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細～細粒砂 しまりややあり 長径 1cm以下の炭を 5%含む
 7 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりややあり 長径 1cm以下の炭を 3%含む</p> | <p>8 : 7.5YR3/3 暗褐色 極細～細粒砂 しまりなし 長径 2cm以下の焼土を 15%
 +長径 1cm以下の炭を 10%含む
 9 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりややあり 長径 1cm以下の炭を 5%含む
 10 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりややあり 【地部】
 11 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりややあり 【地部】
 12 : 5YR3/6 暗赤褐色 極細粒砂 しまりあり 【被熱層】
 13 : 5YR4/8 赤褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりあり 【地山】</p> |
|---|--|

【カマド完掘状況】



第 115 図 SH 235 遺構図 2 (1 : 20)



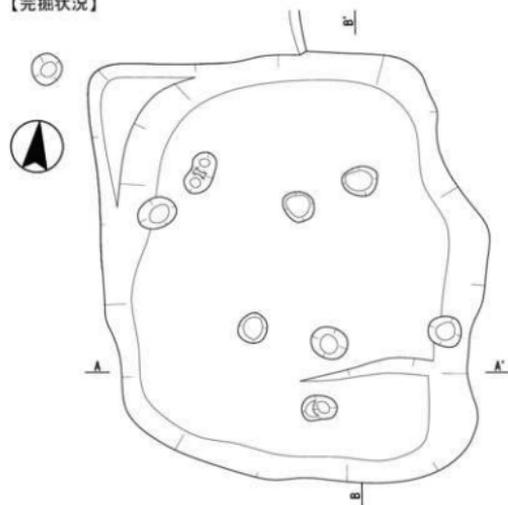
【SH236】

- 1 : 10YR3/3 暗褐色 極細粒砂 しまりなし。〔根埋乱〕
 2 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細～細粒砂 しまりややあり
 3 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細～細粒砂 しまりなし
 4 : 7.5YR4/4 褐色 極細～細粒砂 しまりなし。
 (長径 10 cm以下の地山ブロックを 5% 含む)
 5 : 10YR3/3 暗褐色 細粒砂 しまりあり。〔根埋乱〕
 【6～10 : SH236 下層もしくは別遺構】
 6 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまりややあり
 7 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまりなし
 8 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまりなし
 9 : 7.5YR3/2 基褐色 極細～細粒砂 しまりなし
 長径 1 cm以下の炭を 10% 含む

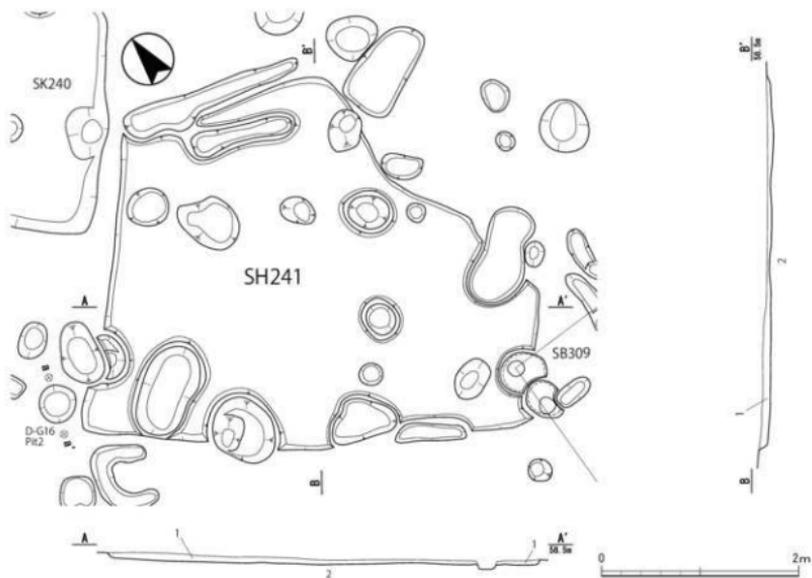
【地山】

- 10 : 5YR4/8 赤褐色 極細粒砂(一部シルト) しまりあり

【完掘状況】

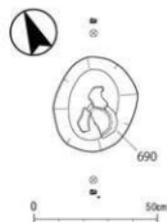


第 116 図 SH236 遺構図 (1 : 50)



- 1 : 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 しまりなし
 2 : 5YR4/8 赤褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりあり [地山]

[D-G16 pit2]



- 1 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし
 2 : 5YR4/8 赤褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりあり [地山]

第117図 SH239・241遺構図 (1:50、ピット1:20)

と思われる。土師器は大半が甕で、437は小型甕、438・440・441は長胴甕とみられる。

SH 236 (第116・172図) D-F 18付近で検出した長方形を呈する竪穴建物状の遺構。2遺構が重複しており、古いSH 236 aは長辺(北辺)3.4m×短辺2.5m、検出面からの深さは22cm。新しいSH 236 bは長辺(西辺)3.7m×短辺3.0m、検出面からの深さは10cmである。いずれも竈や壁周溝は認められず、内部に小土坑を多数確認したが、建物に伴う柱穴かどうかは確定できなかった。

埋土から、土師器甕や須恵器杯H身(442)・高杯(443)、チャート製の剥片石器(444)が出土した。442・443は猿投窯系で、443には二等辺三角形を呈する一段二方向透かしが施されており、1-101号窯出土品に類品を見いだすことができる。そのほかに、図化していないが、在地窯系の著しく小型化した杯

H身がある。

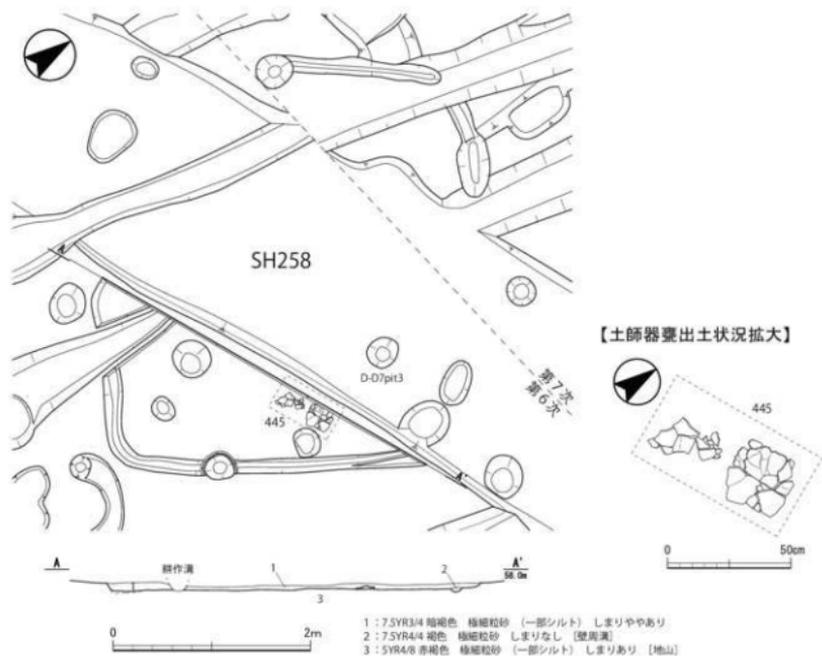
SH 239 (第117図) D-H 17付近で西隅の壁周溝のみを検出した竪穴建物。深さは7cmほどで、調査区内では北西辺を3.9m、南西辺を2.7mまで確認した。

出土遺物はない。

SH 241 (第117図) D-G 16で検出した、一辺(南西辺)4.4mの方形を呈する竪穴建物。東半はほぼ完全に削平されているため、直交方向の建物幅は不明だが、3.8mまで埋土を確認した。検出面からの深さは8cmである。壁周溝・竈は認められず、建物内部に小土坑を数基検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

埋土から土師器甕や須恵器甕の小破片が少量出土した。

SH 258 (第118・172図) 第6次調査区北端のD



第118図 SH 258遺構図 (1 : 50)

—D 8 付近で検出した堅穴建物。第7次調査の成果を加味すると、長辺4.2m×短辺3.8mの長方形を呈し、検出面からの深さは10cmである。建物中央を大きく攪乱されており、竈は認められなかったが、深さ4cmほどの壁周溝と主柱穴2基を確認した。

建物床面から、土師器長胴甕(445)が潰れた状態で出土し、主柱穴D-D7pit3出土品と接合できた。そのほか、埋土から須恵器甕が出土した。445の口縁部は、やや受口状を呈する。

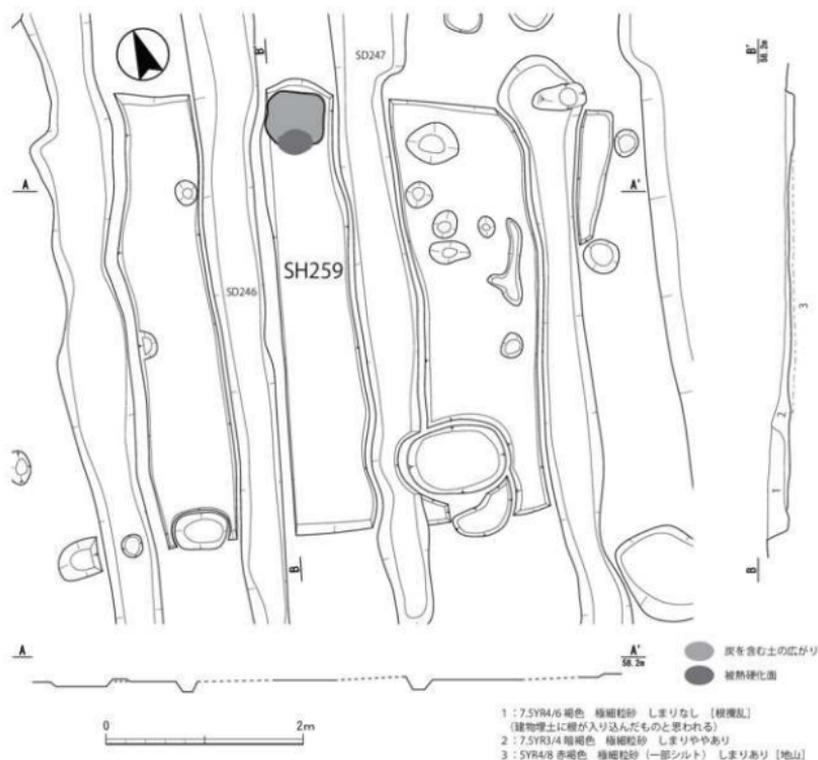
SH259 (第119図) D—C 9 付近で検出した、一辺(南北)4.65mの長方形を呈する堅穴建物。南壁際には根攪乱(第119図1層)が入るが、調査時の所見によると掘形は建物本来の形状を保持していた。

西壁は現代耕作溝により破壊されているため、東西方向の建物幅は不明であるが、東壁から5.0m西まで埋土を確認した。検出面からの深さは18cmである。壁周溝は認められなかったが、主柱穴を2基確認した。

北壁中央付近で竈とみられる炭混じりの土と被熱硬化面を確認した。

埋土から、土師器の破片が少量出土した。

SH260 (第120・173図) D—E 10 付近で検出した、一辺(東辺)4.6mの方角を呈する堅穴建物。西壁は現代耕作溝により破壊されているため、東西方向の建物幅は不明であるが、東壁から4.0m西まで埋土を確認した。検出面からの深さは16cmである。



第119図 SH259遺構図(1:50)

壁周溝や竈は認められず、建物内部に小土坑を多数検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

埋土から、土師器の小型甕(447)や須恵器の杯H身(446)などが少量出土した。446は猿投窯系で、口縁は矮小化している。447の内外面には、細かい刷毛目が施されている。

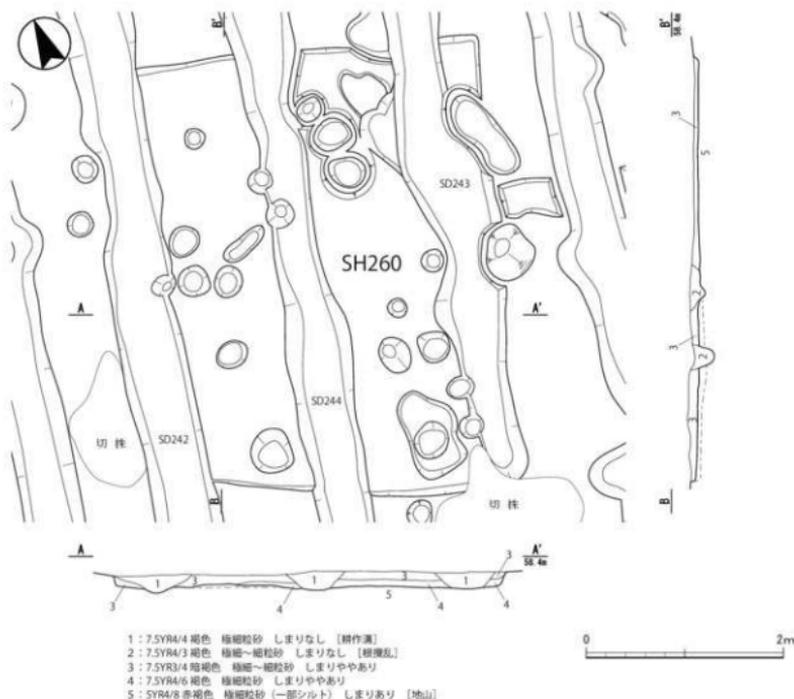
SH 267 (第121図) 調査区北東隅のD-F・G 7で検出した竪穴建物。東半部は調査区外に位置し、西隅を現代攪乱により破壊され、北半の位置する第7次調査区では検出されていないが、南西辺は4.4 m以上で、直交方向の建物幅は3.5 m以上ある。竈は認められなかったが、南西辺の一部で深さ8 cmほどの壁周溝、建物床面で貼床とみられる厚さ1~2 cmほどの硬化面を検出した(第121図6層)。建物内部に小土坑数基を検出したが、建物に伴う柱穴かど

うかは不明である。

建物に伴う遺構とは断定できないが、南西辺際の小土坑D-F7pit1から台付甕もしくは脚付壺とみられる須恵器の破片(448)が出土したほか、埋土から土師器と須恵器の小破片が1点ずつ出土した。

SH 285 (第122・173図) C-W13付近で検出した、一辺(南西辺)4.7 mの方形を呈する竪穴建物。北西部をほぼ完全に削平されているため、直交方向の建物幅は不明だが、2.9 mまで埋土を確認した。検出面からの深さは14 cmである。深さ2 cmほどの壁周溝を南辺と東辺の一部で確認した。竈は認められず、建物内部に小土坑を多数検出したが、この建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

建物埋土から、土師器の小破片が少量出土したほか、建物との関係は明確ではないが小土坑



第120図 SH 260遺構図(1:50)

C-V12pit3・4から土師器甕(451・452・453)・鉢(454)、須恵器杯H身(449)・杯B(450)、その他の小土坑から土師器甕(455)・鉢が出土した。449は橙色を呈する焼成不良品で、産地は不明である。450は猿投窯系。土師器甕は451が小型甕、453は長胴甕とみられる。455は口縁部が大きく外反する大型品で、内外面に粗い刷毛目が施されている。

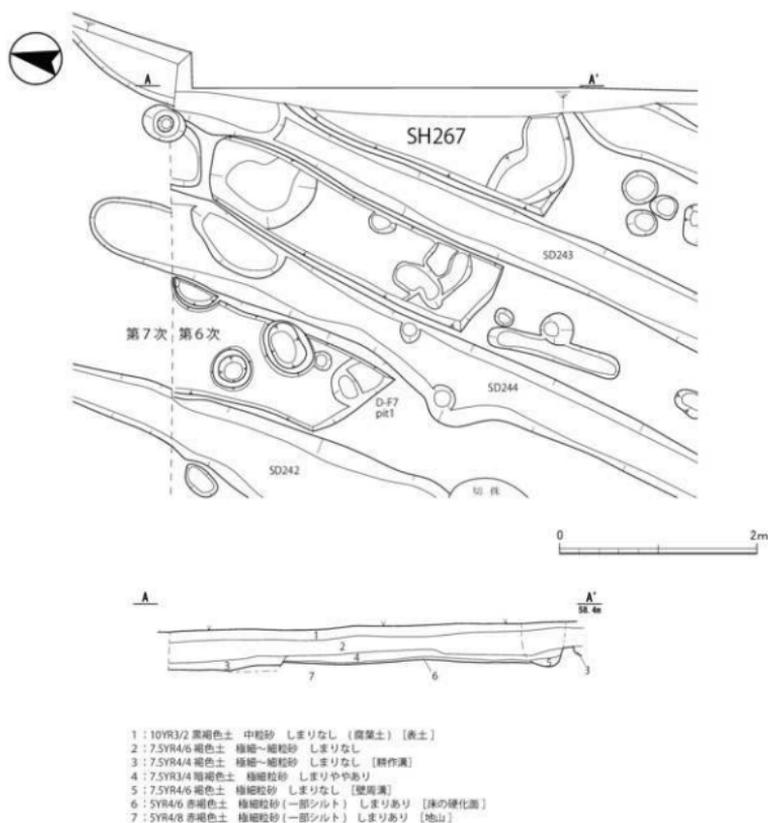
SH288(第123図) C-X15付近で検出した、長辺4.7m×短辺4.0mの長方形を呈する竪穴建物。建物埋土は大半が削平を受け、深さ10cmほどの周溝を確認した以外は不明な部分も多く、竈は認められ

なかった。建物内部に小土坑を多数検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

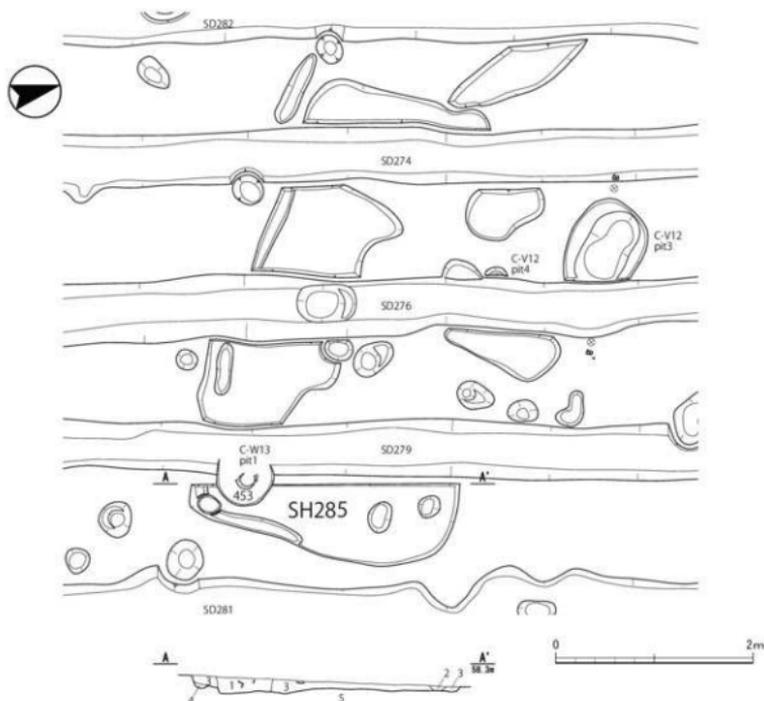
壁周溝から、土師器の小破片が2点出土した。

SH293(第124図) D-C22付近で検出した、竈らしき被熱硬化面と周溝らしきL字状の溝から推測した竪穴建物。被熱硬化面が壁の中央にあるとすれば長辺5.5m×短辺3.6m程度の規模になる。溝の深さは、検出面から4cmである。建物内部に当たる範囲に小土坑を多数検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

出土遺物はない。

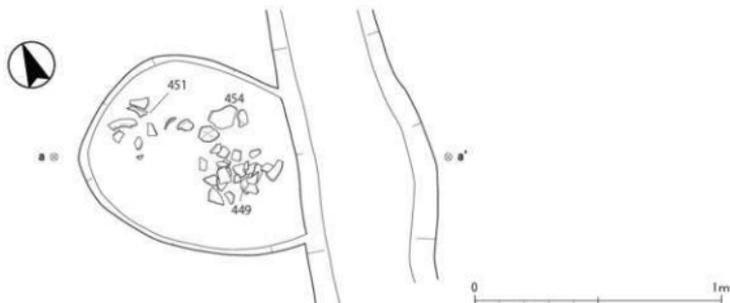


第121図 SH267遺構図(1:50)



- 1 : 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 しまりなし
- 2 : 10YR3/2 黄褐色 極細～細粒砂 しまりなし [根腐乱]
- 3 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりあり
- 4 : 7.5YR4/3 褐色 極細粒砂 しまりややあり [壁腐乱]
- 5 : 5YR4/8 赤褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりあり [地山]

【 C-V12 pit3 出土状況図】



第122図 SH285遺構図 (1 : 50、ピット1 : 20)

SH 295 (第124図) D-B 23付近で検出した長辺4.8m×短辺3.4mの長方形を呈する堅穴建物。建物埋土が完全に削平されており、深さ8cmほどの壁周溝のみ確認できた。建物内部に当たる範囲に小土坑を多数検出したが、建物に伴う柱穴かは不明である。

東壁中央やや南寄り、竈の残欠らしき被熱硬化面を確認した。

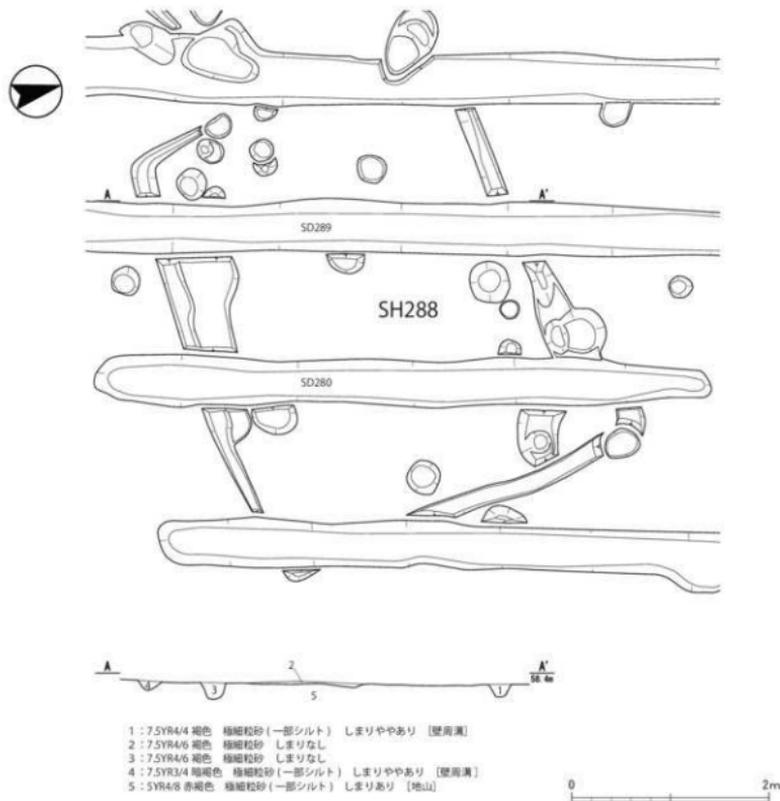
出土遺物はない。

SH 296 (第125・173図) E-Y 1付近で検出した、長辺3.6m×短辺3.0mの長方形を呈する堅穴建物。検出面からの深さは18cmである。西および南隅

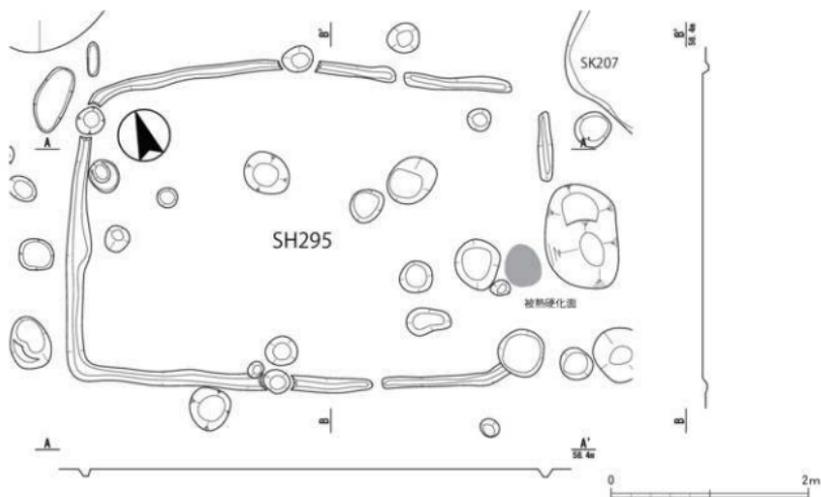
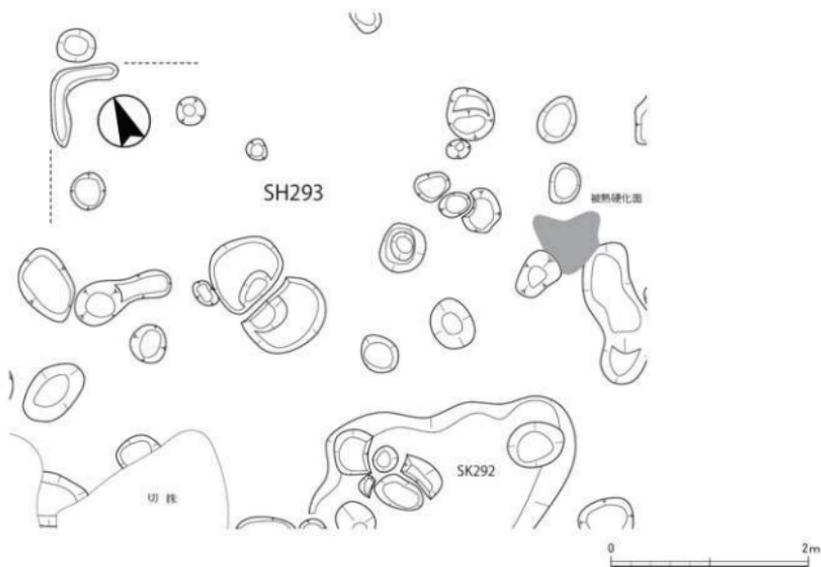
と竈の下を除いて、深さ4cmほどの壁周溝を検出した。建物内部から小土坑2基を確認したが、建物に伴う柱穴かは不明である。建物床面に貼床とみられる厚さ2～3cmの硬化面(7層)を検出した。

竈は北西壁の北寄りにある。基底部で幅1.15m×奥行0.8m、高さ14cmほどが残存していた。竈の床は被熱し硬化していた。

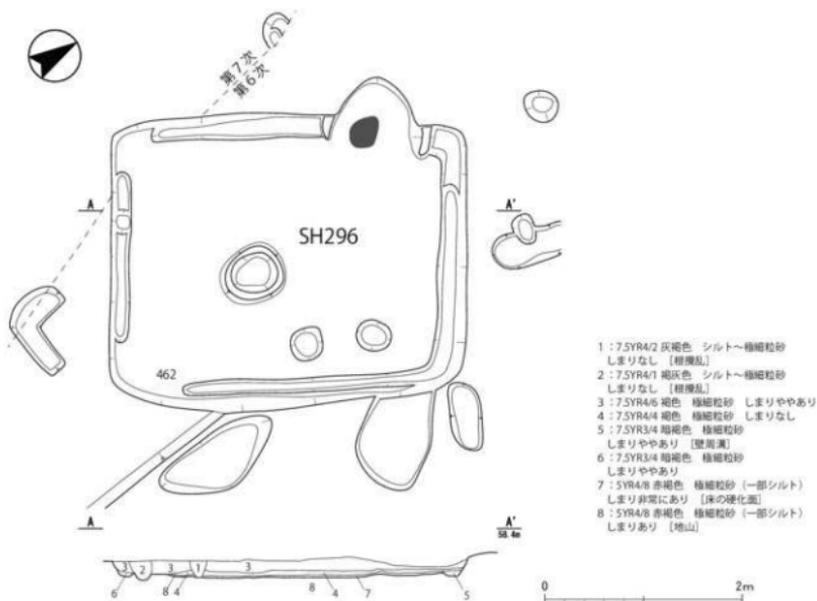
竈から土鍾(466)や土師器甕の破片、埋土から土師器甕(463・464)・鍋(465)、須恵器杯H身(456)・杯蓋(458)・無台杯(460・461)・杯B(457・459)・不明品(462)などが出土した。須恵器は、460が猿投窯系とみられる他は、在地窯系の可能性を残しつ



第123図 SH 288遺構図(1:50)

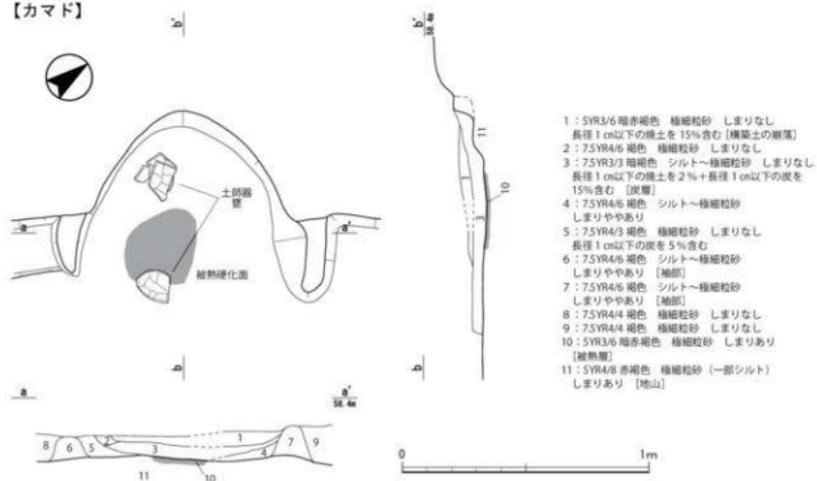


第124図 SH293・295遺構図 (1:50)



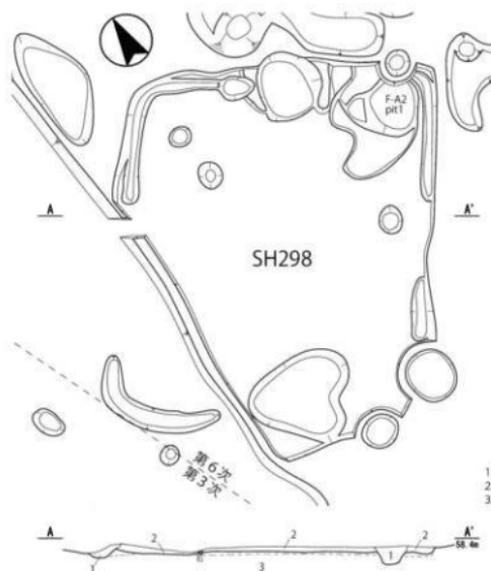
- 1 : 7SYR4/2 灰褐色 シルト～極細粒砂
しまりなし【被褥土】
- 2 : 7SYR4/1 灰褐色 シルト～極細粒砂
しまりなし【被褥土】
- 3 : 7SYR4/6 褐色 極細粒砂 しまりややあり
- 4 : 7SYR4/4 褐色 極細粒砂 しまりなし
- 5 : 7SYR3/4 暗褐色 極細粒砂
しまりややあり【壁周溝】
- 6 : 7SYR3/4 暗褐色 極細粒砂
しまりややあり
- 7 : 5YR4/8 赤褐色 極細粒砂（一部シルト）
しまり非常にあり【床の硬化面】
- 8 : 5YR4/8 赤褐色 極細粒砂（一部シルト）
しまりあり【地山】

【カマド】



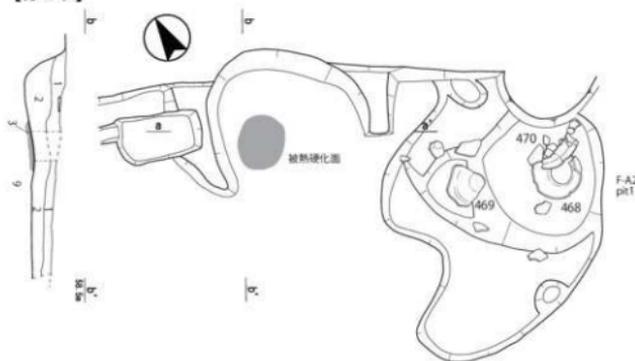
- 1 : 5YR3/6 暗赤褐色 極細粒砂 しまりなし
長径1cm以下の塊土を15%含む【構築土の崩落】
- 2 : 7SYR4/6 褐色 極細粒砂 しまりなし
- 3 : 7SYR3/3 暗褐色 シルト～極細粒砂 しまりなし
長径1cm以下の塊土を2%+長径1cm以下の塊を
15%含む【被褥土】
- 4 : 7SYR4/6 褐色 シルト～極細粒砂
しまりややあり
- 5 : 7SYR4/3 褐色 極細粒砂 しまりなし
長径1cm以下の塊を5%含む
- 6 : 7SYR4/6 褐色 シルト～極細粒砂
しまりややあり【地部】
- 7 : 7SYR4/6 褐色 シルト～極細粒砂
しまりややあり【地部】
- 8 : 7SYR4/4 褐色 極細粒砂 しまりなし
- 9 : 7SYR4/4 褐色 極細粒砂 しまりなし
- 10 : 5YR3/6 暗赤褐色 極細粒砂 しまりあり
【被褥土】
- 11 : 5YR4/8 赤褐色 極細粒砂（一部シルト）
しまりあり【地山】

第125図 SH296遺構図（1：50、カマド1：20）



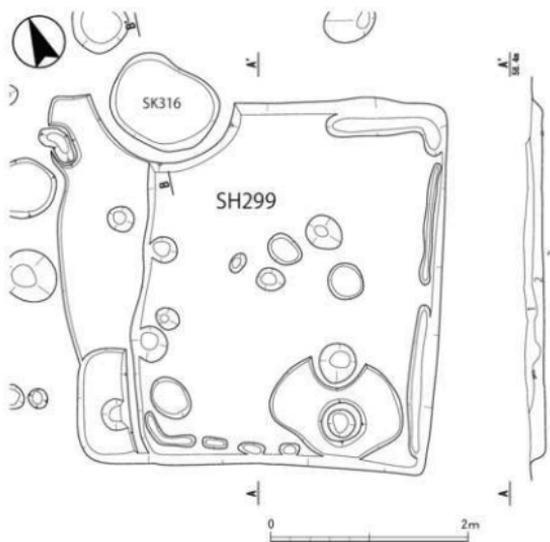
- 1 : 7.SYR4/3 褐色 シルト～極細粒砂 しまりなし [樹根瓦]
- 2 : 7.SYR4/4 褐色 極細粒砂 しまりややあり
- 3 : 5YR4/8 赤褐色 極細粒砂(一部シルト) しまりあり [地山]

【カマド】



- 1 : 5YR2/4 極暗赤褐色 極細粒砂 しまりややあり
長径 2cm以下の焼土を 15%含む [構築土の崩落]
- 2 : 7.SYR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまりややあり
長径 1cm以下の炭を 10%+長径 2cm以下の焼土を 10%含む
- 3 : 7.SYR4/6 褐色 シルト～極細粒砂 しまりなし
長径 1cm以下の炭を 2%含む
- 4 : 7.SYR4/6 褐色 極細粒砂 しまりややあり [地部]
- 5 : 7.SYR4/6 褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりややあり [地部]
- 6 : 7.SYR4/3 褐色 極細粒砂 しまりややあり
- 7 : 7.SYR4/4 褐色 極細粒砂 しまりややあり
- 8 : 5YR4/4 に近い赤褐色 極細粒砂 しまりあり [被熱面]
- 9 : 5YR4/8 赤褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりあり [地山]

第126図 SH298遺構図 (1:50、カマド1:20)

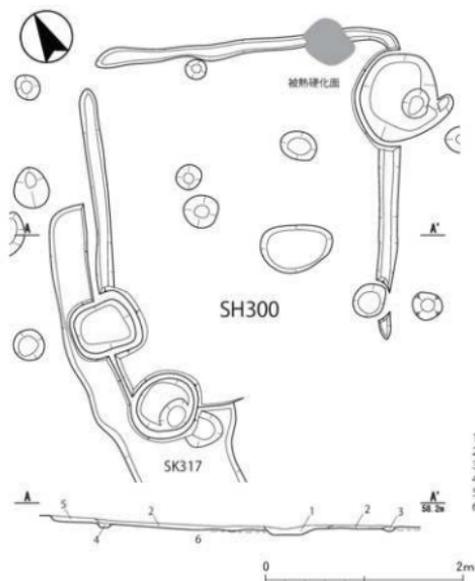


- 1: 10YR4/1 灰色 粘結砂 しまりあり (壁等による灰色-硬化)
- 2: 2.5YR4/4 褐色 粘結砂 しまりややあり
- 3: 5YR4/8 赤褐色 粘結砂 (一部シルト) しまりあり [地山]



【SK316】

- 1: 10YR4/2 灰黄色 粘結～細粒砂 しまりなし、高径1m以下の深を10%を占む
- 2: 10YR2/7 黒色 粘結～細粒砂 しまりなし、長径1m以下の深を50%を占む (底層)
- 3: 2.5YR4/6 褐色 粘結砂 しまりややあり
- 4: 5YR4/6 赤褐色 粘結砂 (一部シルト) しまりあり [地山]
- 5: 2YR4/6 暗赤色 粘結砂 しまりあり [地山の層積層]



- 1: 7.5YR4/6 褐色 粘結～細粒砂 しまりなし [橙褐色]
- 2: 7.5YR4/4 褐色 粘結～細粒砂 しまりややあり
- 3: 7.5YR4/6 褐色 粘結砂 しまりややあり [壁面裏]
- 4: 7.5YR4/6 褐色 粘結砂 (一部シルト) しまりややあり [壁面裏]
- 5: 7.5YR4/6 褐色 粘結砂 (一部シルト) しまりなし [SK317]
- 6: 5YR4/8 赤褐色 粘結砂 (一部シルト) しまりあり [地山]

第127図 SH299・300遺構図 (1:50)

つも産地不明品が多い。458は杯蓋で、胎土には白色の砂粒を多く含む。459は口縁端部に内傾面をもつ深手の杯Bで、外面には自然釉が大量に降下しており、窯壁の土も融着している。462は把手もしくは獣脚のようなものかと思われるが、剥離した接合部が直線的で、本体の器形は不明である。

SH 297 (第103図) F-C 2付近で検出した、一辺(北西辺)3.6mの方形を呈する竪穴建物。SH 213によって南東部を大きく破壊され、直交方向の建物幅は不明だが、南西辺を2.5mまで確認した。検出面からの深さは7cmである。西隅から北隅にかけて、深さ3cmほどの壁周溝を確認した。竈は認められず、建物内部に小土坑1基を検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

平面的な重複関係にあるSH 213よりも古い。

埋土から土師器や須恵器の小片が少量出土した。

SH 298 (第126・173図) F-A 2付近で検出した、長辺3.9m×短辺3.25mの方形を呈する竪穴建物。検出面からの深さは6cmである。北隅や南西壁の一部で、深さ7cmほどの壁周溝を確認した。建物内部に小土坑数基を検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

竈は北東壁中央にある。基底部で幅0.95m×奥行0.6m、高さ9cmほどが残存していた。竈の床は被熱し硬化していた。

東隅で確認した貯蔵穴の可能性のある小土坑F-A2pit1からは、土師器の長胴甕(470)や須恵器の高杯(467)・壺(468)・甕(469)などが出土した。そのほか、埋土や竈から土師器片、須恵器杯・壺瓶類などが少量出土した。467は在地窯系の須恵器高杯で、脚部に透かしはない。468は猿投窯系の壺。469は在地窯系の甕底部で、内面には同心円文当具痕、外面には擬格子叩き痕が認められる。

SH 299 (第127・173図) F-C 4付近で検出した、長辺3.8m×短辺3.1mの方形を呈する竪穴建物。検出面からの深さは18cmである。検出時には、西側へ0.9mほど幅広く正方形に近い建物と認識していたが、壁周溝の曲がる位置を西隅と判断した。壁周溝の深さは4cmほどである。竈は認められず、建物内部に小土坑を多数検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

埋土から、土師器小型甕(473)や須恵器杯H身(471)・蓋(472)・甕などが出土した。471・472とも在地窯系とみられるが、472には環状鈕が付き、上面に沈線が巡っており、金属器写しの椀の蓋になると思われる。

SH 300 (第127図) F-D 5付近で検出した、長辺3.7m×短辺3.2mの方形を呈する竪穴建物。検出面からの深さは6cmである。南辺を除いて、深さ3cmほどの壁周溝を確認した。

北壁や東寄りで竈の残欠らしき被熱痕跡を認めた。建物内部に小土坑を数基検出したが、建物に伴う柱穴かどうかは不明である。

埋土から土師器片や須恵器甕片が少量出土した。

2 掘立柱建物・塀・柵

SB 151 (第128・179図) E-U 17付近で検出した桁行4間×梁行3間の側柱建物。周辺の建物よりも大型で、柱穴も大きい。なかでも北側桁行の柱穴は、一辺60cmを超えるものが複数あり、柱痕跡も南側よりも若干大きく、同じ建物の柱穴の中で残存状況の違いだけでない差異が認められる。

重複する建物SH 64・SB 152よりも新しい。

柱穴から、土師器や須恵器の破片が比較的多く出土したが、細片化したものが多い。他遺構との重複関係にない柱穴掘形から出土した須恵器杯H蓋や無台杯(612)が時期比定の参考にならう。在地窯系須恵器杯として図化した612は、一応無台杯と考えたが、杯H蓋との識別に悩む器形である。

SB 152 (第128図) E-U 18付近で検出した桁行3間×梁行2間の側柱建物。柱間は、梁行側が狭く等間隔なのに比べ、桁行側は広く不均一であるが、相対応する柱間は一致する。

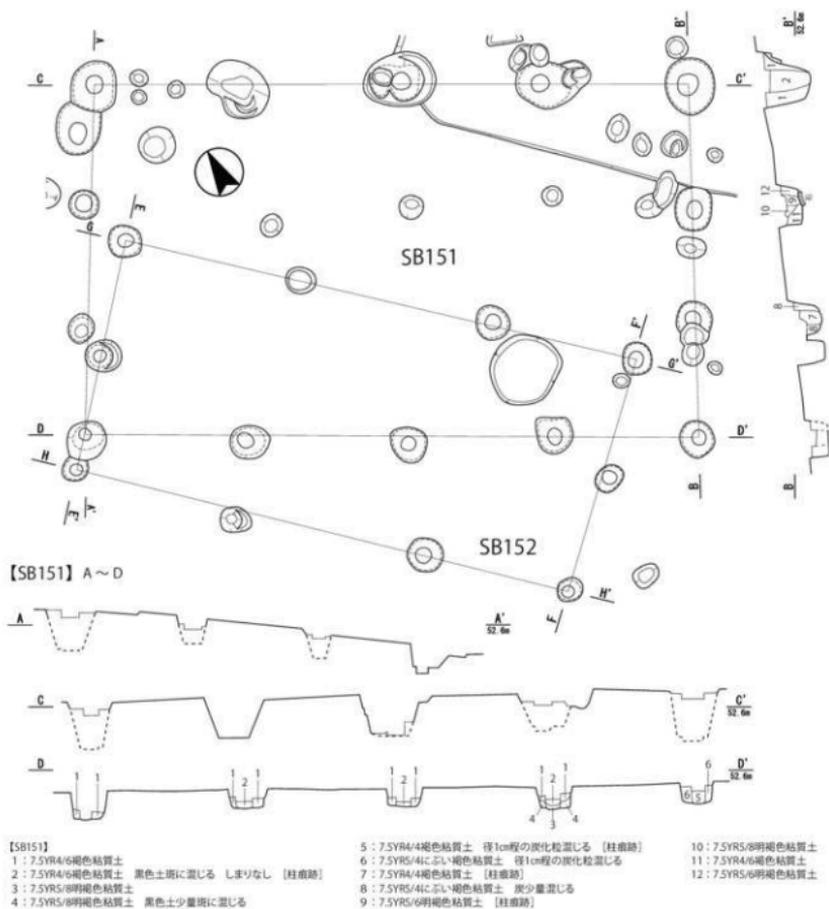
重複する建物SB 151よりも古い。

遺物は出土しなかった。

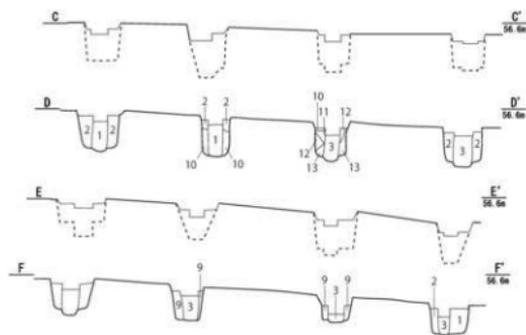
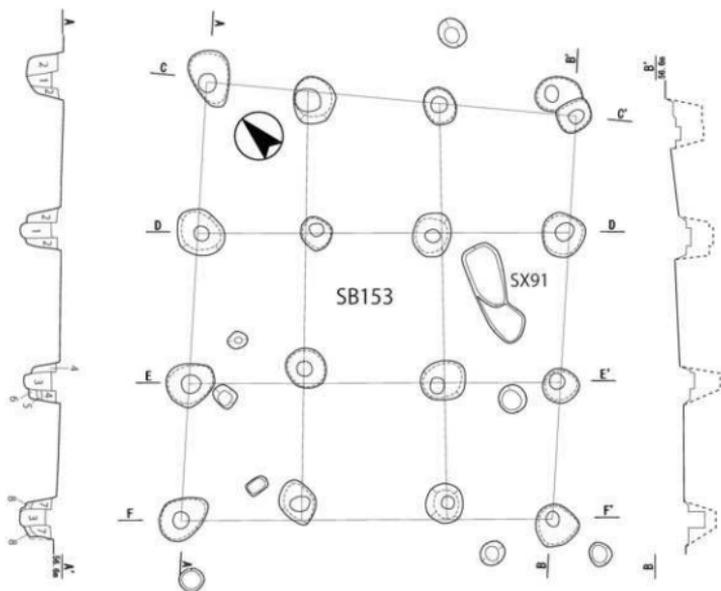
SB 153 (第129図) F-J 12付近で検出した3間×3間の総柱建物。本柱と比較して東柱は若干小さいが、深さはほぼ同じである。南西側柱筋の通りが悪い。

柱穴から、土師器甕や須恵器杯H身の小片が少量出土した。

SB 154 (第130図) F-F 17付近で検出した3



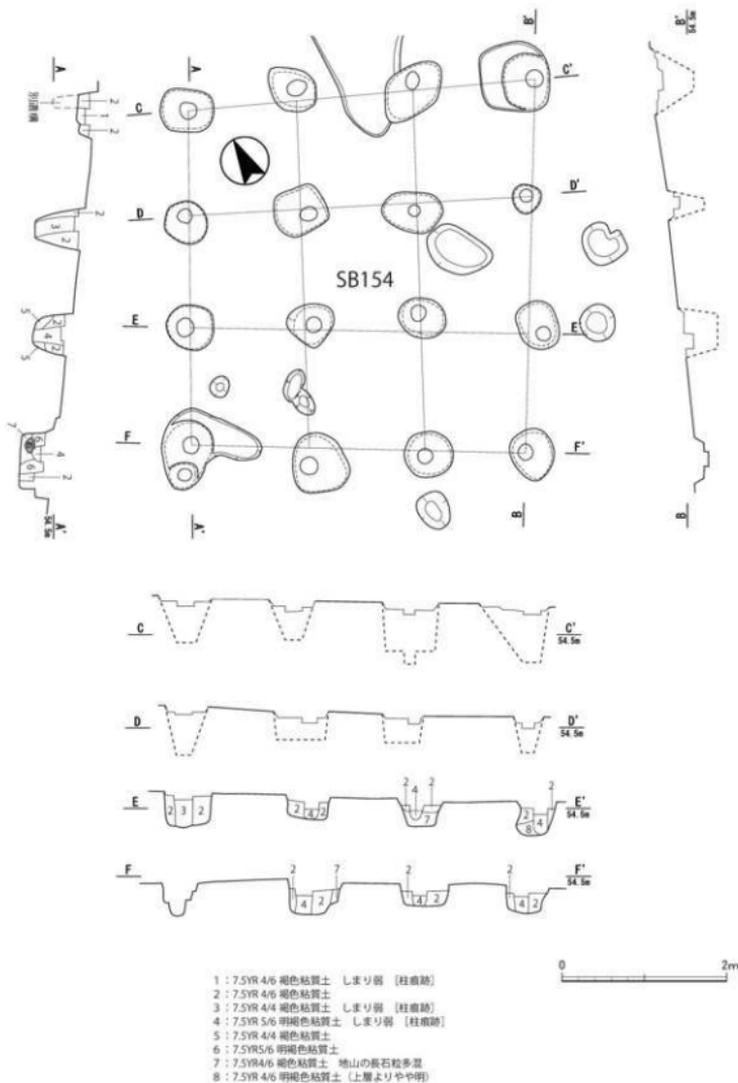
第128図 SB151・152遺構図 (1:60)



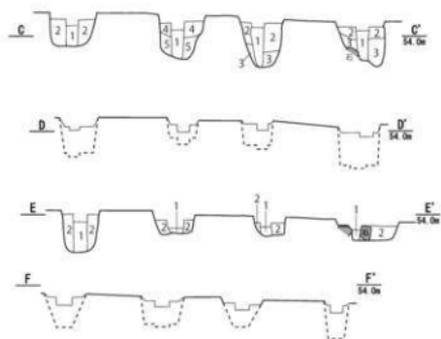
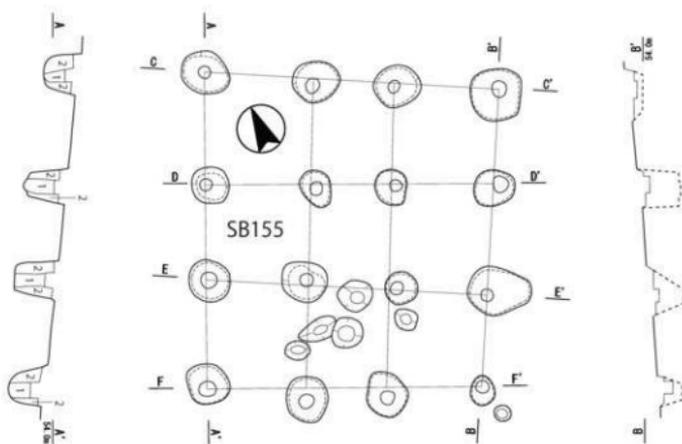
- | | |
|-------------------------------------|----------------------------|
| 1 : 7.5YR 3/4 暗褐色粘質土 しまり弱 [柱痕跡] | 8 : 7.5YR 4/4 褐色粘質土 |
| 2 : 7.5YR 4/6 暗褐色粘質土 | 9 : 7.5YR 5/8 明褐色粘質土 |
| 3 : 7.5YR 4/6 褐色粘質土 しまり弱 [柱痕跡] | 10 : 7.5YR 4/6 褐色粘質土 粘性やや強 |
| 4 : 7.5YR 4/6 褐色粘質土 | 11 : 7.5YR 4/6 褐色粘質土 |
| 5 : 7.5YR 5/8 明褐色粘質土 地山似 | 12 : 7.5YR 4/4 褐色粘質土 |
| 6 : 7.5YR 5/6 明褐色粘質土 | 13 : 7.5YR 5/8 明褐色粘質土 |
| 7 : 7.5YR 4/4 褐色粘質土 地山ブロック(～5cm)まじり | |

0 2m

第129図 SB153遺構図(1:60)



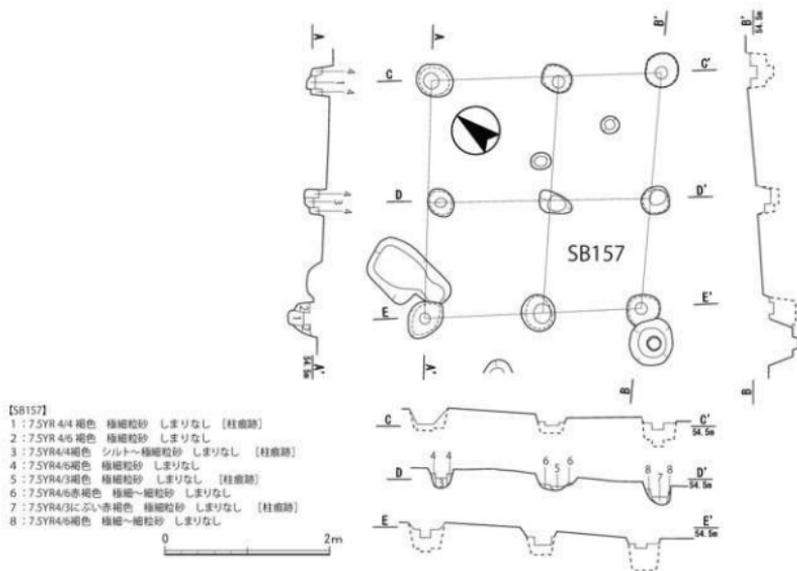
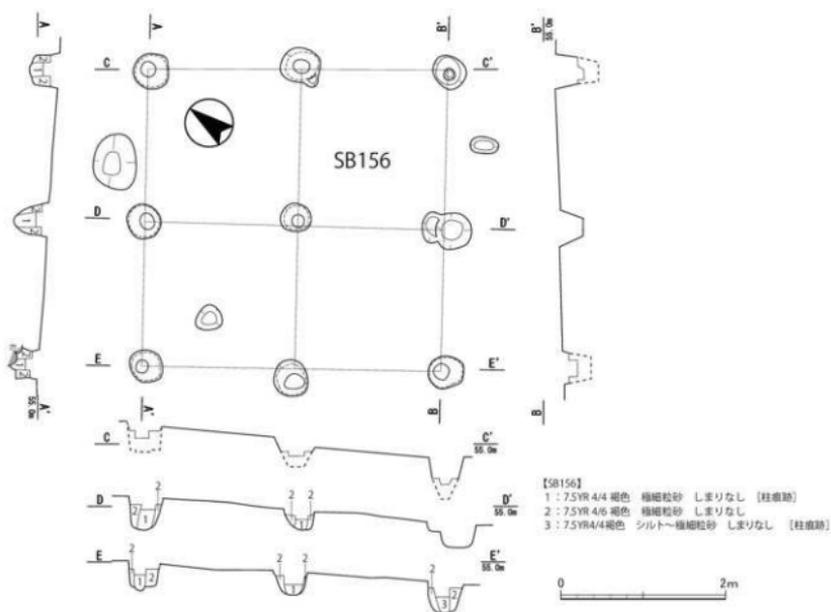
第 130 図 SB154遺構図 (1 : 60)



- 1 : 7.5YR4/6褐色粘質土 しまりなし [柱痕跡]
 2 : 7.5YR5/6明褐色粘質土 しまりあり
 3 : 7.5YR5/4に赤い褐色粘質土 しまりあり
 4 : 7.5YR4/6褐色粘質土 しまりあり
 5 : 7.5YR4/6褐色粘質土 (4より層) しまりあり



第 131 図 SB 155 遺構図 (1 : 60)



第132図 SB156・157遺構図 (1 : 60)

間×3間の総柱建物。平面形はやや歪で、柱筋の通りも悪い。本柱と東柱の大きさはほぼ等しい。南側には柱間数と方向性を同じくするSB155があり、規模はやや小さいが、建物西側の柱筋が揃う。

柱穴から、鉄滓が出土した。

SB155 (第131図) F-E19付近で検出した3間×3間の総柱建物。平面形はやや歪で、南西側の柱筋の通りは悪い。本柱と比較して東柱の方が若干小さいが、深さはほぼ同じである。北側のSB154と同じ方向性を有する。

柱穴掘方から須恵器甕片が1点出土した。

SB156 (第132図) F-H17付近で検出した2間×2間の総柱建物。柱穴規模については、本柱と比較して東柱の方が若干小さいが、深さはほぼ同じである。南側には柱間数と方向性を同じくするSB157があり、建物南側の柱筋が揃う。

出土遺物はない。

SB157 (第132図) F-G18付近で検出した2間×2間の総柱建物。北側のSB156と比較すると、規模はやや小さいが、同じ方向性を有する。

出土遺物はない。

SB158 (第133図) F-L21付近で検出した2間×2間の総柱建物。SB159とは平面的に重複するが、柱穴自体の重複はないため新旧関係は不明である。

出土遺物はない。

SB159 (第133・179図) F-L22付近で検出した桁行4間×梁行2間の側柱建物。平面形は、東側梁行がやや広く、台形を呈する。柱間は、桁行側も梁行側もほぼ等間隔ではあるが、梁行側の柱間が明らかに広い。

柱穴から、土師器や須恵器(613・614)の破片が比較的多く出土した。613は美濃須衛窯産とみられる杯蓋で、ヘラケズリの範囲は非常に狭い。614は猿投窯系の杯蓋b、口縁端部近くまでロクロケズリ調整が施されている。

SB160 (第134図) F-O24付近で検出した桁行5間×梁行2間の側柱建物。柱穴の平面形や柱間は比較的等しく、柱筋の通りも良いほうではあるが、柱穴の深さは差異が大きい。

SH104とは平面的に重複するが、新旧関係は不

明である。

柱穴から、土師器や須恵器の破片が出土した。大半は土師器甕の体部の小片である。

SB161 (第135図) F-L24付近で検出した2間×2間の総柱建物。平面形はやや歪むが、本柱と東柱の大きさはほぼ等しい。平面的に重複するSH100よりも新しい。

柱穴から、土師器甕や須恵器壺甕類の破片が少量出土した。

SB162 (第135・179図) F-H25付近で検出した2間×2間の総柱建物。平面形はやや歪み、柱間も等間隔ではないが、柱筋の通りはよく、本柱と東柱の大きさはほぼ等しい。

柱穴から、土師器の小片(615)が僅かに出土した。615の内面には、二段放射状暗文、外面にヘラミガキが認められる。

SB163 (第136・179図) H-G4付近で検出した総柱建物。当初、3間×3間の総柱建物を想定したが、断ち割ったところ、北東側の2箇所が地山の変色と判明したため、3間×2間と判断した。

柱穴から、猿投窯系の須恵器無台杯(616)が1点出土した。

SB164 (第137図) H-F3付近で検出した2間×2間の総柱建物。平面形はやや歪で、特に東西辺の柱間は不均一である。本柱と比べ、東柱の深さはやや浅い。

柱穴から、土師器甕や須恵器杯の小片が少量出土した。

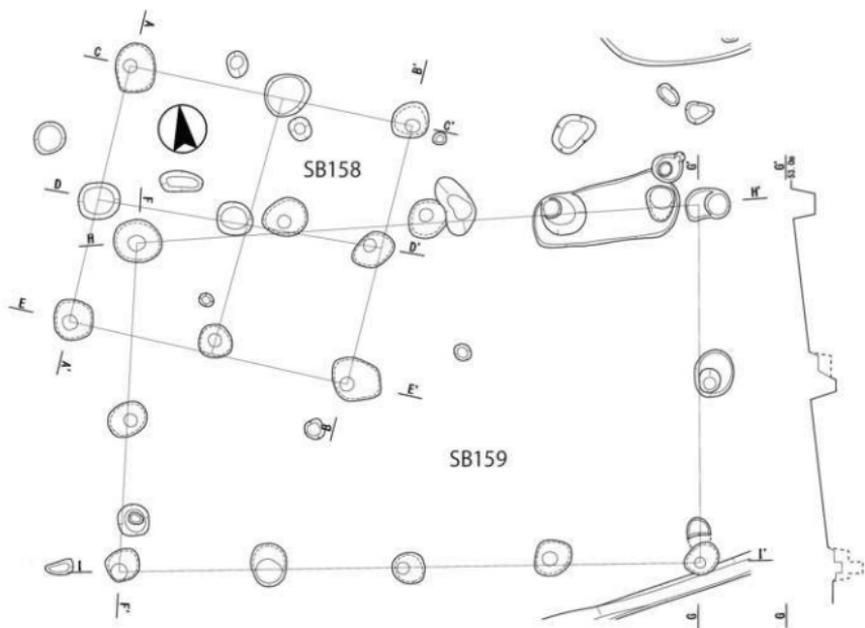
SB165 (第137図) H-F5付近で検出した2間×2間の総柱建物。平面形は比較的整っており、柱間もほぼ等間隔で、柱筋の通りも良い。

出土遺物はない。

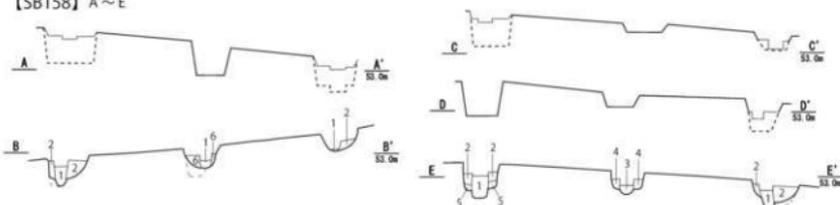
SB166 (第138図) F-J23付近で検出した桁行3間×梁行2間の側柱建物。平面形は若干平行四辺形気味だが、柱間はほぼ等間隔で、南側柱筋の通りは良い。

柱穴から、土師器長胴甕の口縁部が出土した。

SA167 (第139図) F-U23・24で検出した3基の柱穴からなる柱列。南北両側が調査区外へ延びているとみられ、全体像は不明である。周辺のピットに比べて大きく、柱痕跡が直線上に検出できた

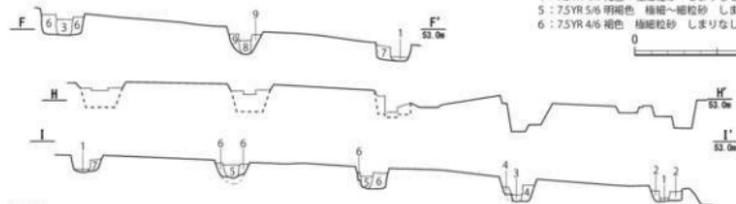


【SB158】 A～E



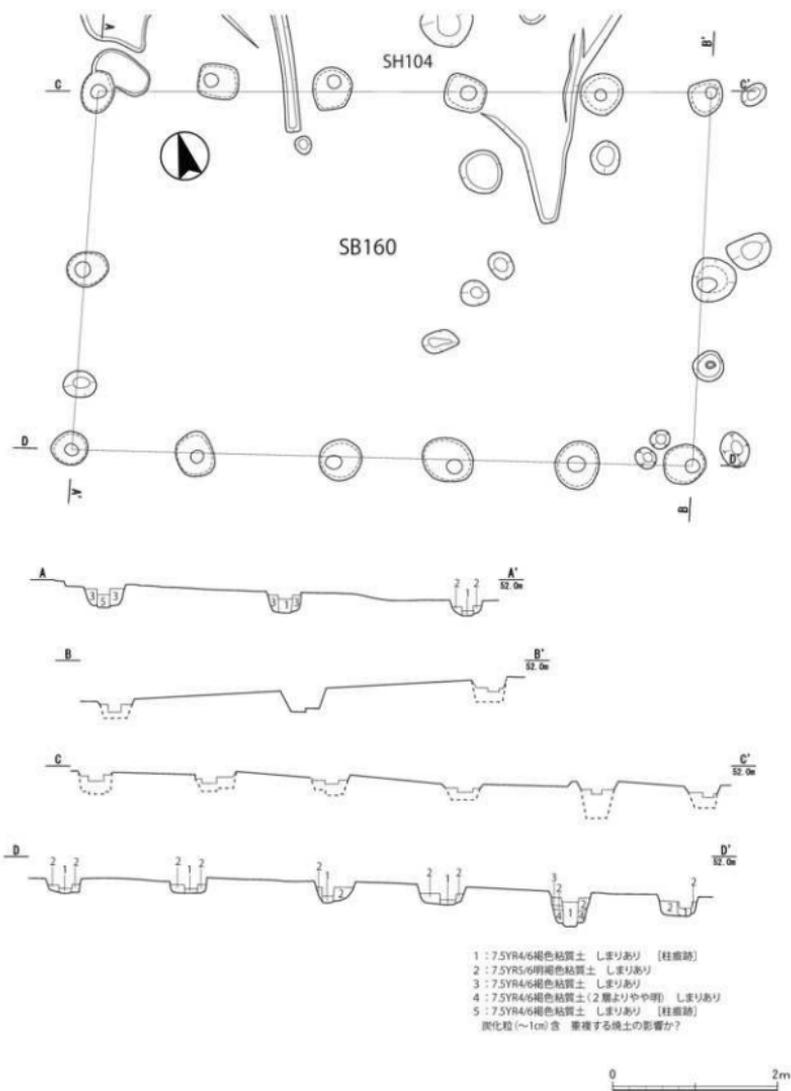
- 【SB158】
- 1 : 7.5YR 4/4 褐色 極細粒砂 しまりなし [柱痕跡]
 - 2 : 7.5YR 4/6 褐色 極細～細粒砂 しまりなし
 - 3 : 7.5YR 4/3 褐色 極細粒砂 しまりなし [柱痕跡]
 - 4 : 7.5YR 4/4 褐色 極細粒砂 しまりなし
 - 5 : 7.5YR 5/6 明褐色 極細～細粒砂 しまりなし
 - 6 : 7.5YR 4/6 褐色 極細粒砂 しまりなし

【SB159】 F～I

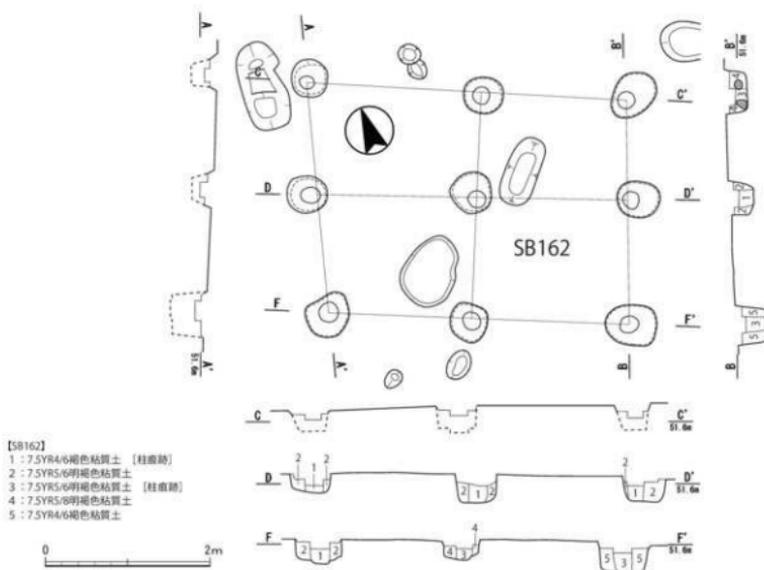
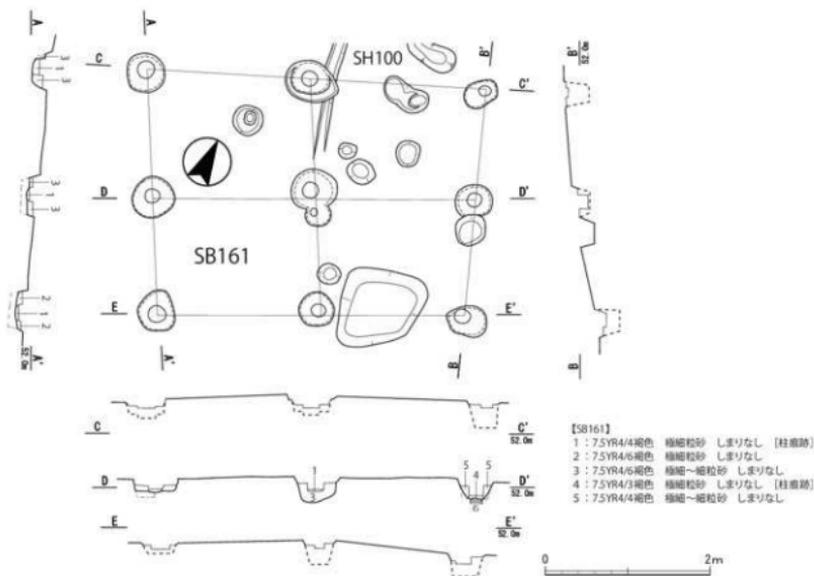


- 【SB159】
- 1 : 7.5YR 4/4 褐色 極細粒砂 しまりなし [柱痕跡]
 - 2 : 7.5YR 3/4 暗褐色 極細～細粒砂 しまりなし
 - 3 : 7.5YR 4/6 褐色 極細粒砂 しまりなし [柱痕跡]
 - 4 : 7.5YR 4/4 褐色 極細～細粒砂 しまりなし
 - 5 : 7.5YR 4/3 褐色 極細粒砂 しまりなし [柱痕跡]
 - 6 : 7.5YR 4/4 褐色 極細粒砂 しまりなし
 - 7 : 7.5YR 4/6 褐色 極細粒砂 しまりなし
 - 8 : 7.5YR 4/4 褐色 極細粒砂 しまりなし [柱痕跡]
 - 9 : 7.5YR 4/3 褐色 極細粒砂 しまりなし

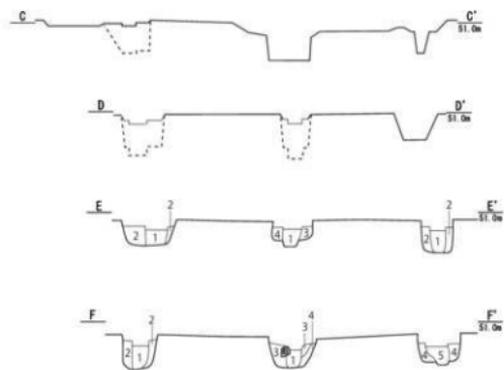
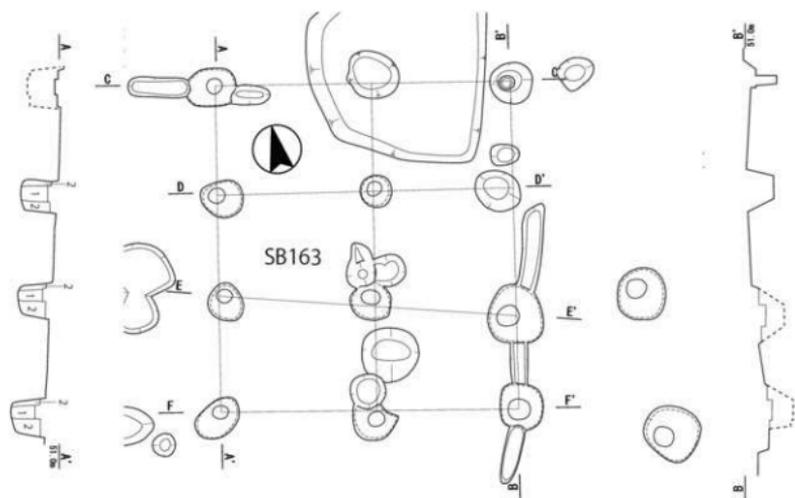
第133図 SB158・159遺構図 (1 : 60)



第134図 SB160遺構図 (1 : 60)



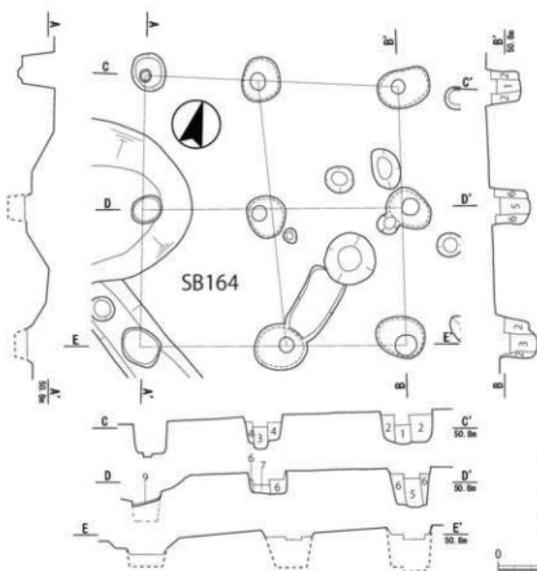
第135図 SB161・162遺構図 (1 : 60)



- 1 : 7.5YR 4/6褐色粘質土 シマリ弱 [柱痕跡]
 2 : 7.5YR 5/6褐色粘質土
 3 : 7.5YR 4/4褐色粘質土
 4 : 7.5YR 5/8明褐色粘質土 粘性やや弱 色はやや地山似
 5 : 7.5YR 4/6褐色粘質土 シマリなし 根撈りの影響あり [柱痕跡]

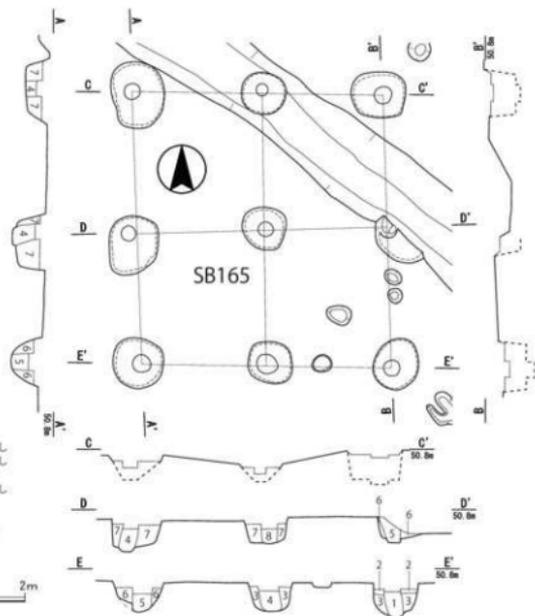


第 136 図 SB 163 遺構図 (1 : 60)



【SB164】

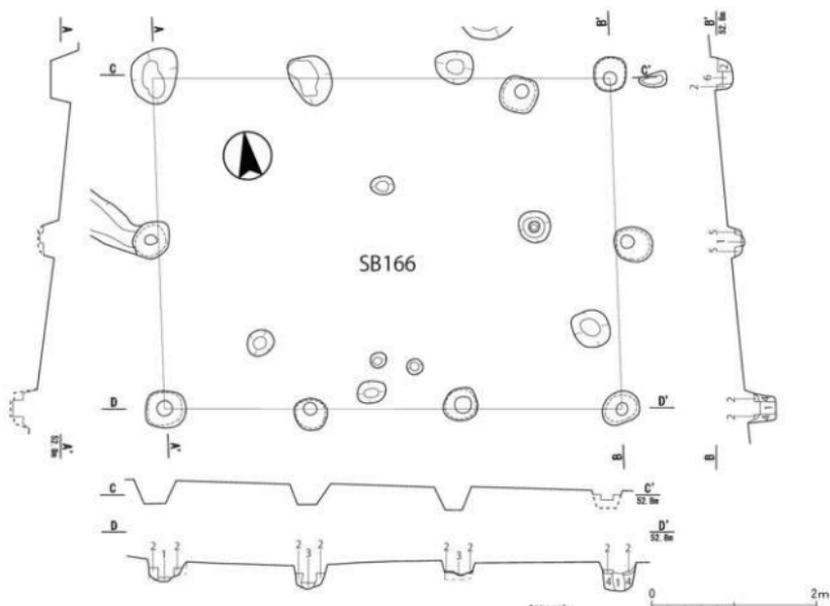
- 1 : 7.5YR4/6 褐色 シルト～極細粒砂 しまりなし
 2 : 7.5YR5/6 明褐色 極細～細粒砂 しまりなし
 3 : 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 しまりなし
 4 : 7.5YR4/6 褐色 極細～細粒砂 しまりなし
 5 : 7.5YR4/4 褐色 極細～細粒砂 しまりなし
 6 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりなし
 7 : 7.5YR4/4 褐色 シルト～極細粒砂 しまりなし
 8 : 7.5YR5/6 明褐色 極細粒砂 しまりなし
 地山 : 5YR4/8 赤褐色 シルト～極細粒砂 しまりあり



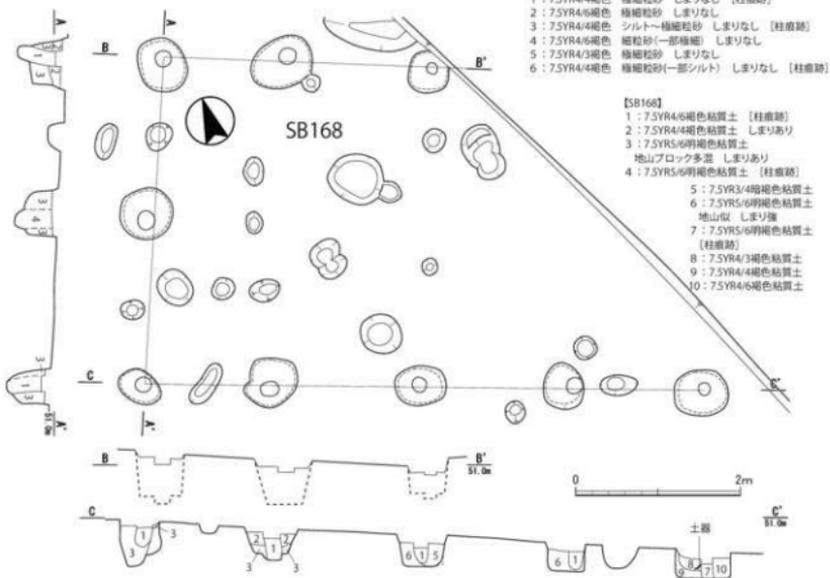
【SB165】

- 1 : 7.5YR4/4 褐色 シルト～極細粒砂 しまりなし
 2 : 7.5YR4/6 褐色 シルト～極細粒砂 しまりなし
 3 : 7.5YR5/6 明褐色 極細粒砂 しまりなし
 4 : 7.5YR4/4 褐色 シルト～極細粒砂 しまりなし
 5 : 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 しまりなし
 6 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりなし
 7 : 7.5YR5/6 明褐色 極細～細粒砂 しまりなし
 8 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりなし
 9 : 7.5YR4/6 褐色 極細～細粒砂 しまりなし

第 137 図 SB 164・165 遺構図 (1 : 60)

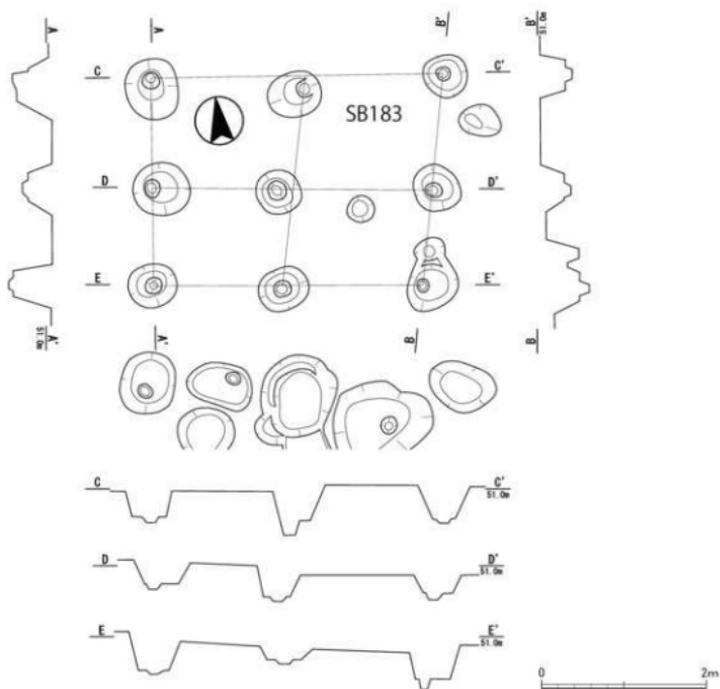
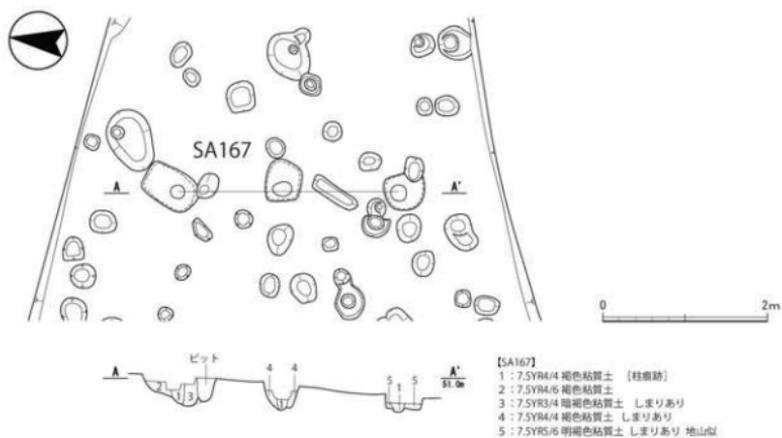


- 【SB166】
- 1 : 7.5YR4/4褐色 極細粒砂 しまりなし [柱痕跡]
 - 2 : 7.5YR4/6褐色 極細粒砂 しまりなし
 - 3 : 7.5YR4/4褐色 シルト〜極細粒砂 しまりなし [柱痕跡]
 - 4 : 7.5YR4/6褐色 細粒砂(一部極細) しまりなし
 - 5 : 7.5YR4/3褐色 極細粒砂 しまりなし
 - 6 : 7.5YR4/4褐色 極細粒砂(一部シルト) しまりなし [柱痕跡]



- 【SB168】
- 1 : 7.5YR4/6褐色粘質土 [柱痕跡]
 - 2 : 7.5YR4/4褐色粘質土 しまりあり
 - 3 : 7.5YR5/6明褐色粘質土
地山ブロック多量 しまりあり
 - 4 : 7.5YR5/6明褐色粘質土 [柱痕跡]
 - 5 : 7.5YR3/4暗褐色粘質土
 - 6 : 7.5YR5/6明褐色粘質土
 - 7 : 7.5YR5/6明褐色粘質土
地山似 しまり強
 - 8 : 7.5YR4/3褐色粘質土 [柱痕跡]
 - 9 : 7.5YR4/4褐色粘質土
 - 10 : 7.5YR4/6褐色粘質土

第138図 SB166・168遺構図 (1:60)



第139図 SA167・SB183遺構図 (1 : 60)

め、掘立柱建物の可能性もあるが、場もしくは柵としておく。

柱穴から、土師器甕や須恵器杯類・甕などが出土した。量は比較的多いものの、詳細な時期比定は難しい。

SB 168 (第138・179図) H-Q 1付近で検出した桁行4間以上×梁行2間の側柱建物。東端が調査区外に位置しているため、桁行が5間以上かあるかどうかは不明である。柱間に若干差異は認められるが、平面形は整っている。

柱穴から、土師器甕や須恵器杯H身(617)・無台杯(618)・高杯(619~621)・甕などが比較的多く出土した。617は杯H身とみなしたが、杯蓋gとの判別が難しい。焼成不良品であるため産地同定がしにくい。在地窯系かと思われる。618は在地窯系で、無台杯としたが杯H蓋との識別が難しい器形である。620も在地窯系で、三方透かしの高杯脚部である621と同一個体の可能性が高い。図示した須恵器の中では619のみ猿投窯系とみられる。

SB 169 (第140図) H-N 1付近で検出した桁行4間×梁行2間の側柱建物。柱間は、桁行側が比較的等間隔なのに比べ、梁行側は広く不均一であるが、相対応する柱間では一致する。北側桁行の柱筋の通りが良い。

重複する建物SB 170よりも新しい。

柱穴から、土師器甕や須恵器杯類の破片が少量出土した。

SB 170 (第140図) H-O 1付近で検出した桁行5間×梁行3間の東西棟側柱建物。今回の調査区内では桁行が最も長い建物で、正方位をとる。柱間は比較的揃っており、北側桁行の柱筋の通りが特に良い。

重複する土坑SK 115よりも新しく、掘立柱建物SB 169よりも古い。

柱穴から、土師器や韓形式土器の甕、須恵器の杯蓋b・甕などが出土した。量は比較的多い。

SB 171 (第141図) H-J 1付近で検出した3間×2間の総柱建物。柱間は不均一だが、平面形は比較的整っており、柱筋の通りも良い。北側の柱穴が小さいため、東柱である可能性を想定し、更に北側を精査したが、柱穴は確認できなかった。

出土遺物はない。

SB 172 (第142図) H-1 5付近で検出した3間×3間の総柱建物。柱間は不均一で、西側柱筋以外の通りは悪いが、全体の平面形は比較的整っている。SB 184と平面的に重複するが柱穴で新旧関係を確認できたものは1箇所だけで、その判断が正しければ、SB 184よりも古い。

柱穴から、土師器甕が出土したのみである。

SB 173 (第143・179図) H-L 3付近で検出した桁行5間×梁行3間の東西棟側柱建物。今回の調査区内では最大級の建物で、梁行は正方位をとるが、平面形はやや歪である。柱間は不均一で、北側桁行の柱筋の通りが良いが、南や東側は悪い。

重複するSH 118よりも新しい。

柱穴から、土師器小型甕(623)や須恵器杯類・瓶類(622)・甕などが比較的多く出土した。622は、おそらく美濃須衛窯産で、平瓶の頸部ではないかと思われる。

SB 174 (= SB 1097) (第179図) E-S 18・19で検出した遺構。第5次調査のSB 1097と同一遺構であり、遺構の詳細は既刊報告書⁴⁾を参照されたい。

第3次調査区の柱穴からは、土師器甕や須恵器瓶類の口縁部(624)が出土した。624は、猿投窯系の横瓶とみられ、H-15号窯出土品に類似している。

SA 176 (第144図) H-Q 2で検出した柱穴列。柱間は不均一で、柱通りも悪いが、柱痕跡の明確な一連の柱穴群と考えられたため、柵と評価した。西端がSD 113の東端とはば一致するため、この溝との関連も推測される。

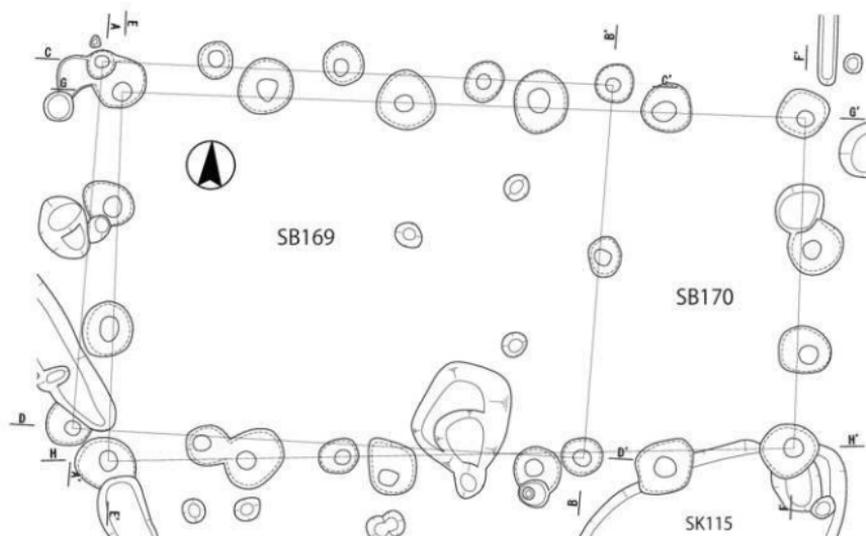
柱穴から、土師器甕の小破片が出土した。

SB 177 (第145図) H-O 3付近で検出した桁行4間×梁行3間の東西棟側柱建物。西側のSB 173と梁行間数は異なるが、規模は近似しており、北側梁行の柱筋が揃う。柱間や柱筋の通りは、若干乱れているものの、比較的整っている方である。

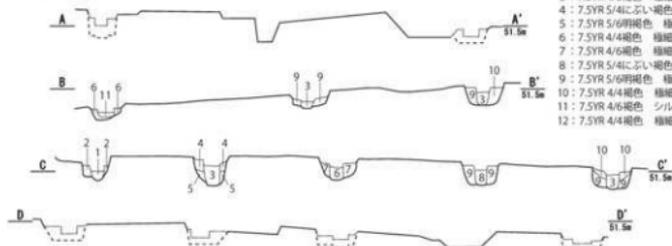
重複するSH 119・124よりも新しい。

柱穴から、土師器甕や杯の小片が出土した。

SB 179 (第145図) E-S 8付近で検出した2間×2間の建物。東柱の位置に攪乱穴があるため断定はできないが、他の類例から総柱建物と推測される。平面形は若干台形気味で、柱間は不均一である。



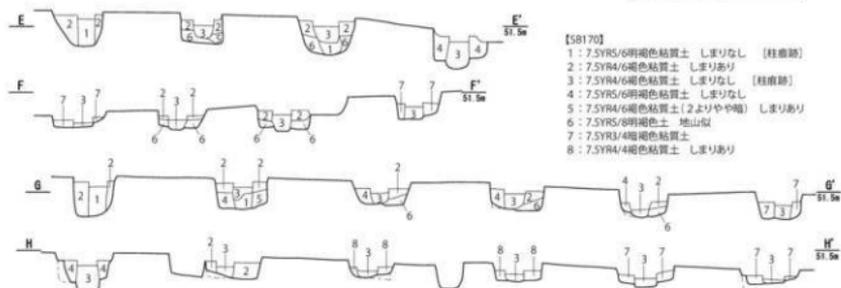
[SB169]



[SB169]

- 1 : 7.5YR 4/4褐色 極細～細粒砂 しまりなし [柱痕跡]
- 2 : 7.5YR 4/6褐色 極細～細粒砂 しまりなし
- 3 : 7.5YR 4/6褐色 極細粒砂 しまりなし [柱痕跡]
- 4 : 7.5YR 5/4Cにぶい褐色 極細～細粒砂 しまりなし
- 5 : 7.5YR 5/6明褐色 極細～細粒砂 しまりなし
- 6 : 7.5YR 4/4褐色 極細粒砂 しまりなし [柱痕跡]
- 7 : 7.5YR 4/6褐色 極細粒砂 しまりなし
- 8 : 7.5YR 5/4Cにぶい褐色 極細粒砂 しまりなし [柱痕跡]
- 9 : 7.5YR 5/6明褐色 極細粒砂 しまりなし
- 10 : 7.5YR 4/4褐色 極細～細粒砂 しまりなし
- 11 : 7.5YR 4/6褐色 シルト～極細粒砂 しまりなし [柱痕跡]
- 12 : 7.5YR 4/4褐色 極細粒砂 しまりなし

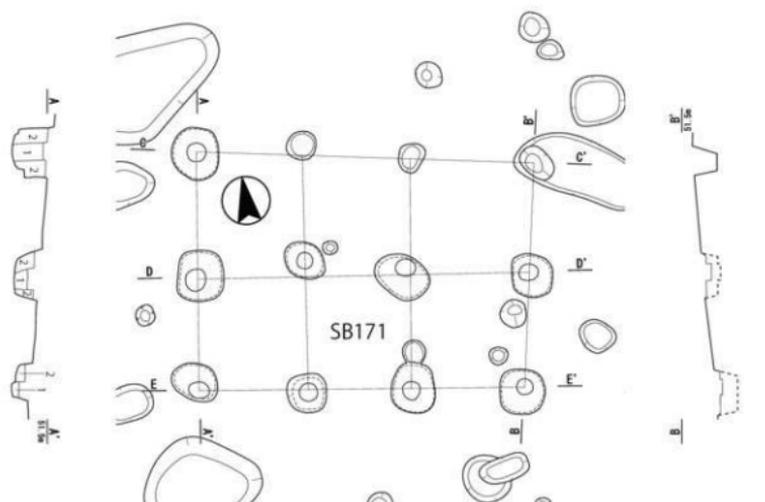
[SB170]



[SB170]

- 1 : 7.5YR5/6明褐色粘質土 しまりなし [柱痕跡]
- 2 : 7.5YR4/6褐色粘質土 しまりあり
- 3 : 7.5YR4/6褐色粘質土 しまりなし [柱痕跡]
- 4 : 7.5YR5/6明褐色粘質土 しまりなし
- 5 : 7.5YR4/6褐色粘質土 (2よりやや幅) しまりあり
- 6 : 7.5YR5/6明褐色土 地山似
- 7 : 7.5YR3/4暗褐色粘質土
- 8 : 7.5YR4/4褐色粘質土 しまりあり

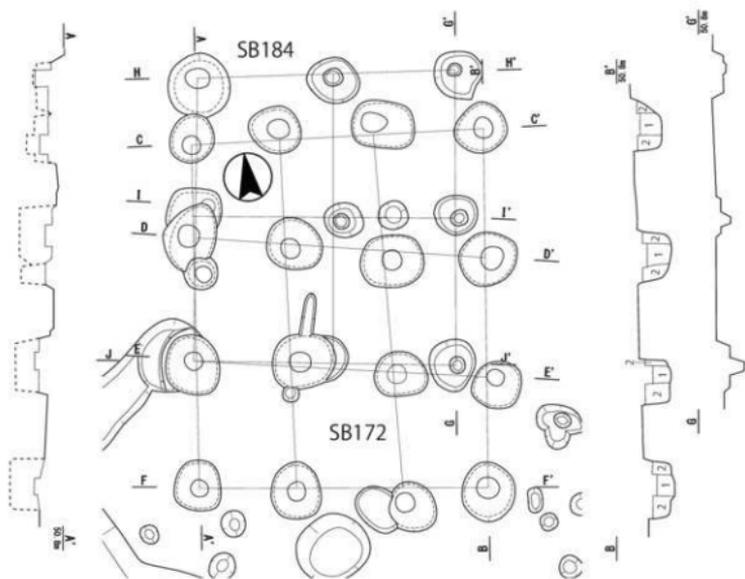
第 140 図 SB 169・170 遺構図 (1 : 60)



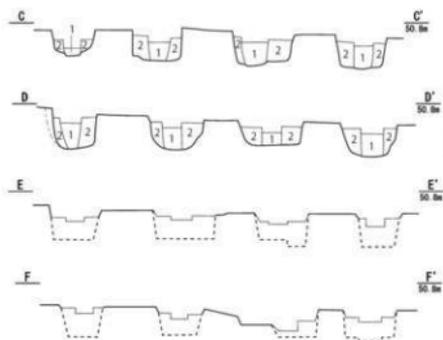
- 1 : 7.5YR4/6褐色粘質土 しまりなし [柱痕跡]
 2 : 7.5YR5/6明褐色粘質土 しまりあり
 3 : 7.5YR4/6褐色粘質土 しまりあり



第141図 SB171遺構図 (1 : 60)

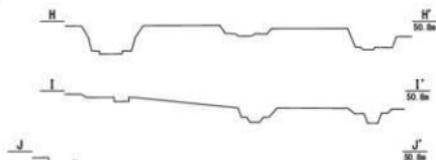


【SB172】A～F



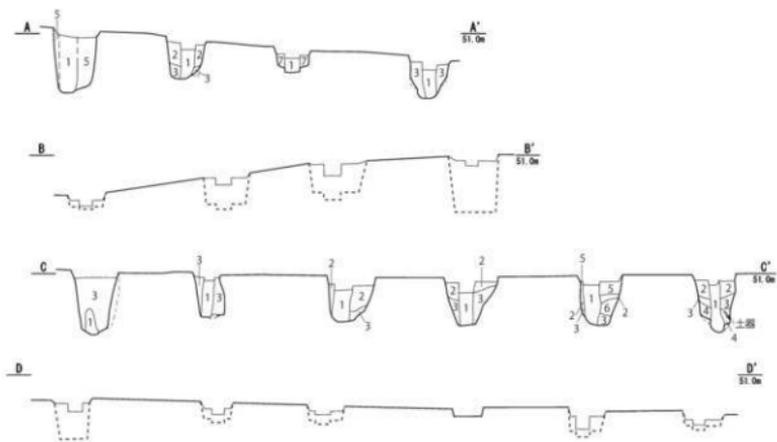
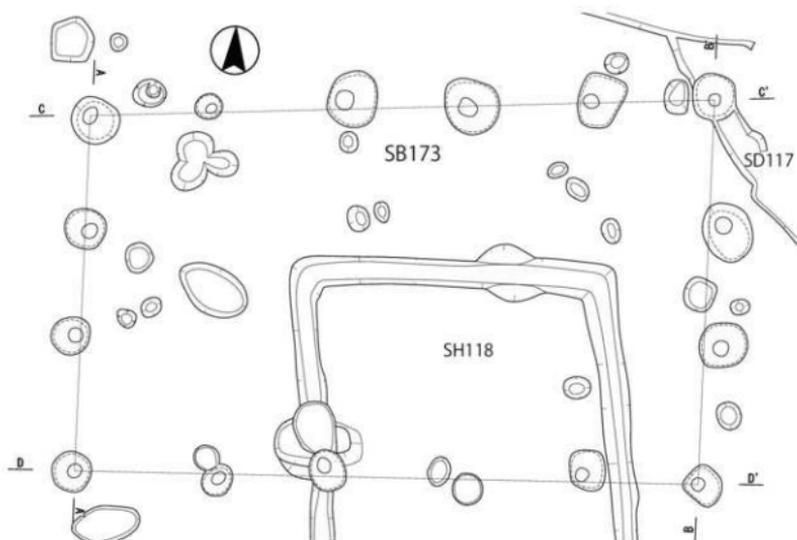
1 : 7.5YR5/6明褐色粘質土 [柱痕跡]
 2 : 7.5YR4/6褐色粘質土 土まじりあり

【SB184】G～J



0 2m

第142図 SB172・184遺構図 (1:60)

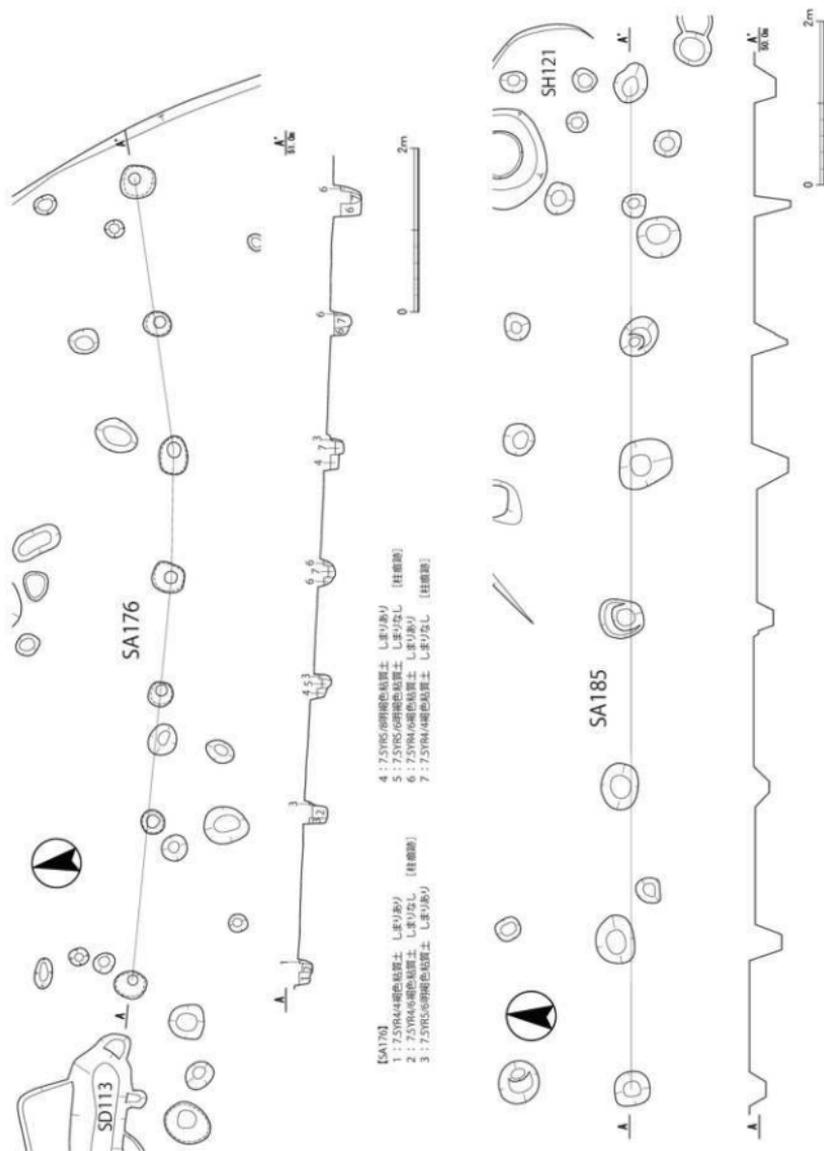


- 1 : 7.SYR 5/6明褐色粘質土 しまりあり 【柱痕跡】
 2 : 7.SYR 4/6褐色粘質土 しまりあり
 3 : 7.SYR 5/8明褐色粘質土 しまりあり
 4 : 7.SYR 4/6褐色粘質土 しまりあり

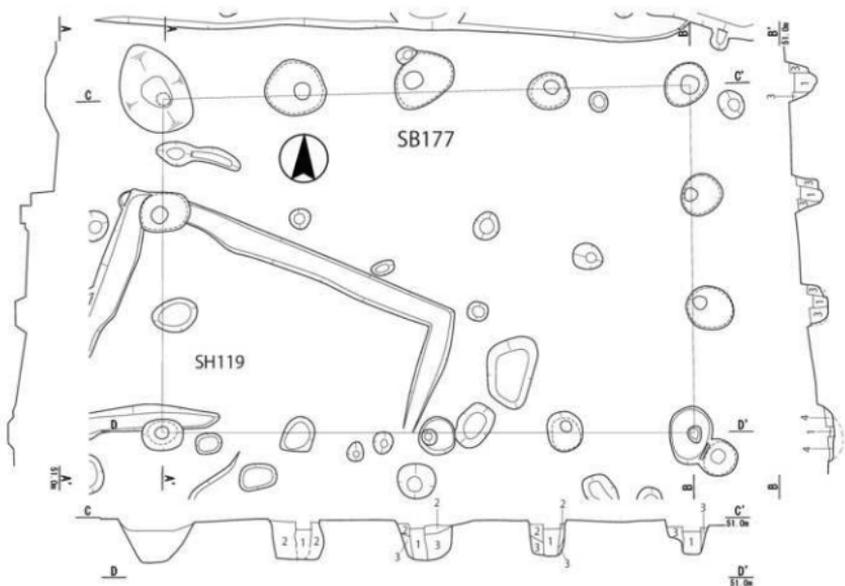
- 5 : 7.SYR 4/4褐色粘質土 しまりあり
 6 : 7.SYR 4/6褐色粘質土(土層よりやや暗) しまりあり
 7 : 7.SYR 5/6明褐色粘質土 しまりあり

0 2m

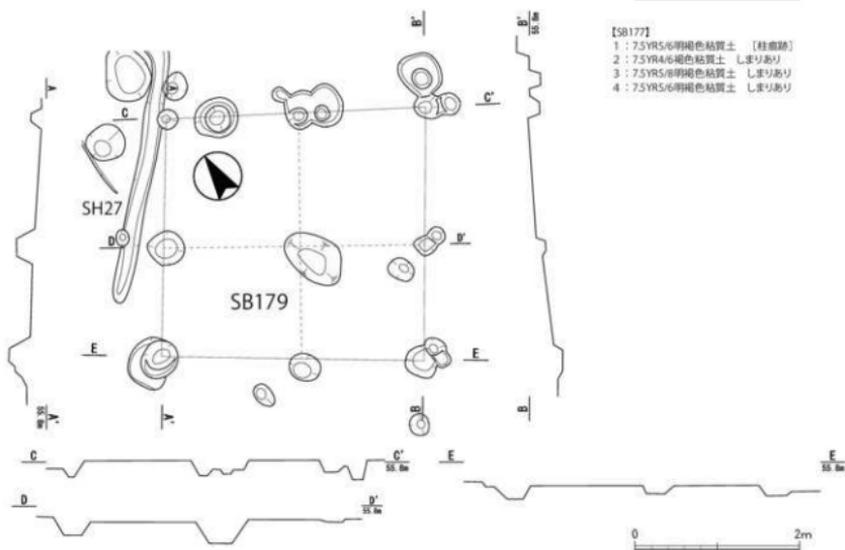
第 143 図 SB173 遺構図 (1 : 60)



第144図 SA176・185遺構図(1:60)



- 【SB177】
 1 : 7SYRS-6明褐色粘質土 [柱痕跡]
 2 : 7SYRA-6褐色粘質土 しまりあり
 3 : 7SYRS-8明褐色粘質土 しまりあり
 4 : 7SYRS-6明褐色粘質土 しまりあり



第145図 SB177・179遺構図 (1:60)

平面検出時には、重複するSH27よりも古いと認識したが、重複部分は僅かであり、確実性は乏しい。出土遺物はない。

SB183 (第139図) H-J3付近で検出した2間×2間の総柱建物。平面形は台形を呈し、東柱の位置も偏るが、本柱の柱通りは比較的良好。

建物の南側にも柱穴があるため、3間×2間の総柱建物である可能性も検討したが、南東隅に柱穴の位置が大きく外れることから除外した。

柱穴から、土師器甕の破片が1点出土した。

SB184 (第142図) H-I4付近で検出した2間×2間の総柱建物。北側と東側の柱通りは良好。本柱の柱穴の重複関係からみて、SB172より新しい。

出土遺物はない。

SA185 (第144図) H-M4付近で検出した8基の柱穴からなる柱列。柱間が東側3間分と西側では異なり、柱穴の大きさも揃っていないが、SB169・170・173・177と同方位をとることから一連の遺構と考え、塼としておく。

柱穴から、土師器甕や須恵器甕の破片が少量出土した。

SB301 (第146図) D-D23付近で検出した3間×2間の総柱建物。柱間はやや不均一であるが、平面形は比較的整っており、柱筋の通りも良好。

重複するSB302・SK209よりも新しい。

柱穴から、土師器や須恵器杯類の破片が少量出土した。

SB302 (第146・179図) D-D22付近で検出した3間×2間の側柱建物。平面形は比較的整っているが柱間は不均一で、柱筋の通りも良くはない。

重複するSB302・SK209よりも古い。

柱穴から、土師器や須恵器杯H蓋(625)・瓶類の破片が出土した。猿投窯系の625は、杯H蓋が無台杯か判別しにくい器形ではあるが、外面に巡る沈線を稜線の痕跡とみなして杯H蓋とした。

SB303 (第147図) F-H11付近で検出した2間×2間の総柱建物。平面形は比較的整っており、柱筋の通りもよいが、柱間は不均一である。本柱に比べ、東柱はやや小さく浅い。

柱穴から、土師器甕や須恵器杯Hの破片が少量出

土した。

SA304 (第156図) D-F25付近で検出した柱穴列を、柱穴配列から孤立柱建物として復元できなかったため、塼として評価したもの。中央の4基は、柱通りはやや悪いが、規模や柱間は似通っている。

北隣のSB323の桁行とほぼ同じ方向性を有するが、併存していたと考えるには距離が近過ぎる感がある。

出土遺物はない。

SB305 (第147図) F-E2付近で検出した3間×3間の側柱建物。南北の梁行の長さが異なるため、平面形はやや歪で、南側梁行の間柱は隅柱を結んだ線よりもやや外側に位置する。柱間は梁行と桁行で大きく異なり、梁行3間分と桁行2間分がほぼ等しい。

重複するSH213よりも新しい。

柱穴から、土師器や須恵器杯・甕の破片が少量出土した。

SB306 (第148図) F-K11付近で検出した総柱建物。2間×2間とした場合、隅柱が検出されていないことから、3間×2間の可能性あると考えた。いずれにしても平面形は歪である。

南方のSB153とは方向性を同じくする。

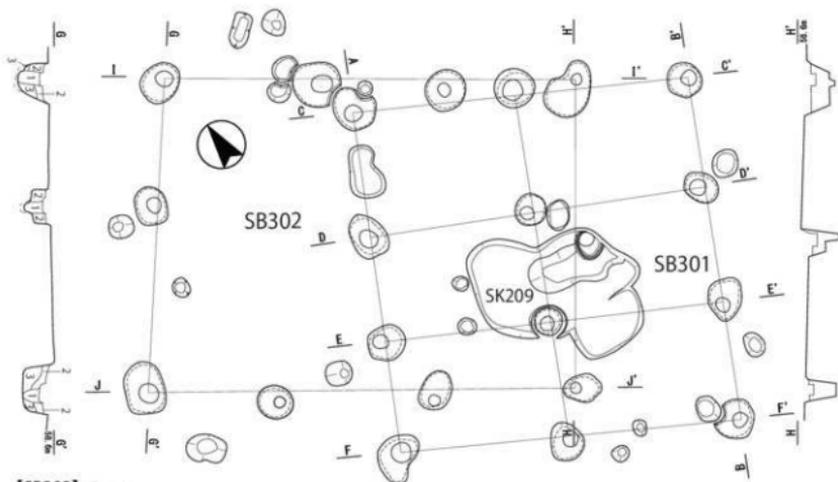
出土遺物はない。

SB307 (第148・179図) D-D18付近で検出した3間×2間の側柱建物。桁行梁行ともに長さが異なるため平面形はやや歪で、北側梁行の間柱は隅柱を結んだ線よりも外側に位置する。柱穴の掘形平面形が隅丸方形に近いものが多い点が、他の建物とはやや異なる。

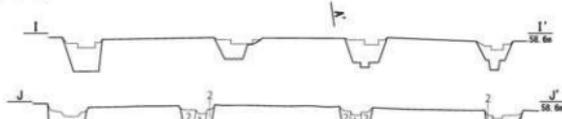
柱穴から、土師器甕や須恵器杯H身・杯蓋b、甕のほか、黒色土器の破片(626)が出土した。黒色土器A類の杯で、畜宮跡SK3557出土品⁵⁾に比較的似る。また、須恵器杯蓋bは、胎土や色調が岡山1・2号窯出土品に似る。

SB308 (第149・179図) D-C21付近で検出した3間×2間の側柱建物。平面形は比較的整っているが、西側梁行の間柱は調査時に攪乱穴と認識されている。柱間は梁行と桁行で大きく異なる。

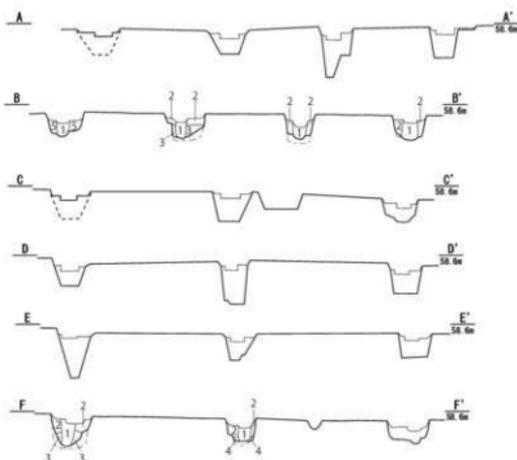
柱穴から、土師器の杯A(628)・甕(629)や須恵器の杯B(627)・甕などの破片が比較的多く出土し



【SB302】 G～J



【SB301】 A～F



【SB302】

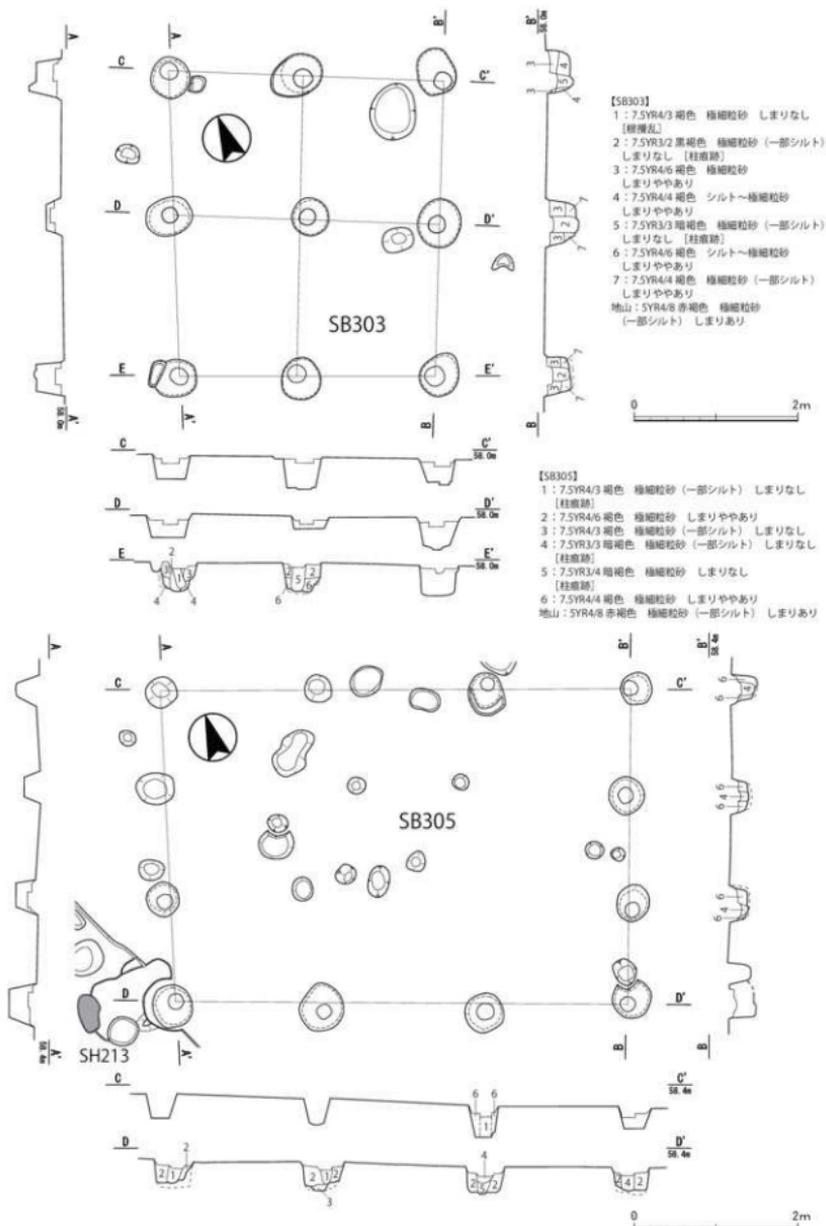
- 1 : 7.5YR4/3褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし
【柱基礎】
 - 2 : 7.5YR4/6褐色 極細粒砂 しまりややあり
 - 3 : 7.5YR4/3褐色 シルト～極細粒砂 しまりややあり
 - 4 : 7.5YR4/4褐色 シルト～極細粒砂 しまりややあり
 - 5 : 7.5YR4/6褐色 シルト～極細粒砂 しまりややあり
- 地山 : 5YR4/8赤褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりあり

【SB301】

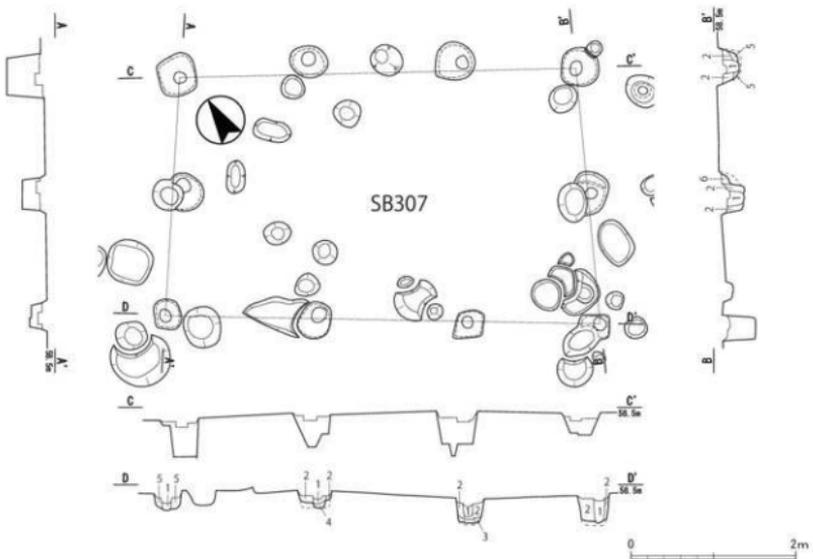
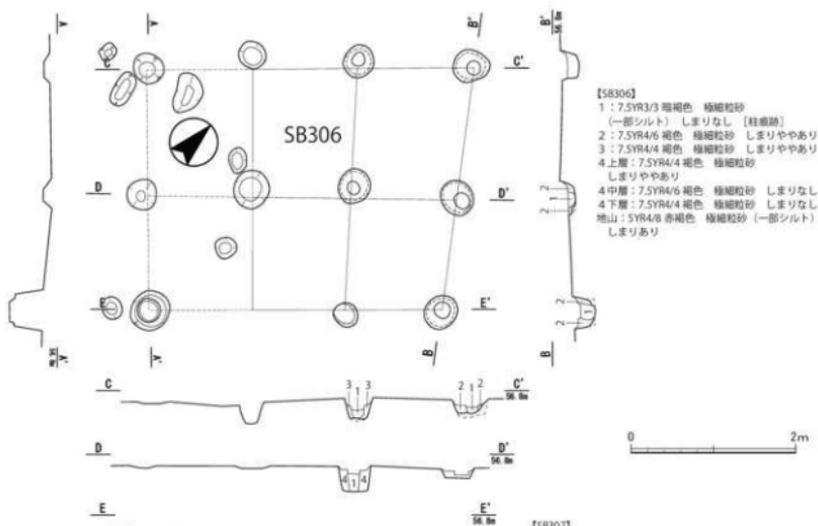
- 1 : 7.5YR3/3褐褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし
【柱基礎】
 - 2 : 7.5YR4/6褐色 極細粒砂 しまりややあり
 - 3 : 7.5YR4/4褐色 シルト～極細粒砂 しまりなし
 - 4 : 7.5YR4/4褐色 シルト～極細粒砂 しまりややあり
 - 5 : 7.5YR4/4褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりややあり
- 地山 : 5YR4/8赤褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりあり



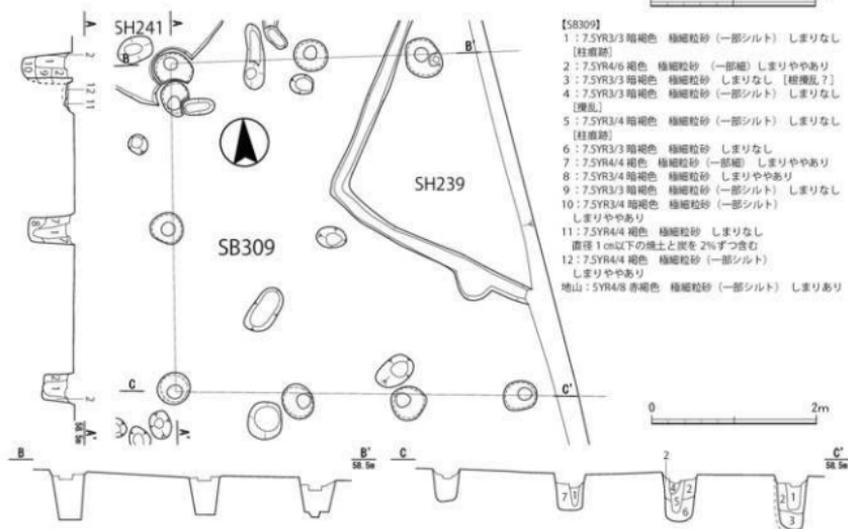
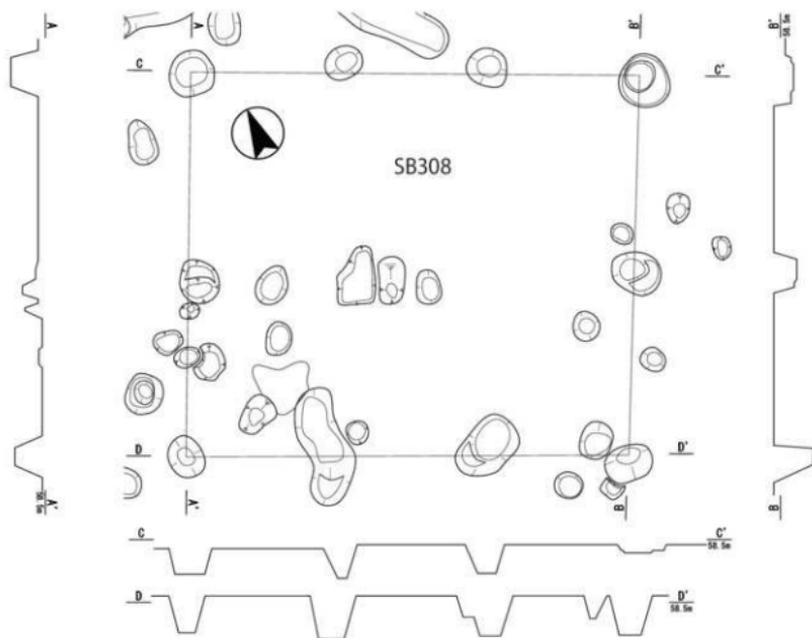
第146図 SB301・302遺構図 (1 : 60)



第 147 図 SB303・305 遺構図 (1 : 60)



第 148 図 SB306・307 遺構図 (1 : 60)



【SB309】

- 1 : 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし
[柱痕跡]
 - 2 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりややあり
 - 3 : 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂 しまりなし [柱痕跡?]
 - 4 : 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし
[溝底]
 - 5 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし
[柱痕跡]
 - 6 : 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂 しまりなし
 - 7 : 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりややあり
 - 8 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまりややあり
 - 9 : 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし
 - 10 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりややあり
 - 11 : 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 しまりなし
直徑 1cm 以下の焼土と灰を 2% ずつ含む
 - 12 : 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりややあり
- 地山 : 5YR4/8 赤褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりあり

第149図 SB308・309遺構図 (1:60)

たが、細片化したものが多い。627は猿投窯系で、高台が腰部に近い位置に貼り付けられている。628は、内外面ともに風化が著しく、器表面の調整は不明である。629の内面には、細かい刷毛目の痕跡が認められる。また、図化していないが筆ヶ崎5期に属する須恵器杯類がある。

SB 309 (第149図) D-H 17付近で検出した3間以上×2間の東西棟側柱建物。東端は調査区外に位置しているため桁行間数は不明。平面形は比較的整っている。柱間は西側梁行が等間隔であるのに対し、桁行は不均一である。柱穴は大きくはないが、深いものが多い。

重複するSH 241よりも新しい。SH 239とも平面的に重複するため同時存在はありえないが、直接柱穴が切りあう箇所がないため、新旧関係は不明である。

柱穴から、土師器片が2点出土した。

SB 310 (第150図) C-X 13付近で検出した3間×2間の側柱建物。平面形や柱間、柱通りなどは比較的整っているが、柱間寸法は梁行と桁行で大きく異なる。

柱穴から、土師器片と須恵器瓶類の破片が出土した。

SB 312 (第150・179図) C-W 18付近で検出した2間×2間の総柱建物。平面形はやや歪で、柱間は不均一であるが、南西側の間柱として重複関係にある古い柱を採用すれば、やや正され、柱通りも良くなる。東側の間柱の深さは極端に浅い。

柱穴から、土師器甕(630)と須恵器瓶類の破片が出土した。630の口縁部は、僅かに受口状を呈する。**SB 313** (第151図) C-T 20付近で検出した2間×2間の総柱建物。平面形はやや歪で、柱間は不均一であるが、本柱と東柱はほぼ同じ規模である。

出土遺物はない。

SB 314 (第151図) C-V 18付近で検出した3間×2間の側柱建物。平面形や柱間、柱通りなど、いずれも比較的整っている。

重複するSD 238よりも古い。

出土遺物はない。

SB 315 (第152図) F-B 4付近で検出した2間×2間の総柱建物。南東・南西辺の柱通りが悪く、

平面形はやや歪で東柱の深さが極端に浅いが、北東辺の柱通りは良い。

柱穴から、土師器と須恵器杯の破片が少量出土した。

SB 318 (第153・179図) C-Y 17付近で検出した3間×3間の側柱建物。平面形は比較的整っているが、調査時には掘立柱建物と認識していなかったため、柱痕跡の検出は試みていない。柱間は梁行と桁行で大きく異なる。

柱穴から、土師器甕の口縁部(631・632)、須恵器杯類・甕などの破片が比較的多く出土した。須恵器杯類には、杯蓋や無台杯もしくは杯Bが含まれ、胎土や色調が岡山1・2号窯出土品に似るものもある。

SB 319 (第154・179図) C-W 19付近で検出した3間×2間の側柱建物。平面形はやや歪んでおり、東西桁行の柱穴が不足しており、北側梁行の間柱はSB 320と共有する形になっているが、西側桁行と南側梁行の柱穴の並びは良い。調査時には掘立柱建物と認識していなかったため、柱痕跡の検出は行っていない。

重複するSD 238よりも古い。

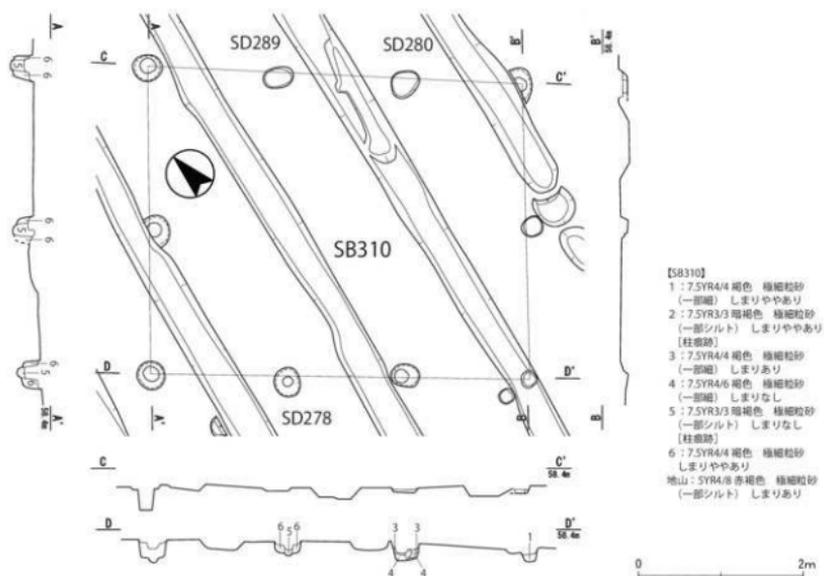
柱穴から、土師器甕と須恵器杯B(633)の破片や粘土塊が少量出土した。633は、外側へ折れる口縁端部の形状が特徴的で、底部外面には高台を貼り付けた痕跡が認められる。

SB 320 (第154図) C-X 18付近で検出した2間×2間の総柱建物。平面形はやや歪である。SB 312と近接して同じ方向性で建てられているため、ほぼ同時期とみられる。

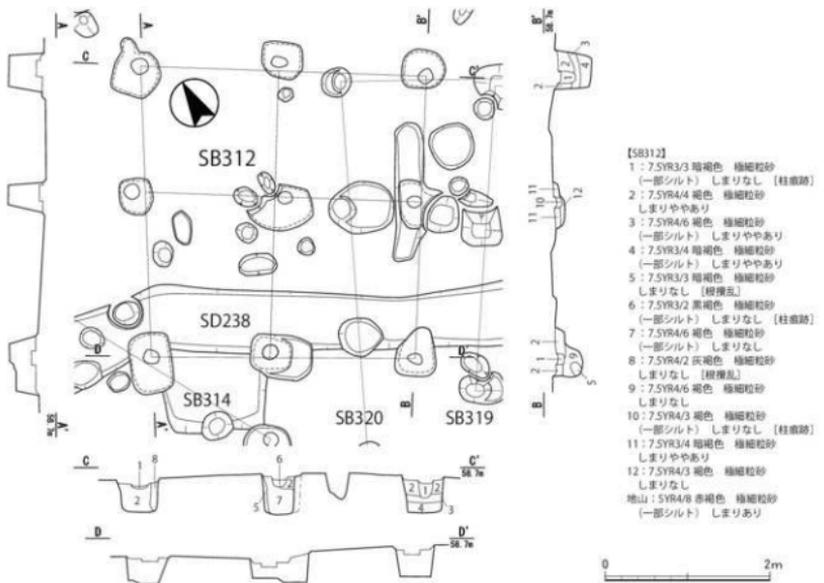
柱穴から、土師器甕や須恵器甕などの破片が少量出土した。

重複するSD 238との関係については、完掘状況の図面では、溝よりも新しく表現されているが、平面検出時の図面には重複する柱穴自体の記載がない。両者の出土遺物から時期を判断することは難しいが、周辺の類似建物とSD 238との重複関係は、建物のほうが古い。

SB 321 (第155図) C-V 19付近で検出した2間×2間の総柱建物。平面形はやや歪で、北東辺の間柱をSB 322と共有する形になっており、南限の柱穴は調査時に掘立柱と認識されている。若干信頼

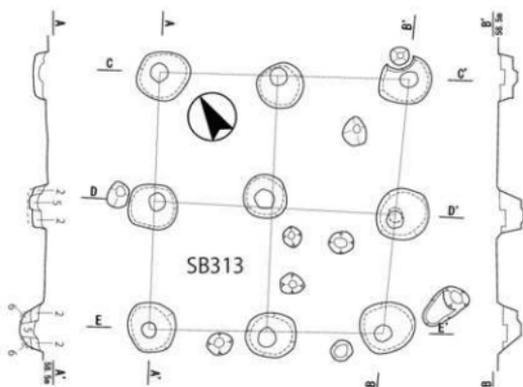


- 【SB310】**
- 1 : 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂
（一部磁） しまりややあり
 - 2 : 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂
（一部シルト） しまりややあり
〔柱礎跡〕
 - 3 : 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂
（一部磁） しまりあり
 - 4 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂
（一部磁） しまりなし
 - 5 : 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂
（一部シルト） しまりなし
〔柱礎跡〕
 - 6 : 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂
しまりややあり
地山 : 5YR4/6 赤褐色 極細粒砂
（一部シルト） しまりあり



- 【SB312】**
- 1 : 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂
（一部シルト） しまりなし 〔柱礎跡〕
 - 2 : 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂
しまりややあり
 - 3 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂
（一部シルト） しまりややあり
 - 4 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂
（一部シルト） しまりややあり
 - 5 : 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂
しまりなし 〔礎礎瓦〕
 - 6 : 7.5YR3/2 黒褐色 極細粒砂
（一部シルト） しまりなし 〔柱礎跡〕
 - 7 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂
（一部シルト） しまりなし
 - 8 : 7.5YR4/2 灰褐色 極細粒砂
しまりなし 〔礎礎瓦〕
 - 9 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂
しまりなし
 - 10 : 7.5YR4/3 褐色 極細粒砂
（一部シルト） しまりなし 〔柱礎跡〕
 - 11 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂
しまりややあり
 - 12 : 7.5YR4/3 褐色 極細粒砂
しまりなし
 - 地山 : 5YR4/6 赤褐色 極細粒砂
（一部シルト） しまりあり

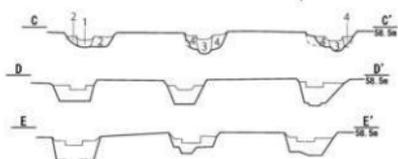
第150図 SB310・312遺構図（1：60）



【SB313】

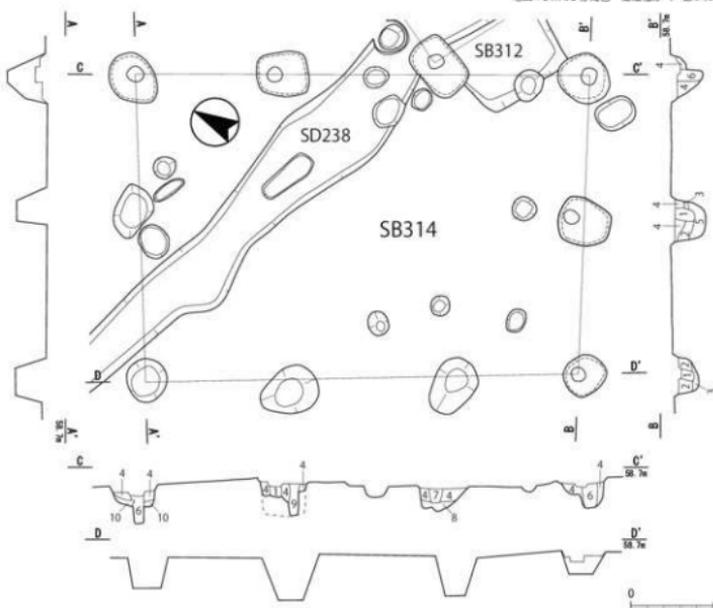
- 1 : 7.5YR3/2 黄褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし [柱痕跡]
 - 2 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりややあり
 - 3 : 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし [柱痕跡]
 - 4 : 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 しまりややあり
 - 5 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし [柱痕跡]
 - 6 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし
- 地山 : 5YR4/8 赤褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりあり

0 2m



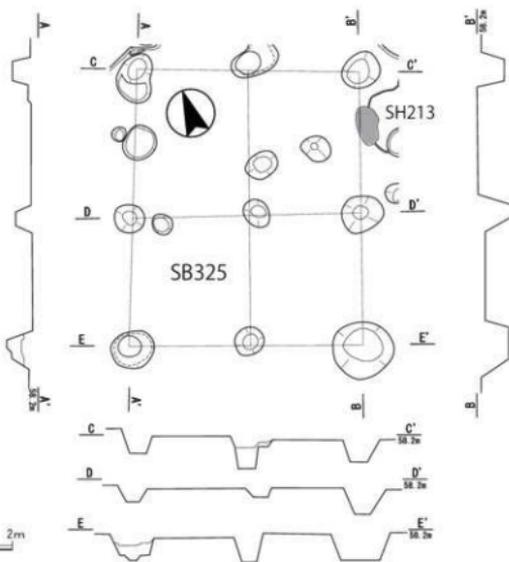
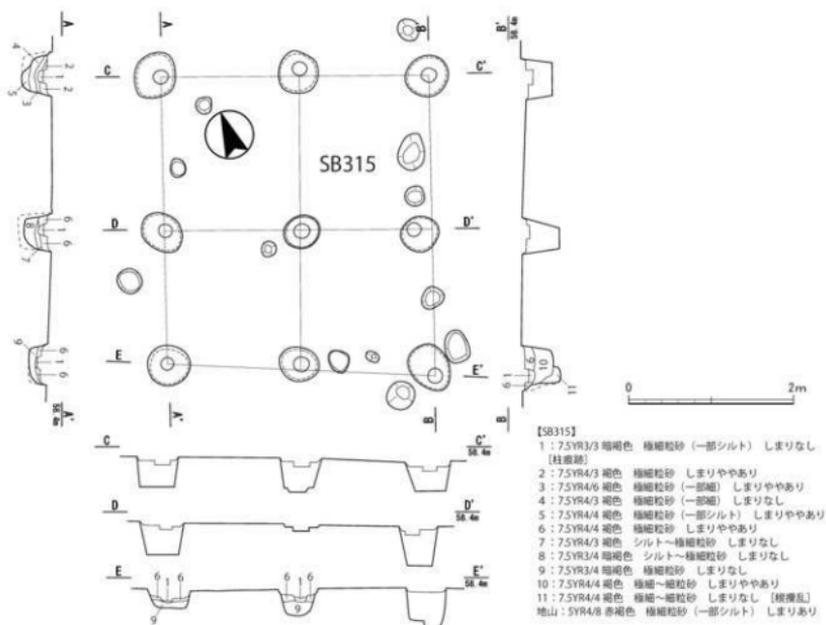
【SB314】

- 1 : 7.5YR4/3 褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし [柱痕跡]
 - 2 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりややあり
 - 3 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりややあり
 - 4 : 7.5YR4/4 褐色 極細粒砂 しまりややあり
 - 5 : 7.5YR3/4 暗褐色 極細粒砂 しまりなし
 - 6 : 7.5YR3/2 暗褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし [柱痕跡]
 - 7 : 7.5YR3/2 暗褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし [柱痕跡]
 - 8 : 7.5YR4/3 褐色 極細粒砂 しまりなし [柱痕跡]
 - 9 : 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂 しまりなし [柱痕跡]
 - 10 : 7.5YR4/6 褐色 極細粒砂 しまりあり (一部柱痕跡により柱痕跡へはみ出す)
- 地山 : 5YR4/8 赤褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりあり

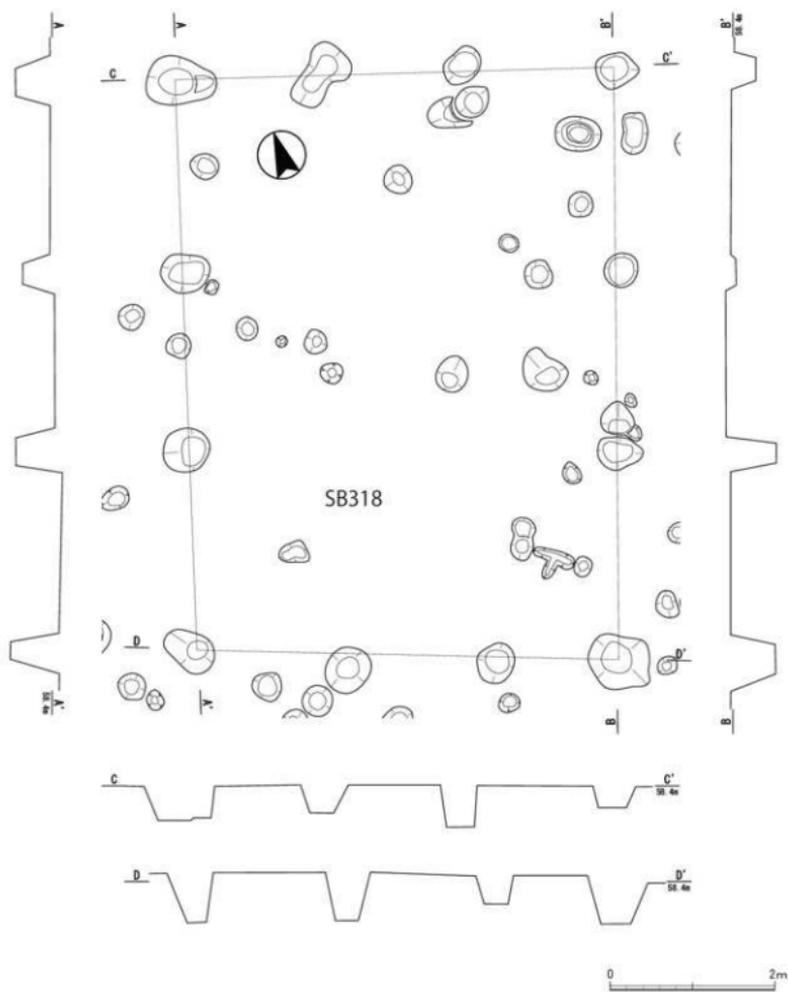


0 2m

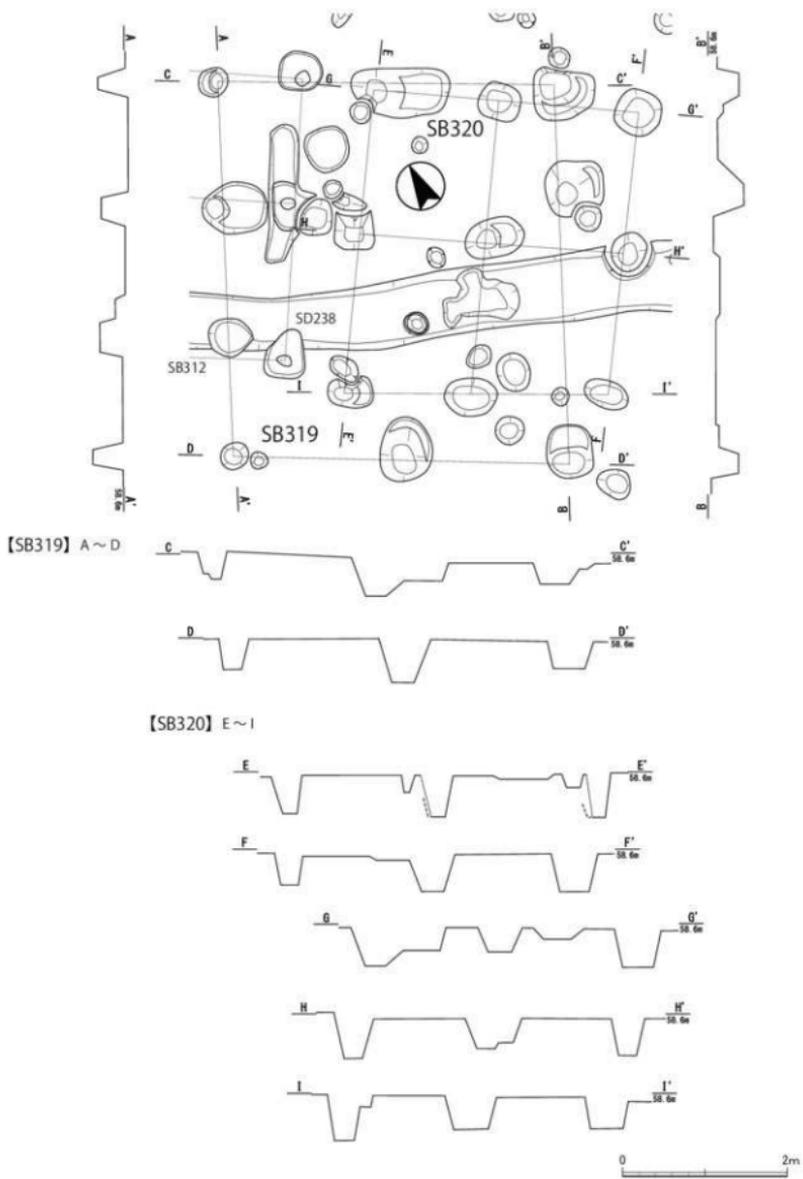
第151図 SB313・314遺構図 (1 : 60)



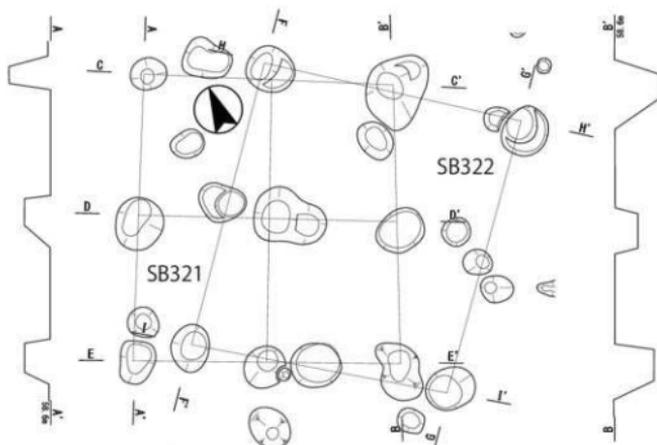
第152図 SB315・325遺構図 (1 : 60)



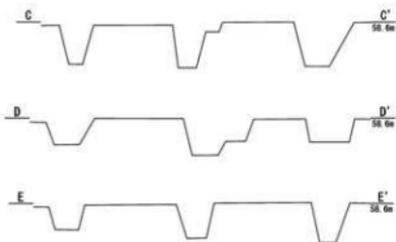
第153図 SB318遺構図 (1:60)



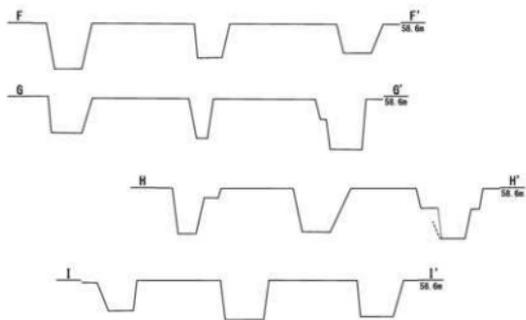
第154図 SB319・320遺構図 (1:60)



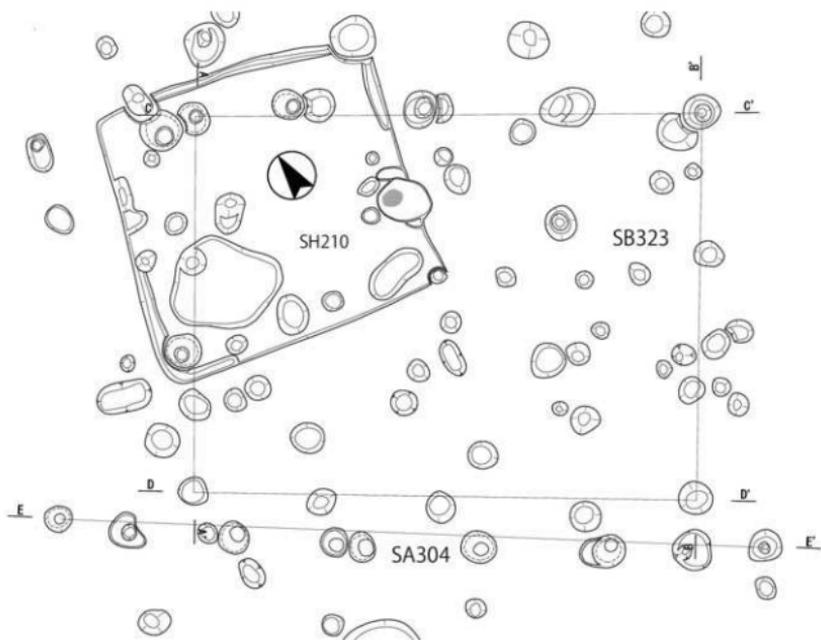
【SB321】 A～E



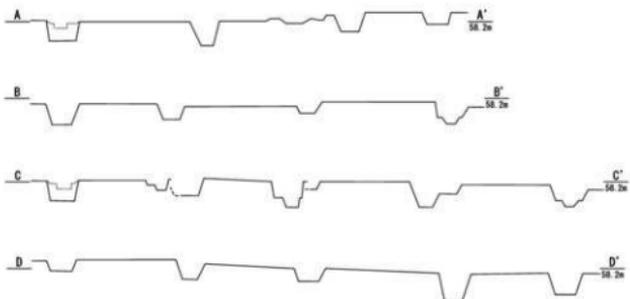
【SB322】 F～I



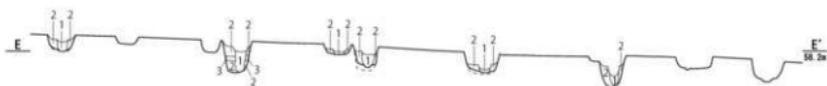
第 155 図 SB 321・322 遺構図 (1 : 60)



【SB323】 A～D



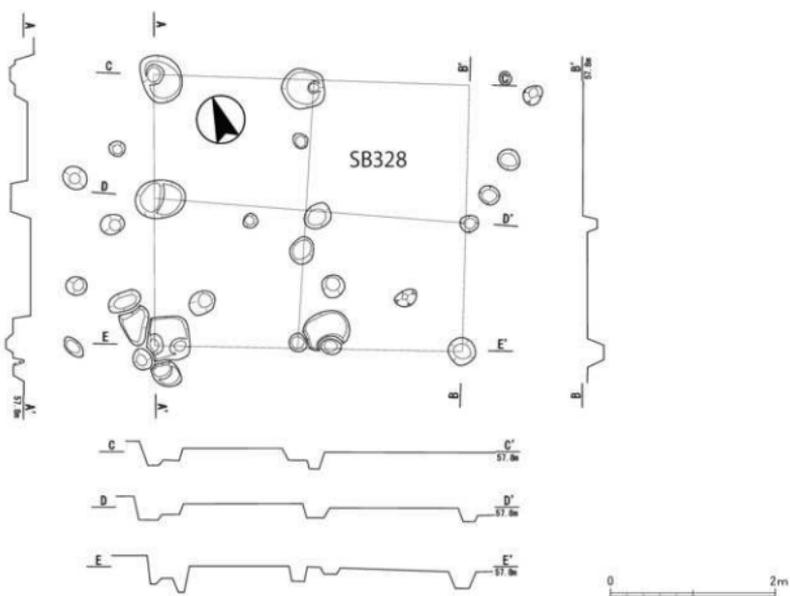
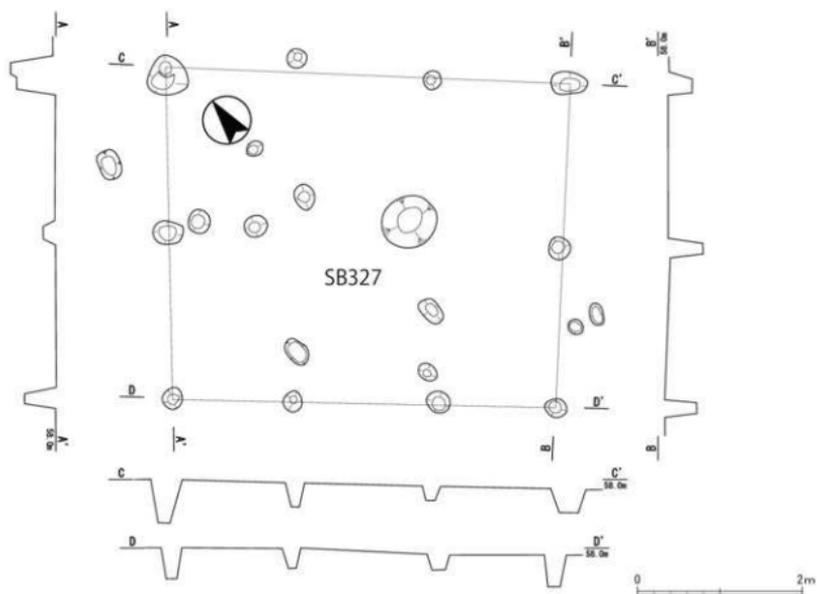
【SA304】 E



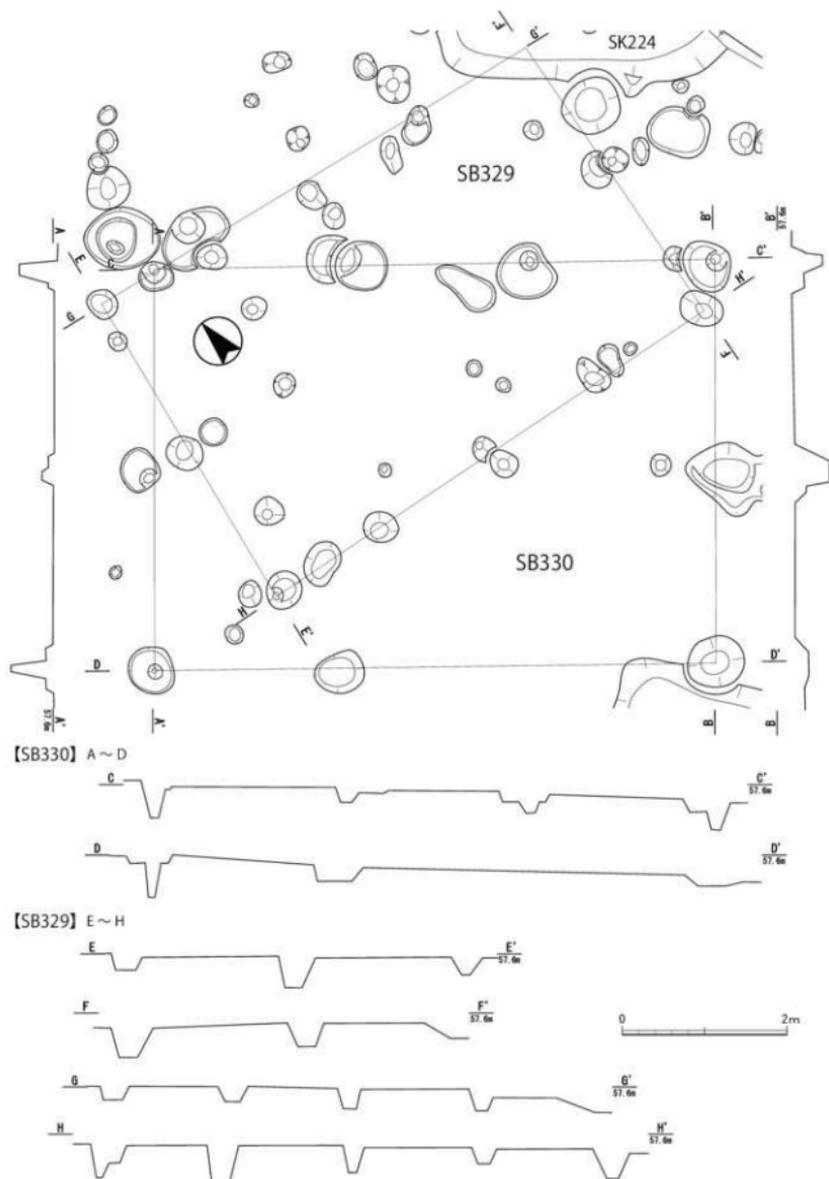
- 【SA304】
 1 : 7.5YR3/3 暗褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし [柱痕跡]
 2 : 7.5YR4/6 暗褐色 極細粒砂 しまりややあり
 3 : 7.5YR3/4 暗褐色 シルト～極細粒砂 しまりなし
 地山 : 5YR4/8 赤褐色 極細粒砂 (一部シルト) しまりあり

0 2m

第156図 SB323・SA304遺構図 (1:60)



第157图 SB327·328遺構図 (1:60)



第158図 SB329・330遺構図(1:60)

度は下がるが、規模や方向性の点で、周囲の掘立柱建物との共通性が高いことから建物と判断した。

S B 322との新旧関係は不明である。

柱穴から、土師器甕や須恵器杯類などの破片が少量出土した。須恵器杯類には、杯蓋bや無台杯もしくは杯Bが含まれる。

S B 322 (第155図) C-V 20付近で検出した2間×2間の側柱建物。平面形はやや歪んでおり、北隅柱をS B 321と共有する形になっているが、規模や方向性は建物と評価して問題ない。調査時には掘立柱建物と認識していなかったため、柱痕跡の検出は行っていない。

S B 321との新旧関係は不明である。

柱穴から、土師器甕や須恵器杯類などの破片や粘土塊が出土した。須恵器杯類には、胎土や色調が岡山1・2号窯出土品に似る無台杯が含まれる。

S B 323 (第156・179図) D-G 25付近で検出した4間×3間の側柱建物。西側梁行と北側桁行は柱穴の認定が難しいが、平面形が最も整う位置のものを採用して復元した。

S H 210の壁間溝と重複する西側桁行の間柱で判断する限りでは、S B 323が新しいとみられる。

柱穴から、土師器甕(634)の破片が比較的多く出土した。

S B 325 (第152・179図) F-D 3付近で検出した2間×2間の総柱建物。調査中には建物とは認識しておらず、柱痕跡を検出できていない柱穴が多いため、柱間や柱通りについては詳細に検討できないが、平面形は比較的整っており、建物として柱穴の規模・深さなどに不自然な点はない。本柱に比べ東柱は若干小さく浅い。

柱穴から、土師器甕や須恵器杯H身(635)などの破片が出土した。635は破面が摩耗した小破片で、接合しないもののS H 213出土品(407)と同一個体とみられる。

S B 327 (第157図) F-H 3付近で検出した3間×2間の側柱建物。柱穴が小さく、北側桁行の柱通りは悪いが、平面形や柱間などは比較的整っている。

柱穴から、土師器甕や須恵器杯類の破片、粘土塊が比較的多く出土した。須恵器杯類には、杯蓋bや

無台杯もしくは杯Bが含まれる。

S B 328 (第157図) F-H 4付近で検出した柱穴群を2間×2間の総柱建物として復元した。調査時には掘立柱建物と認識していなかったため、柱痕跡を検出していない柱穴が多い。平面形は比較的整っており、S B 303と同じ方向性を有するが、北の隅柱は検出されておらず、南東辺や南西辺の間柱は柱穴にしては小さすぎる感もある。

柱穴から、土師器の杯や甕の破片が出土した。

S B 329 (第158図) F-J 6付近で検出した柱穴群を4間×2間の側柱建物に復元した。調査時には掘立柱建物と認識していなかったため、柱痕跡を検出していない柱穴が多い。北側桁行は柱通りが悪く、複数柱穴を調査時には攪乱穴と認識しているなど、建物とするには十分でない点もあるが平面形や柱穴の配置が比較的整っているため、建物として復元して提示することにした。

柱穴から、土師器の破片が少量出土した。

S B 330 (第158図) F-J 7付近で検出した4間×3間の側柱建物。調査時には掘立柱建物と認識していなかったため、柱痕跡を検出していない柱穴が多い。平面形は比較的整っており、柱通りも良い。南西辺の間柱を1基欠くが、検出時の図面には表記されている。

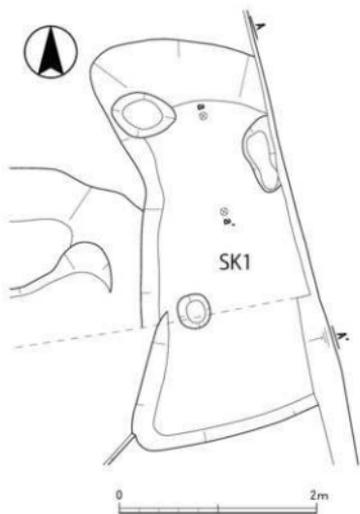
柱穴から、土師器甕の破片が少量出土した。

3 その他の遺構

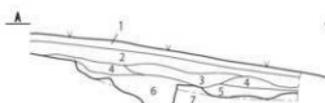
S K 1 (第159・174図) F-O 19付近で検出した、南北4.1m×東西1.9m以上×深さ20cmの不整形土坑。東側は調査区外に位置しており、全形を窺うことはできない。床面で深さ30cmほどの柱穴状の窪みが複数検出されたが、柱痕は確認できなかった。平面検出時に北半で焼土塊の混じる広がりが認められ、付近から遺物が出土した。

埋土から、須恵器無台杯(474)・杯B・杯蓋b・壺瓶類(475)・甕、土師器甕などが出土し、一部はS K 3出土品(478)と接合できた。474は焼成不良のため産地は不明である。457は在地窯系で、頸部中央付近に沈線が施されている。

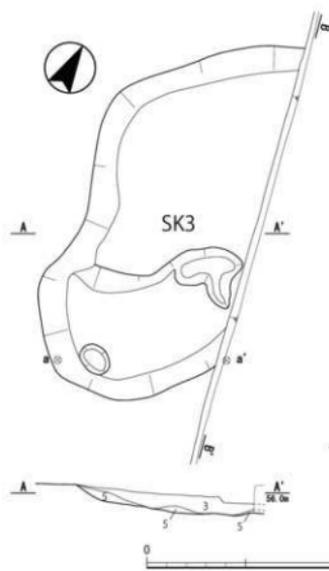
S K 3 (第159・174図) F-M 13付近で検出した、南北4.1m×東西1.75m以上×深さ18cmの浅い



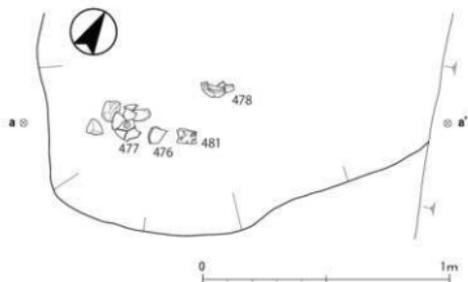
【遺物出土状況】



- 1 : 表土 (腐植土)
 2 : 7.5YR4/6 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 直径 2 cm の礫砂少量と遺物含む
 3 : 7.5YR4/4 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 直径 1～5 cm の礫 10% と遺物含む
 4 : 7.5YR4/6 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 直径 1～8 cm の礫を 80% 含む
 5 : 5YR4/5 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 直径 1～5 cm の礫を少量含む
 6 : 7.5YR4/3 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 直径 1～5 cm の礫を少量含む
 7 : 5YR4/8 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 直径 2 cm の礫を 20% 含む 【地山】



【遺物出土状況】 遺構検出時



- 1 : 表土 (腐植土)
 2 : 7.5YR4/6 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
 3 : 7.5YR4/4 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 直径 0.5 cm の礫少量と遺物含む
 4 : 5YR4/6 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
 5 : 5YR5/6 明褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
 6 : 5YR4/8 赤褐色 シルト～粗粒砂 (粘質土) 直径 2～10 cm の礫 10～20% 含む 【地山】

第159図 SK1・SK3遺構図(1:50、遺物出土状況1:20)

不整形土坑。東側は調査区外に位置しており、全形を窺うことはできない。

平面検出時に南端で礫と遺物がまがまがって出土した。このほかの埋土も含めて、須恵器杯B(478)・杯蓋b(476・477)・長頸壺(479)・小型壺(480)・甕(481)、土師器甕(482)、砂岩製砥石(483)などが出土し、476はSK1出土破片と接合できた。

476~478は猿投窯系、480・481は在地窯系で、479は砂がちな胎土で産地不明である。猿投窯系の476と478は胎土や焼成具合が酷似している。蓋の上面にはロクロケズリが広く施され、鈕や高台の形状などは、I-17号窯出土品に類似する。477はロクロケズリの範囲が狭く、鈕も扁平化していることなどに、若干新しい様相を見て取れ、C-2号窯出土品に類似する。480は丸底の小型壺で、残存している体部下半は丁寧なヘラケズリが施されている。器壁が厚く、甕ではないかと思われる。481は底に近い胴部の破片で、内面には底部を押し出す時についたとみられる深い当具痕が認められる。

SD4 (第50・53・174図) F-N19付近で検出した。長さ6.0m×幅2.1~3.9m×深さ30cmの不整形な遺構。SH10と重複するが、根柢乱などがあり、新旧関係は不明である。SK1よりは古い。

SH10との重複場所から出土した遺物は、SH10出土品と共に掲載した。確実なSD4埋土からは、須恵器杯H蓋(484)・杯H身(485・486)・無台杯(487)・高杯(488・489)・甕、土師器甕(490)・鉢(491)などが出土した。

484~487・489は猿投窯系、488は在地窯系である。484~486は杯Hとしては法量の縮小化が進んだ最終段階のもので、I-17号窯に類品がある。488・489は高杯である。491は体部内の湾曲度合が低く、体部の器壁はそれほど厚くないことから、口径の大きな鉢の把手と考えた。

SK5 (第160図) F-I16で検出した。長辺2.1m×短辺1.0m×深さ20cmの不整形土坑。土層図では部分的に深くなる箇所を測っているため断面V字状を呈しているが、全体としては逆台形を呈する。

埋土から、須恵器杯や土師器甕の破片が少量出土した。

SZ6 (第174図) F-I・J15で検出した。東西3.9m×南北2.8m×深さ24cmの不整形土坑。調査時所見で風倒木の可能性があると言指されている。

埋土から、土師器の小片、須恵器杯蓋g(492)が出土した。492は在地窯系で、胎土・形状が西ヶ谷2号窯の製品に似る。

SZ8 (第35・174図) F-N16付近で検出した。南北2.2m以上×東西1.65m×深さ26cmの溝状遺構。8号墳の墳丘裾部の推定位置にあたるが、古墳より新しいと目される遺物が出土したことから、8号墳とは別遺構として調査した。

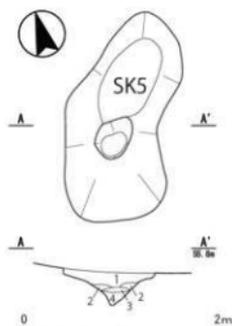
埋土から、須恵器杯蓋(493・494)・甕? (495)・甕(496)、土師器甕(497)などが出土した。493は猿投窯系の杯蓋b、494は在地窯系である。495は薄い器形の破片で、実測図の傾きはやや信頼度が低い。甕の口縁部と考えた。496は甕の頸接合部である。

SF9 (第160図) F-M19付近で検出した。東西1.75m×南北0.6m×深さ14cmの浅い楕円形土坑。最上層には焼土塊を多く含む土が堆積していた。埋土の中位には、白色のシルトからなる厚さ1cmほどの薄い土層が部分的に広がり、その下には、被熱したと思われる土層がみられた。

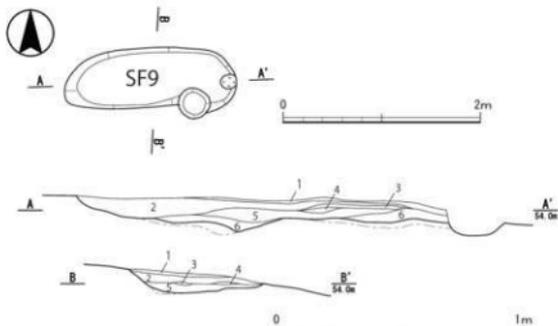
図化できなかつたが、最上層を中心に土師器甕の破片が少量出土した。

SD21 (第174図) 5号墳と6号墳の間で検出した。幅1.0m×深さ12cmの溝。5号墳周溝と6号墳周溝のいずれよりも新しい。7号墳周溝との関係は、平面検出時にはSD21のほうが古いようも見えたが、土層断面での確認には至らず不明である。埋土には白色細粒を多く含み、底面付近に直径5cm以下の礫が多く認められた。

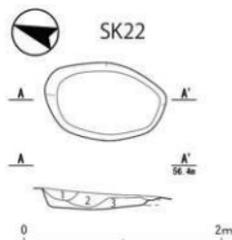
埋土から、須恵器杯H(498・501)・杯蓋g(499)・杯蓋(500)・杯B(502)・平瓶(503・504)・甕(505)、土師器甕(506)・碗などが出土した。499~501は猿投窯系、それ以外は在地窯系である。498は法量の縮小化が進んだ最終段階の杯H蓋である。501は杯H身もしくは蓋で、外面にヘラ記号と自然釉が認められる。503は在地窯系で、体部中央に径1.2cmほどの円形の浮文がある。504は口縁端部の形状や頸部の沈線は503に似るが、焼成は非常に悪い。505は内面



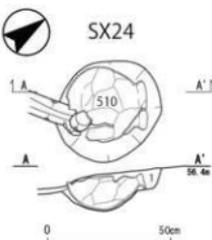
- 1: 7.5YR4/4 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
直徑 1 cm の礫極少含む
- 2: 7.5YR4/6 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
直徑 2 cm の礫極少含む
- 3: 5YR4/4 に近い赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
直徑 2 cm の礫極少含む
- 4: 5YR4/8 赤褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
直徑 3 cm の礫極少含む



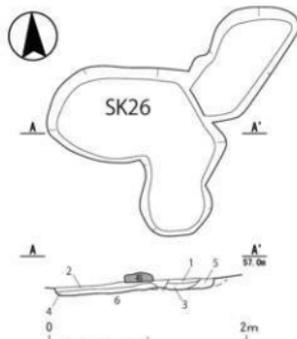
- 1: 5YR3/6 暗赤褐色 シルト～細粒砂 (粘質土) 直徑 1 cm ほどの 2.5YR4/8 赤褐色の焼土塊を含む 【焼土層】
- 2: 7.5YR4/4 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
- 3: 10YR7/6 明黄褐色 シルト (粘質土)
- 4: 2.5YR4/6 赤褐色 シルト～細粒砂 (粘質土) 上面に土器含む 【焼土層】
- 5: 7.5YR4/6 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土)
- 6: 7.5YR4/6 褐色 シルト～中粒砂 (粘質土) 5YR4/6 赤褐色シルト～細粒砂ブロック (直徑 1 cm) を 5% ほど、炭化物・焼土塊 (直徑 0.5 cm) を少量含む



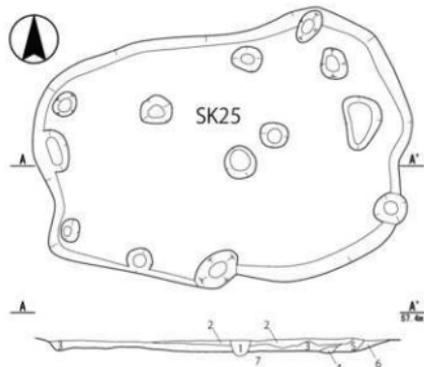
- 1: 7.5YR4/6 褐色粘質土 焼土・炭を多く含む
- 2: 7.5YR4/6 褐色粘質土 炭を少量含む
- 3: 7.5YR5/8 明褐色粘質土



- 1: 7.5YR4/6 褐色粘質土 粘性強



- 1: 7.5YR3/4 暗褐色土 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし 粘質ややあり
- 2: 7.5YR4/4 褐色土 極細粒砂 炭混 しまりなし 粘質ややあり
- 3: 7.5YR4/6 褐色土 極細粒砂 (一部シルト) 炭少量含む しまりなし 粘質ややあり
- 4: 7.5YR4/6 褐色土 極細粒砂 しまりなし 粘質ややあり
- 5: 10YR4/6 褐色土 極細粒砂 しまりなし 粘質ややあり
- 6: 7.5YR5/6 明褐色土 極細粒砂 しまりあり 粘質あり



- 1: 7.5YR5/6 明褐色粘質土
- 2: 5YR4/8 赤褐色粘質土
- 3: 7.5YR4/6 褐色粘質土
- 4: 7.5YR4/6 褐色粘質土 直徑 1 cm までの焼土・炭粒を多く含む
- 5: 7.5YR4/6 褐色粘質土 直徑 0.5 cm までの焼土・炭粒を含む
- 6: 7.5YR5/6 明褐色粘質土 焼土層
- 7: 5YR4/6 赤褐色粘質土

第 160 図 SK5・SF9・SK22・SX24・SK25・SK26 遺構図 (1:50, 1:20)

に同心円文当具痕、外面に平行叩きの痕跡が残る焼成不良品。

SK 22 (第160・174図) F-F 4付近で検出した、長径1.2m×短径0.8m×深さ19cmの楕円形土坑。埋土には焼土や炭を多く含むが、被熱痕跡は確認されなかった。

埋土から、土師器甕の口縁部(507)などが少量出土した。口縁端部は内側へきつく折り返されたような形状で、先端部は実り気味である。

SD 23 (第174図) 3号墳北方のF-D 8付近で検出した、東西5.9m×南北5.9m×深さ15cmの不整形の落ち込み。単なる自然地形の窪みの可能性もある。

埋土から、須恵器高杯(508)・甕、土師器甕(509)などが少量出土した。508は在地窯系で脚部に透かしはない。509は口縁部が僅かに受口状を呈する。

SK 24 (第160・175図) F-F 14の10号墳周溝脇で検出した、直径0.44m×深さ15cmの円形土坑。内部に土師器甕(510)が横倒し状態で確認されたため、土器棺墓と考えた。510は、体部が球形を呈する大型の土師器甕で、内外面ともに風化が著しい。そのほか、須恵器甕の破片が2点出土した。

SK 25 (第160・175図) F-D 10付近で検出した、東西3.8m×南北2.75m×深さ14cmの不整形楕円形を呈する土坑。外周に沿って小土坑を複数検出した。東辺近くの小土坑は、焼土・炭を多く含む硬化していた。

埋土から、須恵器甕と土師器甕(511)などの破片が少量と鉄製品(512)が出土した。511は器壁が薄く、外面の刷毛目は比較的細かい。512は断面が菱形に近い。剣先の可能性がある。

SK 26 (第160・175図) E-X 10で検出した、東西2.6m×南北2.2m×深さ11cmの不整形土坑。平面検出時に耳環が発見され、土坑中央に長辺30cmの礫が認められた。記録を取りながら慎重に掘削したが、埋土に変わったところはなく、他に特記すべき遺物も出土しなかった。耳環は、古墳からの流出品であろうか。

出土遺物は耳環1点(513)のみである。銅芯に金の薄板を貼っているようであるが、腐食が進み、全体的に黒くすんだ色調を呈している。

SK 29 (第175図) E-U 7で検出した、直径約0.8m×深さ18cmの楕円形を呈する土坑。

検出位置は5号墳周溝が途切れる石室開口部の西脇近くで、埋土には焼土・炭を多く含む、掘形は被熱硬化していた。

埋土から、須恵器高杯・甕(514)、土師器小片などが少量出土した。514は猿投窯系で、体部外面の平行叩き痕は幅が広く、内面に当具痕は認められない。頸部の傾きや口縁部の縁帯はNN 268号窯出土品に類似する。

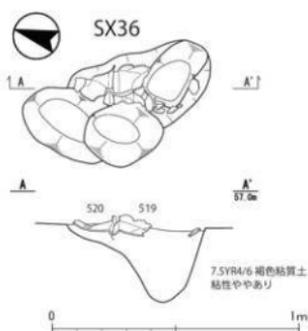
SK 30 (第175図) E-X 9で検出した、東西2.3m×南北2.3m×深さ17cmの不整形土坑。完掘状況から本来は2つの遺構と考えられる。

埋土から、須恵器甕(515・516)破片が2個体分出土した。いずれも猿投窯系である。515は短頸の甕で、壺と呼んだほうが良いかもしれない。焼成はやや甘く、灰白色を呈する。肩部には沈線が二条施され、体部外面には平行叩き痕、内部にはヨコナゲが認められる。516は大型の甕で、頸部に櫛形点文と沈線が施され、体部外面には平行叩き痕、内面には細同心円当具痕が認められる。口縁部を欠くが、近接するSK 31出土品(517)と色調・胎土・焼成などが酷似していることから同一個体と考えられる。

SK 31 (第175図) E-W 9で検出した、長辺1.7m×短辺1.1m×深さ12cmの不整形土坑。

埋土から、須恵器甕(517)の小片が3点出土した。517は沈線と櫛形波状文が施された口縁部片で、近接するSK 30出土品(516)と同一個体と考えられる。

SK 36 (第161・175図) F-G 12の10号墳周溝脇で検出した、長辺約0.6m×短辺約0.35m×深さ10cmほどの土坑。木根によって大きく攪乱を受けているが、2個体の土師器甕(519・520)が口を合わせた横倒しの状態で確認されたため、土器棺墓と考えた。そのほか、埋土から須恵器高杯(518)が出土した。519は口縁部が若干受口状を呈する薄手の甕で体部の形状は不明だが、520は単純な口縁部で体部は球形に近い。518は猿投窯系の無蓋高杯で、杯部の形状は台付碗と類似するが、脚部の付け根は細い。腰部外面に二重沈線が施される杯部の形状は、H-16号窯に類品がある。



第161図 SX36・SF87・SK123・SK209・SK234遺構図 (1:50, 1:20)

S F 45 (第57・58図) E-T11で検出した、長辺0.4m×短辺0.27m×深さ3cmの浅い土坑。重複するSH32よりも新しい遺構として調査したが、SH32の竈の残欠の可能性もある。埋土には焼土・炭を多く含み、底面には焼土塊が認められた。土坑内の小さな窪みの掘形が被熱して赤変しており、埋土には黒色粘質土粒や焼土を多く含んでいた。S F 45自体の東辺も軽く被熱し地山が赤変している。

埋土から、土師器甕の小片が5点出土した。

S K 57 (第60・175図) E-U14付近で検出した、東西3.4m以上×南北2.15m以上×深さ9cmの土坑。調査時は竈穴建物である可能性を考えていたが、竈・壁周溝・主柱穴が検出されないうえに、北辺の立ち上がりも認められないことから、竈穴建物ではないと判断した。

埋土から、須恵器の壺瓶類の台部(521)と土師器甕(522)が出土した。522は器壁の風化が著しい。

S K 63 (= S K 1055) (第175図) E-S18で検出した遺構。第5次調査のS K 1055と同一遺構であり、遺構の詳細については既刊報告書を参照されたいが、完掘状況を見ると、竈穴建物だけでなく複数の小土坑を同時に掘削してしまったようである。

埋土から、土師器甕、須恵器杯H蓋(523)・高杯(524)・壺瓶類の破片が少量出土した。523は小片のため、図示した復元口径は信頼度が低い。524は無蓋高杯の杯部で、焼成不良品であるため産地同定しにくい。狼投窯系ではない。

S X 67 (第64・65・175図) E-X17・18のSH62竈焼口脇から土師器長胴甕(526)が横倒し状態で出土した。周辺から、土師器小型甕(525)や須恵器杯の小片が出土した。526は内外面の刷毛目が比較的細かく、外面には煤、内面にはおこげとみられる黒色炭化物が付着している。

S K 72 (第176図) E-X19・20で検出した、長辺1.23m×短辺1.08m×深さ30cmの隅丸方形土坑。重複する遺構の新田関係はSH70→E-X19pit1→S K 72である(第68図)。

埋土から、須恵器無台杯(527~529)・甕、土師器甕が出土した。527・528は、在地窯系の無台杯ととして図化したが、杯H蓋との識別に悩む器形である。529は狼投窯系である。

S D 85 (第176図) H-G6付近で検出した、幅1.0m×深さ20cmほどの溝。調査後の図面ではL字形を呈しているが、検出時には西側のN-30°-Wの方位性をもつ溝とは別遺構と認識していた。

埋土から、須恵器高杯(530)と土師器甕片が出土した。530は外面に縦方向の沈線が2条認められる脚部で、狼投窯系かとみられる。

S F 87 (第161・176図) F-H11で検出した、長辺1.25m×短辺0.73m×深さ17cmの楕円形土坑。掘形は被熱赤変しており、内部には上部構造物が落ち込んだような大量の焼土塊が認められた。埋土には焼土・炭が多く含まれる。掘形の被熱具合は北側で著しい。

埋土から、須恵器杯H身(532)・杯H蓋(533)、土師器甕(534)、砂岩製砥石(535)が出土した。532は狼投窯系のほぼ完形品で、最大径や器高の割には口縁部の立ち上がりは低く、受け部下の段は沈線化している。H-44号窯よりもH-15号窯出土品に類する。533は在地窯系の小片である。534は内外面に刷毛目が施される土師器甕で、口径が器高よりも大きいため、鍋としてもよい。

S X 91 (第176図) F-J12で検出した、南北1.2m×東西0.47m×深さ11cmの不整形土坑。土坑北寄りの床面直上で須恵器平瓶(536)1点が正位置で出土した(写真図版72)。口縁部を欠いているのは、表土除去時に破損したためであるが、部分的には古そうな破面もあるため、もともと一部欠損していたと思われる。平面的にS B 153と重複する関係にあるが、S B 153に伴う可能性も含めて新田関係は不明である。

536は、湖西窯かとみられ、体部上面には円形浮文が2個施されていた。

S K 93 (第176図) F-N21で検出した、1.15m×0.85mの楕円形土坑。

埋土から、須恵器杯B(531)や土師器甕片が出土した。531は狼投窯系とみられ、外へ踏ん張る形の高台は、S-78号窯出土品に類似がある。

S K 96 (第176図) F-N21付近で検出した東西4.5m×南北4.35m×深さ13cmの不整形土坑。単なる自然地形の落ち込みかもしれない。

埋土から、土師器甕(537・538)や須恵器杯H身、

製塩土器(539)などが出土した。537は口縁部が受口状を呈する甕で、538は頭部の締まりが弱い大型品である。539は、知多式製塩土器の針状化した脚部である。

SK 108 (第176図) F-H 24で検出した土坑で、根攪乱の可能性はある。

埋土から、須恵器壺瓶類(540)の体部片のみ出土した。猿投窯系の平瓶かとみられる。

SK 109 (第176図) F-R 23で検出した、東西2.35m×南北1.0m×深さ15cmの不整形土坑。SK 110よりも新しい。

埋土から、須恵器壺瓶類(541)・甕、土師器甕などが出土した。541は、天井部を閉塞した手づくね円盤の中央に頭部の穴があけられた破片で、長頸瓶とみられる。

SK 110 (第162・176図) F-Q・R 23で検出した、東西4.4m×南北3.7m×深さ22cmの浅い円形土坑。調査時には堅穴建物である可能性を考えていたが、竈・壁周溝・支柱穴が検出されないうえに、壁の立ち上がりも認められないことから、堅穴建物ではないと判断した。SK 109よりも古い。

埋土から、須恵器杯蓋b(542)・杯B(543)・皿?(546)・高杯(544)・横瓶(545)、土師器甕(547~550)、土鍾など、比較的多くの遺物が出土した。542・543は猿投窯系とみられ、544~546は在地窯系である。544と546は胎土や色調が酷似しており、同一個体であれば台杯皿になる。545は、外面に擬斜格子叩き、内面に同心円文当具痕が認められる。547~550は、いずれも小破片である。

SK 111 (第162・177図) F-R 25で検出した、東西5.35m以上×南北3.8m以上×深さ35cmの浅い円形土坑。当初は堅穴建物の可能性も考慮していたが、平面形状が不自然で竈・壁周溝・支柱穴も検出されなかったことから、堅穴建物ではないと判断した。埋土上層にあたる第1層には、炭・焼土が多量に含まれており、比較的多くの遺物が出土した。北辺から東辺にかけて認められた第5層は、古い別遺構の可能性はある。

埋土から、須恵器杯H蓋(559)・杯H身(560)・無台杯(561)・杯B(562)・杯蓋b・高杯・長頸壺(563)・平瓶・甕(564)、土師器甕(565~567)・鍋

もしくは甌(568・569)、土鍾(570)、幡羽口、金属滓・鉄塊系遺物(分析№22)など、比較的多くの遺物が出土した。在地窯系の559・560は小型化が著しい。561~564は猿投窯系とみられ、杯類は1-17号室やS-78号室の出土品に類品がある。

SD 113 (第176図) H-O 2付近で長さ19.0mにわたって検出した溝。SB 169・170とSB 177の間に位置する東半は、幅1.25m×深さ22cmでほぼ一定しているが、溝の西半は幅1.05mと狭く、底面には凹凸が認められる。重複関係にあるSK 114・SK 115・SD 117よりも新しい。東半部分はSB 169・170・177の桁行と平行するため、同時存在の可能性はある。

埋土から、須恵器蓋杯(551~553)・高杯・横瓶・甕・不明品(554)、土師器甕(555)・杯などが出土した。551は杯蓋g、553は杯蓋bで、いずれも在地窯系、552は猿投窯系である。554は大型品の底部で、調整が雑な内面には粘土紐巻き上げ痕が残る。555は頭部が緩やかに折れる。

SK 114 (第176図) H-L 1で検出した、東西2.2m×南北1.3以上×深さ32cmの不整形土坑。SD 113よりも古い。

埋土から、須恵器杯蓋(556~558)・無台杯・高杯・甕、土師器甕などが出土した。556は在地窯系、557は美濃須賀窯産の可能性があり、558は猿投窯系である。558は、外面のロクロケズリの範囲が非常に広く、口縁の屈曲部に及んでいる。

SK 115 (第177図) H-O 1で検出した、長径3.7m×短径2.3m×深さ38cmの略楕円形土坑。SD 113・SB 170よりも古い。

埋土から、須恵器杯H身・杯蓋g(571)・無台杯(572~574)・高杯(575)・壺(576)・瓶(577)・横瓶(578)・甕、土師器甕(579~582)、製塩土器(583)など、比較的多くの遺物が出土した。図化した須恵器は、いずれも在地窯系とみられる。572~574は、杯H蓋との識別に悩む器形であるが、杯H身が僅か1点しかないので、無台杯とした。576は肩部と体部に櫛描波状文が施されている。579の口縁部は、やや受口状を呈する。583は、知多式製塩土器の針状化した脚部である。

SK 123 (第161・177図) F-N・O 23で検出し

た、東西1.25m以上×南北1.4m以上×深さ12cmの不整形土坑。埋土は炭層と焼土層からなるが、地山に被熱した痕跡はない。重複関係にあるSH107・SD103よりも新しい。

埋土から、土師器甕(584)が出土した

SK128(第90・178図) H-O・P6で検出した、東西3.5m×南北2.4m(検出時)×深さ27cmの土坑。北辺近くの底面は溝状に窪む。SH127よりも古い。

埋土から、須恵器杯B(585・586)・甕、土師器杯・甕などが出土した。585・586はいずれも猿投窯系で、高台の貼り付け位置や形状はNN288号窯出土品に類似する。

SK129(第178図) E-Y10・11で検出した、東西3.3m×南北3.75m×深さ22cmの不整形土坑。当初の平面検出時には見落としていた遺構で、3号墳周溝との新旧関係は解明できなかった。

埋土から、須恵器壺(587・588)・横瓶(589)・甕などが出土した。図示した3点はいずれも猿投窯系とみられるが、587・588は胎土が非常に粗い。589は口縁部の縁帯の下に三角突帯が巡る。このような口縁部形状の瓶類は、H-44号窯やH-15号窯から出土している。

SX130(第163・178図) F-D7・8で検出した、長径2.3m×短径0.77m×深さ29cmの隅丸長方形土坑。埋土には直径20cm程度から長辺40cmほどの多くの円礫が含まれており、南端で土師器椀2点(590・591)が出土した。土師器椀は、591が床面直上に伏せた状態で、590は、その上に少し被さるような正位置で検出された。

590・591は、ほぼ同形同大であるが、590は底部外面に木葉痕、体部には粘土紐巻き上げ痕が認められる粗製品で、591は器表面を平滑に仕上げた精製品である。

SK135(第178図) F-E10・11で検出した、東西1.6m×南北1.95m以上×深さ18cmの不整形土坑。当初の検出時には見落としていた遺構で、10号墳周溝との新旧関係は確認できていない。

埋土から、須恵器小型壺(592)が1点のみ出土した。592は猿投窯系で、尖り気味の肩部外面には沈線が1条、口縁部内側には薄い段が認められる。

SK136(第178図) F-F10で検出した、東西2.8m×南北2.8m×深さ15cmの不整形土坑。検出時に10号墳周溝とは別遺構と認識しており、平面的重複関係を精査したが明らかにできなかった。検出時の所見を重視して、10号墳周溝とは別遺構としたが、SK135とともに周溝埋設過程の早い段階に形成された一時的な自然流路の痕跡ではないかとも思われる。

埋土から、須恵器杯、土師器長胴甕(593)が少量出土した。

SK137(第163図) E-Y7~9で検出した南北方向の長大な土坑。平面形は長辺8.9m×短辺1.5~2.5m、深さは北壁寄りが高く、最大で40cmほどある。埋土と地山との区別が付きにくく、先に4号墳周溝を掘削してしまっただけで存在を認識したため、重複部分の土層断面で確認できていないが、おそらく4号墳周溝のほうが新しいと思われる。

出土遺物はないが、北側が幅広く南側が狭まる形状や平坦な床面、壁の立ち上がり具合や規模など、古墳の石室掘形に類似しており、興味深い。

SK203(第99・178図) F-J2で検出した、東西2.6m以上×南北2.85m以上×深さ9cmの不整形土坑。SH204よりも新しい。

埋土から、須恵器杯H・無台杯(595)・杯B(596)・甕、土師器甕などが出土した。595・596はいずれも猿投窯系で、類型はNN288号窯から出土している。

SK206(第101・178図) D-G23・24で検出した、直径約1.4m×深さ8cmの不整形土坑。

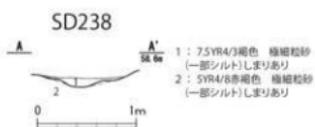
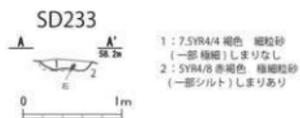
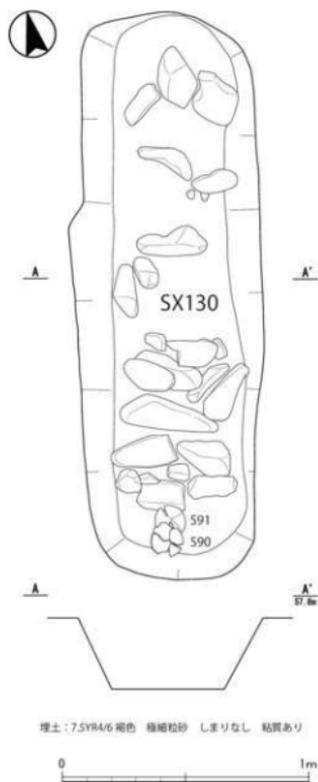
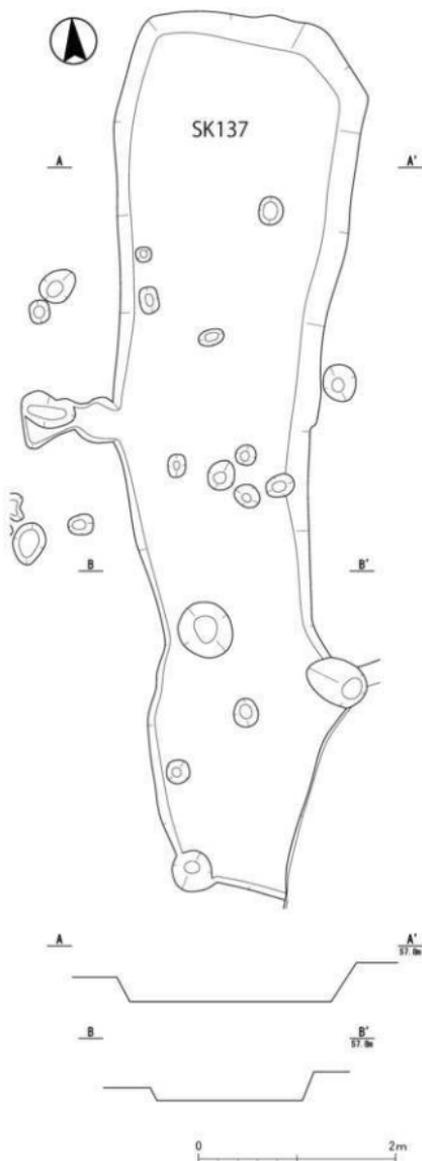
埋土から、土師器甕(594)、須恵器片が出土した。

SK207(第178図) D-C23で検出した、東西2.45m×南北1.7m×深さ13cmの不整形土坑。平面形から複数土坑の集合とみられる。

埋土から、須恵器高杯(597)・甕、土師器甕などが出土した。597は上部の形状は不明だが、一応高杯と考えた。

SK208(第101・178図) D-G23・24で検出した、長径2.5m×短径1.2m×深さ12cmの不整形土坑。SH205よりも古い。

埋土から、須恵器杯蓋b(598)・高杯(599)・甕、土師器片などが出土した。598は猿投窯系とみられ、口縁部端の折り返しは僅かである。599も猿投窯系



第163図 SX130・SK137・SD233・SD238遺構図 (1:50, 1:20)

で、中央付近に二重沈線のある脚部。

SK209 (第161図) D-E23で検出した、東西1.9m×南北2.0m×深さ19cmの不整形土坑。重複するSB301柱穴との関係は、平面検出時の所見ではSB301よりも古い。土層断面図では新しいと認識されており、記録に混乱がある。

埋土から、須恵器杯H身と土師器甕が少量出土したが、いずれも小片である。

SK211 (第178図) F-F1・2で検出した不整形の浅い落ち込み。検出時の規模は東西2.2m×南北1.8mで、埋土がSB305の桁行間柱を覆っていると判断していたが、掘り下げたところ明瞭な輪郭は認められなかった。

埋土から、須恵器杯片と土師器甕(600)が出土した。600は、頸部の折れが緩やかで、口縁部は単純な形である。

SK228 (第111・178図) F-K10付近で検出した、東西4.8m×南北3.75m、深さ13cmの不整形円形土坑。SH225よりも古い。

埋土から、須恵器杯H蓋・杯H身(601・602)・横瓶(603)・甕、土師器甕(604)などが出土した。図示した須恵器はいずれも在地窯系で、603は美濃須恵窯産の可能性ある。

SK230 (第178図) F-K8で検出した、長径1.7×短径1.0m×深さ1cmの不整形円形土坑。

埋土から、土師器甕・高杯(605)が少量出土した。605は器面が著しく風化しているため判りにくいが、脚部を面取りしているように見える。

SD233 (第163・178図) D-I21・22で長さ5.9m分を検出した、幅0.55m×深さ12cmの溝。SH201周溝よりも新しい。4mほど北側のSH235の南西辺と平行する。

埋土から、須恵器杯H身・ミニチュア品(606)・甕、土師器甕が少量出土した。606は猿投窯系で、小型長頸瓶の底部であろう。

SK234 (第161・178図) D-F22付近で検出した、東西2.95m×南北3.25m×深さ17cmの不整形土坑。埋土は、暗褐色粘質土に地山類似土塊が混じる。

埋土から、須恵器杯H・杯蓋b(607)、土師器甕片などが少量出土した。607は猿投窯系で、残存部外

面にロクロケズリは認められず、陣笠形を呈する。胎土や色調は、岡山1・2号窯出土品に似る。

SD238 (第163図) C-T17からD-D20にかけて長さ37m分を検出した、幅1m前後×深さ10cmの溝。SB312・319よりも新しい。埋土は、褐色粘質土である。

埋土から、土師器や須恵器杯蓋b・甕などの小片が少量出土した。

SK291 (第178図) C-V23・24で検出した、東西6.0m×南北5.1m×深さ4cmの浅い不整形土坑。

埋土から、須恵器杯蓋b(608)・甕、土師器甕(609)などが出土した。608は猿投窯系で、陣笠形を呈する。

SK292 (第178図) D-B22で検出した、東西2.8m×南北2.3m×深さ19cmの不整形土坑。

埋土から、須恵器杯H蓋・杯H身(610)・甕、土師器甕(611)などが出土した。610は在地窯系である。

4 遺構外出土遺物

建物として跡まらない小土坑(ピット)や、包含層・表土などから出土した遺物である。同一ピットで複数遺物が提示できたものについては小土坑ごとに並べた。

C-T25pit1 (第179図) 636は在地窯系須恵器の杯蓋b、637は杯Bである。637は焼成不良で、全体的に風化が著しく産地不明。口縁端部の残存も不確実である。底部は高台下端面よりも下がる。

C-U21pit3 (第179図) 638は須恵器杯蓋の擬宝珠状の鈕、639は杯蓋bの口縁部である。胎土や色調からみて、別個体である。

C-X22pit9 (第179図) 640・641は須恵器杯蓋bの口縁部である。どちらも猿投窯系であるが、別個体である。

C-X22pit11 (第179図) 642は焼成不良の須恵器杯蓋bの口縁部である。643は岡山窯産とみられる盤で、高盤もしくは無台盤と思われる。

C-X22pit14 (第179図) 644は岡山窯産とみられる須恵器の盤で、残存部に高台の接合痕は認められない。645は在地窯系の高杯脚部である。

C-Y23pit6 (第179図・写真版図71) 直径約50cm、

深さ34cmの略円形の土小坑。埋土から、2～10cmほどに割れた須恵器の破片が大量に出土した。破片は200片以上で、杯蓋b(646)と甕(647)のほか、図化していないが、647とは色調の異なる猿投窯系甕の体部がもう1個体ある。646は岡山窯産とみられる須恵器の杯蓋bで、擬宝珠状の鈕がつき、陣笠形を呈する。947は猿投窯系の甕で、頸部に文様が無く、口縁部には単純な形態の縁帯が巡る。類品はK-1号窯出土品などにみられる。

D-A18pit9 (第179図) 648は焼成不良の須恵器無台杯で、口縁部は直線的に大きく開く。649は土師器小型甕の小片で、器面は著しく風化している。

D-A18pit11 (第179図) 650は土師器小型甕の小片で、器面は著しく風化している。651は須恵器の陶甕。

D-B18pit5 (第179図) 652は在地窯系須恵器壺瓶類の台部。653は猿投窯系の無台杯で、底部の糸切痕の周囲には手持ちヘラケズリが施されている。

D-B20pit2 (第179図) 654はボタン状の鈕が付く須恵器杯蓋。655は岡山窯産とみられる無台杯で、底部と底部外周にはロクロケズリ調整が施されている。

D-C19pit3 (第179図) 658は小型の擬宝珠状の鈕がつく須恵器杯蓋で、659・660は猿投窯系かとみられる杯蓋Bである。陣笠形を呈する659の全体形状や、660の口縁端部の潰れ具合はI-19号窯やI-45号窯の製品と共通する。

D-D19pit2 (第179図) 656・657は須恵器の杯蓋bで、どちらも猿投窯系とみられる。

D-E18pit6 (第180図) 661は焼成不良の須恵器の口縁部で、盤と思われる。662は猿投窯系の瓶類の高台である。663は灰釉陶器の長頸瓶で、外面には自然釉か人工施釉が判別の難しい灰釉が認められる。9世紀のものであろう。

D-E19pit6 (第180図) 664・665は猿投窯系かとみられる杯蓋bである。陣笠形を呈する665の全体形状や、664の口縁端部の潰れ具合はN N 266号窯やK-11号窯の製品と共通する。

H-I5pit1 (第180図) 666は完形の猿投窯系須恵器杯蓋b、667は比較的残存状態の良い在地窯系の無台杯である。実測図では丁度良い組み合わせに見えるが、実際のところ、歪みの大きい667の口縁部は、蓋の内側にはおさまらない。666は全体形状が雨傘形

を呈し、鈕の付け根が細い。類品をI-17号窯出土品に見出すことができる。

その他pit (第180図) 668～705は須恵器である。668は擬宝珠状の鈕がつく杯蓋で、669～682は杯蓋b、683は杯H蓋、684～689は無台杯、690～695は杯B、696は深手の杯、697は盤Bである。698はおそらく高盤の脚部で、699は脚端部。700は凸面に自然釉が付着する把手で器種不明。701は長頸瓶の頸部、702は長頸壺の体部、703は壺の口縁部、704は短頸壺、705は壺底部である。

706～723は土師器である。706は皿、707は椀、708は杯B。709～711は高杯の脚部で、709と711の脚部外面には面取り、711の杯部接合面にはヘラ状工具による刻みのような線が認められる。712～720は甕で、714・715は小型甕である。721は甕の口縁部、722は頸部が一旦直立する形状にやや違和感はあるが、甕であろう。723は把手。

724・725は土鍾、726～728は知多式製塩土器である。729は須恵質の小玉で、孔はなく、山茶碗の窯で焼かれる陶丸とも異なる。強いて候補を挙げるなら、鈴の中身の丸であろうか。

730・731は鉄製品である。730は先の尖る棒状製品で、731はミニチュアの手柄である。

表土・包含層 (第181図) 732～759は須恵器である。732～739は杯蓋で、732は杯蓋g、734～739は杯蓋b。740～744は杯で、745～747は杯Bである。747は高台内にヘラ記号がある。748は糸切痕の樹で、底部外面に「寺」の墨書がある。749は壺瓶類の底部で、外面に刻書がある。750は大型の盤もしくは皿で、751は高杯の脚端部、752は長頸瓶の口縁部、753は甕の口縁部、754は瓶類底部。755は円面視で、756も円面視とみられるが別個体である。757は甕、758・759は甕の口縁部である。

760は土鍾。761は尾張系山茶碗の口縁部。762は弥生土器の甕の可能性がある。

763～768は土師器である。763は椀型高杯、764は杯、765～767は甕。768は把手である。接合面にヘラ状工具による刻み目があるため、体部に穴をあけて差し込む型式ではなく、体部外面に貼り付けている。

(水橋)

【註】

- 1) 第4・5次調査区境を跨ぐ2種を含む(第3次調査SH 27=第4次調査SH 1026、第3次調査SH 44=第5次調査SH 1085)。また、堅穴建物状遺構としたSH 236も1種として加算。
- 2) 第5次調査区境の2種を含む(第3次調査SB 174=第5次調査SB 1097、第3次調査SB 178=第5次調査SB 1104)。
- 3) 安間拓巳1995「古代の鍛冶炉—その形態及び鍛冶工程との関連について—」『古代学研究』42-2 考古学研究会。なお、2基の鍛冶炉の関係については、建物内に計画的に配されたような様相が認められることと、両者とも炉床の遺存状態が良いことからみて、同時に使用されていた可能性は高いと思われるが、それ以外の客観的な根拠はない。
- 4) 三重県埋蔵文化財センター2019『筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡(第4・5・7次)発掘調査報告』
- 5) 三重県考古跡調査事務所1985『史跡富宮跡—発掘調査概報—』(三重県考古跡調査事務所年報1984)

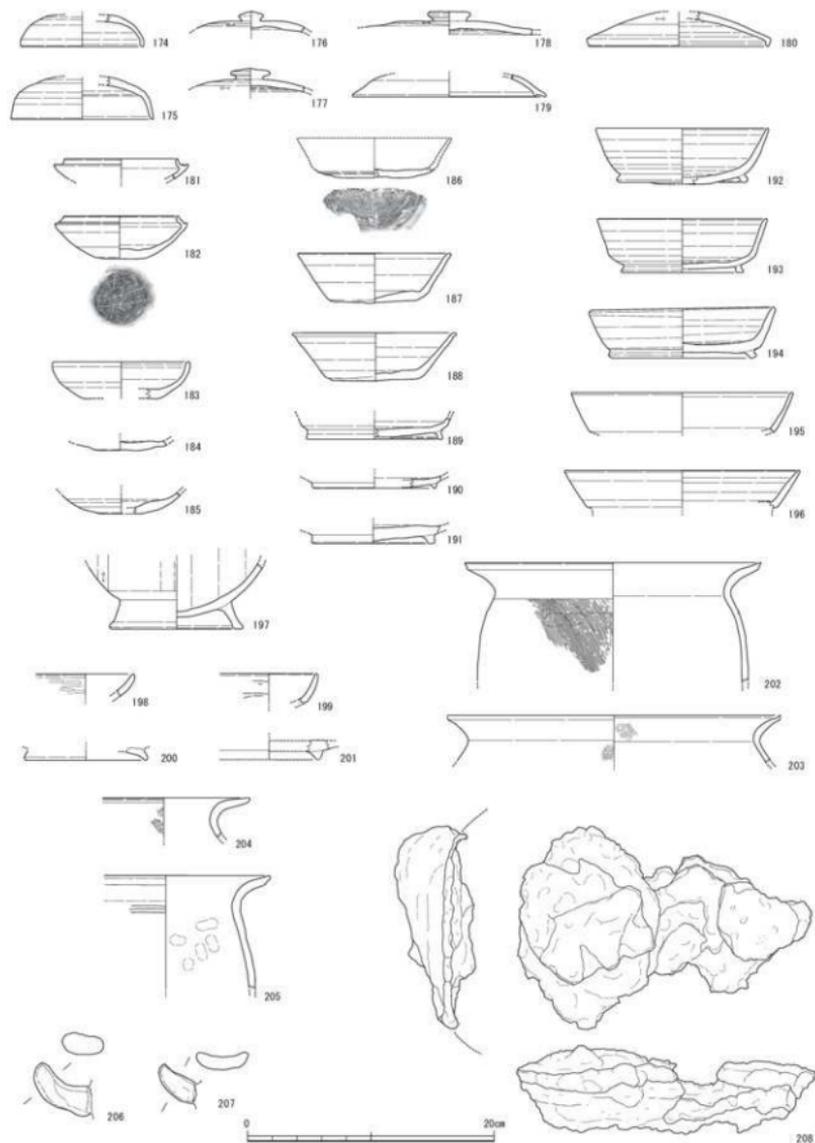
【類品出土窯】

- C-2号窯:愛知県教育委員会1983『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)(尾北地区・三河地区) 付・猿投窯の編年について』城ヶ谷和広2015「高藏寺第2号窯」『愛知県史』別編 窯業1 古代猿投窯 愛知県
- H-15号窯:尾野善裕1997「尾張・西三河(窯跡)猿投・尾北・その他」『古代の土器5-1 7世紀の土器(近畿東部・東海編)』古代の土器研究会
- H-16号窯:尾野善裕1997「尾張・西三河(窯跡)猿投・尾北・その他」『古代の土器5-1 7世紀の土器(近畿東部・東海編)』古代の土器研究会
- H-44号窯:名古屋市教育委員会1979『光真寺古窯跡発掘調査報告書』(名古屋市文化財調査報告Ⅶ)
- I-17号窯:愛知県教育委員会1980『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告(Ⅰ)』
- I-19号窯:日進町教育委員会1984『愛知県日進町株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書』
- I-45号窯:日進町教育委員会1984『愛知県日進町株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書』
- I-101号窯:尾野善裕1997「尾張・西三河(窯跡)猿投・尾北・その他」『古代の土器5-1 7世紀の土器(近畿東部・東海編)』古代の土器研究会
- K-1号窯:三好町教育委員会1988『愛知大学用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
- K-11号窯:三好町教育委員会1992『黒笹11号窯発掘調査報告書』(三好町立歴史民俗資料館文化財報告No.5)
- NN 266号窯:名古屋市教育委員会1994『鳴海地区須恵器窯跡発掘調査報告書』(名古屋市文化財調査報告25)
- NN 268号窯:名古屋市教育委員会1983『NN-268号古窯跡

発掘調査報告書』

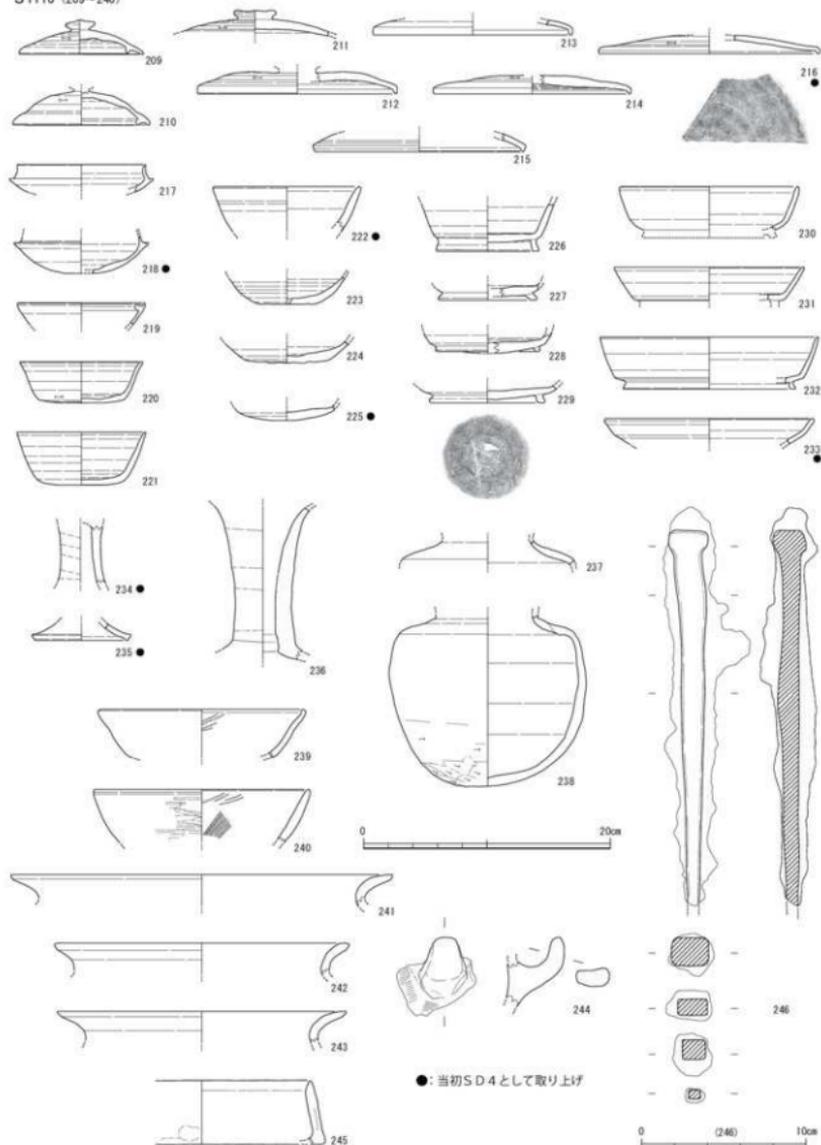
- NN 288号窯:名古屋市教育委員会1993『NN 288号窯・NN 289号窯発掘調査報告書』
- S-78号窯:愛知県建設部・小牧市教育委員会1979『桃花台ニュータウン遺跡調査報告Ⅱ』
- S-112号窯:小牧市教育委員会1994『愛知県小牧市大字野口地内 篠岡112号窯発掘調査報告書』
- 西ヶ谷2号窯:四日市市遺跡調査会1992『西ヶ谷古窯跡群』(四日市市遺跡調査会文化財調査報告Ⅷ)
- 岡山1・2号窯:四日市市教育委員会1966『東日野弥生住居址群 岡山古窯址第1号窯』(四日市市埋蔵文化財調査報告1)
- 一宮峠第2地点1号窯:静岡県企業庁・湖西市教育委員会1992『湖西一ノ宮工業団地内遺跡発掘調査報告書』(湖西市文化財調査報告第29集)

S H 2 (174~208)



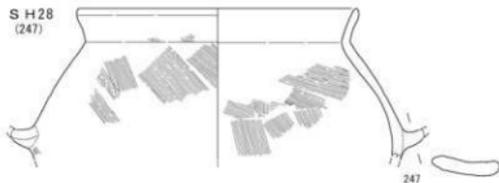
第164図 筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図1 (1:4)

SH10 (209~246)

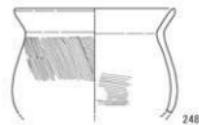


第165図 筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図2 (1:4、1:3)

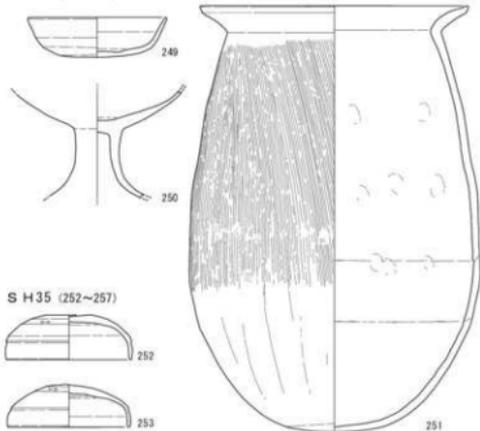
S H 28
(247)



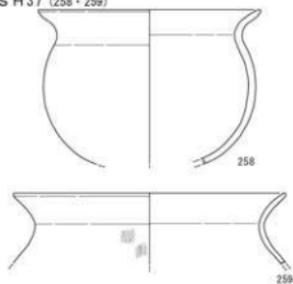
S H 32
(248)



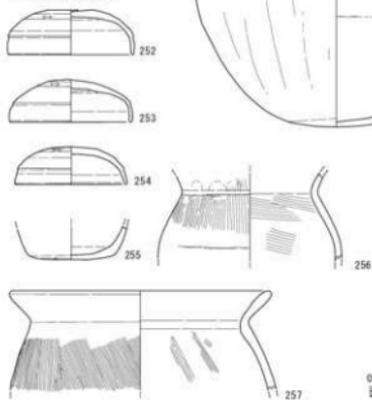
S H 34 (249~251)



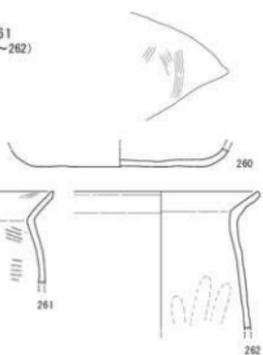
S H 37 (258~259)



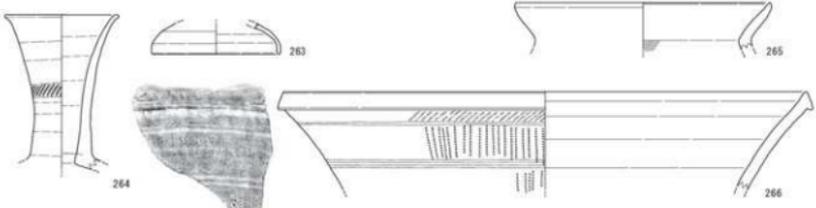
S H 35 (252~257)



S H 61
(260~262)

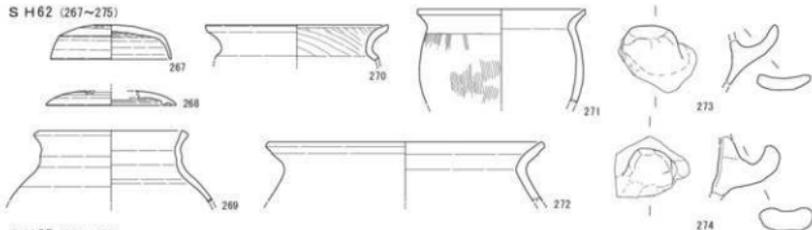


S H 54 (263~266)

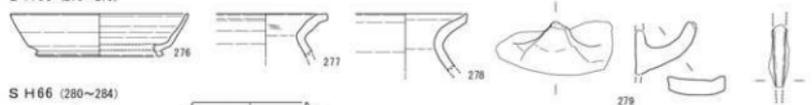


第166図 筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図3 (1:4)

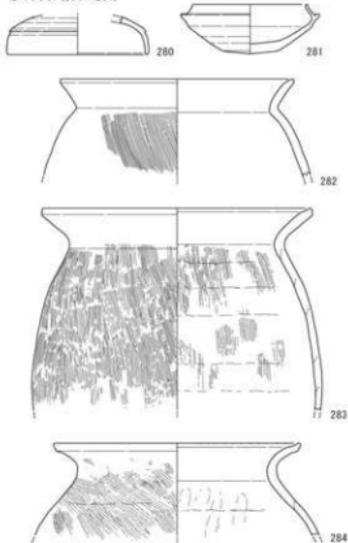
S H 62 (267~275)



S H 65 (276~279)



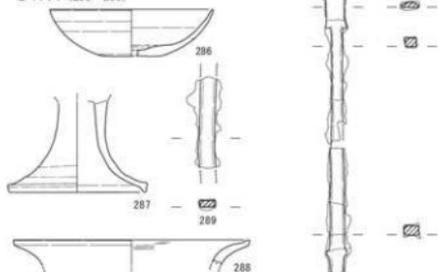
S H 66 (280~284)



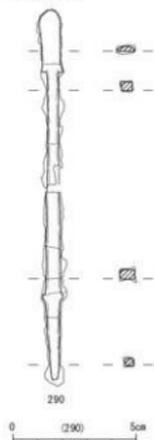
S H 71 (285)



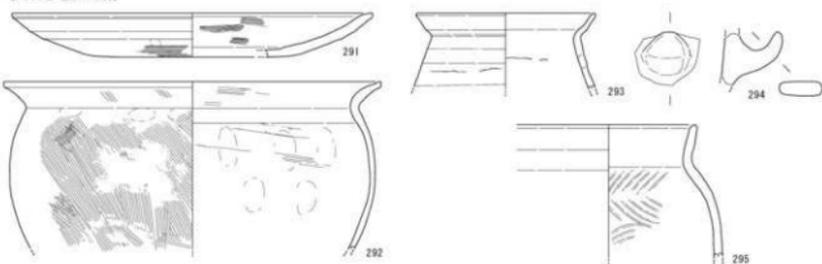
S H 74 (286~289)



S H 76 (290)

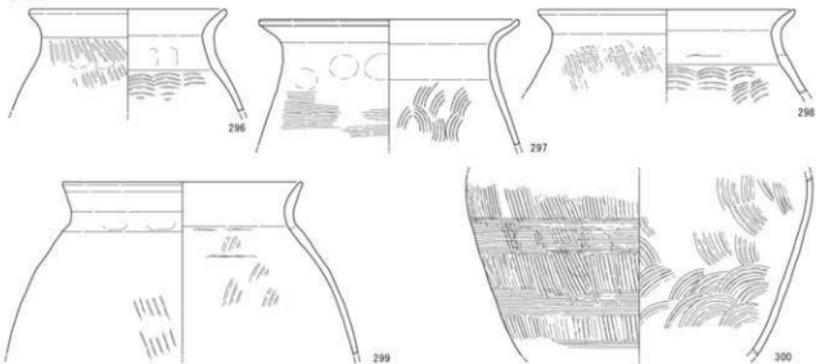


S H 78 (291~300)

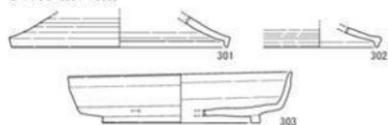


第167図 筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図4 (1:4、1:2)

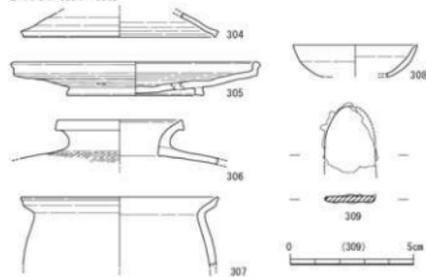
S H 78



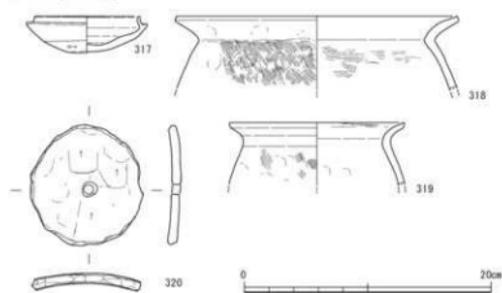
S H 80 (301~303)



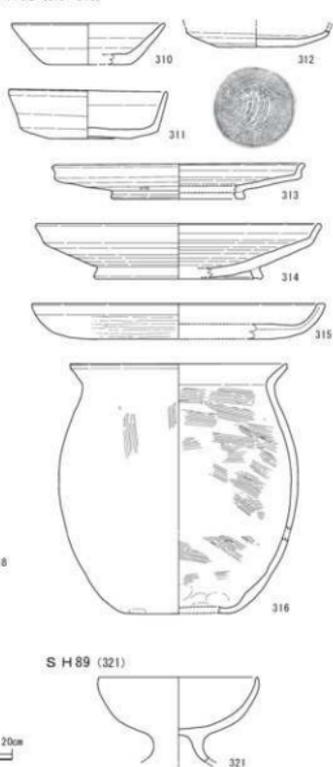
S H 81 (304~309)



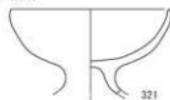
S H 84 (317~320)



S H 82 (310~316)

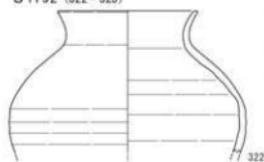


S H 89 (321)



第168図 筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図5 (1:4、1:2)

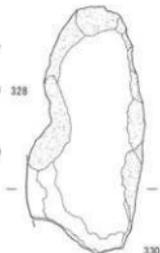
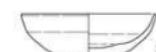
SH 92 (322・323)



SH 97 (324~326)



SH 100 (327~330)



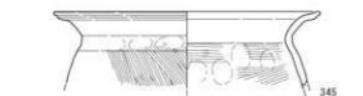
SH 106 (332~336)



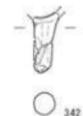
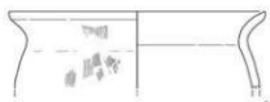
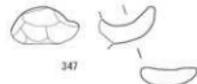
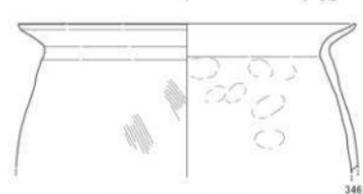
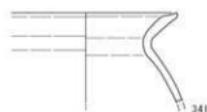
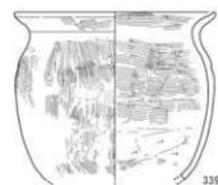
SH 105 (331)



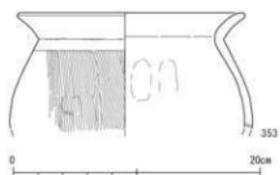
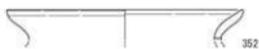
SH 118 (343~347)



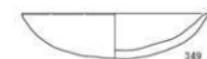
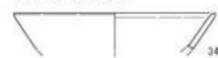
SH 107 (337~342)



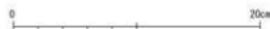
SH 120 (352・353)



SH 119 (348・349)

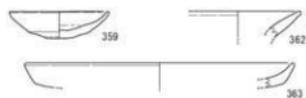
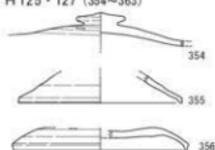


SH 121 (350・351)

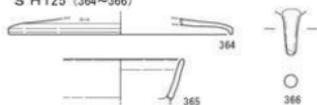


第169図 筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図6 (1:4)

SH 125・127 (354~363)



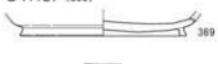
SH 125 (364~366)



SH 126 (367・368)



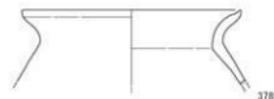
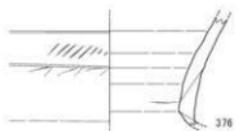
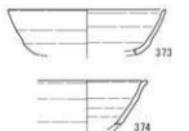
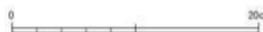
SH 127 (369)



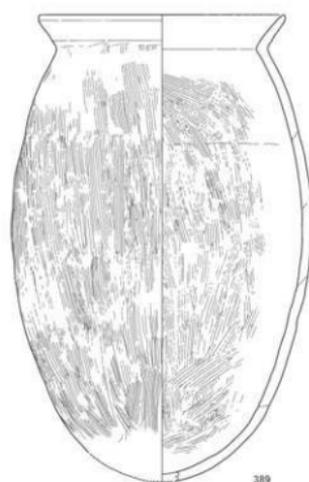
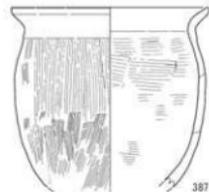
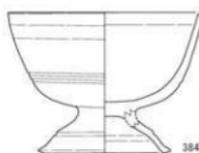
SH 131 (370・371)



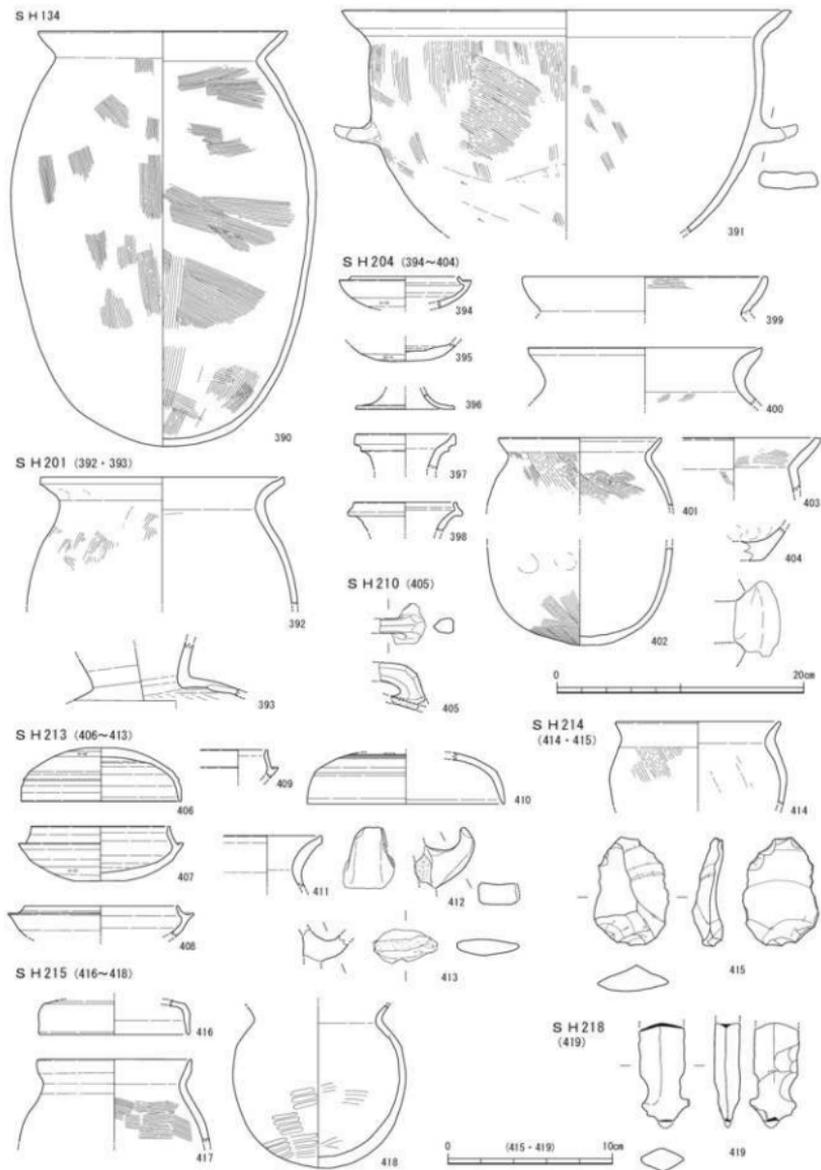
SH 132 (372~379)



SH 134 (380~391)

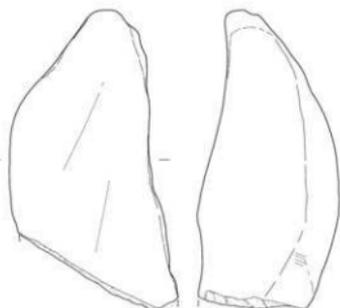
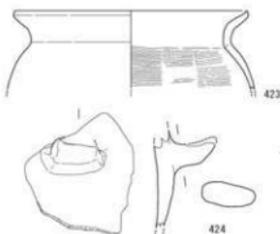
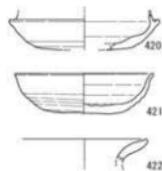


第170図 筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図7 (1:4)

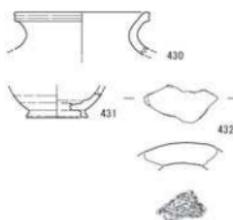
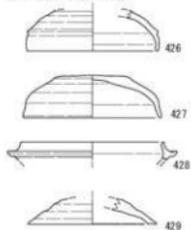


第171図 筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図8 (1:4、1:3)

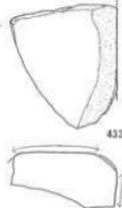
S H 219 (420~425)



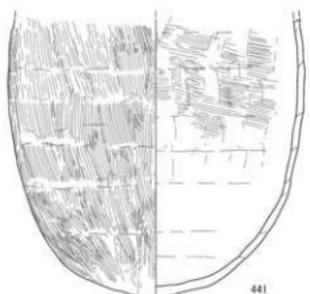
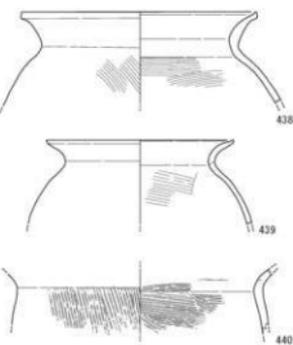
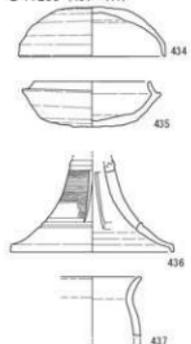
S H 225 (426~432)



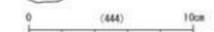
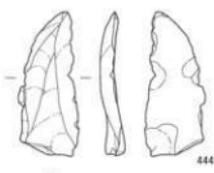
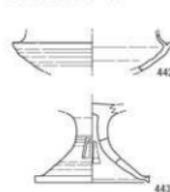
S H 226 (433)



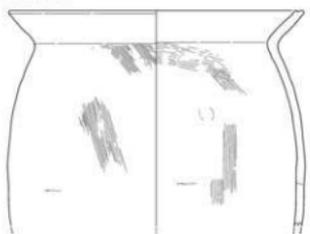
S H 235 (434~441)



S H 236 (442~444)



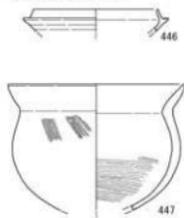
S H 258 (445)



445

第172図 筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図9 (1:4、1:3)

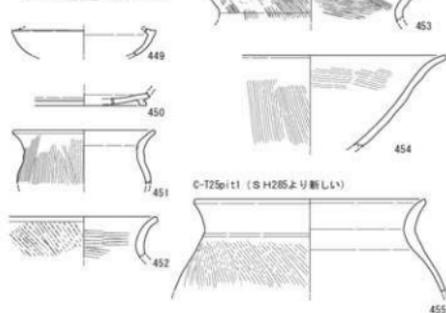
S H 260 (446~447)



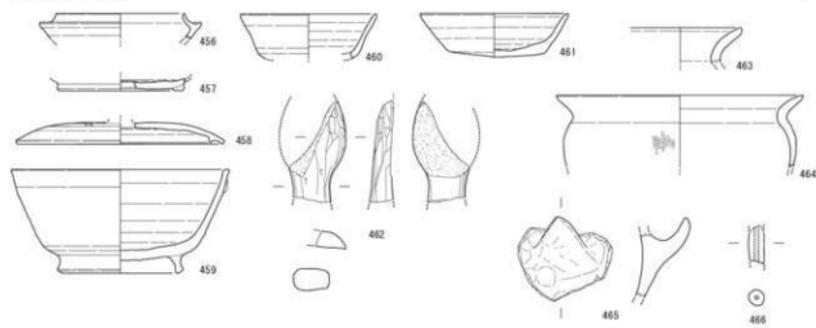
S H 267 (448)



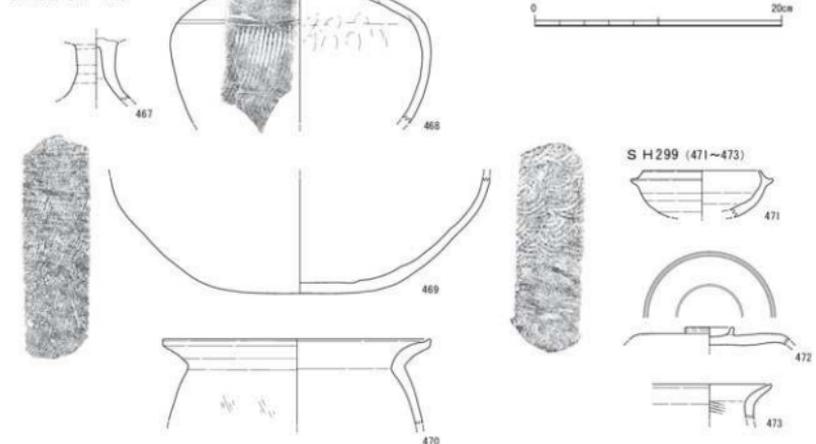
S H 285関連 (449~455)



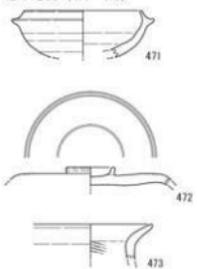
S H 296 (456~466)



S H 298 (467~470)

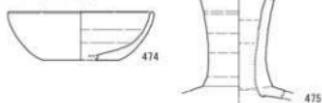


S H 299 (471~473)

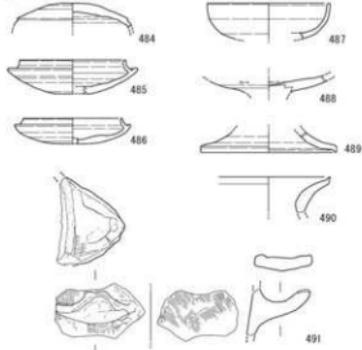


第173図 筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図10 (1:4)

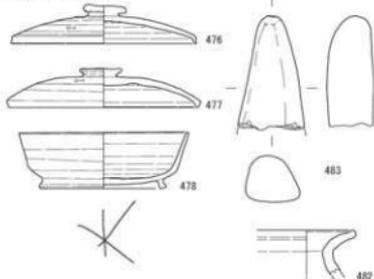
S K 1 (474・475)



S D 4 (484~491)



S K 3 (476~483)



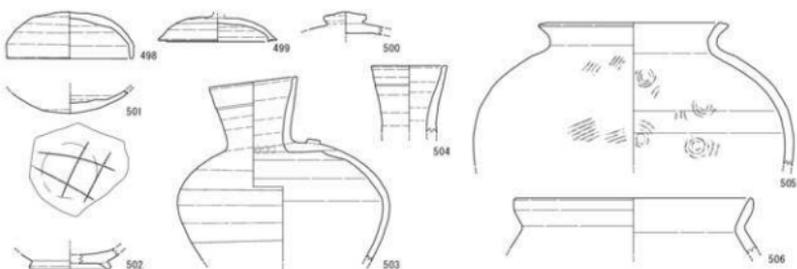
S Z 6 (492)



S Z 8 (493~497)



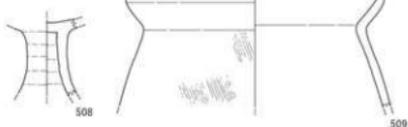
S D 21 (498~506)



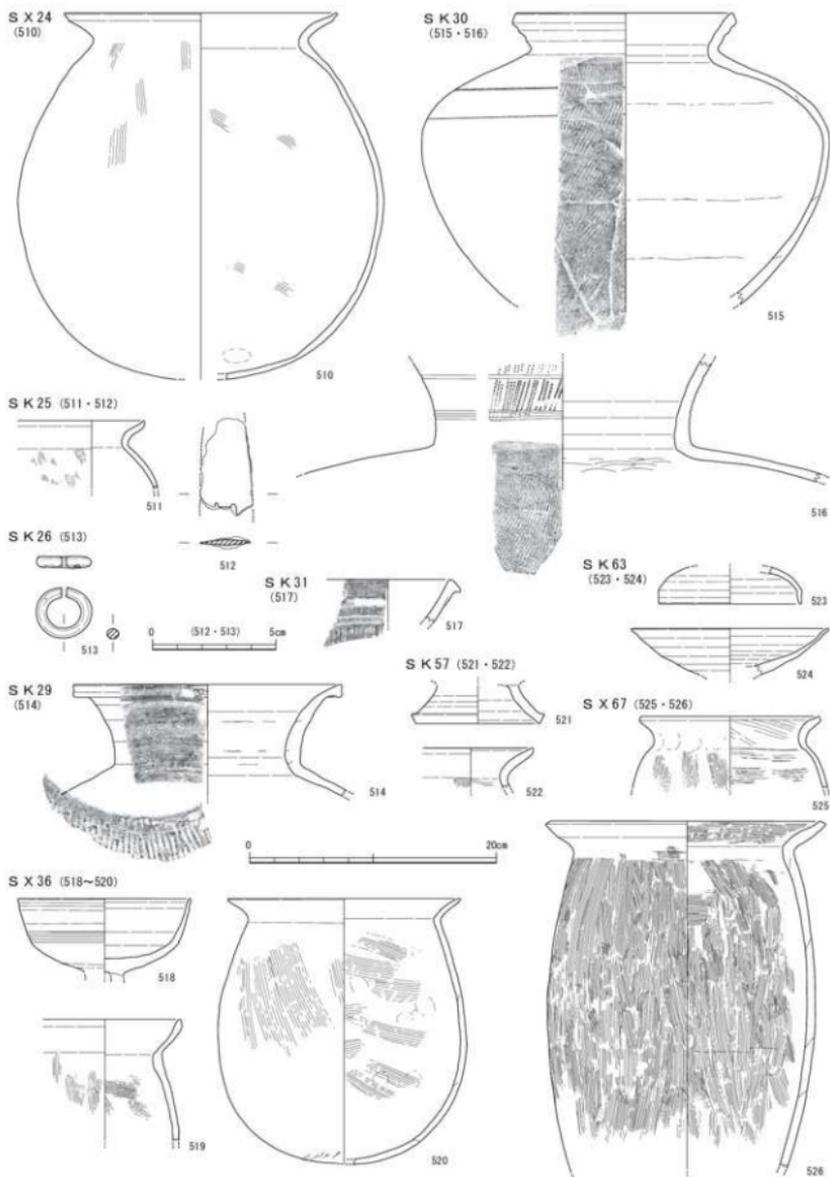
S K 22 (507)



S D 23 (508・509)

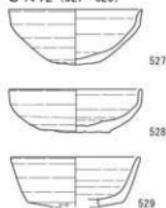


第174図 筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図11 (1:4)



第175図 筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図12 (1:4、1:2)

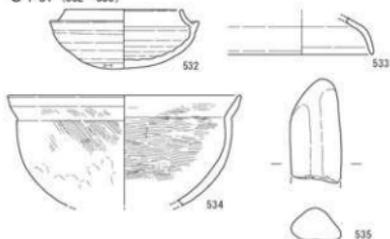
S K 72 (527~529)



S D 85 (530)



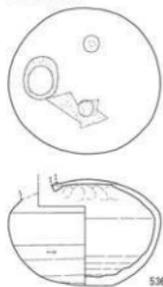
S F 87 (532~535)



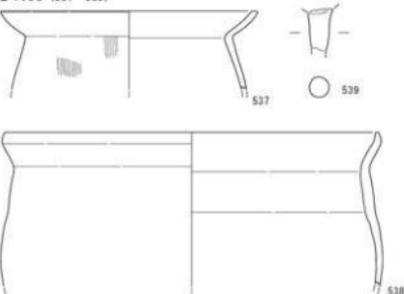
S K 93 (531)



S X 91 (536)



S K 96 (537~539)



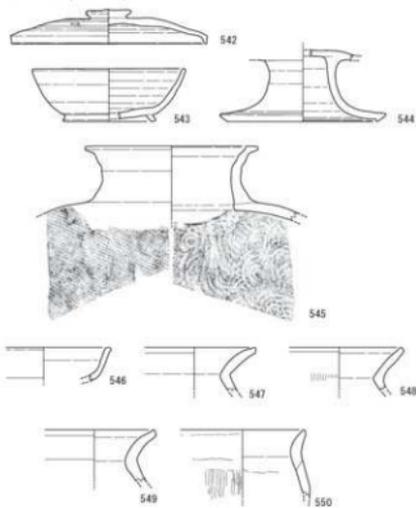
S K 108 (540)



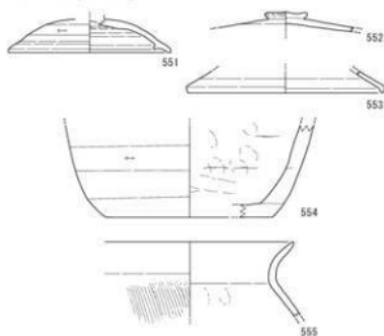
S K 109 (541)



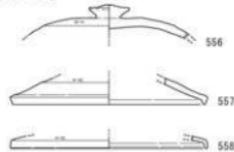
S K 110 (542~550)



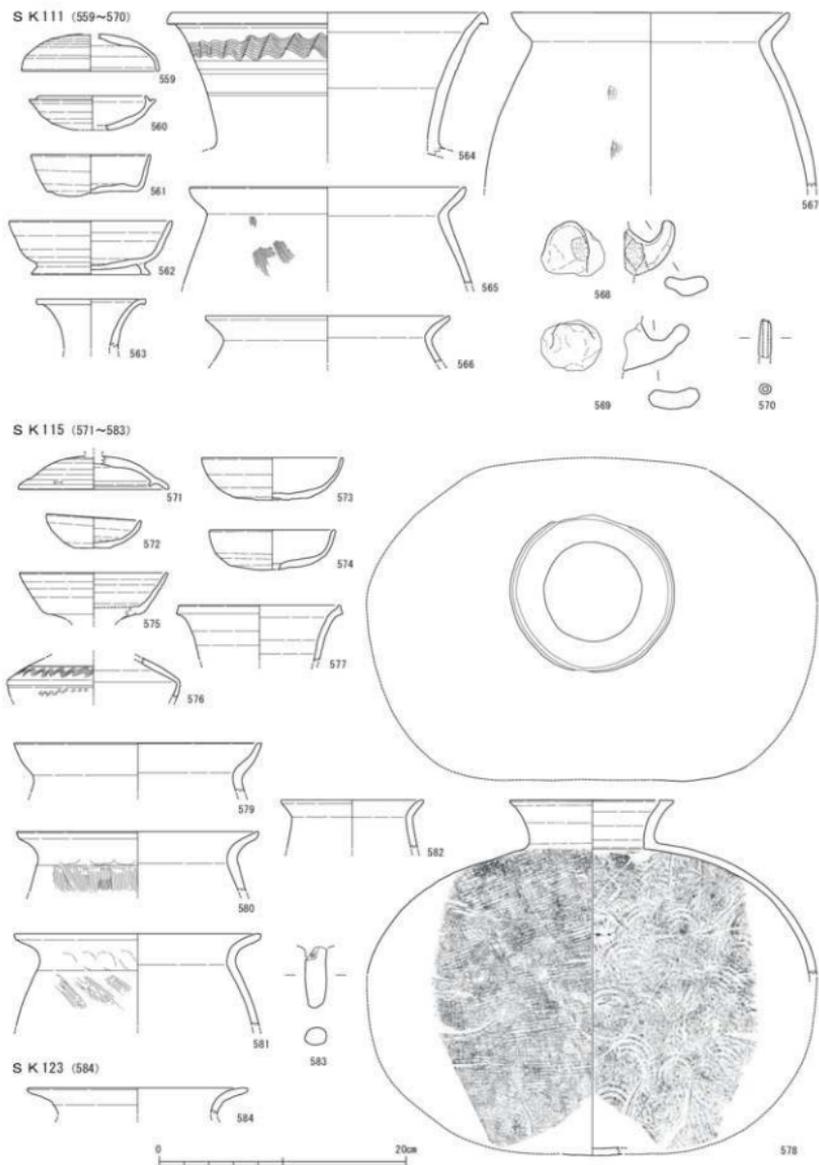
S D 113 (551~555)



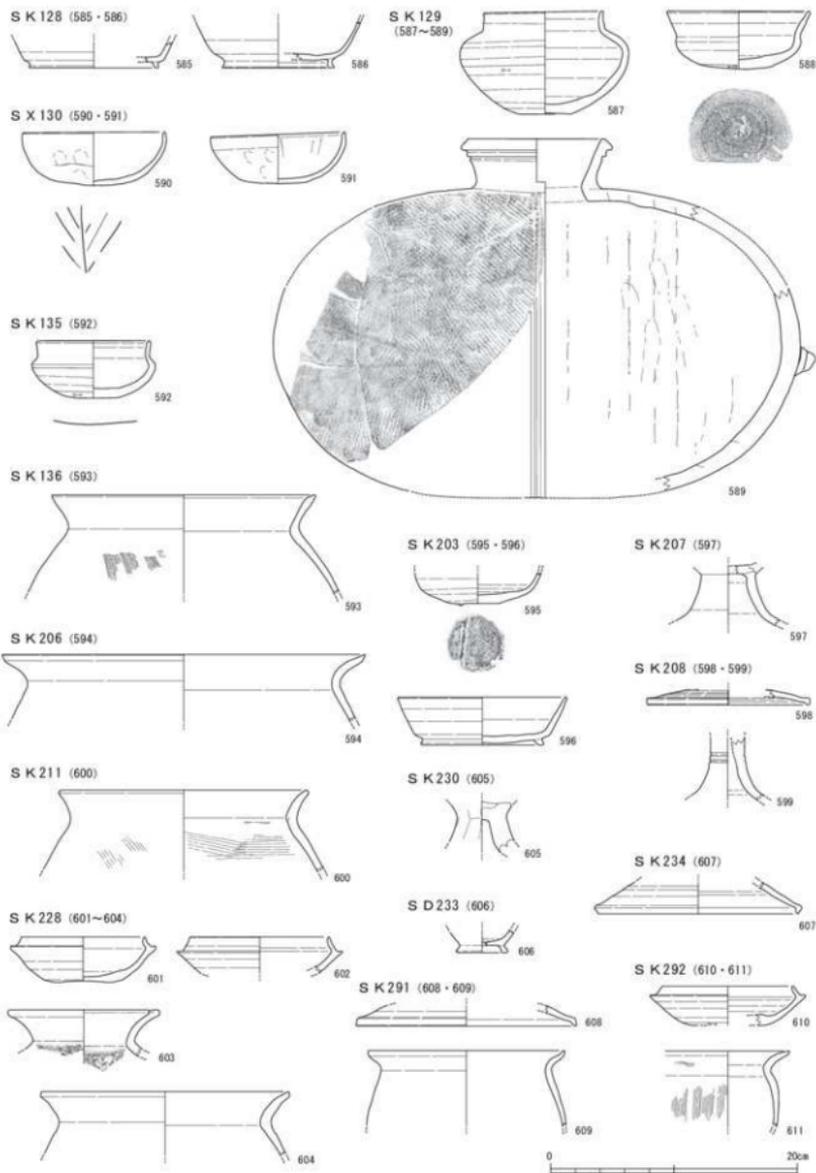
S K 114 (556~558)



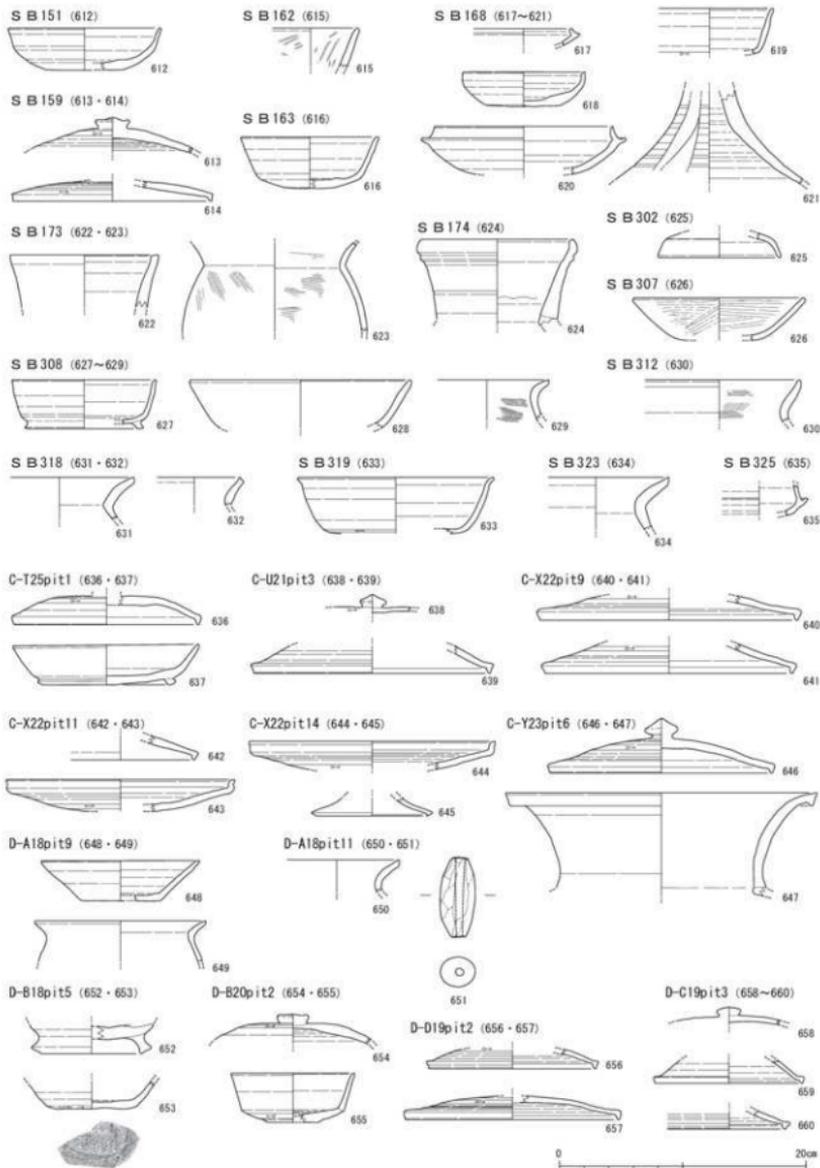
第176図 筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図13 (1:4)



第177図 筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図14 (1:4)

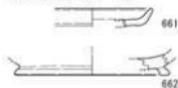


第178図 筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図15 (1 : 4)



第179図 筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図16 (1 : 4)

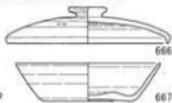
D-E19pit6 (661~663)



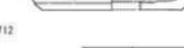
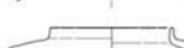
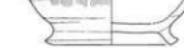
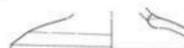
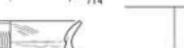
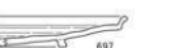
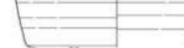
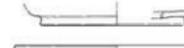
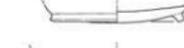
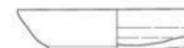
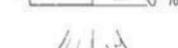
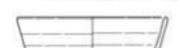
D-E19pit6 (664・665)



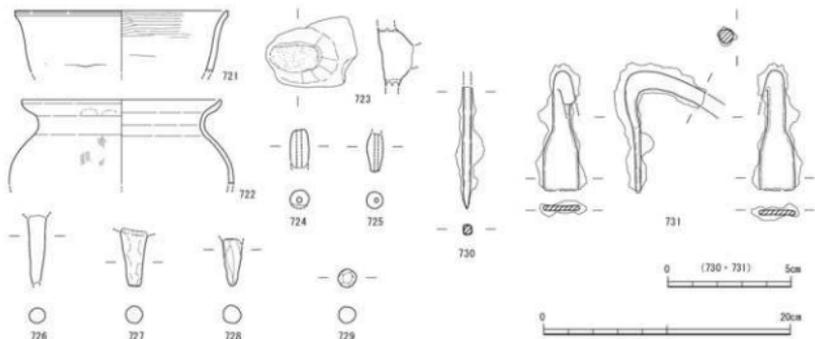
H-15pit1 (666・667)



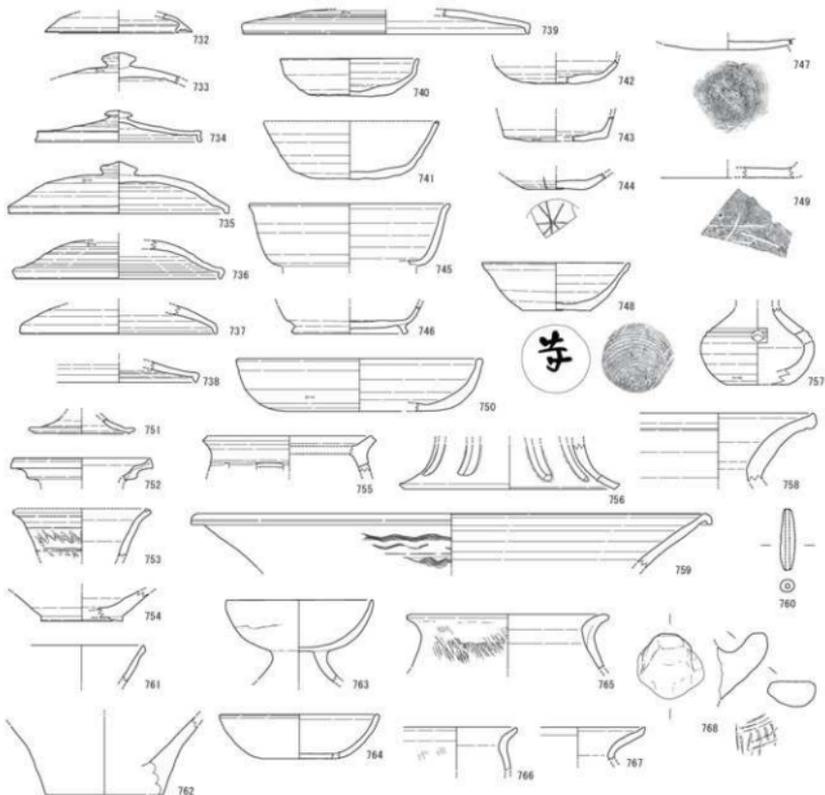
その他ピット (668~731)



第180図 筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図17 (1:4)



表土・包含層 (732~768)



第181図 筆ヶ崎西遺跡 出土遺物実測図18 (1:4、1:2)

第 1 表 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺構一覧表 (1/7)

遺構名	次数	主なブツ名	性格	時期(5分) 時代	規模			特記事項 (遺構の特徴や主な出土遺物など)	遺構 図記号	遺物 報告番号
					長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)			
1号墳	2	F-K17-18地	円墳	3期	直径約10	—	—	横穴式石室(縦石組立、傾斜) (室長2.1×最大幅1.1、室高1.0、室深1.9) 耳簀玉、土師器、埴輪高杯1点	9-12 +39	1-28
2号墳	2	F-K14地	円墳	2期	直径約13	—	—	横穴式石室(縦石組立、傾斜) (室長3.1×最大幅1.1、室高1.7×幅0.8) 埴輪長脚蓋・無蓋高杯1点	13-17 +39	29-45
3号墳	3	F-B10-11地	古墳	2期	直径約13	—	—	横穴式石室 (室長約4×幅1.2、奥壁一段遺跡の長8.1) 埴輪高杯・高杯、瓦輪陶器、埴輪口皿	18-20 +40	66-74
4号墳	3	F-B15-16地	古墳	3期	直径約13	—	—	横穴式石室 (室長5.2×最大幅1.1、室高1.3~) 耳簀玉、埴輪高杯・無蓋高杯・埴輪口	21-24 +41	77-90
5号墳	3	E-V5-6地	古墳	2期	直径約13	—	—	横穴式石室 (室長4.8×最大幅1.0、室高1.1~、室深1.9) 耳簀玉、埴輪高杯・高杯(付録)、高杯・埴輪口	25-28 +41	91-113
6号墳	3	E-U1-2地	古墳	1期	直径約15	—	—	横穴式石室 (室長4.3×最大幅1.3、室高約0.5×幅1.25) 耳簀玉、埴輪口、埴輪高杯・高杯(付録)、高杯・埴輪口	29-32 +42	114-140
7号墳	3-4	E-R4地	古墳	3期	—	—	—	既刊報告書にて報告済 第33次調査では墳頂周囲の一部のみ調査 埴輪高杯	34	141
8号墳	2	F-N15地	古墳	2-3期	不明	—	—	大半は調査区外で、墳頂周囲の一部のみ調査 埴輪高杯・高杯、土師器	35	142-152
10号墳	3-4	F-E12-13地	古墳	2-3期	直径約12.5	幅約11	—	横穴式石室 (室長約1.1×1.2、室高・室深0.5~1.1) 埴輪高杯・埴輪口・高杯、土師器・埴輪口	36-38 +42	153-172
SK 1	2	F-O19	土坑	4期	4.1	1.9~	20	横穴式石室の底石 埴輪高杯・埴輪口	139	471-473
SH 2	2	F-M18地	壱次建物	4期	7.2	6.0	30	調査区に2、SH10-SH12、東面に竪穴式石室 1号墳と並行・並列の遺構	60-62 +54-55	174-208
SK 3	2	F-M13地	土坑	4期	4.1	1.75~	18	横穴式石室 土師器、埴輪高杯・高杯、埴輪口	159	476-483
SD 4	2	F-N19地	溝?	4期	6.0	2.1~	3.9	SD1-SD1、SH2とは別開削 土師器、埴輪高杯・埴輪口・高杯・埴輪口	50-52	484-491
SK 5	2	F-I16	土坑	4期?	2.1	1.0	20	土師器・埴輪高杯片少量	160	—
SD 6	2	F-I115	不明 風堀本程?	不明	3.9	2.8	34	遺物ごく少量 不明 埴輪高杯片少量	—	492
SK 7	2	F-I14	土坑	古代	0.8	0.6	20	SH80との関係は不明 土師器片少量出土	79	—
SD 8	2	F-N16	不明 溝?	4期	2.2~	1.65	30	8号墳とは別遺構として調査 土師器、埴輪高杯・埴輪口 埴輪口・埴輪高杯片少量出土	35	493-497
SP 9	2	F-L-M19	礎上机	古代	1.75	0.6	14	埴輪高杯片少量出土	160	—
SH 10	2	F-N18地	壱次建物	4期	7.0	6.1	62	SH10-SH12、竪・埋埋溝あり 埴輪高杯・土師器多数、埴輪口	50-54 +53-54	209-240
H1-20	—	穴溝	—	—	—	—	—	第33次調査の遺構名を11から付与したため欠番	—	—
SD 21	3	F-V3地	溝	4期以降	—	1.0	12	5号墳と6号墳の間の溝 土師器、埴輪高杯・埴輪口、高杯・埴輪口	—	498-506
SK 22	3	F-F4	土坑	古代	1.2	0.8	19	横穴式石室 埴輪高杯・埴輪口・高杯、埴輪高杯・埴輪口	160	507
SD 23	3	F-D8地 (溝・溝跡)	溝	4期?	5.9	5.9	15	3号墳北方に位置する 土師器、埴輪高杯	—	508-509
SK 24	3	F-F14	土師器室?	2-3期?	0.44	0.44	15	10号墳埋込溝に位置する 土師器が確認し、並列で出土	160	510
SK 25	3	F-D10地	土坑	4期?	3.8	2.75	14	埴輪高杯・土師器 土師器、埴輪高杯	160	511-512
SK 26	3	E-X10	土坑	4期以降?	2.6	2.2	11	埴輪高杯・土師器 埴輪高杯・土師器	160	513
SH 27	3	E-S7-8	壱次建物	—	4.2	4.0	8	既刊報告書にてSH10と同様に報告済	—	—
SH 28	3	E-U9地	壱次建物	古代	3.7	3.5~	30	基本部分のみの確認 埴輪高杯、埴輪口、埴輪高杯、埴輪口	56	247
SK 29	3	E-U7	土坑	3期	0.8	0.8	16	埴輪高杯・土師器 埴輪高杯・土師器	175	514
SK 30	3	E-X9	土坑	4期?	2.3	2.3	17	2号墳の遺構 埴輪高杯	175	515-516
SK 31	3	E-W9	土坑	4期?	1.7	1.1	12	埴輪高杯	175	517
SH 32	3	E-T11地	壱次建物	4期?	5.1	3.8~	10	埴輪高杯 土師器、埴輪高杯	67-68	248
SD 33	3	E-T12地	溝	不明	11.0	0.45	10	自然の流木遺跡 土師器・埴輪高杯片少量	—	—
SH 34	3	E-S12地	壱次建物	4期	3.3	3.25~	35	竪穴式石室 埴輪高杯・高杯、土師器長脚蓋	67-68	249-251
SH 35	3	E-W13地	壱次建物	4期	4.5	4.0	20	埴輪高杯・土師器 埴輪高杯・土師器、埴輪高杯・埴輪高杯	39	252-255
SK 36	3	F-G12	土師器室	3-4期?	0.6~	0.35~	10	10号墳埋込溝に位置する 土師器・埴輪高杯	161	518-520
SH 37	3	E-U14地	壱次建物	4期	4.5	3.3	23	竪穴式石室 土師器、埴輪高杯	60-61	256-259
SH 38	3	E-T13-14	壱次建物	古代	2.1	1.0~	13	土師器・埴輪高杯片少量	60	—
SD 39	3	E-U13	溝	不明	2.3	0.36	5	自然の流木遺跡 埴輪高杯片少量	—	—
SD 40	3	E-U13-14	溝	不明	0.5~	0.4~	10	自然の流木遺跡 土師器片少量	—	—
SK 41	3	E-U13	土坑	古代	0.65~	0.6~	9	SH37-SD41 土師器片、埴輪高杯	—	—
SK 42	3	E-U13	土坑	不明	0.4	0.38	5	土師器片	—	—

第 2 表 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺構一覧表 (2/7)

遺構名	次数	主なグラフィ	性格	時期区分・時代	規模			特記事項 (遺構の特徴や主な出土遺物など)	遺構 図面番号	遺物 報告番号
					長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)			
SK 43	3	E-S14	土坑	不明	1.0	0.85	21	土坑遺構片	—	—
SH 40	3	E-S13-14	壱次建物	4期?	2.8	2.7	5	既刊報告書にてSH40&5として報告済	—	—
SP 45	3	E-T11	後土坑	不明	0.4	0.27	3	調査時はSK、SH39→SH45、後上・後多き古瓦 土坑遺構片少量	57-58	—
SK 46	3	E-S13-14	土坑	不明	1.36	1.05	14	土坑遺構片	—	—
SH 47	3	E-U14他	壱次建物	4期	3.0	2.8	10	竈・穿通溝あり 土坑遺・壱次器小片少量	60-61	—
SD 48	3	E-V14-15	溝	不明	1.15	0.75	25	自然の流水基跡 土坑遺・壱次器片	—	—
SD 49	3	E-W14	溝	不明	1.5	0.4	11	自然の流水基跡 土坑遺・壱次器片	—	—
SD 50	3	E-W14他	溝	不明	2.0	0.49	16	自然の流水基跡 土坑遺・壱次器片	—	—
SK 51	3	E-V14-15	土坑	古代	2.0	1.2	13	土坑遺・壱次器片	—	—
SD 52	3	E-X15	溝	不明	1.05	0.25	5	自然の流水基跡 土坑遺片	—	—
—53	3	E-W14	—	—	—	—	—	土坑として調査したが、SH46の上層と判明→欠番	—	—
SH 54	3	E-W14他	壱次建物	4期	5.2	1.4	38	SK33と統合 土坑遺構・壱次器片・土坑・壱次器・鉄片	62	363→266
SK 55	3	E-X15-16	溝	古代?	2.5	0.2	25	壱次器片・鉄片	—	—
SD 56	3	E-X15	土坑	古代?	0.7	0.6	23	SH54→SK 土坑遺片	—	—
SK 57	3	E-U-V14	土坑	古代	3.4	2.15	9	調査時はSH、SK59→SH37 土坑遺構・壱次器片少量	66	521-522
SK 58	3	E-X16	土坑	4期以降?	1.55	1.25	24	土坑遺・壱次器小片少量 鉄片・埴輪片	—	—
SD 59	3	E-V15-16	溝	不明	2.8	0.4	17	自然の流水基跡 土坑遺片	—	—
SK 60	3	E-U16	土坑	古代?	1.0	0.85	7	土坑遺片	—	—
SH 61	3	E-S16他	壱次建物	4期	4.8	3.8	25	竈・穿通溝あり 土坑遺構・壱・壱次器	63	260→262
SH 62	3	E-X17他	壱次建物	4期	3.9	3.3	22	穿通溝あり、SH62→SH67 土坑遺構・壱次器片少量・埴輪製製品・埴輪口・鉄片	64-65	367→275
SK 63	3	E-S18	土坑	4期	4.4	2.4	30	既刊報告書にてSK63&5として報告済 第3次調査区から壱次器片・高杯	—	529-524
SH 64	3	E-V16他	壱次建物	4期	4.8	4.6	15	竈・穿通溝あり、SH64→SH15 土坑遺・壱次器小片	67	—
SH 65	3	E-X19他	壱次建物	4期	3.35	3.1	27	竈・土坑あり、SH70→SH65 土坑遺構・壱次器片	68	276→279
SH 66	3	E-X17他	壱次建物	2期	3.4	1.8	18	竈内に土坑器具製煉土平皿、貯蔵穴あり 土坑遺SH1	64-66	260→264
SX 67	3	E-X17-18	土跡層?	4期	1.0	1.0	10	SH62と重複 土坑遺片製煉	64-65	325-326
SK 68	3	E-V16-17	土坑	4期?	0.35	0.2	不明	SH61→SK68 土坑遺・壱次器	—	—
SK 69	3	E-X22他	土坑	古代	2.85	2.15	21	調査中1514 土坑遺・壱次器小片少量	—	—
SH 70	3	E-X19他	壱次建物	古代	4.4	4.4	23	竈の残欠あり、SH70→SH65→SH72 土坑遺・壱次器	68	—
SH 71	3	E-B18他	壱次建物	古代	3.3	3.2	17	穿通溝あり 埴土の凸部あり	69	285
SK 72	3	E-X19-20	土坑	4期	1.23	1.08	30	SH70→E-X19&11→SK72 壱次器無台板	—	327→529
SK 73	3	E-S16	土坑	古代	0.75	0.75	15	土坑遺・壱次器片	—	—
SH 74	3	E-Y18他	壱次建物	4期	3.2	3.1	23	竈・穿通溝あり 土坑遺構・壱次器無台板・高杯、鉄製品上	70	286→289
SK 75	3	E-X21-22	土坑	不明	1.4	1.05	5	不定形の土坑 遺物なし	—	—
SH 76	3	F-A-R25	壱次建物	4期	3.1	2.9	25	竈・穿通溝あり、SH76→SH76 土坑遺・壱次器・鉄製品上	71-72	290
SK 77	3	E-V19他	土坑	古代	2.1	1.7	46	土坑遺片	—	—
SH 78	3	E-B19他	壱次建物	4期	5.8	5.2	28	竈・穿通溝あり、SH78→SH78 土坑遺構・壱・軸式土坑遺構・壱次器	71-73	291→306
—79	3	—	—	—	—	—	—	調査中にSH78の一部と判明→欠番	—	—
SH 80	3	F-C22他	壱次建物	5期	5.0	4.7	27	穿通溝あり 壱次器片・杯・高杯	74	301→303
SH 81	3	F-B23他	壱次建物	5期	3.5	3.3	23	竈・支柱・土坑あり 土坑遺構・壱・壱次器無台板・杯・高杯、鉄製品	25	304→309
SH 82	3	F-Y22-23	壱次建物	5期	2.7	2.1	13	埴土の凸部あり 土坑遺構・杯・壱・壱次器無台板・壱皿	76	310→316
SK 83	3	F-D20	土坑	不明	2.70	2.25	39	調査時はSH 遺物なし	—	—
SH 84	3	F-D24他	壱次建物	4期	3.5	3.2	25	竈・穿通溝あり 土坑遺長和壱・有孔円筒・壱次器杯34身	77	317→320
SD 85	3	H-G6他	溝	4期?	—	1.0	20	壱次器高杯	—	530
SK 86	3	F-F6	現代雑乱	現代	1.87	1.13	24	土坑遺片	—	—
SP 87	3	F-H11	後土坑	2期	1.25	0.73	17	調査時はSK、大塚の埴土塊出土、埴輪製煉 土坑遺構・壱次器杯34、碇石	161	522→523
SH 88	3	F-H14他	壱次建物	古代	4.5	3.3	34	竈・土坑あり 土坑遺長和壱片	78	—
SH 89	3	F-H114	壱次建物	古代	3.6	2.9	13	埴土・埴土の凸部あり 土坑遺高杯・壱次器	79	321

第 3 表 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺構一覧表 (3/7)

遺構名	次数	主なグラブ	性格	時期区分・時代	規模			特記事項 (遺構の特徴や主な出土遺物など)	遺構 図説番号	遺物 報告番号
					長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)			
SK 90	3	F-G16-17	土坑	古墳?	3.7~	1.5~	14	調査当初LSH 土坑部のみ	—	—
SK 91	3	F-J12	土壌層?	3期	1.2	0.47	11	調査当初LSK 遺跡西平版	—	526
SH 92	3	F-H21他	壱穴建物	4期	6.6	2.7~	17	竈のみ 土坑部遺、壱直部遺	80	323-323
SK 93	3	F-N21	土坑	古代?	1.15	0.85	—	検出不可 壱直部付	—	521
SK 94	3	F-M20	土坑	古代?	1.35	1.16	23	SF97→SK94 土坑部片	—	—
SK 95	3	F-M23	土坑	4期?	1.8	0.72	不明	調査当初LSH 土坑部・壱直部片	—	—
SK 96	3	F-N21他	土坑	4期	4.5	4.25	13	落ち込みか 土坑部遺、壱直上部	—	527~528
SH 97	3	F-M20-21	壱穴建物	不明 (2期13期)	4.4	1.8~	13	段上・段下の2つのみ、SF97→SK94 壱直部付1身・高杯、土坑部	81	324~326
SK 98	3	F-K20	土坑	不明	6.9	6.42	27	遺物なし	—	—
SH 99	3	F-P21他	壱穴建物	古代	4.2~	1.0~	20	塚周溝のみ 土坑部・壱直部小片3点のみ	82	—
SH 100	3	F-L-M23	壱穴建物	4期	4.3	2.6~	16	竈・壱直部・付属穴のみ 壱直部付1基・無台付、磁石	83	327~330
— 101	3	—	—	—	—	—	—	—	—	
SK 102	3	F-L23	横溝乱	不明	1.1	0.95	14	土坑部・壱直部片	—	—
SH 103	3	F-N22他	溝	4期?	3.63	0.35	18	土坑部・壱直部・段上片	—	—
SH 104	3	F-O23他	壱穴建物	4期?	3.8	3.2~	9	塚周溝のみ、SH100-102→SH104 土坑部・壱直部少量	84	—
SH 105	3	F-P23	壱穴建物	4期?	3.8	1.7~	9	竈のみ、SH100-102→SH105 壱直上部、遺物少量	84	331
SH 106	3	F-O22他	壱穴建物	4期	4.1	1.8~	25	塚周溝のみ、SH105→SH106→SH104-105 土坑部遺・杯、壱直部杯蓋b加工品、壱直上部 3期の遺物面に入る	84	332~336
SH 107	3	F-O22他	壱穴建物	4期	4.7	2.9~	21	塚周溝・竈のみ、直横間隔にある遺構の中で最も古い 土坑部高杯・壱、壱直部付14基、壱直上部、鉄片 3期の遺物面に入る	84-85	337~342
SK 108	3	F-H24	横溝乱	不明	1.7	0.35	16	壱直部壱直部	—	540
SK 109	3	F-H23	土坑	4期?	2.35	1.0	15	SK109→SK110 壱直部壱直部	—	541
SK 110	3	F-Q-R25	土坑	4期	4.4	3.7	22	調査当初LSH、SK109→SK110 土坑部遺、壱直部付b・高杯・壱直部	86	342~536
SK 111	3	F-R22他	土坑	4期	3.35~	2.8~	35	調査当初LSH、段上・段上・壱直部のみ 土坑部遺、壱直部付b付小壱、輪切石、金属片	86	539~570
SK 112	3	F-P25	土坑	不明	3.15	0.25	13	壱直部壱直部片1点	—	—
SD 113	3	H-O2他	溝	4期	19.0	1.25	22	SH109-170間溝の溝? 土坑部遺、壱直部杯蓋a・杯蓋b	—	551~555
SK 114	3	H-L1	土坑	4期	2.2	1.3~	32	SD113より 壱直部杯蓋上	—	—
SK 115	3	H-O1	土坑	4期	3.7	2.3	26	調査中にSH→SKに変更、SK115→SD113-SD117 土坑部遺、壱直部付b付小壱・無台付、壱直上部	—	571~583
SD 116	3	H-P1	溝	不明	1.45	2.3	15	土坑部・壱直部小片少量	—	—
SD 117	3	H-M2他	溝	不明	5.42~	0.68	9	土坑部片少量	—	—
SH 118	3	H-M3他	壱穴建物	4期	5.1	4.0	21	竈・壱直部のみ、SH118→SH173 土坑部遺、壱直部杯蓋	86	343~347
SH 119	3	H-N3他	壱穴建物	4期	4.3	2.6~	12	竈・壱直部のみ、SH119→SH177 土坑部遺・杯、壱直部杯	87	348~349
SK 120	3	H-K4	壱穴建物	4期?	3.8	3.7	10	塚周溝・竈のみ 土坑部遺、壱直部	88	352-353
SH 121	3	H-P4他	壱穴建物	4期	6.0	2.8~	21	竈・壱直部のみ 土坑部遺・壱直部遺	89	356-357
— 122	3	—	—	—	—	—	—	—	—	
SK 123	3	F-N-O23	土坑	古代	1.4~	1.25~	12	段上・段上層のみ・成層上、SH105-SD103→SK123 土坑部遺	81	584
SH 124	3	H-N3-4	壱穴建物	不明	2.2~	2.2~	7	同溝のみ 土坑部壱直部片4点のみ	87	—
SH 125	3	H-N5他	壱穴建物	4期	5.2	6.7~	26	塚周溝1層の下のみ、SH126→125→122 壱直部杯蓋b付、壱直上部12a)	90-91	—
SH 126	3	H-N-O6	壱穴建物	4期	4.3	2.8~	20	段上・段下の2つ、塚周溝のみ 土坑部遺、壱直部付	90	354~369
SH 127	3	H-N-O6	壱穴建物	4期	6.0	2.9~	20	塚周溝のみ 壱直部付12a)	90	—
SK 128	3	H-O-P6	土坑	4期	3.5	2.4	27	SK128→SH127 壱直部付1点	—	585-586
SK 129	3	E-Y10-11	土坑	1-2期	3.3	3.75	22	3号墳周溝掘削後に検出 壱直部遺・壱直部	—	587~589
SK 130	3	F-O7-8	墓?	1-2期	2.3	0.77	29	多くの内溝と土坑部遺2点(径差約37)出土	163	590-591
SH 131	3	F-G10他	壱穴建物	3期	7.0	7.0	5	竈・壱直部のみ、SH131→SH124 壱直部付・壱、土坑部	92~95	370-377
SH 132	3-6	F-E-EF8	壱穴建物	4期	4.4	4.3	22	竈・壱直部のみ 土坑部遺、壱直部付・壱・壱	96-97	372~373
SD 133	3	C-T24他	溝	不明	16.15	0.25	18	遺物なし	—	—
SH 134	3	F-G10他	壱穴建物	3期	6.6	6.5	26	竈(竈付)・塚周溝のみ、SH133→SH134 土坑部付・壱・溝、壱直部付14-15付属遺	92~95	380~391
SK 135	3	F-E10-11	土坑	2-3期	1.95~	1.6	18	10号墳との間は不明 壱直部小片少量	—	592

第 4 表 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺構一覧表 (4/7)

遺構名	次数	主なグラフィック	性格	時期区分・時代	幅(m)	長さ(m)	高さ(cm)	特記事項 (遺構の特徴や主な出土遺物など)	遺構 図説番号	遺物 報告番号
SK 130	3	F-F11	土坑	古代	2.8	2.8	15	10分層上の層間は不明 土層部長形燹	—	393
SK 137	3	E-Y7-9	土坑	不明	8.9	1.3~ 2.5	40	階段・市民が遺構意図に似る 遺物なし	163	—
130-130	—	欠番	—	—	—	—	—	竪立柱建物の遺構をE15に付与したため、欠番	—	—
SR 131	3	E-U17他	竪立柱建物	4期	7.42	4.30	56	4期×3期の竪立建物、SH12-SH15、N-28'-E	128	612
SR 132	3	E-U18他	竪立柱建物	~4期	6.32	2.85	51	3期×2期の竪立建物、SH12-SH15、N-43'-E	129	—
SR 133	3	F-J12	竪立柱建物	4期	5.36	4.50	50	3期×3期の竪立建物、N-41'-W	129	—
SR 134	3	F-F17他	竪立柱建物	不明	4.55	4.20	60	3期×3期の竪立建物、N-28'-E	130	—
SR 135	3	F-E19他	竪立柱建物	不明	3.85	3.56	62	3期×3期の竪立建物、N-22'-E	131	—
SR 136	3	F-H17他	竪立柱建物	不明	3.62	3.61	42	2期×2期の竪立建物、N-30'-W	132	—
SR 137	3	F-G18他	竪立柱建物	不明	2.89	2.78	39	2期×2期の竪立建物、N-41'-W	132	—
SR 138	3	F-L21他	竪立柱建物	不明	3.48	3.24	44	2期×2期の竪立建物、N-21'-E	133	—
SR 139	3	F-L22他	竪立柱建物	4期	7.04	4.36	30	4期×2期の竪立建物、N-11'-E	133	613-614
SR 140	3	F-O24他	竪立柱建物	不明	7.51	4.57	43	5期×2期の竪立建物、N-28'-E	134	—
SR 141	3	F-L24他	竪立柱建物	不明	4.10	3.00	34	2期×2期の竪立建物、N-21'-W	135	—
SR 142	3	F-I425他	竪立柱建物	4期	3.88	2.80	34	2期×2期の竪立建物、N-28'-E	135	615
SR 143	3	H-G4他	竪立柱建物	4期	3.94	3.56	45	3期×3期の竪立建物、N-12'-E	136	616
SR 144	3	H-F3他	竪立柱建物	不明	3.07	3.15	32	2期×2期の竪立建物、N-18'-W	137	—
SR 145	3	H-F5他	竪立柱建物	不明	3.32	3.02	45	2期×2期の竪立建物、N-2'-W	137	—
SR 146	3	F-J23他	竪立柱建物	不明	5.55	4.02	38	3期×2期の竪立建物、N-6'-E	138	—
SA 147	3	F-U23+24	竪・横	4期	2.68	—	40	南北方向に並ぶ柱穴列	139	—
SR 148	3	H-Q1他	竪立柱建物	4期	6.79	3.98	62	4期×2期の竪立建物、N-28'-E	138	617-621
SR 149	3	H-N1他	竪立柱建物	4期?	6.50	4.55	35	4期×2期の竪立建物、N-14'-W SH176と方向性同じ	140	—
SR 170	3	H-O1他	竪立柱建物	4期	8.30	4.50	47	3期×3期の東西棟の竪立建物、N-6.5'-E	140	—
SR 171	3	H-J1他	竪立柱建物	不明	3.94	2.80	30	3期×2期の竪立建物、N-9'-E	141	—
SR 172	3	H-15他	竪立柱建物	不明	4.38	3.55	49	3期×3期の竪立建物、N-6'-E	142	—
SR 173	3	H-L2他	竪立柱建物	4期?	7.54	4.70	79	5期×東行3期の東西棟の竪立建物、N-1'-W SH176と方向性同じ	143	622-623
(SR 174)	3	E-S18-19	竪立柱建物	4期	2.90	2.78	51	既刊報告書にてSH169として報告済	—	624
— 175	3	E-S14+15	—	—	—	—	—	SH15として調査したが、隣の調査区へ移す予定 →欠番	—	—
SA 176	3	H-Q2他	横	不明	9.83	—	34	屈曲あり	144	—
SR 177	3	H-O3他	竪立柱建物	4期?	6.45	4.24	48	4期×3期の東西棟の竪立建物、N-2'-W SH176と方向性同じ	145	—
(SR 178)	3	E-S13-16	竪立柱建物	—	5.4	3.6	52	既刊報告書にてSH169として報告済	—	—
SR 179	3	E-S8他	竪立柱建物	不明	3.15	3.10	28	2期×2期の建物、N-34'-E	145	—
— 180	3	E-W22他	—	—	—	—	—	3期×2期の竪立建物として確認したが、 屈曲・並行→欠番	—	—
— 181	3	H-H1他	—	—	—	—	—	3期×3期の竪立建物として確認したが、 屈曲並行→欠番	—	—
— 182	3	H-G2他	—	—	—	—	—	3期×2期の竪立建物として確認したが、 屈曲並行→欠番	—	—
SR 183	3	H-J3他	竪立柱建物	不明	3.54	2.53	66	2期×2期の竪立建物、N-6'-E	139	—
SA 184	3	H-14他	竪立柱建物	不明	3.60	3.12	34	2期×2期の竪立建物、N-6'-E	142	—
SR 185	3	H-M4他	竪	4期?	12.22	—	44	柱穴2列 SH176と方向性同じ	144	—
180-200	—	欠番	—	—	—	—	—	第6次調査の遺構をE30に付与したため、欠番	—	—
SH 201	6	D-I23他	竪穴建物	4期	4.5	4.5~	7	竪・横両方・土柱穴3列 土層部長形燹、竪穴部平敷	96	392-393
SK 202	6	D-E23+24	土坑	古代	0.85	0.7	7	土層部・竪穴部燹小片	—	—
SK 203	6	F-J2他	土坑	4期?	2.85	2.6~	9	S4204-S4203 竪穴部燹部・土柱穴燹	—	595-596
SH 204	6	F-J3他	竪穴建物	4期	5.7	5.1	12	竪・横両方・土柱穴6列 土層部長形燹、竪穴部燹+高板・ガラスコブ	99-100	394-404
SH 205	6	D-G23	竪穴建物	古代	2.6	0.4~	4	土層部長形燹	101	—
SK 206	6	D-G23+24	土坑	古代	1.4	1.4	8	土層部燹	101	394
SK 207	6	D-C23他	土坑	不明	2.45	1.7	13	階段上上の燹 竪穴部高板	—	397
SK 208	6	D-G23+24	土坑	4期	2.5	1.2	12	S4208-S4205 竪穴部燹部+高板	101	398-399

第5表 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺構一覧表(5/7)

遺構名	次数	主なブレイク	性格	時期区分・時代	規模			特記事項 (遺構の特徴や主な出土遺物など)	遺構 図番番号	遺物 報告番号
					長さ[m]	幅[m]	深さ[cm]			
SK 209	6	D-E23	土坑	4期	2.0	1.9	19	土師器・須恵器小片少量	161	—
SH 210	6	D-G24組	壱次塚物	4期	3.5	3.5	8	竈・埴壇跡小 土師器・須恵器平組出土	162	405
SK 211	6	F-F1-2	溝	不明	2.2	1.8	—	S1003-S1211	—	600
SK 212	6	F-D3	土坑	4期?	4.5	2.35	6	埴土に褐色胎質土 土師器・須恵器小片少量	—	—
SH 213	6	F-D2地	壱次塚物	1期	6.15	3.6	14	竈・埴壇跡・土柱穴あり, S1297-S1212-SR305-325 土師器・須恵器H34-壱	103-104	406~413
SH 214	6	F-D4地	壱次塚物	3期以降	4.25	3.6	10	埴壇跡小 土師器・ヤマト製割片	105	414-415
SH 215	6	D-D25	壱次塚物	古代	5.7	3.6	12	竈・埴壇跡小 土師器大量出土, 須恵器蓋	106-107	416~418
— 216	6	—	—	—	—	—	—	調査中にS1213の一部分を判明→欠番	—	—
SK 217	6	F-E-F7	土坑	4期以降	2.65	1.3	46	土師器・須恵器小片少量	—	—
SH 218	6	F-F-G7	壱次塚物	古代	4.7	3.7~	7	竈・埴壇跡小 ヤマト製土師器	108-109	419
SH 219	6	F-G7地	壱次塚物	4期	4.6	4.2	10	竈・埴壇跡小 土師器・須恵器H・壱, 砥石	108-110	420~425
SD 220	6	F-G-184	溝	不明	0.85	0.25	6	S1212と一連の溝 土師器小片	—	—
SD 221	6	F-H8	溝	不明	1.0	0.2	6	S1214の溝本線の可能性を想定したのが不明 S1218-S1221, 土師器割片	—	—
SK 222	6	F-H9	土坑	2期?	2.8	1.6	1	埴土に褐色胎質土 土師器・須恵器小片少量	—	—
SK 223	6	F-H9-10	土坑	2期以降	1.1	0.6	7	土師器・須恵器小片少量	—	—
SK 224	6	F-K5地	土坑	古代	3.5~	2.25	33	土師器・須恵器片	—	—
SK 225	6	F-J9	壱次塚物	4期	4.5	4.35	30	竈・埴壇跡・土柱穴あり 須恵器H34・杯蓋・壱, 瓦瓦	111-112	426~432
SH 226	6	F-L8	壱次塚物	4期?	2.4~	2.2~	21	竈・埴壇跡小 溝跡(?)の中心礎石	113	433
SH 227	6	F-L9	壱次塚物	古代	3.6	1.7~	10	埴壇跡小 土師器・須恵器小片少量	113	—
SK 228	6	F-K10地	土坑	2-3期?	4.8	3.75	13	SK228-S1225 土師器・須恵器H34等・礎石	111	403-404
SK 229	6	F-18-9	土坑?	不明	3.7	2.5	30	礎石?の 土師器・須恵器片	111	—
SK 230	6	F-K8	土坑	古代	1.7	1.0	1	土師器高杯	—	405
SK 231	6	F-J7-8	土坑	古代	2.75	1.4	26	埴土に褐色胎質土 土師器小片, 須恵器, ヤマト製割片	—	—
SK 232	6	F-J9地	礎石	不明	2.15	1.2~	6	土師器・須恵器片	—	—
SD 233	6	D-121-22	溝	不明	5.9~	0.35	12	S1201-S1223, S1223と平行 須恵器土・ヤマト蓋	163	606
SK 234	6	D-F22	土坑	5期	2.95	3.25	17	須恵器杯蓋	161	607
SH 235	6	D-120地	壱次塚物	3期	4.8~	4.5	22	竈・埴壇跡小 土師器・須恵器H34・高杯	114-115	434~441
SH 236	6	D-F18-19	壱次塚物 穴遺構	3期	4.4 4.7	3.5 3.0	22 19	竈・埴壇跡・土柱穴あり, S1206-S1206 須恵器H34・高杯, 割片	116	442-444
SD 237	6	D-C12	耕作溝	近現代	1.65	1.1	9	—	—	—
SD 238	6	C-T17 ~D-1320	溝	5期?	37	1.0	10	SK315-319-S1228 須恵器H34・壱	163	—
SH 239	6	D-1417-18	壱次塚物	不明	3.9~	2.7~	—	規模? ?の穴跡 遺物なし	117	—
SK 240	6	D-G15-16	土坑	不明	3.0~	2.4	12	遺物なし	—	—
SH 241	6	D-G16-17	壱次塚物	古代	4.4	3.8~	8	土師器・須恵器小片少量	117	—
SD 242	6	D-E12地	耕作溝	近現代	22.0	0.9~	18	—	—	—
SD 243	6	D-E12地	耕作溝	近現代	29.0	0.75~	18	—	—	—
SD 244	6	D-E11地	耕作溝	近現代	28.0	7.5~	7	—	—	—
SD 245	6	D-G12地	耕作溝	近現代	9.3	0.6	11	—	—	—
SD 246	6	D-B12地	耕作溝	近現代	29.5~	0.9~	12	SD119と同溝	—	—
SD 247	6	D-C12地	耕作溝	近現代	24.25~	1.2~	20	—	—	—
SD 248	6	D-B12地	耕作溝	近現代	51.0~	5.3~	5	SD119&510溝	—	—
SD 249	6	D-B12地	耕作溝	近現代	26.3~	6.0~	3	—	—	—
SD 250	6	所在不明	溝	不明	32.75~	7.0~	20	—	—	—
SD 251	6	D-D11地	耕作溝	近現代	32.4~	0.9~	12	—	—	—
SD 252	6	D-F12地	耕作溝	近現代	26.5~	2.3~	13	—	—	—
SD 253	6	D-C12地	耕作溝	近現代	24.4~	6.8~	22	—	—	—
SD 254	6	D-G11地	耕作溝	近現代	18.15	6.5~	10	—	—	—
SD 255	6	D-A11地	耕作溝	近現代	29.55~	6.0~	14	—	—	—

第 6 表 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺構一覧表 (6/7)

遺構名	次数	主なグランド	性格	時期(分) 時代	規模			特記事項 (遺構の特徴や主な土遺物など)	遺構 図番番号	遺物 報告番号
					長さ[m]	幅[m]	深さ[cm]			
SD 256	6	D-F12地	耕作溝	近現代	26.5~	2.3~	13	—	—	—
SD 257	6	D-F13地	耕作溝	近現代	22.0~	0.9~	11	—	—	—
SH 258	6	D-I38	壱穴塚物	古代	4.2	3.8	10	塚周溝・主柱穴あり 土師器片包埋	118	445
SH 259	6	D-C9地	壱穴塚物	古代	5.0~	4.65	18	溝・主柱穴あり 土師器小片少量	119	—
SH 260	6	D-E10地	壱穴塚物	4期?	4.6	4.0	15	土師器壺、壱器器杯1個	120	446-447
SD1~266	—	次書	—	—	—	—	—	調査中心の次書	—	—
SH 267	6	D-F-G7	壱穴塚物	4期?	4.4~	3.5~	8	塚周溝・主柱穴あり 壱器器杯包埋跡、土師器片	121	448
SD 268	6	D-G12地	耕作溝	近現代	1.9~	1.3~	14	—	—	—
SK 269	6	D-E12-13	土坑	不明	2.5~	2.4~	9	土師器片	—	—
SD 270	6	C-T9-10	耕作溝	近現代	10.2~	0.8~	28	SD143と同一溝	—	—
SD 271	6	C-T9-10	耕作溝	近現代	18.0~	0.8~	28	—	—	—
SD 272	6	C-U9-10	耕作溝	近現代	10.0~	0.85~	31	—	—	—
SD 273	6	C-V9-10	耕作溝	近現代	11.5~	1.15~	29	—	—	—
SD 274	6	C-V12地	耕作溝	近現代	13.0~	1.3~	28	—	—	—
SK 275	6	C-W-X9	土坑	不明	2.47~	2.45	12	壱器器壺	—	—
SD 276	6	C-V12地	耕作溝	近現代	8.6~	1.2~	23	—	—	—
SD 277	6	C-W13地	耕作溝	近現代	13.25~	0.95	23	—	—	—
SD 278	6	C-Y8地	耕作溝	近現代	12.65~	0.65~	16	—	—	—
SD 279	6	C-W12地	耕作溝	近現代	9.7~	0.7~	23	—	—	—
SD 280	6	D-A10地	耕作溝	近現代	30.3~	0.8~	12	—	—	—
SD 281	6	C-W12地	耕作溝	近現代	5.7~	1.05~	21	—	—	—
SD 282	6	C-V12地	耕作溝	近現代	37.65~	0.55~	19	—	—	—
SD 283	6	C-U12地	耕作溝	近現代	38.3~	0.85~	23	—	—	—
SD 284	6	C-U10地	耕作溝	近現代	31.45~	0.55~	23	—	—	—
SH 285	6	C-W13地	壱穴塚物	4期?	4.7	2.9~	14	塚周溝あり 土師器壺、壱器器杯1個	122	449~450
SK 286	6	C-U12地	土坑	不明	9.0~	3.7~	12	埴土に褐色粘質土 土師器片1点・壱器器片1点	—	—
SK 287	6	C-T12地	土坑	不明	8.2~	3.75~	30	埴土に褐色粘質土 遺物なし	—	—
SH 288	6	C-X15地	壱穴塚物	不明	4.7	4.0	10	塚周溝あり 土師器小片少量	123	—
SD 289	6	C-Y12地	耕作溝	近現代	31.8	0.8	12	—	—	—
SK 290	6	C-T13	土坑	不明	3.8	3.2	8	埴土に褐色粘質土 遺物なし	—	—
SK 291	6	C-V23-24	土坑	4期?	6.0	5.1	4	土師器壺、壱器器杯2個	—	600-609
SK 292	6	D-H22	土坑	3~4期	2.8	2.3	19	土師器壺、壱器器杯1個	—	610-611
SH 293	6	D-C22地	壱穴塚物	不明	5.5?	3.6?	溝4	被熱硬化面と塚周溝?で被覆 遺物なし	124	—
SK 294	6	C-W22-23	土坑	4期?	3.0	2.6~	9	壱器器杯	—	—
SH 295	6	D-H23地	壱穴塚物	不明	4.8	3.4	8	被熱硬化面・塚周溝あり 遺物なし	124	—
SH 296	6	E-Y1地	壱穴塚物	4期	3.6	3.0	18	壱器・塚周溝あり 土師器壺、壱器器杯1個、土師 器・塚周溝あり	125	456~466
SH 297	6	F-C2地	壱穴塚物	古代	3.6	2.5~	7	塚周溝あり、S1297-S1213 土師器・壱器器杯小片少量	163	—
SH 298	6	F-A2	壱穴塚物	古代	3.9	3.25	6	塚周溝あり 打撲式土坑、土師器片包埋、壱器器杯・壱器 器	126	467~470
SH 299	6	F-C4地	壱穴塚物	4期	3.8	3.1	18	塚周溝あり 土師器壺、壱器器杯1個(被覆跡)	127	471~473
SH 300	6	F-D5地	壱穴塚物	古代	3.7	3.2	6	塚周溝あり 土師器・壱器器杯小片少量	127	—
SH 301	6	D-I23地	壱穴塚物	不明	4.32	4.14	37	3間×2間の壱柱塚物、N-27'-E	146	—
SH 302	6	D-I22地	壱穴塚物	4期	5.17	3.82	52	3間×2間の壱柱塚物、N-29'-E	146	625
SH 303	6	F-I41地	壱穴塚物	不明	3.73	3.33	40	2間×2間の壱柱塚物、N-25'-E	147	—
SA 304	6	D-F25地	塚	不明	8.54	—	38	柱穴6個、N-52'-W	156	—
SH 305	6	F-I2地	壱穴塚物	不明	5.50	3.80	40	3間×3間の壱柱塚物、S1213-S1203、N-19'-E	147	—
SH 306	6	F-K11地	壱穴塚物	不明	3.55?	2.98	40	3間×2間の壱柱塚物、?N-38'-W	148	—
SH 307	6	D-I18地	壱穴塚物	5期	5.26	3.12	45	3間×2間の壱柱塚物、N-32'-E	148	626

第 7 表 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺構一覧表 (7/7)

遺構名	次数	主なブレイク	性格	時期区分・ 時代	規模			特記事項 (遺構の特徴や主な出土遺物など)	遺構 図面番号	遺物 報告番号
					長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)			
SR 308	6	D-C21他	擬立柱建物	5期	5.42	4.69	45	3間×2間の擬柱建物、N-25 ^c -E	149	627~628
SR 309	6	D-H17他	擬立柱建物	不明	4.25~	3.98	66	3間×2間の東西棟の擬柱建物、N-5 ^c -E	149	—
SR 310	6	C-X13他	擬立柱建物	不明	4.60	3.75	30	3間×2間の擬柱建物、N-45 ^c -W	150	—
— 311	6	—	—	—	—	—	擬立柱建物として検出されたが遺構	—	—	
SR 312	6	C-W18他	擬立柱建物	5期半	3.52	3.46	48	2間×2間の擬柱建物、N-34 ^c -E	150	630
SR 313	6	C-T20他	擬立柱建物	不明	3.14	3.00	28	2間×2間の擬柱建物、N-23 ^c -E	151	—
SR 314	6	C-V18他	擬立柱建物	不明	5.56	3.64	55	3間×2間の擬柱建物、N-29 ^c -W	151	—
SR 315	6	F-B4他	擬立柱建物	不明	3.66	3.24	45	2間×2間の擬柱建物、N-26 ^c -E	152	—
SK 316	6	F-C134	上坑	4期以降	1.15	0.85	14	新し・野焼きか遺物なし	—	—
SK 317	6	F-D6	竈	古墳代	4.15	1.25	7	—	—	—
SR 318	6	C-Y17他	擬立柱建物	5期	7.22	5.21	60	3間×3間の擬柱建物、N-30 ^c -E	153	631-632
SR 319	6	C-W19他	擬立柱建物	不明	4.58	4.08	52	3間×2間の擬柱建物、N-25 ^c -E	154	633
SR 320	6	C-X18他	擬立柱建物	不明	3.70	3.20	54	2間×2間の擬柱建物、N-35 ^c -E	154	—
SR 321	6	C-V19他	擬立柱建物	不明	3.50	3.22	50	2間×2間の擬柱建物、N-24 ^c -E	155	—
SR 322	6	C-V20他	擬立柱建物	5期	3.54	3.15	66	2間×2間の擬柱建物、N-40 ^c -E	155	—
SR 323	6	D-G25他	擬立柱建物	不明	6.14	4.72	33	4間×3間の擬柱建物、N-36 ^c -E	156	634
— 324	6	F-F1他	—	—	—	—	擬立柱建物として検出されたが遺構	—	—	
SR 325	6	F-D3他	擬立柱建物	不明	3.28	2.84	40	2間×2間の擬柱建物、N-22 ^c -E	152	635
— 326	6	F-C5他	—	—	—	—	擬立柱建物として検出されたが遺構	—	—	
SR 327	6	F-H3他	擬立柱建物	5期半	4.64	4.04	52	3間×2間の擬柱建物、N-36 ^c -E	157	—
SR 328	6	F-H4他	擬立柱建物	不明	3.72	3.30	30	2間×2間の擬柱建物、N-38 ^c -E	157	—
SR 329	6	F-J6他	擬立柱建物	不明	6.24	4.12	50	4間×2間の擬柱建物、N-11 ^c -E	158	—
SR 330	6	F-J7他	擬立柱建物	不明	6.80	4.90	48	4間×3間の擬柱建物、N-42 ^c -E	158	—

※時期区分(1~5期)は、表9(遺構群表)

第 9 表 葦ヶ崎西遺跡 掘立柱建物・櫓等 柱穴一覧表 (2/2)

遺構名	次数	種別	フナト	エツ番号	遺物	
SB302	6	側柱	D-D22	p04	土師器	
				p05	土師器	
				D-E22	p04	土師器
				D-F22	p04	土師器
				D-E23	p04	須恵器H4直(625)・瓶
SB303	6	総柱	F-H1	p01	須恵器	
				p02	須恵器杯H	
				F-H2	p01	土師器
				F-I2	p01	土師器・杯
				p01	土師器	
SA304	6	櫓?		p01	遺物?L	
SB305	6	側柱	F-E2	p01	土師器	
				p02	須恵器杯	
				p03	須恵器杯	
				F-F2	p02	自然石
				p03	土師器, 須恵器	
F-F3	p01	須恵器				
SB306	6	総柱			遺物?L	
SB307	6	側柱	D-C18	p06	土師器, 須恵器杯・杯蓋b 黒色土器杯(626)	
				p08	須恵器	
				p11	土師器	
				p05	土師器	
				D-D18	p06	土師器
p08	土師器, 須恵器H4身					
SB308	6	側柱	D-D19	p07	土師器	
				D-C20	p04	土師器(629) 須恵器杯H(627)
				D-C21	p02	須恵器舞台杯・杯蓋b 土師器, 須恵器杯類
				D-D21	p03	土師器, 須恵器杯類
				p05	土師器	
D-C22	p04	土師器・杯(628)				
D-D22	p05	須恵器				
p02	土師器, 須恵器杯					
D-I18	p01	土師器				
SB309	6	側柱	C-Y13	p01	須恵器瓶類	
C-Y14	p01	土師器				
p02	土師器					
p07	土師器					
p09	土師器(630), 須恵器杯類					
p010	瓦					
SB310	6	側柱	C-Y14	p01	土師器	
SB312	6	総柱	C-W18	p02	土師器	
p07	土師器					
p09	土師器(630), 須恵器杯類					
p010	瓦					
SB313	6	総柱			遺物?L	
SB314	6	側柱	C-V19	p02	遺物?L	
SB315	6	側柱	F-B3	p01	土師器	
				p02	土師器	
				p03	土師器	
				p01	土師器	
				F-B4	p02	土師器, 須恵器杯
p03	土師器					
p06	土師器					
SB318	6	側柱	C-Y16	p02	土師器, 須恵器類	
				D-A16	p02	土師器, 須恵器杯, 粘土塊
				C-X17	p05	土師器(631), 粘土塊
				C-Y17	p02	土師器, 須恵器杯, 粘土塊
				C-X18	p06	土師器, 粘土塊 須恵器杯・杯蓋b
SB319	6	側柱	C-Y18	p02	土師器	
				p05	土師器, 須恵器・杯	
				p06	土師器, 須恵器杯	
				D-A18	p05	土師器(632), 粘土塊
				p08	土師器	
SB320	6	側柱	C-W19	p03	土師器, 須恵器杯	
				p04	土師器	
				C-W19	p04	土師器, 須恵器杯H(633)
				p01	粘土塊, 須恵器杯, 粘土塊	
				C-W18	p01	土師器, 須恵器瓶類
SB321	6	側柱	C-X18	p03	土師器, 須恵器	
				p04	遺物?L	
				C-W19	p03	土師器
				p05	土師器	
				p04	土師器	
SB322	6	側柱	C-V19	p06	土師器	
				p08	土師器	
				p08	土師器, 須恵器杯・杯蓋b	
				p06	土師器, 須恵器杯	
				p06	土師器, 須恵器杯	

遺構名	次数	種別	フナト	エツ番号	遺物	
SB321	6	側柱	C-V20	p02	土師器, 須恵器瓶類, 鉄滓	
				p05	土師器	
				p06	土師器	
				p08	遺物?L	
				p011	土師器	
SB322	6	側柱	C-V19	p06	土師器	
				C-W19	p06	土師器, 須恵器杯
				C-V20	p01	土師器
				p03	土師器, 須恵器杯	
				p07	土師器, 須恵器杯	
SB323	6	側柱	C-W20	p03	土師器, 須恵器杯	
				p06	土師器, 粘土塊 須恵器舞台杯	
				D-E24	p04	土師器(634)
				D-G24	p05	土師器
				p09	土師器	
SB325	6	側柱	F-D2	p03	土師器	
				p07	土師器	
				p01	土師器	
				p04	土師器, 須恵器杯	
				p05	土師器	
SB327	6	側柱	F-H3	p06	土師器, 須恵器杯	
				p07	須恵器H4身(635) (SH12130の須入品)	
				F-D3	p02	土師器
				F-I2	p02	土師器, 須恵器杯蓋b?
				F-G3	p03	土師器
SB328	6	側柱	F-H4	p02	土師器	
				p04	遺物?L	
				p01	土師器, 須恵器杯	
				p02	土師器, 須恵器杯	
				p03	粘土塊	
SB329	6	側柱	F-H4	p01	土師器	
				p05	土師器, 須恵器杯	
				F-H4	p04	土師器
				F-H5	p05	土師器
				F-15	p03	土師器
SB330	6	側柱	F-16	p03	土師器	
				p06	土師器	
				p01	土師器	
				p05	土師器	
				p02	土師器	

第 10 表 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺物観察表 (1/16)

出土番号	発掘年度	種別	図録番号	次巻	大地区	プラン	出土遺構 出土層位	遺構 (cm)			観察者	調査技法の特徴	出土	構成	色調	形状	備考	
								白径	高さ	底径								
1	00203	甕形	杯14番	2	F	K18	1号墳 石室南西壁	—	—	—	—	内外ロコナデ	甕	良	2.0	口縁部 1/12		
2	00203	甕形	瓶加	2	F	K17	1号墳 石室北西アゼ	—	—	—	—	外一絶手前口付 内ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 10/100.4	小片	
3	00203	土師器	丸	2	F	K17	1号墳 石室南西アゼ	—	—	—	—	内外一環	甕	良	2.5	口縁部 10/100.4		
4	00202	土師器	小壺	2	F	K17	1号墳 石室N1~9	11.0	10.5	—	—	内外一環 口コナデ	甕	良	2.5	口縁部 10/108.4	1/12	
5	03002	甕形	瓦甕	2	F	K18	1号墳石室下層	2.3×2.3 160.4	—	—	—	観念金蓋	—	—	—	金蓋良好	2012-Y-90-2	
6	03001	甕形	瓦甕	2	F	K18	1号墳石室アゼ	2.3×2.4 160.7	—	—	—	観念金蓋	—	—	—	金蓋良好	2012-Y-90-1	
7	00201	土師器	瓶	2	F	K18	1号墳 石室アゼ	—	—	—	—	内外一環	心不 良	良	10/108.4	1/12		
8	00207	甕形	高杯	2	F	K18	1号墳南西壁 N1~9北西壁	9.9	8.1	9.1	—	内外ロコナデ 頸部心不良	心不 良	良	2.5	口縁部 10/107.1	4/12	無蓋
9	00201	甕形	杯14番	2	F	J16	1号墳 南西アゼ	—	—	—	—	内外ロコナデ	心不 良	良	2.5	口縁部 N3/1	1/12	
10	00204	甕形	杯14番	2	F	L16	南西アゼ	—	—	—	—	内外ロコナデ	心不 良	良	2.5	口縁部 N7/1	1/12	
11	00104	甕形	高杯	2	F	K16	1号墳 南西アゼ	11.2	—	—	—	内外ロコナデ	心不 良	良	2.5	口縁部 5.5/96.1	2/12	
12	00106	甕形	高杯	2	F	J17	1号墳 南西西側アゼ	—	—	8.4	—	内外ロコナデ	心不 良	良	2.5	口縁部 N6/1	1/12	
13	00206	土師器	丸	2	F	K16	1号墳 南西アゼ	—	—	—	—	内外一環	甕	良	2.5	口縁部 10/108.4	1/12	
14	00105	甕形	杯14番	2	F	K18	1号墳 南西南西壁	—	—	—	—	各ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	心不 良	良	2.5	口縁部 N3/1	1/12	
15	00101	甕形	杯14番	2	F	K19	南アゼ	12.7	4.0	—	—	各ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	心不 良	良	2.5	口縁部 10/17.1	3/12	
16	02701	甕形	杯14番	2	F	—	1号墳南側 墳頂上	11.5	—	—	—	内外一環	甕	良	2.5	口縁部 N6/2	3/12	
17	00102	甕形	杯14番	2	F	K19	南アゼ	9.4	—	—	—	各ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	心不 良	良	2.5	口縁部 N3/1	1/12	
18	02702	甕形	杯14番	2	F	—	1号墳南側 墳頂上	11.9	—	—	—	各ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	心不 良	良	2.5	口縁部 N3/1	1/12	
19	02703	甕形	杯14番	2	F	—	1号墳南側墳頂? 墳上	—	—	—	—	内外ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 2.5/92.1	1/12	
20	00103	甕形	杯14番	2	F	K19	1号墳 南アゼ	—	—	—	—	各ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	心不 良	良	2.5	口縁部 N3/1	1/12	
21	02708	甕形	無台杯	2	F	—	1号墳南側 墳頂上	5.8	3.5	5.4	—	各ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	心不 良	良	2.5	口縁部 2.5/92.2	2/12	
22	02802	甕形	無台杯	2	F	K16	1号墳南側 アゼ内	—	—	8.0	—	各ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	心不 良	良	2.5	口縁部 10/96.1	3/12	底外縁崩れ
23	02801	甕形	杯14番	2	F	—	1号墳南側 墳頂上	—	—	10.8	—	各ロコナデ、ロコナデ、 内ロコナデ	心不 良	良	2.5	口縁部 N3/1	1/12	内底式方縁 外心方縁
24	02704	甕形	高杯	2	F	—	1号墳南側 墳頂上	—	—	—	—	内外ロコナデ	心不 良	良	2.5	口縁部 N3/1	1.5/12	
25	03303	甕形	壺	2	F	—	1号墳南側 墳頂上	—	—	—	—	各一環、 内ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 10/112	1/12	
26	02901	甕形	壺	2	F	—	1号墳南側 墳頂上	—	—	—	—	各ロコナデ、カキメノ 内ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 N4/1	1/12	
27	03104	土師器	高杯	2	F	—	1号墳南側 墳頂上	—	—	—	—	内外一環	甕	良	2.5	口縁部 N4/1	1/12	
28	03102	土師器	壺	2	F	—	1号墳南側 墳頂上	—	—	—	—	内外一環	甕	良	2.5	口縁部 N4/1	1/12	
29	00506	甕形	杯14番	2	F	L14	2号墳 石室	—	—	—	—	各ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 N4/1	1/12	口上同一か
30	00502	甕形	杯14番	2	F	K14	2号墳 石室	—	—	—	—	内外ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 10/104.1	1/12	口上同一か
31	00507	甕形	杯	2	F	L14	2号墳 石室	—	—	—	—	内外ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 N2/1	1/12	
32	00508	甕形	杯	2	F	L14	2号墳 石室	—	—	—	—	各一環、 内ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 N2/1	1/12	
33	00801	甕形	高杯	2	F	L14	2号墳 石室	11.8	8.4	9.0	—	各ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 N2/1	1/12	
34	00703	甕形	台付 長脚壺	2	F	L14	2号墳 石室	6.9	21.5	8.8	—	各ロコナデ、沈積、銅突 内ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 2.9/71.2	10/112	台付口 底底心アゼ
35	03401	甕形	板状	2	F	L14	2号墳 南西壁	2.3×2.8×0.3	—	—	—	—	—	—	—	—	破片	2012-Y-90-5
36	00702	甕形	杯14番	2	F	K15	2号墳南西上層 石室	13.8	3.9	—	—	各一環、 内ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 7.5/93.1	1/12	
37	03002	甕形	アズシ 瓶	1	F	M17	2号墳南西上層 石室	—	—	—	—	内外ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 2.5/95.1	6/12	遺失した把手
38	00402	甕形	杯14番	2	F	K13	2号墳 南西壁	10.4	3.1	—	—	各ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 2.5/91	1/12	深存
39	00404	甕形	杯14番	2	F	J14	2号墳 南西壁	9.0	3.3	—	—	各ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 2.5/92.2	3/12	
40	00404	甕形	杯14番	2	F	J14	2号墳 南西壁	—	—	—	—	内外ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 2.5/96.1	2/12	
41	00407	甕形	杯14番	2	F	J14	2号墳 南西壁	—	—	—	—	内外ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 2.5/95.1	1.5/12	口上同一か
42	00403	甕形	杯	2	F	J14	2号墳 南西壁	—	—	—	—	内外ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 2.5/91	3/12	
43	00903	甕形	高杯	2	F	K13	2号墳 南西壁	—	—	—	—	各ロコナデ、沈積 内ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 2.5/91	12/12	3段式方縁
44	00405	甕形	高杯	2	F	J14	2号墳 南西壁	—	—	8.9	—	内外ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 2.5/97.1	3/12	
45	00401	甕形	台付壺	2	F	J14	2号墳 南西壁	—	—	—	—	各ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 2.5/96.1	2/12	釜式
46	00602	甕形	直口壺	2	F	K13	2号墳 南西壁	—	—	—	—	内外ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 2.5/97.1	1/12	
47	00701	甕形	直口壺	2	F	J14	2号墳 南西壁	9.5	5.4	—	—	各ロコナデ、 内ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 2.5/96.2	1/12	
48	00901	甕形	模範	2	F	J13	2号墳 南西壁	—	—	—	—	各ロコナデ、 内ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 2.5/97.1	2/12	
49	00605	甕形	模範	2	F	J13	2号墳 南西壁	—	—	—	—	各ロコナデ、 内ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 2.5/97.1	2/12	
50	00406	甕形	壺	2	F	J14	2号墳 南西壁	—	—	9.9	—	各ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	甕	良	2.5	口縁部 N3/1	2/12	南面あり

第 11 表 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺物観察表(2/16)

報告番号	発掘番号	種別	器種等	次数	大地区	ブロン	出土遺物		数量(個)			調査技法の特徴	出土	検定	色調	残存	備考
							目録	数量	状況	調査技法の特徴							
51	00802	冢形跡	平版	2	F	J13	2号墳南側	—	—	15.2	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	底部		
52	01002	冢形跡	埴	2	F	K13	2号墳南側	14.8	—	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
53	00901	冢形跡	埴	2	F	K12	2号墳南側	—	—	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
54	01006	冢形跡	埴	2	F	L12	2号墳南側	—	—	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
55	00604	冢形跡	埴	2	F	J13	2号墳南側	17.4	—	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
56	01003	冢形跡	杯状	2	F	K15	2号墳南側	—	—	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
57	00903	冢形跡	杯	2	F	K14	2号墳南側	—	—	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
58	00305	冢形跡	杯	2	F	K13	2号墳南側	—	—	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
59	01004	冢形跡	蹄	2	F	—	2号墳南側	—	—	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
60	01005	冢形跡	高杯	2	F	—	2号墳南側	—	9.8	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
61	00301	冢形跡	杯状	2	F	J14	2号墳南側	—	—	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
62	02805	冢形跡	高杯	2	F	—	2号墳南側	—	—	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
63	02806	冢形跡	高杯	2	F	—	2号墳南側	—	—	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
64	03601	冢形跡	瓶	2	F	—	2号墳南側	—	—	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
65	03301	冢形跡	平版	2	F	—	2号墳南側	—	—	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
66	01003	冢形跡	杯状	3	F	B11	3号墳南側	—	—	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
67	01005	冢形跡	杯状	3	F	B10	3号墳南側	(11.2)	—	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
68	01001	冢形跡	高杯	3	F	B11	3号墳南側	10.1	10.1	8.8	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
69	01002	冢形跡	高杯	3	F	B10	3号墳南側	10.5	—	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
70	01004	冢形跡	高杯	3	F	B11	3号墳南側	—	—	7.2	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
71	01006	冢形跡	高杯	3	F	C10	3号墳南側	—	—	18.2	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
72	00304	冢形跡	無台杯	3	F	—	3号墳南側	12.9	4.2	3.7	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
73	01007	冢形跡	瓶	3	F	B9	3号墳南側	7.0	5.2	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
74	02803	冢形跡	埴	3	F	B9	3号墳南側	16.5	—	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
75	03302	冢形跡	瓶	3	F	C12	3号墳南側	—	—	4.3	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
76	03303	上製土	輪郭	3	F	—	3号墳南側	—	—	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
77	03001	冢形跡	杯状	3	F	B15	4号墳南側	10.8	3.7	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
78	04001	冢形跡	杯状	3	F	B15	4号墳南側	10.8	4.1	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
79	05001	冢形跡	杯状	3	F	B15	4号墳南側	11.1	3.3	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
80	03004	冢形跡	杯状	3	F	A16	4号墳南側	11.0	3.1	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
81	04003	冢形跡	杯状	3	F	B15	4号墳南側	9.2	3.1	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
82	04002	冢形跡	杯状	3	F	B15	4号墳南側	9.6	3.6	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
83	03005	冢形跡	高杯	3	F	B15	4号墳南側	9.4	6.9	7.4	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
84	03003	冢形跡	瓶	3	F	B15	4号墳南側	8.5	9.8	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
85	03002	冢形跡	平版	3	F	B15	4号墳南側	4.1	12.2	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
86	04005	上製土	輪郭	3	F	B15	4号墳南側	—	—	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
87	03001	冢形跡	瓦葺	3	F	B15	4号墳南側	2.4×2.4	16.0.5	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
88	03003	冢形跡	瓦葺	3	F	A16	4号墳南側	1.9×1.7	16.0.4	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
89	04004	冢形跡	無台杯	3	F	D13	4号墳南側	12.7	4.4	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
90	04006	冢形跡	杯状	3	F	A16	4号墳南側	(15.7)	—	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
91	04003	冢形跡	杯状	3	F	E15	5号墳南側	—	—	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
92	00603	冢形跡	杯状	3	F	E15	5号墳南側	—	—	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
93	00602	冢形跡	杯状	3	F	E15	5号墳南側	—	—	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
94	00601	冢形跡	杯状	3	F	E15	5号墳南側	10.1	4.0	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
95	00601	冢形跡	台形	3	F	E16	5号墳南側	(13.6)	9.9	9.6	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
96	00607	冢形跡	高杯	3	F	E16	5号墳南側	14.0	2.8	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
97	00604	冢形跡	高杯	3	F	E14	5号墳南側	—	—	11.8	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
98	00605	冢形跡	高杯	3	F	E16	5号墳南側	—	—	7.0	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
99	07003	冢形跡	埴	3	F	V4-6	5号墳南側	23.2	—	—	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		
100	00606	上製土	瓦	3	F	E16	5号墳南側	16.0	9.0	7.6	赤土ナリ、赤土、ロコナデ	赤土	良	灰白	口縁部		

第 12 表 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺物観察表 (3/16)

報告番号	発掘番号	種類	器種等	次数	大地区	プラン	出土遺構 出土層位	位置 (m)			調整技法の特徴	粘土	色調	残存	備考
								目標	起点	終点					
101	10802	土師器	甕	3	E	V6	5号墳 埋込 遺物	(12.4)	—	6.2	赤土質、黒化、ハケム、ロコナデ 内:工具ナゲテ、ハケム	小 心 良	紅 10V97.2	3/12	様式なし
102	10804	土師器	把手	3	E	V5	5号墳 埋込 遺物	—	—	—	内:赤土ナゲテ、ハケム	小 心 良	紅 10V88.6	1/12	把手のみ
103	10804	陶製瓦	瓦葺	3	E	V5	5号墳 埋込 遺物	—	—	2.45×2.3×0.6	編土金蓋	—	—	不具	2010-Y-02-17
104	11002	須恵器	杯口埴	3	E	X5	5号墳 埋込 遺物	08.0	—	—	赤ロコナデ9、ロコナデ 内:赤ロコナデ	小 心 良	灰 2.5V9.1	1/12	自然結
105	11005	須恵器	杯口埴	3	E	X6	5号墳 埋込 遺物	09.20	—	—	内:赤ロコナデ	小 心 良	灰 5V8.3	1/12	須恵器
106	10901	須恵器	甕	3	E	X3	5号墳 埋込 遺物	17.4	32.0	—	赤土質ナゲテ、沈澱、ロコナデ 内:赤土ナゲテ、工具痕、ロコナデ	小 心 良	灰 2.5V9.1	6/12	赤土質ハナクサ
107	11003	土師器	甕	3	E	X3	5号墳 埋込 遺物	16.0	—	—	赤土ナゲテ	小 心 良	2.5V97.6	2/12	—
108	11001	土師器	甕	3	E	X3	5号墳 埋込 遺物	22.6	—	—	内:赤土ナゲテ、ロコナデ	小 心 良	灰 10V82.2	5/12	—
109	11004	土師器	甕	3	E	X5	5号墳 埋込 遺物	—	—	—	内:赤土ナゲテ	小 心 良	灰 10V82.2	1/12	—
110	10701	須恵器	付付物	3	E	V6	5号墳埋込 遺物	(14.0)	09.0	(0.8)	赤ロコナデ9、沈澱、ロコナデ 内:赤ロコナデ	小 心 良	灰 5V8.3	6/12	赤土質
111	10702	須恵器	高林杯	3	E	V6	5号墳埋込 遺物	10.0	10.6	8.2	赤ロコナデ9、沈澱、ロコナデ 内:赤土ナゲテ、ロコナデ	小 心 良	灰 5V8.3	9/12	2段2通孔、上 段真鍮止
112	11006	須恵器	無台杯	3	E	—	5号墳 埋込 遺物	11.2	4.0	6.0	赤土ナゲテ、ロコナデ 内:赤土ナゲテ	小 心 良	灰 5V8.3	6/12	—
113	11007	須恵器	杯口埴	3	E	—	5号墳 埋込 遺物	14.5	5.2	9.5	赤ロコナデ9、ロコナデ 内:赤土ナゲテ	小 心 良	灰 2.5V9.1	2/12	—
114	11201	須恵器	杯口埴	3	E	U2	6号墳 埋込 遺物	8.0	4.1	—	赤土ナゲテ9、ロコナデ 内:赤土ナゲテ	小 心 良	灰 10V7.1	6/12	完存
115	11101	須恵器	平盤	3	E	U3	6号墳埋込 遺物	10.9	—	—	赤土ナゲテ9、平打ナゲテ、沈澱 内:赤土ナゲテ、赤土ナゲテ	密 良	灰 10V97.2	11/12	自然結 把手
116	10903	陶製瓦	瓦葺	3	E	U2	6号墳埋込 遺物	2.25×2.1×0.5	—	—	編土金蓋	—	—	不具	2010-Y-02-18
117	10901	陶製瓦	瓦葺	3	E	U1	6号墳埋込 遺物	種取部長9.7 総取部長13.0 9.0×3.0	—	—	—	—	—	2分厚で 割換	2010-Y-03-13
118	11003	須恵器	杯口埴	3	E	W1	6号墳 埋込 遺物	8.6	3.0	—	赤ロコナデ9、ロコナデ 内:赤土ナゲテ	小 心 良	灰 2.5V9.2	3/12	自然結
119	11702	須恵器	無台杯	3	E	V25	6号墳 埋込 遺物	(0.4)	3.7	—	赤土ナゲテ、ロコナデ 内:赤土ナゲテ	小 心 良	灰 2.5V9.1	6/12	赤土大
120	11701	須恵器	無台杯	3	E	V25	6号墳 埋込 遺物	(11.6)	—	—	赤土ナゲテ、ロコナデ 内:赤土ナゲテ	小 心 良	灰 5V7.3	4/12	赤土大
121	11704	須恵器	杯口埴	3	E	W1	6号墳 埋込 遺物	16.6	3.4	12.0	赤土ナゲテ9、ロコナデ 内:赤土ナゲテ	密 良	灰 1.5V9.1	4/12	—
122	11703	須恵器	杯口埴	3	E	L25	6号墳 埋込 遺物	16.4	4.6	10.6	赤土ナゲテ9、ロコナデ 内:赤土ナゲテ、ロコナデ	小 心 良	灰 5V7.3	6/12	—
123	11802	須恵器	杯口埴	3	E	S1	6号墳 埋込 遺物	—	—	9.9	赤土ナゲテ9、ロコナデ 内:赤土ナゲテ、土ナゲテ	密 良	灰 2.5V9.1	6/12	内蔵部 破損小 赤土ナゲテ
124	11801	須恵器	長頸甕	3	E	T3	6号墳埋込 遺物	(7.40)	16.4	6.2	赤土ナゲテ9、沈澱、編土列文 内:赤土ナゲテ	小 心 良	灰 2.5V9.1	9/12	—
125	11705	須恵器	甕	3	E	W1	6号墳 埋込 遺物	26.6	—	—	内:赤土ナゲテ	密 良	灰 2.5V9.1	2/12	自然結
126	10901	石製品	成石	3	E	U2	6号墳石室 埋込 遺物	(12.3×13.0×4.9 1.30g)	—	—	使用面粗	—	—	—	編土列文 砂岩
127	11101	須恵器	模範杯	3	E	S2	6号墳 埋込 遺物	13.8	—	—	赤土ナゲテ9、ロコナデ 内:赤土ナゲテ、土ナゲテ	小 心 良	灰 2.5V9.1	11/12	—
128	11203	須恵器	長頸甕	3	E	L25	6号墳 埋込 遺物	8.4	—	—	内:赤土ナゲテ	密 良	灰 5V7.3	3/12	全面自然結
129	11302	須恵器	長頸甕	3	E	L25	6号墳埋込 遺物	—	—	—	赤土ナゲテ9、ロコナデ 内:赤土ナゲテ	小 心 良	灰 5V7.3	4/12	自然結
130	11301	須恵器	長頸甕	3	E	V25	6号墳埋込 遺物	42.0	—	—	赤土ナゲテ9、沈澱、編土列文 内:赤土ナゲテ	密 良	灰 2.5V9.2	2/12	自然結
131	11601	須恵器	甕	3	E	V25	6号墳埋込 遺物	40.0	—	—	内:編土列文瓦具片、ロコナデ	密 良	2.5V9.2	2/12	自然結
132	11401	須恵器	甕	3	E	L25	6号墳埋込 遺物	—	—	—	赤土ナゲテ9、ロコナデ 内:編土列文瓦具片、ロコナデ	密 良	灰 10V82.2	5/12	自然結
133	11401	石製品	成石	3	E	L25	6号墳埋込 遺物	(13.5×11.0面×3.9 0.90g)	—	—	使用面粗	—	—	—	編土列文 砂岩
134	11004	須恵器	無台杯	3	E	V1	6号墳 埋込 遺物	(12.0)	4.2	—	赤土ナゲテ9、編土列文、ロコナデ 内:赤土ナゲテ、ロコナデ	密 良	灰 2.5V9.1	1/12	赤土大
135	11905	須恵器	杯口埴	3	E	V1	6号墳 埋込 遺物	9.2	3.7	6.3	赤土ナゲテ9、ロコナデ 内:赤土ナゲテ	密 良	灰 5V7.3	5/12	赤土大 内:赤土大 瓦葺片
136	11904	須恵器	杯口埴	3	E	W2	6号墳 埋込 遺物	15.0	3.8	11.0	赤土ナゲテ9、ロコナデ 内:赤土ナゲテ	小 心 良	灰 2.5V9.1	1/12	—
137	12001	須恵器	短頸甕	3	—	—	6号墳 埋込 遺物	9.9	—	—	内:赤土ナゲテ	小 心 良	灰 5V8.3	1/12	自然結
138	11802	須恵器	短頸甕	3	E	V1	6号墳 埋込 遺物	09.0	—	—	赤土ナゲテ9、沈澱 内:赤土ナゲテ	小 心 良	灰 2.5V9.2	1/12	自然結
139	11101	須恵器	長頸甕	3	E	V1	6号墳 埋込 遺物	—	—	7.6	赤土ナゲテ9 内:赤土ナゲテ	小 心 良	灰 2.5V9.2	7/12	内:自然結
140	11903	須恵器	模範杯	3	E	V1	6号墳 埋込 遺物	—	—	—	赤土ナゲテ9、ロコナデ 内:編土列文、ロコナデ	小 心 良	灰 2.5V9.2	1/12	把手
141	12002	須恵器	高林杯	3	E	S2	6号墳 埋込 遺物	(11.9)	11.1	9.9	赤土ナゲテ9、ロコナデ 内:赤土ナゲテ9、ロコナデ	小 心 良	灰 2.5V97.6	5/12	赤土大
142	00902	須恵器	高林杯	2	F	N14	8号墳埋込 遺物	—	—	—	内:赤土ナゲテ	密 良	灰 10V97.0	1.5/12	無蓋
143	00904	須恵器	杯	2	F	M15	8号墳埋込 遺物	—	—	—	赤土ナゲテ9 内:赤土ナゲテ	密 良	灰 2.5V9.1	—	底部
144	00903	須恵器	杯	2	F	N14	8号墳埋込 遺物	—	—	—	内:赤土ナゲテ、ロコナデ 内:赤土ナゲテ	密 良	灰 10V82.2	—	底部
145	00905	土師器	甕	2	F	N16	8号墳埋込 遺物	—	—	—	内:赤土ナゲテ	小 心 良	明赤 10V82.6	1/12	自然結
146	00906	土師器	甕	2	F	M14	8号墳埋込 遺物	—	—	—	内:赤土ナゲテ	小 心 良	明赤 10V82.6	5/12	自然結
147	01001	土師器	甕	2	F	N14	8号墳埋込 遺物	—	—	—	赤土ナゲテ9、赤土ナゲテ、ハケム	小 心 良	明赤 2.5V96.6	1.5/12	—
148	03101	土師器	甕	2	F	—	8号墳埋込 遺物	—	—	—	内:赤土ナゲテ、ロコナデ	密 良	灰 10V88.4	1/12	—
149	03403	陶製瓦	不明	2	F	—	8号墳埋込 遺物	4.1×1.4×0.4	—	—	—	—	—	破片	2012-Y-06-4
150	02702	須恵器	杯口埴	2	F	—	8号墳北西側 埋込遺物	9.8	—	—	内:赤土ナゲテ	密 良	灰 5V85.1	1/12	自然結

第 13 表 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺物観察表(4/16)

報告番号	発掘番号	種類	器種等	次数	大地区	ブロン	出土遺物		位置		調整技法の特徴	粘土	焼成	色調	残存	備考
							出土層	出土層	目録	図表						
151	02803	甕形器	杯	2	F	—	8号墳南側 墳頂上土層上層ナ	—	—	—	外へツ張り、ロコナデ 内ロコナデ	悪 良	10/6/1	底面	12/12	
152	02807	甕形器	高杯	3	F	—	8号墳南側 墳頂上土層	—	—	—	外ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	悪 不良	7.5/9/4/1 12.5/10/3 7.5/9/6.3	接合部 付着		
153	12106	甕形器	杯14番	3	F	E13	10号墳 遺跡内1層	0.0	3.4	—	外ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	悪 良	5/3/1	8/12	口縁部	口縁部 付着
154	12103	甕形器	杯14番	3	F	E14	6.5%~11.6層	9.8	3.7	—	外へツ張り、ロコナデ 内ロコナデ	悪 良	5/2/1	8/12	口縁部	口縁部 付着
155	12203	甕形器	盤ナ	3	F	E14	10号墳 遺跡内16層	8.4	—	—	内内ロコナデ	悪 良	5/8/7 2.1/2	口縁部		
156	12104	甕形器	杯蓋	3	F	E13	10号墳 7.5%~5 10号墳	8.8	4.8	—	内内ロコナデ	悪 良	5/4/1	6/12	口縁部	
157	12202	甕形器	壺瓶類 フラスコ 瓶	3	F	E14	遺跡内13層	—	10.6	—	外ロコナデ 内ロコナデ	悪 良	7.5/9/4/2 2.5/2/2	8/12	口縁部	自然釉
158	12201	甕形器	瓶	3	F	E14	10号墳 遺跡内	—	—	—	外ロコナデ、ロコナデ、ナデ 内ロコナデ、ナデ	悪 良	5/4/1 5/8/7	8/12	口縁部	自然釉
159	12204	土師器	瓶	3	F	E14	10号墳 遺跡内16層	10.0	5.8	—	外ナデ、ロコナデ 内ナデ、ロコナデ	悪 良	10/18/6 10/18/6	8/12	口縁部	
160	12105	土師器	瓶	3	F	E13	10号墳 遺跡内	—	—	—	内内、炭化	悪 良	10/18/4 10/18/4	8/12	口縁部	
161	12202	土師器	把子	3	F	E14	10号墳 7.5%~5 10号墳	—	—	—	内内、炭化	悪 良	10/18/4 10/18/4	8/12	口縁部	
162	12103	土師器	把子	3	F	E14	10号墳 7.5%~3 10号墳	—	—	—	内内、炭化	悪 良	10/18/4 10/18/4	8/12	口縁部	
163	12101	甕形器	椀	3	F	F11	10号墳	10.0	(24.7)	—	外、平打外ナ、ロコナデ、ナデ 内ナデ、ロコナデ	悪 良	5/3/1	口縁部		
164	12801	甕形器	甕	3	F	F14	10号墳 埋藏	—	—	—	内、平打外ナ、ロコナデ 内、平打外ナ	悪 良	2.5/9/1 2.5/9/1	口縁部		
165	12501	甕形器	椀	3	F	F11	10号墳 埋藏上層	12.4	28.7	—	外、平打外ナ、ロコナデ 内ロコナデ、スベササニ	悪 良	2.5/9/1 2.5/9/1	6/12	口縁部	
166	12405	甕形器	杯高杯	3	F	F11	10号墳 埋藏	13.2	2.9	—	外ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	悪 良	5/4/1 5/6/7	口縁部		
167	12403	甕形器	高杯	3	F	D13	10号墳 埋藏	(15.4)	10.6	—	外ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	悪 良	5/6/7 5/6/7	口縁部		
168	12103	土師器	甕	3	F	G13	10号墳	10.4	—	—	外ナデ、ロコナデ 内ナデ、ロコナデ	悪 良	12.5/10/2 12.5/10/2	口縁部		
169	12601	甕形器	高杯	3	F	F14	10号墳 古石巻	—	9.6	—	外ロコナデ	悪 良	5/3/2/1 7/12	口縁部		
170	12104	甕形器	杯ナ	3	F	D12	10号墳 埋藏	—	(13.8)	—	外ナデ、ロコナデ、炭素 内ロコナデ	悪 不良	5/6/6/1 5/6/6/1	5/12	口縁部	
171	12602	甕形器	甕	3	F	G13	10号墳 墳頂上土層	—	—	—	内内ロコナデ	悪 不良	12.5/10/2 7.5/9/6.3	口縁部		
172	12701	甕形器	甕	3	F	F13	10号墳 古石巻	—	—	—	外ロコナデ、横線刻文、文書 内ロコナデ	悪 良	5/3/1 2.5/7/1	口縁部		
173	12604	無釉	小皿ナ	3	F	D13	10号墳 埋藏	—	4.0	—	外へツ張り、ロコナデ 内ロコナデ	悪 良	5/4/1 5/4/1	口縁部		
174	01105	甕形器	杯14番	2	F	L18	9号墳西側「ユウ」	9.8	—	—	外ナデ、ロコナデ 内ロコナデ	悪 良	5/6/1 5/6/1	口縁部		
175	01203	甕形器	杯14番	2	F	M18	9号墳西側「ユウ」	(11.4)	—	—	外ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	悪 良	5/6/1 5/6/1	口縁部		
176	01106	甕形器	杯蓋	2	F	L18	9号墳西側埋 藏了11号	—	—	—	外ロコナデ 内ロコナデ	悪 良	5/6/1 5/6/1	口縁部		
177	01403	甕形器	杯蓋	2	F	M17	9号墳北アゼ	—	—	—	外ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	悪 不良	10/13/1 5/2/1	口縁部		
178	01401	甕形器	杯蓋	2	F	L18	9号墳 西側埋藏了	—	—	—	外ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	悪 不良	5/2/1 5/2/1	口縁部		
179	01107	甕形器	杯高杯	2	F	M17	9号墳アゼ東側内	—	—	—	内内ロコナデ	悪 良	5/6/1 5/6/1	口縁部		
180	01402	甕形器	杯高杯	2	F	M17	9号墳北アゼ	—	—	—	外ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	悪 不良	12.5/10/2 5/6/6/3	口縁部		
181	01108	甕形器	杯14番	2	F	M17	9号墳アゼ西側内	9.3	—	—	外内ロコナデ	悪 良	5/6/1 5/6/1	口縁部		
182	01202	甕形器	杯14番	2	F	L18	9号墳西	9.2	—	—	外ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	悪 良	5/6/1 10/18/1	口縁部		
183	01204	甕形器	無釉杯	2	F	L18	9号墳 西側埋藏了	(10.8)	—	—	内内ロコナデ	悪 良	5/6/1	口縁部		
184	01101	甕形器	杯	2	F	L18	9号墳西	—	—	—	外へツ張り、ロコナデ 内ロコナデ	悪 良	2.5/9/1 5/6/1	口縁部		
185	01102	甕形器	杯	2	F	M17	9号墳北西側	—	—	—	外へツ張り、ロコナデ 内ロコナデ	悪 良	5/2/1	口縁部		
186	01201	甕形器	無釉杯	2	F	L18	9号墳 西側埋藏了	—	—	—	外ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	悪 良	5/6/1 5/6/1	口縁部		
187	03301	甕形器	無釉杯	2	F	M17	9号墳北 西側埋藏了	12.2	4.1	—	外へツ張り、ロコナデ 内ロコナデ	悪 不良	5/7/2/1 5/7/2/1	口縁部		
188	03302	甕形器	無釉杯	2	F	M17	9号墳北 西側埋藏了	12.8	3.9	—	外へツ張り、ロコナデ 内ロコナデ	悪 不良	5/7/2/1 5/7/2/1	口縁部		
189	01404	甕形器	杯高	2	F	M17	9号墳北西	—	10.8	—	外ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	悪 不良	5/6/1 5/6/1	口縁部		
190	01303	甕形器	杯高	2	F	M17	9号墳北西	—	9.7	—	内内ロコナデ	悪 良	5/2/1 5/2/1	口縁部		
191	01302	甕形器	杯高	2	F	M17	9号墳北西	—	8.3	—	外ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	悪 不良	5/6/1 5/6/1	口縁部		
192	01407	甕形器	杯高	2	F	M17	9号墳北西側	13.8	4.7	10.3	外ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	悪 不良	5/6/1 2.5/7/2/1	口縁部		
193	01406	甕形器	杯高	2	F	L18	9号墳西	13.5	4.5	9.7	外ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	悪 不良	5/6/1 5/6/1	口縁部		
194	01405	甕形器	杯高	2	F	L18	9号墳西	14.6	4.2	11.2	外へツ張り、ロコナデ 内ロコナデ	悪 良	5.5/7/2/1 5.5/7/2/1	口縁部		
195	01103	甕形器	杯高ナ	2	F	M17	9号墳北 西側埋藏了	—	—	—	内内ロコナデ	悪 良	2.5/9/1 2.5/9/1	口縁部		
196	01104	甕形器	杯高ナ	2	F	M17	9号墳北西	—	—	—	内内ロコナデ	悪 良	5/6/1 5/6/1	口縁部		
197	01501	甕形器	フラスコ 瓶	2	F	N18	9号墳南 アゼ埋藏了	—	10.4	—	外ロコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	悪 不良	5.5/9/1 2.5/2/2	口縁部		
198	01304	土師器	皿	2	F	M17	9号墳北西	—	—	—	外ナデ	悪 良	5.5/9/1 5.5/9/1	口縁部		
199	01303	土師器	皿	2	F	M18	9号墳 アゼ	—	—	—	外ナデ、炭化 内、炭化	悪 良	5/6/1 5/6/1	口縁部		

第 14 表 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺物観察表(5/16)

報告番号	発掘番号	種類	器種名	次数	大地区	ブロン	出土遺構 出土層位	位置 (cm)			調整技法の特徴	胎土	焼成	色	残存	備考
								目録	図説	図注						
300	01307	土師器	甕	2	F	M18	SH2377c東側内	—	—	—	内外-風化	赤心	黒	裏面	裏面部分	
301	01306	土師器	甕	2	F	M17	SH2377c東側内	—	—	—	内外-風化	赤心	黒	裏面	小片	
302	01303	土師器	甕	3	F	L18	SH238	—	—	—	外-ハナフ	赤心	黒	両面	口縁部	
303	01302	土師器	甕	2	F	L18	SH238	—	—	—	外-ハナフ	赤心	黒	両面	口縁部	
304	01307	土師器	甕	2	F	M17	SH2377c東側内	—	—	—	内外-風化	赤心	黒	裏面	小片	
305	01301	土師器	甕	2	F	M17	SH238	—	—	—	外-コナダ, 風化のため不明	赤心	黒	両面	口縁部	
306	02205	土師器	把手	2	F	L18	東西7c東半	—	—	—	内外-コナダ, オオキ	赤心	黒	両面	把手のみ	
307	01206	土師器	把手	2	F	M17	SH238	—	—	—	内外-コナダ, オオキ	赤心	黒	両面	把手のみ	
308	03001	鉄器	—	2	F	M18	SH238遺跡	23.8×16.6×7.1	—	—	上-鍛錬-鉄線	—	—	—	分館P00-1	
309	01602	甕器	杯高	2	F	N18	SH10南西	9.8	2.8	—	外-コナダ, 口コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
310	01603	甕器	杯高	2	F	N18	SH10北東	9.8	—	—	外-コナダ, 口コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
311	01601	甕器	杯高	2	F	N18	SH10北東	—	—	—	外-コナダ, 口コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
312	01606	甕器	杯高	2	F	N18	SH10東ノ芝	—	—	—	外-コナダ, 口コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
313	01607	甕器	杯高	2	F	N18	SH10北東	—	—	—	外-コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
314	01605	甕器	杯高	2	F	N18	SH10南東	—	—	—	外-コナダ, 口コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
315	01604	甕器	杯高	2	F	N18	SH10北東	—	—	—	内外-コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
316	02307	甕器	杯高	2	F	N18	SD439110	—	—	—	外-コナダ, 口コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	焼成後剥離
317	01701	甕器	杯14身	2	F	N18	SH10北東	—	—	—	内外-コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
318	02305	甕器	杯14身	2	F	Q18	SD4最上層 (SH10)	受部 10.9	—	—	内外-コナダ	赤心	黒	両面	受部	
319	01702	甕器	杯14身	2	F	N18	SH10北東	—	—	—	内外-コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	裏のみ
320	01704	甕器	無台杯	2	F	N18	SH10 東西7c東半	9.9	3.4	0.8	外-コナダ, 口コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
321	01703	甕器	無台杯	2	F	N18	SH10	10.3	4.3	0.4	外-コナダ, 口コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
322	02301	甕器	杯	2	F	N18	SD439110	11.7	—	—	内外-コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
323	01707	甕器	杯	2	F	N18	SH10南東	—	—	—	外-ハナフ指物板状底, 口コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
324	01706	甕器	杯	2	F	N18	SH10南東	—	—	—	外-ハナフ指物, 口コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
325	02306	甕器	杯	2	F	N18	SD439110	—	—	—	外-ハナフ指物, 口コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
326	01801	甕器	杯	2	F	N18	SH10南西	—	—	8.2	外-コナダ, 口コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
327	01803	甕器	杯	2	F	N18	SH10南西	—	—	7.8	外-コナダ, 口コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
328	01802	甕器	杯	2	F	N18	SH10北東	—	—	7.0	外-コナダ, 口コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
329	02302	甕器	杯	2	F	N18	SH10	—	—	9.0	外-コナダ, 口コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	内腹積
330	02301	甕器	杯	2	F	N18	SH10北西	14.2	—	—	内外-コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
331	01708	甕器	杯	2	F	N18	SH10 東西7c東半	—	—	—	外-コナダ, 口コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
332	02408	甕器	杯	2	F	N18	SD439110	—	4.2	—	外-コナダ, 口コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
333	01705	甕器	盤子	2	F	N18	SH10南西	—	—	—	内外-コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
334	02304	甕器	高杯	2	F	—	SD439110	—	—	—	外-コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
335	02303	甕器	高杯	2	F	Q18	SD4最上層 (SH10)	—	—	7.5	内外-コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
336	02304	甕器	長筒蓋	2	F	N18	SH10	—	—	—	外-コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
337	02303	甕器	蓋	2	F	N18	SH10北東	—	—	—	内外-コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
338	02001	甕器	蓋	2	F	N18	SH10	—	—	—	外-ハナフ指物, 口コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
339	01806	土師器	杯	2	F	N18	SH10北東	—	—	—	外-コナダ, 口コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
340	01805	土師器	杯	2	F	N18	SH10北東	—	—	—	内外-コナダ, 長針脚型	赤心	黒	両面	口縁部	
341	01901	土師器	甕	2	F	N18	SH10南西	—	—	—	内外-風化	赤心	黒	両面	口縁部	
342	01804	土師器	甕	2	F	N18	SH10北東	—	—	—	内外-風化	赤心	黒	両面	口縁部	
343	01901	土師器	甕	2	F	N18	SH10北東	—	—	—	内外-風化	赤心	黒	両面	口縁部	
344	01903	土師器	鉢-甕	2	F	N18	SH10北西	—	—	—	内外-風化	赤心	黒	両面	口縁部	
345	02302	甕器	—	2	F	N18	SD439110	—	5.2	—	内外-コナダ, オオキ	赤心	黒	両面	口縁部	
346	03301	鉄器	金輪	2	F	—	SH10	23.4×2.6×1.7	—	—	—	—	—	—	志摩式	
347	13401	土師器	手付瓶	3	E	U10	SH28南東側	22.5	—	—	外-ハナフ, 口コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
348	13302	土師器	甕	3	E	T11	SH32	12.8	—	—	外-風化, ハナフ, 口コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	
349	13303	甕器	無台杯	3	E	S12	Nc-6	(11.1)	—	—	外-ハナフ, 口コナダ	赤心	黒	両面	口縁部	

第 15 表 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺物観察表(6/16)

報告番号	発掘番号	種類	器種名	次数	大地区	F/T	出土遺構上の位置	面積(cm)		遺体	調整技法の特徴	胎土	成形	色調	残存	備考
								口径	取皿							
230	13304	須恵器	高杯	3	E	S12	SH34 No.1	—	—	—	内外のロコナデ	不心 良	黄	6/12	属化	
231	13301	土師器	長脚盤	3	E	S12	SH34 No.1	21.6	34.8	—	外ノテ、タテリ、ハテ、ヨコナデ 内ノテ、オビナデ、ヨコナデ	不心 良	黄	10/27/6	4/13	
232	13002	須恵器	杯14番	3	E	X13	SH35	9.8	3.2	—	外ノコナデ、ロコナデ 内ノコナデ	不心 不心 不心	黄 黄 黄	口縁部 口縁部 口縁部	1/12	
233	18303	須恵器	杯14番	3	E	W12	PH1 No.3-5 →SH47の属化?	9.8	3.5	—	外ノコナデ、ロコナデ 内ノコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12 1/12	
234	18306	須恵器	杯14番	3	E	W12	PH1 No.1-4 →SH47の属化?	9.8	—	—	外ノコナデ、ロコナデ 内ノコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12 1/12	
235	13003	須恵器	無台杯	3	E	X13	SH35	—	—	6.9	外ノテ、ナデ 内ノテ	不心 不心	黄 黄	口縁部 口縁部	6/12	
236	13001	土師器	甕	3	E	W13	SH35	—	—	—	内ノハケ、ヨコナデ 内ノハケ、ヨコナデ	不心 不心	黄 黄	口縁部 口縁部	2/12	
237	18305	土師器	甕	3	E	W12	PH1 No.2 →SH47の属化?	20.9	—	—	外ノハケ、ヨコナデ 外ノハケ、ヨコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	2/12	
238	14001	土師器	甕	3	E	U13	SH37 カマツ	18.0	—	—	内外属化	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	3/12	
239	14002	土師器	甕	3	E	U13	SH37 カマツ	22.0	—	—	内外属化	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	2/12	
240	14202	土師器	皿	3	E	T16	SH61カマツ →SH62	—	—	—	外ノヒラキ、ヨコナデ 内ノハケ、ヨコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	2/12	
241	14203	土師器	甕	3	E	T16	SH61	—	—	—	外ノハケ、ヨコナデ、ヨコハケ 内ノハケ、ヨコハケ、ヨコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
242	14301	土師器	甕	3	E	T16	SH61	—	—	—	外ノハケ、ヨコナデ 内ノハケ、ヨコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
243	14102	須恵器	杯14番	3	E	W15	SH54	10.2	—	—	外ノコナデ、ロコナデ 内ノコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
244	14005	須恵器	長脚盤	3	E	W15	SH54	9.2	—	—	外ノコナデ、額縁短辺文 内ノコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
245	14101	須恵器	甕	3	E	W15	SH54	20.6	—	—	外ノコナデ 内ノハケ、ヨコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
246	14103	須恵器	甕	3	E	W15	SH54	—	—	—	外ノコナデ 内ノハケ、ヨコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
247	14304	須恵器	杯14番	3	E	X17	SH62	9.8	2.8	—	外ノコナデ、ロコナデ 内ノコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
248	14305	須恵器	杯14番	3	E	X17	SH62	10.2	—	—	外ノコナデ、ロコナデ 内ノコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
249	14306	須恵器	甕	3	E	X17	SH62+PH2	11.6	—	—	内外のロコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
250	14205	土師器	甕	3	E	X17	SH62	14.7	—	—	外ノテ、ハテ、ロコナデ 内ノハケ、ヨコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
271	14204	土師器	甕	3	E	X17	SH62 カマツ	13.5	—	—	外ノハケ、ヨコナデ 内ノテ、ヨコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
272	14301	土師器	甕	3	E	X17	SH62	22.1	—	—	内外属化、ロコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
273	14302	土師器	把手	3	E	X17	SH62	—	—	—	外ノテ、ユビオビナデ 内ノユビオビナデ	不心 良	黄 黄	把手のみ 把手のみ	1/12	
274	14303	土師器	把手	3	E	X17	SH62	—	—	—	外ノテ、ユビオビナデ 内ノユビオビナデ	不心 良	黄 黄	把手のみ 把手のみ	1/12	
275	19402	帆立貝	群	3	E	X17	SH62	(12.7)×(6.4)×(0.4)	—	—	—	—	—	上下文脈	2013-Y-02-14	
276	14404	須恵器	杯6	3	E	W19	SH65	14.2	3.5	9.5	内外のロコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
277	14405	土師器	甕	3	E	W19	SH65	—	—	—	内外属化、ロコナデ 内ノハケ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
278	14403	土師器	甕	3	E	X19	SH65	—	—	—	内外属化	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
279	14406	土師器	把手	3	E	W19	SH65	—	—	—	内外のヒラキ、ナデ	不心 良	黄 黄	把手のみ 把手のみ	1/12	
280	18403	須恵器	杯14番	3	E	X16	PH3 →SH47の属化?	11.3	—	—	内外のロコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
281	18401	須恵器	杯14番	3	E	X16	PH3 No.1 →SH47の属化?	9.2	4.0	—	外ノテ、ロコナデ 内ノコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
282	18402	土師器	甕	3	E	X16	PH3 No.2 →SH47の属化?	18.8	—	—	外ノハケ、ヨコナデ 内ノハケ、ヨコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
283	14301	土師器	長脚盤	3	E	W16	SH66カマツ No.2	21.6	—	—	外ノハケ、ヨコナデ 内ノハケ、オビナデ、ヨコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
284	14001	土師器	甕	3	E	X17	SH66	9.8	—	—	外ノハケ、ヨコナデ、外ハケ部(腰ハケ部) 内ノオビナデ、ヨコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
285	14003	須恵器	高杯	3	F	H08	SH71	—	—	—	内外のロコナデ	不心 良	黄 黄	杯底部	1/12	
286	14002	須恵器	無台杯	3	F	A18	SH74 A21	13.2	—	—	外ノテ、ロコナデ、ロコナデ 内ノコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	2/12	
287	14003	土師器	甕	3	F	A18	SH74	—	—	11.0	内外のロコナデ 内ノハケ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
288	14001	土師器	甕	3	F	A18	SH74 カマツ	19.1	—	—	外ノコナデ 内ノハケ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	2/12	
289	19401	帆立貝	不明	3	F	A18	SH74	(3.2)×(0.6)×(0.25)	—	—	—	—	—	上下文脈	2013-Y-02-13	
290	19301	帆立貝	品	3	F	A20	SH76	(13.1)×(6.4)×(0.4)	—	—	—	—	—	中央で 折損	2013-Y-02-9	
291	14005	土師器	皿	3	F	H19	SH78 No.1	29.1	3.6	—	外ノハケ、ナデ、ヨコナデ 内ノハケ、ヨコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
292	14001	土師器	甕	3	F	H19	SH78 No.2(カマツ)	30.6	—	—	外ノハケ、ヨコナデ 外ノハケ、ヨコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
293	14004	土師器	甕	3	F	A19	SH78 No.2	14.4	—	—	外ノコナデ 内ノコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
294	15103	土師器	把手	3	F	H19	SH78	—	—	—	外ノオビナデ 内属化	不心 良	黄 黄	把手のみ 把手のみ	1/12	
295	15102	輪式土 土師	甕	3	F	H19	SH78	—	—	—	外ノテ、ヨコナデ 内ノ当具、ヨコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
296	15101	輪式土 土師	甕	3	F	H19	SH78 No.2(カマツ)	(15.0)	—	—	内ノ当具、オビナデ、ヨコナデ 外ノハケ、ヨコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
297	14002	輪式土 土師	甕	3	F	H19	SH78 No.2(カマツ)	—	—	—	内ノ当具、ユビオビナデ、ヨコナデ 外ノハケ、ヨコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
298	15102	輪式土 土師	甕	3	F	H19	SH78 No.2(カマツ)	20.8	—	—	外ノオビナデ、ヨコナデ 内ノ当具、オビナデ、ヨコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	
299	15101	輪式土 土師	甕	3	F	H19	SH78 No.2(カマツ)	19.2	—	—	外ノオビナデ、オビナデ、ヨコナデ 内ノ当具、オビナデ、ヨコナデ	不心 良	黄 黄	口縁部 口縁部	1/12	

第 16 表 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺物観察表 (7/16)

報告番号	発掘番号	種類	器種等	次数	大地区	プラン	出土遺構 土上層位	位置 (cm)			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
								目録	取皿	底径						
300	15061	陶土器	壺	3	F	B19	SH79 No.6(東ノツ)	—	—	—	外周縁に文字タガキ能力あり	小不 心	黄褐色	ほぼ完全	5.4cm	
301	15063	須恵器	杯蓋高	3	F	C22	SH80	17.4	—	—	内口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	7.4cm	
302	15063	須恵器	杯蓋高	3	F	C22	SH80+P32	—	—	—	内口ハコシ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	7.4cm	
303	15062	須恵器	杯蓋高	3	F	C22	P32 =SH80(東ノツ)	18.1	4.0	12.7	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
304	15064	須恵器	杯蓋高	3	F	C23	SH81	(10.6)	—	—	内口ハコシ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	7.12	
305	15401	須恵器	壺	3	F	C23	SH81	19.4	2.8	11.8	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
306	15066	須恵器	横瓶	3	F	C23	SH81	10.0	—	—	内口ハコシ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	11.12	
307	15301	土師器	壺	3	F	C23	SH81	15.8	—	—	内口ハコシ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	7.12	
308	15305	土師器	杯	3	F	C23	SH81	(10.6)	—	—	内口ハコシ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	7.12	
309	19304	鉄製土	蓋	3	F	B23	SH81	—	—	—	—	—	—	—	2013-Y-02-12	
310	15402	土師器	杯	3	E	Y23	SH82	12.2	2.4	—	外周縁に文字、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	3.12	
311	15603	須恵器	無台杯	3	E	Y23	P32 No.1 SH82 No.1	12.7	3.9	—	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	7.4cm	
312	15602	須恵器	無台杯	3	E	Y23	SH82	—	—	6.3	外周縁に、ロコナデ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	7.4cm	
313	15503	須恵器	壺	3	E	Y23	SH82(東ノツ)	20.0	2.9	10.6	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
314	15601	須恵器	壺	3	E	Y23	SH82	(23.0)	4.5	13.2	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
315	15403	土師器	壺	3	E	Y23	SH82	23.4	2.9	—	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
316	15501	土師器	壺	3	E	Y23	SH82 カマシ	—	—	—	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
317	15604	須恵器	杯14号	3	F	D24	SH82(東ノツ)	8.3	—	—	内口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	7.12	
318	15605	土師器	壺	3	F	C24	SH84カマシ No.1	22.8	—	—	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
319	15701	土師器	壺	3	F	C24	SH84	(14.2)	—	—	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
320	15606	土師器	有孔 付壺	3	F	C24	SH84	—	—	—	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
321	18304	土師器	高杯	3	F	H4	P32 =SH89カマシ	12.8	—	—	内口ハコシ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
322	15603	須恵器	壺	3	F	E22	SH82	(11.2)	—	—	外口ハコシ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
323	15604	土師器	壺	3	F	E22	SH82 カマシNo.1	10.4	—	—	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
324	15602	須恵器	杯14号	3	F	M23	SH82 カマシ	11.3	—	—	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
325	15604	須恵器	高杯	3	F	M38	SH82	—	—	—	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
326	15603	須恵器	高杯	3	F	M38	SH82	—	—	—	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
327	18602	須恵器	杯14号	3	F	L23	P32 No.1 =SH107(東ノツ)	10.2	—	—	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
328	15605	須恵器	杯蓋高	3	F	M23	SH80	(13.0)	—	—	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
329	16001	須恵器	無台杯	3	F	L23	SH100	(10.8)	3.4	—	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
330	19102	心製土	磁心	3	F	L23	P35 No.2 =SH107(東ノツ)	—	—	—	使用痕1部	—	—	—	一次焼成	
331	16002	製土	土師	—	3	F	P23	SH105	—	—	外口ハコシ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
332	16102	須恵器	杯14号	3	F	O22	SH106	(10.3)	—	—	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
333	16003	土師器	杯	3	F	O22	SH106	—	—	—	内口ハコシ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
334	16101	土師器	壺	3	F	O22	SH106	(14.2)	—	—	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
335	16104	製土	土師	—	3	F	O22	SH106	—	—	外口ハコシ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
336	16103	須恵器	杯蓋高 型1号	3	F	P22	SH106	—	—	—	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
337	18601	須恵器	杯14号	3	F	O22	P30 =SH107(東ノツ)	9.8	3.1	—	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
338	18301	土師器	高杯	3	F	O22	P30 =SH107(東ノツ)	13.8	8.2	8.0	内口ハコシ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
339	16305	土師器	壺	3	F	O22	SH107	16.0	—	—	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
340	16301	土師器	壺	3	F	O22	SH107	—	—	—	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
341	16303	土師器	壺	3	F	P22	SH107	—	—	—	内口ハコシ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
342	16302	製土	土師	—	3	F	P22	SH107	—	—	外口ハコシ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
343	17104	須恵器	杯蓋高	3	H	M3	SH118	—	—	—	外口ハコシ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
344	17105	須恵器	杯蓋高	3	H	M3	SH118	(12.4)	—	—	外口ハコシ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
345	17101	土師器	壺	3	H	L3	SH118	21.4	—	—	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
346	17102	土師器	壺	3	H	M3	SH118	—	—	—	外口ハコシ、ロコナデ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
347	17103	土師器	把手	3	H	M3	SH118	—	—	—	外口ハコシ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
348	17106	須恵器	杯	3	H	O3	SH119	(16.3)	—	—	内口ハコシ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	
349	17107	土師器	杯	3	H	O3	SH119	15.0	3.7	—	内口ハコシ	密 不	黄褐色	ほぼ完全	6.12	

第 17 表 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺物観察表 (8/16)

報告番号	発掘番号	種類	器種等	次数	大地区	P/F	出土遺構 出土層位	位置 (m)		遺体	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
								日経	経基							
330	17303	甕	蓋蓋	3	H	F4	SH121	13.4	—	—	外シロコナズ、ロコナズ 内ロコナズ	小 心 無	灰 白	5.507/3	3/12	自然蝕
331	17301	土師器	甕	3	H	F4	SH121	—	—	—	内外風化	小 心 無	灰 白	10.070/4	白緑部 小片	
332	17302	土師器	甕	3	H	K4	SH130	19.2	—	—	外シロコナズ 内ロコナズ	粗 良	黄 褐色	ロコナズ 10.088/3	2/12	
333	17301	土師器	甕	3	H	K4	SH120	—	—	—	外ハナシ、風化 内風化	粗 良	灰 白	10.087/3	僅小 片	
334	17303	甕	杯蓋	3	H	O6	SH125-127	—	—	—	外シロコナズ、ロコナズ 内ロコナズ	粗 良	黄 褐色	天井部 2.535/2	5/12	内摩耗
335	17402	甕	杯蓋	3	H	O6	SH125-127	13.2	—	—	内外シロコナズ	粗 良	灰 白	ロコナズ 10.061/1	ロコナズ 2/12	
336	17401	甕	杯蓋	3	H	O6	SH125-127	(14.0)	—	—	外シロコナズ、ロコナズ 内ロコナズ	粗 良	灰 白	ロコナズ 10.061/1	ロコナズ 1/12	
337	17404	甕	杯蓋	3	H	O6	SH125-127	—	—	10.4	内外シロコナズ	粗 良	灰 白	ロコナズ 7.530/3	2/12	
338	17306	甕	蓋	3	H	O6	SH125-127	—	—	—	内外シロコナズ	粗 良	黄 褐色	天井部 2.535/2	小片	
339	17310	甕	杯	3	H	O6	SH125-127	8.0	2.2	—	外ハナシ、ロコナズ 内ロコナズ	小 心 無	灰 白	2.538/2	5/12	
300	17405	土師器	杯	3	H	O6	SH125-127	(13.6)	—	—	内外風化	粗 良	灰 白	10.088/3	ロコナズ 1/12	
301	17309	土師器	杯	3	H	O6	SH125-127	—	—	10.0	外シロコナズ 内風化	小 心 無	灰 白	7.530/2/6	3/12	
302	17308	土師器	甕	3	H	O6	SH125-127	—	—	—	内外風化	小 心 無	黄 褐色	ロコナズ 10.088/3	小片	
303	17307	土師器	甕	3	H	O6	SH125-127	—	—	—	内外風化	小 心 無	灰 白	10.087/4	1/12	
304	17305	甕	杯蓋	3	H	O6	SH125	—	—	—	外シロコナズ、ロコナズ 内ロコナズ	粗 良	灰 白	10.071/1	小片	
305	17304	甕	杯蓋	3	H	N3	SH125	—	—	—	外シロコナズ 内ロコナズ	粗 良	灰 白	10.088/3	ロコナズ 小片	高台部あり
306	17303	甕	蓋	3	H	O6	SH125	—	—	—	内外風化	小 心 無	黄 褐色	2.538/6	2/12	踏踏のみ
307	17407	甕	杯蓋	3	H	O6	SH126	13.6	3.4	10.0	外シロコナズ、ロコナズ 内ロコナズ	粗 良	灰 白	2.537/4	4/12	内摩耗
308	17406	土師器	甕	3	H	N6	SH126	—	—	—	内外風化	小 心 無	黄 褐色	ロコナズ 10.088/4	小片	
309	17408	甕	杯蓋	3	H	O6	SH127	—	—	13.2	外シロコナズ、ロコナズ 内ロコナズ	小 心 無	灰 白	2.537/1	7/12	内摩耗
270	17203	甕	杯	3	F	G9	SH131 埋没部	(16.0)	—	—	内外シロコナズ	小 心 無	灰 白	ロコナズ 10.087/1	1/12	赤み有
311	18302	甕	小型甕	3	F	F9	F93 -SH131埋没部	10.0	4.4	—	外シロコナズ、ロコナズ 内ロコナズ	小 心 無	灰 白	ロコナズ 10.087/1	1/12	赤み有
372	20103	甕	杯蓋	6	F	F7	SH132	—	—	—	内外シロコナズ	小 心 無	灰 白	10.087/1	小片	
373	20106	甕	杯	6	F	F9	SH132	—	—	—	内外シロコナズ	小 心 無	灰 白	2.537/1	2/12	
374	20107	甕	杯	6	F	F7	SH132	—	—	—	内外シロコナズ	小 心 無	灰 白	2.535/1	ロコナズ 小片	
375	20104	甕	杯	6	F	F8	SH132	—	—	—	内外シロコナズ	粗 良	灰 白	10.087/1	1/12	
376	20105	甕	甕	6	F	F7	SH132	—	—	—	外流部ハナシ埋没部、灰吹文 内ロコナズ、外風化	粗 良	灰 白	2.537/3	ロコナズ 1/12	
377	20108	甕	甕	6	F	F7	SH132	10.0	—	—	外シロコナズ、ロコナズ 外風化、内ロコナズ	粗 良	黄 褐色	2.535/2	1/12	内外自然蝕 平底
378	20102	土師器	甕	6	F	F7	SH132 No.1	17.6	—	—	内外風化	小 心 無	灰 白	2.537/6	2/12	
379	20101	土師器	甕	6	F	F7	SH132	23.0	—	—	内外風化	粗 良	灰 白	2.538/8	2/12	
380	18301	甕	杯	3	F	G10	SH134北西 No.1	10.4	—	—	内外シロコナズ	粗 良	灰 白	5.536/1	2/12	
381	17401	甕	杯	3	F	F9	SH134 No.2	11.4	—	—	内外シロコナズ	小 心 無	灰 白	2.535/1	2/12	
382	17304	甕	杯	3	F	G10	SH134 北西	—	—	—	外ハナシ埋没部、ロコナズ、ロコナズ 内ロコナズ	粗 良	灰 白	10.087/1	埋存	
383	17402	甕	小型甕	3	F	G10	SH134 北西	9.6	—	—	外シロコナズ、ロコナズ 内ロコナズ	小 心 無	灰 白	5.536/1	3/12	内外自然蝕 器体片埋存
384	18302	甕	台形甕	3	F	F9	F93 No.1	10.6	(11.5)	9.6	外シロコナズ、流部 内ロコナズ	粗 良	灰 白	2.537/2	9/12	
385	17205	土師器	甕	3	F	F9	SH134 No.1	—	—	—	内外風化、ロコナズ	粗 良	明 褐色	ロコナズ 10.088/3	小片	
386	17403	土師器	甕	3	F	G10	SH134 北西	12.4	12.5	—	外ハナシ、ハナシ、ロコナズ 内ナズ、ロコナズ	小 心 無	灰 白	2.538/2	3/12	
387	17206	土師器	甕	3	F	F9	SH134No.2埋没部 No.1	15.8	—	—	外ハナシ、ロコナズ 内ナズ、外ハナシ、ロコナズ	粗 良	灰 白	2.537/3	埋存 ロコナズ	
388	17207	土師器	甕	3	F	F9	SH134No.3埋没部 No.1	18.2	—	—	内外シロコナズ	小 心 無	灰 白	10.087/4	2/12	
389	17401	土師器	長脚甕	3	F	F9	SH134 No.8	19.8	—	—	内外ハナシ、ロコナズ 風化	粗 良	灰 白	2.538/4	10/12	外一部に僅
390	18101	土師器	長脚甕	3	F	F9	SH134 No.9	20.0	—	—	内外ハナシ、ロコナズ 風化	粗 良	黄 褐色	10.088/4	ロコナズ 1/12	
391	18001	土師器	手付甕	3	F	F9	SH134 No.1-3+4+5	35.4	—	—	内外ハナシ、ロコナズ 内風化	粗 良	灰 白	10.087/6	4/12	
392	20302	土師器	甕	6	D	D2	SH134 No.1	19.5	—	—	外ハナシ、ロコナズ 内ナズ、ロコナズ	粗 良	灰 白	2.538/1	埋存 ロコナズ	
393	20201	甕	平甕	6	D	D2	F94 -SH134埋没部	7.8	—	—	外シロコナズ	小 心 無	黄 褐色	埋没部 2.536/1	4/12	
394	20204	甕	杯	6	F	F7	SH134埋没部	8.7	—	—	外シロコナズ、ロコナズ 内ロコナズ	粗 良	灰 白	2.536/1	3/12	
395	20303	甕	杯	6	F	F7	SH134埋没部	—	—	—	外シロコナズ、ロコナズ 内ロコナズ	小 心 無	灰 白	2.536/1	天井部 埋存	
396	22301	甕	高杯	6	F	J3	SH104	—	—	8.0	内外シロコナズ	小 心 無	灰 白	10.084/2	埋没部 1/12	
397	20305	甕	フタ付 瓶	6	F	J2	SH104	7.8	—	—	内外シロコナズ	小 心 無	灰 白	5.531/1	ロコナズ 2/12	自然蝕
398	22304	甕	フタ付 瓶	6	F	J2	SH104	8.1	—	—	内外シロコナズ	粗 良	灰 白	2.537/1	ロコナズ 埋存	
399	20301	土師器	甕	6	F	J2	F92 -SH104埋没部	—	—	—	外シロコナズ 内ハナシ、流部	粗 良	灰 白	2.538/2	1/12	

第 18 表 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺物観察表(9/16)

報告番号	発掘番号	種類	器種名	次数	大地区	ブロン	出土遺構 出土層位	計量(mm)		用途	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
								口径	高さ							
400	22063	土師器	甕	6	F	J1	PS2 -S426(開遺)	18.8	—	内外-黒化, ココナデ	磨	良	青褐色	断面1/2		
401	20302	土師器	甕	6	F	J2	SH2947マツ No.6	13.1	—	ロコナデ 内外ココナデ	粗	良	灰白 L.5.5.4 2.5.9.5.4	口縁部 3/12		
402	23303	土師器	甕	6	F	J2	SH294	—	—	赤ハテ, ココナデ 内ハテ	粗	良	L.5.5.4 2.5.9.5.4	底面		
403	20306	土師器	長頸甕	6	F	J3	SH20(前カマ) No.1	—	—	赤ハテ, ココナデ 内ハテ, ナデ	小 心 粗	良	灰白 10.9.8.3	口縁部 小片		
404	23302	土師器	甕	6	F	J3	SH294	—	—	赤ハテ 内ココナデ	粗	良	2.5.9.5.4 2.5.9.5.4	底面小片		
405	20302	甕器	平瓶	6	D	G24	SH210	—	—	把子面 体部内面, 無調整	小 心 粗	良	灰白	把手部	自然残	
406	20307	甕器	杯14番	6	F	E2	SH212 No.2-カマド	12.8	4.5	赤ハテ, ココナデ 内ココナデ, シツタ	小 心 粗	良	灰白 5.7.7.3	縁部 10.1/12		
407	23003	甕器	杯14番	6	F	E2	SH213(7) +P.1	11.1	4.5	赤ハテ, ココナデ 内ココナデ, シツタ	粗	良	灰白	縁部		
408	23002	甕器	杯14番	6	F	D3	P.1 -SH213(主残)	12.7	—	内外ココナデ	小 心 粗	良	灰 No.6	縁部 2.5/12		
409	20305	甕器	杯14番	6	F	E2	SH213マツ	—	—	内外ココナデ	小 心 粗	良	灰 No.6	口縁部 小片		
410	20308	甕器	甕	6	F	C2	SH213	(16.0)	—	赤, 灰白文, 赤ハテ, ロコナデ 内ココナデ	粗	良	2.5.9.5.4 2.5.9.5.4	口縁部 1/12	調整時L594216	
411	20306	土師器	長頸甕	6	F	E2	SH213マツ	—	—	内外-黒化	粗	良	2.5.9.5.6	口縁部 小片		
412	20307	土師器	把子	6	F	C2	SH213	—	—	ナデ+オナデ	小 心 粗	良	灰白 10.9.8.3	把手のみ	調整時L594216	
413	22002	土師器	把子	6	F	C2	P.1 -SH213(主残)	—	—	オナデマツ	小 心 粗	良	L.5.5.4 10.9.7.4	先端部 欠損		
414	20304	土師器	小甕	6	F	E4	SH214 No.2	14.0	—	赤ハテ, ココナデ 内ココナデ, ナデ	粗	良	2.5.9.5.6	2/12		
415	20301	石製品	鏡片	6	F	D4	SH214 (3.25×2.1)×0.8 4.8g	—	—	—	—	—	—	—	形状	チャート
416	20304	甕器	蓋	6	D	D25	SH213マツ No.3-6	(12.0)	—	赤ココナデ, ロコナデ 内ココナデ	小 心 粗	良	灰白 5.7.7.3	口縁部 1/12		
417	20303	土師器	甕	6	F	D25	SH215	12.4	—	ロコナデ 内ココナテ, 赤, 黒	粗	良	2.5.9.5.4	口縁部		
418	20302	土師器	小甕	6	D	C25	SH215 No.8	—	—	赤ハテ, ナデ	小 心 粗	良	灰	底面 1/12		
419	20001	石製品	尖頭器	6	F	G7	SH218 (2.0×1.35)×0.7 2.3g	—	—	内ハテ, ハテ, 当具残	—	—	—	—	上下欠損	チャート
420	20004	甕器	杯14番	6	F	G7	SH219	—	—	赤ココナテ, ロコナデ 内ココナテ	粗	良	灰白 5.7.7.3	口縁部 2/12		
421	20002	甕器	無台杯	6	F	G7	SH219 No.2 +D4 -SH214	11.2	—	赤ハテ, ココナテ 内ココナテ	小 心 粗	良	灰白 5.7.7.3	9/12		
422	20003	土師器	甕	6	F	G7	SH219 No.1 (無調整)	—	—	内外ココナテ	小 心 粗	良	2.5.9.5.6	口縁部 小片		
423	20009	土師器	甕	6	F	G7	SH219 No.2	—	—	ロコナテ 赤ハテ+不明調, 内ハテ	小 心 粗	良	2.5.9.5.6 1.12	口縁部 1/12		
424	23002	土師器	把子	6	F	G7	P.3 -SH219(開遺)	—	—	オナデマツ	粗	良	10.9.8.4	把手のみ		
425	20701	石製品	砥石	6	F	G8	SH219 (11.3×2.1)×10.2 4.10g	—	—	使用痕3箇	—	—	—	—	断面欠損	砂研
426	20005	甕器	杯14番	6	F	K9	SH225	10.5	—	赤ココナテ, ロコナデ 内ココナテ	小 心 粗	良	灰白 5.6.2	縁部2/12		
427	20002	甕器	杯14番	6	F	K9	SH225	11.1	3.45	赤ハテ, ココナテ 内ココナテ	粗	良	灰 No.6	3/12		
428	20003	甕器	杯14番	6	F	K9	SH225	—	—	内外ココナテ	粗	良	灰白 5.7.7.3	口縁部 1.5/12		
429	20004	甕器	甕	6	F	J9	SH225	9.1	—	内外ココナテ	粗	良	5.6.2	3/12		
430	20001	甕器	甕	6	F	J9	SH225	10.8	—	内外ココナテ	小 心 粗	良	灰白 5.7.7.3	3/12		
431	20006	甕器	コナテ 蓋+瓶	6	F	J9	SH225	4.4	—	内外ココナテ, 高台部分付	粗	良	灰 No.6	口縁部 2/12		
432	23007	瓦	瓦	6	F	J9	SH225	—	—	六ナデ 断面直線	小 心 粗	良	灰 No.6	断面 小片		
433	22004	石製品	砥石	6	F	L8	PS3 -SH226(開遺) 404.7g	(16.1×8.7)×4.6	—	使用前2箇	—	—	—	—	欠損大	砂研
434	20007	甕器	杯14番	6	D	H20	SH235	11.8	4.1	赤ハテ, ココナテ 内ココナテ	小 心 粗	良	灰 No.6	7/12		
435	20008	甕器	杯14番	6	D	H9	SH235 No.10	9.4	3.7	赤ハテ, ココナテ 内ココナテ	粗	良	灰白 5.5.7.7.1	11/12		
436	20010	甕器	高杯	6	D	H9	SH235 No.1	—	13.2	赤ハテ, ココナテ 内ココナテ	粗	良	2.5.9.5.4 No.6	底面 4/12	透孔2	
437	20002	土師器	甕	6	D	E23	SH235	—	—	内外-黒化	粗	良	2.5.9.5.4	口縁部		
438	20001	土師器	甕	6	D	H9	SH235 No.9	19.0	—	ロコナテ 内ココナテ	粗	良	10.9.8.6	16.1/12		
439	20003	土師器	甕	6	D	H20	SH235	15.2	—	ロコナテ 赤ハテ, 内工具ナデ	粗	良	5.6.2	4/12		
440	20004	土師器	甕	6	D	H9	SH235 No.10	—	—	ロコナテ 内外ハテ	粗	良	2.5.9.5.4 10.9.8.1	口縁部 小片		
441	21001	土師器	長頸甕	6	D	H9	SH235 No.2-3-12-13	—	—	内外ハテ, 黒化	小 心 粗	良	L.5.5.4 2.5.9.5.4	体部→底 面1/2		
442	21108	甕器	杯14番	6	D	F18	SH236	—	—	内外ココナテ	小 心 粗	良	灰白	肩部 2.5/12		
443	21109	甕器	高杯	6	D	F18	SH236	—	9.2	内外ココナテ 内ハテ, 工具ナデ	粗	良	黒 2.5.9.5.1	断面1/2	透孔2	
444	21107	石製品	鏡片	6	D	F18	SH236 (4.4×1.4)×0.4 4.1g	—	—	—	—	—	—	—	形状	チャート
445	22002	土師器	甕	6	D	D8	SH238 D7 -F19(主残)	23.8	—	ロコナテ 内外ハテ	小 心 粗	良	2.5.9.5.4 灰	3/12		
446	21110	甕器	杯14番	6	D	F19	SH236	10.0	—	内外ココナテ	粗	良	5.6.2	縁部1/2		
447	21301	土師器	甕	6	D	F19	SH236	14.2	—	内外-黒化, 一部ハテ残	小 心 粗	良	2.5.9.5.4 5.6.2	口縁部 2/12		
448	22003	甕器	付付脚 コナテ	6	D	F7	P.1 -SH236(開遺)	—	—	赤ココナテ, 沈積	粗	良	No.6	断面1/2		
449	21007	甕器	杯14番	6	C	V12	PS3 -SH236(開遺)	—	—	内外-黒化	小 心 粗	良	5.6.2	体部小片	赤ハテ	

第 19 表 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺物観察表 (10/16)

報告番号	発掘番号	種類	器種等	次数	大地区	プラン	出土遺構 出土部位	位置 (m)		遺物 性状	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
								目標	取込							
430	21403	甕形器	杯形	6	C	V12	P51 →S4286陶器?	—	—	—	外、ロコナデ、高台留り付付	甕	灰	内口ナデ	底面 小片	
431	21402	土師器	甕	6	C	V12	P52 →S4286陶器?	(11.2)	—	—	内、ロコナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 1/12	
432	21404	土師器	甕	6	C	V12	P51 →S4286陶器?	—	—	—	内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
433	21401	土師器	甕	6	C	V12	P53 →S4286陶器?	17.9	—	—	内、ロコナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
434	21402	土師器	鉢?	6	C	V12	P52 →S4286陶器?	—	—	—	内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
435	21301	土師器	長頸瓶	6	C	W13	P51 →S4286土師器	18.6	—	—	外、ロコナデ 内、黒化	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
436	21406	甕形器	杯形	6	E	Y1	S4286	—	—	—	内、外、ロコナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
437	21404	甕形器	杯形	6	E	Y1	S4286	—	8.0	—	外、ロコナデ、高台留り付付	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
438	21402	甕形器	杯形	6	E	Y1	S4286	16.6	—	—	外、ロコナデ、ロコナデ 内、ロコナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
439	21401	甕形器	杯形	6	E	Y1	S4286	—	8.5	—	外、調整不明、高台留り付付	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
440	21403	甕形器	無台杯	6	E	Y1	S4286	10.9	—	—	内、外、ロコナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
441	21403	甕形器	無台杯	6	E	Y1	S4286	11.8	3.6	7.6	外、調整不明、高台留り付付	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
442	21308	甕形器	不明	6	E	Y2	S4286 No.3	—	—	—	外、調整不明、高台留り付付	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
443	21408	土師器	甕	6	E	Y1	S4286	—	—	—	内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
444	21409	土師器	甕	6	E	Y1	S4286	—	—	—	内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
445	21301	土師器	把手	6	E	Y1	S4286	—	—	—	外、ロコナデ、内、黒化	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
446	21407	土師器	土師	6	E	Y1	S4286No.7	(13.3×1.05×長3.11- 丸径10mm)	—	—	黒化	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
447	22802	甕形器	高杯	6	F	A2	P51 →S4286陶器?	—	—	—	内、外、ロコナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
448	22801	甕形器	蓋	6	F	A2	P51 No.10 →S4286陶器?	—	—	—	外、平行タタキ、沈積、ロコナデ 内、オサエナデ、ロコナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
449	23401	甕形器	甕	6	F	A2	P51 No.1 →S4286陶器?	—	—	—	外、黒化、タタキ、ロコナデ 内、黒化、内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
470	22808	土師器	蓋	6	F	A2	P51 No.3 →S4286陶器?	21.6	—	—	外、黒化	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
471	21303	甕形器	杯形	6	F	C4	S4289	0.6	—	—	外、調整不明、ロコナデ 内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
472	21305	甕形器	蓋	6	F	C4	S4289	8.3	3.8	—	外、ロコナデ、ロコナデ 内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
473	21302	土師器	甕	6	F	C4	S4289	—	—	—	内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
474	02304	甕形器	無台杯	2	F	O19	SK1	(11.50) 4.0	6.2	—	外、調整不明、ロコナデ 内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
475	02307	甕形器	長頸瓶	2	F	O19	SK1 No.1	—	—	—	内、外、ロコナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
476	02301	甕形器	杯形	2	F	M13	SK3 No.3 →SK1 No.4	14.9	3.2	—	外、ロコナデ、ロコナデ 内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
477	02302	甕形器	杯形	2	F	M13	SK3 No.1	15.1	3.2	—	外、ロコナデ、ロコナデ 内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
478	02303	甕形器	杯形	2	F	M13	SK3 No.4	13.5	4.6	9.6	外、ロコナデ、ロコナデ 内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
479	02306	甕形器	長頸瓶	2	F	M13	SK3上層	—	—	—	外、ロコナデ、ロコナデ 内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
480	02305	甕形器	蓋	2	F	M13	SK3上層	—	—	—	外、ロコナデ、ロコナデ 内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
481	02302	甕形器	甕	2	F	M13	SK3 No.2	—	—	—	外、調整不明、ロコナデ 内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
482	02301	土師器	甕	2	F	M13	SK3上層	—	—	—	内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
483	02303	石製品	砥石	2	F	M13	SK3	GRN-4.0×9.3 2.0kg	—	—	—	—	—	—	—	新録
484	02603	甕形器	杯形	2	F	N19	SD4	—	—	—	外、ロコナデ、ロコナデ 内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
485	02601	甕形器	杯形	2	F	N19	SD4	8.3	2.8	—	外、調整不明、ロコナデ 内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
486	02602	甕形器	杯形	2	F	N28	SD4	7.9	2.1	—	外、調整不明、ロコナデ、ロコナデ 内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
487	02606	甕形器	無台杯	2	F	N28	SD4	—	—	—	内、外、ロコナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
488	02407	甕形器	高杯	2	F	O19-20	SD4	—	—	—	外、ロコナデ、ロコナデ 内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
489	02604	甕形器	高杯	2	F	O19-20	SD4陶器部	—	10.9	—	内、外、ロコナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
490	02605	土師器	甕	2	F	N19	SD4	—	—	—	内、外、黒化	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
491	02607	土師器	把手	2	F	N28	SD4	—	—	—	外、ロコナデ、ロコナデ 内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
492	02405	甕形器	杯形	2	F	H5	S28	10.8	2.8	—	外、ロコナデ、ロコナデ 内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
493	02401	甕形器	杯形	2	F	N16	S28	—	—	—	外、ロコナデ、ロコナデ 内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
494	02404	甕形器	杯形	2	F	N16	S28	—	—	—	外、ロコナデ、ロコナデ 内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
495	02402	甕形器	蓋	2	F	N16	S28	—	—	—	内、外、ロコナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
496	02608	甕形器	甕	2	F	—	S28	—	—	—	外、ロコナデ、平行タタキ 内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
497	02403	土師器	甕	2	F	N16	S28	—	—	—	外、調整不明、高台留り付付 内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
498	12603	甕形器	杯形	3	E	X3	SD21	10.1	3.8	—	外、調整不明、高台留り付付、ロコナデ 内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	
499	12604	甕形器	杯形	3	E	X3	SD21	8.2	—	—	外、ロコナデ、ロコナデ 内口ナデ	甕	灰	内口ナデ	口縁部 小片	

第 20 表 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺物観察表 (11/16)

報告番号	発掘番号	種類	器種等	次数	大地区	P-No	出土遺構 土層位	位置 (cm)			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
								目録	取番	形状						
500	12507	甕形器	杯蓋	3	E	T4	S021	—	—	—	外内フタナシ、ロコナナシ	甕	灰白	2.5/3/1	跡存在	内蓋なし
501	12505	甕形器	杯蓋	3	E	W3	S021	—	—	—	外内フタナシ、ロコナナシ	甕	灰白	2.5/3/1	底流川	底へシ貼付
502	12506	甕形器	杯蓋	3	E	W3	S021	—	—	6.0	内外フタナシ	甕	灰白	2.5/3/1	底流川	外自然焼
503	12601	甕形器	平瓶	3	E	X3	S021	7.2	—	—	外内フタナシ、ロコナナシ、注跡	甕	灰黒	6.0/12	6/12	付文?
504	12601	甕形器	平瓶	3	E	W3	S021	6.0	—	—	外内フタナシ、注跡	甕	灰黒	10/9/2/2	口縁部	
505	12602	甕形器	平瓶	3	E	W3	S021	6.0	—	—	外内フタナシ、注跡	甕	灰黒	2.5/3/8/4	2/12	
506	12602	甕形器	壺	3	E	X4	S021	14.0	—	—	外内フタナシ、注跡	甕	灰白	2.5/3/8/1	口縁部	
508	12507	土師器	壺	3	E	X3	S021	—	—	—	内外、黒化	甕	灰	2.5/9/7/8	1/12	
507	13102	土師器	壺	3	F	F14	S022	19.4	—	—	内外、黒化	甕	灰	10/18/3	口縁部	
508	13103	甕形器	高杯	3	F	C8	S023	—	—	—	内外、ロコナナシ	甕	灰白	口縁部	跡部	
509	13101	土師器	壺	3	F	C8	S023	20.8	—	—	内外、黒化	甕	灰	5/7	9/12	
530	13201	土師器	壺	3	F	F14	S024	22.0	—	—	外内フタ、注跡	甕	灰	10/17/3	4/12	
511	13301	土師器	壺	3	F	F10	S025	—	—	—	外内フタ、注跡	甕	灰	10/18/3	口縁部	
512	19302	鉄製品	釵?	3	F	E10	S025	—	—	—	内外ナシ、黒化	甕	灰	10/18/4	小片	
513	19302	銅製品	耳環?	3	F	E10	S025	—	—	—	(4.0)×2.1×0.3	—	—	—	上下欠損	2010-Y-02-10
513	19302	銅製品	耳環?	3	F	E10	S026	—	—	—	2.2×2.1×0.4	銅芯部	—	—	不表	2010-Y-02-10
514	13402	甕形器	壺	3	E	U7	S029	21.6	—	—	外内フタナシ、ロコナナシ	甕	灰白	5/7/3	2/12	自然焼
515	13701	甕形器	壺	3	E	X0	S030	17.4	—	—	外内フタナシ、注跡、ナナシ	甕	灰白	6.0/12	6/12	
516	13301	甕形器	壺	3	E	X9	S030	—	—	—	外内フタナシ、注跡、黒化	甕	灰	2.5/7/1	7/12	
517	13403	甕形器	壺	3	E	W9	S031	—	—	—	内外、黒化	甕	灰	5/7/3	4/12	6.8/cm
518	12603	甕形器	高杯	3	F	G12	S036	(13.0)	—	—	内外、ロコナナシ	甕	灰	2.5/3/1	口縁部	新式文
519	13002	土師器	壺	3	F	G12	S036	—	—	—	内外、ナナシ	甕	灰	2.5/3/6	4/12	6.8/cm
520	13901	土師器	壺	3	F	G12	S036	18.8	—	—	内外、注跡	甕	灰	10/17/4	6/12	
521	14004	甕形器	蓋形類	3	E	U14	S032	—	—	10.0	内外、ロコナナシ	甕	灰	6.0/12	6/12	
522	14003	土師器	壺	3	E	U14	S032	—	—	—	内外、黒化	甕	灰	10/18/8	口縁部	
523	14401	甕形器	杯口蓋	3	E	S18	S063	—	—	—	内外、ロコナナシ	甕	灰白	口縁部	小片	
524	14402	甕形器	高杯?	3	E	S18	S063	15.8	—	—	外内フタナシ、ロコナナシ	甕	灰白	2.5/3/1	口縁部	
525	14602	土師器	壺	3	E	X18	S067	14.4	—	—	外内フタナシ、注跡、ナナシ	甕	灰	2.5/3/6	3/12	
526	14701	土師器	貝形蓋	3	E	X18	S067	21.8	—	—	内外、ナナシ	甕	灰	2.5/3/6	4/12	6.8/cm
527	14604	甕形器	蓋形類	3	E	X19	S072	(10.0)	4.5	—	外内フタナシ、ロコナナシ	甕	灰	10/17/3	3/12	付文?
528	14605	甕形器	蓋形類	3	E	X19	S072	10.8	3.5	—	外内フタナシ、ロコナナシ	甕	灰	5/7/1	9/12	付文?
529	14606	甕形器	蓋形類	3	E	X19	S072	10.4	—	—	外内フタナシ、ロコナナシ	甕	灰	5/7/1	2/12	
530	15702	甕形器	高杯	3	H	H6	S085	—	—	9.5	内外、ロコナナシ	甕	灰	5/7/1	2/12	
531	15605	甕形器	杯蓋	3	F	N21	S093	—	—	9.4	外内フタナシ、ロコナナシ	甕	灰	2.5/6/1	9/12	
532	15704	甕形器	杯口蓋	3	F	H11	S087	9.5	4.8	—	外内フタナシ、ロコナナシ	甕	灰	5/7/1	5/12	
533	15601	甕形器	杯口蓋	3	F	H11	S087	—	—	—	内外、ロコナナシ	甕	灰白	口縁部	小片	
534	15703	土師器	壺	3	F	H11	S087	18.8	—	—	外内フタナシ、注跡、ナナシ	甕	灰	1.5/6/1	1/12	口縁部
535	19002	石製品	砥石	3	F	H11	S087	—	—	—	(6.5)×2.6×3.4 6.13cm	使用後不明瞭	—	—	—	底流川
536	13602	甕形器	平瓶	3	F	J12	S091	—	—	—	外内フタナシ、ロコナナシ	甕	灰白	2.5/3/2	2/12	
537	15006	土師器	壺	3	F	N23	S096	20.8	—	—	内外、ナナシ	甕	灰	2.5/3/2	口縁部	
538	13601	土師器	壺	3	F	N21	S096	20.3	—	—	内外、黒化	甕	灰	2.5/3/2	口縁部	
539	13607	銅製品	蓋	3	F	N21	S096	—	—	—	内外、黒化	甕	灰	2.5/3/6	3/12	
540	16204	甕形器	平瓶	3	F	H14	S0109	—	—	6.0	外内フタナシ、ロコナナシ	甕	灰	2.5/3/4	跡部	小片
541	16205	甕形器	貝形蓋	3	F	H23	S0109	—	—	—	外内フタナシ、注跡	甕	灰	10/17/3	8/12	
542	16401	甕形器	杯口蓋	3	F	H23	S0110	15.7	2.8	—	外内フタナシ、ロコナナシ	甕	灰	2.5/7/1	1/12	
543	16305	甕形器	杯蓋	3	F	H23	S0110	12.2	4.3	7.0	外内フタナシ、ロコナナシ	甕	灰	5/7/1	6/12	
544	16306	甕形器	高杯	3	F	H23	S0110	—	—	13.5	外内フタナシ、ロコナナシ	甕	灰	2.5/6/1	跡部	
545	16402	甕形器	榎類	3	F	H23	S0110	12.0	—	—	外内フタナシ、注跡	甕	灰	2.5/6/1	口縁部	
546	16403	甕形器	蓋?	3	F	H23	S0110	—	—	—	内外、黒化	甕	灰	10/15/1	小片	
547	16304	土師器	壺	3	F	H23	S0110	—	—	—	内外、黒化	甕	灰	10/18/3	口縁部	
548	16302	土師器	壺	3	F	H23	S0110	—	—	—	内外、黒化	甕	灰	10/18/3	口縁部	
549	16303	土師器	壺	3	F	H23	S0110	—	—	—	内外、黒化	甕	灰	10/18/3	口縁部	

第 21 表 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺物観察表 (12/16)

報告番号	発掘番号	種類	図種	次数	大地区	プラン	出土遺構 出土部位	位置 (cm)			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
								目録	数量	形状						
530	16301	土師器	甕	3	F	R23	SK110	—	—	—	赤ハナ、オキナコナデ、 内黒化、ハナハナデナデ	赤心 胎土	灰	2.0/98/3	口縁部 小片	
531	16703	甕蓋器	杯蓋	3	H	L1	SD113	13.3	—	—	赤ハナコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	赤心 胎土	灰	2.1/98/3	口縁部 2.1/98/3	
532	16704	甕蓋器	杯蓋	3	H	N2	SD113	—	—	—	赤ハナコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	赤心 胎土	灰	2.1/98/3	口縁部 2.1/98/3	
533	16705	甕蓋器	杯蓋	3	H	N2	SD113	15.8	—	—	内赤ハナコナデ	赤心 胎土	灰	2.1/98/3	口縁部 2.1/98/3	
534	16706	甕蓋器	不明	3	H	N2	SD113	—	—	13.6	赤ハナデ、ロコナデ 内黒上縁部上縁・オキナコナデ	赤心 胎土	灰	2.1/98/3	口縁部 2.1/98/3	
535	16702	土師器	甕	3	H	L1	SD113	—	—	—	赤ハナ、ロコナデ	赤心 胎土	灰	2.1/98/3	口縁部 2.1/98/3	
536	16801	甕蓋器	杯蓋	3	H	M1	SK114	—	—	—	赤ハナコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
537	16803	甕蓋器	杯蓋	3	H	M1	SK114	15.4	—	—	赤ハナコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
538	16802	甕蓋器	杯蓋	3	H	M1	SK114	15.8	—	—	赤ハナコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
539	16803	甕蓋器	杯蓋	3	F	R25	SK111	10.8	3.1	—	赤ハナコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
540	16802	甕蓋器	杯蓋	3	F	R25	SK111	8.6	2.8	—	赤ハナコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
541	16806	甕蓋器	無台杯	3	F	R24	SK111 No.1	9.6	3.4	—	赤ハナコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
542	16807	甕蓋器	杯蓋	3	F	R25	SK111	13.0	4.4	9.6	赤ハナコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
543	16604	甕蓋器	長頸甕	3	F	R25	SK111	8.8	—	—	内赤ハナコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
544	16601	甕蓋器	甕	3	F	R25	SK111	—	—	—	赤ハナコナデ、沈積、顔面灰吹文	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
545	16302	土師器	甕	3	F	R25	SK111	21.0	—	—	赤ハナ 内赤黒化	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
546	16301	土師器	甕	3	F	R25	SK111	19.6	—	—	内赤黒化	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
547	16701	土師器	甕	3	F	R25	SK111	22.4	—	—	内赤黒化	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
548	16303	土師器	把手	3	F	R25	SK111 上層	—	—	—	赤ハナコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
549	16304	土師器	把手	3	F	R25	SK111	—	—	—	赤ハナコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
550	16805	土製土	土師	3	F	R25	SK111	0.95×長53.1 ～ 径8.0mm	—	—	赤ハナコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
571	17001	甕蓋器	杯蓋	3	H	O1	SK115	12.0	—	—	赤ハナコナデ 内ロコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
572	16809	甕蓋器	無台杯	3	H	O1	SK115	7.7	—	—	赤ハナコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
573	17005	甕蓋器	無台杯	3	H	O1	SK115	11.3	3.4	—	赤ハナコナデ、ロコナデ 内赤ハナコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
574	17006	甕蓋器	無台杯	3	H	O1	SK115	10.1	—	—	赤ハナコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
575	17002	甕蓋器	蓋杯	3	H	O1	SK115	11.8	—	—	内赤ハナコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
576	17004	甕蓋器	甕	3	H	O1	SK115	—	—	—	赤ハナコナデ、沈積、ロコナデ 内赤ハナコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
577	17003	甕蓋器	甕	3	H	O1	SK115	12.8	—	—	内赤ハナコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
578	16801	甕蓋器	模範	3	H	O1	SK115	13.1	29.8	—	赤ハナコナデ、沈積 内赤ハナコナデ、沈積 内赤ハナコナデ、沈積	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
579	16807	土師器	甕	3	H	O1	SK115	—	—	—	赤ハナコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
580	16806	土師器	甕	3	H	O1	SK115	—	—	—	赤ハナ、オキナ、ロコナデ 内黒化	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
581	16804	土師器	甕	3	H	O1	SK115	20.0	—	—	赤ハナ、オキナ、ロコナデ 内黒化	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
582	16805	土師器	甕	3	H	O1	SK115	11.6	—	—	内赤黒化	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
583	16808	甕蓋器	製塩 上層	—	3	H	O1	SK115	—	—	赤ハナコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
584	17302	土師器	甕	3	F	O23	SK123	—	—	—	内赤黒化	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
585	17410	甕蓋器	杯蓋	3	H	P6	SK128	—	—	(10.6)	赤ハナコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
586	17409	甕蓋器	杯蓋	3	H	P6	SK128	—	—	(10.6)	赤ハナコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
587	17302	甕蓋器	短頸甕	3	E	Y10	SK129	9.6	8.4	4.1	赤ハナコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
588	17301	甕蓋器	小型甕	3	E	Y10	SK129	11.6	4.7	—	赤ハナコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
589	17601	甕蓋器	模範	3	E	Y10	SK129	10.2	—	—	赤ハナコナデ、ロコナデ、 沈積	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
589	17701	土師器	甕	3	F	D8	SK130 No.1	11.4	4.2	—	赤ハナコナデ、ロコナデ 内赤黒化、赤ハナコナデ 内赤ハナコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
591	17702	土師器	甕	3	F	D8	SK130 No.2	10.8	4.0	—	赤ハナ、ロコナデ 内赤ハナコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
592	18303	甕蓋器	小型甕	3	F	R10-11	SK135	9.0	4.7	—	赤ハナコナデ、ロコナデ 内ロコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
593	18204	土師器	甕	3	F	P11	SK136	—	—	—	赤ハナコナデ、ロコナデ 内赤黒化	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
594	20401	土師器	長頸甕	6	D	G24	SK206	—	—	—	内赤黒化	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
595	20303	甕蓋器	無台杯	6	F	J2	SK203	—	—	—	赤ハナコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
596	20504	甕蓋器	杯蓋	6	F	J2	SK203	13.6	3.9	9.8	赤ハナコナデ、赤ハナコナデ 内赤ハナコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
597	20307	甕蓋器	蓋杯	6	D	G23	SK207	—	—	—	内赤ハナコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	
598	20309	甕蓋器	杯蓋	6	D	G23	SK209	—	—	—	内赤ハナコナデ	赤心 胎土	灰	2.5/7/1	口縁部 2.5/7/1	

第 22 表 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺物観察表 (13/16)

報告番号	発掘番号	種類	器種等	次数	大地区	プラン	出土遺構 上層位	位置 (m)			調整技法の特徴	粘土	焼成	色調	形状	備考	
								目標	起点	底径							
599	20308	甕形器	高杯	6	D	G23	SK208	—	—	—	外ウロコナデ、一重口縁 内ウロコナデ、シボ口縁	不透明	黄灰	2.5X5/1	器底のみ	自然稀少	
600	20403	土銅器	長柄鍔	6	F	F2	SK211	19.8	—	—	外ウロコナデ、シボ口縁 内ウロコナデ、ナデ、ハケ	不透明	黄灰	10YR8/4	2/12	器底のみ	
601	21101	甕形器	杯14身	6	F	K9	SK228	10.6	3.7	—	外ウロコナデ、シボ口縁 内ウロコナデ	不透明	灰白	5Y 7/1	4/12		
602	21002	甕形器	杯14身	6	F	K9	SK228	11.2	—	—	内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	1/12	口縁部	小片
603	21104	甕形器	高杯	6	F	K9	SK228	12.6	—	—	口ウロコナデ、外ウロコナデナデ 内面同心文瓦具痕	不透明	黄	5Y 7/1	1/12		
604	21103	土銅器	甕	6	F	K9	SK228	—	—	—	内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	1/12	口縁部	小片
605	21105	土銅器	高杯	6	F	K8	SK230	—	—	—	外ウロコナデ 内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	1/12		
606	23306	甕形器	杯14身	6	D	I22	SD233	—	—	3.8	内ウロコナデ、高台局付付	不透明	黄	5Y 7/1	底面2/12	内自然稀少	
607	21106	甕形器	杯14身	6	D	F22	SK234	16.2	—	—	内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	1/12	口縁部	小片
608	21304	土銅器	杯高杯	6	C	V23	SK291	—	—	—	内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	1/12		
609	21303	土銅器	甕	6	C	V23	SK291	15.9	—	—	内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	1/12		
610	21305	甕形器	杯14身	6	D	H22	SK292	10.5	—	—	外ウロコナデ、シボ口縁 内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	2/12		
611	21306	土銅器	甕	6	D	H22	SK292	—	—	—	外ウロコナデ、シボ口縁 内ウロコナデ、ナデ	不透明	黄	5Y 7/1	1/12		
612	18801	甕形器	無台杯	3	E	U18	P3(前期) SB131	12.1	3.4	—	外ウロコナデ、シボ口縁 内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	1/10		
613	18406	甕形器	杯高	3	F	M22	P4 =SB159	—	—	—	外ウロコナデ、シボ口縁 内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	2/12		
614	18407	甕形器	杯高	3	F	M22	P6(前期) =SB159	16.0	—	—	外ウロコナデ 内ウロコナデ	不透明	灰白	5Y 7/1	2/12		
615	18802	土銅器	杯	3	F	H23	P1(前期) SB162	—	—	—	内面文、ナデ	不透明	黄	5Y 7/1	1/12		調整不明
616	18803	甕形器	無台杯	3	H	G4	SB163(P3(前期) =SB162)	11.0	4.2	—	外ウロコナデ、シボ口縁 内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	2/12		
617	18806	甕形器	杯14身	3	H	H2	P2 SB168	—	—	—	内ウロコナデ 焼成	不透明	灰白	5Y 7/1	1/12		
618	18808	甕形器	無台杯	3	H	H1	P3(前期) SB168	9.8	2.8	6.2	外ウロコナデ、シボ口縁 内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	底面2/12		
619	18807	甕形器	高杯ナデ	3	H	H1	P4 SB168	—	—	—	外ウロコナデ、シボ口縁 内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	底面2/12		
620	18805	甕形器	高杯ナデ	3	F	Q25	P2 SB168	14.4	—	—	内ウロコナデ	不透明	灰白	5Y 7/1	1/12		自然稀少
621	18804	甕形器	高杯	3	H	H2	P2 SB168	—	—	—	外ウロコナデ、沈積 内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	2/12		自然稀少
622	18802	甕形器	鳥居 平高ナデ	3	H	M2	SB173(前期) =SB168	—	—	11.8	内ウロコナデ	不透明	灰白	5Y 7/1	2/12		内自然稀少
623	18901	土銅器	甕	3	H	M2	SB173(前期) =SB168	—	—	—	内ウロコナデ 焼成	不透明	黄	5Y 7/1	1/12		
624	18903	甕形器	鳥居 平高ナデ	3	E	S19	P2(前期) SB174	12.4	—	—	内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	2/12		
625	21504	甕形器	杯14身	6	D	F22	P4 =SB202	9.8	—	—	内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	1/12		
626	22201	土銅器	高杯	6	D	C18	P66 =SB207	12.7	—	—	内ウロコナデナデ	不透明	黄	5Y 7/1	2/12		
627	22307	甕形器	杯高	6	D	C26	P4 =SB208	12.0	3.9	9.0	内ウロコナデ、高台局付付	不透明	黄	5Y 7/1	底面2/12		
628	22201	土銅器	杯	6	D	C22	P4 =SB208	17.8	—	—	口ウロコナデ 内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	2/12		
629	22605	土銅器	甕	6	D	C26	P4 =SB208	—	—	—	口ウロコナデ 内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	1/12		
630	21905	土銅器	甕	6	C	W18	P69 =SB212	—	—	—	外ウロコナデ 内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	1/12		
631	21607	土銅器	甕	6	C	X17	P65 =SB218	—	—	—	内ウロコナデ、焼成	不透明	黄	5Y 7/1	1/12		
632	23302	土銅器	甕	6	D	A18	P4 =SB218	—	—	—	内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	1/12		
633	21807	甕形器	杯高	6	C	W19	P4 =SB219	15.8	—	—	外ウロコナデ、シボ口縁 内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	2/12		
634	21106	土銅器	甕	6	D	F24	P4 =SB223	—	—	—	内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	1/12		
635	22807	甕形器	杯14身	6	F	D2	P67 =SB235	—	—	—	内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	1/12		
636	18302	甕形器	杯高	6	C	T25	P41	14.9	—	—	外ウロコナデ、シボ口縁 内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	4/12		外遺棄
637	18301	甕形器	杯高	3	C	T25	P41	(14.8)	3.2	11.2	外ウロコナデ、長状口縁、シボ口縁 内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	11/12		赤火
638	21610	甕形器	杯高	6	C	U21	P43	—	—	—	外ウロコナデ、シボ口縁 内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	1/12		
639	21805	甕形器	杯高	6	C	U23	P43	19.1	—	—	内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	1/12		
640	21701	甕形器	杯高	6	C	X22	P49	20.8	—	—	外ウロコナデ、シボ口縁 内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	1/12		
641	21703	甕形器	杯高	6	C	X22	P49	20.9	—	—	外ウロコナデ、シボ口縁 内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	1/12		
642	21702	甕形器	杯高	6	C	X22	P411	—	—	—	内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	1/12		
643	21610	甕形器	高型	6	C	X22	P411	18.4	—	—	外ウロコナデ、シボ口縁 内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	1/12		
644	22001	甕形器	甕	6	C	X22	P414	19.8	—	—	外ウロコナデ、シボ口縁 内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	1/12		
645	23305	甕形器	高杯	6	C	X32	P414	—	—	8.9	内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	底面2/12		
646	21705	甕形器	杯高	6	C	Y23	P46	18.9	4.5	—	外ウロコナデ、シボ口縁 内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	1/12		
647	21704	甕形器	甕	6	C	Y23	P46	35.2	—	—	内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	1/12		
648	22302	甕形器	無台杯	6	D	A18	P49	12.8	3.3	6.4	外ウロコナデ、シボ口縁 内ウロコナデ	不透明	黄	5Y 7/1	底面2/12		

第 23 表 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺物観察表 (14/16)

報告番号	発掘番号	種別	器種名	次数	大地区	P300	出土遺構 出土層位	注目品		調査技法の特徴	胎土	焼成	色調	文様	備考
								目録	取品						
649	2281	土師器	甕	6	D	A18	P59	(13.8)	—	内外風化	不心加	黄	2.5X7/4	口縁部	
650	2260	土師器	甕	6	D	A18	P611	—	—	—	不心加	黄	10YR7/4	口縁部	
651	2266	土師器	甕	6	D	A18	P611	—	—	—	不心加	黄	10YR8/4	口縁部	
652	2282	須恵器	鉢	6	D	B18	P65	—	—	8.0	不心加	黄	5YR7/4	口縁部	
653	2285	須恵器	無台鉢	6	D	B18	P65	—	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
654	2270	須恵器	鉢	6	D	B20	P62	—	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
655	2266	須恵器	無台鉢	6	D	B20	P62	10.0	4.0	4.0	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
656	2265	須恵器	鉢	6	D	D19	P62	13.4	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
657	2210	須恵器	鉢	6	D	D19	P62	17.2	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
658	2287	須恵器	鉢	6	D	C19	P63	—	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
659	2286	須恵器	鉢	6	D	C19	P63	12.0	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
660	23107	須恵器	鉢	6	D	C19	P63	—	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
661	22310	須恵器	甕	6	D	E18	P66	—	—	内外風化	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
662	22308	須恵器	甕	6	D	E18	P66	—	—	12.4	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
663	22401	瓦葺 瓦	瓦	6	D	E18	P66	—	—	内外風化	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
664	22403	須恵器	鉢	6	D	E19	P66	14.0	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
665	22402	須恵器	鉢	6	D	E19	P66	17.4	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
666	16066	須恵器	鉢	3	H	E5	P61	13.0	3.0	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
667	16065	須恵器	無台鉢	3	H	E5	P61	(11.0)	3.1	7.0	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
668	21801	須恵器	鉢	6	C	Y23	P64	—	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
669	22703	須恵器	鉢	6	D	A17	P610	13.2	1.6	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
670	22549	須恵器	鉢	6	D	B25	P61	13.2	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
671	21803	須恵器	鉢	6	C	W23	P62	12.7	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
672	21802	須恵器	鉢	6	C	V21	P62	12.9	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
673	23004	須恵器	鉢	6	D	D25	P62	14.4	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
674	21608	須恵器	鉢	6	C	X17	P62	14.8	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
675	21804	須恵器	鉢	6	C	Y20	P61	14.9	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
676	22548	須恵器	鉢	6	D	A18	P613	16.6	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
677	23603	須恵器	鉢	6	D	B21	P63	16.8	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
678	23002	須恵器	鉢	6	D	B19	P66	16.2	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
679	22511	須恵器	鉢	6	D	B20	P65	16.4	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
680	22102	須恵器	鉢	6	D	B19	P67	17.4	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
681	22702	須恵器	鉢	6	D	B18	P68	19.0	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
682	21806	須恵器	鉢	6	C	V22	P62	19.3	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
683	22305	須恵器	鉢	6	D	B22	P63	19.3	3.1	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
684	22407	須恵器	無台鉢	6	D	B20	P63	12.8	3.4	7.2	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
685	22504	須恵器	無台鉢	6	D	B18	P66	22.0	4.0	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
686	22104	須恵器	無台鉢	6	D	B20	P68	—	—	4.0	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
687	22304	須恵器	無台鉢	6	D	B18	P613	最大径 10.6	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
688	23007	須恵器	無台鉢	6	D	C25	P61	—	—	4.4	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
689	22501	須恵器	無台鉢	6	D	C17	P61	—	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
690	22405	須恵器	鉢	6	D	G16	P62 No.3	16.0	—	11.0	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
691	22303	須恵器	鉢	6	D	C16	P64	—	—	12.0	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
692	18004	須恵器	鉢	3	H	E1	P61	—	—	9.8	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
693	22306	須恵器	鉢	6	D	C16	P61	—	—	10.4	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
694	22309	須恵器	鉢	6	D	D19	P64	—	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
695	22706	須恵器	鉢	6	D	G21	P64	—	—	12.2	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
696	21604	須恵器	鉢	6	C	V23	P61	16.4	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
697	18405	須恵器	甕	3	F	V22	P61	(21.0)	2.0	11.6	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	
698	18408	須恵器	甕	3	F	G15	P61	—	—	—	不心加	黄	10Y8/1	口縁部	

第 24 表 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺物観察表 (15/16)

報告番号	発掘番号	種類	図種写	次数	大地区	プラン	出土遺構 出土部位	位置 (cm)		意匠	調整技法の特徴	胎土	装成	色調	残存	備考
								目録	図表							
699	2304	須恵器	高脚 6	F	G1	P63	—	—	—	12.8	内外ロコナデ	不心 差	良	にじみ黄緑 灰白	露筋 2/12	
700	18607	須恵器	把子手	3	H	G2	P62	—	—	—	外内ロコナデ, 工具痕	不心 差	良	灰白 2.5V7/1	露筋欠損 1/12	自然破
701	23005	須恵器	瓶 6	F	L8	P64	露筋部	5.7	—	—	内外ロコナデ	不心 差	良	灰白 2.5V7/1	露筋 3/12	
702	18304	須恵器	蓋 2	E	V3	P61 No.1	—	—	10.8	—	外内ロコナデ, ロコナデ 内ロコナデ	不心 差	良	明褐色 2.5V7/6	露筋 15/12	ヘタメ 7.8cm
703	23006	須恵器	蓋 6	F	D7	P63	10.8	—	—	—	内外ロコナデ	不心 差	良	黄 2.5V7/7	露筋 2/12	
704	21606	須恵器	短脚蓋 6	C	V18	P62	9.8	—	—	—	外ロコナデ, ロコナデ 内ロコナデ	不心 差	良	灰白 2.5V7/1	露筋 4/12	
705	22705	須恵器	蓋 6	D	I21	P65	—	—	11.4	—	外内ロコナデ, ロコナデ, 内ロコナデ	不心 差	良	灰白 2.5V7/1	露筋 4/12	
706	22105	土師器	皿 6	D	A18	P634	13.6	—	—	—	内ロコナデ	不心 差	良	黄緑 2.5V7/6	露筋 2/12	
707	22406	土師器	瓶 6	D	H25	P61	10.8	—	—	5.6	内外風化	不心 差	良	黄褐色 10V18/3	露筋 4/12	
708	23001	土師器	杯 6	D	A18	P64	—	—	10.9	—	内外ロコナデ, 高台盛り付	不心 差	良	黄 2.5V8/6	露筋 1/12	
709	18404	土師器	高杯 3	E	X23	P61	—	—	—	—	外風化 内オサ・オサニ	不心 差	良	黄 2.5V8/7	露筋 6/12	
710	22608	土師器	高杯 6	D	G16	P64	—	—	—	—	内外ロコナデ	不心 差	良	10V18/4	露筋 2/12	
711	23007	土師器	高杯 6	D	C19	P65	—	—	—	—	外風化	不心 差	良	10V18/4	露筋のみ 接合部 キズ目	
712	22404	土師器	甕 6	D	F15	P63	17.7	—	—	—	内外風化	不心 差	良	明褐色 10V18/6	露筋 2/12	
713	22806	土師器	甕 6	F	K6	P64	19.2	—	—	—	内外風化	不心 差	良	にじみ黄 10V18/4	露筋 2/12	
714	21808	土師器	甕 6	C	W9	P64	11.0	—	—	—	口コナデ 内外風化	不心 差	良	黄灰 2.5V4/1	露筋 2/12	
715	21809	土師器	甕 6	C	L12	P63 No.3	11.2	—	—	—	外内ロコナデ 内ハコ, ナデ	不心 差	良	にじみ黄緑 10V17/4	露筋 2/12	
716	22804	土師器	甕 6	F	G3	P64	—	—	—	—	内外風化	不心 差	良	10V17/3	露筋 2/12	
717	22603	土師器	甕 6	D	G14	P64	—	—	—	—	口コナデ	不心 差	良	にじみ黄緑 10V17/4	露筋 小片	
718	22805	土師器	甕 6	F	D2	P63	—	—	—	—	内外風化	不心 差	良	黄 10V17/4	露筋 小片	
719	22802	土師器	甕 6	D	E20	P66	—	—	—	—	内外風化	不心 差	良	黄 10V18/4	露筋 小片	
720	23001	土師器	甕 6	F	H	P64	—	—	—	—	内外風化	不心 差	良	黄 2.5V8/4	露筋 小片	
721	21903	土師器	甕? 6	C	S23	P61	—	—	—	—	外ナデ	不心 差	良	にじみ黄 2.5V7/3	露筋 1/12	傷口破?
722	22901	土師器	甕 6	F	K6	P66	16.0	—	—	—	外内ロコナデ 内風化	不心 差	良	にじみ黄 10V17/4	露筋 4/12	外自然破
723	22009	土師器	把子手	6	D	I21	P64	—	—	—	オサコナデ	不心 差	良	黄褐色 10V18/4	露筋のみ 把子のみ	
724	22702	土製品	土埴 6	D	E11	P61	1.8 x 長 53.1 ~ 孔径 6mm	—	—	—	風化	不心 差	良	2.5V7/2	露筋欠損	
725	18307	土製品	土埴 3	E	W14	P65	1.3 x 長 53.2 ~ 孔径 6mm	—	—	—	風化	不心 差	良	灰白 10V18/2	露筋欠損	
726	18309	製瓦 土師	—	3	E	W18	P61	—	—	—	外ヨビオサニ →ヨビオサニ	不心 差	良	にじみ黄 2.5V7/6	露筋のみ	知多式
727	18603	製瓦 土師	—	3	F	M23	P61	—	—	—	外ヨビオサニ	不心 差	良	にじみ黄 10V17/4	露筋のみ	知多式
728	18308	製瓦 土師	—	3	E	X15	P61	—	—	—	外ヨビオサニ	不心 差	良	2.5V8/8	露筋のみ	知多式
729	21601	須恵器	陶丸 6	C	L23	P61	—	—	—	—	ヨビオサニ	不心 差	良	灰白 10V17/3	充分	
730	19303	鉄製品	不明 3	E	V17	P67	5.60 x 0.3 x 0.25	針状	—	—	—	—	—	—	上部欠損	2010-Y-02-11
731	19403	鉄製品	3コマ 十字型	3	E	X16	P61	0.80 x 1.45 x 0.2	—	—	—	—	—	—	横筋欠損	2010-Y-02-15
732	02706	須恵器	杯高脚 2	F	—	—	—	11.7	—	—	内外ロコナデ	不心 差	良	にじみ黄緑 10V17/2	露筋 2/12	
733	23102	須恵器	杯蓋 6	C	X17	包含層	—	—	—	—	外ロコナデ 内ロコナデ	不心 差	良	2.5V7/1	露筋 2/12	
734	23103	須恵器	杯蓋高 6	D	H19	包含層	13.3	2.6	—	—	外ロコナデ, ロコナデ 内ロコナデ	不心 差	良	2.5V7/3	露筋 3/12	
735	23101	須恵器	杯蓋高 6	D	A23	表探	17.6	4.5	—	—	外ロコナデ, ロコナデ 内ロコナデ	不心 差	良	黄灰 2.5V5/1	露筋 3/12	
736	22510	須恵器	杯蓋高 6	D	C18	包含層	16.6	—	—	—	外ロコナデ, ロコナデ 内ロコナデ	不心 差	良	灰白 2.5V7/6	露筋 1/12	
737	02703	須恵器	杯蓋高 2	F	L17	包含層	—	—	—	—	内外ロコナデ	不心 差	良	黄緑 10V18/3	露筋 1/12	
738	23108	須恵器	杯蓋高 6	C	V18	包含層	—	—	—	—	内外ロコナデ	不心 差	良	2.5V5/1	露筋 小片	
739	10201	須恵器	杯蓋高 6	C	F11	包含層	—	—	23.0	—	外ロコナデ, ロコナデ 内ロコナデ	不心 差	良	灰白 10V17/3	露筋 3/12	
740	18905	須恵器	無台杯 3	—	—	—	11.2	3.0	—	—	外ハコ切り, ロコナデ 内オサ, ロコナデ	不心 差	良	にじみ黄 2.5V8/4	露筋 1/12	ほぼ完全
741	18303	須恵器	無台杯 3	F	G10	包含層	—	—	—	—	外ハコ切り, ロコナデ 内オサ, ロコナデ	不心 差	良	2.5V7/1	露筋 4/12	
742	02604	須恵器	無台杯 2	F	K20	包含層	—	—	—	—	外ハコ切り, ロコナデ 内ロコナデ	不心 差	良	灰 10V16/1	露筋 4/12	
743	23105	須恵器	無台杯 6	C	V19	包含層	—	—	4.4	—	外ロコナデ, ロコナデ 内ロコナデ	不心 差	良	にじみ黄 2.5V8/5/4	露筋 2/12	
744	23104	須恵器	無台杯 6	C	南東 区	—	—	—	—	4.6	外ロコナデ	不心 差	良	黄灰 2.5V8/1	露筋 3/12	
745	23106	須恵器	杯高 6	C	X17	包含層	16.2	—	11.0	—	内外ロコナデ, 高台割筋 外内ロコナデ, ロコナデ	不心 差	良	2.5V4/1	露筋 1/12	口ニホ
746	18906	須恵器	杯高 3	—	—	—	—	—	9.0	—	外内ロコナデ, ロコナデ	不心 差	良	黄灰 2.5V8/1	露筋 3/12	取用破?
747	18701	須恵器	杯高 3	H	O5	包含層	—	—	—	—	外ロコナデ 内ロコナデ	不心 差	良	灰白 10V17/3	露筋 2/12	内露筋 底面へツ記号
748	23302	須恵器	瓶 6	D	C19	包含層	11.8	3.9	3.6	—	内外ロコナデ	不心 差	良	黄 2.5V7/7	露筋 3/12	底面に「雲雀」字

第 25 表 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺物観察表 (16/16)

報告番号	発掘番号	種類	器種等	次数	大地区	ブロン	出土遺構 出土層位	位置 (m)			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
								目標	起点	迄位						
749	11966	須恵器	壺	3	E	W3	包含物	—	—	—	外、ロクロノズク 内、工芸部製成	心 底	灰白 N7/1	底部小片	底、側溝	
750	18989	須恵器	壺	3	F	R25	包含物	19.8	4.3	—	外、ロクロノズク、ロクロノズク 内、ロクロノズク	底	灰 N5	口縁小片	内、白丸縁	
751	23201	須恵器	高杯	6	F	K8	包含物	—	—	7.6	内外、ロクロノズク	心 底	灰 N5	側溝 18/12		
752	63302	須恵器	長頸瓶	2	F	M17	包含物	10.9	—	—	内外、ロクロノズク	底	灰黄 2.5Y/7	口縁部	自然縁	
753	62903	須恵器	罐?	2	F	M18	包含物	(11.2)	—	—	外、細線段状文、比羅、ロクロノズク 内、ロクロノズク	底	灰黄 2.5Y/7	口縁部		
754	23306	須恵器	瓶	6	C	W11	包含物	—	—	6.6	内外、ロクロノズク、高台堀り付け	心 底	灰白 N7/1	底溝		
755	18702	須恵器	円面 短ヤ	3	H	O7	包含物	13.0	—	—	外、ロクロノズク、沈線 内、ロクロノズク	底	灰 N6	1/12	透孔	
756	18703	須恵器	円面 短ヤ	3	F	O29	包含物	—	—	17.6	内外、ロクロノズク	底	灰白 N7/1	側溝	底、有 透孔	
757	18907	須恵器	罐	3	—	—	埴土	—	—	4.8	外、ロクロノズク、ロクロノズク、沈線 内、ロクロノズク	心 底	灰 N4	底部		
758	23110	須恵器	壺	6	D	I21	包含物	—	—	—	内外、ロクロノズク	心 底	灰 N5	口縁部 小片		
759	62902	須恵器	壺	2	F	—	調査区南部 表土	—	—	—	外、細線段状文、比羅、ロクロノズク 内、ロクロノズク	心 底	灰黄 2.5Y/7	1/12		
760	63105	土製品	土師	2	F	—	調査区南東隅 表土	0.2×1.0×長35.0 直径3.0、5.5g	—	—	風化	心 底	灰白 10YR7/3	完存		
761	12603	山形銅	銅	3	F	G13	包含物	—	—	—	内外、風化	心 底	5YR 3/6	口縁部 小片		
762	18704	赤土 土師ヤ	壺	3	H	G8	包含物	—	—	9.6	内外、風化	心 底	5YR 7/6	口縁部 小片		
763	18901	土師器	高杯	3	—	—	埴土	11.8	—	—	外、風化 内、風化	心 底	2.5Y 4/6 10YR7/1	側溝		
764	63103	土師器	杯	2	F	M13	包含物ORC0	—	3.6	—	内外、風化	底	灰黄 7.5YR6/6	口縁部		
765	23303	土師器	壺	6	D	C9	包含物	15.8	—	—	外、ソウ、ナブ 内、ナブ	心 底	7.5YR6/4 2.5Y 4/6	1/12側溝		
766	23304	土師器	壺	6	D	C24	包含物	—	—	—	内外、風化	心 底	2.5Y 4/6 10YR7/3	口縁部 小片		
767	23305	土師器	壺	6	D	A22	包含物	—	—	—	内外、風化	底	2.5Y 4/6 10YR7/3	口縁部 小片		
768	23307	土師器	短ヤ	6	F	E2	包含物	—	—	—	オキエマナブ	底	灰黄 2.5YR7/4	把手部	接合部 キズ目	
769	写真 のみ	鉄洋	輪型	3	F	A16	4号墳蓋部坑	9.4×9.2×4.2 37kg	—	—	—	—	—	—	—	完存
770	写真 のみ	鉄洋	短状	2	F	M18	SH2 196 水洗	2~8mm	—	—	—	—	—	—	—	—
771	写真 のみ	鉄片	—	2	F	M18	SH2 196 水洗	~12mm	—	—	—	—	—	—	—	銅鍍製片
772	写真 のみ	銅造	平面	2	F	M18	SH2銅造P1	75.5×55.0×22.5 10.1kg	—	—	—	—	—	—	—	銅造銅板型
773	写真 のみ	銅造	断面	2	F	M18	SH2銅造P1	75.5×55.0 3.2kg	—	—	—	—	—	—	—	銅造銅板型

VI 自然科学分析

1 分析の目的

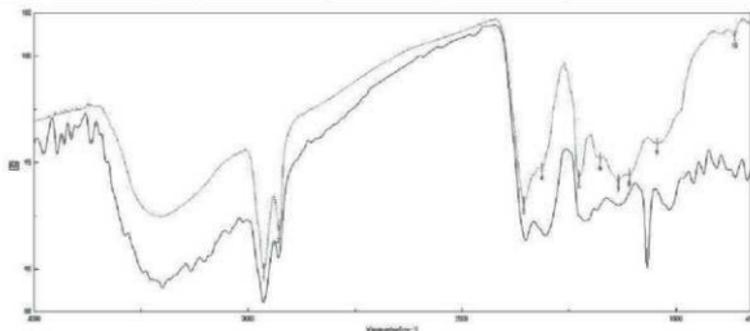
筆ヶ崎西遺跡における生産活動の内容を明らかにするため、須恵器杯B(135)の内面にみられる漆状付着物の材質特定を行った。また、金属加工生産の実態を解明するため、鉄滓や鉄片などの鍛冶関連遺物の種類を同定し、鉄成分分析を行った。(水橋)



第182図 鍛冶関連遺物出土分布

表1 赤外分光分析を行った付着物とその詳細

分析No.	器種	部位	遺跡	遺構	時期	色調
1	須恵器高台付坏身	内面	筆ヶ崎西遺跡	E-V1 包含層	縄鳥時代頃	黒色～黒褐色、黒色部光沢有り



図版1 須恵器内面付着物の赤外吸収スペクトル図(実線:付着物、点線:生漆)(縦軸:透過率、横軸:波数、数字:生漆の赤外吸収位置)

2 分析

【須恵器内面付着物の赤外分光分析】

1. はじめに

出土した須恵器の内面に黒色～黒褐色の付着物が見られた。ここでは、付着物の赤外分光分析を行い、材質について検討した。

2. 資料と方法

試料は、須恵器高台付坏身(報告番号135:杯B)の内面の黒色～黒褐色付着物である(表1・写真図版78右下)。

表2 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	カシオキ
7	1270.86	46.3336	カシオキ
8	1218.79	47.5362	カシオキ
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

赤外分光分析では、手術用メスを用いて各付着物の表面部分を薄く削り取った後、押しつぶして、厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム (KBr) 結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計(日本分光製 FT/IR-410, IRT-30-16)を用いて、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

3. 結果および考察

以下に、須恵器内面付着物の特徴と赤外分光分析について述べる。なお、各須恵器内面付着物の赤外吸収スペクトル図(図版1)では、縦軸が透過率(%)、横軸が波数(Wavenumber (cm⁻¹);カイザー)を示す。各スペクトル図はノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は生漆の赤外吸収位置(表2)を示す。

[分析]

この付着物は、光沢のある黒色～やや光沢のない黒褐色を呈する。付着物は内面の一部にのみ見られ、底部から口縁部付近まで付着している。なお、外面には付着物は見られない。

光沢のある黒色部の赤外分光分析では、ウルシオール(No.7)が明瞭に検出され、また生漆の他の吸収とも一致した(図版1)。なお、1033 (cm⁻¹)付近に強い吸収が見られるが、付着物の変質による吸収と思われる。

赤外分光分析の結果から、付着物は漆と同定される。また、採取した試料において縮み皺は見られなかった。

漆付着物は、須恵器内面の一部にのみ残存し、縮み皺は確認されないが、本来は器の内面全面に付着していたと推定される。これら須恵器は、漆容器であった可能性が考えられる。

4. おわりに

須恵器の内面付着物について、赤外分光分析を行った。その結果、漆と同定された。なお、須恵器の使用当時は付着物が内面の全体に付着していたと推定され、漆容器であった可能性が考えられた。

藤根 久(株式会社パレオ・ラボ)

【鍛冶関連遺物の分析調査】

1. いきさつ

筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡は四日市市小牧町字筆ヶ崎先ほかに所在する。第2次調査区からは、鍛冶遺構2基を伴う飛鳥・奈良時代の竪穴建物(SH2)跡が検出され、それに伴い鉄滓、鉄片、粒状滓、鍛造剥片などの鍛冶関連遺物も出土している。さらに第3・6次調査地区では、鍛冶関連遺構は確認されなかったが、竪穴建物跡等から鉄滓等が出土している。そこで地域での鉄器生産の実態を検討する目的から、調査を実施する運びとなった。

2. 調査方法

2-1. 供試材

Table1に示す。出土鍛冶関連遺物15点の調査を行った。

2-2. 調査項目

(1) 肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。

(2) マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は顕微鏡検査よりも、広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

(3) 顕微鏡組織

鉾滓の鉱物組成や金属部の組織観察、非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3μmと1μmで鏡面研磨した。

また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。金属鉄の調査では3%ナイトル(硝酸アルコール液)を腐食(Etching)に用いた。

(4) ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計(Vickers Hardness Tester)を用いて硬さの測定を行い、文献硬度値に照らして、鉾滓中の晶出物の判定を行った。また金属鉄の硬さ測定も同様に実施した。

試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡を用いし、荷重は10gf~200gfで測定した。

(5) EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

日本電子製JXA-8800RL 波長分散型5チャンネルにて含有元素の定性・定量分析を実施した。定量分析は試料電流 2.0×10^{-7} アンペア、ビーム径 $3 \mu\text{m}$ 、補正法はZAFに従った。

試料面(顕微鏡試料併用)に真空中で電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像(COMP)は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される箇所ほど明るく、軽い元素で構成される箇所ほど暗い色調で示される。これを利用して、各相の組成の違いを確認後、定量分析を実施している。

また元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加え、特性X線像の撮影も適宜行った。

(6) 化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分(Total Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第一鉄(FeO):容量法。

炭素(C)、硫黄(S):燃焼容量法、燃焼外吸収法
二酸化硅素(SiO_2)、酸化アルミニウム(Al_2O_3)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化カリウム(K_2O)、酸化ナトリウム(Na_2O)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO_2)、酸化クロム(Cr_2O_3)、五酸化磷(P_2O_5)、バナジウム(V)、銅(Cu)、二酸化ジルコニウム(ZrO_2):ICP(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer)法:誘導結合プラズマ発光分光分析。

当初分析調査対象となった10点のうち5点は遺物が極めて小さく(1~3g程度)、試料不足のため分析実施が不可能であった。

3. 調査結果

FDG-1: 楕形鍛冶滓

(1) 肉眼観察:当遺跡出土鉄滓中で最大の楕形鍛冶滓(1902.0g)である。鍛冶炉①の炉床から検出された滓であるが、4つの楕形鍛冶滓が重なって生じたものと推測される。(分析試料採取時の縦断面をみると、二次的な付着ではなく断続的な操業に伴い溶着したものと判別される。また平面が双円に近い形状であり、二方向から送風された可能性も考えられる。)滓の地の色調はいずれも黒灰色で、内部には中小の気孔が多数散在するが、重量感のある滓である。下面には花崗岩の風化砂を含む、灰褐色の鍛冶炉床土が付着する。

(2) マクロ組織:Photo.1①に示す。左上はPhoto.1に掲載した外観写真左下側の滓の断面である。木炭破片(黒色部)を挟んで、下側は外観写真中央の滓の断面にあたる。ともにウスタイト(Wustite:FeO)、ファヤライト(Fayalite:2FeO·SiO₂)組成であり、同質の作業での反応副生物といえる。また滓中には大小の気孔が散在するが緻密である。

(3) 顕微鏡組織:Photo.1②③に示す。②は木炭破片の拡大である。内部には発達した導管が複数分布しており、広葉樹材の黒炭と判断される。また③は滓部の拡大で、白色粒状結晶ウスタイト(Wustite:FeO)、淡灰色盤状結晶ファヤライト(Fayalite:2FeO·SiO₂)が晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

(4) ピッカース断面硬度:Photo.1②の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は459HV、48HVであった。ウスタイトの文献硬度値450~500HVの範囲内であり、ウスタイトに同定される。また淡灰色盤状結晶の硬度値は592HV、722HVであった。ばらつきが非常に大きくファヤライトの文献硬度値600~700HVから若干はずれるが、結晶の色調と形態および後に詳述するEPMA調査の結果からファヤライトと推測される。ライム(CaO)やマグネシア(MgO)など、硬度値の上下に影響するような他の元素を微量固溶している可能性も考えられる¹⁾。

(5) EPMA調査:Photo.1④に滓部の反射電子像(COMP)を示す。白色樹枝状結晶は特性X線像をみると鉄(Fe)、酸素(O)に反応がある。定量分析値は92.6%FeOであった(分析点1)。ウスタイト(Wustite:FeO)に同定される。ごく微細な暗色多角形結晶は特性X線像では鉄(Fe)、アルミニウム(Al)、酸素(O)に反

応がある。定量分析値は45.1%FeO-50.0%Al₂O₃ (分析点2)、48.7%FeO-47.1%Al₂O₃ (分析点4)であった。ヘルシナイト (Hercynite: FeO·Al₂O₃) に同定される。また淡灰色盤状結晶は特性X線像では鉄 (Fe)、珪素 (Si)、酸素 (O) に反応がみられる。定量分析値は64.3%FeO-2.4%CaO-30.5%SiO₂ (分析点3)であった。ファヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂) で、微量ライム (CaO) を固溶する。また黒色多角形結晶は特性X線像をみると、珪素 (Si)、アルミニウム (Al)、カリウム (K) に強い反応がある、定量分析値は9.1%K₂O-63.1%SiO₂-26.3%Al₂O₃であった (分析点5)。オルソクラス (Orthoclase: KAlSi₃O₈) と推測される。(6) 化学組成分析: Table2に示す。Photo.1に掲載した外観写真中央部 (Photo.1①の下端側) の分析を実施した。全鉄分 (Total Fe) 57.03%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.05%、酸化第1鉄 (FeO) 61.52%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 13.10%の割合であった。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) は22.89%で、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) は1.86%と低めである。砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は0.35%、バナジウム (V) が0.01%と低値であった。また酸化マンガン (MnO) も0.15%、銅 (Cu) <0.01%と低い。

当鉄滓は鉄分 (FeO) および炉材粘土の溶融物 (SiO₂主成分) 主体の鉄滓であった。製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分 (TiO₂、V、MnO) の低減傾向が著しく、鍛錬鍛冶滓に分類される。

FDG-2: 鍛冶滓

(1) 肉眼観察: ごく小形の鍛冶滓破片 (2.5g) である。側面2面は破面の可能性が高い。色調は黒色で石英や長石類などの砂粒が混在しており、羽口先端溶融物 (ガラス質滓) の割合の高い滓と推測される。着磁性はごく弱い。

(2) マクロ組織: Photo.2①に示す。上面の明灰色部はガラス質滓である。また暗色部には炉材粘土に混和された砂粒 (石英・長石粒) が多数分布するが、ここで素地の粘土鉱物はガラス質化が進んでいる。一方中央の明灰色部は鍛冶滓である。

(3) 顕微鏡組織: Photo.2②③に示す。②の明灰色粒は上面表層のガラス質滓中の微小金属鉄である。3%ナイタルで腐食した組織を示す。外周と内側の針

状白色部はセメントタイト (Cementite: Fe₃C)、内側の素地部分はフェライト (Ferrite: α鉄) と推定される。

③は中央の鍛冶滓部分の拡大である。淡褐色多角形結晶はマグネタイト (Magnetite: FeO·Fe₂O₃) とヘルシナイト (Hercynite: FeO·Al₂O₃) を主な端成分とする固溶体²⁾と推定される。さらに淡灰色柱状結晶ファヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂) が晶出する。

(4) ビッカース断面硬度: Photo.2③の淡褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は665HV、689HVであった。マグネタイトの文獻硬度値500~600HVよりも硬質であるため、アルミナ (Al₂O₃) など、硬度を上昇させる元素を一定量固溶していると推測される。

(5) EPMA調査: Photo.2④に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。淡褐色多角形結晶は特性X線像では鉄 (Fe)、酸素 (O) に強い反応がみられる。定量分析値は80.2%FeO-8.3%Al₂O₃であった (分析点6)。マグネタイト (Magnetite: FeO·Fe₂O₃) とヘルシナイト (Hercynite: FeO·Al₂O₃) を主な端成分とする固溶体と推定される。淡灰色柱状結晶は特性X線像をみると鉄 (Fe)、珪素 (Si)、酸素 (O) に反応がある。定量分析値は64.8%FeO-30.6%SiO₂ (分析点7)であった。ファヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂) に同定される。

また素地部分の定量分析値は51.4%SiO₂-19.2%Al₂O₃-1.8%CaO-3.2%K₂O-22.6%FeO (分析点8)であった。非晶質珪酸塩で、かなり鉄分 (FeO) を固溶する。

当鉄滓はウルボスピネル (Ulvöspinel: 2FeO·TiO₂) など、製鉄原料の砂鉄起源の鉄チタン酸化物の結晶は全く確認されなかった。炉材 (炉壁・羽口) 粘土溶融物が主体の鍛錬鍛冶滓と推定される。

FDG-3: 鍛冶滓

(1) 肉眼観察: ごく小形で扁平な鍛冶滓破片 (2.1g) である。滓の地の色調は黒灰色で、部分的に茶褐色の鉄錆物が付着する。下面にはごく微細な木炭痕による凹凸がみられる。また微細な気孔が若干点に在するが、着磁性はごく弱い。

FDG-3: 鍛冶滓

(2) マクロ組織: Photo.3①に示す。内部には中小の気孔が散在するが、比較的緻密な鍛冶滓である。またごく微細な錆化鉄 (青灰色) 部は存在するが、まとまった鉄部はみられない。

(3) 顕微鏡組織: Photo.3②③に示す。滓中には比

軟の発達した白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

(4) ビッカース断面硬度：Photo. 3②の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は2個所とも456Hvであった。ウスタイトの文献硬度値の範囲内であり、ウスタイトに同定される。

(5) EPMA調査：Photo. 3④に滓部 (Photo. 3②の拡大)の反射電子像 (COMP) を示す。粒状の明白色部は特性X線像をみると鉄 (Fe) にのみ強い反応がある。定量分析値は96.1%Feであった (分析点1)。金属鉄 (Metallic Fe) である。また白色粒状結晶は特性X線像では鉄 (Fe)、酸素 (O) に反応がみられる。定量分析値は92.3%FeO (分析点9) であった。ウスタイト (Wustite: FeO) に同定される。さらに淡灰色柱状結晶は特性X線像をみると鉄 (Fe)、珪素 (Si)、酸素 (O) に反応がある。定量分析値は65.9%FeO-1.0%MgO-29.6%SiO₂ (分析点10) であった。ファヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂) で、微量マグネシア (MgO) を固溶する。

当鉄滓はウスタイト (Wustite: FeO)、ファヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂) 組成であり、製鉄原料の砂鉄起源の鉄チタン酸化物の結晶は全く確認されなかった。この特徴から、鉄素材を鉄間で鍛打加工した時に生じる鍛錬鍛冶滓に分類される。

FDG-4: 鍛冶滓

(1) 肉眼観察：ごく小形の鍛冶滓 (2.6g) である。上面は比較的平坦であるが木炭痕が薄く残る。下面は木炭痕による細かい凹凸がみられる。滓の地の色調は暗灰色で、表面には茶褐色の鉄錆化物が若干付着する。着磁性はごく弱い。

(2) マクロ組織：Photo. 4①に示す。内部には中小の気孔が散在するが、比較的密な鍛冶滓である。滓中にはごく微細な金属鉄粒 (明白色部) が若干点在するが、まとまった鉄部はみられない。

(3) 顕微鏡組織：Photo. 4②③に示す。②のごく微細な明灰色粒は金属鉄である。また滓中には白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

(4) ビッカース断面硬度：Photo. 2③の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は474Hv、527Hvで

あった。後者はウスタイトとしては硬質で、マグネタイトの文献硬度値の範疇といえる。両者の混晶となっている可能性も考えられる。また淡灰色盤状結晶の硬度値は519Hv、590Hv、752Hvであった。ばらつきが非常に大きくファヤライトの文献硬度値600~700Hvからもはざれる値となった。結晶の色調と形態からはファヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂) に近い組成の結晶と考えられるが、鉄分 (FeO) の一部がライム (CaO) やマグネシア (MgO) など、硬度値の上下に影響するような他の元素と置換している可能性も考えられる。

当鉄滓の鉱物組成は鍛冶滓 (FDG-3) と酷似する。やはり鉄素材を鉄間で鍛打加工した時に生じる鍛錬鍛冶滓に分類される。

FDG-5: 鍛冶滓

(1) 肉眼観察：小形不定形の鍛冶滓破片 (7.3g) である。滓の色調は黒灰色で、弱影响着性が見られる。表面は比較的滑らかで弱い流動状を呈する。また側面4面は破面で、中小の気孔が散在する。

(2) マクロ組織：Photo. 4④に示す。滓中には中小の気孔が密に分布する。また滓中にはごく微細な金属鉄や錆化鉄が多数散在している。

(3) 顕微鏡組織：Photo. 4⑤⑥およびPhoto. 5①~③に示す。滓中には白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

また滓中には非常に微細な金属鉄粒が多数散在する。3%ナイタルで腐食した組織を示す。Photo. 4⑥の微細な明白色粒は炭素をほとんど含まないフェライト単相の組織であった。一方Photo. 5①~③の金属鉄粒は、ほぼ全面黒色層状のパーライト (Pearlite) の共析組織 (C: 0.77%) であった。

(4) ビッカース断面硬度：Photo. 4⑤の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は414Hvとやや軟質であるが、色調と形態からウスタイトと推測される。また淡灰色柱状結晶の硬度値は696Hvであった。ファヤライトの文献硬度値の範囲内であり、ファヤライトに同定される。

(5) EPMA調査：Photo. 5④に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。白色樹枝状結晶は特性X線像をみると鉄 (Fe)、酸素 (O) に強い反応がある。定量分析値は

91.7%FeO - 1.5%Al₂O₃であった(分析点11)。ウスタイト(Wustite:FeO)に同定される。淡灰色柱状結晶は特性X線像では鉄(Fe)、珪素(Si)、酸素(O)に反応がある。定量分析値は64.7%FeO - 1.0%MgO - 29.4%SiO₂であった(分析点12)。ファヤライト(Fayalite:2FeO·SiO₂)で微量マグネシア(MgO)を固溶する。また素地部分の定量分析値は36.4%SiO₂ - 23.1%Al₂O₃ - 5.9%CaO - 5.3%K₂O - 1.8%Na₂O - 24.7%FeOであった(分析点13)。非晶質珪酸塩で、かなり鉄分(FeO)を固溶する。またごく微細な明白色粒は特性X線像をみると鉄(Fe)にのみ強い反応がある。定量分析値は100.9%Feであった(分析点2)。金属鉄(Metallic Fe)に同定される。

(6) 化学組成分析: Table2に示す。全鉄分(Total Fe) 54.55%に対して、金属鉄(Metallic Fe) 0.06%、酸化第1鉄(FeO) 49.65%、酸化第2鉄(Fe₂O₃) 22.73%の割合であった。造滓成分(SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O)は22.35%で、このうち塩基性成分(CaO + MgO)は0.80%と低値である。砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO₂)は0.23%、バナジウム(V)が0.01%と低い。また酸化マンガン(MnO)も0.08%、銅(Cu) < 0.01%と低値である。

当鉄滓も鉄分(FeO)および炉材粘土の溶融物(SiO₂主成分)主体の鉄滓であった。製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分(TiO₂、V、MnO)の低減傾向が著しく、鍛錬鍛冶滓に分類される。

FDG-6: 鍛冶滓

(1) 肉眼観察: 小形不定形で完形の鍛冶滓(8.2g)である。全体に細かい凹凸が顕著で、表面は茶褐色の錆鉄で覆われる。弱い着磁性もあるが、特殊金属探知機³⁾での反応はなく、まとまった鉄部はないと考えられる。

(2) マクロ組織: Photo.6①に示す。滓中やや下寄りの湾曲した板状白色部は、本来は厚手の鍛造剥片⁴⁾であったと推定される。熱間での鍛冶作業中、滓に巻き込まれたものと考えられる。また全体に発達したウスタイト結晶の割合の高い滓である。

(3) 顕微鏡組織: Photo.6②③に示す。白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。また滓中に多数散在するごく微細な明白色粒は金属鉄である。また③

左上は上述した鍛造剥片の拡大である。表層部は熱影響を受けて分解・洋化しかけている。

(4) ビッカース断面硬度: Photo.6③の鍛造剥片の硬度を測定した。硬度値は433Hv、439Hv、443Hvであった。ウスタイトとしては若干軟質である。また粒状結晶は449Hv、452Hvであった。ウスタイトの文献硬度値の下限前後の値であったが、色調と形態および後述のEPMA調査結果からウスタイトと推定される。

(5) EPMA調査: Photo.6④に滓部の反射電子像(COMP)を示す。白色粒状結晶は特性X線像では鉄(Fe)、酸素に反応がみられる。定量分析値は93.1%FeO(分析点14)であった。ウスタイト(Wustite:FeO)に同定される。淡灰色柱状結晶は特性X線像では鉄(Fe)、珪素(Si)、酸素(O)に反応がある。定量分析値は65.3%FeO - 29.1%SiO₂(分析点15)であった。ファヤライト(Fayalite:2FeO·SiO₂)に同定される。素地部分の定量分析値は36.1%SiO₂ - 15.5%Al₂O₃ - 10.6%CaO - 4.3%K₂O - 1.1%Na₂O - 29.8%FeO(分析点16)であった。またごく微細な不定形明白色部は、特性X線像では鉄(Fe)にのみ強い反応がある。定量分析値は98.9%Fe(分析点3)であった。金属鉄(Metallic Fe)である。

(6) 化学組成分析: Table2に示す。全鉄分(Total Fe)は65.37%と高値であった。このうち金属鉄(Metallic Fe)は0.12%、酸化第1鉄(FeO) 65.55%、酸化第2鉄(Fe₂O₃) 18.22%の割合である。造滓成分(SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O)は11.99%と低めで、塩基性成分(CaO + MgO)も0.89%と低値である。製鉄原料の砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO₂)は0.06%、バナジウム(V)が0.01%と低い。また酸化マンガン(MnO)も0.06%、銅(Cu) < 0.01%と低値である。

当鉄滓も砂鉄起源の脈石成分(TiO₂、V、MnO)の低減傾向が著しく、鍛錬鍛冶滓に分類される。また鉄酸化物(FeO)の割合が高いため、主に熱間で鍛打加工した時の吹き減り(酸化に伴う損失)で生じた滓と考えられる。

FDG-7: 鍛冶滓

(1) 肉眼観察: 小形の鍛冶滓破片(21.0g)と推定される。滓の地の色調は黒灰色である。表面は比較的滑らかで弱い流動状を呈する。側面4面が破面で、

小さな気孔が点在するが緻密な滓である。

(2) マクロ組織: Photo. 7①に示す。内部には中小の気孔が散在するが緻密な鍛冶滓である。

(3) 顕微鏡組織: Photo. 7②③に示す。白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

また滓中の微細な明白色粒は金属鉄である。3%ナイトルで腐食したところ、③右下のような比較的大形の金属鉄粒にはフェライト単相の組織が確認された。

(4) ビッカース断面硬度: Photo. 7②の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は466Hvであった。ウスタイトに同定される。また淡灰色柱状結晶の硬度値は648Hvで、ファヤライトと推定される。

(5) EPMA 調査: Photo. 7④に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。白色樹枝状結晶は特性X線像をみると鉄 (Fe)、酸素 (O) に強い反応がある。定量分析値は 89.8%FeO - 1.0%Al₂O₃ であった (分析点17)。ウスタイト (Wustite: FeO) と推定される。淡灰色柱状結晶は特性X線像では鉄 (Fe)、珪素 (Si)、酸素 (O) に反応がある。定量分析値は 65.7%FeO - 1.3%MgO - 30.2%SiO₂ (分析点18) であった。ファヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂) で、微量マグネシア (MgO) を固溶する。素地部分の定量分析値は 36.2%SiO₂ - 25.0%Al₂O₃ - 4.5%CaO - 6.0%K₂O - 1.6%Na₂O - 25.6%FeO (分析点19) であった。非晶質珪酸塩で、鉄分をかなり固溶する。またごく微細な明白色粒は特性X線像では鉄 (Fe) にのみ強い反応がある。定量分析値は 100.8%Fe (分析点4) で、金属鉄 (Metallic Fe) である。

(6) 化学組成分析: Table2に示す。全鉄分 (Total Fe) 55.19%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.13%、酸化第1鉄 (FeO) 63.09%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 8.61%の割合であった。造滓成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O) は 25.51%で、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) 1.18%と低値であった。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は 0.26%、バナジウム (V) が 0.01%と低い。また酸化マンガン (MnO) も 0.09%、銅 (Cu) < 0.01%と低値である。

当鉄滓も鉄分 (FeO) および炉材粘土の溶融物 (SiO₂ 主成分) 主体の鉄滓であった。製鉄原料の砂鉄起源

の脈石成分 (TiO₂、V、MnO) の低減傾向が著しく、鍛錬鍛冶滓に分類される。

FDG-8: 鉄塊系遺物

(1) 肉眼観察: ごく小形で塊状の含鉄鉄滓 (16.8g) である。全体は黄褐色の土砂に覆われており、本来の地の観察が困難である。土砂中には非常に微細な木炭や鍛造剥片などが混在する。また一個所茶褐色の錆化鉄部があり、周辺には錆化に伴う放射割れも生じている。この部分は着磁性も強く、特殊金属探知機のM (◎) で反応があり、内部に金属鉄が残存する可能性が高い。

(2) マクロ組織: Photo. 8①に示す。まとまりの良い鉄主体の遺物であった。外周から錆化が進んでいるが、部分的に金属鉄 (淡褐色部) が残存している。また表層にはごく薄く滓が固着している。

(3) 顕微鏡組織: Photo. 8②~⑦に示す。②は表面付着土砂中の鍛造剥片である。また③は表層の滓部の拡大である。白色粒状結晶ウスタイトが凝集して晶出する。鍛冶炉で加熱された時、鉄塊表層が酸化して生じたものと判断される。④⑤は金属鉄部の拡大で、3%ナイトルで腐食した組織を示す。亜共析組織~共析組織 (C ≤ 0.77%) が確認された。さらに⑥⑦は下面表層の錆化鉄部の拡大で、過共析組織 (C > 0.77%) 痕跡が残存する。以上の金属組織 (およびその痕跡) から、0.6~1.5%程度の炭素含有量の鋼と推定される。

(4) ビッカース断面硬度: Photo. 8③の滓部の硬度を測定した。硬度値は418Hv、427Hvであった。風化のためか若干軟質の値を示すが、色調と形態および後述のEPMA調査結果から、ウスタイトと推定される。

また⑤の金属鉄部の硬度測定も実施した。白色針状のフェライトが析出する個所の硬度値は164Hv、199Hvであった。これに対してパーライト組織部分の硬度値は219Hv、225Hvであった。それぞれ組織に見合った値である。

(5) EPMA 調査: Photo. 9①に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。白色粒状結晶の定量分析値は 91.4%FeO (分析点20)、97.1%FeO (分析点21) であった。ウスタイト (Wustite: FeO) と推定される。

さらに鉄中非金属介在物の組成調査も実施した。Photo. 9②に反射電子像 (COMP) を示す。金属鉄 (明

白色部)中に点在する粒状暗色部は珪素(Si)、アルミニウム(Al)、酸素(O)に強く、チタン(Ti)に弱い反応がある。定量分析値は62.0%SiO₂-12.8%Al₂O₃-8.8%CaO-4.4%MgO-3.2%K₂O-6.3%FeO-1.1%TiO₂(分析点22)であった。非晶質珪酸塩で、ごく微量チタン(TiO₂)を固溶する。

当鉄塊中の非金属介在物は鍛打によって変形した痕跡がなく、鍛錬鍛冶作業前ないしはごく初期に生じた小鉄塊で判断できる。鉄素材としてまとめられる前に取り残されたと考えられる。非晶質珪酸塩系の介在物中にはごく微量チタン(TiO₂)が検出された。これが製鉄原料に起因するものならば、始発原料は砂鉄の可能性が高いと考えられる。また金属鉄部は炭素含有量の高い鋼(C:0.6~1.5%)であった。硬さや焼入れ性を要求される「刃金」に適した性状といえる。

FDG-9:粒状滓⁵⁾

FDG-9-1(6.2mm径)

(1)肉眼観察:やや歪な球状を呈する。色調は黒灰色で表層にごく薄く茶褐色の土砂が付着する。表面には気孔などはみられない。

(2)マクロ組織:Photo.9③に示す。内部には写真下側を中心に大小の気孔が点在する。

(3)顕微鏡組織:Photo.9④に示す。白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また微細な明白色粒は金属鉄である。

FDG-9-2(3.7mm径)

(1)肉眼観察:やや歪な球状で、表面にはごく微細な突起がみられる。色調は黒灰色で表層に薄く茶褐色の土砂が付着する。表面には気孔などはみられない。

(2)マクロ組織:Photo.9⑤に示す。表面には薄手で微細な鍛造剥片が複数付着している。また内部は大きく空洞化しており、その周囲にも中小の気孔が多数散在する。

(3)顕微鏡組織:Photo.9⑥に示す。写真左側は表層に付着した鍛造剥片である。表層側は酸化雰囲気曝されたためか、明白色のヘマタイト(Hematite; Fe₂O₃)が厚く確認される。また滓と接触している側は分解・滓化が進んでいる。滓中にはごく微細な白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤラ

イトが晶出する。

FDG-9-3(3.2mm径)

(1)肉眼観察:やや歪な球状を呈する。色調は暗灰色で、表層にごく薄く茶褐色の土砂が付着する。表面には気孔などはみられない。

(2)マクロ組織:Photo.10①に示す。内部には微細な気孔が多数散在する。

(3)顕微鏡組織:Photo.10②に示す。白色樹枝状結晶ウスタイトが凝集して晶出する。

FDG-9-4(2.5mm径)

(1)肉眼観察:やや歪な球状で、表面に2箇所棘状の突起がみられる。色調は暗灰色で、表面にはごく微細な気孔が若干点在する。

(2)マクロ組織:Photo.10③に示す。表層側に若干大形の気孔が、中心寄りにごく微細な気孔が点在する。

(3)顕微鏡組織:Photo.10④に示す。非常に微細な白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。

FDG-9-5(2.4mm径)

(1)肉眼観察:やや歪な球状を呈する。色調は暗灰色で、表層にごく薄く茶褐色の土砂が付着する。表面には気孔などはみられない。

(2)マクロ組織:Photo.10⑤に示す。表面には微細な鍛造剥片が付着する。また内部にはごく微細な気孔が多数散在する。

(3)顕微鏡組織:Photo.10⑥に示す。表層(写真右側)には、ごく薄手の鍛造剥片が付着する。表面に明白色のヘマタイト、中間に灰褐色のマクネタイト、内側に灰色のウスタイト層が確認される。また滓中には白色樹枝状結晶ウスタイトが晶出する。

FDG-9-6(1.6mm径)

(1)肉眼観察:やや歪な球状を呈する。色調は暗灰色で、表層にごく薄く茶褐色の土砂が付着する。表面には気孔などはみられない。

(2)マクロ組織:Photo.10⑦に示す。滓中には微細な気孔が比較的密に分布する。

(3)顕微鏡組織:Photo.10⑧に示す。白色粒状結晶ウスタイトが凝集して晶出する。

今回分析調査を実施した粒状滓はいずれも、鍛錬鍛冶滓と同様の鉱物組成であった。熱間での鍛打加

工に伴う微細物と推定される。

FDG-10：鍛造剥片

FDG-10-1 (0.65mm厚み)

(1) 肉眼観察：色調は表裏面とも黒灰色で、部分的に茶褐色の土砂が付着する。表面は比較的平滑で、裏面には微細な凹凸がみられる。

(2) マクロ組織：Photo.11①に示す。主に裏面側の凹凸に伴う厚みの変動がみられる。厚手で比較的平坦な剥片である。

(3) 顕微鏡組織：Photo.11②に示す。3層分離被膜のうち、表層のヘマタイトが不明瞭であるが、灰褐色のマグネタイト、灰色のウスタイト層が確認される。

FDG-10-2 (0.4mm厚み)

(1) 肉眼観察：色調は黒灰色で、広い範囲で茶褐色の土砂が付着する。また表裏面とも比較的平滑である。

(2) マクロ組織：Photo.11③に示す。厚手で平坦な剥片である。

(3) 顕微鏡組織：Photo.11④に示す。表層(写真上側)にごく薄く明白色のヘマタイト、さらに中間に灰褐色のマグネタイト層、内側に灰色のウスタイト層が確認される。

FDG-10-3 (0.35mm厚み)

(1) 肉眼観察：色調は表裏面とも黒灰色で、緩やかな波状の凹凸がみられる。

(2) マクロ組織：Photo.11⑤に示す。やや薄手で、緩やかな波状に湾曲する剥片である。

(3) 顕微鏡組織：Photo.11⑥に示す。表層に明白色のヘマタイト、中間に灰褐色のマグネタイト、内側に灰色のウスタイトが確認される。

FDG-10-4 (0.35mm厚み)

(1) 肉眼観察：色調は暗灰色で、広い範囲で茶褐色の土砂が付着する。また表裏面とも比較的平滑である。

(2) マクロ組織：Photo.11⑦に示す。やや薄手で、表裏面のごく微細な凹凸による厚みの変動はあるが、比較的平坦な剥片である。

(3) 顕微鏡組織：Photo.11⑧に示す。表層に明白色のヘマタイト、中間に灰褐色のマグネタイト、内側に灰色のウスタイトが確認される。

FDG-10-5 (0.3mm厚み)

(1) 肉眼観察：色調は暗灰色で、部分的に茶褐色の土砂が付着する。表裏面とも比較的平滑である。

(2) マクロ組織：Photo.12①に示す。薄手で比較的平坦な剥片である。

(3) 顕微鏡組織：Photo.12②に示す。表層に明白色のヘマタイト、中間に灰褐色のマグネタイト、内側に灰色のウスタイトが確認される。

FDG-10-6 (0.25mm厚み)

(1) 肉眼観察：色調は暗灰色で、部分的に茶褐色の土砂が付着する。表裏面とも比較的平滑である。

(2) マクロ組織：Photo.12③に示す。非常に薄手で平坦な剥片である。

(3) 顕微鏡組織：Photo.12④に示す。表層に明白色のヘマタイト、中間に灰褐色のマグネタイト、内側に灰色のウスタイトが確認される。

今回分析調査を実施した6点は、いずれも薄膜状の鉄酸化物であった。鉄素材を熱間で鍛打加工した時に、鉄素材の表面に生じた酸化膜が剥離・飛散したものと推定される。

FDG-11：鍛冶滓

(1) 肉眼観察：非常に小形で不定形の鍛冶滓破片(1.9g)である。側面1面は破面。滓の地の色調は黒灰色で弱い流動状を呈する。気孔はほとんどなく緻密な滓である。また着磁性が非常に強いが、特殊金属探知機での反応はない。

(2) マクロ組織：Photo.12⑤に示す。白色粒状結晶ウスタイトおよび多角形結晶マグネタイトが凝集して晶出する。鉄酸化物主体の鍛冶滓であり、高品位の鉄素材を熱間加工した時の反応副生物と想定される。

(3) 顕微鏡組織：Photo.12⑥⑦に示す。⑥は白色粒状結晶ウスタイト(またはマグネタイトとの混晶)が晶出する個所、⑦は多角形結晶マグネタイトが晶出する個所の拡大である。

(4) ピッカース断面硬度：Photo.12⑥の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は504Hv、512Hv、517Hv、523Hvであった。ウスタイトとしては硬質で、マグネタイトの文献硬度値の範囲に入る。このためマグネタイト、またはウスタイトとマグネタイトの混晶となっている可能性が考えられる。また⑦の多角形結

品の硬度値は521Hv、558Hvであった。粒状結晶よりも硬質の値となっており、マグネタイトと推定される。

(5) EPMA調査: Photo. 13①に粒状結晶が凝集する部分の反射電子像 (COMP) を示す。粒状結晶内には微かな明暗が観察される。暗色部の定量分析値は89.4%FeO (分析点23)、明色部の定量分析値は96.2%FeO (分析点24) であった。この結果から暗色部はマグネタイト (Magnetite: FeO·Fe₂O₃)、明色部はウスタイト (Wustite: FeO) に近い組成と推測される。また周囲の淡灰色部の定量分析値は67.3%FeO-12.5%SiO₂-7.5%Al₂O₃であった (分析点25)。イスコライト (Ischorite: 5FeO·Fe₂O₃·SiO₆) でアルミナ (Al₂O₃) を固溶する。

またもう1視野、多角形結晶が晶出する部分の反射電子像 (COMP) を示す。多角形結晶の定量分析値は87.5%FeO-1.7%Al₂O₃ (分析点26) である。マグネタイト (Magnetite: FeO·Fe₂O₃) と推定される。淡灰色針状結晶の76.8%FeO-17.2%SiO₂であった (分析点27)。イスコライト (Ischorite: 5FeO·Fe₂O₃·SiO₆) に同定される。

当鉄滓も砂鉄起源の脈石成分 (TiO₂、V、Mn) の低減傾向が著しく、鍛錬鍛治滓に分類される。また鉄酸化物 (FeO) の割合が非常に高く、主に熱間で鍛打加工した時の吹き減り (酸化に伴う損失) で生じた滓と考えられる。

FDG-12: 鉄製品

(1) 肉眼観察: ごく小形でやや偏平な鉄製品 (8.9g) と推測される。表面は黄褐色の土砂で覆われる。また錆化に伴う割れも若干生じている。着磁性はあるが特殊金属探知機での反応はなく、鉄部は錆化している可能性が高い。

(2) マクロ組織: Photo. 13③に示す。写真左側が屈曲した薄板状の小破片である。全体は錆化しており、金属鉄部は残存していない。

(3) 顕微鏡組織: Photo. 13④⑤に示す。④は錆化鉄部表層の拡大で、微かに亜共析組織が残存する。また⑤は錆化鉄中の過共析組織痕跡が残存する部分の拡大である。板状の黒色部および明白色部はセメントタイトの痕跡である。

以上の調査結果から、当遺物は鍛造鉄器の小破片

と推定される。鉄中の炭素含有量は部位によるばらつきが大きい、⑤のような部分は1.5%以上炭素を含む高炭素鋼と判断される。

FDG-13: 鉄製品

(1) 肉眼観察: ごく小形で偏平な鉄製品 (8.7g) である。表面は黄褐色の土砂で覆われる。また錆化に伴う割れも若干生じている。着磁性はあるが、特殊金属探知機での反応はなく、鉄部は錆化している可能性が高い。

(2) マクロ組織: Photo. 14①に示す。横断面は一定の形状にきれいに整えられたようには見え難いが、錆化に伴う二次的な変形も考慮する必要がある。内部には層状に鉄酸化物 (灰褐色部) の巻き込みがみられるため、折返し鍛錬された鍛造品または鍛造鉄器製作に伴って生じた小鉄片と推測された。

(3) 顕微鏡組織: Photo. 14②③に示す。錆化鉄部の拡大である。全体が完全に錆化しており、金属鉄組織観察は実施できなかったが、微かに亜共析組織の痕跡が残存する。また写真右下寄りの層状の白色～灰褐色部は鉄酸化物 (ウスタイトまたはマグネタイト) と推定される。鉄素材を熱間で加工する時に表層に生じた鉄酸化膜が、折返し鍛錬に伴って内側に巻き込まれたものと推定される。

以上の調査結果から、当遺物は鍛造鉄器の小破片または鍛治加工の際に生じた小鉄片と推定される。また錆化が進行しているため、本来の鉄中炭素含有量について言及するのは難しいが、鉄製品 (FDG-12) のような高炭素鋼の組織痕跡はなく、比較的炭素含有量が低い製品または小鉄片であった可能性が考えられる。

FDG-14: 鉄製品

(1) 肉眼観察: 非常に小形で偏平な板状の鉄製品の破片 (5.4g) と推測される。表面は黄褐色の土砂で覆われる。また錆化に伴う割れも若干生じている。着磁性はあるが特殊金属探知機での反応はなく、鉄部は錆化している可能性が高い。

(2) マクロ組織: Photo. 14④に示す。薄板状に鍛打成形された鉄製品である。内部は完全に錆化しており、金属鉄部は残存していない。また表面に付着した土砂中には鍛造剥片が混在する。

(3) 顕微鏡組織: Photo. 14⑤⑥に示す。⑤の左側は

表層に固着した滓部である。白色粒状結晶ウスタイト (Wustite: FeO) が晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖であり、鉄素材を熱間で加工した時、鉄素材の表面が酸化して生じたものと判断される。また周囲の青灰色部は錆化鉄で、亜共析組織の痕跡が残存する。

以上の調査結果から、当遺物は薄板状に鍛打成形された鍛造品または小鉄片と推定される。鉄製品 (FDG-13) と同様に、微かに亜共析組織痕跡が残存するため、比較的炭素含有量が低い製品または小鉄片であった可能性が考えられる。

FDG-15: 鍛冶滓

(1) 肉眼観察: 小形の椀形鍛冶滓の破片 (21.7g) と推定される。側面2面は破面。滓の地の色調は黒灰色で、表面には茶褐色の鉄錆化物が付着する。着磁性は強いが特殊金属探知機での反応はなく、まともした鉄部はないと考えられる。破面には細かい気孔が多数散在するが、比較的重量感のある滓である。

(2) マクロ組織: Photo. 15①に示す。中小の気孔が散在するが、比較的緻密な鍛冶滓である。まともした鉄部はみられない。

(3) 顕微鏡組織: Photo. 15②③に示す。滓中には白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。また③中央やや右下寄りのごく微細な明白色部は金属鉄で、3%ナイタルで腐食したところ、亜共析組織が確認された。

(4) ビッカース断面硬度: Photo. 15②の白色樹枝状の硬度を測定した。硬度値は454Hv、459Hvであった。ウスタイトの文献硬度値の範囲内であり、ウスタイトに同定される。また灰色柱状結晶の硬度値は687Hvであった。ファヤライトの文献硬度値の範囲内であり、ファヤライトに同定される。

(5) EPMA調査: Photo. 15④に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。白色粒状結晶は特性X線像では鉄 (Fe)、酸素 (O) に強い反応がみられる。定量分析値は92.1%FeOであった (分析点30) であった。ウスタイト (Wustite: FeO) と同定される。さらにウスタイト粒内のごく微細な暗色結晶は特性X線像をみるとアルミニウム (Al) に反応がある。定量分析値は54.3%FeO-41.0%Al₂O₃ (分析点31) であった。ヘルシナイト (Hercynite: FeO-Al₂O₃) と同定される。淡灰

色柱状結晶は特性X線像では鉄 (Fe)、珪素 (Si) 酸素 (O) に反応がある。定量分析値は65.2%FeO-1.9%MgO-30.0%SiO₂ (分析点32) であった。ファヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂) で、微量マグネシア (MgO) を固溶する。素地部分の定量分析値は42.8%SiO₂-16.5%Al₂O₃-11.6%CaO-5.9%K₂O-1.3%Na₂O-1.1%P₂O₅-18.8%FeO (分析点33) であった。またごく微細な明白色粒は特性X線像では鉄 (Fe) にのみ強い反応がある。定量分析値は97.1%Fe (分析点5) であった。金属鉄 (Metallic Fe) である。

(6) 化学組成分析: Table2に示す。全鉄分 (Total Fe) は64.85%と高めである。このうち金属鉄 (Metallic Fe) は0.02%、酸化第1鉄 (FeO) 70.04%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 14.85%の割合である。渣滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) は13.01%と低めで、塩基性成分 (CaO+MgO) も1.14%と低値である。製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は0.23%、バナジウム (V) が0.01%と低い。酸化マンガン (MnO) も0.10%、銅 (Cu) <0.01%と低値である。

当鉄滓も砂鉄起源の脈石成分 (TiO₂、V、MnO) の低減傾向が著しく、鍛錬鍛冶滓に分類される。また鉄酸化物 (FeO) の割合が高いため、主に熱間で鍛打加工した時の吹き減り (酸化に伴う損失) で生じた滓と考えられる。

FDG-16: 椀形鍛冶滓

(1) 肉眼観察: やや扁平の椀形鍛冶滓 (132.5g) である。側面2面は破面と推定される。端部に1個所茶褐色の錆化鉄部があり、側面に沿って筋状に割れが生じている。この部分は着磁性が強いが、特殊金属探知器での反応はない。これに対して、滓部は暗灰色で弱着磁性がある。上下面ともごく小形の木炭痕による凹凸があり、一部は木炭を噛みこんでいる。また下面表層には淡褐色の鍛冶炉床土が薄く付着する。

(2) マクロ組織: Photo. 16①に示す。観察面の内部は大きく空洞化している。また滓中には微細な不定形の錆化鉄が多数散在するが、まともした鉄部はみられない。

(3) 顕微鏡組織: Photo. 16②③に示す。②は滓部で、白色樹枝状結晶ウスタイト (Wustite: FeO)、微細な

暗色多角形結晶ヘルシナイト (Hercynite: $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$)、淡灰色柱状結晶ファヤライト (Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) が晶出する。③左側の灰色部は錆化鉄である。内部には針状フェライト (Ferrite: α 鉄、灰色部)、および黒色層状のパーライト (Pearlite) 痕跡が残存しており、重共析組織 ($C < 0.77\%$) と判断される。またパーライトの面積率から、この箇所は炭素含有率 0.2%前後の軟鉄と推測される。

(4) ビッカース断面硬度: Photo. 16②の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は466Hv、519Hvであった。後者はウスタイトの文献硬度値 (450~500Hv) より硬質で、マグネタイト (500~600Hv) の範疇に入る。ウスタイトとマグネタイトの混晶となっている可能性が高い。また淡灰色柱状結晶の硬度値は679Hvであった。ファヤライトの文献硬度値の範囲内であり、ファヤライトに同定される¹⁾。

(5) EPMA調査: Photo. 16④に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。白色樹枝状結晶は特性X線像をみると鉄 (Fe)、酸素 (O) に強い反応がある。定量分析値は103.3%FeOであった (分析点1)。ウスタイト (Wustite: FeO) に同定される。微細な暗色多角形結晶は鉄 (Fe)、アルミニウム (Al) に強い反応がある。定量分析値は50.7%FeO-51.9% Al_2O_3 (分析点2)であった。ヘルシナイト (Hercynite: $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$) に同定される。灰色柱状結晶の特性X線像は鉄 (Fe)、珪素 (Si) に反応がある。定量分析値は60.4%FeO-29.8% SiO_2 (分析点3)であった。ファヤライト (Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) に同定される。不定形黒色結晶は、特性X線像では、珪素 (Si)、アルミニウム (Al)、カリウム (K) に反応がある。定量分析値は13.0% K_2O -60.1% SiO_2 -24.0% Al_2O_3 -2.2%FeO (分析点4)であった。オルソクレーズ (Orthoclase: KAlSi_3O_8) と推測される。また微細な明白色粒は、特性X線像では鉄にのみ強い反応がみられる。定量分析値は95.5%Fe (分析点5)であった。金属鉄 (Metallic Fe) である。

(6) 化学組成分析: Table2に示す。全鉄分 (Total Fe) 50.02%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.17%、酸化第1鉄 (FeO) 43.33%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 23.12%の割合であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 29.17%で、このうち塩基性成分 (CaO

+ MgO) は0.78%と低値であった。主に砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO_2) は0.25%、バナジウム (V) も<0.01%と低い。酸化マンガン (MnO) も0.09%と低値である。また銅 (Cu) は0.08%と高値であった。

当鉄滓中には、微細な金属鉄 (または錆化鉄) 部が確認された。後述する梶形鍛冶滓 (FDG-18) の表面付着土砂中の微細な銅粒や、銅滓 (FDG-22-1) 中にみられるような青銅 (または砒素銅) はみられず、鍛錬鍛冶滓の可能性が高いと考えられる。ただし銅 (Cu) の含有率は上記の銅の影響が確認された滓とほぼ同等であり、鍛冶炉で鍛造鉄器とともに銅 (または青銅) 小物の製作が行われた可能性が考えられる。

FDG-17: 梶形鍛冶滓 (含鉄)

(1) 肉眼観察: やや細長い形状で、ほぼ完形の梶形鍛冶滓 (169.7g) である。上面中央に箇所茶褐色の錆化鉄部がある。この部分は着磁性が強いが、特殊金属探知器での反応はない。一方滓部は黒灰色で弱い着磁性がある。また長軸片側には黒色ガラス質滓 (炉材粘土溶融物) が付着する。

(2) マクロ組織: Photo. 17①に示す。滓 (灰色部) 中には、不定形小形の金属鉄 (写真右側黒色部) が含まれている。3%ナイタルで腐食したところ、過共析組織 ($C > 0.77\%$) が確認された。またさらに微細な錆化鉄部も多数散在している。

(3) 顕微鏡組織: Photo. 17②③に示す。金属鉄部の拡大である。素地は黒色層状のパーライトで、白色針状のセメントタイト (Cementite: Fe_3C) が析出する。炭素含有率は1.0%前後と推定される。また1箇所 (③右下) 黒色点状のステダイト (Steadite: $\text{Fe}-\text{Fe}_3\text{C}-\text{Fe}_3\text{P}$) が晶出する。

(4) ビッカース断面硬度: Photo. 17③の金属鉄部 (過共析組織) の硬度を測定した。素地のパーライトの硬度値は272Hv、針状セメントタイトが析出する個所の硬度値は282Hvであった。またステダイトが晶出する個所の硬度値は949Hvと非常に硬質であった。それぞれ組織に見合った値といえる。ステダイト (Steadite: $\text{Fe}-\text{Fe}_3\text{C}-\text{Fe}_3\text{P}$) に同定される。

(5) EPMA調査: Photo. 17④に金属鉄部 (③右下部) の反射電子像 (COMP) を示す。黒色点状部は特

性X線像をみると磷(P)に強い反応がある。定量分析値は89.8%Fe-19.4%P(分析点2)であった。

もう1視野、滓部の調査を実施した。白色樹枝状結晶の定量分析値は98.6%FeO(分析点5)であった。ウスタイト(Wustite:FeO)に同定される。また樹枝状結晶内の微細な暗色多角結晶の定量分析値は55.5%FeO-42.7%Al₂O₃-1.1%TiO₂(分析点6)であった。ヘルシナイト(Hercynite:FeO·Al₂O₃)で、少量チタン(TiO₂)を固溶する。淡灰色盤状結晶は69.3%FeO-30.7%SiO₂(分析点7)であった。ファヤライト(Fayalite:2FeO·SiO₂)に同定される。さらに素地部分の定量分析値は46.8%SiO₂-25.9%Al₂O₃-10.8%CaO-1.4%K₂O-7.5%Na₂O-11.9%FeO(分析点8)であった。非晶質珪酸塩である。

(6) 化学組成分析: Table2に示す。全鉄分(Total Fe) 50.95%に対して、金属鉄(Metallic Fe) 1.16%、酸化第1鉄(FeO) 41.67%、酸化第2鉄(Fe₂O₃) 24.88%の割合であった。造滓成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) 25.09%で、このうち塩基性成分(CaO+MgO)は0.69%である。主に砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO₂)は0.23%、バナジウム(V)が0.01%と低値であった。また酸化マンガン(MnO)は0.10%、銅(Cu)0.02%であった。

当鉄滓は鉱物相組織の提示をしていないが、鉄酸化物と炉材粘土(または銲接剤の粘土汁・藁灰など)の溶融物(SiO₂主成分)主体であり、鉄素材の熱間加工時に生じた鍛錬銲治滓と推定される。また滓中の微細な金属鉄部は過共析組織を呈しており、高炭素鋼を加工していたと推定される。

FDG-18: 梶形銲治滓

(1) 肉眼観察: 平面不整半円状の梶形銲治滓の約1/2破片(150.6g)である。滓の色は暗灰色で弱い磁性がある。端部に黒色ガラス質滓(炉材粘土溶融物)が付着する。上面は中央がやや窪む形状で木炭痕が散在する。一方下面側は広い範囲で茶褐色の鉄錆化物がみられるが、まとまった鉄部はない。破面の気孔は少なく緻密である。

(2) マクロ組織: Photo.18①に示す。滓全体に発達した淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。また下面表層には薄く銲治炉床土が付着する(写真下側黒色部)

(3) 顕微鏡組織: Photo.18②③に示す。②は滓部の拡大である。微細な白色粒状結晶ウスタイト、暗色多角形結晶ヘルシナイト、発達した淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。一方③は、滓の下面表層に付着する土砂(銲治炉床土)中に含まれる、微細な淡褐色の金属粒の拡大である。組成に関してはEPMA調査の項で詳述するが、銅粒と推測される。

(4) ビッカース断面硬度: Photo.18④の暗色多角結晶の硬度を測定した。硬度値は1305HV、1442HV非常に硬質であった。ヘルシナイトと推定される。淡灰色柱状結晶の硬度値は640HVであった。ファヤライトに同定される。

(5) EPMA調査: Photo.18④に滓部の反射電子像(COMP)を示す。白色粒状結晶の定量分析値は101.6%FeOであった(分析点10)。ウスタイト(Wustite:FeO)に同定される。微細な暗色多角結晶の定量分析値は50.2%FeO-49.7%Al₂O₃-1.2%TiO₂であった(分析点11)。ヘルシナイト(Hercynite:FeO·Al₂O₃)で、少量チタン(TiO₂)を固溶する。淡灰色盤状結晶の定量分析値は70.5%FeO-31.0%SiO₂(分析点12)であった。ファヤライト(Fayalite:2FeO·SiO₂)に同定される。また写真左下の明白な金属粒は特性X線像をみると鉄(Fe)に強い反応がある。定量分析値は100.6%Fe-1.5%Cu(分析点3)であった。金属鉄(Metallic Fe)であるが、銅(Cu)も少量検出されている。

もう1視野、下面表層に付着した土砂(炉床土)中の微細な金属粒の調査を実施した。Photo.18⑤に特性X線像(Photo.18⑤の拡大)を示す。中央の微細な淡褐色金属粒は、特性X線像では銅(Cu)に反応がある。定量分析値は50.6%Cu-14.2%Si-4.0%Al-4.9%K-12.8%O(分析点4)であった。淡褐色部は金属銅(Metallic Cu)で、他の元素は周囲の砂粒(長石類)の影響を受けた値と推測される。

(6) 化学組成分析: Table2に示す。全鉄分(Total Fe) 49.10%に対して、金属鉄(Metallic Fe) 0.06%、酸化第1鉄(FeO) 45.85%、酸化第2鉄(Fe₂O₃) 19.16%の割合であった。造滓成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) 31.21%で、このうち塩基性成分(CaO+MgO)は0.98%であった。砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO₂) 0.24%、バナジウム(V) 0.01%であった。

酸化マンガン (MnO) は0.12%、また銅 (Cu) は0.09%と高値であった。

当遺物では洋中に微小金属鉄粒、付着土砂 (炉床土) 中に金属銅が確認された。このことから、当洋は鍛造鉄器と銅小物の製作を同じ場所で行う (炉で加熱する) 作業環境で生じた反応副生物と推測される。

FDG-19: 梃形鍛冶洋

(1) 肉眼観察: 大形でやや偏平な梃形鍛冶洋の破片 (219.3g) である。側面6面は破面。上面中央に1個所環状の錆化鉄部があるが、錆化が特殊金属探知器での反応はない。洋の色調は黒灰色で、弱い着磁性がある。上面には灰褐色の炉材粘土や黒色ガラス質洋が点在する。下面側は粉炭による非常に微細な凹凸がみられる。また部分的に灰褐色の鍛冶炉土砂が付着する。

(2) マクロ組織: Photo. 19①に示す。上側の暗色部は炉材粘土の溶融物 (ガラス質洋)、下側は鍛冶洋部分である。また下面表層には鍛冶炉床土が付着する。

(3) 顕微鏡組織: Photo. 19②③に示す。洋中の暗色多角結晶はヘルシナイト、灰褐色多角結晶はマグネタイトとヘルシナイトを主な端成分とする固溶体²⁾と推定される。さらに白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。

(4) ビッカース断面硬度: Photo. 19②の多角結晶の硬度を測定した。内側暗色部の硬度値は129Hvと非常に硬質であった。ヘルシナイトと推定される。一方灰褐色部の硬度値は860Hvであった。暗色部 (ヘルシナイト) と比較すると軟質であるが、マグネタイトの文献硬度値 (500~600Hv) より硬質であり、マグネタイトとヘルシナイトを主な端成分とする固溶体²⁾と判断される。

③の白色樹枝状結晶の硬度値は469Hvであった。ウスタイトの文献硬度値の範囲内であり、ウスタイトに同定される。また淡灰色盤状結晶の硬度値は749Hvであった。ファヤライトの文献硬度値よりも硬質であるが、ヘルシナイト結晶の影響を受けた可能性が考えられる。

(5) EPMA調査: Photo. 19④に洋部の反射電子像 (COMP) を示す。多角結晶の内側暗色部は特性X線像をみるとアルミニウム (Al) に強い反応がある。定

量分析値は51.5%FeO-51.4%Al₂O₃-1.3%TiO₂ (分析点15) であった。ヘルシナイト (Hercynite: FeO·Al₂O₃) で、チタン (TiO₂) を少量固溶する。一方外側の明色部は84.9%FeO-9.9%Al₂O₃-1.3%TiO₂ (分析点16) であった。暗色部と比較するとアルミナ (Al₂O₃) の割合が低く、マグネタイト (Magnetite: FeO·Fe₂O₃) とヘルシナイト (Hercynite: FeO·Al₂O₃) を主な端成分とする固溶体と判断される。また淡灰色柱状結晶の定量分析値は72.6%FeO-31.4%SiO₂であった (分析点17)。ファヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂) に同定される。狭小黒色地の定量分析値は8.5%K₂O-68.9%SiO₂-24.8%Al₂O₃-1.6%FeO (分析点18) であった。オルソクレース (Orthoclase: KAlSi₃O₈) と推測される。

もう1視野、Photo. 19の⑤に洋部の反射電子像 (COMP) を示す。白色粒状結晶の定量分析値は101.5%FeO (分析点19) であった。ウスタイト (Wustite: FeO) に同定される。微細暗色結晶の定量分析値は47.7%FeO-53.3%Al₂O₃ (分析点20) であった。ヘルシナイト (Hercynite: FeO·Al₂O₃) に同定される。淡灰色柱状結晶の定量分析値は71.3%FeO-31.6%SiO₂であった (分析点21)。ファヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂) に同定される。黒色結晶の定量分析値は9.9%K₂O-64.1%SiO₂-25.1%Al₂O₃-1.2%Na₂O-3.5%FeO (分析点22) であった。オルソクレース (Orthoclase: KAlSi₃O₈) と推測される。また⑤左下の明白色粒の定量分析値は102.5%Feであった。金属鉄 (Metallic Fe) である。

(6) 化学組成分析: Table2に示す。全鉄分 (Total Fe) 42.38%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.09%、酸化第1鉄 (FeO) 40.67%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 15.27%の割合であった。造洋成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) は38.44%と高値であるが、塩基性成分 (CaO+MgO) は1.50%と低値である。主に砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は0.30%、バナジウム (V) 0.01%であった。酸化マンガン (MnO) は0.10%と低値で、銅 (Cu) は0.05%と若干高めであった。

当鉄洋も銅 (Cu) の含有率が若干高めであるが、洋中には銅 (Cu) ではなく、金属鉄が確認されることから、鍛錬鍛冶洋の可能性が高いと考えられる。

FDG-20-1: 楕形鍛冶滓

(1) 肉眼観察: やや扁平な楕形鍛冶滓の破片 (71.8g) である。側面5面は全面破面。気孔は少なく緻密である。滓の地の色調は暗灰色で、弱い着磁性がある。下面側には砂粒を多量に混和した灰褐色の鍛冶炉床土が付着する。

(2) マクロ組織: Photo. 20①に示す。上面端部および下面側の暗灰色部は炉材粘土の溶融物である。素地部分は熱影響を受けてガラス質化している。その内部には炉材粘土中に混和された、石英・長石などの砂粒が残存する。

(3) 顕微鏡組織: Photo. 20②~⑦に示す。多角形結晶の暗色部はヘルシナイト、灰褐色部はマグネタイトとヘルシナイトの固溶体である。また④⑤の明灰色針状結晶はイスコライト (Isocrite: $5\text{FeO}\cdot\text{Fe}_2\text{O}_3\cdot\text{SiO}_m$) と推測される。さらに白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトも晶出する。

(4) ビッカース断面硬度: Photo. 20③の暗色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は1040HVであった。非常に硬質であり、ヘルシナイトと推定される。また淡灰色盤状結晶の硬度値は778HVであった。ファヤライトとしては硬質であるが、色調と形状からはファヤライトと推測される。マグネシア (MgO) など、硬度を上昇させる元素を少量固溶している可能性も考えられる。

もう1箇所、Photo. 20⑦の白色粒状結晶の硬度測定を実施した。硬度値は532HV、548HVであった。ウスタイトとしてはやや硬質で、マグネタイトの文献硬度値の範囲に入る。色調や形状などの特徴から、両者の混晶の可能性を提示しておきたい。

(5) 化学組成分析: Table2に示す。全鉄分 (Total Fe) 45.61% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.15%、酸化第1鉄 (FeO) 40.09%、酸化第2鉄 (Fe_2O_3) 20.44% の割合であった。渣滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) は34.93%と高めであるが、塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は0.79%と低い。主に砂鉄 (含チタン鉄鉱) の二酸化チタン (TiO_2) 0.28%、バナジウム (V) 0.01%と低値であった。酸化マンガン (MnO) は0.10%、銅 (Cu) は0.02%と低めであった。

当鉄滓は銅 (Cu) の含有率が低めであり、鍛錬鍛

冶滓と推定される。

FDG-20-2: 含鉄鉄滓

(1) 肉眼観察: ごく小形で塊状の含鉄鉄滓 (9.5g) である。表面には暗灰色の滓部が観察される。また全体は茶褐色の錆化物で覆われており、錆化に伴う割れが生じているが、特殊金属探知器のL (●) で反応がある。内部には金属鉄が残存すると考えられる。

(2) マクロ組織: Photo. 21①に示す。上側の暗灰色部は鍛冶滓、下側は金属鉄部で、3%ナイトルで腐食している。ほぼ全面過共析組織 ($C > 0.77\%$) の鋼であった。炭素含有率は部位によりややばらつきがあり、0.9%~1.5%程度と推定される。

(3) 顕微鏡組織: Photo. 21②③に示す。金属鉄部の拡大である。素地は黒色層状のパーライトで、白色網目状にセメントイトが析出する。

(4) ビッカース断面硬度: Photo. 21③の金属鉄部 (過共析組織) の硬度を測定した。素地のパーライト組織の硬度値は248HV、セメントイトが析出する個所の硬度値は549HVであった。それぞれ組織に見合った値である。

(5) EPMA調査: Photo. 21④に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。白色粒状結晶は特性X線像をみると鉄 (Fe)、酸素 (O) に反応がある。定量分析値は101.5%FeO (分析点24) であった。ウスタイト (Wustite: FeO) に同定される。微細暗色結晶は特性X線像では鉄 (Fe)、アルミニウム (Al)、酸素 (O) に強い反応がある。定量分析値は62.8%FeO-40.7% Al_2O_3 -1.1% TiO_2 (分析点25) であった。ヘルシナイト (Hercynite: $\text{FeO}\cdot\text{Al}_2\text{O}_3$) に近い組成で、チタン (TiO_2) を少量固溶する。淡灰色盤状結晶は特性X線像をみると鉄 (Fe)、珪素 (Si) 酸素 (O) に反応がある。定量分析値は73.5%FeO-30.9% SiO_2 であった (分析点26)。ファヤライト (Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$) に同定される。黒色結晶は特性X線像ではカリウム (K) に強い反応がある。定量分析値は8.0% K_2O -66.9% SiO_2 -26.4% Al_2O_3 -1.0% Na_2O -1.7%FeO (分析点27) であった。オルソクレース (Orthoclase: KAlSi_3O_8) と推測される。

当遺物は滓部・金属鉄部とも楕形鍛冶滓 (FDG-17) とよく似ている。滓部の鉱物組成から、やはり

鍛打作業の初期段階で、鉄素材としてまとまらなかった微細な含鉄鉄滓と推察される。また金属鉄部はほぼ全面過共析組織を呈する高炭素鋼で、硬さや焼入れ性を要求される刃金の原料として適した性状といえる。

FDG-21：鍛冶滓

- (1) 肉眼観察：小形で完形の鍛冶滓(14.3g)である。滓部は暗灰色で弱磁性がある。また下面には微細な砂粒を多量に含む鍛冶炉床土が付着する。
- (2) マクロ組織：Photo.22①に示す。表層側は発達した淡灰色盤状結晶ファヤライト、内側に白色樹枝状結晶ウスタイトが晶出する。
- (3) 顕微鏡組織：Photo.22②③に示す。②は表層側の拡大で、上述したように発達した淡灰色盤状結晶ファヤライトが晶出する。明灰色部は錆化鉄である。金属組織痕跡は不明瞭で、炭素含有率等の推定は困難な状態であった。③は内側の滓部の拡大である。白色樹枝状結晶ウスタイトが晶出する。またウスタイトの内部や周囲に点在する微細な暗色結晶はヘルシナイトである。鍛錬鍛冶滓の晶癖といえる。
- (4) ビッカース断面硬度：Photo.22③の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は435HV、454HVであった。前者はウスタイトとしては若干軟質であるが、色調と形状、および後述するEPMA調査の結果からウスタイトに同定される。また淡灰色盤状結晶の硬度値は697HVであった。ファヤライトの文献硬度値の範囲内であり、ファヤライトと推定される。
- (5) EPMA調査：Photo.22④に滓部の反射電子像(COMP)を示す。白色粒状結晶は特性X線像をみると鉄(Fe)、酸素(O)に反応がある。定量分析値は104.5%FeO(分析点28)であった。ウスタイト(Wustite: FeO)に同定される。微細暗色結晶は特性X線像では鉄(Fe)、アルミニウム(Al)、酸素(O)に強い反応がある。定量分析値は50.6%FeO-52.2%Al₂O₃(分析点29)であった。ヘルシナイト(Hercynite: FeO·Al₂O₃)に同定される。淡灰色盤状結晶は特性X線像をみると鉄(Fe)、珪素(Si)、酸素(O)に強い反応がある。定量分析値は68.7%FeO-30.3%SiO₂であった(分析点30)。ファヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO₂)に同定される。
- (6) 化学組成分析：Table2に示す。全鉄分(Total

Fe) 44.56%に対して、金属鉄(Metallic Fe) 0.09%、酸化第1鉄(FeO) 47.49%、酸化第2鉄(Fe₂O₃) 10.80%の割合であった。渣滓成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) 40.34%と高い割合を示すが、塩基性成分(CaO+MgO) 0.84%と低い。主に砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO₂)は0.38%、バナジウム(V) 0.01%と低値であった。また酸化マンガン(MnO) 0.12%、銅(Cu)も<0.01%と低値である。

当鉄滓は鉄酸化物と炉材粘土(または鍛冶剤の粘土汁・藁灰など)の溶融物(SiO₂主成分)主体であり、鉄素材の熱間加工時に生じた鍛錬鍛冶滓と推定される。銅(Cu)含有率も極めて低い。

FDG-22-1：銅滓

- (1) 肉眼観察：不定形で完形の銅滓(78.9g)である。滓部は黒灰色で着磁性がある。表面の気孔は少なく緻密である。また部分的に灰褐色の被熱粘土やガラス質滓が付着する。
- (2) マクロ組織：Photo.23①に示す。写真左側の暗色部は被熱粘土である。炉床土の可能性が考えられる。また滓中に散在する微細な暗色粒も炉材粘土に混和された砂粒(石英・長石類)と推察される。
- (3) 顕微鏡組織：Photo.23②③に示す。②は観察面中央よりで、発達した白色樹枝状結晶ウスタイトが晶出する。一方③は下面側である。ウスタイトはごく微細で、発達した淡灰色盤状結晶ファヤライトが晶出する。また③中央の淡橙色粒は鉄(Fe)、砒素(As)を含む銅(Cu)であった。組成に関してはEPMA調査の項で詳述するが、当銅滓は坩堝鍛冶滓(FDG-18)とは異なり、滓中に銅粒が複数散在している。この特徴から、銅(または青銅)小物の製作に関わる銅滓の可能性が考えられる。
- (4) ビッカース断面硬度：Photo.23②の白色樹枝状の硬度を測定した。硬度値は495HV、518HVであった。ウスタイトとマグネタイトの文献硬度値の境界(500HV)前後の値であり、両者の混晶の可能性が考えられる。また淡灰色柱状結晶の硬度値は659HVであった。ファヤライトの文献硬度値の範囲内であり、ファヤライトに同定される。
- (5) EPMA調査：Photo.23④に滓中の微小金属粒(Photo.23③の拡大)の反射電子像(COMP)を示す。滓中の微細な白色結晶の定量分析値は99.9%FeO(分

析点1)であった。ウスタイト (Wustite: FeO) と推定される。淡灰色柱状結晶の定量分析値は71.7%FeO-30.8%SiO₂ (分析点2)であった。ファヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂) に同定される。また微小金属粒の素地部分 (淡橙色部) の定量分析値は91.9%Cu-3.1%Fe-4.9%As (分析点11)であった。鉄 (Fe)、砒素 (As) を含む銅粒といえる。また金属粒外側の青灰色部は特性X線像では砒素 (As) に強い反応がみられる。定量分析値は62.8%Cu-5.2%Fe-28.0%As (分析点12)と、非常に砒素の割合の高い相であった。

もう1視野、浮点調査を実施した。Photo. 23⑤反射電子像 (COMP) を示す。多角形結晶外側 (暗色部) の定量分析値は81.5%FeO-10.9%Al₂O₃-1.6%TiO₂ (分析点4)、内側 (明色部) の定量分析値は78.0%FeO-18.7%Al₂O₃-1.2%TiO₂ (分析点5)であった。ともにマグネタイト (Magnetite: FeO·Fe₂O₃) とヘルシナイト (Hercynite: FeO·Al₂O₃) を主な端成分とする固溶体で、チタン (TiO₂) も少量含まれる。微細な白色粒状結晶の定量分析値は101.5%FeO (分析点6)であった。ウスタイト (Wustite: FeO) に同定される。また淡灰色針状結晶の定量分析値は87.9%FeO-9.8%SiO₂-3.0%Al₂O₃ (分析点7)であった。イスコライト (Ischorite: 5FeO·Fe₂O₃·SiO₂) と推測される。淡灰色柱状結晶の定量分析値は72.5%FeO-31.1%SiO₂ (分析点8)であった。ファヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂) に同定される。素地部分の定量分析値は53.5%SiO₂-19.2%Al₂O₃-4.7%CaO-4.3%K₂O-1.4%Na₂O-17.2%FeO (分析点9)であった。非晶質珪酸塩である。さらに微細な淡橙色の金属粒の定量分析値は88.9%Cu-3.6%Sn-5.7%Fe-2.6%As (分析点13)であった。鉄 (Fe)、砒素 (As) を含む青銅 (Cu-Sn合金) と判断される。

(6) 化学組成分析: Table2に示す。全鉄分 (Total Fe) 44.72%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.05%、酸化第1鉄 (FeO) 37.63%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 22.05%の割合であった。造洋成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) 38.38%と高めであるが、塩基性成分 (CaO+MgO) は0.82%と低い。主に矽鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は0.32%、バナジウム (V) が0.01%、酸化マンガン (MnO) も0.14%と低

値であった。銅 (Cu) は0.08%と高めであった。

当鉱滓は滓中に鉄 (Fe)、砒素 (As) を含む銅粒、または青銅粒が複数確認される。この特徴から、銅 (または青銅) 製品の製作に関わる滓と推定される。また銅 (青銅) 粒中に鉄 (Fe)、砒素 (As) がかなり含まれることから、これらの不純物を酸化除去して銅 (Cu) の含有率を上げる精製作業が行われた可能性も考慮する必要がある。ただし銅滓としてはかなり銅含有率が低いこと (Cu: 0.08%) から、現時点では銅素材 (粗銅) の精製作業がまともに行われた可能性は低いと判断される。[遺跡内で溶解炉跡やその炉壁片、坩堝といった鋳鋼関連遺構・遺物は未検出である。]

FDG-22-2: 鉄塊系遺物

(1) 肉眼観察: 小形で塊状の鉄塊系遺物 (51.9g) である。全体が茶褐色の錆化物で厚く覆われる。本来の表面状態の観察は困難であるが、明瞭な浮点はみられず、鉄主体の遺物と推測される。また表面には錆化に伴う割れが生じており、一部は表面が剥落している。しかし特殊金属探知器のL (●) で反応があり、内部には金属鉄が残存すると考えられる。(2) マクロ組織: Photo. 24①に示す。内部にはほとんどの良い金属鉄 (および錆化鉄) 部が確認された。写真左側は全体に錆化が進んでいるが、この部分は高炭素域で、中心の金属鉄部は低炭素域である。金属組織に関しては顕微鏡組織の項で詳述するが、部位により非常に炭素含有率のばらつきが大きい遺物であった。(3) 顕微鏡組織: Photo. 24②~⑦に示す。②③は①左側の高炭素域の拡大で、過共析組織~亜共晶組成白鉄組織 (C<4.26%) を呈する。炭素含有率は約1.3%~3%前後と判断される。一方、④⑤は低炭素域である。素地の灰色部はベイナイト (Bainite) で、白色針状のフェライトが析出する。炭素含有率は0.1%前後と推定される。

また⑥⑦は表層の付着滓の拡大である。白色粒状結晶ウスタイトが晶出する。鉄塊表層が酸化雰囲気曝されて生じたものと考えられる。

(4) ビッカース断面硬度: Photo. 24②の金属鉄部の硬度を測定した。②の左側は亜共晶組成白鉄組織で、蜂の巣状のレデブライト (Ledebulite) の硬度

値は63Hvと硬質であった。一方右側は過共析組織部分で、白色板状のセメンタイトが析出する個所の硬度値は445Hv、素地のパーライト組織の硬度は311Hvであった。

さらにもう1視野、Photo.24④の金属鉄部の硬度測定も実施した。素地のペイナイトの硬度値は165Hv、白色針状の初析フェライトが析出する個所の硬度値は113Hvであった。それぞれ組織に見合った値である。

付着滓の鉱物組成(ウスタイト)から、当遺物は鍛冶処理途中の小鉄塊と判断される。金属鉄(錆化鉄)部は部位によって炭素含有率のばらつきが非常に大きい(C:0.1%~3%前後)ことが明らかとなった。また一部白錆組織を呈することから、鉄(鑄鉄)を脱炭して鍛冶原料としていた可能性も考えられる。

FDG-23: 梟形鍛冶滓(含鉄)

(1) 肉眼観察: やや小形で偏平な梟形鍛冶滓の破片(114.2g)である。側面1面は破面。上面側端部にまとまった錆化鉄部があり、そこを中心に割れが生じている。特殊金属探知器の反応はなく、錆化していると推定される。滓部は黒灰色で、破面に中小の気孔が点在するが緻密である。

(2) マクロ組織: Photo.25①に示す。滓中に多数散在する不定形の明灰色部は錆化鉄である。観察面ではまとまった鉄部はみられなかった。

(3) 顕微鏡組織: Photo.25②③に示す。②は滓部の拡大である。白色粒状結晶ウスタイト、微細な暗色多角形結晶ヘルシナイト、淡灰色盤状結晶ファヤライトが晶出する。また③は錆化鉄である。内部には針状フェライト、および黒色層状のパーライト痕跡が残存しており、亜共析組織(C<0.77%)と判断される。またパーライトの面積率から、この個所は炭素含有率0.2%前後の軟鉄と推測される。

(4) ビッカース断面硬度: Photo.25④の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は464Hvであった。ウスタイトの文献硬度値の範囲内であり、ウスタイトに同定される。また淡灰色盤状結晶の硬度値は725Hv、741Hvであった。ファヤライトの文献硬度値よりも硬質であるが、結晶の色調や形状、さらに後述するEPMA調査結果からファヤライトと推定される。

(5) EPMA調査: Photo.25④に滓部の反射電子像

(COMP)を示す。白色粒状結晶は特性X線像をみると鉄(Fe)、酸素(O)に反応がある。定量分析値は100.1%FeO(分析点32)であった。ウスタイト(Wustite: FeO)に同定される。微細暗色結晶は特性X線像では鉄(Fe)、アルミニウム(Al)、酸素(O)に強い反応がある。定量分析値は50.5%FeO-50.5%Al₂O₃(分析点33)であった。ヘルシナイト(Hercynite: FeO·Al₂O₃)に同定される。淡灰色盤状結晶は特性X線像をみると鉄(Fe)、珪素(Si)酸素(O)に反応がある。定量分析値は66.1%FeO-30.8%SiO₂であった(分析点34)。ファヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO₂)に同定される。黒色結晶は特性X線像ではカリウム(K)に強い反応がある。定量分析値は11.9%K₂O-59.3%SiO₂-23.9%Al₂O₃-1.7%FeO(分析点35)であった。オルソクレース(Orthoclase: KAlSi₃O₈)と推測される。

(6) 化学組成分析: Table2に示す。全鉄分(Total Fe)は56.94%と高値であった。このうち金属鉄(Metallic Fe)は0.19%、酸化第1鉄(FeO)が30.83%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)46.88%の割合であった。造滓成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)14.75%と低めで、塩基性成分(CaO+MgO)も0.40%と低い。主に砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO₂)は0.15%、バナジウム(V)が0.01%、酸化マンガン(MnO)も0.05%であった。銅(Cu)は0.11%と高めである。

当鉄滓は銅(Cu)含有率が0.11%と高めであるが、銅滓(FDG-22-1)のような金属銅(または青銅)は見られず、亜共析組織痕跡の残る錆化鉄部が確認された。このため熱間での鍛打加工で生じた銅鉄鍛冶滓の可能性が高いと考えられる。

FDG-24: 鍛冶滓

(1) 肉眼観察: 梟形鍛冶滓の側面端部破片(45.1g)と推測される。滓の色調は黒灰色で弱い着磁性がある。また上下面とも微細な木炭痕による凹凸が目立つ。側面2面は破面で、中小の気孔が散在するが、緻密で重量感のある滓である。

(2) マクロ組織: Photo.26①に示す。写真左側の不定形青灰色部は錆化鉄である。金属組織痕跡は不明瞭で、炭素含有率の推定は困難な状態であった。

(3) 顕微鏡組織: Photo.26②③に示す。②は滓中の

微細な金属鉄（明灰色粒）、錆化鉄（青灰色部）の拡大である。一方③は滓部の拡大で、白色樹枝状結晶ウスタイト（Wustite: FeO）、淡灰色柱状結晶フayライト（Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ ）が晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

（4）ピッカース断面硬度：Photo. 26 ③の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は445Hv、45Hvであった。前者はウスタイトの文献硬度値450～500Hvよりも僅かに軟質であるが、ウスタイトと推定される。また淡灰色柱状結晶の硬度値は757Hvであった。フayライトの文献硬度値よりも硬質である。後述のEPMA調査結果をみると、ライム（CaO）など他の元素の影響を受けた可能性が考えられる¹⁾。

（5）EPMA調査：Photo. 26 ④に滓部の反射電子像（COMP）を示す。白色粒状結晶は特性X線像をみると鉄（Fe）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は94.2%FeOであった（分析点24）。ウスタイト（Wustite: FeO）に同定される。暗色微結晶は特性X線像では鉄（Fe）、アルミニウム（Al）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は47.8%FeO-49.4%Al₂O₃（分析点25）であった。ヘルシナイト（Hercynite: FeO·Al₂O₃）に同定される。淡灰色盤状結晶の定量分析値は59.9%FeO-4.9%CaO-1.9%MnO-30.4%SiO₂（分析点27）であった。フayライト（Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ ）で、ライム（CaO）、マンガン（MnO）を少量固溶する。黒色結晶は特性X線像ではカリウム（K）に強い反応がある。定量分析値は17.3%K₂O-61.4%SiO₂-24.6%Al₂O₃-1.3%FeO（分析点28）であった。オルソクレーズ（Orthoclase: KAlSi₃O₈）と推測される。また微細明白色粒は特性X線像では鉄（Fe）にのみ強い反応がある。定量分析値は102.4%Fe-3.5%Cu（分析点5）であった。金属鉄（Metallic Fe）であるが、銅（Cu）も検出された。

（6）化学組成分析：Table2に示す。全鉄分（Total Fe）は53.32%と高めであった。このうち金属鉄（Metallic Fe）は0.10%、酸化第1鉄（FeO）が51.22%、酸化第2鉄（Fe₂O₃）19.17%の割合であった。造滓成分（SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O）25.04%で、塩基性成分（CaO+MgO）の割合は1.39%と低い。主に製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）に含まれる二酸化チタン（TiO₂）は0.16%、バナジウム（V）が0.01%

と低値であった。酸化マンガン（MnO）も0.05%と低値である。銅（Cu）は0.05%と高値傾向を示した。

4. まとめ

4-1. 第2次調査

鍛冶関連遺物を調査した結果、当遺跡では主に鉄素材を熱間で鍛打加工して、鍛造鉄器を製作していたことが明らかとなった。詳細は以下の通りである。
（1）分析調査を実施した鉄滓9点（FDG-1～7、11、15）はすべて鍛錬鍛冶滓に分類される。鉄酸化物と炉材粘土または鍛接材（粘土汁・藁灰等）の溶融物（SiO₂主成分）主体の滓で、製鉄原料の砂鉄起源の脈石成分（TiO₂、V、MnO）は低減傾向が著しい。

さらに粒状滓（FDG-9）や鍛造剥片（FDG-10）など、熱間での鍛打加工に伴う微細遺物も複数確認された。

この特徴から、当遺跡には製鉄原料起源の不純物（砂鉄製錬滓～精錬鍛冶滓）が除去された状態の鉄素材が搬入されており、主に熱間で鍛造鉄器製作作業が行われていたと判断される。また鉄製品を鍛冶原料に再利用していた可能性も考えられる。

（2）鉄塊系遺物（FDG-8）は、炭素含有量が0.6～1.5%程度の鋼であった。硬さや焼入れ性を要求される「刃金（利器の刃部先端）」に適した性状といえる。鉄中の非金属介在物（非晶質珪酸塩）には鍛打に伴う変形がほとんどなく、鍛打作業前ないしはごく初期に取り残された小鉄塊と考えられる。

また介在物中にはごく微量のチタン（TiO₂）が検出された。これが製鉄原料起源のものであれば、始発原料は砂鉄の可能性が考えられる。7世紀後半以降、日本列島内の広い範囲で砂鉄を製鉄原料とした鉄生産が行われているため、奈良時代にそうした鉄原料が当地域に搬入された可能性は十分考えられる。
（3）鉄製品または鍛造鉄器製作に伴う小鉄片（FDG-12～14）は、いずれも錆化が進んでおり、製作技法などを詳細に検討するのは困難な状態であった。鉄製品（FDG-13）には一部過共析組織痕跡が残存しており、かなりの高炭素鋼をもとにした製品の可能性がある。これに対して、鉄製品（FDG-14、15）比較的炭素含有量が低い製品または小鉄片であった可能性が考えられる。

また鉄製品 (FDG-14, 15) は表層や内部に酸化物質 (ウスタイトまたはマグネタイト) の固着や巻き込みが見られた。これらは鉄素材を熱間で加工する際、鉄素材表面に生じた酸化物と考えられる。鍛冶滓中にも酸化鉄の割合が高く、主に主に熱間で鍛打加工した時の吹き減り (酸化に伴う損失) で生じたと考えられるものが複数 (FDG-6, 11, 15) 確認されており、遺跡内での鍛冶作業を反映した特徴と考えられよう。

4-2. 第3次調査

第3次調査地区出土鍛冶関連遺物を調査した結果、第2次調査地区 (鍛冶炉跡を伴う) とは異なり、鍛造鉄器製作のみでなく、銅 (または青銅) 製品も作られていた可能性が高いことが明らかとなった。詳細は以下の通りである。

(1) 鍛冶滓 (FDG-16~19, 20-1, 21, 23) は鉄分 (FeO) および炉材粘土の溶融物 (SiO₂主成分) 主体であった。製鉄原料起源の脈石成分 (鉄鉱石: CaO, MgO, MnO, 砂鉄: TiO₂, Vなど) の低減傾向が著しく、鍛錬鍛冶滓と推定される。

第3次調査区出土鉄滓は、鍛冶滓としては銅含有率の高いものが多数確認された (Cu: 0.01~0.11%)。これは第2調査地区出土鉄滓 (Cu: < 0.01%) とは大きく異なる特徴といえる。ただし後述する銅滓 (FDG-22-1) 1点を除くと、滓中に銅 (または青銅) 粒は確認されていない。また椀形鍛冶滓 (FDG-19) のように、下面表層に付着する土砂 (炉床土) 中から銅粒が検出された例もある。

これらの特徴から、筆ヶ崎遺跡またはその周辺には第2次調査区以外にも炉が存在し、そこでは熱間での鍛打作業とともに、埴場などを用いて銅 (青銅) 小物も製作していた可能性が高いと考えられる。現時点では、今回調査で明らかとなった銅滓以外の銅関連遺物は確認されていないが、古代の鍛冶遺跡では、小規模の鋳銅関連遺物を伴う例は珍しくはない。(2) 含鉄鉄滓、鉄塊系遺物中には、金属鉄部が確認された。鍛冶滓中の微細な金属鉄部 (FDG-17, 20-2) は鉄素材としてまともならず、滓中に取り残されたものと推測される。どちらも過共析組織 (C > 0.77%) の高炭素鋼であった。ほぼ同等の炭素含有率の鉄素材を熱間で鍛錬した場合、硬さや焼入れを要

求される刃金に向けた性状の鉄が得られたと考えられる。

また鉄塊系遺物 (FDG-22-1) は小形であるが、まとまりのよい鉄主体の遺物であった。炭素含有率は部位によるばらつきが大きく (C: 0.1%~3%前後)、一部は白鉄組織を呈する。付着滓は鍛錬鍛冶滓と同様のウスタイト組成で、金属鉄部の酸化によるものと判断される。これらの特徴から、当遺跡では鉄 (銹鉄) を脱炭して鍛冶原料としていた可能性も考えられる。

(3) 銅滓 (FDG-22-1) 中に鉄 (Fe)、砒素 (As) を含む銅粒、または青銅粒が複数確認された。銅 (または青銅) 製品の製作に関わる滓と推定される。

古代の鋳銅遺跡で出土する銅関連遺物には、しばしば砒素 (As) が高い割合で含まれることは、究史上非常に早い時期から指摘されている⁷⁾。特に古代の国産銅と砒素の問題は、東大寺大仏殿西回廊隣接地の銅関連遺物の分析調査⁸⁾と、ほぼ前後して開始された山口県長登銅山跡の発掘調査成果⁹⁾により注目されている。銅滓は、現在の三重県下でもこうした鉄 (Fe)、砒素 (As) を含む、やや銅 (Cu) 品位の低い粗銅が銅素材として流通していたことを示唆する遺物といえる。

また銅素材 (粗銅) 中の鉄 (Fe)、砒素 (As) 酸化除去して銅 (Cu) の含有率を上げる精製作業が当遺跡内で行われた可能性に関しては、現時点で溶解炉跡やその炉壁片、埴場といった鋳銅関連遺構・遺物が検出されていないこと、また銅滓としてはかなり銅含有率が低いこと (Cu: 0.08%) から、まとまって行われた可能性は低いと判断される。

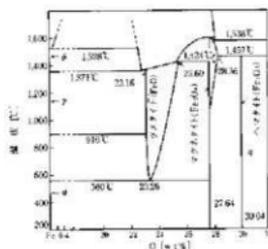
4-3. 第6次調査

出土した鉄滓を分析調査した結果から、当地区周辺で鉄素材を熱間で鍛打加工して、鉄器を製作していたと考えられる。

鍛冶滓 (FDG-24) は鉄分 (FeO) および炉材粘土の溶融物 (SiO₂主成分) 主体であった。製鉄原料起源の脈石成分 (鉄鉱石: CaO, MgO, MnO, 砂鉄: TiO₂, Vなど) は低減傾向が著しいため、鉄素材を熱間で鍛打加工する際に生じた鍛錬鍛冶滓の可能性が高いと考えられる。[EPMAによる微小金属鉄粒の定量分析結果をみると、少量銅 (Cu) も検出されるため。銅

(青銅) 小物の製作も一部行われた可能性はあるが、
 観察面では金属銅または青銅粒は確認されなかった
 ため、鍛錬鍛冶滓に分類している。]

(九州テクノロジー・TACセンター
 大澤正己・鈴木瑞穂)

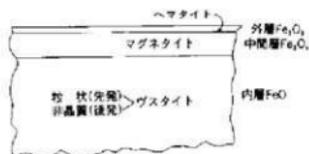


Fe-O系平衡状態図

【註】

- 1) 日刊工業新聞社『焼結鉄組織写真および識別法』1968。ウスタイトは450～500hv、マグネタイトは500～600hv、ファヤライトは600～700hvの範囲が提示されている。ウルボスピネルの硬度値範囲の明記はないが、チタン (TiO₂) を固溶するため、同じスピネル類のマグネタイトよりも硬質である。通常600hv以上であればウルボスピネルと同定している。鉄 (FeO) とアルミナ (Al₂O₃) からなるヘルシナイトはさらに硬質で1000hv前後に達する場合も多い。
- 2) 黒田吉益・源訪兼位『顕光顕微鏡と造岩鉱物 [第2版]』共立出版株式会社 1983。第5章 鉱物各論 D. 尖晶石類・スピネル類 (Spinel Group) の記載に加筆。尖晶石類の化学組成の一般式はXY₂O₄と表記できる。Xは2価の金属イオン、Yは3価の金属イオンである。その組み合わせでいろいろの種類のものがある。(略)
- 3) 殊金属探知機の詳細な仕様は、以下の文献に記載されている。またTable1のメタル度とは、金属関係の遺物内部の金属残存状態を非破壊で推定するために調整された、特殊金属探知機を使用した判定法のことである。感度は三段階 [H: high (○), M: middle (◎), L: low (●)] に設定されている。低感度で反応があるほど、内部に大型の金属鉄が残存すると推測される。穴澤義功『鉄生産遺跡調査の現状と課題—鉄関連遺物の整理と分析資料の準備について—』『鉄関連遺物の分析評価に関する研究会報告』(社)日本鉄鋼協会 社会鉄鋼工学部会「鉄の歴史—その技術と文化—」フォーラム 鉄関連遺物分析評価研究グループ 2005。
- 4) 鍛造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄屑 (金屑) やスケールとも呼ばれる。鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト (Hematite: Fe₂O₃)、中間層マグネタイト (Magnetite: Fe₃O₄)、大部分は内層ウスタイト (Wustite: FeO) の3層から構成される。このうちのヘマタイト相は1450℃を越えると存在しなく、ウスタイト相は570℃以上で生成されるのはFe-O系平衡状態図から説明される⁸⁾。

鍛造剥片3層分離型模式図



- 5) 錠状滓は鍛冶作業において凹凸を持つ鉄素材が鍛冶の中で赤熱状態に加熱されて、突起部が溶け落ちて酸化され、表面張力の関係から球状化したり、赤熱鉄塊に酸化防止を目的に塗布された粘土汁が酸化膜と反応して、これが鍛打の折に飛散して球状化した微細な遺物である
- 6) 森岡進ら『鉄鋼腐食科学』『鉄鋼工学講座』11 朝倉書店 1975
- 7) 甲賀宣政『古銭貨の実質の分析』『水曜会誌』第八号1911
- 8) 久野雄一郎『東大寺大仏の銅原材料についての考察』『権原考古学研究所紀要 考古学論叢』第14冊1990。
- 9) 『長登銅山跡I～III』美東町教育委員会 1990、1993、1998。

Table1 供試材の履歴と調査項目

符号	調査次数	出土位置	遺物No.	遺物名称	計測値		メタリ度	マクロ組織	X線回折	化学分析	耐火度	備考		
					大きさ(mm)	重量(g)								
FDG-1	第2次	掘高炉①	①	陶器銀治澤	237×160×60	1002.0	Zn	○	○	○	○	原料22号倉から1点選択 原料33号倉から1点選択 原料42号倉から1点選択 原料52号倉から1点選択 原料75号倉から1点選択 原料82号倉から1点選択 原料94号倉から1点選択		
FDG-2			②	陶器銀治澤	22×14×12	2.5	Zn	○	○	○	○			
FDG-3		掘高炉②	③	銀治澤	19×15×5	2.1	Zn	○	○	○	○			
FDG-4			④	銀治澤	20×12×7	2.6	Zn	○	○	○	○			
FDG-5		SH2	pit6	⑤	銀治澤	34×14×12	7.3	Zn	○	○	○		○	
FDG-6				⑦	銀治澤	23×18×15	8.2	Zn	○	○	○		○	
FDG-7		第2次	pit6	⑧	銀治澤	41×35×11	21.0	Zn	○	○	○		○	
FDG-8				—	鉄塊赤漆物	29×24×21	16.8	M ^⑧	○	○	○		○	
FDG-9				—	鉛灰澤	—	—	—	Zn	○	○		○	
FDG-10		第2次	SH2	⑨	銀治澤	15×12×4	1.9	Zn	○	○	○		○	
FDG-11				pit7	⑩	鉄製品	26×19×13	8.9	酸化(Δ)	○	○		○	○
FDG-12					⑪	鉄製品	32×16×10	8.7	酸化(Δ)	○	○		○	○
FDG-13					⑫	鉄製品	20×18×11	5.4	酸化(Δ)	○	○		○	○
FDG-14				SH10	pit6	⑬	銀治澤	35×26××20	21.7	Zn	○		○	○
FDG-15		⑭	銀治澤			—	—	—	○	○	○		○	
FDG-16	第3次	SH28	1	陶器銀治澤	76×68×23	132.5	酸化(Δ)	○	○	○	○			
FDG-17			SK41	SH54	2	陶器銀治澤	115×58×32	169.7	酸化(Δ)	○	○	○	○	
FDG-18					3	陶器銀治澤	82×58×28	150.6	Zn	○	○	○	○	
FDG-19			SH62	pit6	4	陶器銀治澤	122×68×26	219.3	酸化(Δ)	○	○	○	○	
FDG-20-1					5	陶器銀治澤	57×43×22	71.8	Zn	○	○	○	○	
FDG-20-2	6	含鉄鉄澤			24×20×16	9.5	L ^⑬	○	○	○	○			
FDG-21	SH107	pit6	7	銀治澤	36×27×16	14.3	Zn	○	○	○	○			
FDG-22-1			9	銅澤?	76×50×31	78.9	Zn	○	○	○	○			
FDG-22-2			10	鉄塊赤漆物	47×31×28	51.9	L ^⑬	○	○	○	○			
FDG-23	第6次	SB321 C-V20 P2	11	陶器銀治澤	61×57×20	114.2	酸化(Δ)	○	○	○	○			
FDG-24			Nb.6	銀治澤	41.8×32.4×33.7	45.1	Zn	○	○	○	○			

磨損物サイズ(mm)

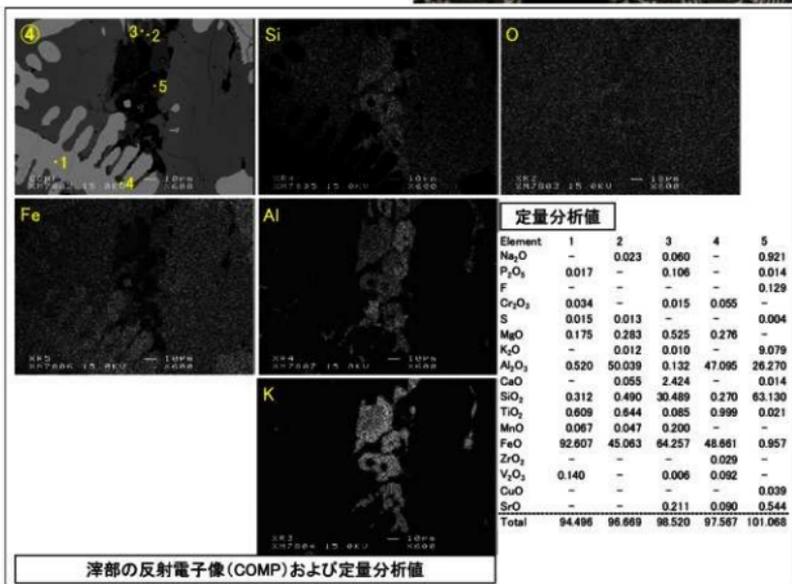
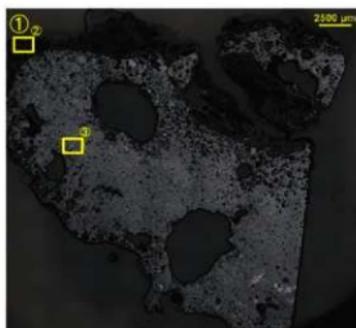
FDG-9-1	6.2
FDG-10-1	9.0×6.2×0.65
FDG-9-2	3.65
FDG-10-2	6.1×5.6×0.4
FDG-9-3	3.2
FDG-10-3	7.1×4.5×0.35
FDG-9-4	2.5
FDG-10-4	4.8×4.1×0.35
FDG-9-5	2.35
FDG-10-5	4.2×3.0×0.3
FDG-9-6	1.6
FDG-10-6	5.2×3.1×0.25

Table 63 出土遺物の調査結果のまとめ

番号	遺跡名	出土位置	遺物名称	標定年代	組成物組成	化学組成 (%)							所産	
						Total Fe	Fe ₂ O ₃	FeO	SiO ₂	V	MnO	Cu		
第1次	F00-1	掘削跡1	焼酎瓶	奈良時代	大塚原片(高麗製), 厚板W, 厚板H+H+O ₂	57.02	13.10	1.88	0.35	0.01	0.15	22.88	<0.01	朝鮮産
	F00-2	掘削跡1	磁器	奈良時代	大塚原片(高麗製), 厚板W, 厚板H+H+O ₂	-	-	-	-	-	-	-	-	朝鮮産
	F00-3	掘削跡1	磁器	奈良時代	大塚原片(高麗製), 厚板W, 厚板H+H+O ₂	-	-	-	-	-	-	-	-	朝鮮産
	F00-4	掘削跡2	磁器	奈良時代	大塚原片(高麗製), 厚板W, 厚板H+H+O ₂	-	-	-	-	-	-	-	-	朝鮮産
	F00-5	掘削跡2	磁器	奈良時代	大塚原片(高麗製), 厚板W, 厚板H+H+O ₂	54.95	22.73	0.85	0.23	0.01	0.88	22.38	<0.01	朝鮮産
第2次	F00-6	掘削跡2	磁器	奈良時代	厚板W+H, 厚板H+H, 厚板W, 厚板H+H+O ₂	65.37	18.22	0.88	0.13	0.01	0.96	11.99	<0.01	朝鮮産
	F00-7	掘削跡2	磁器	奈良時代	厚板W+H, 厚板H+H, 厚板W, 厚板H+H+O ₂	55.19	8.61	1.18	0.26	0.01	0.09	25.51	<0.01	朝鮮産
	F00-8	掘削跡2	磁器	奈良時代	厚板W+H, 厚板H+H, 厚板W, 厚板H+H+O ₂	-	-	-	-	-	-	-	-	朝鮮産
	F00-9	掘削跡2	磁器	奈良時代	厚板W+H, 厚板H+H, 厚板W, 厚板H+H+O ₂	-	-	-	-	-	-	-	-	朝鮮産
	F00-10	掘削跡2	磁器	奈良時代	厚板W+H, 厚板H+H, 厚板W, 厚板H+H+O ₂	-	-	-	-	-	-	-	-	朝鮮産
	F00-11	掘削跡2	磁器	奈良時代	厚板W+H+H	-	-	-	-	-	-	-	-	朝鮮産
	F00-12	掘削跡2	磁器	奈良時代	厚板W+H+H	-	-	-	-	-	-	-	-	朝鮮産
	F00-13	掘削跡2	磁器	奈良時代	厚板W+H+H	-	-	-	-	-	-	-	-	朝鮮産
	F00-14	掘削跡2	磁器	奈良時代	厚板W+H+H	-	-	-	-	-	-	-	-	朝鮮産
	F00-15	掘削跡2	磁器	奈良時代	厚板W+H+H	64.85	14.85	1.14	0.23	0.01	0.10	13.01	<0.01	朝鮮産
第3次	F00-16	掘削跡2	磁器	奈良時代	厚板W+H+H+O ₂	50.02	23.12	0.78	0.28	<0.01	0.89	29.17	0.08	朝鮮産
	F00-17	掘削跡2	磁器	奈良時代	厚板W+H+H+O ₂	50.95	24.88	0.89	0.23	0.01	0.10	25.09	0.05	朝鮮産
	F00-18	掘削跡2	磁器	奈良時代	厚板W+H+H, 厚板W, 厚板H+H+O ₂	49.10	19.16	0.88	0.24	0.01	0.12	31.21	0.09	朝鮮産
	F00-19	掘削跡2	磁器	奈良時代	厚板W+H+H+O ₂	42.38	15.27	1.50	0.30	0.01	0.10	38.44	0.05	朝鮮産
	F00-20-1	掘削跡2	磁器	奈良時代	厚板W+H+H+O ₂	45.61	20.44	0.78	0.28	0.01	0.10	34.93	0.03	朝鮮産
第4次	F00-20-2	掘削跡2	磁器	奈良時代	厚板W+H+H+O ₂	44.56	18.80	0.84	0.38	0.01	0.12	40.34	<0.01	朝鮮産
	F00-21	掘削跡2	磁器	奈良時代	厚板W+H+H+O ₂	44.72	27.05	0.82	0.32	0.01	0.14	39.38	0.08	朝鮮産
	F00-22-1	掘削跡2	磁器	奈良時代	厚板W+H+H+O ₂	-	-	-	-	-	-	-	-	朝鮮産
	F00-22-2	掘削跡2	磁器	奈良時代	厚板W+H+H+O ₂	-	-	-	-	-	-	-	-	朝鮮産
	F00-23	掘削跡2	磁器	奈良時代	厚板W+H+H+O ₂	58.84	46.88	0.60	0.15	0.01	0.05	14.75	0.11	朝鮮産
F00-24	掘削跡2	磁器	奈良時代	厚板W+H+H+O ₂	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	朝鮮産	

Wüstite (FeO), Hercynite (FeO·FeO), Fayalite (2FeO·SiO₂), Orthosilicate (KAlSi₃O₈), Magnetite (Fe₃O₄), Ilmenite (3FeO·FeO·SiO₂)

FDG-1
 椀形鍛冶滓
 ①マクロ組織、黒色部:木炭破片
 ②木炭拡大、広葉樹材
 ③滓部拡大、ウスタイト・微細ヘルシナイト・ファヤライト、硬
 度:50gf



滓部の反射電子像 (COMP) および定量分析値

Photo. 1 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果

FDG-2 鍛冶滓

①マカ組織、明灰色部が
ガラス質、暗灰色部:被熱
粘土(被熱砂粒多数混
在)
②ガラス質中の微小金
属鉄粒、ナイトレッチセメン
ト・フェライト
③滓部:マグネサイトとヘル
ナイトを主な端成分とする固
溶体・フェライト、硬度:50gf

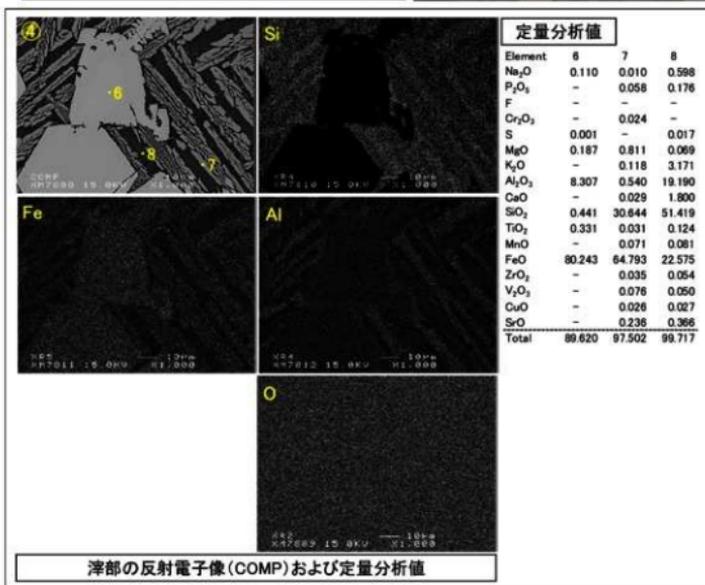


Photo. 2 鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果

FDG-3
 鍛冶滓
 ①マクロ組織
 ②③滓部:カースタイト・フェライト
 ト、硬度:50gf。
 微小な白色粒:金屈鉄、
 青灰色部:酸化鉄

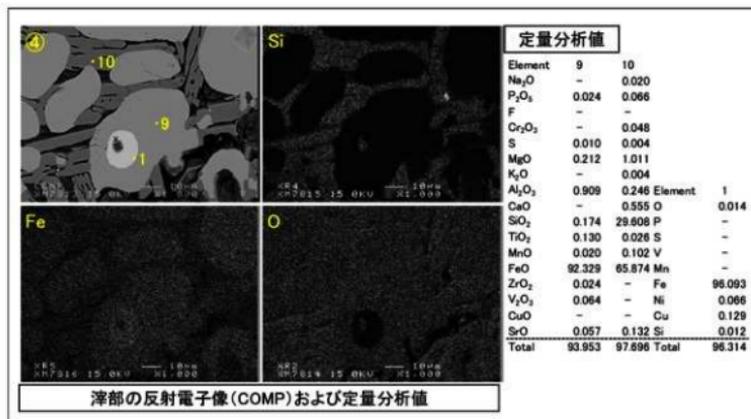
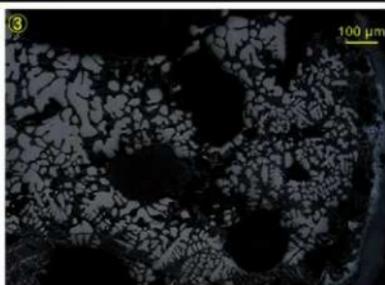


Photo. 3 鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果

FDG-4
 鍛冶滓
 ①マクロ組織
 ②③滓部:ウスタイト・ファヤライト、
 硬度:50gf、微小明白
 色粒:金属鉄



FDG-5
 鍛冶滓
 ④マクロ組織
 ⑤滓部:ウスタイト・ファヤライト、
 硬度:10gf、
 ⑥微小明白色粒:金属鉄、
 ナイタルetch フェライト単相

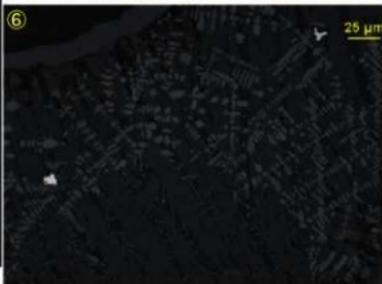
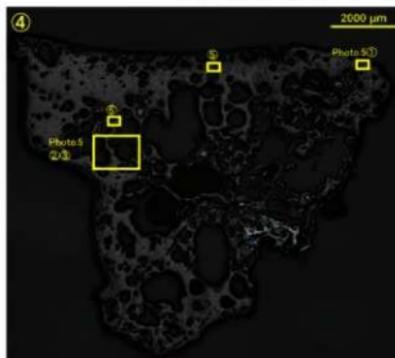
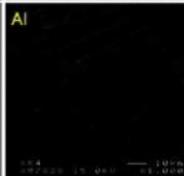
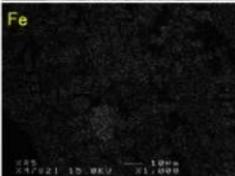
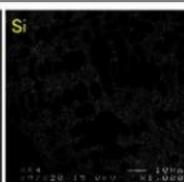
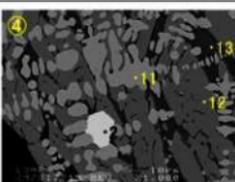
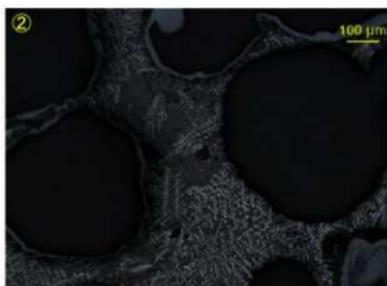


Photo. 4 鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果

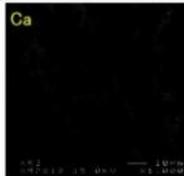
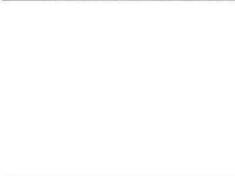
FDG-5

鍛冶滓

①～③滓部・ウスタイト・ファイ
ライト、微小金属鉄粒・ナイ
etch 共析組織



定量分析値			
Element	11	12	13
Na ₂ O	-	-	1.801
P ₂ O ₅	-	0.079	0.334
F	-	-	-
Cr ₂ O ₃	0.026	-	-
S	-	0.016	0.080
MgO	0.063	1.028	-
K ₂ O	0.004	-	5.263
Al ₂ O ₃	1.503	0.515	23.082
CaO	-	0.264	5.887
SiO ₂	0.322	29.362	36.362
TiO ₂	0.185	0.033	0.099
MnO	0.018	0.123	0.039
FeO	91.708	64.748	24.749
ZrO ₂	-	0.035	0.095
V ₂ O ₅	0.082	0.044	0.007
CuO	-	-	-
SiO	-	0.287	0.345
Total	93.929	96.534	98.143



Element	11	12	13
Na ₂ O	-	-	1.801
P ₂ O ₅	-	0.079	0.334
F	-	-	-
Cr ₂ O ₃	0.026	-	-
S	-	0.016	0.080
MgO	0.063	1.028	-
K ₂ O	0.004	-	5.263
Al ₂ O ₃	1.503	0.515	23.082
CaO	-	0.264	5.887
SiO ₂	0.322	29.362	36.362
TiO ₂	0.185	0.033	0.099
MnO	0.018	0.123	0.039
FeO	91.708	64.748	24.749
ZrO ₂	-	0.035	0.095
V ₂ O ₅	0.082	0.044	0.007
CuO	-	-	-
SiO	-	0.287	0.345
Total	93.929	96.534	98.143

滓部の反射電子像 (COMP) および定量分析値

Photo. 5 鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果

FDG-6
鍛冶滓
①マクロ組織
②滓部:クスタイト・ファヤライト、
微小明白色部:金属鉄
③上側:鍛造剥片、下側:
滓部、硬度50gf、

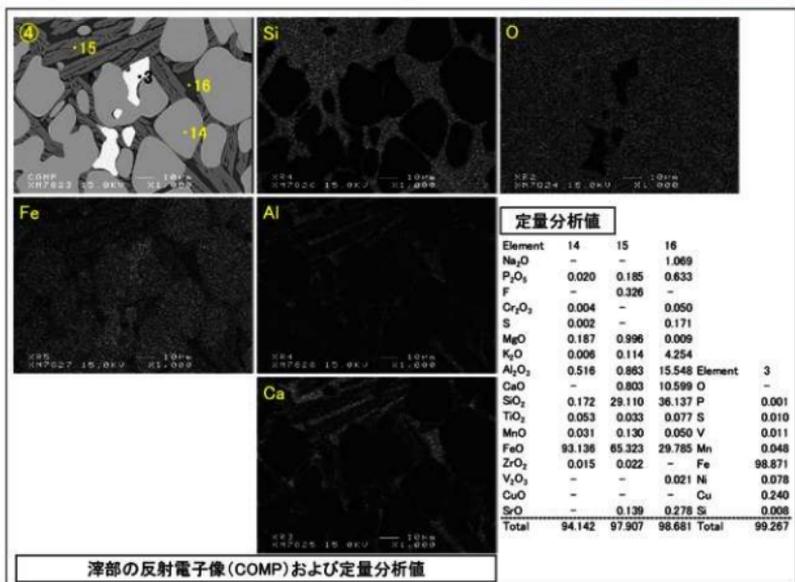
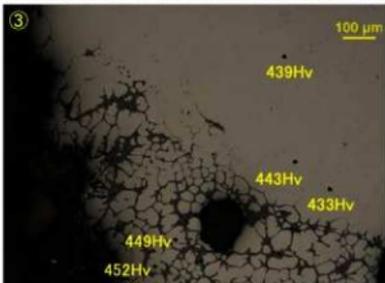
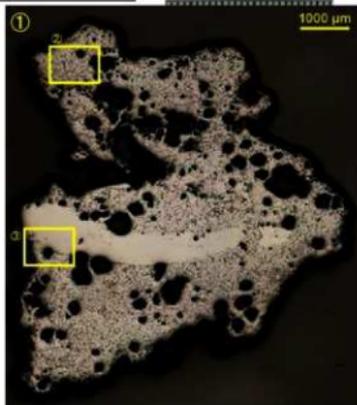
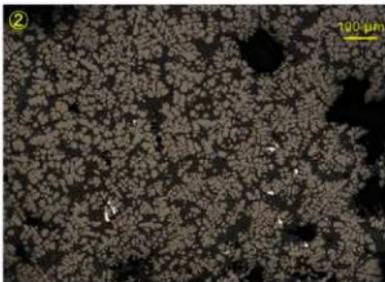


Photo. 6 鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果

FDG-7
鍛冶滓

- ①マクロ組織
②③滓部・ウスタイト・ファキライト、
硬度:10gf、微小明白
色粒:金属鉄、ナイルetch
フェライト単相

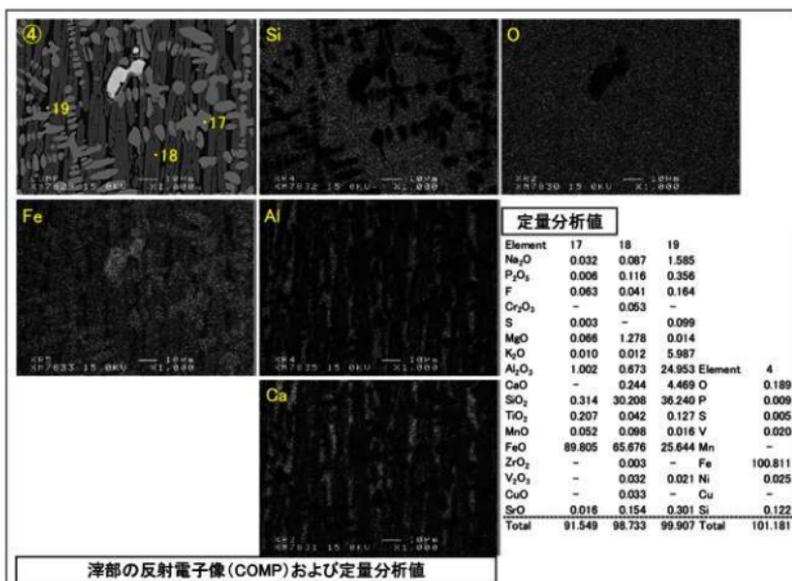
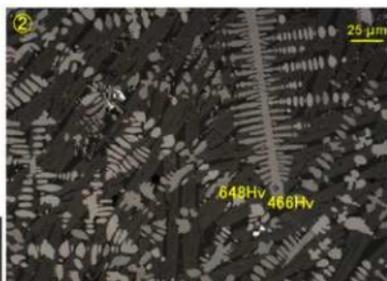


Photo. 7 鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果

FDG-8 鉄塊系遺物
 ①マカ組織
 ②附着鍛造割片、③滓部
 ウスタト、硬度:50gf
 ④⑤金属鉄部、ナイトルetch
 亜共析～共析組織、硬度:50gf、⑥⑦錆化鉄部
 過共析組織痕跡

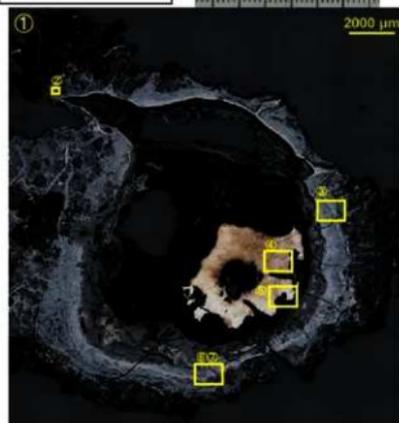


Photo. 8 鉄塊系遺物の顕微鏡組織

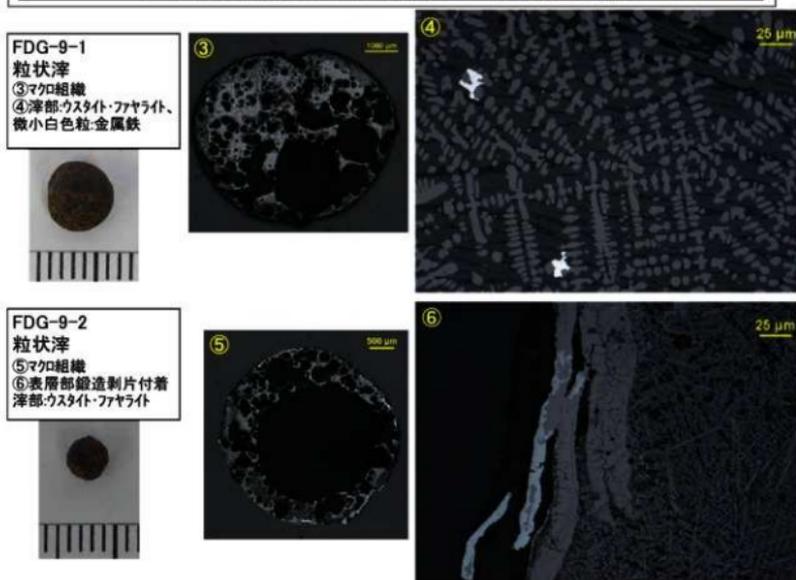
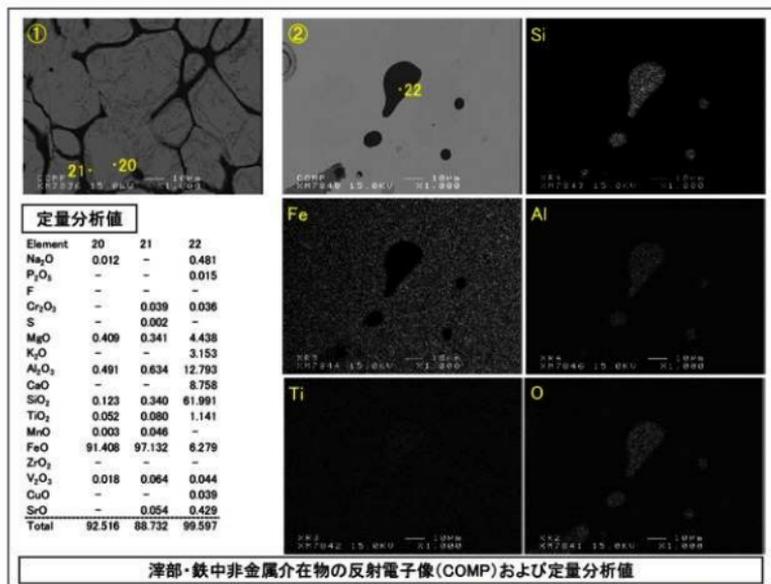
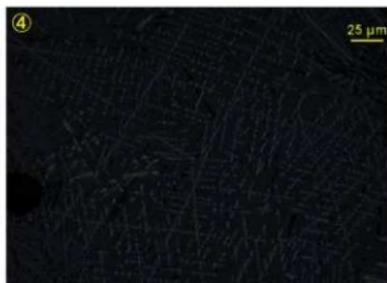


Photo. 9 鉄塊系遺物のEPMA調査結果・粒状滓の顕微鏡組織

FDG-9-3
粒状滓
①マクロ組織
②滓部:クスタイト



FDG-9-4
粒状滓
③マクロ組織
④滓部:クスタイト・ファイヤライト



FDG-9-5
粒状滓
⑤マクロ組織
⑥表層鑛造剝片付着、滓部:クスタイト



FDG-9-6
粒状滓
⑦マクロ組織
⑧滓部:クスタイト



Photo. 10 粒状滓の顕微鏡組織

FDG-10-1

鍛造剥片

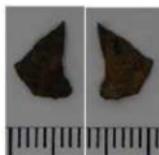
- ①マクロ組織
- ②灰褐色層:マグネサイト、
灰色層:ウスタイト



FDG-10-2

鍛造剥片

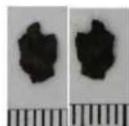
- ③マクロ組織
- ④明白色層:ヘマトイト
灰褐色層:マグネサイト
灰色層:ヘマトイト



FDG-10-3

鍛造剥片

- ⑤マクロ組織
- ⑥明白色層:ヘマトイト
灰褐色層:マグネサイト
灰色層:ウスタイト



FDG-10-4

鍛造剥片

- ⑦マクロ組織
- ⑧明白色層:ヘマトイト
灰褐色層:マグネサイト
灰色層:ウスタイト

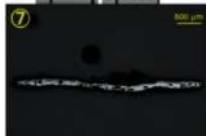
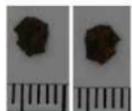


Photo. 11 鍛造剥片の顕微鏡組織

FDG-10-5

鍛造剥片

- ①マクロ組織
- ②明白色層:ハマタイト
- 灰褐色層:マグネタイト
- 灰色層:ウスタイト



FDG-10-6

鍛造剥片

- ③マクロ組織
- ④明白色層:ハマタイト
- 灰褐色層:マグネタイト
- 灰色層:ウスタイト



FDG-11

鍛冶滓

- ⑤マクロ組織
- ⑥⑦滓部:ウスタイト・マグネタイト

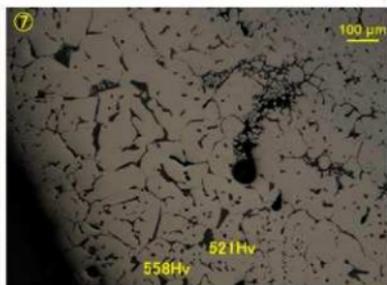
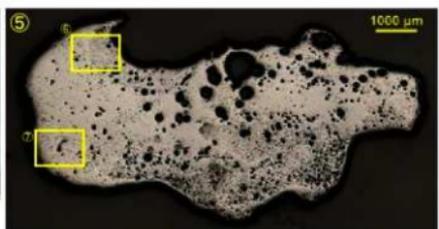
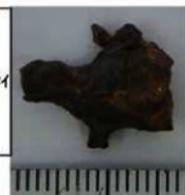
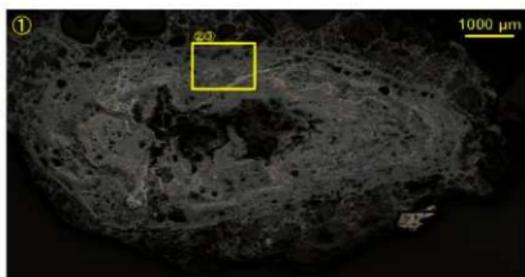


Photo. 12 鍛造剥片・鍛冶滓の顕微鏡組織

FDG-13
鉄製品
①マクロ組織
②③酸化鉄部:亜共析組織痕跡、灰褐色部:ウスタイトまたはマグネサイト



FDG-14
鉄製品
④マクロ組織、表面鍛造剥片付着
⑤⑥滓部:ウスタイト、酸化鉄部:亜共析組織痕跡

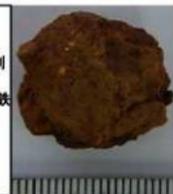


Photo. 14 鉄製品の顕微鏡組織

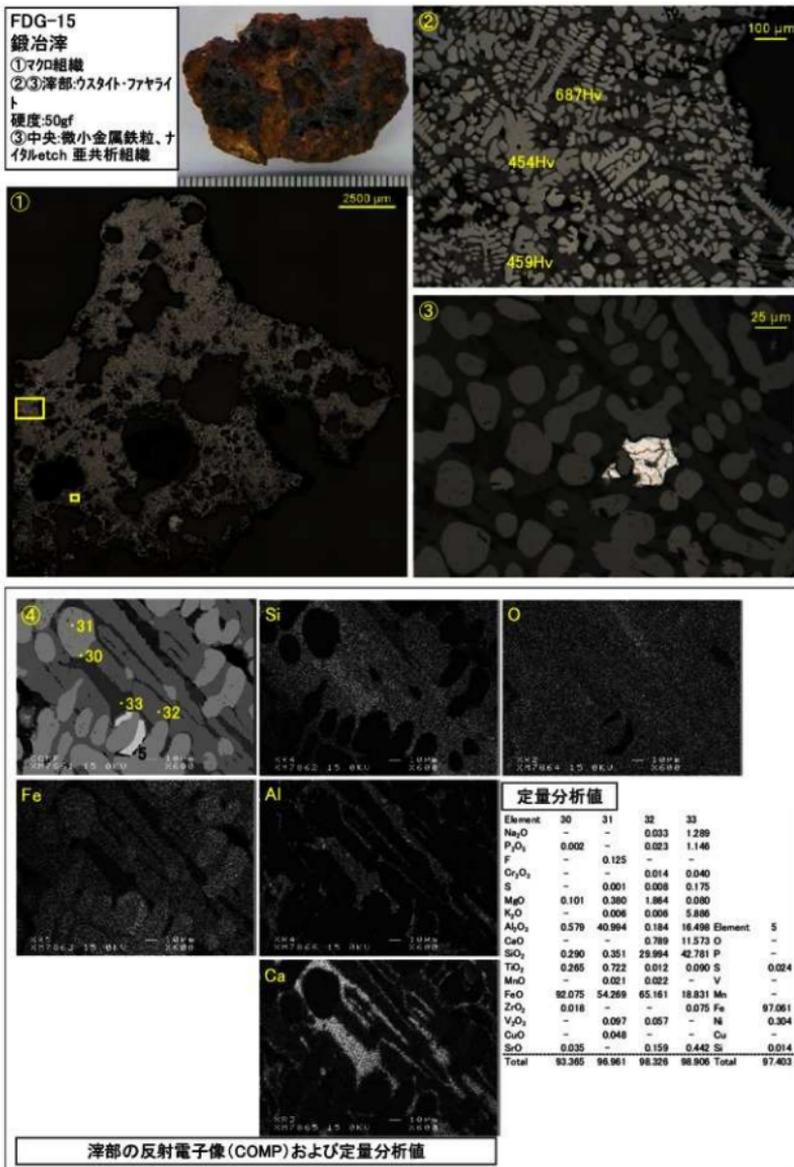


Photo. 15 鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果

FDG-16
 梘形鋳冶滓
 ①マクロ組織
 ②③滓部・クワイト・微細ヘルシナイト・ファヤライト、硬度50gf、酸化鉄部・亜共析組織痕跡

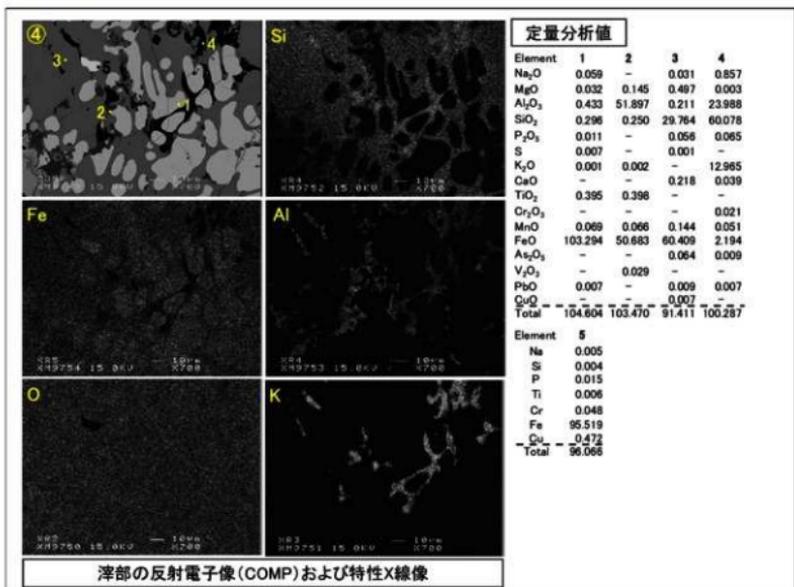
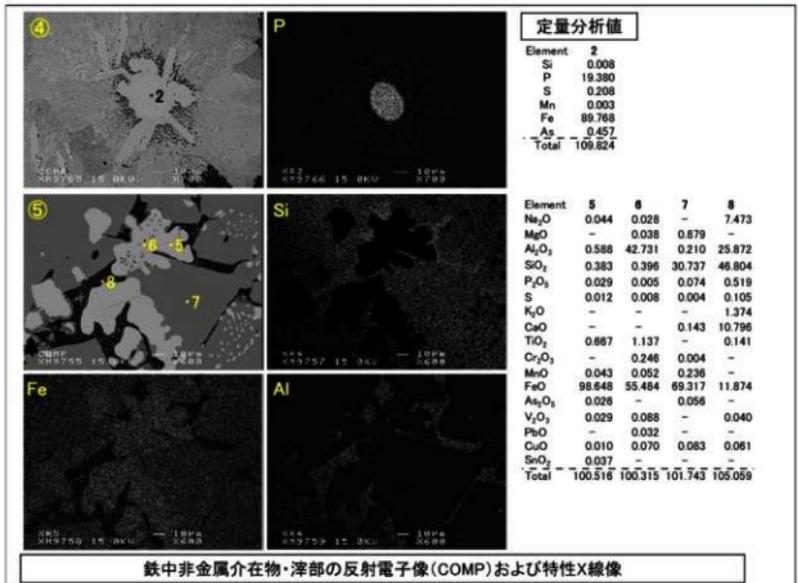


Photo. 16 梘形鋳冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果

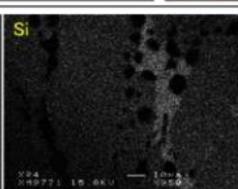
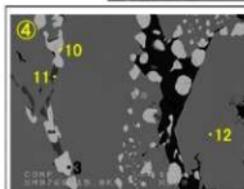
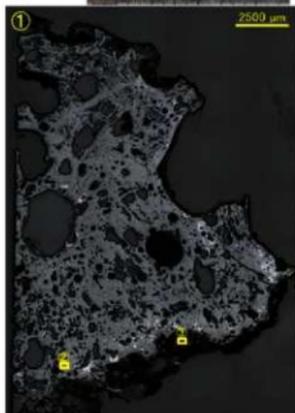
FDG-17
 椀形鍛冶滓(含鉄)
 ①マクロ組織、
 ②③金属鉄部拡大、ナイ
 /etch 過共析組織、ス
 /グ、硬度:50gf



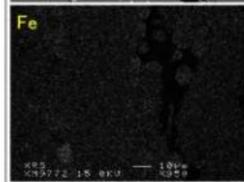
鉄中非金属介在物・滓部の反射電子像(COMP)および特性X線像

Photo. 17 椀形鍛冶滓(含鉄)の顕微鏡組織・EPMA調査結果

FDG-18
 椀形鍛冶滓
 ①マクロ組織
 ②滓部・ウスタイト・ヘルシナイト・
 ファヤライト、硬度:50gf
 ③付着土砂中の鋼粒



定量分析値						
Element	10	11	12	Element	3	4
Na ₂ O	0.184	-	-	O	-	12.848
MgO	-	0.084	0.783	Na	-	0.026
Al ₂ O ₃	0.453	49.705	0.211	Mg	-	0.016
SiO ₂	0.288	0.720	31.026	Al	-	4.035
P ₂ O ₅	0.014	-	0.016	Si	0.043	14.205
S	0.012	0.007	0.001	P	0.061	0.075
K ₂ O	-	0.007	0.007	S	0.024	0.013
CaO	-	-	0.174	K	-	4.905
TiO ₂	0.600	1.159	0.002	Ca	-	0.005
Cr ₂ O ₃	-	0.063	0.068	Ti	-	0.001
MnO	0.082	0.042	0.116	V	0.004	0.009
FeO	101.568	50.164	70.523	Cr	-	0.014
As ₂ O ₃	-	-	0.014	Mn	0.041	0.013
V ₂ O ₅	0.025	0.027	-	Fe	100.631	0.669
PbO	-	0.032	0.005	Cu	1.547	50.557
CuO	-	-	-	C	-	12.609
SnO	-	-	-	Total	102.351	100.000
Total	103.226	102.010	102.946			



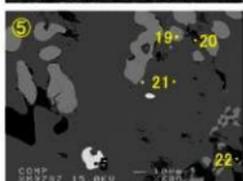
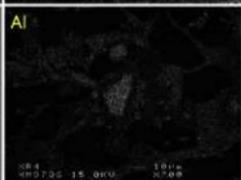
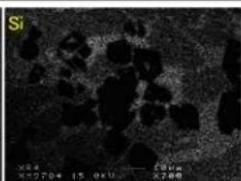
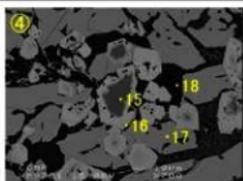
滓部・土砂中微小金属の反射電子像 (COMP) および特性X線像

Photo. 18 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果

FDG-19

椀形鍛冶滓

①マクロ組織、②③滓部の
スタイト・マグネサイト・ヘルシナイト・
ファイヤライト、硬度:50gf、微
小金属鉄、錆化鉄部散在



滓部の反射電子像(COMP)および特性X線像

定量分析値

Element	15	16	17	18
Na ₂ O	0.011	-	-	0.379
MgO	0.070	0.047	0.181	-
Al ₂ O ₃	51.385	9.911	0.202	24.767
SiO ₂	0.357	0.897	31.429	68.892
P ₂ O ₅	0.013	-	0.159	0.012
S	0.007	0.013	-	0.008
K ₂ O	0.002	-	0.025	8.485
CaO	-	-	0.412	-
TiO ₂	1.347	1.347	0.044	-
Cr ₂ O ₃	0.031	0.004	0.025	0.021
MnO	-	0.020	0.116	-
FeO	51.450	84.854	72.575	1.806
As ₂ O ₃	-	-	0.009	-
V ₂ O ₅	0.080	0.036	-	-
PbO	0.053	-	-	-
CuO	0.028	-	-	0.062
SnO ₂	0.022	0.037	0.041	-
Total	104.856	97.160	105.218	104.231

Element	5	19	20	21	22	
O	0.026	-	-	0.088	1.157	
Na	0.055	0.051	0.047	0.594	-	
Mg	0.019	0.586	53.328	0.256	25.068	
Al	0.003	0.318	0.353	31.571	64.144	
Si	0.014	0.044	0.015	0.055	0.007	
P	0.015	-	0.003	0.002	-	
S	0.018	0.003	0.001	-	9.939	
Cl	0.002	0.003	0.002	0.288	0.067	
Ca	0.014	0.685	0.699	-	-	
Ti	0.015	0.095	0.054	0.013	0.032	
S	0.018	0.046	-	0.126	0.018	
V	0.002	FeO	101.519	47.737	71.273	3.517
Cr	0.025	As ₂ O ₃	-	0.016	-	0.041
V	0.006	V ₂ O ₅	0.031	0.008	0.021	0.001
Cr	102.515	CuO	-	-	0.010	-
Fe	0.780	SnO ₂	0.008	-	-	-
Cu	-	Total	103.386	102.283	104.297	10.3991
Total	103.471	Total	103.386	102.283	104.297	10.3991

Photo. 19 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・PMA調査結果

FDG-20-1
 梶形鍛冶滓
 ①マクロ組織
 ②～⑤滓部:マクネサイト・ヘル
 シナイト・イスコライト・ファヤライト、
 ⑥⑦滓部:ウスタイト・ファヤライ
 ト
 硬度:50gf

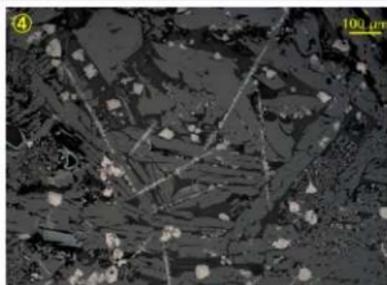


Photo. 20 梶形鍛冶滓の顕微鏡組織

FDG-20-2
 含鉄鉄滓
 ①マクロ組織、金属鉄部+
 19Aetch
 ②③金属鉄部拡大、過共
 析組織、硬度50gf

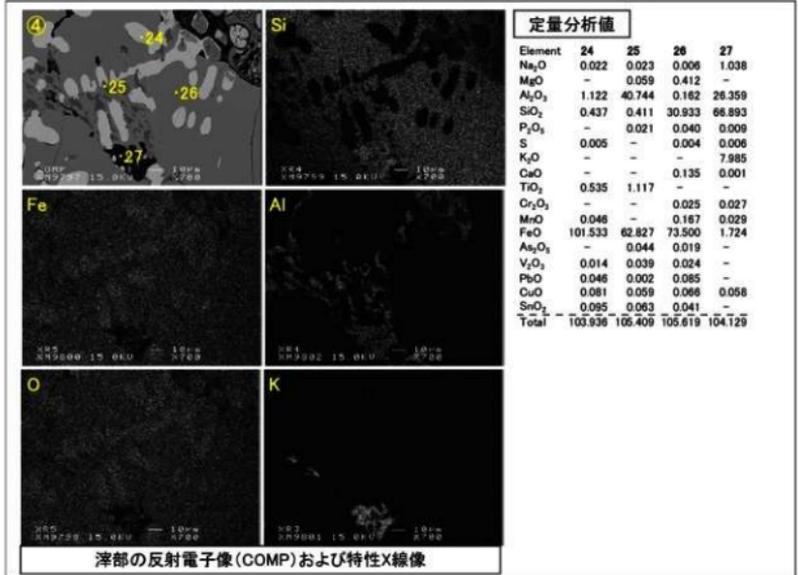
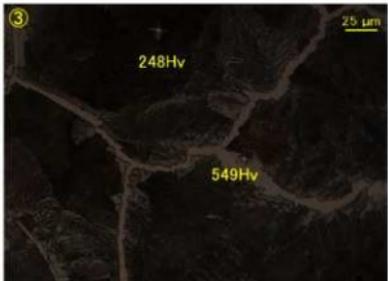


Photo. 21 含鉄鉄滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果

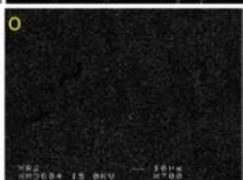
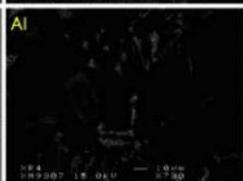
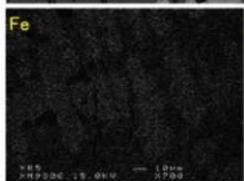
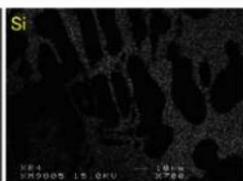
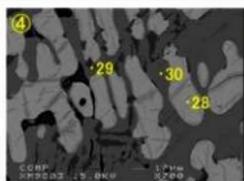
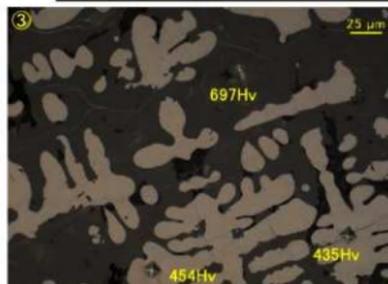
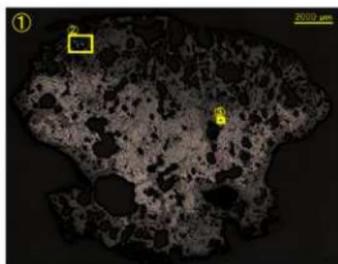
FDG-21

鍛冶滓

①マクロ組織

②明灰色部・酸化鉄(金属組織痕跡不明瞭)

③滓部・ウスタイト・微細ヘルシナイト・ファアライト、硬度:50gf



定量分析値

Element	28	29	30
Na ₂ O	0.118	-	-
MgO	0.044	0.100	0.319
Al ₂ O ₃	0.568	52.223	0.286
SiO ₂	0.266	0.409	30.338
P ₂ O ₅	-	-	0.077
S	0.018	-	0.004
K ₂ O	-	-	-
CaO	-	-	0.128
TiO ₂	0.222	0.483	-
Cr ₂ O ₃	-	0.036	0.025
MnO	0.043	0.069	0.075
FeO	104.478	50.823	68.651
As ₂ O ₃	0.058	0.050	0.079
V ₂ O ₅	-	0.013	0.025
PbO	-	0.002	0.002
CaO	0.024	0.021	0.049
SnO ₂	-	0.025	-
Total	105.639	104.054	100.056

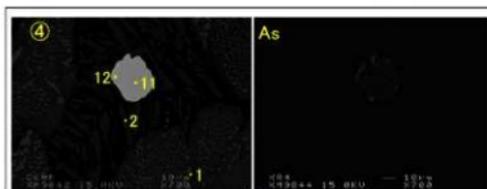
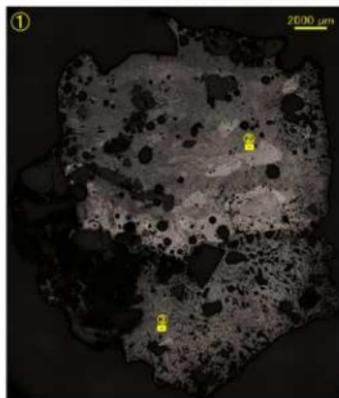
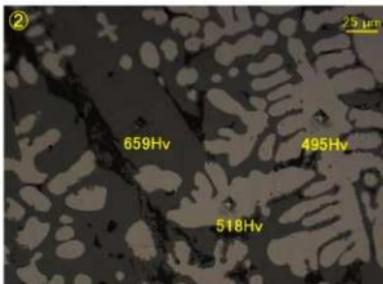
滓部の反射電子像 (COMP) および特性X線像

Photo. 22 鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果

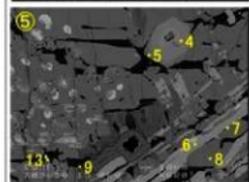
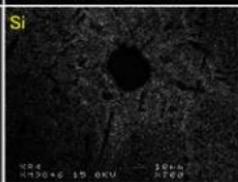
FDG-22-1

銅滓?

- ①マクロ組織
- ②滓部:クースタイト・微細ヘルシナイト・ファアライト
- ③中央:微小金属粒:砒素銅



定量分析値												
Element	1	2	Element	11	12	13						
Na ₂ O	-	-	O	-	-	-						
MgO	0.017	0.013	P	0.158	0.128	0.169						
Al ₂ O ₃	0.552	0.410	S	0.009	0.077	0.163						
SiO ₂	0.338	30.750	Mn	-	0.017	0.021						
P ₂ O ₅	0.034	0.072	Fe	3.140	5.165	5.664						
S	0.007	0.002	Zn	0.025	0.037	0.125						
K ₂ O	0.035	0.101	As	4.941	27.990	2.802						
CaO	-	0.349	Sn	0.569	-	3.586						
TiO ₂	0.629	0.085	Pb	0.024	-	-						
MnO	0.043	0.106	Ag	0.012	0.050	-						
FeO	99.922	71.748	Tl	0.029	0.030	0.020						
As ₂ O ₃	-	0.033	Cu	91.926	62.761	88.897						
V ₂ O ₅	0.012	0.028	Bi	0.137	-	0.143						
PbO	0.066	-	Ce	0.047	0.040	0.033						
CuO	-	0.017	Total	101.017	96.315	101.433						
Total	101.955	103.714										



Element	4	5	6	7	8	9
Na ₂ O	-	0.066	-	-	0.114	1.374
MgO	0.053	0.018	0.039	0.167	0.391	0.005
Al ₂ O ₃	10.923	18.664	0.160	3.005	0.112	19.209
SiO ₂	0.962	0.961	0.387	9.774	31.116	53.529
P ₂ O ₅	0.009	-	-	-	-	0.637
S	0.004	0.008	-	0.015	-	0.018
K ₂ O	0.003	0.034	-	0.010	-	4.282
CaO	-	-	-	-	0.038	4.727
TiO ₂	1.608	1.226	0.041	0.316	0.022	0.073
Cr ₂ O ₃	0.152	0.024	0.061	-	-	0.020
MnO	0.050	0.064	0.049	0.040	0.130	0.022
FeO	81.506	77.955	101.523	87.853	72.450	17.160
As ₂ O ₃	-	0.039	0.052	-	0.061	-
V ₂ O ₅	0.084	0.030	0.014	-	0.032	-
PbO	0.022	0.031	0.022	0.045	-	0.080
CuO	0.027	0.103	0.003	-	-	0.047
SnO	-	0.091	-	0.088	0.041	-
Total	95.103	99.214	102.351	101.313	104.507	101.182

滓部および金属粒の反射電子像 (COMP)・特性X線像

Photo. 23 銅滓?の顕微鏡組織・PMA調査結果

FDG-22-2
 鉄塊系遺物
 ①マクロ組織、ナイフエッチ
 ②③金属鉄部(高炭素域):過共析組織~亜共晶組成白錆鉄組織、④⑤金属鉄部(低炭素域):針状フェライト・ペイライト、硬度:200gf
 ⑥⑦表層付着滓ウスタイト

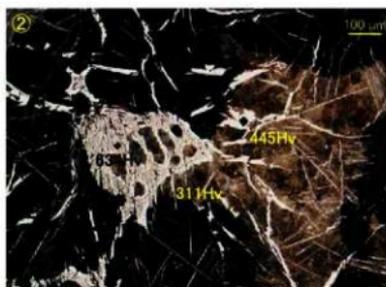
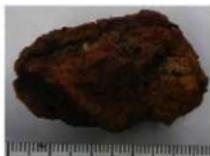


Photo. 24 鉄塊系遺物の顕微鏡組織

FKD-23
 梘形鍛冶滓(含鉄)
 ①マクロ組織
 ②滓部:ウスタイト・微細ヘルシ
 ナイト・ファヤライト、硬度:50gf、
 ③酸化鉄部:亜共析組織
 痕跡

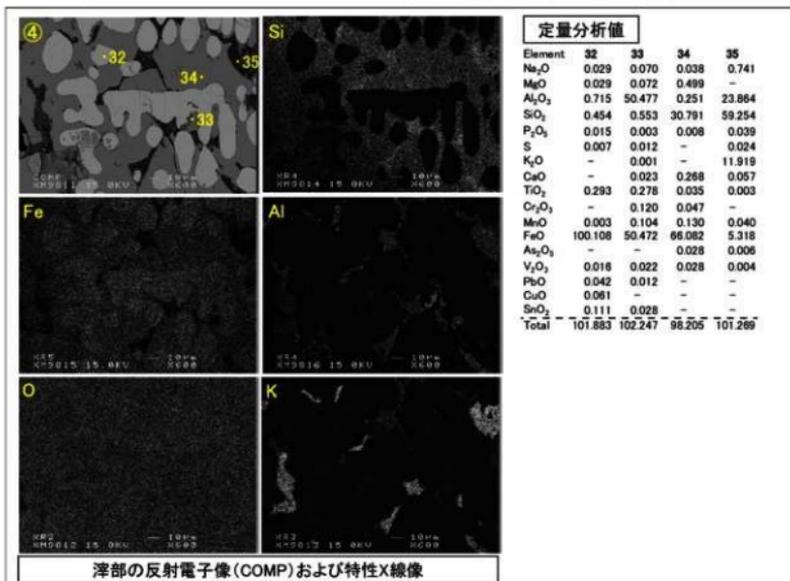
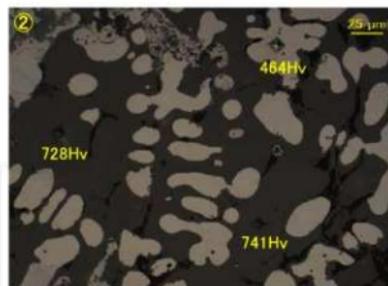
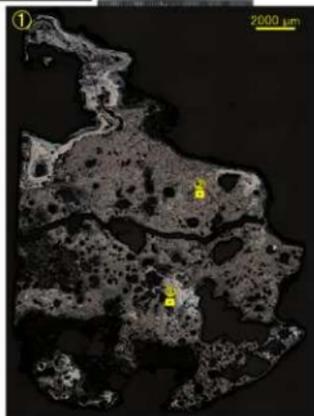


Photo25 鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果

FDG-24
鍛冶滓

①マクロ組織
②③滓部:ウスタイト・
ファイヤライト、青灰色部:
酸化鉄、硬度:50gf

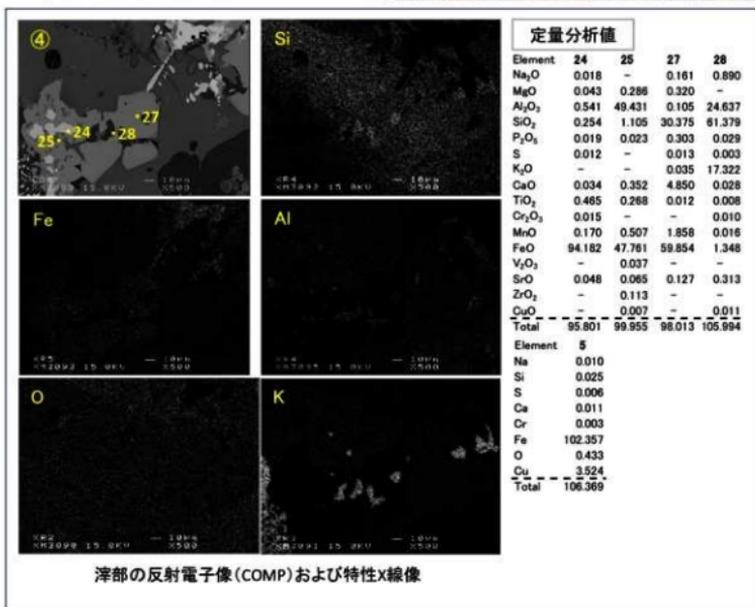
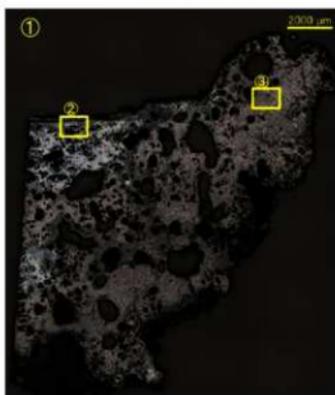


Photo. 26 鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果

VII 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡の変遷

筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡は、主に飛鳥時代に形成された古墳群と集落からなる。調査前にもある程度の高さが残っていた墳丘の周囲からは、数多くの堅穴建物や掘立柱建物が密集して見つかった。両者の関係については、墳丘下に建物などの遺構は無く、1棟だけではあるが墳丘裾を壊して建てられた建物が存在するので、基本的に集落よりも古墳群が先行するのだらうと調査中は漠然と考えていた¹⁾。

遺跡全体から出土した遺物の大半が飛鳥時代（～奈良時代初頭）のものであるため、古墳群と集落はいずれも主に飛鳥時代を中心に営まれたとみて間違いないだろうが、その形成過程や両者の関係などを詳細に検討しようとする、遺構・遺物の残存状態の悪さが問題となる。

どの古墳も墳丘はある程度残っていたが、石室石材の大半を抜き取られるほどの盗掘を受けているため、原位置を保って出土した遺物は少なく、本来古墳に伴う遺物（副葬品）の抽出は容易でない。集落についても同様で、斜面地に建てられた堅穴建物は残存状態が悪いうえに、石室と堅穴建物間や20mも離れた遺構間の出土遺物が接合出来るなど、厳密に建物に伴う遺物の抽出もまた難しい。

しかし、横穴式石室が多い当地域にあっても、これだけ多くの古墳と集落を同時に検討できるほど広範囲に調査が行われることは珍しく、この遺跡の評価は地域の歴史理解にとって大きな意味を持つ。そこで、言えることの限界を十分認識しながらではあるが、この問題について検討を進めることとしたい。

(1) 土器編年にあたっての基本的な考え方

調査成果を検討する前に、まず年代観の基礎となる須恵器編年について整理しておく。

北勢地域は、近畿と東海という文化圏の周縁に位置しており、両者の影響を大きく受けてきた。消費遺跡における須恵器も同様で、どちらかと言えば畿内の陶器窯のものに似た須恵器と、尾張の狼投窯産の特徴を持つ須恵器（狼投窯系）が混在することは珍しくない。時には、古墳から出土した杯の半数を占めるほど狼投窯系が持ち込まれていることもある

が、この地域で主体をなすのは前者で、多くは岡山古窯跡群²⁾や西ヶ谷古窯跡群³⁾など、現在の四日市市を中心として生産を行っていた単一、または少数の同系工人集団による製品（北勢在地窯系）と考えられる。しかし、窯の調査例自体が少なく、時代的な偏りもあって、窯跡出土品で通時代的な編年を組むには至っておらず⁴⁾、報告書などで型式や時期について記載する際には、漠然と陶器窯のものに似た形質の特徴から、専ら陶器窯編年が使用されてきた。これに対して、狼投窯系須恵器は、杯蓋の稜の形状やロクロケズリ調整の範囲などに、陶器窯編年に当てはめることができない古い形態や技法の特徴を保持し続ける独特の系統であり、なにより独自の編年体系が既に存在するため、狼投窯編年で記載される。この筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡の調査でも、出土した須恵器の大半は北勢在地窯系と狼投窯系のものであるため、これまでと同様に陶器窯編年と狼投窯編年を使い分けて報告することもできないことはない。

しかし、長年にわたる当地域での調査成果の蓄積に加え、高速道路建設工事に伴う大規模な発掘調査によって出土した膨大な遺物、更に近年進められた飛鳥・藤原地域での最新の研究成果⁵⁾を通して、北勢在地窯系須恵器の地域色が明らかになりつつある。それは、形態的類似性で陶器窯編年に当てはめては明らかになしえない特色⁶⁾であるため、本報告では北勢在地窯系を陶器窯編年で型式比定するのではなく、北勢地域の須恵器の変遷をもとに、当遺跡独自の段階設定を行うこととする。

(2) 段階設定と土器様相

当該期の須恵器杯H⁷⁾については、これまでの研究を通して、全国的に時代の推移とともに口径が縮小することが指摘されており、北勢地域の窯の製品についても既にその傾向は確認されている⁸⁾。そこで、北勢地域における当該時期の比較的良好な資料について、各土器群の中に含まれる須恵器杯H（蓋および身）の最大径⁹⁾（法量）の分布を示すヒストグラムを作成し、大法量から小法量のものへと順番に配したのが第183図上段（北勢地域）である。な

お、土器群の選択に際しては、概ね一括資料とみて問題がないことと、まとまった数の在地窯系杯Hがあることを条件とした。後出の器形である杯Gや杯Bが、縮小が進んだ杯Hに共伴する出土実態は、配列に時期的な変遷を読み取ることの妥当性を裏付けている。

杯Hの法量変化は、ばらつきをもちつつ大変漸移的であるため、時期区分は便宜的なものとならざるを得ないが、ここでは分布域の大きな変化を重視し、以下の4段階に区分することとしたい。なお、これは本質的には北勢在地窯系須恵器編年とも呼ぶべきものではあるが、ここでは筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡の遺跡理解のための手段として、前後の時期を省いて検討しているため、当遺跡で遺構が確認されるようになる最初期を「筆ヶ崎1期」とし、以下順次段階名を付与することにした(第184図)。

【筆ヶ崎1期】

筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡において、遺構に伴う遺物が確認され始める時期で、北勢地域における良好な資料としては、孤塚遺跡S T 09⁹⁰⁾・西ヶ谷遺跡S B 11¹⁰⁾・西ヶ谷遺跡S H 502²⁾出土品が挙げられる。在地窯系須恵器杯Hの最大径が蓋身とも13~14cm台に集中する。

窯跡では、岡山6号窯がこの時期に位置づけられる。

【筆ヶ崎2期】

この時期の良好な資料としては、和田ヶ平1号墳玄室内一次埋葬副葬品および二次埋葬副葬品¹¹⁾、西ヶ谷遺跡S H 405¹⁰⁾出土品が挙げられる。和田ヶ平1号墳出土品は、横穴式石室の玄室内から大量に出土した遺物で、その出土位置から一次埋葬副葬品と二次埋葬副葬品に区分することができる。両者の間に僅かだが法量の縮小化が認められるため、出土状況と遺物の新旧関係を整合的に理解できる事例である。

筆ヶ崎1期とくらべて、杯Hの最大径が小型化し、12.5~13cm台に集中する。なお、若干資料数が少なく、やや不安定な資料ではあるが、この時期に位置づけられる菟上遺跡S K 653²¹⁾出土杯Hには、杯Gが共伴している。

窯跡では、西ヶ谷1号窯の製品が、次の3期との

過渡的様相を示している。

【筆ヶ崎3期】

この時期の良好な資料としては、西ヶ谷遺跡S B 2・S B 3¹⁰⁾出土品を挙げることができ、やや大ぶりのものが目立つS B 2出土品を古相に位置づけることができる。また、小破片が多く、法量復元値の信頼度がやや低いものの、菟上遺跡S Z 701¹⁷⁾出土品もこの時期に属すると考えられる。

杯Hの最大径は筆ヶ崎2期より更に小型化し、11~12cm台に集中するとともに、少量ではあるが、杯Gや杯Bが共伴するようになる。

【筆ヶ崎4期】

この時期の良好な資料としては、西ヶ谷遺跡S H 3041¹⁰⁾出土品が挙げられ、杯Hの出土量は少ないものの、筆ヶ崎西遺跡S K 111出土品もこの時期に属する土器群と考えられる。杯Hの最大径が筆ヶ崎3期より更に小型化し、10cm台から11cm前後に集中するとともに、高い頻度で杯A・杯Bが共伴する。

この時期には、土器群の中に占める杯Hの比重が急激に低下するため、杯Hを欠く土器群の事例も多いと考えられ、具体例として、筆ヶ崎西遺跡S K 3出土品などを挙げることができる。

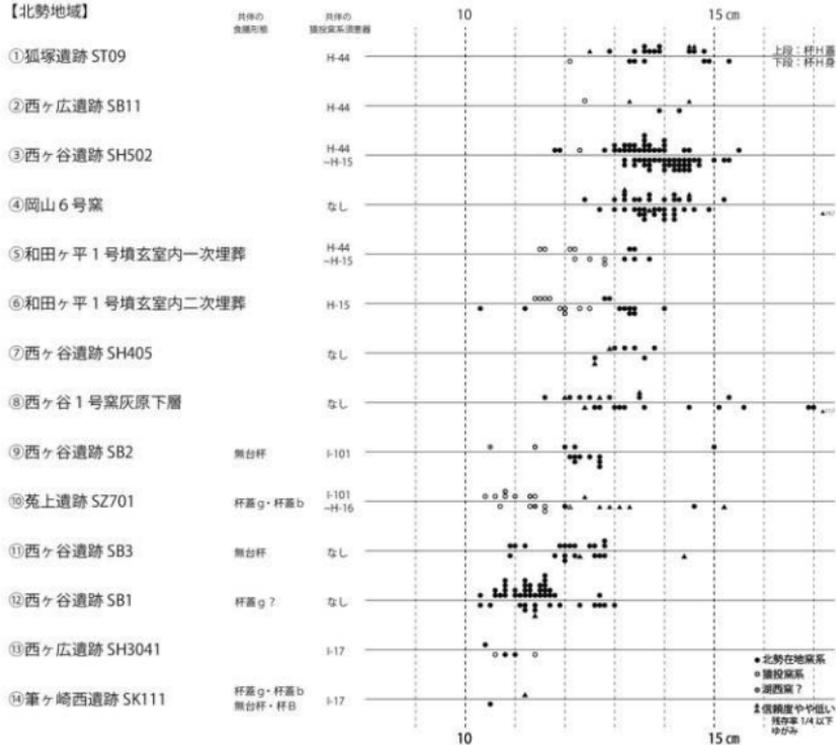
窯跡では、筆ヶ崎西遺跡S K 111出土品との共通性から、西ヶ谷2号窯がこの時期に属するのではないかと考えられるが、杯A・杯Bを欠いており、古相を示す。また、杯Hは小破片であり、同窯の生産品かどうか疑わしく、今のところ、北勢地域ではこの時期に杯Hを生産していた確実な窯跡を見出せない。しかし、北勢在地窯と同系の工人集団によって営まれたと考えられる美濃須衛窯⁹¹⁾の天狗谷0号窯²⁰⁾や尾崎大平1・2号窯²²⁾では、この時期の杯H生産を確認できる。

【筆ヶ崎5期】

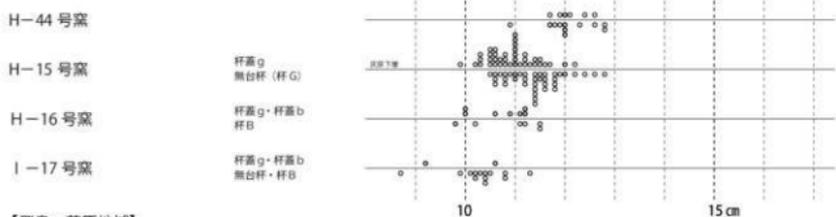
4期の後に、一旦、遺物が全くと言ってよいほど無くなる時期を経て、再び遺構・遺物が確認されるようになる。そのため、北勢在地窯系須恵器杯Hの法量変化で区分してきた1~4期とは設定基準が異なるが、1段階を追加した。

この時期の良好な資料としては、中野山遺跡S K 1442²²⁾出土品を挙げることができ、筆ヶ崎西遺跡出土資料では、S H 81・82出土品などがこの時期に属

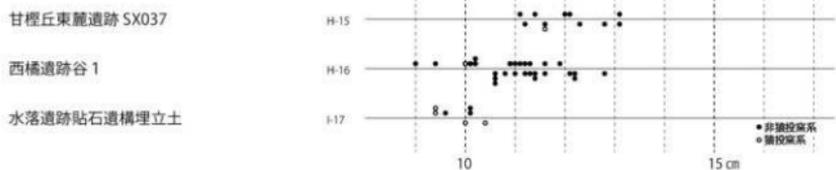
【北勢地域】



【猿投窯】



【飛鳥・藤原地域】



第183図 須恵器杯Hの法量変化

する。須恵器は、岡山1・2号窯²⁰¹出土品に類似するものが多い。また、厳密な共存関係にはないが、筆ヶ崎3号墳出土のこの時期の土器群には、猿投窯で生産された比較的古相の灰軸陶器を含む。

(3) 暦年代の推定

今のところ北勢在地窯系須恵器に、紀年銘資料や窯の操業時期に関する文献上の記録など、直接に暦年代を導き出せる材料は、ほとんど見当たらない。そうした状況の下、地域性を考慮しつつ、他地域の編年の基準を機械的に当てはめず、暦年代を推定する方法としては、交差年代決定法が有効である。幸いなことに、北勢在地窯系須恵器にしばしば共存する猿投窯系須恵器は、比較的年代推定の材料に恵まれている飛鳥・藤原地域でも豊富に出土している。そのため、共存事例を通して暦年代を導き出すことが可能であり、実際にその手法によって在地窯系須恵器しか出土していない近隣の遺跡に暦年代を付与した事例がある²⁰²。この地域的特色を活かし、今回も同様の手法で暦年代の推定を行うことにする。

【筆ヶ崎1期】

この時期の北勢在地窯系須恵器には、狐塚遺跡S T 09でH-44号窯出土品²⁰³の類品、西ヶ谷遺跡S H 502でH-44号窯とH-15号窯²⁰⁴の出土品の中間的様相を示す猿投窯系須恵器が共存している。もともとH-44号窯とH-15号窯出土の須恵器杯Hには、重複する要素が非常に多く、わずかな新旧関係は認められるが、それほど大きな時期差は想定できない。したがって、H-15号窯出土品と同時期のものとみられる猿投窯系須恵器杯H身が、645年の乙巳の変との関係が指摘されている甘樫丘東麓遺跡S X 037²⁰⁵から出土していることを踏まえるならば、筆ヶ崎1期の年代を、645年をやや遡る7世紀前半のどこかと考えておくことが妥当と思われる。

【筆ヶ崎2期】

この時期の北勢在地窯系須恵器には、和田ヶ平1号墳一次埋葬副葬品にH-44号窯とH-15号窯出土品の中間的様相、二次埋葬副葬品ではH-15号窯出土品に類似の猿投窯系須恵器が共存している。したがって、前述の甘樫丘東麓遺跡S X 037の出土例から、筆ヶ崎2期の年代を、645年を含む7世紀第2四半期頃と推定できる。

【筆ヶ崎3期】

この時期の北勢在地窯系須恵器には、西ヶ谷遺跡S B 2や菟土遺跡S Z 701で、I-101号窯²⁰⁶やH-16号窯²⁰⁷出土品に類似の猿投窯系須恵器が共存している。同時期とみられる猿投窯系須恵器は、今のところ飛鳥・藤原地域での良好な出土例を見出せないが、前後の筆ヶ崎2期および4期の年代観から、概ね7世紀第3四半期頃に位置づけられよう。

【筆ヶ崎4期】

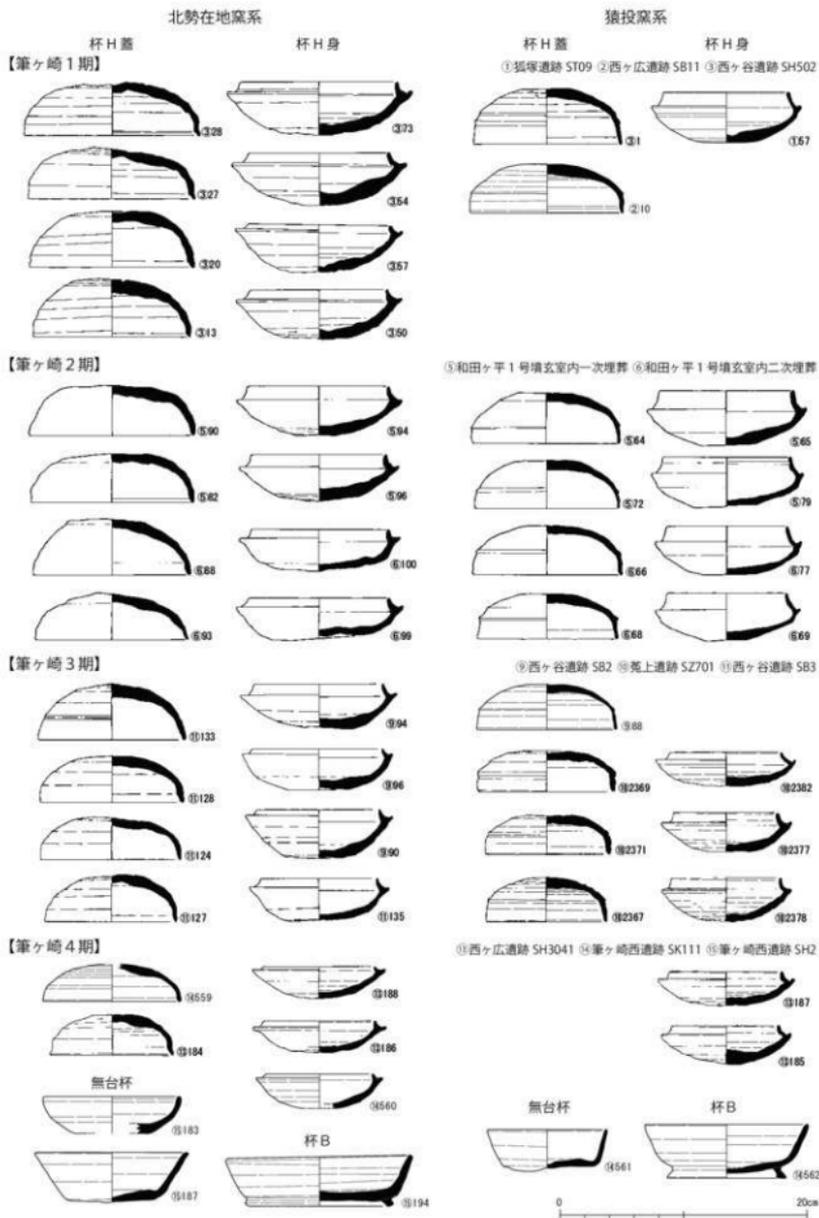
この時期の北勢在地窯系須恵器には、西ヶ谷遺跡S H 304Iや筆ヶ崎西遺跡S H 2²⁰⁸・S K 111でI-17号窯²⁰⁹・C-2号窯²¹⁰出土品に類似の猿投窯系須恵器が共存している。I-17号窯・C-2号窯出土品と同時期のものとみられる猿投窯系須恵器は、飛鳥浄御原宮期(672~694)や藤原宮期(694~710)に位置づけられている石神遺跡B期整地土・S D 640や藤原宮S D 230などから、大量に出土している²¹¹。それらの搬入事例から、I-17号窯・C-2号窯の操業年代はこの時間帯にほぼ納まるのではないかと考えられている²¹²。したがって、筆ヶ崎4期は、7世紀第4四半期から8世紀初頭頃に位置づけられよう。

【筆ヶ崎5期】

I~4期とは異なり、岡山1・2号窯自体が猿投窯系の須恵器を焼いていた窯であるため²¹³、猿投窯の基準で考えることができる。岡山1号窯の生産内容は、猿投窯で緑軸陶器素地生産が確認されている最古の窯であるNN265号窯²¹⁴からの出土品との類似度が高い。猿投窯で緑軸陶器生産が開始された時期については、『日本後紀』弘仁六年正月丁丑条の記述や平安京での出土実態からの検討によって815年を大きく遡らないことがほぼ明らかとなっている²¹⁵。ただし、岡山1・2号窯出土の須恵器瓶類の頸部接合技法にはNN265号窯出土品よりも三段構成が目立つなど、製作技法に若干古い要素を見て取ることもできる。また、古相だが最古級ではない形態の灰軸陶器碗が筆ヶ崎3号墳から出土していることを考慮し、若干の時間幅をとって、筆ヶ崎5期を、8世紀末から9世紀前半に位置づけしておくことにする。

(4) 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡の変遷

以上の時期設定を踏まえ、出土土器の検討を通し



第 184 図 筆ヶ崎 1～4 期の北勢在地窯系須恵器と共伴の猿投窯系須恵器 (1 : 4)

で推定できた遺構に限られるが、遺跡の変遷は概ね次のように考えることができる（第185・186図）。

【筆ヶ崎1～3期】

古墳群造営の時期である。竪穴建物も僅かに認められ、SH66を除けば、すべて古墳よりも北側の丘陵平坦面に築かれている。1期のSH213、3期のSH131・134は、いずれも比較的大型で正方形に近い平面形を呈しており、この時期の竪穴建物の形態的特徴と言えそうである。

筆ヶ崎1期（7世紀前半） 丘陵平坦面の南端、緩やかに南の谷へ向かって傾斜する落ち際に6号墳が造営されることから古墳群の形成がはじまる。古墳群のなかでは、最も高所に位置し、墳丘規模も大きい。

筆ヶ崎2期（7世紀第2四半期頃） 東群と中央群にも、それぞれの高所に初めて古墳が築かれる（2号墳・3号墳）。西群では、6号墳よりもやや下がった東側に5号墳が築かれる。その後、やや遅れて中央群では10号墳が、先に築かれた3号墳よりもやや下がった東側に築かれる。

筆ヶ崎3期（7世紀第3四半期頃） それぞれの群で、既にある古墳よりも低い位置に、1号墳・4号墳・7号墳が築かれる。なお、西群の11号墳は、残存状況が悪すぎて確定できないが、墳丘や石室の構築方法から7号墳よりも新しいと推測されている³⁰¹。周辺からの出土品を含めても、確実に1・2期にさかのぼるものは認められない一方で、僅かではあるが周溝から3期のものとみられる須恵器杯Hの小片が出土しているため、この期の中に収まるものと考えておく。

【筆ヶ崎4・5期】

集落が展開し、古墳が竪掘される時期である。4期になると、5号墳・6号墳・10号墳をはじめ、大半の古墳が竪掘されたようで、周溝がそれほど埋まらず、横穴式石室の内部に土が流入していない段階で、石室が壊され、石材が運び出された。また、3号墳には5期に竪掘を受けた形跡が認められる。

【筆ヶ崎4期（7世紀第4四半期から8世紀初頭頃）

古墳の周囲に、竪穴建物と掘立柱建物からなる集落が展開し、鍛冶関連の工房施設も造られる。時期判断ができた竪穴建物に限って言えば、大半がこの時期に属している。時期を限定できないものが多い

掘立柱建物についても、調査区内の全出土品に占める4期の土器割合が高いことは、多数の建物がこの時期に属していたことを示唆しているのだろう。このように、個々の建物の時期を細かく絞り込むことが困難であるため、建物の先後関係や並存など、具体的な検討は差し控えるが、全体の傾向を以下のようにまとめることができる。

建物には、しばしば3棟程度（最大5棟）の重複が認められる。竪穴建物が掘立柱建物と重複する場合は、確認できる事例では、すべて竪穴建物の方が古く、側柱建物と重複することが多いのに対し、総柱建物とは少ない。また、総柱建物はほぼ同一地点か近接して建て替えられているようで、集落内での位置が固定化されているように見受けられる。これは、集落の構成が、筆ヶ崎4期の間に竪穴建物+総柱建物から、側柱建物+総柱建物へと変化したことを示していると考えられる。

掘立柱建物は、地形に沿って建てられているものが多いが、斜面の東半部にはやや大型の側柱建物（SB169・170、SB173、SB177）が、南側に榑SA185を伴って正方位に近い配列で建てられており、中心的な建物群の様相を呈している。

鉄滓や鞆口は、この地域の遺跡に認められる特徴的な遺物として以前から認識されていた³⁰²が、今回の調査では鍛冶関連の工房施設とみられる遺構SH2・10を確認できた。SH2では鍛冶炉2基の他に、鉄滓・鉄片を大量に含む小土坑や礫の集中が認められ、SH10からは長さ23cmほどの鑿が出土した。SH2・10を除くと、鍛冶関連遺物はそれほど多くはないが³⁰³、興味深いのは、椀形鍛冶滓の4号墳竪掘坑からの出土である。

空白期 筆ヶ崎4期の後、集落は一且途絶えたようで、8世紀前半頃の遺物は全くと言ってよいほど無くなる。

筆ヶ崎5期（8世紀末から9世紀前半） 再び建物が建てられ、集落を形成する。確実にこの時期に属する建物は、谷に近い斜面の竪穴建物3棟（SH80～82）であるが、柱穴からこの時期の遺物が出土した掘立柱建物SB307・308・318・322も、筆ヶ崎5期に属する可能性は高い。

当該期の遺物は、これら7棟の建物周辺だけでな

く、丘陵平坦面にはかなり広範囲に分布している(第187図)。その多くが遺構外からの出土であるため、具体的に特定はできないが、遺物の分布域にある時期不明の掘立柱建物のうち、いくつかは5期に属するものと思われる。

その後 9世紀半ば頃を境に、再び遺構・遺物が全くと言ってよいほど無くなり、生活痕跡がほとんど認められなくなる。包含層から中世前期の山茶碗や瀬戸美濃陶器の小片が僅かに出土したのみである。

(5) 今後の地域史解明のために

さて、これで筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡の大まかな変遷を明らかにできたわけだが、この一連の作業を通じて気づいたことが三点ある。今後、この時期の地域の歴史を考える上で、有用な視点と思われるので、最後に述べておきたい(第188・189図)。

まず、遺跡の景観が3期から4期、すなわち7世紀第3四半期から第4四半期にかけて、古墳群から集落へと大きく転換していることがあげられる。これは古代の日本において大きな画期となった壬申の乱を前後する時期に景観上の大きな転換があったことを意味しており、直接的な関連についてまで論及はできないが、注目すべき現象と言えよう。

第二には、筆ヶ崎4期の時間幅の中で集落景観も変化していると推測できるようになったことである。伊勢地域における古代集落の景観が、7世紀頃に堅穴建物主体から掘立柱建物主体へと変化することは、これまでも漠然とは認識されていた。しかし、今回の検討を通して、少なくとも筆ヶ崎西遺跡では、その転換が概ね天武朝(672~686)から文武朝(696~707)の頃の出来事であると明らかにすることができた。

第三は、在地窯系と猿投窯系の須恵器杯Hの関係である。両者の杯Hが共存する場合、在地窯系の杯Hよりも猿投窯系杯Hの法量が小さい傾向があることは、和田ヶ平1号墳出土品の事例などで以前から知られていたが、蓄積された資料を時系列順に並べることにより、縮小化の具体的な動きを明らかにすることができた(第183図上段)。

今のところ、系統的に岡山6号窯に直接繋がるものが確認される古い在地窯は見つかっておらず、筆ヶ崎1期以前の北勢在地窯系須恵器については不

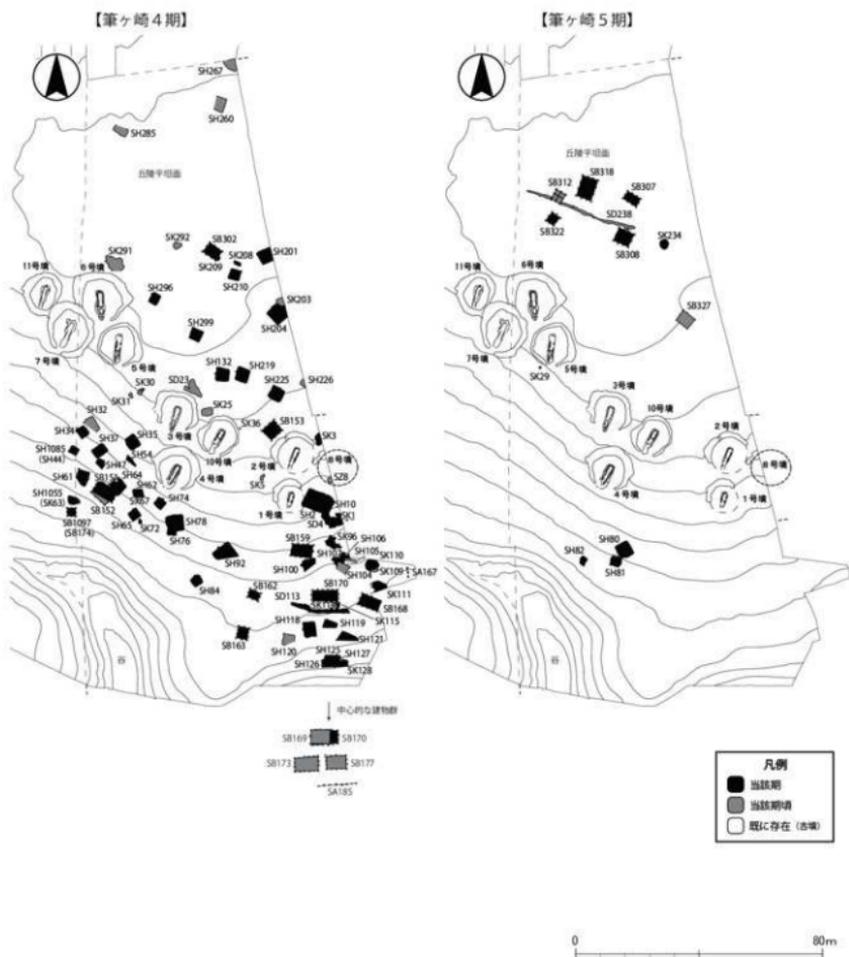
明な点も多い。しかし、北勢地域の消費地の状況を見る限り、H-61号窯式の猿投窯系杯Hと非猿投窯系杯Hの法量はほぼ同じである¹¹⁾。その後、猿投窯系杯Hが先行して縮小し始め、7世紀前半から第3四半期(筆ヶ崎1~3期)には必ずと言ってよいほど猿投窯系杯Hは在地窯系杯Hよりも法量が小さく、その差は最大2cmにも達する。7世紀第3四半期(筆ヶ崎3期)には猿投窯系杯Hの縮小化が限界を迎えて下げ止まり、急激に小型化してきた在地窯系杯Hが7世紀第4四半期から8世紀初頭頃(筆ヶ崎4期)には追いつく。この時期、主力の食器は杯A・杯Bへと移行していき、杯Hの消費は急激に減少し、ついに生産されなくなる。

これに対し、飛鳥・藤原地域(第183図下段)では猿投窯系杯Hと非猿投窯(おそらく陶邑窯)系杯Hの間に明確な法量差は認められず、両者の縮小化の動きは連動しているように見える¹²⁾。いささか事例数が少ないが、7世紀前半から半ばにかけて、宮都があった飛鳥・藤原地域へ搬入された猿投窯系杯Hの法量は、同一遺構から出土した杯Hの法量の集中域に納まっていることが判る。飛鳥・藤原地域の杯Hと連動するという事は、そこへ搬入されていた須恵器の主要生産地である陶邑窯とも連動した動きと理解できるのではないだろうか。同時期における猿投窯系杯Hと北勢在地窯系杯Hの法量の違いは、宮都や陶邑窯との比較で言うならば、猿投窯系が小さいのではなく、北勢在地窯系が大きいと捉えるべき現象である。

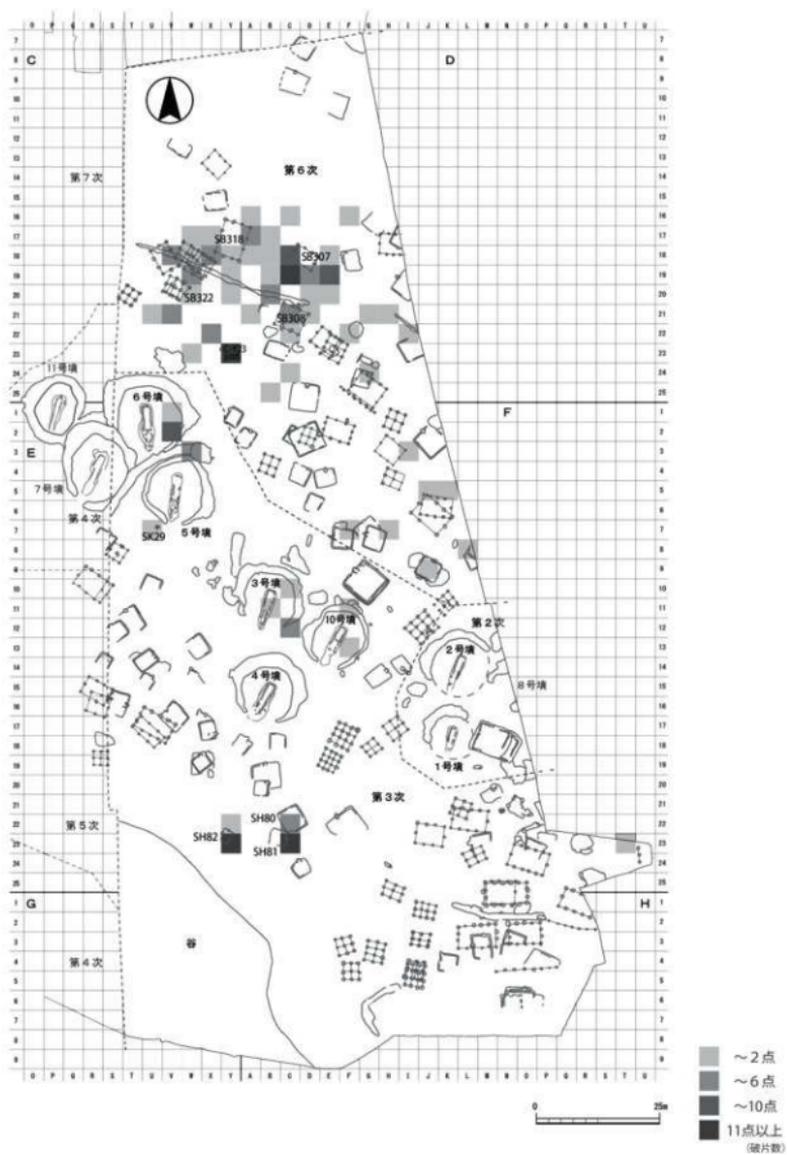
以上のように、北勢在地窯系須恵器の杯Hには、陶邑窯や猿投窯などと比べて、法量の縮小化が初期は緩やかに進み、その後急速に進んで最終的に追いつくという特徴が明らかとなった。

前代と比べ文献資料が格段に増えることから飛鳥時代の考古学には、古墳や集落、官衙の動向など発掘調査成果を歴史事象と絡めて解釈できる醍醐味がある一方、年代の少しのズレで全く違った歴史像を生み出してしまふ危険性がある。長年にわたって地域で蓄積された資料に、根拠のある暦年代を付与して地域編年を編成する作業は、今後、地域の歴史の実像を解明する上で大きな助けになるだろう。

(水橋)



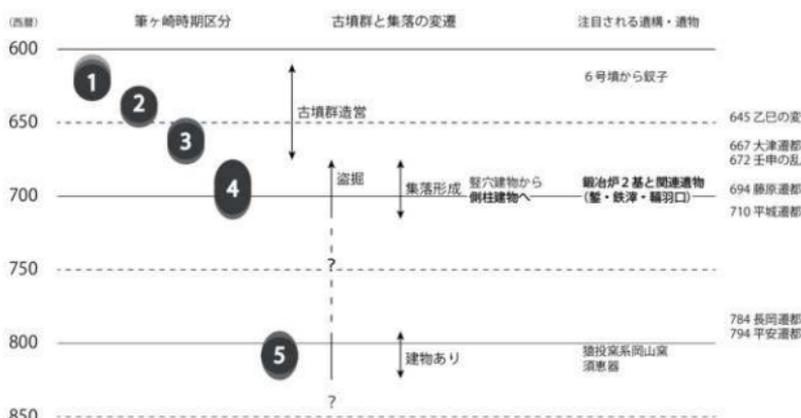
第186図 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡の変遷2 (1:1,600)



第187図 筆ヶ崎5期の遺物分布 (1 : 1,000)

筆ヶ崎 時期区分	筆ヶ崎古墳群			筆ヶ崎西遺跡	北勢地域の 遺跡	在地窯系 須恵器	猿投窯系 須恵器
	西群	中央群	東群				
1期	6号墳			SH213	狐塚遺跡 ST09 西ヶ広遺跡 SB11 西ヶ谷遺跡 SH502	岡山6号窯	H-44号窯
2期	5号墳	3号墳	2号墳	SH66	和田ヶ平1号墳 一次埋葬副葬品 二次埋葬副葬品	西ヶ谷1号窯	H-15号窯
	10号墳 (8号墳)						
3期	7号墳	4号墳	1号墳	SH131 SH134 SH235	西ヶ谷遺跡 SH2 菟上遺跡 SZ701 西ヶ谷遺跡 SH3		I-101号窯 H-16号窯
4期				SH2・10 SH 多数 SB 多数 SK3・111	西ヶ広遺跡 SH3041 (西ヶ谷2号窯)		I-17号窯 C-2号窯
空白期							
5期				SH80~82 SB307 SB308 など			岡山1号窯 岡山2号窯 NN265号窯

第188図 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡の時期区分



第189図 筆ヶ崎時期区分の実年代観

【註】

- 1) 平成24年度には、第3次調査（新名神高速道建設事業）と第4次調査（国道475号東海環状自動車道建設事業）で、ほぼ同時期に隣接して古墳群と墓場の調査を行った。
- 2) 四日市市教育委員会1971『岡山古墳址群発掘調査報告』（四日市市埋蔵文化財調査報告5）
- 3) 四日市市遺跡調査会1992『西ヶ谷古墳跡群』（四日市市遺跡調査会文化財調査報告Ⅷ）
- 4) 北勢在地系その代表的な窯である西ヶ谷古墳跡群の須恵器については、1997年に葛山拓也氏によって、その工人の集落とされる西ヶ谷遺跡や四日市市内の古墳からの出土品を合わせて編年案が提示され、その後、西ヶ谷遺跡の調査の度に、四日市市教育委員会の担当者によって、新資料が追加され、補強されている。（葛山拓也1997「北勢中部」『古代の土器5-1 7世紀の土器（近畿東部・東海編）』古代の土器研究会、四日市市教育委員会2002『西ヶ谷遺跡4』四日市市教育委員会2005『西ヶ谷遺跡5』）
- 5) 尾野善裕・森川実・大澤正吾2016「飛鳥地域出土の尾張須恵器」『奈良文化財研究所紀要2016』奈良文化財研究所・歴史土器研究会2019「飛鳥時代の土器編年再考」
- 6) 地域を異にするが、丹後地域から飛鳥地域にかけての杯目を対象に検討を行った筒井崇史氏は、地域によって法量が相対する速度が異なるうえに、ヘラクズ調整の省略が確認できる法量も異なることを明らかにし、飛鳥地域と異なる土器様相が認められる地域には、飛鳥地域の古墳を援用することはできないとした。また、南勢地域の古墳から出土した尾張須恵器と在地系須恵器の共伴例から絶対年代を導き出した桶垣徹氏も、器種構成や調整技法の変遷を判断材料として陶器編年や飛鳥編年の基準を採用する方法の問題点を指摘している。（筒井崇史2006「飛鳥時代須恵器杯目の地域性について」『京都府埋蔵文化財調査報告5集-創立二十五周年記念誌-』京都府埋蔵文化財調査研究センター、桶垣徹2020「飛鳥時代の南伊勢地域と須恵器の絶対年代-星河C-12号墳と河田C-12号墳を対象に-」『三河考古』第30号 三河考古刊行会）
- 7) 呼称については、基本的に奈良文化財研究所の用例（奈良国立文化財研究所1976『平城宮発掘調査報告Ⅷ』など）に準拠したが、一部は実態に即して変更した。具体的には、杯G身と杯Aを合わせて「無台杯」、鉢のつく杯蓋のうち、かえりのあるものを「杯蓋a」、かえりの無いものを「杯蓋b」とした。
- 8) 春日井垣1992「北勢地域における須恵器蓋形の法量変化について」『青木川古墳群』四日市市教育委員会（四日市市埋蔵文化財調査報告書17）
- 9) 杯蓋は口縁部外端、杯身は受け部外端を計測した。数値については、極力、実物を閲覧のうえ、残存率1/4以上で歪みの少ないものに限定して計測し、データの信頼度を高めた（北勢地域①～⑥・⑧～⑩・⑬・⑭）。⑦・⑪・⑫については、報告書掲載の実測図から読み取った。
- 10) 1996年度に鈴鹿市考古博物館の進入路建設に関連して調査された聖穴住居。須恵器杯H・高杯・鉢・壺・甕、土

- 師器柄・甕などが出土した。（平成28年9月24日鈴鹿市考古博物館で開催された「海の古墳を考えるⅥ 第3回検討会 岸岡山古墳と御村短須恵の展開・再検討」の藤原秀樹氏提供資料）
- 11) 日本道路公団名古屋支社・三重県教育委員会1970『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』三重県文化財連盟
- 12) 前掲註4文獻（四日市市教育委員会2005）
- 13) 四日市市教育委員会1973『四日市の後期古墳』（四日市市埋蔵文化財調査報告8）。前掲註4文獻（葛山1997）。なお、石室内の出土位置から二次埋葬副葬品とされた杯H身のうち、北勢在地系須恵器であるにもかかわらず、著しく小さい2点（102・103）は、形態的にみても新しい様相を呈しているため、三次埋葬の可能性を想起させる。
- 14) 前掲註4文獻（四日市市教育委員会2002）
- 15) 三重県埋蔵文化財センター2005『墓上遺跡発掘調査報告』（第187図2300）
- 16) 四日市市遺跡調査会1996『西ヶ谷遺跡』（四日市市遺跡調査会文化財調査報告ⅩⅧ）
- 17) 前掲註15文獻（三重県埋蔵文化財センター2005）
- 18) 三重県埋蔵文化財センター2006『西ヶ谷遺跡（第3・4次）発掘調査報告』
- 19) 尾野善裕・水橋公志2004「古代の窯業技術伝播-美濃国・美濃須恵窯の場合-」『かにかくに』八賢習先生古墳記念論文集刊行会
- 20) 各務原市埋蔵文化財調査センター1998『須衛天狗谷古墳跡群・天狗谷址群発掘調査報告書』各務原市教育委員会
- 21) 大江幸1983「尾崎大平古墳跡群」『各務原市史』考古・民俗編考古（本文）各務原市
- 22) 三重県埋蔵文化財センター2014『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～龜山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財調査概報Ⅳ』（図18）
- 23) 四日市市教育委員会1966『東日野弥生住居址群 岡山古墳址第1号墓』（四日市市埋蔵文化財調査報告第1集）。前掲註2文獻（四日市市教育委員会1971）
- 24) 水橋公志2002「横穴墓について」『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター
- 25) 名古屋市教育委員会1979『光真寺古墳発掘調査報告書』（名古屋市文化財調査報告Ⅷ）
- 26) 尾野善裕1997「尾張・西三河（粟津）猿投・尾北・その他」『古代の土器5-1 7世紀の土器（近畿東部・東海編）』古代の土器研究会
- 27) 奈良国立文化財研究所飛鳥宮跡発掘調査部1995「廿樫丘東墓の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』25
- 28) 前掲註26文獻（尾野1997）
- 29) 前掲註26文獻（尾野1997）
- 30) S H 2から明らかかな北勢在地系須恵器の杯Hの出土はないが、筆崎4期に位置づけられた西ヶ谷2号窯出土品に類する無台杯（183）が認められる。
- 31) 愛知県教育委員会1980『愛知県鍛冶山西南麓古墳跡群分布調査報告（1）』
- 32) 愛知県教育委員会1983『愛知県古墳跡群分布調査報告（Ⅲ）（尾北地区・三河地区）付・猿投窯の編年について』

城ヶ谷和広2015「高藏寺第2号窯」『愛知県史』別編窯業
1 古代焼投系 愛知県

- 33) 高橋透2012「藤原宮東面内蔵S D 2300出土土器(1)―第24次調査から」『奈良文化財研究所紀要2002』森川実・大澤正吾2018「石神遺跡B期整地土・S D 640出土の土器群―石神遺跡第3～5次 第10～12次」『奈良文化財研究所紀要2018』
- 34) 前掲註5文献(尾野・森川・大澤2016)
- 35) 水橋公忠「古代須置器工人の系譜―伊勢国・岡山古窯址群の場合―」『考古論集』川越哲志先生退官記念論文集 川越哲志先生退官記念事業会
- 36) 名古屋市教育委員会1976『徳重西部地区土地区画整理事業予定地内所在埋蔵文化財発掘調査報告』(名古屋市文化財調査報告VI)
- 37) 翼淳一郎1983「古代窯業生産の展開―西日本を中心にして―」『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 文化財論叢』同朋舎出版。平尾政幸1994「緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器」『平安京概要』角川書店。高橋照彦1994「平安初期における鉛釉陶器生産の実質」『史林』77巻6号 史学研究会。尾野善裕2013「古代尾張における灰釉陶器生産の歴史的背景」『新修名古屋史』資料編考古2 名古屋市
- 38) 三重県埋蔵文化財センター2019『筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡(第4・5・7次)発掘調査報告』
- 39) 東員町教育委員会1976『西山遺跡・新野遺跡』。岡田登1993「古墳時代以後の遺跡」『四日市市史』第三巻資料編考古Ⅱ 四日市市
- 40) 第7次調査S K 1136からは、鍛冶伊の破片や小鉄塊とともに大量の鉄滓が出土している。
- 41) 共伴事例としては、大鼻遺跡S H 79や西山48号墳周溝出土品が挙げられる。両系統の蓋杯がすべて揃っているわけではないが、欠けている器種については、同系統のセットとして成り立つ法量幅で推測できる。(三重県埋蔵文化財センター1994『大鼻遺跡』。同2020『北山C遺跡(第2～7次)・西山古墳群発掘調査報告書』)
- 42) 飛鳥・藤原地域出土の良好な土器群に含まれる猿投窯系と非猿投窯系の杯目を比較した。(尾野善裕2019「飛鳥時代宮都土器編年の再編に向けて―飛鳥・藤原地域を中心に―」『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会)

【図版出典】

第183図：以下の文献より図化・転載(一部改変)した。

北勢地域 前掲註9のとおり

㊦：註4文献

㊧・㊨：註16文献

猿投窯 杯蓋：前掲註26文献

杯身：H-16 前掲註26文献

その他 前掲註6文献(稲垣2020)の図6

飛鳥・藤原地域 前掲註42文献の図1

第184図：基本的に各報告書掲載の実測図を転載(一部改変)

し。㊦・㊧・㊨は改めて実測した。

写真図版



筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡遠景（南西上空から）

中日本高速道路株提供



調査前風景 (第2次調査区: 南西から)



第2次調査区全景 (南から)

写真図版 2



調査前全景（第3次調査：南から）



第3次調査区（上空から）



第6次調査区（南東から）



第6次調査区（北西から）



第6次調査区（上空から）

写真図版 4



1号墳 (南から)



1号墳石室 (南東から)



1号墳石室横断土層 (下部：南から)



1号墳羨道縦断土層 (西から)



1号墳玄室土師器出土状況 (東から)



1号墳羨道縦断土層 (閉塞付近：西から)



1号墳石室右側壁 (北から)



1号墳石室右袖部 (東から)



1号墳北西側周溝内集石 (西から)

写真図版 6



2号墳 (南から)



2号墳石室 (南西から)



2号墳羨道左側壁（西から）



2号墳玄室遺物出土状況（東から）

写真図版 8



2号墳石室右側壁（北から）



2号墳北側周溝遺物出土状況（南西から）



2号墳石室横断土層（南から）



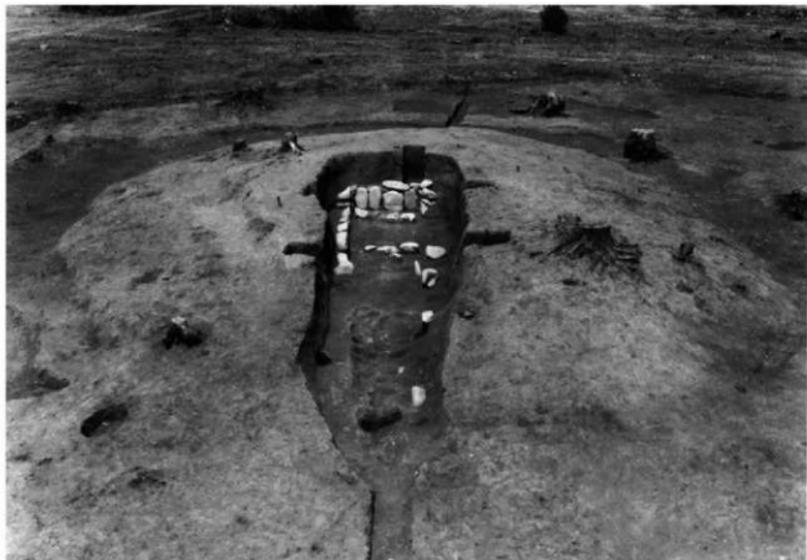
2号墳石室横断土層（東側：南から）



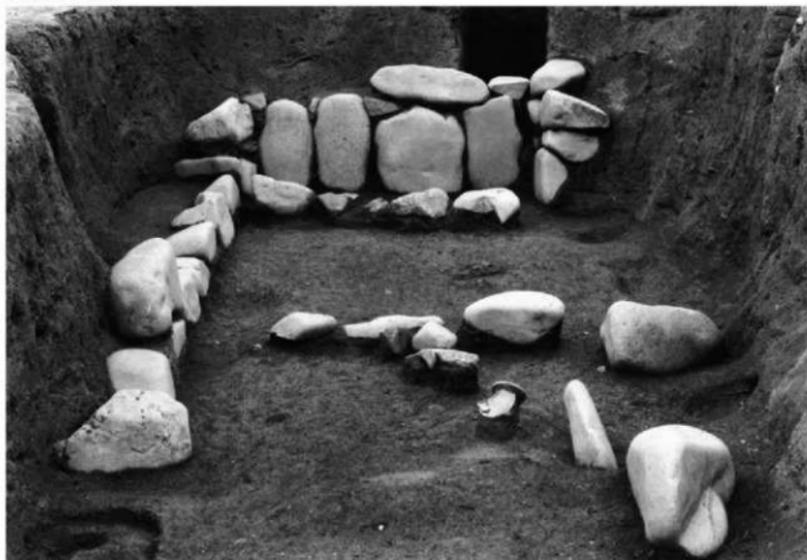
2号墳北側周溝遺物出土状況（南西から）



2号墳周溝土層（北側：西から）



3号墳 (南から)



3号墳遺物出土状況 (南から)



3号墳奥壁付近遺物出土状況（南東から）



3号墳遺物出土状況（東から）



3号墳石室横断土層 (北側：南から)



3号墳石室縦断土層 (北側：東から)



3号墳石室横断土層 (南側：南から)



3号墳羨道 (北東から)



4号墳石室 (南から)



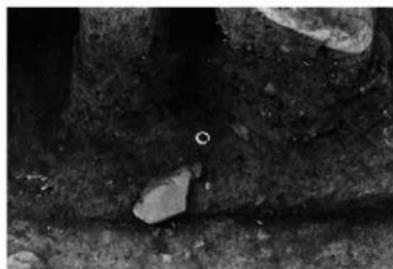
4号墳石室（北から）



4号墳玄門付近（東から）



4号墳玄室遺物出土状況（東南から）



4号墳耳環出土状況（東から）



4号墳石室横断土層（北側：南西から）



4号墳石室入口付近（東から）



4号墳周溝土層（東側：南から）



5号墳 (南から)



5号墳石室 (南から)



5号墳崩落石 (南から)



5号墳石室崩落石付近遺物出土状況 (南西から)



5号墳石室中央付近出土状況 (北西から)



5号墳奥壁付近 (南東から)



5号墳石室中央遺物出土状況 (東から)

写真図版 16



5号墳石室横断土層 (北側：南西から)



5号墳石室横断土層 (南側：南西から)



5号墳石室縦断土層 (東から)



5号墳周溝土層 (東側：南から)



6号墳 (南から)



6号墳石室（南から）



6号墳石室（北から）

写真図版 18



6号墳石室土層 (南側：南から)



6号墳石室縦断土層 (東から)



6号墳石室内遺物出土状況 (南から)



6号墳墳丘遺物出土状況 (北側：北東から)



6号墳墳丘遺物出土状況 (北東側：北東から)



6・7号墳間土層（東から）



8号墳（南から）



5・7号墳間土層（南から）



8号墳周溝土層（調査区東壁：西から）



10号墳（南西から）



10号墳石室（北から）



10号墳石室横断土層（北側：南から）



10号墳石室縦断土層（北側：東から）



10号墳周満土層（東側：南から）



S K137と3号墳（上空から）



SH2 (南から)



SH10 (南から)

写真図版 22



SH2土層 (南北ベルト：西から)



SH2土層 (北西部：東から)



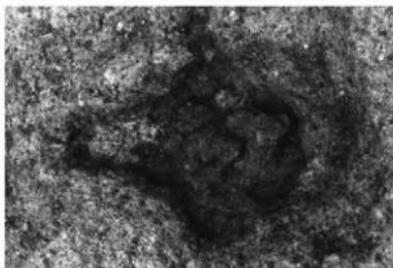
SH2カマド付近 (北西から)



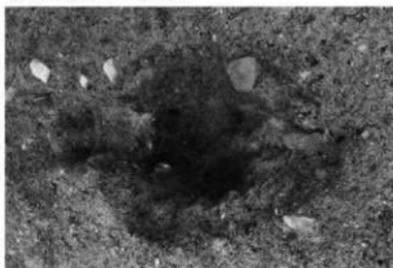
SH2カマド (南から)



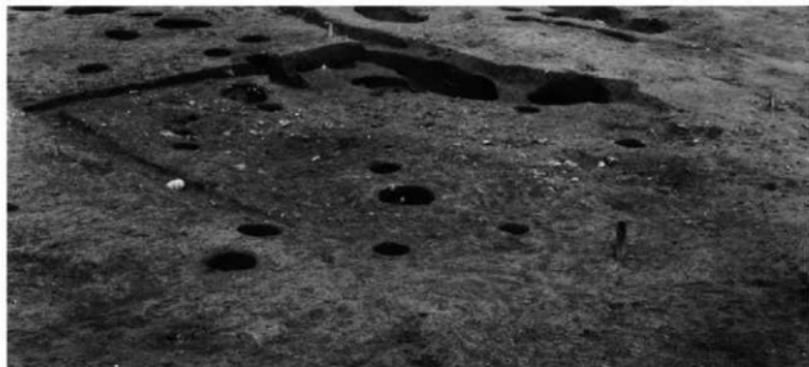
SH2鍛冶炉1・2 (東から)



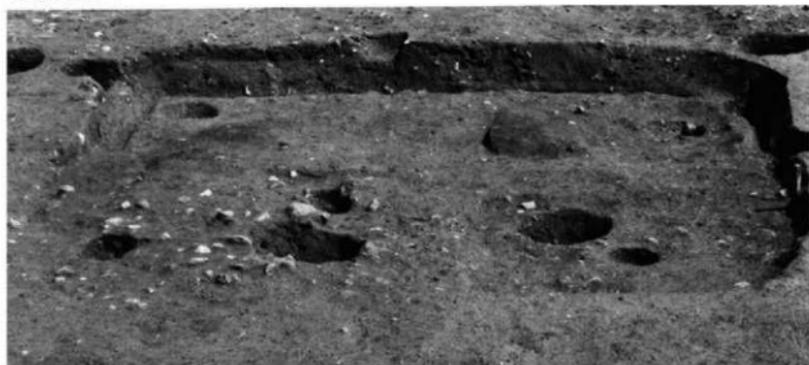
SH2鍛冶炉1 (西から)



SH2鍛冶炉2 (西から)



SH28 (西から)



SH35 (南西から)



SH71 (南西から)



SH32・34 (南西から)



SH37 (南西から)



SH47 (南西から)



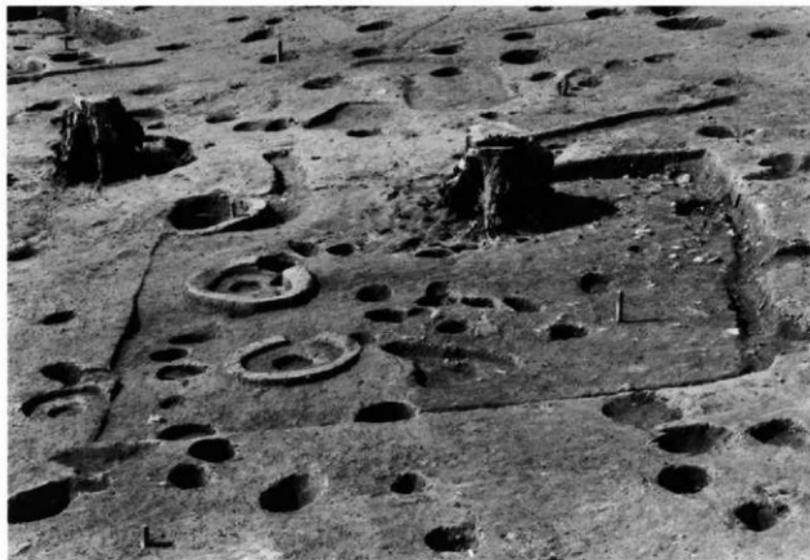
SH54 (西から)



S H61 (南西から)



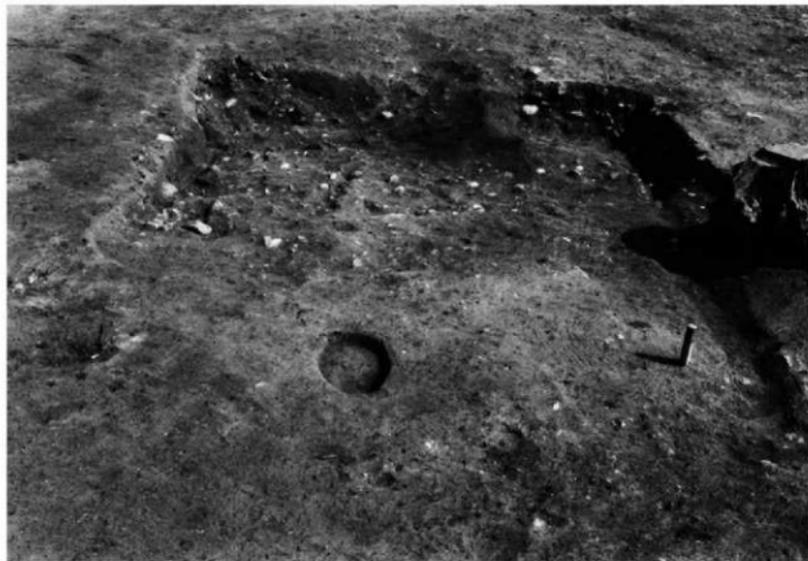
S H62・66、S X67 (南から)



SH64 (南東から)



SH65・70 (南から)



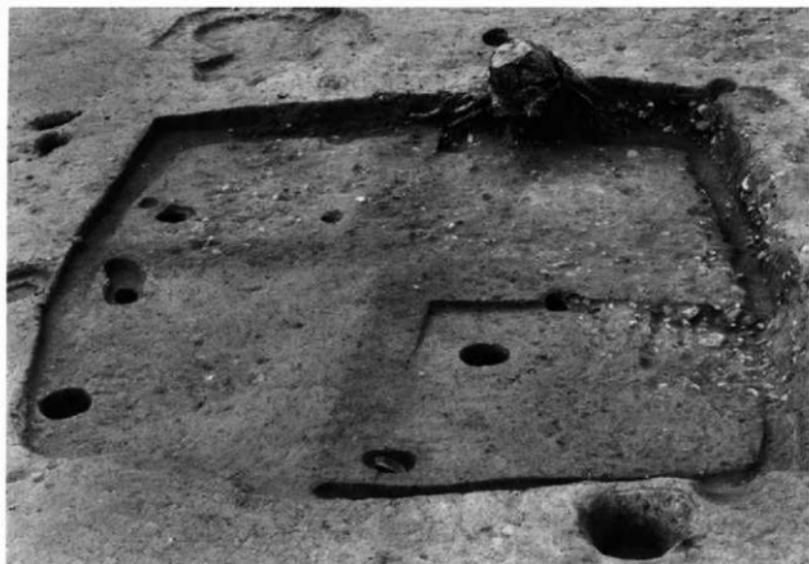
SH74 (南西から)



SH76・78 (南から)



SH76 (南から)



SH80 (南東から)



SH81 (西から)



SH82 (北西から)



SH84 (南東から)



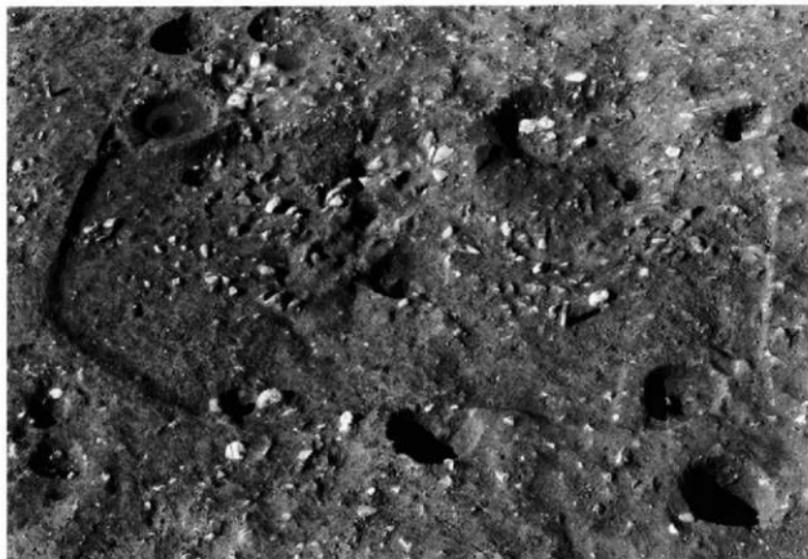
SH88 (南から)



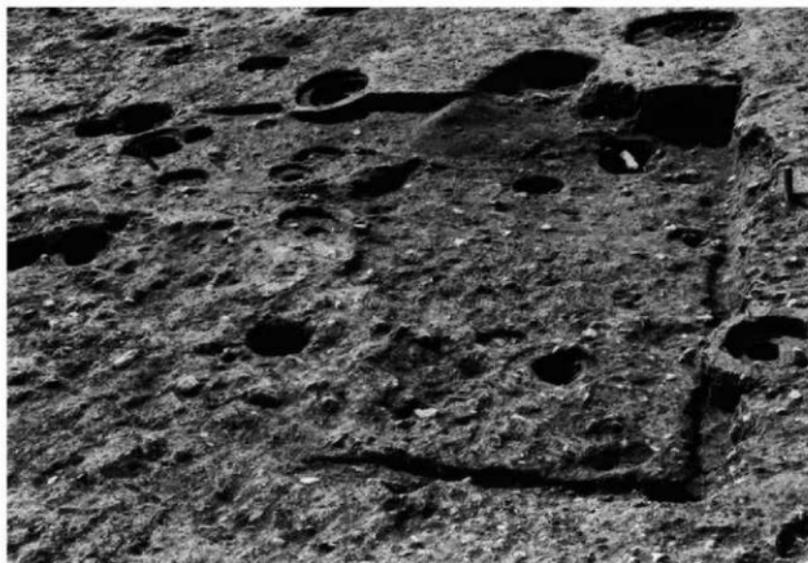
SH89 (南東から)



SH92 (南から)



SH97 (南東から)



SH100 (東から)



SH104～107 (南東から)



SH107 (南西から)



SH119・124 (南から)



SH120 (南から)



SH121 (南東から)



SH125 ~ 127 (東から)



SH131・134 (南東から)



SH132 (第3次調査区：南東から)



SH132 (第6次調査区: 東から)



SH201 (南西から)



SH204 (南西から)



SH210 (西から)



SH213・297 (南西から)



SH214 (南から)



SH215 (南から)



SH218・219 (東から)



S H225・S K228・229 (南から)



S H226・227 (西から)



S H235・239・241, S B309 (南から)



SH236 (西から)



SH241 (北東から)



SH258 (南西から)



SH259 (南から)



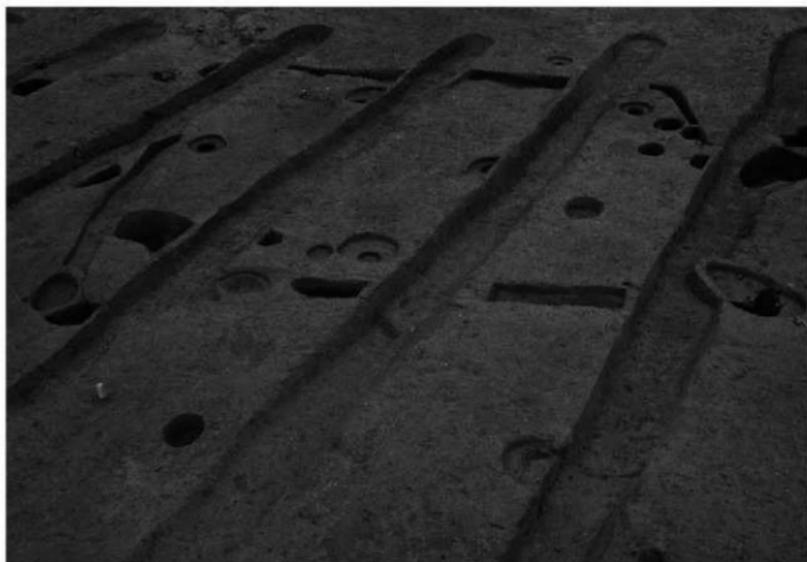
SH260 (北東から)



SH267 (南西から)



SH285 (北東から)



SH288 (北から)



SH296 (南東から)



SH298 (南西から)



SH299 (南東から)



SH300 (南から)



S H34 カマド (南から)



S H34 遺物出土状況 (南から)



S H35 内 E-W12pit1 遺物出土状況 (西から)



S H61 カマド (西から)



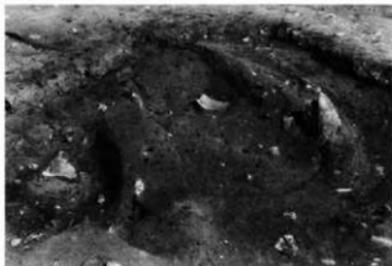
S H61 カマド (西から)



S H66 カマド (西から)



S H66 内 E-X16pit3 遺物出土状況 (西から)



S H76 カマド (南西から)



S H78 カマド (南から)



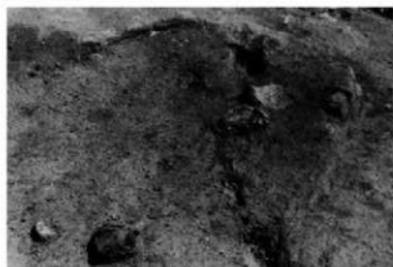
S H80 内 F-C22pit2 遺物出土状況 (南西から)



S H81 カマド (西から)



S H81 カマド (西から)



S H82 遺物出土状況 (焼土付近：西から)



S H82 内 E-Y23pit2 遺物出土状況 (南から)



S H84 カマド (南東から)



S H88 カマド (西から)

写真図版 52



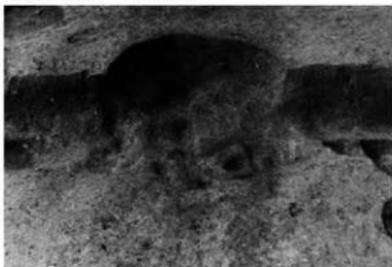
SH100内F-L23pit5 遺物出土状況 (北西から)



SH134 カマド (南東から)



SH134 カマド (南東から)



SH134 カマド (南東から)



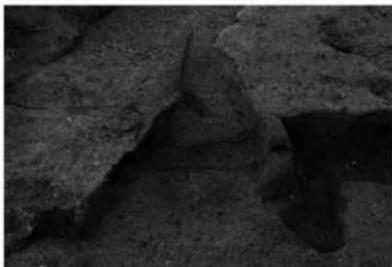
SH131・134 土層 (西から)



SH134 カマド・貯蔵穴 (北東から)



SH132 カマド (東から)



SH132 カマド (東から)



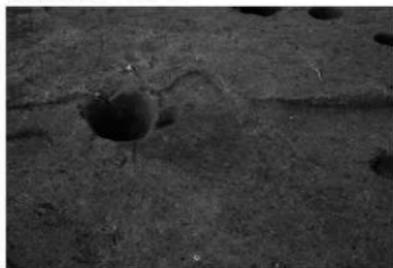
SH204 (南東から)



SH210 カマド (西から)



SH213 カマド (西から)



SH214 カマド (南から)



SH215 カマド (南から)



SH215 カマド (南から)



SH215 遺物出土状況 (北から)



SH219 カマド (東から)

写真図版 54



SH219 カマド (東から)



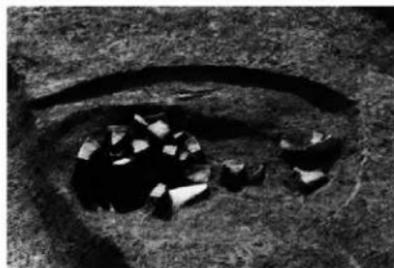
SH225 カマド (西から)



SH235 カマド (南東から)



SH235 カマド (南東から)



SH285 内C-V12pit3 遺物出土状況 (北から)



SH296 カマド (南東から)



SH298 カマド (南から)



SH298 貯蔵穴 (西から)



S B151 (南東から)



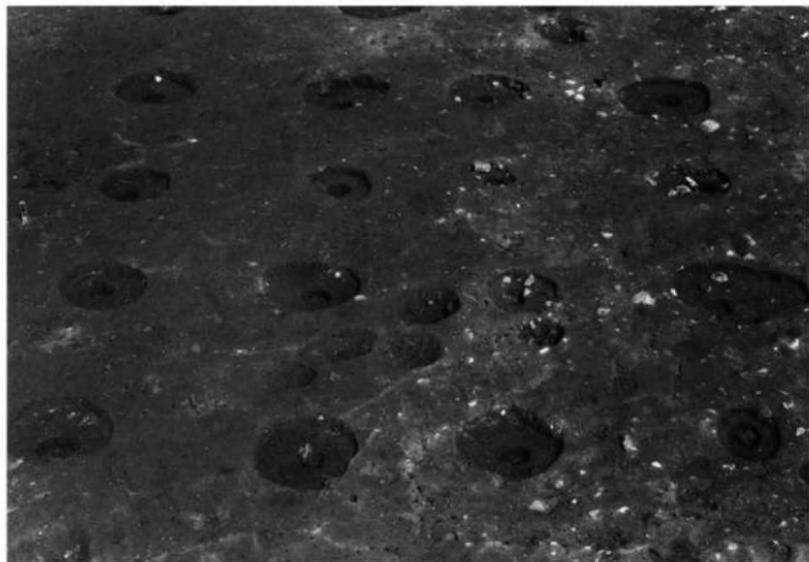
S B153 (北東から)



S B154・155 (南西から)



S B154 (南西から)



S B 155 (南西から)



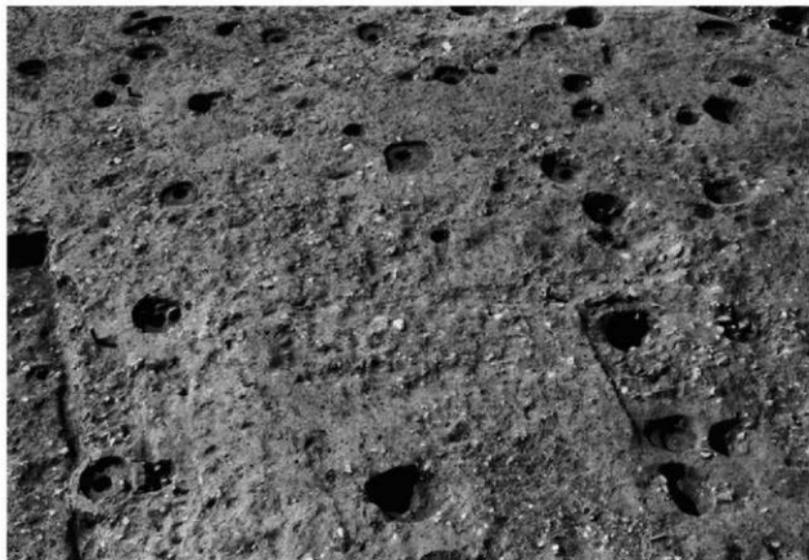
S B 156・157 (北東から)



S B157 (南東から)



S B158 (東から)



S B159 (東から)



S B160 (東から)



S B 161 (南東から)



S B 162 (南東から)



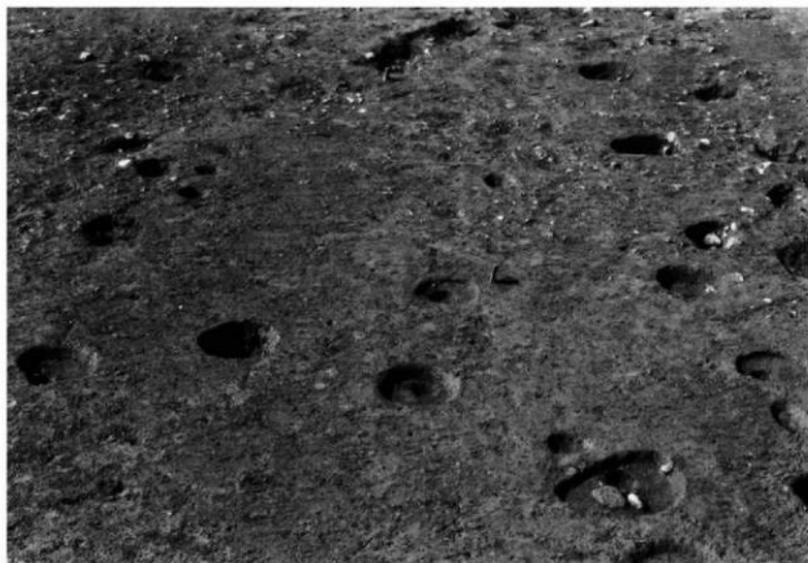
S B163 (東から)



S B164 (東から)



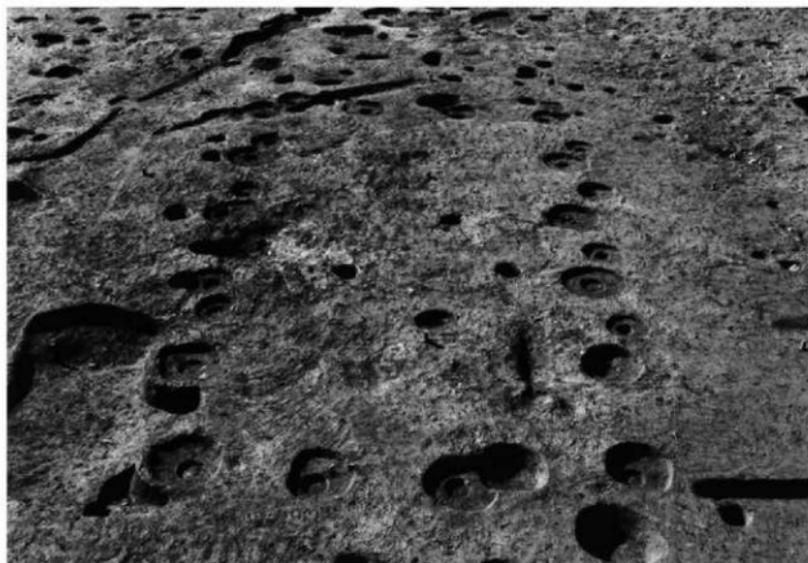
S B 165 (東から)



S B 166 (東から)



S B 168 (北西から)



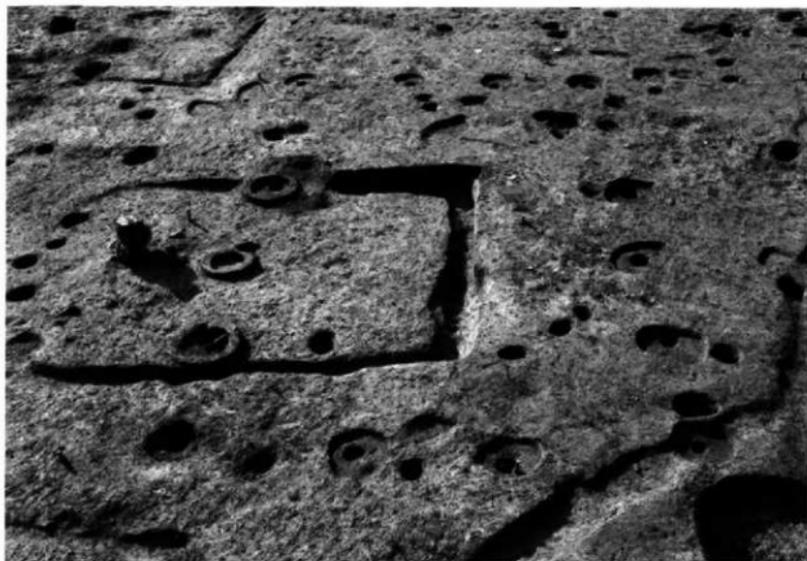
S B 169・170 (東から)



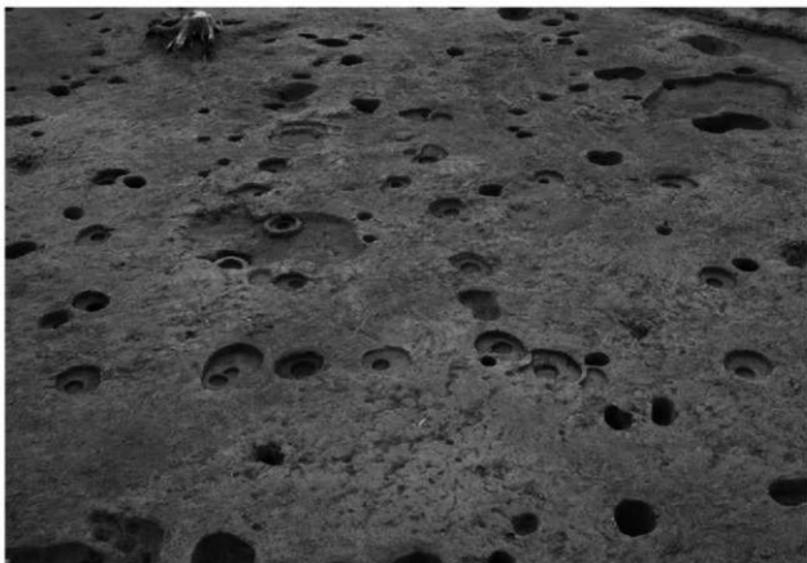
S B 171 (南から)



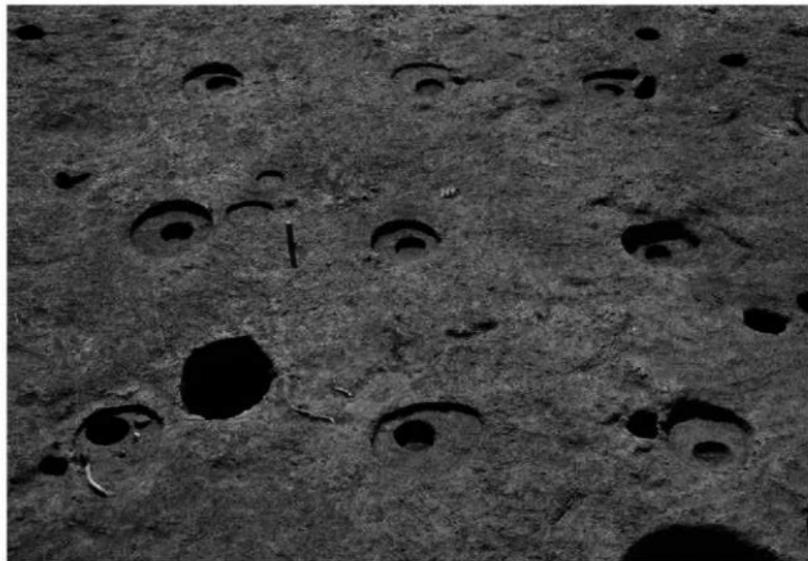
S B 172 (東から)



S B173 (東から)



S B301・302 (北東から)



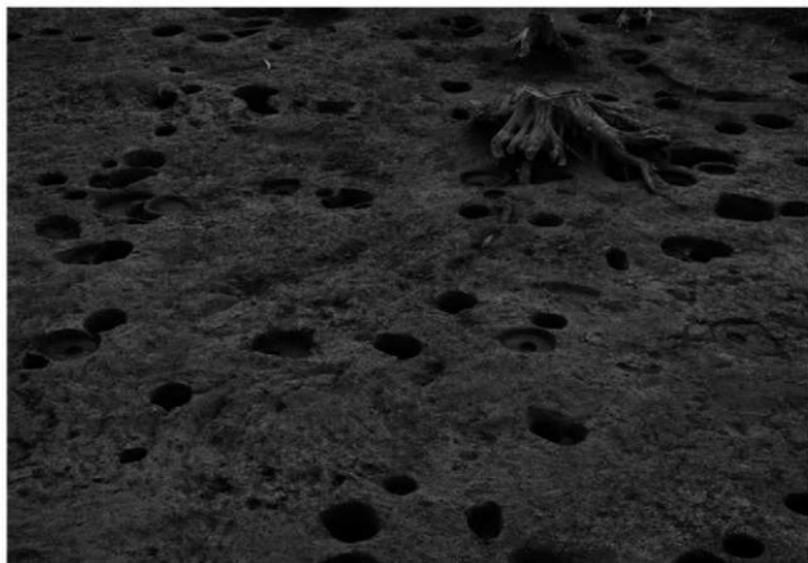
S B303 (北から)



S B305 (北から)



S B306 (北東から)



S B307 (北東から)



S B309 (北から)



S B310 (北東から)



S B312 (北東から)



S B313 (北東から)



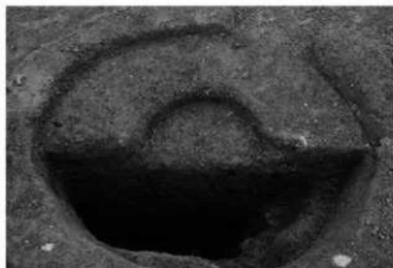
S B314 (北東から)



S B315 (南西から)



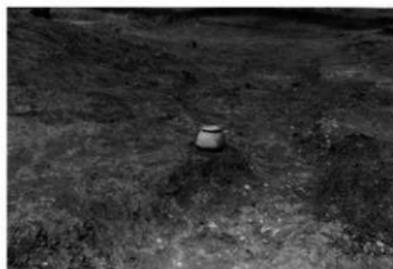
S A304 (南東から)



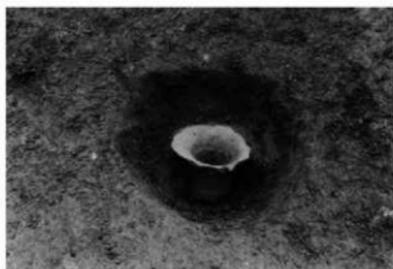
S B151 柱穴 (北東隅：東から)



S B173 柱穴 (北東隅：北から)



E-V23pit1 遺物出土状況 (702：南西から)



F-G15pit1 遺物出土状況 (698：南から)



C-Y23pit6 遺物出土状況 (646・647：東から)



D-G16pit2 遺物出土状況 (690：西から)

写真図版 72



S X 24 (南東から)



S X 36 (北から)



S K 67 (南から)



S X 87 (南西から)



S K 91 遺物出土状況 (北西から)



S K 110 (南東から)

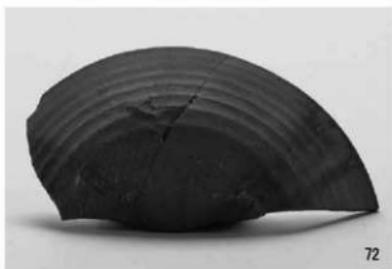
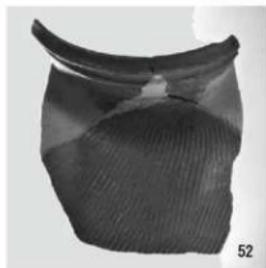


S K 111 (北西から)

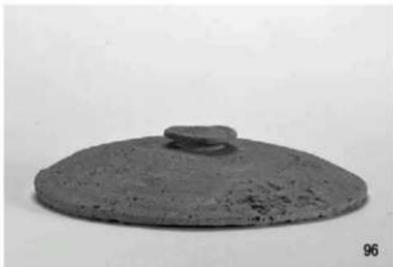


S X 130 (北から)

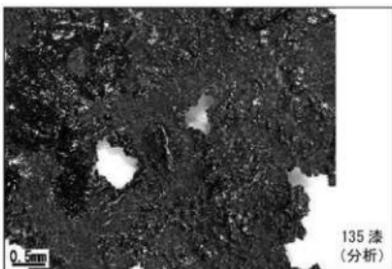
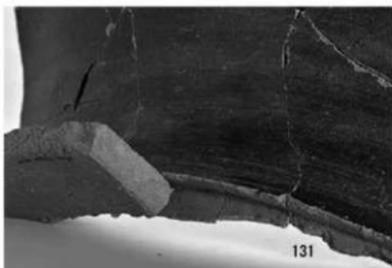








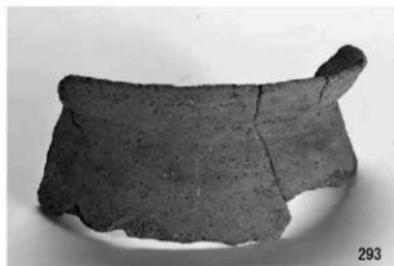
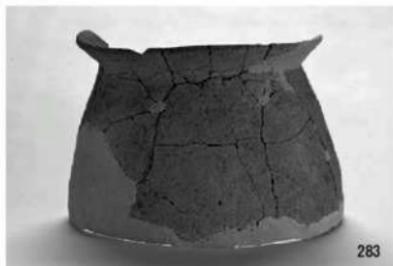


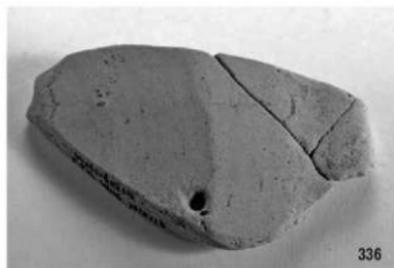






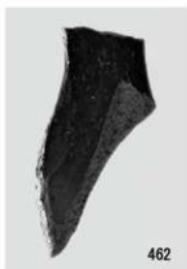
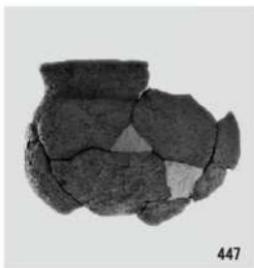
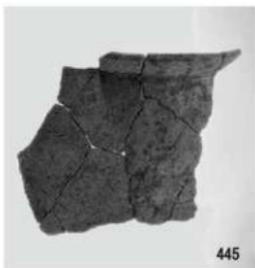
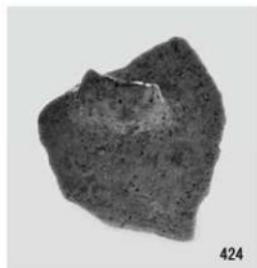
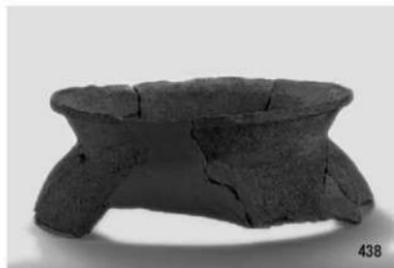


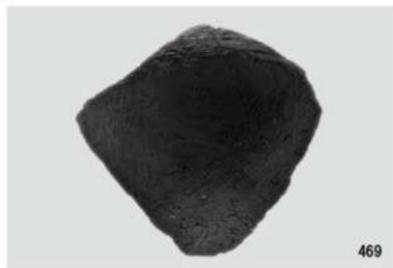


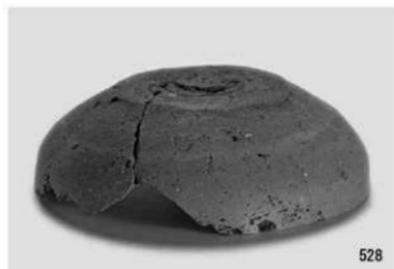
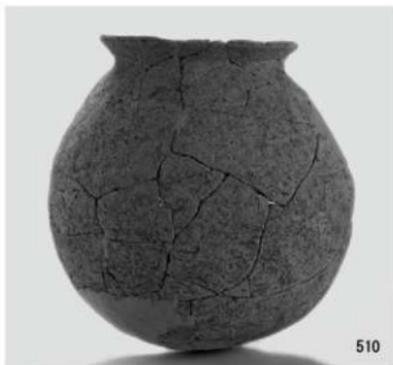
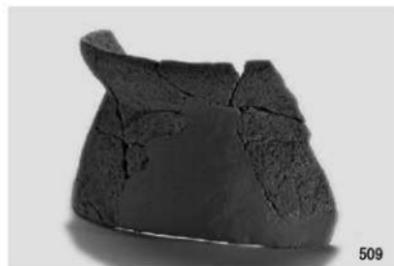
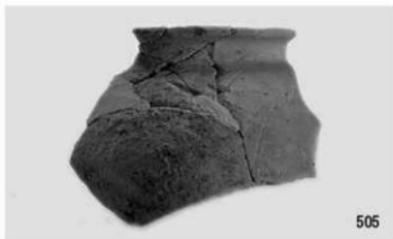


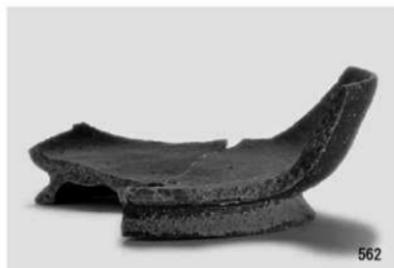




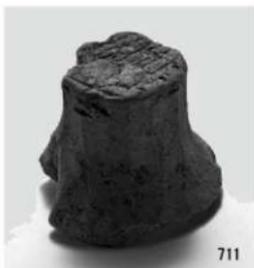
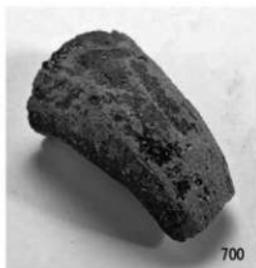


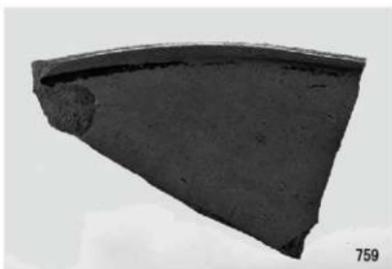
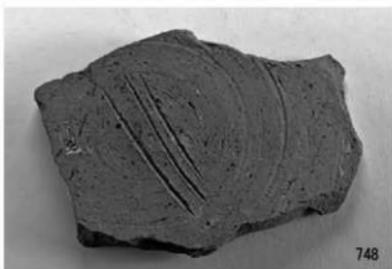
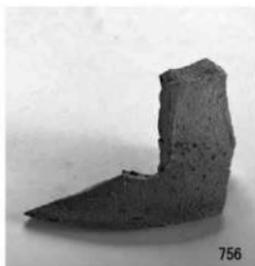
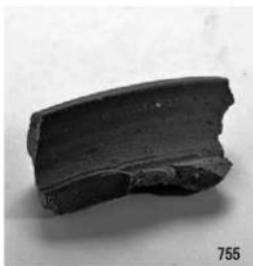
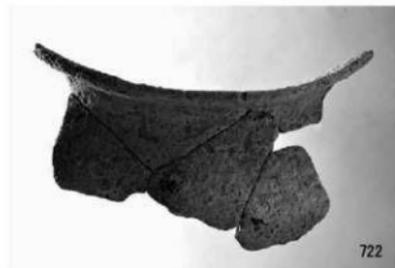


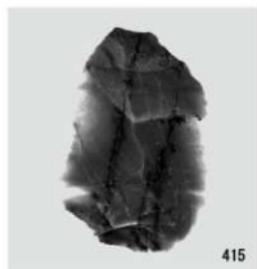
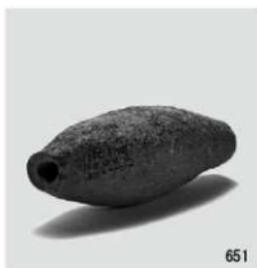
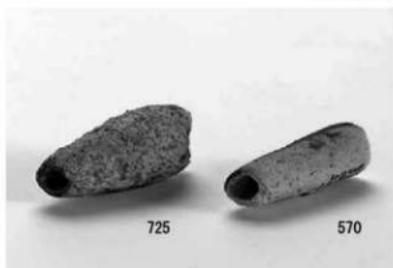


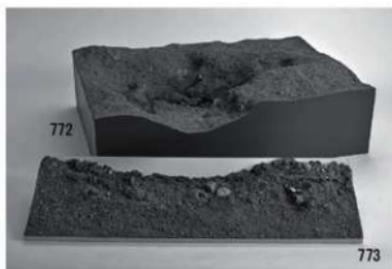
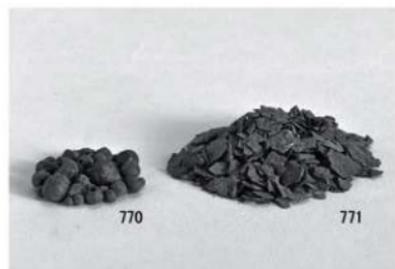






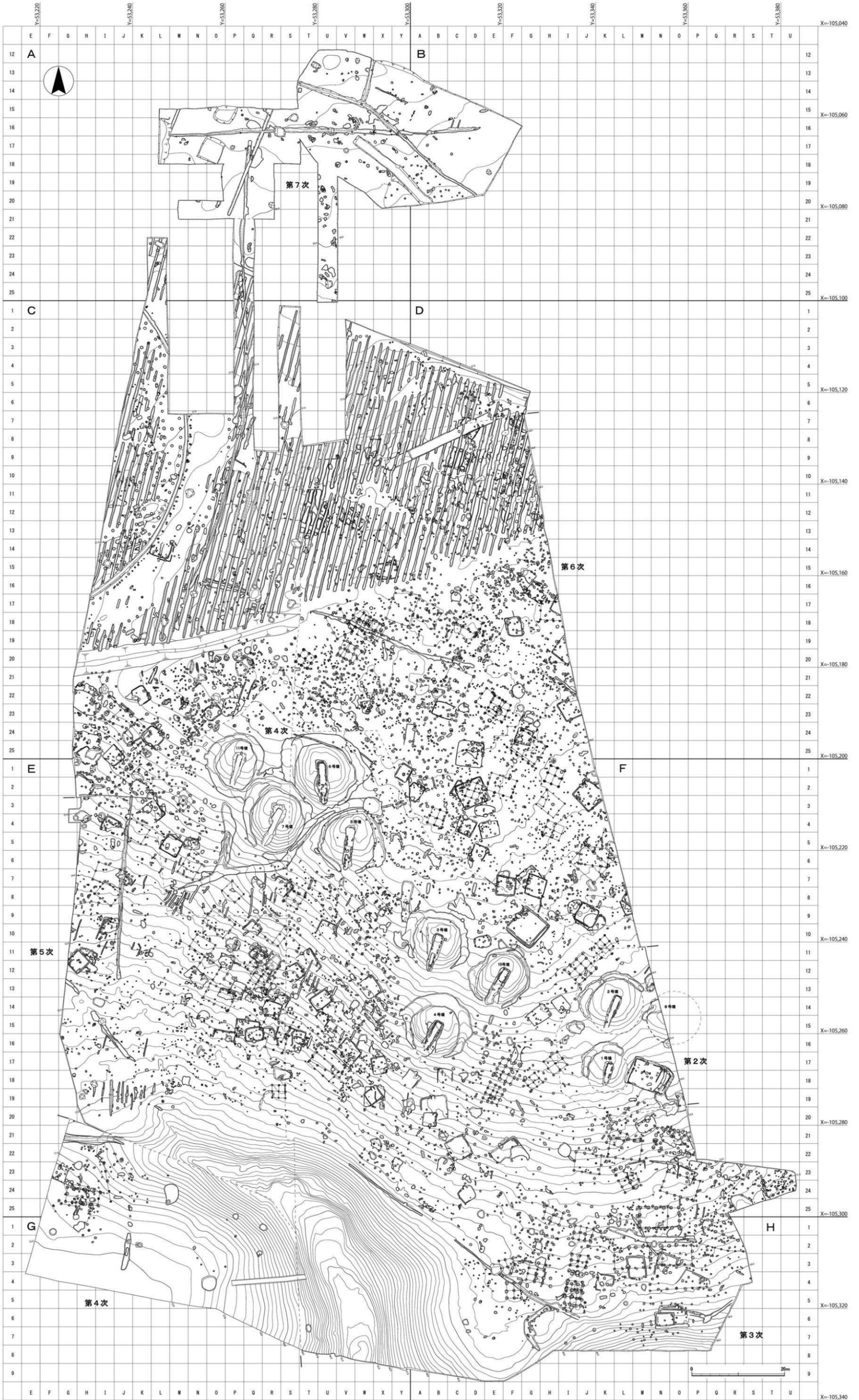






報告書抄録

ふりがな	ふでがさきこふんでん・ふでがさきにしいせき(だいに・きん・ろくじ)はっくつちようさほうこく							
書名	筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡(第2・3・6次)発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	323-7							
編著者名	服部芳人・宮崎久美・水橋公恵・萩原義彦							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL. 0596-52-1732							
発行年月日	2021年3月5日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ふでがさきこふんでん 筆ヶ崎古墳群	ふでがさきこふんでん 四日市市小牧町	24202	12	35° 2' 59"	136° 35' 2"	一次 20110920 ～20120131 第2次 20110920 ～20120124	一次 (560) 第2次 750	近畿自動車道 名古屋神戸線 (四日市JCT ～亀山西JCT) 建設事業
ふでがさきにしいせき 筆ヶ崎西遺跡	ふでがさきにしいせき 四日市市小牧町	24202	583	35° 3' 1"	136° 35' 3"	第3次 20120518 ～2013228 第6次 20130821 ～20140217	第3次 9,100 第6次 5,319 計 15,169	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
筆ヶ崎古墳群	古墳	古墳時代後期 飛鳥時代	円墳9基(2基は一部のみ) 横穴式石室		須恵器・土師器 金属製品(釵子・耳環)		古墳の遺跡番号は 4桁。 (12-1～8、10)	
筆ヶ崎西遺跡	集落跡	飛鳥時代頃 平安時代前期頃	竪穴建物多数・観治が2基 掘立柱建物多数		須恵器・土師器 鉄鏝・鉄滓・輪郭口			
要約	<p>10基の円墳からなる筆ヶ崎古墳群のうち9基と、その周囲に展開する集落跡である筆ヶ崎西遺跡を発掘調査した。</p> <p>古墳の主体部は、調査区内では確認できなかった1基を除いて、すべて横穴式石室であるが、盗掘により石室石材の大半が抜き取られていた。</p> <p>石室内部からは、副葬品と目される金銅製釵子(かんざし)や耳環、須恵器・土師器などが出土したほか、盗掘時のものとみられる遺物の混在も認められた。</p> <p>出土遺物の年代観から、古墳の築造および古墳への埋葬は、概ね7世紀前半から第3四半期までで、7世紀第4四半期から8世紀初頭頃には竪穴建物や掘立柱建物からなる集落が展開し、古墳の盗掘もこの時期から行われたことが明らかとなった。</p> <p>集落の中には、倉庫と考えられる総柱建物も多いが、その他の建物は8世紀初頭までの間に、竪穴建物主体から側柱建物主体へと変化したと考えられる。</p> <p>空白期を挟んで、8世紀末から9世紀前半にかけて竪穴建物や掘立柱建物が建てられるものの、その後、再び生活痕跡は途絶える。</p>							



付図 筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 遺構平面図 (1:400)

三重県埋蔵文化財調査報告 323-7

筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡
(第2・3・6次)
発掘調査報告

2021(令和3)年3月

編集 三重県埋蔵文化財センター
発行
印刷 南ミフジ印刷
